

女性限定なのにスカウトされた僕、なぜか美少女VTuberとなる

そらのすすむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今をときめくVtuber企業、シロルームで女性限定のライバー募集があった。

女性と見間違えられることも度々あった男の娘、小幡祐季（こはたゆき）はその女性限定であったはずのライバーにスカウトされてしまう。

そして、美少女Vtuber雪城ユキ（ゆきしろゆき）として活動していくことになってしまった。

シロルーム同期達やマネージャー、更にはリスナー達に振り回されながら祐季は美少女Vtuberとして駆け上がっていく――。

小説家になろう、カクヨムにも掲載させてもらってます

目次

キャラ設定（ネタバレを含みます）

三期生キャラ設定 | 1

一期生キャラ設定 | 9

二期生キャラ設定 | 15

四期生キャラ設定 | 21

本編第1章：三期生の絆

プロローグ：男なのに女性限定のVtuberにスカウトをされて
しまった | 27

第1話：同期達 | 43

第2話：伝説の初配信 | 59

第3話：三期生初コラボ | 82

第4話：新しい友達？ | 99

第5話：反省会配信 | 111

第6話：友達の友達は知り合い？ | 126

第7話：大戦争!? ユキくん争奪カラオケ対決ゲリラオフ | 139

第8話：三万人記念コラボ配信 | 153

第9話：突発!? コラボオフ会 | 167

第10話：大絶叫、ホラー実況 | 187

第11話：ユキくん、動く!? | 203

第12話：十万人記念コラボ配信 | 218

第13話：料理？対決、開始 | 234

第14話：料理？対決、決着 | 254

第15話：敗者の宴 | 275

第16話：ユキくん、冴える？ | 289

第17話：急募、お泊まりオフ対策配信 | 309

第18話：ココママ5万人記念配信 | 324

第19話：ココユキ、オフコラボ配信 | 346

第20話：緊張の収益化記念配信 | 367

閑話：先輩たちと四期生募集

第0話：新しい後輩ができたよ #赤コウ | 386

第20・5話：四期生募集 | 398

本編第2章：先輩と後輩

第1話：コラボ解禁!?! 暴走特急と臆病わんこと飼育員 #あかわ | 412

ふこみー

第2話：氷の女王と優しき妖精 #ココツララ／ポンコツ姫の大進 | 426

撃 #ヒメ姫

第3話：凸撃、隣のモノマネ対決!?! #猫羊 | 442

第4話：勝利は誰の手に? #あかわふこみー | 457

第5話：七瀬奈々と夏瀬なな | 471

第6話：タグ決めるよー #犬拾いました | 486

第7話：うみゅー裁判。ゆいが裁くのー #ユキユイ | 501

第8話：フィットネスゲームで勝負をするよ #囚われのユキ犬姫 | 516

第9話：ユキくん、新衣装発表!?! #ココユキカグラ | 533

第10話：幸運虎とぐうたら羊 #羊虎／雑談するよー #ココユ | 554

キカグラ | 569

キカグラ

第11話：引退配信 #夏瀬なな+α | 589

第12話：大暴走! オオカミは誰だ!?! ぱーとわん #ポンコツ | 589

ルーム

第13話：大暴走！ オオカミは誰だ!? ぱーとつー #ポンコツ
ルーム 605

第14話：成長の登録者数25万人+誕生日記念凸待ち配信

618

第1話：ユキくん大好き天使、天瀬ルル 649

第2話：四期生の絆は？ 魔界エミリ #ココユカオフ会 661

第3話：百合姉と健全たぬき 672

第1話：夏瀬はルル？ #ユキルル 684

第2話：パートナーは誰の手に？ #ココユイ大決戦 696

間話：四期生初配信

第3話：#ココユカ反省会二人脱落済み／四期生全員集合。ポンコ
ツ王は誰の手に？ 710

第4話：四期生全員集合。ポンコツ王は誰の手に？ ぱーとつー

723

第5話：結坂の誕生日 プレゼントはどうする？ #ユキ犬姫拾い
ました 734

本編第3章：ココユキの対立？

第6話：誰の絆が最も強い？ #ポンルーム伝言ゲーム 746

第7話：誰の絆が最も強い？ ぱーとつー #ポンルーム伝言ゲーム

第8話：つよつよしゅーていんぐ #音犬 768

第9話：つよつよしゅーていんぐぱーとつー #音犬／協力対戦。

敵の敵は味方?? #カグユイ 781

第10話：ユキくん、リードする？ #氷雪 793

第11話：歌うユキくん #氷雪／ふとした疑惑 #ココエミ

第12話	シロルーム遊び合戦ポンぽこ	820
第13話	シロルーム遊び合戦ポンぽこ、ぱーとつー	831
第14話	シロルーム遊び合戦ポンぽこ、ぱーとすりー	843
第15話	シロルーム遊び合戦ポンぽこ、ぱーとふおー	854
第16話	シロルーム遊び合戦ポンぽこ、らすとぱーと	866
第17話	三期生の温泉旅行（開始編）	889
第18話	三期生の温泉旅行（準備編）	900
第19話	三期生の温泉旅行（寝るまで配信編）	910
第20話	三期生の温泉旅行（寝るまで配信編ぱーとつー）	922
第21話	三期生の温泉旅行（寝るまで配信編ぱーとすりー）	933
第22話	三期生の温泉旅行（寝るまで配信編ぱーとふおー）	946
第23話	三期生の温泉旅行（完）	958

キャラ設定（ネタバレを含みます） 三期生キャラ設定

シロルーム第三期生、キャラ設定

※本編更新分までのネタバレを含みます。読む際は注意をしてください。

※チャンネル登録者数等は本編公開時に更新します。

☆主人公

●名前：小幡祐季こはた ゆき

性別：男

年齢：二十歳 大学二回生「6月30日」

一人称：僕

所属：シロルーム三期生

髪型：肩ほどまで伸ばした艶やかな黒髪。

身長：150cm（男子平均よりも二十センチ低い小柄な体格と童顔）

好きなもの：甘いもの。小柄な動物。部屋の隅。一人の時間。

嫌いなもの：怖いもの。辛いもの。自分。人の多いところ。なれなれしい人。人気。

【アバター】

名前：雪城ユキゆきしろ ゆき

呼び名：ユキくん、ユキ

チャンネル名：Yuki Room. 雪城ユキ

チャンネル登録者数：40.1万人

性別：女

年齢：十九歳

一人称：僕

あいさつ：わふうー

(タグ)

ファンネーム：犬好きさん

推しマーク：

ファンアートタグ：犬写真

配信タグ：犬拾いました

メンバーシップ：段ボール研究会

(容姿)

髪型：茶色の肩より少し長い髪

体型：身長150cm。小柄な体型で白い肌

服装：白のワンピースとその上から黄色の犬耳付きフードパーカー。段ボールに入っている。段ボールの文字は簡単に換えられる

【詳細】

人見知りの臆病わんこ。基本的に逃げ腰だが、約束したことは守る。まず最初にどうやって逃げようかを考える。

料理はできない。

ただし、その他の家事については人並みにできる。

『人をダメにするわんこ』や『同期を殺す犬』といった物騒なあだ名もある。

人によってはアルコールのように一種の依存症となるため、『ユキくん依存症』『ユキくん依存症候群』『ユキシンドローム』等と呼ばれ、過剰摂取を控えるようにする動きもあるとかないとか。

治療方法はユキくんを抱きしめて、その匂いや感覚を直接感じる『ユキセラピー』が有効と言われる。

度々ユキを巡って三期生内（主にココネとユイ）で戦争が勃発しているが、ユキ自身は仲が良いてえと思っている。

自分の母親のせいで『ユキくん依存症』に過敏になっているユキは、そうなった人を避けようとする傾向にある。

三期生の同期には返しても返しきれないほどの恩を受けたと思っており、同期が困っているときは、どんなことをしても助けたいと

思っている。

●名前：大代おおしろこより

性別：女

年齢：二十歳 大学三回生「9月14日」

一人称：私

所属：シロルーム三期生

髪型：長い癖がかった茶髪。

身長：165cm（ユキよりも十センチ以上高くスタイルの良い女性。常にお洒落な着こなしをしている）

好きなもの：甘いもの。可愛いもの。歌。ユキくん。料理。掃除。お酒。

嫌いなもの：勉強と名の付くもの全て。汚いもの。

【アバター】

名前：真心まじこころココネ

呼び名：ココママ、ココネ

チャンネル名：kokone | Room. 真心ココネ

チャンネル登録者数26.7万人

性別：女

年齢：まだまだ子供（二十歳は公表済み）

一人称：私

あいさつ：ここにちは、ここばんは

（タグ）

ファンネーム：ココフレ

推しマーク：

ファンアートタグ：心絵

配信タグ：心の投げ所

（容姿）

髪型：長いピンクの髪

体型：130cm。小柄な妖精で背中に薄い黄色の羽がある。
服装：緑のスカートの部分がギザギザになっているワンピース。

【詳細】

三期生のまとめ役。基本的には常識人ではあるものの、ユキくんが絡むと暴走することも度々。

初配信時に真っ先に助けてくれたこともあり、ユキからの信頼を一番勝ち取っている。

ママ、という言葉の中々認められないが、ユキのママ……と言われると自然と頷く。

『ユキくん依存症』の被害者第一号。医者（のフリをした猫ノ瀬タマキ）から程ほどにするように進言されている（一種のネタになっている）が、今日も全力でユキにツッコんでいく。

成人しているので、実は酒飲みであるが自宅でしか飲まない。そして、お酒を飲むと甘え上戸になる。

●名前：田島瑠璃香たじまるりか

性別：女

年齢：二十歳 大学二回生「4月21日」

一人称：私

所属：シロルーム三期生

髪型：長めの金髪。

身長：160cm（背丈はユキよりも十センチは大きく、スレンダーな体型）

少しつり目）

好きなもの：家事全般。配信系の機械。褒められること。勉強
嫌いなもの：失敗したもの。炎上。叩かれること。孤独。

【アバター】

名前：神宮寺カグラ

呼び名：カグラ様、ポンカグ、ポン姫

チャンネル名：k a g u r a | R o o m . 神宮寺カグラ

チャンネル登録者数24.1万人

性別：女

年齢：十九歳

一人称：私

あいさつ：今日も来てあげたわよ！

(タグ)

ファンネーム：親衛隊

推しマーク：

ファンアートタグ：姿絵

配信タグ：姫のご乱心

(容姿)

髪型：金色の長い髪

体型：160cm。胸は大きめ。↑大きくしてくれと頼まれたから
スタッフのノリで。もちろんパッド

服装：黒のドレス服姿に頭には王冠

【詳細】

王に内緒で放送をしている姫。基本的に傲慢ではあるもののその
実はさみしがり屋。何に対しても興味を持つが、もちろん始めてやる
ことなので失敗が多いポンコツさん。というキャラを極力演じよう
としている。

人気のために極力自分を殺そうとしているが、たまに素が出てし
まっている。意外としっかりさん。

機械にかなり強く、自室はほぼ配信用機械で埋まっている。逆に能
力の全てをそれに特化してしまった、とも言える。

三期生で唯一『ユキくん依存症』にかかっている。

頼られることが嬉しく、推されると基本受けてしまう。

一番リスナーの反応を気にしており、よく一喜一憂しているエゴサ

職人。

実はかなり落ち込んだときに二期生の姫野オンブひめのおんぶの配信を見て慰められてことから、V t u b e r になることを決意。どうせなら同じシロルームに行きたいと三期生の応募をした。

●名前：結坂彩芽ゆいさかあやめ

性別：女

年齢：二十歳 大学二回生「7月7日」

一人称：私

所属：シロルーム三期生

髪型：栗色の少し癖のある肩ほどの髪

身長：150cm（小柄な少女。ただしピョンつと跳ねている一本のアホ毛分だけ祐季より高い）

好きなもの：ゲーム。勝利。小柄なもの。三期生の全員。ぐうたら。

嫌いなもの：野菜。睡眠時間。敗北。暗闇。リアルでの怖いもの。

【アバター】

名前：羊沢ユイひつじさわゆい

呼び名：ユイっち、ユイちゃん

チャンネル名：Y u i | R o o m . 羊沢ユイ

チャンネル登録者数26.0万人

性別：女

年齢：十八歳（永遠）↑「羊は年をとらないのー」

一人称：ゆい

あいさつ：うみゆー、うにゆー

（タグ）

ファンネーム：羊飼い

推しマーク：

ファンアートタグ：羊皮紙

配信タグ：羊布団

(容姿)

髪型：真つ白なショートボブ

体型：小柄な体型

服装：羊の角がついたフードを被っている。服装も上は白のもこもこ。下も白のキュロットスカートで、健康そうな足が見えている。自分の体くらいはありそうな巨大なクッションを持っている。

【詳細】

「ふふふつ、全て計算なの。ゆいはわざとこうしてぐうたらしてるのだ」という言葉は冗談に聞こえて実は本当。

意外と計算高い。

リアルでの祐季の初めての友達。

睡眠時間も長く見えるが実はかなり短く、大半をゲームに使っている。ゲームと名の付くものだと負けず嫌いで勝つまで続ける。

この世の全てのゲームを網羅したいと思っている。

野菜をこつそりと避けてはよくココネに怒られている。

三期生全員のことが好きで『ユキくん依存症』だけではなく、ココネやカグラのことも好き。だからこそ、自分からイジリに行くし、配信はなるべくライブで。どうしてもダメなときはアーカイブで見ている。

実はユキ以上の怖がり。※ただし、ゲームは除く。

夜は電気を消して寝られず、一人で寝ようとするのと体の震えが止まらない。

だからこそ、人と良く接しようとする。

三期生、ユキくと愉快的仲間たち

雪城ユキ↓段ボールが本体の臆病ユキ犬姫。三期生の中心人物。

真心ココネ↓三期生のママ……は仮の姿。実は犬が絡んだ時だけポンに早変わり。

神宮寺カグラ↓ポン姫。だけど周り全員がポンになった時だけ覚醒する。

羊沢ユイ↓ぐうたら羊。実は全て計算、とかなり黒い。

一期生キャラ設定

シロルーム第一期生、キャラ設定

※ネタバレを含みます。読む際は注意をしてください。

●名前：青羽空あおばそら

性別：女

年齢：二十四歳

一人称：私

所属：シロルーム一期生

髪型：長い茶髪

身長：149cm

好きなもの：絵。てえてえ。いたずら。辛いもの。お菓子。料理。
コウ。ユキ。

嫌いなもの：つまらないもの。苦いもの。うるさい人。料理以外の
家事。

【アバター】

名前：美空アカネみそらあかね

呼び名：アカネン、アカネパイセン、暴走特急

チャンネル名：Akane Room. 美空アカネ

チャンネル登録者数：65万人

性別：女

年齢：十八歳

一人称：私

あいさつ：やつほー☆

(タグ)

ファンネーム：お星様

推しマーク：☆★

ファンアートタグ：プラネタリアム

配信タグ：天体観測

(容姿)

髪型：ピンクの長い髪に星の髪飾り

体型：スタイルの良い体。

服装：黄色のワンピースには星の装飾がちりばめられている。

【詳細】

一期生の暴走機関車。

頼まれてもいないのに勝手にてえてえイラストを送りつけてくる。

一期生トップで天真爛漫。

シロルームが開始されて一番の問題点はどうやって彼女を御すかだった。

ゲーム系実況者。たまにイラスト実況

元イラストレーター。でも、今は配信の収入で暮らしているの
で、描きたいものを描くだけになっている。

コウとは幼馴染である。

●名前：一ノ瀬海いちのせうみ

性別：女

年齢：二十四歳

一人称：僕

所属：シロルーム一期生

髪型：黒のショートカット

身長：170cm

好きなもの：アカネ。スポーツ。家事。甘いもの。

嫌いなもの：辛いもの。うるさい人。絵。

【アバター】

名前：海星コウかいせいこう

呼び名：コウパイセン、飼育員、コウさん

チャンネル名：K o R o o m・海星コウ
チャンネル登録者数：60.5万人

性別：女

年齢：十八歳

一人称：ボク

あいさつ：こみー

(タグ)

ファンネーム：くらげさん

推しマーク：

ファンアートタグ：水族館

配信タグ：海の見物シヨ―

(容姿)

髪型：水色の肩くらいに切りそろえられた髪

体型：スレンダーな体

服装：魚を基調としたパーカーと白スカート。魚の種類は多数。

【詳細】

唯一美空の手綱を握れる、飼い主。

シロルーム一の常識人にして、ツツコミ魔王。

女子バスケで全国試合まで行くほどのスポーツ少女だったが、アカネに誘われるがままシロルームのライバーになった。

女性からはとことんモテていた。

家事全般は得意だが、なぜか料理に関しては壊滅的。それがわかってるので、作るの好きでも作ろうとしない。

昔はアカネのことを煙たがっていたが、とある事件であかねに助けられて以来、親友となった。

●名前：的場大輝まとはだいき

性別：男

年齢：二十七歳

一人称：俺

所属：シロルーム一期生

髪型：黒髪を立たせている。

身長：181cm

好きなもの：特になし

嫌いなもの：特になし

【アバター】

名前：真緒ユキヤまおゆきや

呼び名：マオさん、ユツキー、ユキヤ様

チャンネル名：Yukiya Room 真緒ユキヤ

チャンネル登録者数：36万人

性別：男

年齢：二十五歳

一人称：我

あいさつ：ふっ

(タグ)

ファンネーム：汝

推しマーク：

ファンアートタグ：魔絵

配信タグ：闇の宴

(容姿)

髪型：白銀の髪と二本の角。

体型：筋肉質の体。

服装：黒を基調とした服とマント。

【詳細】

クールな外見とミステリアスな雰囲気
で女性人気を集めている。

なにげに雑談からの悩み相談が人気。

あまり周りのことに興味がなく、
全ての事柄を客観的に見るこ
とから、より適切なアドバイスが
できる。

そして、自分自身にもあまり興味がない。
ただし、それはユキに出会ってからちよつとずつ変化する。
ユキの筋トレの師匠。

●名前：高田太一たかだたいち

性別：男

年齢：二十三歳

一人称：俺

所属：シロルーム一期生

髪型：黒の短めの髪。

身長：176cm。メガネをしている。

好きなもの：真面目。勉強。スーツ。炎上。

嫌いなもの：不真面目。チャラ男。無反応。

【アバター】

名前：野草ユージのぐさゆうじ

呼び名：ユージ、ユージ草、草

チャンネル名：Yuzi Room・野草ユージ

チャンネル登録者数：28万人

性別：男

年齢：二十一歳

一人称：俺、俺様

あいさつ：ちーっす

（タグ）

ファンネーム：子猫さん

推しマーク：？

ファンアートタグ：俺様の写真

配信タグ：焼却炉

（容姿）

髪型：金髪のトゲトゲとした髪

体型：筋肉質の体。

服装：体を見せつけるように前だけはだけている煌びやかな服装。

【詳細】

チャラ男で軽い感じに話す色物粹。

コメント欄が草で覆われる大草原雑談粹が有名で実に良く燃えている。

実は影で努力をし続ける苦労の人で、本人の性格は真面目。

ただし、少しそそつかしいところがあり、シロルूमの本社へ応募したつもりが、なぜかライバーに応募してしまい合格。

慣れないチャラ男キャラを日夜勉強して、チャラ男よりチャラ男らしくなっている。

自身を炎上キャラだと認識しており、燃えた時こそ自分が評価された時だと思っている。

ただし、根が真面目なので、人道を外れたことはしない。

一期生、暴走特急と草原の魔王

美空アカネ↓言わずと知れた暴走特急。これでも落ち着いた？
誰かれ構わずに突撃する。

海星コウ↓全てのポンを抑えることのできる唯一の人物……とい
う不名誉な称号を得てしまった悲しき人物。後継者を探してる。

真緒ユキヤ↓魔王。つまらなさそうに世を見ているが、ユキくんが
現れたことで世界が変わった。

野草ユージ↓草。

二期生キャラ設定

シロルーム第二期生、キャラ設定

※本編更新分までのネタバレを含みます。読む際は注意をしてください。

●名前：西園寺綾子さいおんじあやこ

性別：女

年齢：二十二歳

一人称：私

所属：シロルーム二期生

髪型：長めのもこもこした茶髪

身長：163cm

好きなもの：ゲーム。完璧にこなすこと。他人。のんびり。
嫌いなもの：不完全な自分。素早く動くこと。

【アバター】

名前：姫乃オンプひめのおんぷ

呼び名：ヒメノン、オンプツチ、ほええ

チャンネル名：Onpu Room・姫野オンプ

チャンネル登録者数：46万人

性別：女

年齢：十八歳

一人称：私

あいさつ：はうー

(タグ)

ファンネーム：手下さん

推しマーク：？

ファンアートタグ：姫絵

配信タグ：生姫

(容姿)

髪型：ウェーブがかった。ピンクの長髪

体型：スタイルの良い体。

服装：白のフリルがたくさんあしらわれたドレス

【詳細】

のんびり口調で話すゲーム以外は完璧なお姫様。リアルでも超絶金持ち。

ただし、配信はゲームがメインなので、ポンコツだと思われる。二期生のまとめ役。

厳格な両親の下、常に完璧であるべし、と教え込まれている。

そんな中、初めて自分が完璧にできないゲームと出会い、それを克服するためにゲームをし続けている。

その時にゲーム配信を知り、色んなゲームをするきっかけとしてシロルームへ応募する。

親もそんな彼女の挑戦を密かに応援しており、実は毎晩欠かさずに配信を見ているし、ライブ配信は確実に待機している。

●名前：小野芽衣子おのめいこ

性別：女

年齢：二十二歳

一人称：俺

所属：シロルーム二期生

髪型：黒のショートカット

身長：158cm

好きなもの：スポーツ全般。肉。酒。

嫌いなもの：勉強。野菜。

【アバター】

名前：貴虎タイガきとらたいが

呼び名：タイガ、虎

チャンネル名：T a i g a R o o m . 貴虎タイガ

チャンネル登録者数：51万人

性別：女

年齢：二十歳

一人称：俺

あいさつ：よっ

〔タグ〕

ファンネーム：虎の子

推しマーク：

ファンアートタグ：トラ絵

配信タグ：サバンナ

〔容姿〕

髪型：黄色と黒のコントラストな髪

体型：スレンダーな体でトラの耳と尻尾がある。

服装：黄色と黒のコントラストの袖なしワンピース

【詳細】

常に暴走しているのになぜか最後は綺麗に収まるトラブルメーカー。

獣人枠。

脳筋プレーでゲームをする。

運動音痴だが、体を動かすことは好き。猪突猛進でとりあえず当たって砕けてみるタイプ。

かなりの幸運の持ち主で、宝くじに何度か当たったことがある。

そして、実際に宝くじ動画で、当たりを引き、大バズリをしたことで人気に拍車がかかる。

他称、シロルーム随一の幸運。


●名前：三みくに国くに椎しい名な

性別：女
年齢：二十三歳
一人称：私
所属：シロルーム二期生
髪型：黒のロング
身長：153cm
好きなもの：静かな場所。褒められること。お金。
嫌いなもの：うるさい場所。貧乏。高級品。

【アバター】

名前：氷水ツララこおりみずつらら
呼び名：つらたん、つららん、つらら
チャンネル名：Turara Room. 氷水つらら
チャンネル登録者数：90万人
性別：女
年齢：十八歳
一人称：私
あいさつ：……来たのね

（タグ）

ファンネーム：雪だるま
推しマーク：
ファンアートタグ：絵つらら
配信タグ：生つらら

（容姿）

髪型：蒼銀の肩より少し長い髪
体型：小柄な少女
服装：水色の少しブカブカのワンピース

【詳細】

ジト目をよくする口数少ない氷の女王でミステリアスな雰囲気を出している。

シロルーム随一の歌のうまさ。ただし、ほとんど歌ってこない。
現シロルームトップ配信者。

かなり貧乏な家で生まれており、お金に対する思いは人一倍強い。
だからこそ、本当は恥ずかしいのであまり人前で歌いたくないのだ
が、スパチャで殴れば歌ってくれる。

透き通るような声でのほほ触れたことない、ゼロ知識からのゲーム
実況。

段々とうまくなっていく様子が好まれている。

●名前：揚津滯あがつみお

性別：女

年齢：十九歳

一人称：私

所属：シロルーム二期生

髪型：長めの茶色

身長：155cm

好きなもの：楽しいこと。小さいもの。甘いもの。
嫌いなもの：退屈。大きいもの。辛いもの。

【アバター】

名前：猫ねこの瀬タマキ

呼び名：タマキン、猫、タマキパイセン

チャンネル名：Tamaki Room. 猫ノ瀬タマキ

チャンネル登録者数：44万人

性別：女

年齢：十八歳

一人称：にゃー

あいさつ：にゃー

(タグ)

ファンネーム：猫子

推しマーク：

ファンアートタグ：猫鍋

配信タグ：生ねこ

(容姿)

髪型：茶色のショートカット

体型：小柄で猫耳と尻尾がある。

服装：制服

【詳細】

猫オブザ猫。

場を引つ掻き回すだけ引つ掻き回してくる。

というのも全て計算で行なっている影の二期生まとめ役兼非常識
枠。

全てを把握したうえで一番面白い方向へと転がしていく。

どこまで計算で、どこまでが天然なのか見せない。

二期生なのに、リアルの年齢は三期生の面々と変わらない。シロ
ルーム最年少デビューもしてる。過去にリアルで祐季と出会ったこ
とのある数少ない人間。

二期生、表と裏の支配者

姫野オンプ↓二期生の表の支配者。ゲーム以外は完璧にこなす常
識人風。ただしのんびり

貴虎タイガ↓幸運虎。全方位に対して幸運爆撃を行う。本人の力
は最弱クラスでユキくん匹敵する。

氷水ツララ↓実はもつと頼られたいけど、本人の態度からあまり接
してもらえない。ツンツン……

猫ノ瀬タマキ↓二期生、影の支配者。全てをおかしい方向に運ぶ。

四期生キャラ設定

シロルーム第四期生、キャラ設定

※本編更新分までのネタバレを含みます。読む際は注意をしてください。

※チャンネル登録者数等は本編公開時に更新します。

●名前：七瀬奈々ななせなな（夏瀬なつせなどとして活動中「登録者数20万人」。ユキくんにスパチャを投げるときはさすらいの犬好き）

性別：男

年齢：18歳

一人称：私

所属：シロルーム四期生（予定）

髪型：長い銀髪。

身長：146cm（低い小柄な体格と童顔）

好きなもの：動画配信。かわいいもの。ユキくん

嫌いなもの：大勢の人。孤独

【アバター】

名前：天瀬あませルルるる

呼び名：るるちゃん

チャンネル名：Ruru Room. 天瀬ルル

チャンネル登録者数：19.3万人

性別：女

年齢：18歳

一人称：ぼく

あいさつ：こんるるー

（タグ）

ファンネーム：天使さん

推しマーク：

ファンアートタグ：天写真

配信タグ：生天使

(容姿)

髪型：青銀色の短髪

体型：身長145cm。小柄な体型で白い肌

服装：青の刺繍が施された白の袖なしワンピース。頭には金の輪っか。背中には白の羽。

【詳細】

楽しいことを求めて天界より降り立った天使。

少し悪戯好きで、かわいいものにちよつかいをかけることを生業としている。

しかし、その反面、自分がちよつかいをかけることには弱い。

元々Meetuberで活躍していた大人気配信者。

その人気はユキくん以上だったにも関わらず、突然の引退表明をする。

その理由はシロルーム四期生に合格したから。

人形にすら思える小柄で現実離れた容姿と透き通るような声を持っている。

あまりに人気すぎて、すぐに前世(夏瀬なな)がバレてしまったが、本人が楽しそうにしていることで、炎上せずむしろ人気が加速する。ユキくんの大ファンで、常に最大のスパチャを投げようと心に決めている。

配信はほぼ必ずと言って良いほど、ライブで見た後で、アーカイブで三回は繰り返し見ている。

一足早く四期生に合格している。

動画上でだが、ユキくんから色々教えてもらう約束をしている。

●名前：犬飼冬華(いぬかいとうか)(TOKAとして活動中「登録者数5万人」)

性別：女

年齢：20歳 大学三回生

一人称：私

所属：シロルーム四期生（予定）

髪型：短めの黒髪。

身長：150cm

好きなもの：愛されること。

嫌いなもの：愛されないこと。

【アバター】

名前：魔界エミリまかいのえみり

呼び名：エミリ、エミリン

チャンネル名：Emiri | Room. 魔界エミリ

チャンネル登録者数：15.7万人

性別：女

年齢：20歳

一人称：私

あいさつ：こんえみー

（タグ）

ファンネーム：悪魔っ子

推しマーク：

ファンアートタグ：悪魔絵

配信タグ：魔界配信

（容姿）

髪型：短めの黒い髪と二本の黄色い角

体型：150cm。

服装：黒と赤のワンピース。

【詳細】

悪魔っ子ながら最初は清楚に振る舞っている。

しかし、その実態はヤンデレ気質。

ルルが三期生（主にユキ）を慕っていることを面白く思っていない。しかし、ユキと話すことでその気持ちは和らいでいる。

相談役としてのユキは尊敬している。
ルルをとるユキは面白く思っていない。
基本的にどんなこともできるが、壁は物理で破壊するタイプ。

●名前：宇多野葵《うたのあおい》（うたのん、として活動中「登録者数3万人」）

性別：女

年齢：22歳 大学四回生

一人称：私

所属：シロルーム四期生（予定）

髪型：癖がかった金髪。

身長：160cm

好きなもの：酒、エロ、フウ、百合

嫌いなもの：エロくないもの、BL

【アバター】

名前：姉川イツキあねがわいつき

呼び名：イツキ、お姉様

チャンネル名：Itsuki | Room 姉川イツキ

チャンネル登録者数11.0万人

性別：女


年齢：22歳

一人称：私

あいさつ：こんー

（タグ）

ファンネーム：イツキの友

推しマーク：

ファンアートタグ：イツキ絵

配信タグ：イツキTV

（容姿）

髪型：茶色の長い髪
体型：160cm。胸は大きめ。
服装：胸元を協調したバニー衣装。

【詳細】

エロと百合をこよなく愛するお姉様
自身は暴走しがちだが、他人が暴走したときはなぜか抑える役割に
回る。

フウとは仲良しで、よく二人でコラボをしている。
リアルでも知り合い。

歌唱力は高く、ゲームも実況『は』上手い。

暴走さえしなかったら、なんでもそつなくこなすタイプ。

●名前：立木未来美《たつきみくみ》（ミクチャンネルで活動中「登録者数7万人」）

性別：女

年齢：18歳 大学1回生

一人称：私

所属：シロルーム四期生（予定）

髪型：明るめの茶色。肩ほどまで

身長：155cm

好きなもの：ゲーム。四期生、イツキ

嫌いなもの：一人。孤独。えっちなこと

【アバター】

名前：狸川たぬがわふうフウ

呼び名：フウちゃん

チャンネル名：Fu u | R o o m. 狸川フウ

チャンネル登録者数18.3万人

性別：女


年齢：18歳

一人称：ふう

あいさつ：こんぽこ

(タグ)

ファンネーム：子狸さん

推しマーク：

ファンアートタグ：ふう絵

配信タグ：生フウちゃん

(容姿)

髪型：短めの茶色と丸い耳。頭になぜか金の王冠

体型：152cm。小柄な体型

服装：白のワンピースと金の王冠

【詳細】

四期生のまとめ役で、フウ以外全員がポン役と言うことで気苦労が絶えない。

とても明るく楽しそうに話す。

前世は人気配信者だった（四期生はほとんどそう）。

えっちなことが苦手で顔を真っ赤にさせてテンパってしまう。

イツキとは前世の頃からの知り合いで仲良し。

ゲームは『超』がつくほどの下手。

涙目になりながら耐久する姿がまた人気である。

語尾に『くぽこ』と付ける。

●四期生暴走ポン組

ルルちゃん↓ユキくん大好きっ子

エミリ ↓四期生の絆命

イツキ姉 ↓えっちなこと最優先

フウ ↓苦勞人純情狸

本編第1章：三期生の絆

プロローグ：男なのに女性限定のVtuberにスカウトをされてしまった

男のVtuberと言われて何人名前が挙がるだろうか？

少なくとも僕は何人も思い浮かばない。

お気に入り登録者上位やスパチャ（投げ銭）上位のVtuberは基本女性だ。

だからこそ、男である僕がVtuberになるなんて、想像すらしていないかった。

そんな未来があるなんて一度も考えたことがなかった。

だからこそ、僕は今の状況に困惑していた。

場所は近所の喫茶店。

目の前にはスーツ姿の女性。

彼女は興奮冷めやらぬ様子で僕に話しかけてくる。

「小幡祐季君、あなたは絶対にVtuberになるべきです！ 大丈夫、絶対に成功させて見せますから」

この女性の名前は湯切舞。

スレンダーな体型の女性でシロルムの社員でもあった。

シロルーム——最近名を上げているVtuber企業である。

始まったばかりの企業ということもあって、会社自体は大きな

しかし、ここ所属のVtuberは動画配信サイトMeTubeで数十万人クラスのお気に入り登録者数がある優秀なVtuber企業でもあった。

確かに僕もここに所属しているV t u b e rの動画は見たことがある。

雑談やゲーム、歌をメインに女性V t u b e r同士の絡みが本当に尊くて、なにか悲しいことがあったときとかには動画を見ると心が癒やされた。

そんな企業の社員からの薦め。

何故こんなことになっているのか、僕にはわからなかった。

◇◇◇

きつかけは駅へ向かっていた時に声をかけられたことにあった。

「その小柄な君、少し話をいいですか？」

突然女性から声をかけられる。

周りの人のことかと思つて、キョロキョロと周りを見てみるが、女性が視線を向けているのはどう見ても僕だった。

確かに僕は小柄だった。

男子の平均から二十センチ以上も小さい背丈。

女子高生、いや女子中学生にすら間違えられることもある童顔。

肩ほどまで伸ばした艶やかな黒髪。

世間一般では『男の娘』と称されることの方が多かった。

——うう……、そのせいで僕がどれだけ苦労してきたか……。

容姿のことをとやかく言っても仕方ないのだが、正直あまり良い印象は持っていない。

まず男子たちからは敬遠される。

更衣室で着替えようとしても追い出されるし、そもそも仲間に加えてもらえることが少なかった。

しかも、罰ゲームなのか、何度も男子から告白を受けている。

もちろん僕にはそんな趣味はないので、その場から逃げ去っていたが。

そんなことを生まれてからずっと繰り返してきたのだ。

友達と呼べる存在は僕にはいなかった。

それなら女子たちはどうか？

その見た目からからかわれるようなことはあった。

ただ、僕自身が人見知りで口下手なところがあるので、自然と距離を空けてしまった。

そんな僕がまともに女性と喋れるはずもなく、くぐもりながら答える。

「え、えと、ぼ、僕のことでしょうか？」

「そうです。少し話したいことがあるので良いですか？」

「ぼ、僕はないです……」

「そうは言わずに少しだけですから……」

「し、知らない人と話をしたらダメだと言われてますから——」

これは母さんから散々言われていたことだった。

僕自身、もう大学生なので良いと思うのだけど何故かよく心配されていたのだ。

「私は湯切舞ゆきりまいといます」

女性はそう言いながら名刺を渡してくる。

「ぐ、ぐ丁寧にありがとうございます。そ、その、僕は小幡祐季こはた ゆきと言います……」

僕も釣られるように名前を言って頭を下げていた。そして、これが間違いだった。

「小幡さん……ですね。これでもう知らない人じゃないですよ？ 話を聞いてもらえますよね？」

やたらグイグイとくる女性だった。

「そ、その、僕は特に話すことは——」

「私があるんです！ とりあえずここじゃ目立ちすぎますね。宜しければ近くの喫茶店へ行きませんか？」

「えとえと、ぼ、僕はこれから帰らないと……」

「時間は取らせませんから……」

「うう、わ、わかりました。す、少しだけなら……」

あまりにもグイグイくるので、周りの目が気になってしまい、思わず頷いてしまった。



喫茶店へ移動すると僕の前にオレンジジュース、女性の前にはコーヒーが置かれた。

「あ、あの……、僕は何も注文は——」

「大丈夫です。このくらい経費で落ちますから」

「は、はあ……」

「それよりも改めて自己紹介を。私は湯切舞。シロルームで人事を担

当しています。あと、次の三期生の担当を兼ねる予定となっています」

「ぼ、僕は小幡祐季です。そ、その大学生です……」

「えっ、大学生!? ほ、本当ですか!?!」

舞が驚きの表情を浮かべてくる。

「ほ、本当ですよ! よ、よく言われますけど……」

「そうですか……。これは逆にありがたいですね。小幡さん、V t u b e r に興味ありませんか?」

「えと……。た、たしかによく見ますし、興味はあります。やっぱりイベントとか行つて——」

「そうですよね!?! やっぱり興味ありますよね!?! よかった、これは決まりですね」

舞が僕の手を掴んでくるので思わず言葉を止める。

「き、決まりつてなんですか……。?」

「もちろんシロルーム三期生に、ですよ! 年齢的に四期生になるかなと思つてたんですけど、良かったです」

「ちよ、ちよつと待つてください!?! 三期生!?! えとえと、それつて——」

「もちろん配信者に……。ですよ?」

「無理です、無理です。ぼ、僕、人見知りなんです。し、知らない人の前にしたらまともに話せないです……」

「大丈夫ですよ、その初々しい感じがまた良いですから」

「えとえと、そ、そもそも、どうして僕なんですか?」

「それはもちろん、小幡さんを見た時にピンと来たからです! とにかく、このサイトを見てください!」

舞がタブレットから見せてきたのは【シロルーム三期生募集】と書かれたサイトだった。

その募集要項には二つのことが書かれていた。

● 十八歳以上の女性であること

● 配信経験があること

それを見て、舞が勘違いしてることに気づく。

【この募集は女性限定の募集である】

つまり、最初から僕は募集できない。

どうやら僕のことを女性と誤っているようだ。

何度も聞いたその言葉に、僕は苦笑いをしながら答える。

「え、えと、その……、ご、ごめんなさい。やっぱり、僕、できる気がしないので断らせてもらっても……」

「うんうん、これからよろしく——って、な、何ですって!？」

女性は大きく目を見開いて、立ち上がる。

そして、顔を近づけてくる。

「ど、ど、どうして辞退するのです!? き、君なら十年、いや、百年に一人の逸材になれますよ!？」

「そもそも、僕、募集要件を満たしていませんから……」

「くっ、大学生って言ってましたけど本当は中学生でしたか……。確かにこの可愛さだと十八歳以上と言うことは——」

「と、歳のことではありません! 本当に僕は本当に大学に通ってます! で、でも、僕は男ですよ?。」

すると、女性は一瞬固まったあと、笑顔で言ってくる。

「あっ、なんだ……、そんなことですか。それなら大した問題にならない

いですよ。むしろ私的にはご褒美です！」

親指をピンと立てて満面の笑みを見せてくる舞。

——だめだ、この女性。早くなんとかしないと……。

性別を伝えたら終わると思ってたのにまさかの空振りで終わり、で僕は少し焦っていた。

「でもでも、この募集要項は全く満たしてませんよね？」

「そうですね。でも、私たちとしては人気者になってもらえる人なら大歓迎ですから。あくまでも募集要項は今欲しい人をまとめただけですよ?。」

目を輝かせて、早口で言ってくる女性。

段々とその体も近づいてきてる気がする。

「そ、それと、僕、配信経験なんてありませんよ? 見たことしかありませんので——」

「なるほど、素人の恥ずかしがり屋さんの男の娘、声も可愛らしいし小柄、どれだけ役を積みればいいのですか!? 既に満貫は揃ってますよ! 役満を目指すのですか!？」

「えっと、何を言ってるのかは分かりませんが、そういうことですので動画配信は難しいかな、と」

「——全面サポートします」

「……へっ?。」

「私が全面サポートを……、いえ、弊社シロルームが全力を持って協力させていただきます!。」

「で、でもV t u b e r ってやっぱり女性の方がいいですし……」

「そんなことないですよ。シロルームでも男性ライバーの方は数人いらっしゃいます。確かに役割はまた違いますが、しっかり人気を取

られてますよ?」

——あつ、そうなんだ。男性ライバーなら確かに……。それに動画配信もサポートしてくれるなら……。……。

一瞬気持ちが揺らいでしまう。
ただ、やっぱり不安の方が勝つてしまう。

「それでどうでしょう? 私と一緒に(美少女)V t u b e r になりますか?」
「す、すみません。(男性)V t u b e r には興味ありますが、やっぱり僕には荷が重いと云いますか、できそうにないです……。……」
「そうですか……。では、こちらに名前を書いてください」

舞がそつと一枚の紙を差し出してくる。

そこには【契約書】の文字が書かれていた。

「ちよ、ちよつと待って下さい! 僕、断りましたよね? そ、それになんで契約書を持ち歩いているのですか!?!」
「えっ、小幡^きさん^みみたいな子を見つけたときに逃がさないため?」
「怖いですよ!?! な、なにさせられるのですか!?! や、やっぱり僕、断ります。こ、これで失礼しますね——」

下手な契約をさせられる前に立ち上がると、僕は家に帰っていった。



それから数日が過ぎた。
すっかり僕の中で舞とのやりとりが薄れていたとき、事件が起こる。

家に帰ってくる時母さんが誰か連れてきていることに気づいた。リビングの方から笑い声が聞こえてくる。

だからこそ、僕はリビングへ行かずにそのまま部屋へと戻ろうとする。

しかし、そのタイミングで声が聞こえてくる。

「ゆうくん、帰ってきたの？ ちょっとこっちに来てくれる？」

「えっ!? ど、どうして……?」

「ゆうくんにお客さんだよー!」

僕に客? そもそも僕はぼっち……。

わざわざ僕を訪ねてくるような人は思い浮かばない。

そうなる時母さんが騙されているだけだろう。

そう思いながらリビングへ行くとそこには先日会った舞がいた。

そして、その隣にまるで子供にしか見えない母さんが座って、笑みを浮かべていた。

「ゆうくん、聞いたよ。V t u b e rになるんだって!? どうしてママに相談してくれなかったの?」

「えっ、あ、あれっ? ど、どうして? ぼ、僕、自宅を教えていない……」

舞の行動に思わず恐怖すら感じてしまう。

すると舞はにっこり微笑んでくる。

「ええ、私も諦めようとしたんですけどね。よく考えるとシロルールの会長が確か『小幡』という名前だったことを思い出して、ダメ元で聞きに来たんですよ。そしたらまさかの小幡さん……、いえ、祐季くんのお母さんでしたので——」

「ママは大賛成だよ！ ゆーくん、可愛いし」

悪びれた素振りなく言う母さん。

大学生である僕がいるにも拘わらず、母さんの見た目は子供のよう
にしか見えない。

そんな母親がいるはずないだろう、アニメの中の存在だろう、言い
たくなる気持ちもわかる。ただ、目の前に現存しているのだから仕方
ない。

「可愛いとか関係ないよね?! 僕は男で募集要項も女性限定なんだし
……」

「そこはほらっ、会長権限でどうにでもなるよ。やったね、ゆーくん。
憧れのV t u b e rだよ?」

「み、見る方で憧れていても自分がしたいなんて思っていないよ! そ、
それに母さんもシロルールの会長だなんて一言も言っていないよね?」
「別にシロルールのことは聞かれなかったし……。それにママは見た
目があれだから表に出てこないでっつてアイリが言ってきたし。『子供
が会長だなんて問題があるから』なんて言ってくるんだよ。酷いと思
わない?」

母さんがグツと身を乗り出してきて、不満そうに頬を膨らませてい
た。

その仕草はどう見ても子供そのもの。

しかし、それを言うとき母さんが怒ってしまうので口には出さない。

「えっと、そのアイリ——揚津愛理代表が弊社、シロルールの代表にな
ります。その小幡会長と揚津代表の二人がシロルートを起こした張
本人でして——」

舞が詳しい説明をしてくれる。

ただ、そこで僕の動きが固まる。

「えっ!? 本当の本当に母さんが!? だって今までそんな素振りを見せてこなかったよね?」

「だって、家だと仕事を忘れたいでしょう? ゆーくんにも癒やされたいでしょ? でも、ゆーくんも世界に羽ばたいてしまっただね……。うん、悲しいけど応援するよ。頑張れー」

「もう、だからやるって言ってないでしょ!」

「大丈夫、ゆーくんなら! だって男の子でしょ?」

「うっ……」

思わず僕は口を閉ざしてしまう。

散々少女扱いされ続けた僕は『男なら○○……』という言葉を聞く
と断れなくなってしまう。それを母さんもわかってて敢えて使ってくる。

「ゆーくん、ファイト!! 大丈夫、男の娘だってV t u b e rになれるよ!」

「だ、だから勝手なことを言わないで!!」

「えっと、ではこちらが契約書で——」

「ま、舞さんも進めようとししないで!」

一人でも相手にするのが大変なのに、ノリが良い人が二人もいて、僕は息も絶え絶えになっていた。

「はあ……、はあ……。ど、どうして僕をそこまでV t u b e rにしたいの?」

「えっ? だって、たくさんの人がゆーくんの放送を見に来るってことは、そのままゆーくんがたくさんお友達ができるってことだよね?」

そうなるママ、うれしいな」

母さんは僕に友達がないことを心配してくれているようだった。

もちろん、不安に思わせていることはわかっている。

「舞さんもどうして僕をそこまでV t u b e rにしたいのですか？別に代わりの人はいくらでもいますよね？」

「いえ、祐季くんの代わりをできる人はいませんよ。それに祐季くんがとっても可愛いからはあはあしたいというだけで……」

口から涎を出しそうになりながら目を輝かせて言っている。その姿はどう見ても不審者そのもの……。

ここには危ない、と身の危険を感じていた。

「や、やっぱり僕、その、自分の身がかわいいので——」

「あー、違います違います。可愛い祐季くんがV t u b e rになったら沢山のてえてえを生み出してくれるんだろうなって……」

「てえてえ？」

「ええ、尊いことを言うんですよ。見たたら『てえてえ』と言わざるを得ないような……。祐季くんならたくさんのてえてえが生み出せませよ！ 私はそれが見たいんです！」

きっぱりと言い切ってくる舞。

男でも生み出せるのだろうか？ という疑問はあるもののそこまで期待してくれる人は今までいなかった。

——母さんも舞さんも僕に期待してくれているんだな……。

その気持ちは今まで感じたことのないもので、嬉しさで思わず笑みがこぼれてしまう。だからこそ、僕は頷いていた。

「わかりました。その期待に応えるためにも頑張ります！」

◇◇◇

舞が家に来てから三ヶ月ほど過ぎた。

電話で何度か連絡を取り合っていたのだが、PCは何故か担当の舞が力を入れすぎたようで届くのに結構時間がかかっていたようだ。

それがようやく届いた。

ただ、何故か同封されていたアバターのイラストを見て固まってしまった。

「だ、騙された……」

シロルームに男性V t u b e rがいると聞いた時点で、僕も男アバターになるものだと思い込んでいた。

しかし、もらったイラストには犬っぽい少女の絵が描かれていた。そして、一番上にはそのキャラの名前が書かれている。

「雪城ユキ」

これがV t u b e rとして、名乗るべき名前のようだ。

名前が同じユキというのは、被っていてもわからないということか？

それとも僕がうつかり名前を言ってしまった時にフォローできるようにするためか？

とにかく小柄でとても可愛らしい少女が描かれている。

茶色の肩より少し長い髪。白のワンピースとその上から黄色の犬耳付きフードパーカーを着ている。

更になぜか段ボールに入れられており、そこには『拾って下さい』の文字が書かれている。

ただ、舞も男性V t u b e rがいることしか言っていないかった。僕のアバターについてはこれと言って言及していなかった。

そして、既に契約している以上、このアバターで活動していくしかない。

そこはもう悩んでいても仕方ない。覚悟を決めるしかなかった。

「はあ……。それと他には何が届いたんだ……。？」

シロルームから送られてきた段ボールは三つ。

一つは今のイラストや動画配信のやり方が書かれた本、あとはwebカメラなどが入っていた。

細かい道具一式が入っているのだろう。

次の段ボールを開けるとデスクトップのパソコンやモニターが入っている。

——これで全て揃ったと思うんだけど？

最後の謎ダンボール。

それに手をかけようとする。しかし、それはやたらと軽かった。まるで中に何も入っていないかのように。

と、言うか本当に中身は空だった。

よく見ると段ボールには『拾ってください』の文字が描かれていた。

「うん、これは見なかったことにしよう」

その段ボールは部屋の片隅に置いて、パソコンを配置していく。そして、担当の用意した説明通りに必要なソフトを入れていく。

SNSであるカタッター。

チャットであるキャスコード。

そしてもちろん動画配信サイトであるMeetube。

アカウントはシロルームが用意してくれるようで、既にキャスコー

ドだけはアカウントがあつた。

企業所属のV t u b e rなのだから、当然なのだろう。

(きつと祐季くんは作ることから逃げると思いましたので、先に逃げられなくしておきました)

という担当さんの声も聞こえてくるが、それは気にしない。

機械が得意ではない僕としてはここまでしてもらえるとありがたい限りだった。

あとは配信ソフトや2Dイラストを動かすソフトを入れるだけ。ただ、それだけでも頭が痛くなってくる。

全ての準備を終えると新しく入れたキャスコードから担当へ連絡を入れる。

キャスコード——グループを作り、メッセージを送りあったり、同時に通話できる便利なチャットアプリだった。

ただ、使うことはないの、入れたことがなかった。

だから、四苦八苦しなげらなんとか舞へ報告を入れる。

ユキ : 「機材届きました。ありがとうございます」

報告がてらの簡単な内容。

ただ、すぐに返信が来る。

マネ : 「無事にセット出来たようですね。これでいつでも配信できますね。あと三期生のグループに祐季くんも入れておきますね」

電話で聞いていたが、三期生は僕のほかに三人いるらしい。

同期ということもあり、今後コラボをすることもあるから仲良くなっておく必要はある。

一応、万が一、億が一のことを考えて舞には、他に男性がいなくて聞いてみると鼻で笑われてしまった。

『あははっ、今回の募集は女性限定でしたよ?』

——僕に対して言っていたことと違いますよ?。

口には出さなかったけど、心の中でそう思い、苦笑を浮かべていた。あと、配信中やチャット内では舞のことはマネさん、もしくは担当さんと呼ぶことになっていた。

ただ、チャットでのやり取りはいいとして、グループ通話だとうしても声が聞こえてしまう。

話した瞬間に男だとバレてしまう……かもしれない。

ユキ : 「む、無理です……。きっと僕の声聞いた瞬間に美少女V tuberになりたい変態さん、のレッテルを貼られちゃいますよ……」

震える手で舞に直接チャットを返す。

マネ : 「大丈夫ですよ。こんなに可愛いユキくんなら。それにユキくんの公式設定から性別の欄は消しておきました。バレたら最初から男の娘だったということにしましょう!」

ユキ : 「きよ、拒否権は?」

マネ : 「ないですね。最初から」

秒で拒否の返答がくる。

それを見たあと、僕は更に顔を青ざめていた。

第1話：同期達

それから何度か担当の舞や同期たちを交えて打ち合わせを繰り返していた。

——できるだけチャットで済ませてくれた舞には感謝しても足りない。いや、そもそも女性限定なのを無理やりVtuberにしながらったらこんなことにはならなかったのでは……とも思わなくないが。

ただ、何度かの通話でも男であるということにはバレなかった。そして、ついに来るべき日が来てしまう。

◇◇◇

初配信の日が決まり、カタッターで活動開始の告知をするように頼まれてしまった。

カタッターに初吹きをする。それを意味するところはつまり——。

「遂に僕が雪城ユキゆきしろゆきとして、全国デビューすることになるんだ」

男の僕が美少女と偽ってVtuberデビュー。絶対バレたら炎上するやつだろう。

……ぶるぶる。

急に怖くなって身震いしてしまう。こんな体調で投稿なんてできな——。

マネ : 「体調不良でもやってくださいね」

ユキ : 「マネさんはエスパァーなの!？」

マネ : 「ユキくんの性格を考えると簡単に分かりますよ」

——そんなにわかりやすいかな？

マネ : 「では、ユキくんは同期三人の後に投稿してください。絶対に投稿してくださいね。アカウントは準備してありますので、こちらのパスワードで入ってください。アカウントID:@yuki|yukishiro パスワード:※※※※※※※※※※」

試しに入ってみるとすでにプロフィールは簡潔に書かれていた。

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki|yukishiro
シロルーム所属。三期生。
0フォロー中 162フォロワー

簡単な内容だったが、余計なことは書かない方がいいし、このほうが僕らしい、とそれ以上のことは書かないことにした。
そして、肝心の部分。すでにフォロワーがいる。

「ど、どうして……」

まだ開始の宣言もしていないのにすでに集まっている。
これがシロルームのライターが集めた知名度、というものなのだろう。

「だ、大丈夫、覚悟を決めよう」

グツと両手を握るとそのタイミングで通知音が鳴る。

マネ : 「逃げずにちゃんと告知してくださいね。まず内容を確認しますので投稿内容ができましたら教えてください」

ユキ : 「大丈夫ですよ!？」

まさかまた逃げると思われたようだ。

心外だな、と思うが、今までの行動を鑑みるとそう思われても仕方ないだろう。

「よし、それならさっさと告知をして驚かせよう。でも、どんな告知にしようかな」

色々なプレッシャーが一度に襲ってきて、その結果の気持ちの昂りだったのだろうか。それとも気の迷いだったのだろうか。

自身のアバター。段ボールに入れられた犬っぽい少女の姿を見て、唐突に閃いていた。そして、その内容で舞に確認する。

ピコっ。

マネ : 「良い内容ですね。OKです」

速攻でOKの返事がくる。

おそらくここで時間をかけてしまうと眩くのを迷ってしまうと思っただろう。

だからこそ、その勢いのまま投稿をする。

一緒に作ってもらった段ボールだけしか映っていないヘッダー、段ボールから怯えた風に少しだけ顔を覗かせているユキのチビキヤラアイコンも貼り付ける。

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki | yukishiro
今

シロルーム三期生、雪城ユキ（ゆきしろゆき）といいます。

だ、誰か拾いに来てくださいね。

お、親はシロルーム一期生で先輩の美空アカネ(@akane m

i s o r a) さんです。

段ボールに書かれた内容をそのまま使うことにしたのだ。自分で考えるのはやっぱり恥ずかしいし。

一仕事終えたところでカタッターを消そうとする。その瞬間に通知が全く鳴り止まなくなっていた。

「えっ、な、なに？ 何が起こってるの？」

原因を調べてみるとどうやらさっきの眩きにすでにとんでもないファボやRT、そしてリップがついているようだった。

「ヘッダーの段ボールオンリー、草」

「ちよつと拾ってくる」

「さて、俺が先だ！」

「何この犬。かわいい」

「絶対に見る」

「……好き」

——ど、どうなってるの。たった一回の眩きなのに……。

困惑しつつ、あまりにも鳴り続けるので通知音を消す。

そして、さつき三桁で驚いていたフォローワー数だが、一気に四桁へ届きそうな勢いで増えていた。

◆◆◆

そして、配信日当日。

僕は緊張のあまり部屋の中で段ボールの中にうずくまり、震えていた。

もしかすると担当の舞はここまで予想してユキくんの段ボールを送ってきたのかもしれない。

狭い場所に入るとなぜかすぐ落ち着く。

もちろん、それは現実逃避で刻一刻と配信時間は迫ってくる。

「うう……、ほ、本当に僕で大丈夫なのかな……」

男である僕が美少女V t u b e rに……。

やはりどうしてもそこが引つかかかってしまう。

担当さんからは『祐季くんは思いつきり祐季くんらしさを出してください！ それ以上のことは求めませんので』と言われている。

契約にも「男ということがバレてはいけない」という項目はない。

『全然バレてもいいですよー。むしろ、こんなに可愛い子が女の子のはずないですよね』

と、担当さんは嬉しそうに言っていた。

どう考えても炎上すると思うのだが。

——緊張してきたよ。このまま電波障害になったとかで、配信がなくならないかな……。

そんなことを考えていると、ピコッと通知音になる。

マネ …ユキくん、今はどこも電波障害は起きてないので配信はしないとダメですよ」

ユキ …べ、別にそんなことしようとしてないですよ……僕の考えを読まないで……」

マネ …本当に分かりやすいですね。大丈夫ですよ、ユキくんなら——」

もしかしたら励ますために連絡をくれたのだろうか？
担当さんもおそらく三期生の放送前で忙しいはずなのに。

そこまでしてもらったのだから、僕も頑張らないと――。

「そ、それにしてもなんで僕が一番最後なんだろう？ うう……、みんなの配信、見に行かないといけないよね？」

緊張しながら、Me e Tubeを開き、まず初めに配信をする
真心ココネのチャンネルへと飛んでいた。

◇◇◇

『《真心ココネ初配信》自己紹介枠。初めまして《シロルーム三期生／新人》』

5, 147人が視聴中 ライブ配信中

☒124 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

『みんな、はじめましてー！ シロルーム三期生の真心ココネですー。
沢山の人に見に来てもらえて嬉しいなー。今日は短い時間ですけど
楽しんでいってくださいね』

三期生トップバッターは真心ココネ。

アバターは長いピンクの髪をした小柄な少女だった。

背中には薄く黄色い4枚の羽がある妖精。ただし、声は普通のお姉さん。

実際にその名の通り、優しそうな声色をしている。

【コメント】

…こんばんはー

…こんー

…幼女だー

：ロリだー
：好きです

まともに見られないほど勢いよくコメントが流れていく。
その様子を見ると更に緊張感を増してしまうが、ココネは普通に対応をしていた。

『わわっ、コメント多いです。あと、ロリじゃないですよ!?!』

【コメント】

：ロリココネ……
：幼女なのに……
……好き

『もう、妖精さんは歳を取らないんですー。それじゃあ早速プロフィールを公開しますね』

ココネらしく丁寧にアバターの設定を出していた。

●真心 ココネ（まごころ ここね）

種族：妖精さん

年齢：まだまだ子供

詳細：半分は優しさでできている。じゃあ、残り半分は愛に決まってるよね？

人と接するために生まれてきた妖精。

配信予定：歌枠、雑談枠

「ざっとこんな感じですね。私、歌うことが好きだから歌枠をメインに取っていききたいと思います。一応ピアノとかも演奏できますので」

につこりと微笑むココネ。それを見た僕は少し焦ってしまう。

「ぼ、僕、あんな風にまとめてないよ……。ど、どうしよう……」

今から作ろうとしても間に合わない。

初放送から失敗してしまうのだろうか？

そんな焦りを感じたタイミングでチャットの音が鳴る。

担当者からメッセージが飛んできたようだった。

マネ : 「ユキくん、プロフィールのことを言うの忘れていました。準備は……出来ていませんよね？」

ユキ : 「ま、マネさん……。ど、どうしましょう。今から準備して間に合うかな……」

マネ : 「大丈夫です。それは私の方で準備させていただきます。ただ、放送時間ギリギリになりますので、確認してもらおう時間はなさそうです。私に一任してもらってもよろしいでしょうか？」

ユキ : 「は、はい、よろしくお願いします」

——よかった。これで九死に一生を得た。

大慌てしている間にココネの放送が終わってしまう。

意外と三十分は短いようだ。実際に放送している方は長く感じってしまうが——。

『では、名残惜しいですが、今日のところはここまでですね。次はカグラさんですー。概要欄にURLを貼っておきましたので、移動、お願いしますね』

最後の最後までしっかりとまとめあげるココネ。担当者から三期生唯一の常識枠と言われた彼女らしい。

そして、終わる頃には既に視聴者の数が6000人を超えていた。

そんな彼らは次のシロルーム三期生である神宮寺カグラのチャンネルへと移動するのだった。

◇◇◇

『《神宮寺カグラ初配信》私の話を聞くと良いわ《シロルーム三期生》』
6, 841人が待機中 20XX/05/05 20:30に公開
予定

☒214 ☒12 ?共有 ≡?保存 …

視聴者たちと一緒にカグラの放送へと移動する。

そのまま移動しているということもあって、開始前から既にかなりの待機者が出ていた。

「うう……、この待機の人ってどんどん増えていくよね？ それじゃあ僕るときは……」

嫌な予感がしたのでそのことはもう考えないようにした。

それよりもカグラの待機絵はなんだか訳が分からないものが描かれていた。

赤やらオレンジやら緑やら青やらが不安を誘うように波模様にかかれていた。

それを見た感想は――。

「画伯？」

一番近い言葉を考えたらそれがぴったりだった。

抽象画とでもいうのだろうか？

とりあえずこの絵のどこが良いのか分からなかった。

【コメント】

：なんだ、この絵？

：見てると気味が悪くなってくるな

：待機

：とりあえずシロルームらしいな

分からないのが僕だけじゃなくてどこか安心していた。

そんなことを考えていると画面にカグラが表示される。

金髪の長い髪。黒のドレスを着て頭には王冠。

そして、抜群のスタイルをしたいかにもお嬢様といったアバターが表示される。

『仕方ないから来てあげたわよ』

開口一番、腕を組みながらそんなことを言うカグラ。

キャラには合っているが、さすがにその台詞にコメント欄も流れが加速する。

【コメント】

：はっ？ 頼まれてないが

：高飛車キャラか

：俺は好きだな

：w

『私は神宮寺カグラよ。今日はいかに私が素晴らしいかを教えてあげるわ』

カグラはそう言いながら自分のプロフィールを公開する。

ただ、自分で作り直していたココネと違い、カグラの場合は担当さんからもらったデータをそのまま書き写していた。

●神宮寺 カグラ（じんぐうじ かぐら）

年齢；19歳

髪型；金色の長い髪

体型；胸は大きめ。↑大きくしてくれと頼まれたからスタッフのノリで。もちろんパッド

服装；黒のドレス服姿に頭には王冠

詳細；王に内緒で放送をしている姫。基本的に傲慢ではあるもののその実はさみしがり屋。何に対しても興味を持つが、もちろん始めてやることなので失敗が多いポンコツさん。

配信予定；料理枠（失敗メイン）、掃除枠（失敗メイン）、家事枠（失敗メイン）、雑談、ゲーム枠（失敗メイン）

スタッフからの言葉が載っていたり、わざわざ失敗することが書かれていたり、決して表に出したくないような情報が多数書かれていた。

【コメント】

………ぽんこつさん？

…なんだ、パッドか

…あれっ、何だか急にかわいく見えてきたぞ？

『いやああああ、忘れて忘れて。今のなし！』

大慌てで手で画面を隠そうとする。

しかし、コメント欄は更に勢いが加速していた。

【コメント】

…w

…切り取り班

…w

…草

それから、放送時間が経過していくにつれてカグラのポンコツ具合が存分に発揮され、どんどん盛り上がっていき、そして放送時間が終了していた。

『はあ……、はあ……、こ、これで今日はおしまい。さつさと次のユイのところに行くの良いわ。URLは概要欄にあるからね』

次は羊沢ユイひつじさわゆいの放送になる。

みんなぞろぞろと移動を開始するので、そちらのチャンネルに移動をする。

しかし、すでに気持ちは自分の放送に向いており、どこまで楽しめるか、正直未知数でもあった。

◇◇◇

『《羊沢ユイ初配信》初めてなの……《シロルーム三期生》』

7, 641人が待機中 20XX/05/05 21:00に公開
予定

274 8 ?共有 ≡?保存 …

ユイのチャンネルへと来る。

そこでまず色々とおかしいことに気づいただろう。

「ちよっ!?! た、タイトル!?!」

タイトルの言い回しがなんともおかしい。

おかしくないんだけど、おかしい。

思わずツツコんでしまいそうになるほどのインパクト。

こんなのを見せられてしまったら自分の配信はどうなのだろう――
|。

急に胃が痛くなってくる。

これまで三期生はしっかりと初配信を成功させていた。その影響もあり僕の緊張感はピークに近づきつつあった。放送の準備もある。ユイの放送は最後まで見られない。それでも、ここまで来たら見ずに居られなかった。

【コメント】

：待機

：まだかな

：わくわく

：小さいけど大きいな

：タイトル草

コメ欄も良い具合に暖まっている。

——これがずっと見る側ならよかったのだけど。

そんなことを思っているとユイの姿が現れる。

真っ白なショートボブの女の子。

しかも羊の角がついたフードを被っている。

服装も上は白のもこもこ。下も白のキュロットスカートで、健康そうな足が見えている。

あとは自分の体くらいはありそうな巨大なクッションを持っていた。

そして、すでに目はトロンと……、いや、ほぼ閉じられていた。

『うにゅ？… もう出番？…』

【コメント】

：ユイちゃん、起きてー

・お子様はもう寝る時間
・俺と一緒に寝てあげようか？
・通報しました

『うみゆ、おはよー。ゆいは羊沢ユイ。ひつじさわゆい。ぐうたらすることが趣味なの』

【コメント】

・あれっ、ぐうたらって趣味だったのか？
・俺と同じ
・俺もだ
・多過ぎ

『じゃあ、プロフィール出すね……』

そして、画面に映し出されたのはしっかりとまとめられたプロフィールだった。

下手をするとココネ以上に丁寧にまとめられていた。

●羊沢 ユイ（ひつじさわ ゆい）

年齢：18歳

性格：のんびり

好きなもの：お布団、甘いお菓子、寝ること、ゲーム

嫌いなもの：忙しいこと、辛いもの

詳細：ふふつつ、全て計算なの。ゆいはわざとこうしてぐうたらしてるのだ。

V t u b e r になっただきっかけ：ぐうたらするためなの

座右の銘：果報は寝て待て

配信予定：ゲーム枠、雑談枠、睡眠枠

『喋るの面倒だからまとめておいたよ……』

眠たそうな声を出して、プロフィールを出したもののそれを読み上げることはしなかった。

【コメント】

：w

：w

：w

：ぐうたら系か

ユイの放送も佳境に入ってくると、視聴者の数は7000を超えてしまっていた。

「この視聴者、そのまま僕のところへ来るんだよね？　うう……、唐突に体調が悪くなった気が——」

そんなタイミングで通知音が鳴る。

マネ　：「そろそろ準備しておいてくださいね。体調は大丈夫ですから」

ユキ　：「やっぱりエスパーですか？」

マネ　：「返してこられるならまだ余裕がありますね。一応プロフィールの準備ができました。こちら送っておきますね。つつい気合いが入ってしまいました」

ユキ　：「……？　ありがとうございます。本当に助かります。でも、本当に僕にできるでしょうか？」

マネ　：「大丈夫ですよ。ユキくんは一人ではありませんから。困ったときはみんなに頼ったら良いのですよ。私たちはもう仲間ですからね」

ユキ　：「は、はい。わかりました。ありがとうございます」

マネ　：「あっ、話している間にユキくんの番ですね。頑張ってください」

ユキ : 「ふえ？ わっ、ど、どこを押すんだっけ……」
マネ : 「では、私はこれで」

マネージャーの舞とのチャットを終えると、慌てながら配信ボタンを押していた。何の準備もできてないのに。

◇◇◇

チャンネル名：kokone | Room. 真心ココネ

チャンネル登録者数1. 75万人

チャンネル名：kagura | Room. 神宮寺カグラ

チャンネル登録者数1. 7万人

チャンネル名：Yui | Room. 羊沢ユイ

チャンネル登録者数1. 9万人

第2話：伝説の初配信

『《雪城ユキ初配信》初めまして、拾ってくださいね《シロルーム三期生／新人さん》』

8, 4 2 1人が待機中 20XX/05/05 21:30に公開
予定

☒374 ☒4 ?共有 ≡?保存 ∴

【コメント】

∴いよいよ次で最後か……

∴俺、この子が一番好みだな

∴おまおれ

∴わくわく

∴段ボールだけの画面、斬新だな

∴そういえばヘッダーも段ボールだけでもんな

∴恥ずかしがりなのかな？

∴飼い主王に俺はなる!!

∴待て、拾うのは俺だ!

∴すでに8000人超えか。下手をすると1万人超えるんじゃないか？

∴オラ、わくわくがとまんねーぞ!

∴あれっ? 開始時間過ぎてないか？

時間は超え、すでに放送中になっているにも拘わらず画面は何も変わらなかった。

中央に段ボールがポツンと置かれているだけ。そこから動く気配がない。

それもそのはずで、僕は必死にアバターを動かそうとしているのだが、なぜか動かなかった。

『あ、あれっ? アバターが動かないよ? ど、どうするんだっけ?!』

【コメント】

- ・中性的だな
- ・声好み
- ・事故？
- ・慌ててるのかわいい
- ・誰か拾いに行つてやれ
- ・よし、俺が
- ・待て、俺が行く
- ・おまわりさん、こちらです

「はあ……、はあ……、こ、これでいいのかな？」

コメ欄が勝手に盛り上がっている間に、ようやくアバターを動かすことができた。

しかし、既に息は荒くなっていた。

そして、アバターが動き出したことでゆっくり段ボールからフードについた犬の耳が見えてくる。

【コメント】

- ・あつ、出てきた
- ・かわいい
- ・持ち帰りたい
- ・おまわりさん、はやく！

——つ、次は何をするんだったかな。

最初からミスをしてしまって、頭が真っ白になってしまう。何かを喋ろうとしてもすぐに言葉に詰まってしまう。

『あつ、えつ、そ、その……』

段ボールからようやくチラッと顔を覗かせる。
しかし、すぐに段ボールの中へと戻ってしまった。

『あ、あれっ？ か、顔が出てこない……っ？』

僕としては普通に顔を出したはずなのに、何故か顔が動かずに定位置のままだった。

【コメント】

：一瞬顔が見えた

：警戒してるな

：怖くないよ、出ておいで

：通報しました

：落ち着いて

真心ココネ　：大丈夫。落ち着いて

羊沢ユイ　：カメラの位置大丈夫？

テンパってしまい、訳が分からなくなっているとココネがコメントでフォローを入れてくれる。

『あつ……、ココネ……ユイ……ありがとう。か、カメラだね……』

カメラを少し調整するとようやく顔が動くようになる。

【コメント】

：ココネちゃん、ママみたい

：やっぱりママだったんだ

：ココママ、わんちゃんが困ってるよ

：ロリママw

真心ココネ　：ま、ママじゃないよ!?　とりあえず先に自己紹介しよっか?

ココネのコメントが流れてくる。
それを見てやることを思い出していた。

『あつ、そうだった。自己紹介……。ぼ、僕は雪城ユキゆきしろゆきです。そ、その、あの……』

喋りながらゆつくりと顔を出す。すると、コメントが更に爆発をしていた。

【コメント】

：あつ、ちよつと顔出てきた

：好み

：僕っこキタアアアア

ピコッ!

そんな配信途中に何かの通知音が鳴る。

それと同時にキャスコードの画面が少し映る。

マネ　：「ユキくん、プロフィール貼って」

『あつ、そっか……。プロフィールを張らないと……』

ようやく次の行動を思い出す。
自分のミスに気づかずに……。

【コメント】

：チャット画面見えてて草

・担当から指示はありましたw
・ユキくん、かわいい

『えっ、み、見えてる?!?!?』

コメントでキャスコードの画面が見えていることを知り、大慌てで消そうとする。

ピコッ、ピコッ。

『ぴいあああ……』

なんとか消そうとしているときに更に追い打ちをかけるようにチャットの通知が来る。

マネ : 「チャット画面消して」

ココネ : 「大丈夫? 消し方分かる?」

消そうとしているのにその間に通知が来るので、余計画面に表示されてしまう。

そんな悪循環の中、四苦八苦してようやくキャスコードの画面を消すことができた。

『はあ……はあ……、や、やったよ……。消せたよ……』

【コメント】

・息エロい

・おめでとう

・自己紹介をせずに十分経過

・ユキくん……可愛すぎる

・まさかカグラ様を超えるポンコツくんが出てくるとは

：さすがシロルーム。トリは隠し球か

『自己……紹介？　そ、そうだった。えとえと……』

大慌てで今度は自己紹介を貼ろうとする。

すると、そのタイミングでココネからチャットが来る。

ココネ　：「困ってる？　私、コラボしようか？」

『う、うん。お、お願い……』

テンパるあまり自己紹介をする前からコラボをする、という今までにない伝説を作ることになってしまった。

それでもせっかく配信に来てくれた人たちをがっかりさせるよりは良いよね？

思えば、初めての打ち合わせからココネも含めて三期生のみんなにずっと助けられっぱなしで感謝してもしたりない程だった。

また彼女たちが困った時には力にならないと。それが男らしき……だよね。

ただ、そんな状況になることが想像できないけど。



それは三期生で初めて通話をしたとき。

僕が男だということがバレないか不安に思い、そわそわとしていた。

——もうすぐメンバー全員での通話……。

それを考えると胃がズキズキと痛む。

——熱が出たとかで通話に出られないとか、できないかな。

そんなことを考えた瞬間にピコツと通知音になる。

マネ：「熱でも出てくださいね」

ユキ：「マネさんはエスパ―なの!？」

マネ：「ユキくんの性格を考えると簡単に分かりますよ」

まるで盗聴でもされているのかと疑いたくなるほどタイミングの良い連絡。

思わず周りを見渡してしまおう。

マネ：「別に盗撮とか盗聴はしてませんよ」

ユキ：「ぼ、ぼ、僕はそんなこと考えてませんよ」

震える手つきでチャットを返す。

マネ：「それなら大丈夫ですね。では、通話を開始しますので、とってくださいね」

舞からその連絡が届いた次のタイミングで、通知音が鳴り響いていた。

——出たくない……。でも、釘を刺されたから出ないとだめだね。

しばらく迷ったあと、十秒ほど経って覚悟を決める。
通話ボタンを押すと、知らない声の女性が大声を上げる。

カグラ：『やっときたの!？ 遅いわよ』

『っ!？』

いきなりの大声に思わず怯んでしまう。

通話アプリの使用上、誰が話しているのかアイコンでわかるのはいい。

それぞれがアバターで表示されてる。マネージャーの舞だけはずか眼鏡だけだったが。

とにかく、同期四人。

僕を除いて周りは全員女子。

これで緊張するな、というほうが無理な要望だった。

ココネ：『ダメだよ、カグラちゃん。ユキくんは臆病な子だから優しく……、優しくでしょ？』

カグラ：『べ、別に怒ってるわけじゃないわよ。ただ、何かあったら心配でしょ』

更に別の女性の声が聞こえてくる。

そして、カグラはどうやら心配してくれたようだ。

——僕が男であることについては何も触れてこないんだな。

案外声だけでは判断できないのかもしれない。

——確かにずっと可愛い声とか言われ続けてた。声変わりもしたはずなのに……。

『あつ……、えっとその……、ごめんなさい。その……遅れてしまっ……』

ココネ：『大丈夫ですよ、これから始めるところですから』

ココネの優しい声が聞こえてくる。

それにどこかほっとしてしていた。

マネ：『はい、それじゃ早速開始しましょうか。今回は三期生の交流も兼ねてます。コラボしてもらいますので、仲良くしてくださいね。では、まずは自己紹介からしましょう。私が三期生の担当である湯切舞です。それで次は……』

ココネ：『私から行きますね。三期生、真心まごころココネ。歌うことが好きなので、歌枠とか雑談枠をしていきたいです。みんな、コラボしてね』
カグラ：『まあ、気が向いたらね』

ユイ：『一緒に睡眠枠をしよう……』
『ぼ、僕はちよつと……』

ココネ：『もう、三人ともそんなことを言つて……。本当はコラボしたいんですよ。このっ、このっ』

カグラ：『や、やめなさい。そ、それよりも次は私。神宮寺カグラよ。家事とか料理が好きだからそれを放送していくわ』

マネ：『下手な物好きつてこのことを言うんだって、最終面接では笑いが上がったのよね』

カグラ：『よ、余計なことを言わないで。と、とにかく料理で困ったことがあつたら私に聞くといいわ』

『えっ、め、面接……？』

マネ：『ええ、役員全員の前で面接よ』

『あれっ？ ぼ、僕は……？』

マネ：『まあ、ユキくんの場合は特殊でしたからね。そうしないとユキくん、逃げてましたし？』

——うう、本当に手玉に取るようにわかられてるなあ……。

確かに完全に断っていたもんな。

母さんと担当さんががつつり推してこなかったら領くことはなかった。

実際に数日後、契約をしたことを後悔していた。

ただ、もう逃げられないから、と諦めにも似た境地になっていたの

だ。

言葉を発せずに同期の自己紹介を聞いていると、いつのまにか残り二人になっていた。

——緊張してきたよ。このまま電池がなくなつたとかで、通話を消したらダメかな……。

マネ　：『ユキくん、PCは電源繋いでいますので電池はなくなりませんよ?』

『べ、別にそんな考えていないですよ……。僕の考えを読まないで……』

マネ　：『本当に分かりやすいですね。次はユイさん、お願いします』

僕と同じようにさつきからあまり声を発していないユイにバトンが回される。

ユイ　：『うにゅー……。眠いよ……。』

とろけそうな声の女の子が、あくび混じりの声を出してくる。

ココネ　：『ほらっ、ユイ、起きて。みんなで通話するって言ってたでしょ。自己紹介は?』

ユイ　：『羊沢ユイ。ゲーム配信とかしようと思ってるよ……。よろしく……。』

——最後間延びした言い方になってたのは寝てしまったから……じゃないよね?。

ただ、僕の前が変わつたユイが自己紹介してくれたおかげで、少し

だけ緊張がほどけていた。

マネ : 『じゃあ最後はユキくん、お願いね』
『……………』

緊張が解けてきたなんて嘘だった。名前を言われた瞬間に忘れようとしていた緊張感が戻ってきて、足が震え、目の前が真っ白になり、口がパクパクと動いていた。

しかし、言葉が出てくることはない。

ココネ : 『大丈夫ですよ、ゆっくりで』

カグラ : 『ええ、別に何か減るわけじゃないもんね』

ユイ : 『うにゅ……、寝て待ってるよ……』

みんなそれぞれ優しい言葉を掛けてくれる。

同期三人の声に思わず目からは涙がこぼれそうになる。

——ここで頑張らないと男が廃るよね？

覚悟を決めると大きく深呼吸をして声を発する。

『ぼ、僕はゆ、雪城ユキゆきしろゆきです。動画は全然分からないことだらけで、その……、できることからやっていこうと思います。よ、よろしくおねがいします……いたっ』

お辞儀をするタイミングでモニターに頭をぶつけてしまう。

すると、その声を聞いた同期のメンバーから笑い声が上がってくる。

ココネ : 『あははっ、よろしくね。大丈夫、痛くない？』

カグラ : 『まあ、家事が教えて欲しかったらいつでもコラボしてあげ

るわよ』

ユイ：『一緒にゲームしよう』

同期が優しい。それだけで彼女らとなら一緒にやっていけるとい
う気持ちにさせられる。

——迷惑をかけないように頑張っ
て行こう。

心の中でそう固く決意していた。



そんな彼女たちが今回も助けてくれようとしている。

いつかは彼女たちにも恩返しをしたいな。と考えながらココネと
のコラボを承認していた。

そして、隣にココネの姿を表示させる。それだけでいふんと頼も
しく感じてしまう。

ココネ：『どうもー。さつきぶりのみんなも、初めてのみんなもココ
ばんわー。シロルーム三期生。まとめ役。真心ココネですー！』

配信画面には、ろくに姿を現していない僕^{ユキ}in段ボールと妖精少女
ココネ。

一体何の配信なのかわからなくなってくる。

【コメント】

：おつ、もうコラボか？

：こんなこと、前代未聞じゃないか？

：伝説を作った犬……いや、段ボールか

：もうユキくんの本体が段ボールに見えてきた

『ぼ、僕は段ボールじゃないですよ……』

ココネ：『それなら早く出てきてくださいねっ』

ココネに促されるまま(動きは引つ張り出すような感じで)、顔をようやくリスナーたちに見せる。

ココネ：『はい、ということでしょうか。こちらが雪城ユキくん、本体です。僕っこ、僕っこです!!? 呼び方はユキくん、ユキちゃん、ユキユキ、段ボールのどれでもオツケーです!』
『ちよ、ちよつと……、段ボールはその……』

ココネ：『それなら次はちゃんと早く段ボールから出てきてくださいねっ』

『わ、わかったよ。頑張るよ、ココママ……』

ココネ：『ま、ママじゃない……。ううん、ユキくんのママならいいかな』

『えっ!?!』

【コメント】

：ココママがママと認めたw

：驚きのユキくんw

：なんだろう、この空間……

：自己紹介も終わってないのに……

：ココユキw

ココネ：『と、とりあえず次に行きますよ。ほらっ、まずは自己紹介！ 貼るんですよ？ できますか?』

『う、うん、大丈夫……』

舞からもらったプロフィールを貼り付ける。

すると、それをココネが読んでくれる。

ココネ『えつと、まず名前は雪城ユキくんですね。とってもかわいい子ですよ。すごく好きです』

『あ、ありがとうございます……す……す……す……』

さすがに面と向かって『好き』と言われると照れてしまう。

【コメント】

：尊すぎて死ぬ

：てえてえ

：死ぬな、俺

：てえてえわーるど……

コメントの勢いが加速している。
もうほとんど目で追い切れない。

ココネ：『次いきますね。飼ともだちい主を探している可愛そうなわんこ。配信予定は腕立てが一回もできないけど筋トレ枠？』

『うん、こんな軟弱な体じゃなくてちよつとは鍛えないとって——。自分に自信を持てたら友達もできるかなって思ってるんだ……』

見た目が男の娘、ということもあって女子からは妹扱いされる上に男子からは露骨に避けられる。

そのどちらも躲していたらいつの間にかぼっちになっていた。

もつと男らしくなれば……と考えたことは一度や二度では済まなかった。

ココネ『そんなことないですよ。ほらっ、私たちもう友達ですよ？』

『えっ、ほ、本当に？ 本当にいいの？』

ココネ：『もちろんですよー』

『あ、ありがとう……。僕、友達ができたのは初めてだよ……。ぐすっ

……』

嬉しさのあまり、目から涙が流れてくる。

【コメント】

：全俺が泣いた

：ユキくん、俺たちも友達だぞー！

：通報しました

：てえてえが加速した

：ユキくんガチ泣き。よかったね……

神宮寺カグラ　：私も友達になってもいいわよ？

羊沢ユイ　：ゆいは友達？

『あつ、二人とも来てくれたんだ……。ありがとう……。』

ココネ：『それより応えてあげたら？』

『そ、そうだね。も、もちろん、二人がよかつたら……。』

【コメント】

神宮寺カグラ　：!? 聞いたわよ。もう忘れないからね

羊沢ユイ　：うにゅ……。時間、大丈夫？

：カグラ様、ガチで喜んでいて草

：一気に三人も友達が

：ユキくんが俺たちのはるか先へ行ってしまった

：自己紹介の途中で二十分経過

『二十分!?　だ、大丈夫かな?』

ココネ：『もちろん大丈夫です。だって、すでに担当さんには連絡を付けてありますから』

『ふえ?』

首を傾げるとキヤスコードを見してみる。

するとそこに担当さんからのメッセージが残されていた。

マネ …『延長OKです。代わりに伝説を作って下さいね』

『え、延長おおお……!?!』

【コメント】

…おっ?!

…マジか!?

…シロルーム初じゃないか? 初配信延長

…俺たちは伝説に立ち会うのか

…つて、気づいたら視聴者1万を超えてるじゃないか!?

…視聴者だけじゃないな。お気に入りも余裕で1万を超えてやがる

『ちよ、ちよっと待って。延長しても、何もできないし、そ、それになんか、本当にいいの?』

【コメント】

…もちろんだ

…そのためにここにいるんだからな

…初配信延長てえてえ伝説と聞いて

…よし、俺たちも盛り上がるぞ!

『みんな……、うん、ありがとう』

ココネ:『うんうん、よかったね。それじゃあ次にいってみようかー。自己紹介はまだ終わってないよ』

『あ、あれっ? でも僕が教えてもらった設定はそれだけ……』
ココネ:『えっと、挨拶は『わふー』で、語尾は『わふう』? 出来れば可愛い感じで言ってくれろと担当としては嬉しいな……、と書いてありますね』

『そ、それは担当さんの願望でしょ!?!』

ココネ：『でも私も聞きたいなあ。それに挨拶は必要でしょ?』
『うぐっ……』

ココネ：『ここは試しに言ってみてリスナーの人に決めてもらうのはどうかな?』

『わ、わかったよ。えつと……、わ、わふわふ、わふう……』

【コメント】

：あれっ、ここは天国? 尊死した

：可愛すぎる

：ココママてえてえ

：挨拶は決まりだね

『え、ほ、本当にこれでやるの? ……わふう』

ココネ：『うーん、語尾はなかなか厳しそうね。とりあえず挨拶だけで良さそうかな』

『ぐい、ごめん……』

ココネ：『気にしなくていいよ。それじゃあそろそろ決めるものを決めて行こうか。挨拶は決まったし、後はタグだね』

『そ、そうか……。タグも決めないとダメだったんだね……』

【コメント】

：忘れてたな

：ココママがいて良かった

：ユキくん……草

：……ここでユキくんを補充できると聞いて

『えつと、決めるのは生放送のタグとイラスト、リスナーさんたちの呼び方、だったよね』

ココネ：『そうね。マシユマロとかで募集してないのよね?』

マシユマロとは匿名でコメントや感想、質問等を送れるカタッター

と連動したサービスの一つだった。

『う、うん、まだカタッターだけでいっぱいいっぱい……』

ココネ：『確かに今のユキくんを見ててもよくわかるね』

『そ、そんなにわかるかな……』

【コメント】

：わかる

：かわいかったよ

：ココユキ助かる

——評価は概ね良い？ ようなので、これで良かったのだろう。

ココネ：『それならここで募集しましょうか。まずは皆さんの呼び方から……』

『よ、よろしく……』

【コメント】

：ユキ友

：飼い主

：オーナー

：犬好き

ぼんぽんといくつかの案が出てくる。

ただそれと同時に流れていく速度もかなり早い。

『えっと、あつと……、ど、どれにしたら……』

ココネ：『私は犬好きさんが好きですね。でも飼い主はダメ。だつてユキくんの飼い主は私ですから』

『ちよ、な、何を言ってるの!?!』

【コメント】

：公式飼い主宣言きましたー
：ユキくん飼いたかった俺、涙目
神宮寺カグラ　：待て！　親は私だ！
羊沢ユイ　：ゆいもゆいも。ユキくん、飼いたいな……

『ふ、二人とも。何を言ってるの!?!』

【コメント】

：【悲報】三期生、ユキくんを巡って血で血を洗う飼い主戦争へ
：カグラ様と組み合わせるのはまずいだらう。ポンコツが加速する
：ユキユイはほんわかしそう
：ココママは飼い主というよりママだな
：ママ欲しい
：ココママは俺のものだ

違う話へと流れていくので取りあえずココネのおすすめで選んで
しまう。

『じゃ、じゃあ「犬好きさん」で。あと、ココママは僕のママなのであ
げません』

ココネ：『ユキくんから告白されちゃった……』

ココネが照れた演技をする。

それで自分で何を言ってしまったかわかり、顔を真っ赤にして慌て
てしまう。

『そ、その、い、今のは告白というわけじゃなくて、その……あの……、
ふきゆう……』

ココネ：『あつ、ゆ、ユキくん、しっかりして……』

恥ずかしさのあまり目を回す。

その結果、段ボールの下に顔を隠してしまい、垂れ下がった耳フー
ドだけが見えている状態になる。

その姿にコメントはさらに加速していく。

【コメント】

：これって初配信だよな？

：初々しいな

：可愛すぎる

：ユキくん、しつかり

：ココユキが尊すぎる

神宮寺カグラ　：ま、負けた……

羊沢ユイ　：一緒に睡眠枠したかったのに……

ココネ『しばらくユキくんが戻ってきそうにないので、先に他のタ
グを決めちゃいたいと思いますー。次は生放送配信タグです』

場を繋ぐとうとココネが進行してくれる。

その間も心臓がバクバクとなり、口をただパクパクさせていた。

【コメント】

：生雪

：ユキくん観察

：犬拾いました

ココネ『「犬拾いました」、いいですね。じゃあ、それで次はイラス
トタグを……』

『待つて待つて！　か、勝手に決めて……』

ゆっくり顔を出して慌てて言う。

ココネ：『でも、大好きさんたちももうそのつもりよ』

【コメント】

：【悲報】ユキくん寝てるうちに配信タグが決められる

：犬拾いました、か。チエツクしておかないと

：俺、道端に犬が捨てられてたらユキくんだと思って育てるんだ
……

『うつ……、わ、わかったよ。それじゃあ配信タグは「犬拾いました」
で。次はイラストのタグだよ』

【コメント】

：ユキくん観察日記

：今日のわんこ

：犬写真

：ココユキ日記

ココネ：『ちよつと、私が入ってますよ。ユキくんはどれがいいですか？』

どれもろくなものがない。

しかし、大好きさんたちが出してくれた案なので、一蹴しないで真剣に考える。

『そ、その……、犬写真……かな』

ココネ：『はい、三人目の人、当選です！ おめでとうございます！』

【コメント】

：おめでとー

：おめ

：えっ、マジw

：おめー
：おめおめー

『こ、これで全部決めたよね？』

ココネ：『そうね。推しのマークは犬と足跡だもんね。あつ、そういえばユキくん、カタッターで今日の配信開始を吠えてました？ 私見ませんでしたけど……』

『あつ!? し、してない。いつてくる……』

ココネ：『うん、いつてらっしゃーい』

大慌てでカタッターに放送開始の吠きをする。

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki_yukishiro
今

21時半から三十分、初配信を行います。是非見にきてください
ね。

時刻は既に22時。

延長がなかったら既に終わっている時間でもある。

つまりはただでさえお祭りムードになりつつある伝説の放送に更なる燃料を投下することに他ならなかった。

【コメント】

：放送終了のタイミングで開始告知をするの草

：w

：www

：草生えすぎと思ったけど、草以外なかった

：今来たけど、もう終わる？

：草草

『あつ、えつと、ち、違います。延長。延長することになりましたから』

「ココネ…今来た人も安心してユキくんを愛でていってくださいね」
「ぼ、僕の体力が持たないよ…」

第3話：三期生初コラボ

ココネ：『さて、タグも決め終わったからあとは雑談かな。ユキくん、何か話したいことある？』

『ぼ、僕は何も考えてないよ……。自己紹介するのも一杯一杯だったし……』

ココネ：『うんうん、そうだよね。それならここは大好きさんたちから質問を募集してみようか？』

ピコッピコッ。

時間が延長され、雑談が開始されようというそのタイミングで再びチャットから音が鳴る。

『あつ、音を消すの忘れてた』

ココネ：『大丈夫だよ。それより誰からかな？』

『ちよつと待つてね……』

チャットを開けるとカグラとユイから送られてきたようだった。

カグラ：『私もコラボしてあげても良いわよ？』

ユイ：『うみゆ、仲間はずれ？』

——どうやら二人も僕のことを心配してコラボをしてくれようとしているようだ。

そのことが嬉しくて、少し涙ぐみながら答える。

『ははっ……、カグラとユイからだったよ。一緒にコラボしたいって』
ココネ：『そうだよね。私だけだと不公平だよね。えつと、担当さんに……』

ピコッ。

再び通知音が鳴る。

開けると今度は担当さんからだった。

マネ …「コラボOKですよ」

簡潔に一行だけ送られてきたその言葉。

『担当さんからみんなのコラボ、OKが出ちやっただよ……』

【コメント】

…えっ？

…マジ？

…三期生全員集合？

ココネ：『うん、それじゃあ、全員コラボ許可を出してね』

『わ、わかったよ……』

——こんなこと、前代未聞だよな？ 一体僕の初配信はどんな方向へいくの？

困惑しつつも、僕のためを思ってくれているみんなに感謝をしながら、コラボの許可を出すのだった。

◆◆◆

『……というこ^{ひつじやわゆい}で他の二人にも来てもらいました』

ユイ …『うみゆ、羊沢ユイなの。ユキくんの段ボールを回収するために来たの』

『えっ!? だ、ダメだよ。この段ボールは僕のだからね』

【コメント】

…うみゆ

…うみゆ

…うみゆ

…その段ボール、でかいし二人で入れないか？

ユイ …『なるほど、それは名案』

『名案、じゃないよ!? この段ボールは渡さないからねっ』

【コメント】

…どうしても拾って欲しい犬w

…ユキくん必死w

…ユキユイもいいな

…てえてえ

…全身を見せないために全力になるユキくんw

ユイ …『うみゆ……、ゆいたち、友達じゃなかったの……?』

『うっ……』

ユイ …『友達なら貸してくれる? 代わりに今度私の枕を貸してあげるから』

『わ、わかったよ……うう……』

パソコンを操作して、段ボールをユイの方へ移動させる。

そこで初めて全身絵が登場することになる。

【コメント】

…はっ!? 見惚れてた

…かわいい

…ワンピースだったんだ……

：切り取り班、頼んだ！

『は、恥ずかしい……』

アバターとはいえ、こういった格好をしている、と分かってしまうと恥ずかしさを感じざるを得なかった。

ココネ：『大丈夫よ、何かあっても私が守ってあげるから』
『ココママ……』

ココネ：『ま、ママじゃないよ!?』

ユイ：『ぬくぬく……』

カグラ：『ちよつと、さつきから全く話が進んでないわよ。やっぱり私がいないとダメね』

『珍しくカグラさんが進行役をしてる』

カグラ：『珍しくないわよ！ みんながボケ倒すからでしょ！ 全く、一番しつかりした私がいないとやっぱりダメね』

【コメント】

：w

：w

：草

：w

：ココユキ最高……

：はあ、ユキユイだろ？

：よし、戦争だ

：おいっ、誰かカグラ様の話を聞いてやれ

一人話題に出てこないカグラはぷるぷると震えている。

『か、カグラさんも自己紹介してくれる？ ほらっ、あとから来た人もいるから……』

カグラ：『ふ、ふんつ、仕方ないわね。べ、別に話題に上がらなくて悲しいとかは思っていないからね。私は神宮寺カグラよ』

【コメント】

：カグラ様モードか

：ポンコツモードにいつ変わるのか見物だな

：もうポンコツモードじゃないのか？

カグラ：『わ、私はポンコツじゃないわよ』

『わかってるよ、カグラさん。僕はわかってるから……』

みんなが思い思いに暴走するので、僕はサポートに回ることにする。

自分の枠だけど……。

カグラ：『うう、さすがユキ……。私の唯一の友……』

【コメント】

：えっ、カグラ様もか？

：今回ぼっち多過ぎ

：呼んだか？

：なんだ、同類か

：急にカグラ様のこと、親近感が湧いたな

：ちよつと推してくる

：カグラ様かわいい

：カグユキか……。完全にノーマークだった

：おいつ、ぼっち同士を混ぜるのは危険だ

：ぼっち×ぼっちⅡ俺たち

：なんだ、俺たちは美少女か

ここに来てコメントは一番の伸びを見せていた。

それを見てカグラは困惑している。

カグラ：『べ、別に私は友達欲しかったわけじゃないんだからね！?』

『えっ、ぼ、僕とは友達じゃなかったの?』

思わず顔を青くなる。

すると僕に合わせるようにココネとユイも言う。

ココネ：『私も友達じゃないのですか?』

ユイ：『うにゅ……、違うんだ……』

カグラ：『あー、もう。みんな友達で同期よ！ これでいいんでしょ！』

【コメント】

・デレた

・これがツンデレ

・カグラ様はツンデレか

カグラ：『うう……、どうしたらいいのよ』

『……素直になればいいんじゃないかな?』

カグラ：『それはあんたもよ！ いつもこうやって話してくれたらもつと会話が弾むのよ』

『うっ、だ、だって、こんな大勢を前にしたら……』

今の現状を思い出して、だんだんと青ざめていく。

カグラ：『だ、だから小さくならないの！ 私たちがいるでしょ!』

『そ、そうだね。うん、頑張るよ』

【コメント】

：カグユキ、いいな
：ポンコツ×ポンコツ＝尊い
：誰を推すか決められない……
：ここまで自己紹介定期

ココネ：『そ、そうですね。そろそろ次に行きましょう。せつかく私たち三期生全員が揃ったのですから、質問コーナーにしましょうか』

ユイ：『うにゆ、ゆいが好きなのは甘い苺シヨートだよ』

ココネ：『まだ何も聞いてないですよ!?!』

ユイ：『うみゆう……、今履いてるのは白だよ……』

ココネ：『だから何も聞いてな——。い、今何を言ったのですか?』

ユイ：『うにゆ、それじゃあ質問のある人はコメントで』

ココネ：『ちよ、ちよつと、ユイちゃん!?! だからさっきの一体何なのですか!?!』

『えつと……、ユイさんとココママが漫才してたけど、気にせずにコメントをどうぞ……』

ココネ：『ゆ、ユキくんまで?!』

ユイ：『ゆいはユイって呼んでほしいな……』

【コメント】

：ココユイもいいなあ

：ココユキといいライブだ

：どうしてV t u b e r になろうとしたの?

：なんだかんだで三期生は仲がいいね

ココネ：『V t u b e r になろうとしたきっかけですか。えつと、私は新しい世界を見つけるため、ですね。もっと自分を高めたいと思っただんですよ』

『す……い……。ココママ、色々考えてるんだ……』

ココネ：『全然ですよ、私なんて。そ、それじゃあ、順番に次はカグラさん、お願いね』

カグラ：『私は自分の姿を放送しないなんて世界の損失だから——』
ユイ：『うにゆ、寂しかったから友達が欲しかったんだね』
カグラ：『ええ、そうよ。……って違うわよ!? また変なこと言っ
て!』

【コメント】

：ここは極楽浄土か？

：カグラ様、寂しがりやだもんね

：段ボール、カグラ様に似合いそう

『えっ、こんな感じかな?』

ユイのところにあった段ボールをカグラのところへ移動させる。
王冠を被った姫様が捨てられてるそのシユールな光景。でも、それ
がカグラということを考えてと妙にしつくりとくる。

ユイ：『うにゆ、似合ってるの』

ココネ：『確かにこれはすごく似合ってますね』

『うん、予想以上だった……』

カグラ：『って、私はダンボールがお似合いって言いたいの!?!』

『わ、わかったよ。段ボールは元に戻すよ……』

素直に段ボールを自分のところへ戻す。

【コメント】

：さりげなくユキくんがダンボールの中に戻ったw

：草

：カグラ様用の段ボールを探さないと

カグラ：『そんなものいらないわよ!?!』

ココネ：『ほらっ、また話が脱線してるわね。元に戻すわよ。ユイ

ちゃんはどうしてV t u b e rになろうとしたの?』

ユイ :『うにゅ、楽しんでぐうたらするためだよ』

カグラ :『……』

ココネ :『……』

『……』

【コメント】

……

……

：俺たちみたいだ

：俺を混ぜるな。俺はV t u b e rとして働くことすら嫌だ

：まだこうやってみんなを楽しませてくれてるだけ偉いよ

ココネ :『ぶ、ブレませんね、ユイちゃんは。そ、それじゃあ気を取り直して最後はお待ちかね、梓主であるユキくんに答えてもらいましょう。ではユキくん、どうぞ!』

一瞬空気が固まってしまったのをなんとかココネは戻そうとする。ただ、僕の答えもユイとそこまで変わるわけじゃなかった。

『ぼ、僕はその……外堀を埋められた……』

ココネ :『えっ!? だ、誰に!?!』

『担当さんと母さんだよ……。そうじゃないと人見知りの僕がするはずないよね……』

ココネ :『た、確かにユキくんは人一倍人見知りだもんね……』

【コメント】

：外堀を埋められるなんてアイドルみたいなこと、あるんだな

：アイドルみたいなものだもん

：そのお母さんに感謝

なんだかおかしな方向へと進み出してしまった。

『そ、それよりも次の質問、いきましよう。も、もう時間ないので』
ココネ：『そうですね。では次の質問はユキくんを選んでもらいましよう。コメントに書き込んでくださいね』

『えっ、僕!?!』

ココネ：『もちろんですよ。だってここ、ユキくんの枠ですから。もちろん個人宛ユキくんの質問でもいいですよ』

『や、優しくしてね……』

【コメント】

：かわいい

：お兄さん、いじめたくなっちゃうぞ

：通報しました

：ユキくんに質問。同期の中で一番好きな人は？

：ユキくん以外の人に質問。ユキくんの好きなところは？

ココネ：『これは似た質問が来ましたね。告白タイムになるかな?』

『そ、そんなことしないよ。ぼ、僕が耐えられないから……』

ユイ：『ゆいはユキくんのこと、好きだよ』

『っ!?!』

突然の告白に顔を伏せて、思わず段ボールの中へ隠れてしまう。

ココネ：『あっ、ユキくん!?!』

カグラ：『仕方ないわね、全く……。ほらっ、出てきなさいよ』

ユイ：『うにゆ、素直な気持ちを言っただけなのに……。段ボール貸してくれたいし……』

——わかってる。今の好き、がそういう好きじゃないくらい。でも、僕が精神がもたない……。

赤くなる顔を必死に抑えようとしているうちもコメントは無情に流れていく。

【コメント】

- ・ユキユイの勝ちか
- ・ユイちゃん、ストレートだったなあ
- ・ユキくん、出たおいでー
- ・ユキくんが好きな人も聞きたかったなあ
- ・でもこの反応は相思相愛なんじゃないか？

『うう……、僕は友達になつてくれたみんなのことが好きだよ。でも……』

ユイ　：『うみゆ、ゆいと同じだね』

ココネ：『あつ、そういうことだったのですね』

カグラ：『どうということなの？』

ココネ：『私はカグラさんのことが好きってことですよ』

カグラ：『な、な、何馬鹿なこと言ってるのよ!?!』

カグラが必死に手を動かして慌てていた。

その様子を見る限り、カグラだけどういうことかわかっていないようだった。

今のユイの好き、は友達としての好きってことだということに。

【コメント】

- ・相変わらずのポンコツぶり
- ・そこがいい
- ・切り抜き班、頼んだ
- ・ユキくんがすっかり段ボールだね
- ・やっぱり段ボールが本体……
- ・でも、じつと見てるとたまに顔をのぞかせてる。そこがかわいい

…あつ、本当だ

『っ!?!』

顔をのぞかせていた僕はまたすぐに段ボールへと隠れてしまう。

ココネ『つまり、だれがユキくんを拾い上げるか勝負ってことですね。ユキくん、私とコラボしませんか?』

『こ、コラボ……?』

ユイ『うみゆ、ココママだけずるい……。ゆいもコラボする。お泊まりオフ……』

カグラ『お、お泊まり!? さ、さすがにいきなりそれは……』
『お、お泊まりは僕の体が持たないよ……』

精神的にもそうだが、そもそも僕は男。

異性とお泊まりなんて論外だった。

しかも、美少女V t u b e rになった今、絶対に男であることは隠さないといけない事実だ。

オフだけはない。

絶対にオフだけはない。

ユイ『うみゆ、なら仕方ないの。24時間耐久クソゲーオフで我慢するの』

『それは全然我慢してないよね!? むしろ悪化してるよ』

思わず顔を出して突っ込んでしまう。ただ、すぐにまた引っ込める。

【コメント】

…オフコラボ……

…本当に仲がいいんだな

…24時間耐久……って死ぬのかな
…このメンバーだとユキくんも常識枠に入ってしまうのか

『僕はいつでも常識枠だよ!』

ココネ：『なら段ボールから出てきてくださいね。んっしょつと
……』

ココネが持ち上げるような仕草をするので、仕方なく顔だけ出す。

【コメント】

…あつ、出てきた

…おかえり

…やっぱりココユキか

…ココママ以外常識人がいない

…むしろ常識人がいるのが珍しい

ひどい言われようだった。

でも、元々シロルームは規格外の人物がたくさんいる企業……。
リスナー側なら僕も同じことを思っていただろう。

カグラ：『それよりもそろそろ時間じゃないかしら？ あと一つく

らしいか質問に答えられないわよ』

『うーん、それじゃあ簡単な質問、よろしく』

【コメント】

…もう1時間経ったのか

…明日のココユキ配信の時間は何時から？

『ま、まだ、コラボするって訳じゃ……』

ピコッ。

何度も消そうとしてたのにずっと忘れてた通知音。

ココネ：『あれっ、私も?』

カグラ：『私にも来てるわ。あつ、担当者からね』

ユイ：『うにゅ、コラボは強制……』

『あうあうあう……』

再び段ボールの中へと戻る。

しかし、それをココネが許してくれなかった。

ココネ：『ユキくんの初めては私がいただきました!』

『ちよ、ちよつと、言い方!?!』

【コメント】

：w

：w

：w

：草

：草

：おめ

ココネ：『ということ、ユキくとコラボ動画をすることが決定しました。日程はさすがに来週になるかな。どっちの枠ですかとかはまた相談して告知を出します』

『うう……、僕、お腹が痛くなってきたから休まない……』

ココネ：『担当者さんから「ユキくんの体調が治るように病院に連れて行って強制的に出演させます」とのことです』

【コメント】

：w

：w

：草

：w

：担当さん、ユキくんのことを良くわかってるw

：ユキくん、逃げる気でいて草

ココネ：『あつ、本当に体調不良だった場合は日が延びるからね。あと、事前にマシユマロで質問を募集しますのでどんどん投げてください』

『僕には投げなくて良いよ……』

ココネ：『ユキくんはまだマシユマロ解放してないでしょ』

ユイ：『うう……負けた』

カグラ：『と、突発コラボを狙えば……』

ココネ：『ふふふつ、やっぱり裏から手を回して置いて正解だった……』

『黒い。ココママが黒いよ……』

ココネ：『あつ、こらっ。段ボールに隠れたらダメって言ったでしょ』

【コメント】

：草草

：w

：黒いw

『みんな、配信には来なくて良いからね。僕との約束だよ？』

【コメント】

：はーい

：はーい

：はーい

：みんな返事だけすぐる

：今から楽しみ
：全裸待機しておく

『か、風邪ひくよ？ 服は着ようね。あと、みんな来る気でしょ？』

【コメント】

：もちろん

：当然

：服を着なかつたらユキくん心配してもらえるのか
：やめろ。その役は俺のものだ！

『うう……、こうなったらまたみんなに配信の練習付き合ってもらおうから……。し、失敗しても怒らないでね』

【コメント】

：はい

：はい

：代わりに担当が怒りそう

：がんばっ

『うう……た、担当さんも怒らないでね……』

ココネ：『はいはい、ユキくんにはあとで私たちからも説教しておきますね』

『えっ!?!』

カグラ：『まあ、ここまでぐだぐだな初配信も珍しいから仕方ないわね』

『えっえっ!?!』

ユイ：『うみゅー、この段ボールはユイがもらっておくからね』
『えっえっえっ!?!?』

ココネ：『では、本日の配信はここまでです。お疲れ様でした』
カグラ：『お疲れ様でした』

ユイ : 『うにゆ、お疲れなの』
『ぼ、僕の配信枠……、お、おつか——』

この放送は終了しました。

『《雪城ユキ初配信》初めまして、拾ってください《シロルーム三期生
／新人さん》』

2・6万人が視聴 0分前に配信済み

☒6,471 ☒67 ?共有 ≡?保存 :

チャンネル名: Yuki Room・雪城ユキ

チャンネル登録者数4・2万人

◇◇◇

【コメント】

:w

: 終わり方w

: 枠主が締めないw

: これは超大型新人の予感w

: 最後まで草だった

: 最後まで言えないユキくんw

第4話：新しい友達？

——終わった……。いや、終わってしまった……。

初配信だとしても今回のことは前代未聞だろう。一人だと何もできずにココネを頼ってしまった。罪悪感で一杯の僕は配信が終わったあとモニターの前で座ったまま、茫然としていた。すると、そのタイミングで通話がかかる。

マネ　：『お疲れ様です』

ココネ　：『お疲れ様でした』

カグラ　：『お疲れ様』

ユイ　　：『おつかれ』

それぞれみんなから労いの言葉をもらう。

その言葉が優しく、目から涙が浮かんでくる。

『お、お疲れ様です。みんな、本当にありがとう……』

震える声で返事をする。

マネ　：『ユキくんには色々と言うべきことがありますけど、とりあえず今日のところはよく頑張りました』

『うう……、ま、マネさん……』

マネ　：『動画配信のやり方についてはゆっくり学んでいきましょうね。今日みたいなトラブルがもうないように』

『は、はいっ。頑張ります……』

マネ　：『では、ユキくんの反省会はあとからしておきますが、とりあえず最高のスタートを切ることができました。チャンネル登録者数を見ましたか？』

ココネ　：『はい、やっぱり気になりますから』

カグラ：『当然ね』

ユイ：『まだなの……』

『ぼ、僕もそこまで余裕がなくて……』

マネ：『では、確認してきてください。それで全てわかると思いますが、すから』

担当さんに言われて、チャンネル登録者数を確認しに行く。

『えつと、……4. 1人？ あつ、増えて4. 2人に……』

ユイ：『私は2. 4万人だったの』

その数字はそれぞれが配信を終えたあとから更に跳ね上がっていた。

その理由は主に僕とのコラボにあっただろう。

チャンネル名：Yuki Room. 雪城ユキ

チャンネル登録者数4. 2万人

チャンネル名：kokane Room. 真心ココネ

チャンネル登録者数3. 0万人

チャンネル名：kagura Room. 神宮寺カグラ

チャンネル登録者数2. 1万人

チャンネル名：Yui Room. 羊沢ユイ

チャンネル登録者数2. 4万人

マネ：『ええ、ユキくんが飛び抜けているとはいえ、みなさん高いです。更にユキくんは初配信後の数字としてはシロルーム史上最高の数値になります。あと、ユキくんは意図的に「万」の文字から目を離さないでください』

『や、やっぱりそうですよね……。4. 2万人も……。どうして僕に？』

ココネ：『みんなユキくんに興味を持ってくれたんですよ。それにさっきの配信もトレンドに上がってましたからまだまだ増えていく

と思いますよ』

『ぼ、僕の痴態が広まっっていく……』

カグラ：『V t u b e r なんだから数字が全てよ。私だって2. 1 万人の数字を見たときは驚いたのよ。でも、これで三期生で一番少ないの……。見てなさい、絶対に追い越すから！』

『えっ、それで少ないってことはココママはやっぱり僕以上……？』

ココネ：『今のトップはユキくんですよ。私は3. 0 万人でした。多分ユキくんとコラボしたから、私のも比例して伸びたんでしょうね』

カグラ：『うう……。納得いかない。ユキ、必ず抜かすからね！』

『えっ、ぼ、僕はまだ自分のことで一杯一杯だから……』

マネ：『大丈夫です。あとユキくん、コラボはみんなとしてもらいますので、そのつもりで。ただ、今回のユキくんを見ていると最初は一番しつかりしてるココネさんかなって』

ユイ：『……ママだから』

ココネ：『ママじゃないですよ!?!』

ユイ：『でもトレンドにも上がってた。ココママ……』

『やっぱりトレンドに上がったのは僕じゃないんですね。よかった……』

ホツとため息を吐いていた。

しかし、ココネが無情にもそれを打ち砕いてくる。

ココネ：『違いますよ、ユキくん。私ので上がっていたのがそれになるだけで、ユキくのだと、【段ボール】とか【初配信事故】とか【拾ってください】とか【雪城ユキ】とかが上がってましたよ。特に【雪城ユキ】は国内2位まで跳ね上がってました』

『な、なんでそんなに上がってるの!?!』

ココネ：『当然ですよ、色々と前代未聞過ぎましたから』

ユイ：『うみゆ、やっぱりゆいともコラボを……』

マネ：『それはまた時期が来たらにしましょうね。二十四時間耐

久はさすがにまだユキくんの体が持ちませんから』

ユイ　：『お泊まりオフロボでもいいのに……』

『もつと体が持たないよ!』

マネ　：『そういうことです。反省点も多いですけど、成果としては十分すぎますので、この調子で頑張つていきましょう』

『わ、わかりました。頑張ります……』

マネ　：『それじゃあユキくん以外はお疲れ様。ユキくんは居残りね』

『えっ!?!』

マネ　：『反省会、しないかね?』

担当である舞の優しい声が聞こえてくる。

それがとても恐ろしいものに聞こえてしまう。

『お、お手柔らかに……』

それから僕が解放されたのは日が変わってからだった。

◇◇◇

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki | yukishiro
今

配信に来てくれた犬好きさんたち、本当にありがとうございます。初めてで色々失敗してすみませんでした。また次の配信もよろしく願います。

担当さんから解放された後、カタッターに今日のお礼を投稿していた。

ただ、そこで見たフォロワー数なのだが、とんでもないことになっていた。

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki|yukishiro
シロルーム所属。三期生。

3フォロー中 43, 025フォロー

——ご、五桁!? な、なんでこんなに!?

すごく驚いていたが、よく考えるとお気に入り登録数も4万を超えてるのだからおかしいことではない。トレンドも複数載っていたのだから……。

通知を消しているのでもそこまで影響はないが、投稿してすぐにとんでもない数のリプライがついていた。

そして、その中にココネたちもいた。

真心ココネ@シロルーム三期生 @kokone|magokoro
ro 今

返信先:@yuki|yukishiro
ユキくん、お疲れ様。コラボ、楽しみにしてるよ??

神宮寺カグラ@シロルーム三期生 @Kagura|Zingu
uzi 今

返信先:@yuki|yukishiro
私ほどではないけど頑張ったわね。

羊沢ユイ@シロルーム三期生 @Yui|Hitsuzisawa
a 今

返信先:@yuki|yukishiro
うみゅー、オフ会ー(??:☒?☒) ばんばん
????

「ははっ、ユイもまだ起きてるじゃん。あれだけ眠そうにしていたのに……」

——本当に良い仲間たちに巡り会えたな。これなら僕もV t u b e rとしてやっていけるかもしれない……。

そんな思いを抱きながら眠りにつく。

◇◇◇

翌日になり、いつものように大学へとやってきた。

その手には担当さんからもらった「犬でもできる動画配信」と書かれた資料。

しかも、ご丁寧に段ボールに隠れて震えているちびキャラユキくんが描かれている。

昨日の間に担当さんが準備してくれたもので、朝、印刷をして持ってきたのだ。

中には配信機器の設置方法から動画を配信する方法、更には動画配信中の注意点まで丁寧に書かれていた。

【動画配信中はチャット画面を開かないこと！】

と、大きく書かれているのがいかにも担当さんらしい。

ただ、あまりにも書かれている量が多いので覚えきれない。

むしろ読んでいたら眠たくなってくる。

昨日は日が変わるまでお説教を受けた上で、それからカタッターのリップを眺めていた。

その影響もあって三時間ほどしか眠っていなかった。

そんな状態も相まって、今の状態で資料を読むと眠気に負けてしまうのは必然でもあった。

「すう……」

慣れない配信疲れも相まって、結局講義が終わるまでずっと眠ってしまった。

◇◇◇

目が覚めると隣には知らない少女が座っていた。

花柄の白いパーカーと赤いスカート。

栗色の少し癖のある肩ほどの髪。

高校生？ いや、中学生と言われても納得しそうなほど小柄な少女がそこにいた。

そして、僕が持っていたはずの資料をなぜかその少女が持っていた。

「えっ、あれっ?」

「これって、君のだよな? ついつい気になって読ませてもらったよ。勝手にごめんね」

「それはいいんだけど、わかるの?」

「うーん、半分くらいかな? でも、君が雪城ユキのことが好きなのはよくわかったよ」

「えっ!?!」

ここで雪城ユキが拳がったことに驚きを隠しきれなかった。

「だって、この表紙のチビキャラって雪城ユキのアイコンでしょ?」

「あっ!?!」

そういえばすっかり忘れてた。

なぜかこの資料の表紙にはユキくんのチビキャラが描かれてるんだった。

「あははっ……、そ、そうだよ。ば、バレちゃったね……」

乾いた笑みを浮かべながらなんとか誤魔化す。すると、少女は嬉しそうに顔を近づけてくる。

「やっぱりそうなんだ。ユキくん、かわいいよね。私も好きだよ」
「そ、そうだよ。でも、まだ昨日初配信したところだよね？」
「うん。でもトレンド二位だったよね。しかもチャンネル登録者数も圧倒的でこのままだとシロルームトップになるんじゃないかな？」
「さ、さすがにそれは大変だよ。ほらっ、ずっとシロルームを支えてきた一期生を超えるなんて」

——今のシロルーム人気を作ったとも言える四人の一期生。

一期生の暴走機関車。

ピンクの長髪に星の髪飾り。黄色のワンピースを着たスタイルの良い女性。

頼まれてもいないのにてえてえいらすとを勝手に送りつけてくる、一期生トップの美空アカネ。

唯一美空の手綱を握れる、飼い主。

水色の肩くらいに切りそろえられた髪。魚を基調としたパーカーと白スカートの

スレンダーな女性。

シロルーム一の常識人にして、ツツコミ魔王。海星コウ。

クールな外見とミステリアスな雰囲気です女性人気を集めている。

白銀の髪に二本の角。筋肉質の体を持っている男性。

我が道を行く真緒ユキヤ。

チャラ男で軽い感じで話す色物粹。

金髪のとげとげとした髪に眩い服の前がはだけて、自身の体を見せつけている。

「ユージ草」でコメントの全てを覆い尽くす、野草ユージ。

——このときはまだ男女二人ずつのメンバーだったんだよね。僕も男のAvatarなら……。

少し遠い目を見ると勘違いした少女が力強く言ってくる。

「大丈夫だよ、ユキくんなら軽く超えてくれるよ！」

「そ、それよりもこの本に興味があるってことは君も動画配信を？」

このままユキくんの話題だと何かボロが出てしまいそうだったので、違う話を振る。

「結坂彩芽」
ゆいさかあやめ

「んっ？」

「私の名前だよ。そういうええ言っただけじゃなかったな」

「それもそうだね。えっと、僕は小幡祐季だよ」
こはたゆき

「小幡ちゃん……だね」

「ぼ、僕は男だよ？」

「えっ!? ご、ごめん、今の今まで勘違いしてた。うん、でも、そうだよね。こんなに可愛い子が女の子のほうにはずないもんね」

「僕としては可愛い子は女の子の方がいいなあ」

「うーん、私はどちらでもオツケーだよ。あつ、話題それちやったね。動画配信……、ちよつとだけならやったことあるよ」

「そっか……。僕も一回だけならあるんだよ……」

「なら、私たち動画初心者同士だね。よかったらまた動画の話とかしない? 友達に見てる人はいても配信となると少ししかいないんだよね」

「えっ、いいの?」

「もちろんだよ! あつ、小幡くんほどのチャンネルなの? お気に入り登録するよ」

「あつ、僕はね……」

スマホを操作して動画配信サイト、ミーチチューブを開く。そこに現れたのは雪城ユキのアカウントページ。今も増えゆくお気に入り登録者数は既に4・5万人に届いている。初配信の再生回数は六桁を超えている。トレンドから見に来てくれた人が登録してくれているのだろう。そして、アイコンの可愛らしい美少女、雪城ユキ。さすがにこれを自分のアカウントだと言えるはずもなく、それを見た瞬間にサツとサイトを閉じていた。

目の前にはにっこり微笑む結坂。

ユキくんが好き、と言っていた彼女に見せられる画面ではない。

「どうしたの?」

「そ、その、さ、サイトに入るパスワード、忘れちゃって……。ま、また今度でいいかな?」

「うん、全然いいよ。まあ、あまり使っていないとそうなっちゃうよね」「ど、動画を見るだけならするんだけどね……」

乾いた笑みを浮かべながら何か対策を考えないといけないな、と頭を悩ませる。

それで初心者なら初心者らしくユキくん以外のアカウントを作ればいいのでは? という考えに至っていた。

「そっか……。それなら仕方ないか……。また教えてね。それじゃあ私はそろそろ帰るよ。この資料、ありがとう」

結坂が資料を返してくる。

それを受け取ると手を振りながら講義室から出て行った。

後に残された僕は初めてできたりアルの友達に感慨深さを感じていた。

——これもV t u b e rを始めたおかげかな。

家に帰るとすぐさま担当の舞にチャットを送っていた。

ユキ :「マネさん、僕ってM e e T u b eのアカウント、複数持つことってできるのですか?」

マネ :「動画視聴用のアカウントでしたら一応大丈夫ですよ。ただ、配信はしないで下さい」

ユキ :「や、やっぱりダメなんですね、配信は」

マネ :「そうですね。シロルームでは原則配信は公式アカウントのみでしてもらうことになっています。一応契約書にも書かれていますよ。騒ぎが起こったら大変ですからね」

企業所属のライバーが外でトラブルを起こしてしまうと企業としての評判が下がってしまう。企業としては当然だろう。

マネ :「あっ、もし以前使っていたアカウントがあるのでしたら配信動画は残しておいてもらっても良いですよ。でも、新しく配信するのだけはやめてくださいね」

ユキ :「わ、わかりました」

マネ :「……何かあったのですか?」

ユキ :「いえ、友達が僕のチャンネルを聞いてきましたので、別で作れるならって思いました」

マネ :「ユキくんは友達が!? 信じられないです……」

ユキ :「ど、どういうことですか!? 僕にだって友達くらい。……いえ、きつかけはマネさんの資料でしたけど」

マネ :「ユキくんがきつかけでしたか。それなら納得ですね」

ユキ :「うう……、わかりました。その子には何か別の対策を考えてみます」

マネ :「それがいいですね。それにユキくんは事情が事情なだけに、下手に正体がばれてしまうと大炎上しますよ。気をつけましょう」

ね」

ユキ …「お、恐ろしいことを言わないでくださいよ……」

マネ …「ふふっ、では今日から配信頑張って行きましようね」

ユキ …「うう……お腹が痛くなって……」

マネ …「病院の予約をしておきましようか？ 終わるタイミング

に」

ユキ …「結局配信は強制なんですね……」

どうやつても配信させようとしてくるので、ため息を吐きながら配信の準備をするのだった。

第5話：反省会配信

『《#犬拾いました》昨日の反省。雑談枠 《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

1. 2万人が待機中 20XX/05/06 20:00に公開予定

☒274 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

時間は20時5分前。

すでにかんりの待機者がいるので、思わず緊張で体が強張ってしま
う。

——何かやり忘れたことはないかな？

意味もなくカタッターを開き、しつかり予告配信を投稿できている
か確認していた。

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki | yukishiro
4時間前

本日、20時からライブ配信します。わふー #犬拾いました
@247 ?3, 571 ♡1, 472

とんでもない数の反応があり、すでに追い切れていない。
そして、ライブの方もまだ段ボールしか出ていないのに、コメント
欄が盛り上がりを見せていた。

【コメント】

：待機

：わふー

：今日は一人なのか？

：間に合った

：待機

：今日こそ拾う

：今日も段ボールか

：でも、文字が違うな

：『反省中』 W W W W W

： W W W W W

：草

担当さんが新しく用意した段ボール。そこには『反省中』の言葉が書かれていた。

きつとユキくんなら使えると思いますよ、といわれながら渡されたそれを早速使ってみたら、かなり盛り上がってくれている。

自分で準備できると大きいんだけど、こればかりは仕方ないので担当さんをお願いしている。

しかも今は配信前に流れるミニアニメのようなものを準備してくれているようだった。

シロルームでは三万人を超えたら、その記念配信としてミニアニメを公開することになっている。

と言いつつ、初配信と同時に準備を初めているのだが、僕の場合は予想を超える伸びをしていたのでそれが全然間に合わないらしい。

もう十万人記念配信時にお披露目する3Dアバターも準備を始めてるといつていた。そっちは気が早いとも思うが、担当さんは今度は間に合わないなんてことにはしません！ と息まいていた。

だからこそ、今回の段ボール文字替えはあくまでも応急手段。しかし、それだけのことで盛り上がってくれている。

ただ、盛り上がれば盛り上がるほど、僕の緊張感が高まっていく。

——うう……、やっぱり二回目でも慣れないな……。

何を話すか、一応メモ帳^{カンベ}はあるものの話し始めたらそれもあまり意味をなさない。

しつかりとその都度対応する必要があるわけだ。

大きいため息を吐いて、精神を落ち着ける。

すると、そのタイミングでコメント欄にスパナのマークが見える。

【コメント】

真心ココネ : ユキくん、頑張つてー

神宮寺カグラ : 私が来てやったぞ

羊沢ユイ : うにゅー、眠い

: 三期生勢揃いw

: またコラボあるか?w

三期生全員が応援に来てくれている。

彼女たちもこのあと自分の配信を控えているはずなのに。

小さく微笑むと覚悟を決めて配信をスタートさせる。

『わ、わふう……、こんばんは。ゆ、雪城ユキです。き、今日もひ、拾いにきてくれてありがとう……』

ゆつくり顔を上げて、辛うじて耳が見えるくらいで挨拶をする。挨拶の仕方も担当さんと考えて作り出した。

【コメント】

: わふー

: わふー

: わふー

真心ココネ : わふー

: わふう

：また隠れてる w w w

：俺が拾う！

：待て、俺が先だ！

：可愛すぎる

開始と同時に流れるようにコメントの速度が上がる。

それを見つつ、顔だけを段ボールから出していた。

『えとえと、今日はその……あの……、昨日の配信について反省会をしたいと……、ううん、したくはないけど、その……、担当さんがやれっと言うから、仕方なく、嫌々、やりたいと思います……』

それを言い終わるとサツと段ボールの中に隠れる。

【コメント】

：ユキくん、見えたと思ったら隠れた w

：本当に嫌そう w

：わふー

：昨日は伝説を作ったもんね w w

：w w w w

：草しか生えない

『と、とにかく昨日は何がダメだったのか、皆さんからもコメントを書いてもらえませんか？ ぼ、僕としては頑張ったの……ですけど』

もう一度ゆっくりと顔を出す。

流石に配信中は緊張からか体が小刻みに震える。

【コメント】

：何が……っていか全部？

：全てが伝説だったのでよかったよ

：一つになんて絞れないよー
：今日はチャットが見えないね

『ふふっ、今日はちゃんと消しておいたよ』

自信たつぷりに答える。

すると、そのタイミングで通知音になる。

ピコッ！

『ああ!? 通知音を消し忘れてる?!?!?』

【コメント】

：w w w w

：早速一つ

：誰からー？

：俺のことか

：なんだ、俺のことか

：おまえらw w w

羊沢ユイ　：読んでー！

『え、えっと、ちよつと待ってね。あれっ？ ユイからだ。読んだら良いんだね？ なになに、「ユキくんの今日のパンツは……」って、わわっ、な、何言わせようとするの、ユイ……』

顔を真っ赤にして、段ボールへと隠れる。

【コメント】

：ユイちゃん、G J

：かわいい

：惜しい

羊沢ユイ : b

『はあ……、はあ……、と、とりあえず通知音は消したからね。もう邪魔はできないよ』

ユイならばこの後、何度かやってきてもおかしくない。
そう考えて先に手を打っておく。

『そ、それじゃあ、僕から反省点を言うね』

一応自分なりにまとめた反省点。それが書かれたメモ帳を表示する。

ただ、キヤスコードを消すことばかり意識していて、メモ帳が表示されたままになっていることには全然気づいていなかった。

【コメント】

:カンペだ

:カンペ見えてるよ

:せんせー、ユキくんがズルしてますー

:ココママー、ユキくんがズルしてるよー

真心ココネ : ママじゃないです

『わわっ、ど、どうしてわかるの!?!』

驚きの声をあげてしまう。

【コメント】

: 見えてる

: w

: 積極的に反省点を増やすスタイルw

『あつ……』

慌ててメモ帳の表示を消す。

この消す動作はミスをしすぎてだいぶ慣れてきた。

『と、とにかく僕なりにダメだった部分をまとめてきたから読み上げるね。えつとまずは「プロフィールを準備してなかったこと」かな』

担当さんが大急ぎで準備してくれたやつで、そのおかげでなんとかなったが、からかわれるネタにもなってしまった。

【コメント】

…えつ!?!w

…あれ、ユキくんが準備したやつじゃないんだw

…どおりでわふう、なんてセリフがあったのかw

…担当さんのコメントがあつたもんね

『し、仕方ないよ。ぼ、僕、配信なんてするの初めてで、いきなりライブでしかもトリだなんて……、うう……』

今考えても涙が出てきてしまう。

他の人だつたらもつと上手くまとめられたんじゃないかって考えずにはいられなかった。

『でもでも、あれはココママやユイも悪いんだからね!! 二人が完璧な放送をするから……』

【コメント】

神宮寺カグラ …あれつ、私は？

：ポンコツはポンコツを知るw

：www

：人のせいにw

『でも、他に問題はないよね？ ぼ、僕なりにには頑張ったし……』

【コメント】

：はあ？

：はあ？

：問題しかないんだが？

真心ココネ　：ユキくん、正座（ニコツ

ココネから怖いコメントがくる。これは素直に聞いておくべきだろう。

『は、はい、ココママ……』

その場で正座をする。ただ、やり慣れてないせいですぐに足がピリピリと痛み出す。

『うううう……ま、まだしないとダメ……？』

【コメント】

真心ココネ　：放送終了までね

：鬼だ

：悪魔だ

羊沢ユイ　：延長は？

：羊の悪魔もいる

実際にしているところは見えないのだから無理にする必要はない

のではないか、と思うけどなぜか素直に正座し続ける。

『あうう……、ぐ、ごめんなさい。もう……むり……』

パタツ。

慣れない正座に足が限界になり、そのまま倒れてしまう。そして、痺れてまともに動けなかった。ただ、倒れた状態でも喋ることは続けていく。

『あうう……、いたたたつ。え、えつと、他にすること……、あつ、そうだ。もう一つ、なんか僕のチャンネルにバグが発生してチャンネル登録者数がおかしいことになってるので、運営さんに連絡しないと……』

【コメント】

：ユキくんの脳内がバグw

：www

：チャンネル登録者数が多いから疑うw

真心ココネ　：そういえばユキくん、もう収益化申請できるんじゃないの？

『しゅう……えきか？』

ココネのコメントを見た瞬間に動きが固まってしまう。

Me e Tubeではある一定の条件を満たすと動画の収益化が可能となる。

その条件は動画の総再生時間が4,000時間とチャンネル登録者数が1,000人以上。

一つ目の動画総再生時間は一つ目の動画で悠にクリアしている。延長された結果、一時間の動画が既に十万再生を超えている。チャンネル登録者ももうじき五万人超えそうだ。

『そ、そういうえげつなげな……かも?』

条件はすでに達成している。あとは申し込むだけ。

【コメント】

：スパチャの用意しないと

：収益化、興味なさそうw

真心ココネ　：収益化通ったら記念配信だね

『え、っ!?!』

——記念配信?　何の記念?　罰ゲーム?

コメントに頭が全く追いつかない。

そこにさらに追い討ちをかけることを言われる。

【コメント】

：配信一回で記念配信にたどり着く犬。いや段ボールw

：記念配信楽しみ

羊沢ユイ　：うみゆー、3万人記念配信……。5万人記念配信も

……

『ちよ、ちよと待って。そんなにたくさん記念配信なんてできないよ?　だ、だからお気に入り登録者は増えなくて良いよ。増えなくていいんだからねっ!?!』

【コメント】

：あつ、加速したw

：w w w

：5万人超えたよw

：3万人記念と収益化記念と5万人記念配信楽しみw

『あう……、な、何で増えるの？ バグなの？ そ、そうだよね。それ
にこう何度も記念配信をする必要はない……よね？』

【コメント】

：チャンネル登録者数は嘘つかないよ？w

：バグを疑わない犬w

真心ココネ : 担当さんから「記念配信はしてください」だって

：担当きたw

：記念配信決定おめ！

『ううう、わ、わかりました。内容、考えます……』

——記念ということもあって、いつもの放送だとダメだろう。ただ
いつも、と言えるほど配信もしていないのでそれほど気にしないでい
いだろうか？

【コメント】

：配信オメw

：草

：筋トレ枠は？w

神宮寺カグラ : 私もすぐに追いついてみせるわ

：カグラ様草

：カグラ様草

真心ココネ : 私とのコラボが記念枠でも良いかもね。一緒にお祝
いしましょう？

『うう、そ、それも合わせて考えるよ……』

【コメント】

羊沢ユイ　：うにゆ、オフコラボ……

真心ココネ　：それもいいね

『え?!? お、オフ!?!?』

流石に直接会ってしまおうと性別がバレてしまおう。それだけは何としても防がないと、待っているのは大炎上なのだから。

『と、とりあえず収益化の申請はしておくよ……。あとオフはなしで……。そ、それとで、できたらコラボもなしにしたいな……。』

【コメント】

真心ココネ　：ユキくんとのコラボは10日の20時から私の枠でやりますよ。皆さん、来てくださいね

：ユキくん、まだ抵抗してるw

：強制されてて草

：www

『うううう、わ、わかったよ。男は度胸、女は愛嬌っていうもんね。度胸で乗りきるよ』

何気なく言った言葉でコメント欄がざわつきだす。

【コメント】

：ユキくん、それ違うw

：それだとユキくんが男にww

：wwww

：ユキくんは愛嬌

：度胸もユキくんには大事じゃない？

：でもユキくんは女の子だ？

『あうあう……、そ、それはその……、ぼ、僕はその……もちろん男ではない……ですよ？』

自分のミスに気づいて、大慌てで訂正をする。

【コメント】

：なぜ疑問w

：ユキくん、またテンパってる

：ママの出番だよ

真心ココネ　：ママじゃないですよ

羊沢ユイ　：こんなに可愛い子が男の子のはずがない

神宮寺カグラ　：……どうせいつものテンパってるだけよ。深く考えるだけ無駄よ

：→知ってた

：カグラ様がフォローしてて草

：ユキくん可愛いよ

『えっ、あっ、ありがとうございます？　で、でも、僕は可愛くはないですよ？　僕よりココママやユイやカグラさんの方が可愛いですし』

カグラに助け舟を出してもらった僕は心の中でお礼を言いながら、これ幸いにと全力でのっかる。

【コメント】

：可愛いw

：ユキくんは可愛さと愛嬌でできてるよ

：ありえない男疑惑に草

：ユキくんのことを一番わかっているのは実はカグラ様なのか
神宮寺カグラ　：当然のことよ
：ポンコツ同士、息が合うんだろうね
：反省会で反省点を増やすの草

『うう……、ごめんなさい。僕、どうしても人見知りで、テンパってしまうと何話して良いかわからなくなってしまつて……』

【コメント】

：ええんやでw
：ちゃんと謝れてえらいね
：なんだ、俺か
：俺だな
：同志よ
：→お前たち人見知りすぎ。俺もだが
：大丈夫、俺たちはユキくんのことを信じてるよ
羊沢ユイ　：パンツの色は？

『うっ、ぐすっ……、み、みんなありがとう。えっと、パンツの色はく……。っ?!?!? ゆ、ユイ、何言わせようとしてるの!?!?』

【コメント】

：惜しいw
：惜しいw
：く……、黒か!?!?
羊沢ユイ　：ぶいつ
：まさかここまで狙ってたのかw
：草
真心ココネ　：こらっ、ユイ。人前でそんなこと聞いたらダメ!
神宮寺カグラ　：ユキも女の子はそんなこと言ったらダメよ!

『はあ……はあ……、わ、わかったよ……。これは次の反省点として書いておくね。か、書き切れるかな……。新しいノート買わないと……』

【コメント】

- ：既に一冊使い切ってて草
- ：前日も今回も暴走してるもんね
- ：時間がw

『えっ、あつ、本当だ!? い、犬好きの皆さん、今日もありがとうございます——』

この放送は終了しました。

『＃犬拾いました』昨日の反省。雑談枠 《雪城ユキ／シロルーム三期生》

- 2. 4万人が視聴 0分前に公開済み
- ☒ 8,734 ☒ 14 ?共有 ≡?保存 :
- チャンネル名: Yuki Room. 雪城ユキ
- チャンネル登録者数5.3万人

◇◇◇

【コメント】

- ：途切れてて草
- ：w
- ：w
- ：最後の最後まで反省点を増やしていく犬
- ：→段ボールだろ！

第6話：友達の友達は知り合い？

——うう……、やってしまった……。

気を抜いていたわけじゃないけど、予想外だった。男だとバレてしまおうと大炎上。

それが怖くてカタッターとかも見る事ができない。

「あつ、そうだ。スマホの通知音、つけておかないと。……あつ!？」

音を消していたから気づかなかったが、既にいくつかのチャットが届いていた。

記念配信のこともそうだったが、他にもいくつか来ている。

ココネ：「ユキくん、お疲れ様。今日もハラハラしたね」

ユイ：「ユキくんのパンツの色は黒」

カグラ：「まあ、一人では頑張ってたんじゃないかしら？」

マネ：「あとからじっくり反省会をしましょうね」

「うぐっ……」

今日もまた反省会が確定してしまったようだ。

そのチャットを見て思わずうなだれてしまう。

確かに自分の性別は特秘事項だ。

ちよつとしたことでもバレないようにすることは必須だった。

だからこそ、素直に頷く。

ユキ：「お、お手柔らかにお願いします……」



【シロルーム3期生】雑談スレPart3【拾ってください】

22：名無しのシロ三期推し

昨日の配信見たか？ ユキくん男疑惑

23：名無しのシロ三期推し

◇ 22

何言ってるんだ？ あんな可愛い声の子が男のはずないだろう？

24：名無しのシロ三期推し

それは確かにな。むしろわざと疑惑になるようにした気もするな

25：名無しのシロ三期推し

◇ 22

普通にキャラ付けだろうな。

26：名無しのシロ三期推し

◇ 23

◇ 25

そうだよな。確か三期性は女性限定の募集だったもんな。

27：名無しのシロ三期推し

まず面接で落とされるやつ

28：名無しのシロ三期推し

そういえばそうだったな

29：名無しのシロ三期推し

みんなユキくん盛り上がりすぎw

30：名無しのシロ三期推し

それよりお前ら、来週はついにユキくんの初めてだぞ

31：名無しのシロ三期推し

◇ 30

言い方w

31：名無しのシロ三期推し

◇ 30

w w w

32：名無しのシロ三期推し

おいつ、お前ら。この時間にゲリラコラボが始まったぞ!!

33：名無しのシロ三期推し

◇◇◇
32

コラボ!? まだココユキのコラボしか決まっていなかったんじゃないのか!?

34：名無しのシロ三期推し

◇◇◇
32

しかもタイトルが『戦争勃発』!? 一触即発の雰囲気じゃないか!?

35：名無しのシロ三期推し

見に行ってくる

◇◇◇

二回目の配信でも説教を受けてしまったので、睡眠不足だった。まだ若くて徹夜もできる、とは言われるけど、そんなことはない。眠いものは眠いのだから。

大学の講義中に机に頬を付けて眠っていた。

しかし、さんさんと照りつけてくる太陽に向けて目を少し開けて咳く。

「日がまぶしい……。太陽、墜ちないかな……」

「何恐ろしいことを言ってるの?」

ゆっくり見上げるといつの間にか隣には結坂ゆいさかがのぞき込むように見えてきた。

それに驚くほどの元気もなく、顔だけそちらを向ける。

「結坂さん……。ごめんね、僕、ちょっと眠たくて……」

「何かしてたの? あっ、もしかして動画かな? 新しく配信したの?」

「えっと、うん……。したことはしたんだけど……」

「そっか……、もしかして視聴者とかお気に入り登録者数が気になつて寝られなかったのかな？ 私もそんな経験あるなあ……」

「あつ、えつと……」

——そういえば昨日の視聴者数は結局見ていなかった。配信前に既に数千人いたことだけはわかっているけど……。

「そ、そうだよね。う、うん、普通はそう……だよね？」

むしろ僕としては一人でも少ない方がいい、と思っっている。

こんなことを担当の舞に言ってしまうとまたお説教が始まるので口には出さないけど。

「うんうん、わかるよ。私もそうだったもん。ずっと張り付いていて、全然伸びないなあってカタッターで呟いたり……、あつ、そうだよ。かったら小幡くん、MINE交換しない？」

「えつと、僕その……入れてなくて……」

「あつ、それじゃあ今入れてよ。私、第一号になるから——」

「う、うん、わかったよ」

結坂に急かさされるがままMINEを入れる。

そして、結坂に教えてもらいながら彼女の連絡先を入れると嬉しそうな笑みを浮かべてきた。

「やった、小幡くんの初めてをもらっちゃった」

「ちよ、ちよつと、言い方!？」

「あははっ、今流行の言い方だよね。それじゃあ今夜にでも連絡入れるよ。それより、私そろそろ帰るね。小幡くんはどうするの?..」

「えつと、講義は?..」

「もうとっくに終わってるよ。小幡くんが寝てる間にね」

どうやら休憩だと思っていたが、すでに終わっていたようだった。

「それじゃあ僕も帰ろうかな」

今日の配信もどうするか考えないとだもんね。

「確か小幡くんも駅の方角だよな？ それなら途中まで一緒に帰ろ
！」

「えつと、い、いいけど……」

「よし、それじゃあ、ゴーゴー！」

結坂に手を掴まれて大学を後にしていた。

◇◇◇

「小幡くんってこのあと、何するの？ 私、駅前のカラオケ店で友達と
会っただけど、一緒にどうかな？」

駅に向かっていている途中で結坂が悪魔のような提案をしてくる。

今でも一杯一杯になっているのに、結坂の友達が加わると話なんて
できる自信がなかった。だからすぐに首を横に振っていた。

「そ、その……、ぼ、僕はこれから帰って配信の準備をしないとだし
……」

「そっか……。残念だなあ。その子もきつと小幡くんのことを気に入
ると思ったのに……」

本当に残念そうにする結坂。

もっと押してこられると思ったので、ホツとため息を吐く。

そして、カラオケ店の前に行く。

そこには一人の女性がスマホを触りながら誰かを待っていた。長い癖がかった茶髪。僕よりも十センチ以上高くスタイルの良い女性だった。

白のシャツワンピースとベージュのワイドパンツというお洒落な着こなしをしている女性で僕としては近寄り^{ほつち}がたい存在でもあった。どうやら、その女性が結坂の友達のようなだった。

「待った？」

「ううん、今来たところ。それよりもそつちの子は？」

「同じ大学の友達。小幡くん、この人は大代^{おおしろ}こよりさん。私たちより一歳年上の大学三回生で、配信もしてる人なの。私もいろいろと教えてもらってるんだ」

「あつ……、そ、そうなんだ……」

「ねえねえ、小幡くんも一緒にコラボ配信、なんてどうかな？」

結坂が笑みを見せながら言うが、大代は少し難色を示していた。

「ほらっ、今日はもうカタッターで予告してるでしょ？ それに私の粹だから——」

「あつ、そつか……」

「ぼ、僕はか、帰りますね。よ、用事もあるから……」

僕からすれば女性^{ゆいさか}たちは眩い。

直接視界に入れてしまつては目がやられてしまう。それから身を守るため、逃げるように去る。

「あつ、またね。小幡くん」

「う、うん、また……」

軽くお辞儀だけして走っていった。



カラオケ部屋へと案内された後、結坂はドリンクバーでジュースを取ると、残念そうに言う。

「……逃げられちゃった」

「全く……相変わらずね、ユイ。いえ、今は彩芽あやめだったわね」

「うん、間違えたらダメだよ。こより」

「二人しかいないからつい……ね。でも、可愛い子だったね。配信してる子……なんだよね？ 私は知らないけど」

「そうみたい。多分ユキくんを見て、配信しようと思ったんだろうね。わざわざユキくんのロゴを印刷したブックカバーを使ってるくらいだし」

「そっか……、でもそれなら尚更ダメでしょ。もし私たちがココネとユイってバレてしまうと騒ぎになってたよ」

「えーっ、きつとコラボしたら楽しいのに……」

結坂は深く考えずに楽しそうかどうかで決めるところがある。

今日も初めてのオフコラボをすと言うからこうやって待ち合わせたのに、友達連れで来ていたわけだから。

「でも、あの怯え方……。本当のユキくんってことはないよね？」

「あははっ、ないない。だって小幡くんは男の子だよ？」

結坂があっさりと否定する。その言葉を聞いて、こよりは目を見開いて驚く。

「えっ!? う、嘘でしょ？ どう見ても女の子だったよ？ それも中学生か高校生くらい……。女性ものの服とか似合いそうだし、着せ替えとかしてあげたいな……」

「むう……、もしかしてこより、私のことも中学生くらいに思っていない

？」

ジト目を向ける結坂に対して、こよりは乾いた笑みを浮かべていた。

「あ、あはははっ、な、なんのことかなー？」

「わかった、これはもう戦争だよ！ そんなメロンを抱えてるママには負けないの！」

結坂は胸を見比べて、こよりのことを涙目で睨む。

「カラオケの採点で勝負だね。負けないよ」

「私が勝ったらユキくんとの初コラボの座はいただくよ」

ビシッと指を突きつける結坂。

こよりはそれに動じることなく返事をする。

「歌で私に勝てると思ってるの？ 返り討ちにしてあげるよ」

「歌唱力の違いが、採点の決定的差ではないことを教えてやるの！」



真心ここね@シロルーム三期生 @kokone | magok

oro 5分前

16時から羊沢ユイちゃんとカラオケゲリラオフをはっじめーる

よー??

#生マ #ココユイ

@9 ?74 ♡15

電車に乗っている時にその眩きを発見した。

どうやらココネとユイがコラボするようだった。それもオフ会で。

——あの二人ってそんなに仲が良かったんだ……。も、もしかして、そのうち僕もオフでコラボしろ……。なんて言ってこないよね？

少し嫌な予感を感じたものの、今回は関係ないので二人の応援をしておく。

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki|yukishiro
今

返信先:@kokone|magokoro
わふー、2人ともがんばれー(・ω・)

打ち間違えて、顔文字がすごく真顔だったが、これも僕らしい、と納得することにした。

そのままスマホを消そうとすると僕のリップに更にリップがつく。

羊沢ユイ@シロルーム三期生 @Yui|Hitsuzisawa
a 今

うにゅー、ユキくんも来る？ 一緒にオフしようなの(??☒?)☒(????)

ばんばん
雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki|yukishiro
今

ぼ、僕はまだ外で……。それにオフはちよつとムリ……

真心ここね@シロルーム三期生 @kokone|magokoro
oro 今

そこ、さりげなくユキくんの初めてを奪おうとしないでください。私のものですよ！

羊沢ユイ@シロルーム三期生 @Yui|Hitsuzisawa
a 今

うみゅー、今日の賭けはそれなの。ユキくん、覚悟してなの。ゆいがユキくんの初めてをもらうの(??☒?)☒(????)

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki | yukishiro
今

ちよ、ちよつと、言い方!? と、とにかく僕も見に行くから変なこと
とはしないでね

それだけ言うとか家に帰ってすぐに部屋へと向かい、チャンネルへと
飛んでいた。

◇◇◇

『戦争勃発』ユキくんの初めて争奪カラオケゲリラオフ《真心ココネ
／羊沢ユイ／シロルーム三期生》』

3, 578人が待機中 20XX／05／07 16:00に公開
予定

☒174 ☒2 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：待機

：タイトルw

：不穏だねw

：w

：わくわく

：待機

——あつ、なんだ、カラオケか。もつと殺伐としたことをするのか
と不安になったけど、案外平和的で良かった。

雪城ユキ : つてなんで僕が景品になってるの!?

：景品いて草

：ユキくんだw

：ユキくんは参加しないの？

：あとカグラ様がいれば三期生全員集合か

：カグラ様は争奪しないの？

神宮寺カグラ　：私は奪い取る側よ。

：ユキくん争奪戦だw

雪城ユキ　：そ、それなら僕も勝負する側に……

：ユキくん参戦しましたw

つつい書き込んでしまったら、コメント欄で更に盛り上がりを見せてしまう。

そして、その盛り上がりそのまま配信がスタートされる。

ココネ：『ココフレのみんなー、ここにちはー。真心ココネですよー』

【コメント】

：ココママー

：ココママー

：ココママー

：ココママー

雪城ユキ　：ココママー

：ココママー

：ココママー

ココネ：『ママじゃないですよー。あと景品ユキくんも来てたんですね』

——なんだろう。すごく身の危険を感じたんだけど。

思わず背筋が凍り付くような気がした。

でも、それを気にすることなく、ココネは話を続ける。

ココネ：『では、今日のコラボ相手に来てもらいますね。白いもこもこの下には黒い闇が埋まつてる。羊沢ユイちゃんですー』

ユイ : 『うみゆ、うるさいの……』

相変わらず眠そうな声を出しながらユイは登場する。
ただ挨拶じゃなくて、迷惑そうにココネに対して言っていた。

【コメント】

: うみゆー

: うみゆー

: うみゆー

雪城ユキ : ユイ、寝てた？

ユイ : 『うみゆー、待っててなの、ユキくん。ゆいが魔の手から救って上げるの』

ココネ : 『だ、誰が魔の手ですか!? で、では、今日の動画の説明をさせていただけます。今日はユイちゃんと二人でカラオケ店へ来ております』

ユイ : 『うにゆ、うるさくて眠れないの』

ココネ : 『ね、寝ないでください!』

【コメント】

: 相変わらずの天然 w

: ココママの方がロリなのに w

: w w w

雪城ユキ : このまま引き分けてコラボなしにならないかな？

: ユキくん草

: ユキくんが逃げようとしてる w

ココネ : 『ゆ、ユキくんも逃げないでください！ 十日のコラボはもう決まっていますからね!』

ユイ : 『うみゆ、その前にゆいとのコラボを入れてやるの……』

【コメント】

雪城ユキ : えっ、ユイが勝ったらコラボ増えるの？ こ、ココマ
マ頑張れ……

神宮寺カグラ : 私が代わりに奪おう

: ユキくん草

: カグラ様もw

: 二人ともwww

ココネ: 『ふふふっ、ユキくんの応援があつたら私は負けませんよ』
ユイ : 『うみゅー、裏切られたの……』

第7話：大戦争!? ユキくん争奪カラオケ対決ゲリラ
オフ

ココネ：『それじゃあ、まずはマシユマロを答えていくよー』

ユイ：『うみゆー、おまかせするのー。終わったら起こしてなのー』

ココネ：『ちよ、ちよつと、待ってください！ ほらっ、私が答えるのですから、ユイちゃんが読んでください』

ユイ：『面倒なのー……』

ユイは本当に面倒そうな声を出していた。それをココネは呆れた様子で見っていた。

ココネ：『いいから早く！ そうじゃないと本当に今日の対決は引き分けてカグラさんが初コラボということになりますよー！』

【コメント】

：草

：w

：w

：ユイちゃんは相変わらずだったw

神宮寺カグラ：ガタツ

カグラ様が反応してるw

雪城ユキ：ぼ、僕がコラボしない道も……

ユイ：『うにゆー、それは絶対にダメなのー。仕方ないから読むの。』
「ココママは誰のママなのですか？ 僕のママになってももらえませんか？」。
うん、どうぞなの』

ココネ：『か、勝手にあげないでください！ 私は誰のママでもないですよ。ただ、誰かのママになりたいとしたら……ユキく——』

ユイ : 『次の質問は「ココママは何歳なのですか?」。えっと、二十歳なの。』

ココネ : 『勝手に答えないでくださいー! それに私がユキくんのおママって言うところも割って入らないでくださいー!』

【コメント】

: w

: w

: 草

: ココママ、二十歳なんだ

: 一応公式設定にも載ってたな

: ユイちゃんにいいように手玉に取られるココママ

雪城ユキ : ココママは僕のママだよ

ココネ : 『ゆ、ユキくん……』

ユイ : 『うにゆ、いい加減ママということを確認するの。さて、それじゃあ次行くの。「ココママがえてえすぎて——」、うん、これは違うね』

ココネ : 『ちよ、ちよつと、勝手に省かないでくださいよ!? わ、私が見えますよ。なになに、「ココママがえてえすぎて、夜もご飯三杯しか喉に通りません。ところで今日のパンツの色は何ですか?」って、何言わせようとしているのですか!?!』

ユイ : 『うにゆ、だから省いたのに……。ちなみにゆいの今日のパンツは——』

ココネ : 『言っちゃダメー!!』

ココネの大声が響き渡る。

【コメント】

: ママ叫ぶ w

: 惜しかった w

：ユイちゃん策士w
：食べすぎw

ココネ：『はあ……、はあ……、そ、それじゃあそろそろ歌の方へ行きましようか？ 私の本領発揮ですね』

ユイ：『うにゆ、店員さん、そろそろお会計を——』

ココネ：『だ、ダメですよ!? まだ入って一時間も経ってないんですから』

ユイ：『うみゆ、もうゆいの勝ちでいいから終わるの……』

ココネ：『なんで歌わずに負けを認めるのですか!? こうなったら圧倒的差で勝っちゃうからね』

ユイ：『うにゆ、胸の差が勝敗の決定的差だと言うことを教えてあげるの』

ココネ：『な、なんの勝負なのですか!?』

【コメント】

：草

：w

：ココママはママだけど、ロリだもんな

神宮寺カグラ：胸の差なら私が圧倒的だな

：圧倒的絶壁w

神宮寺カグラ：そ、そんなことあるはずないわよ!?

カグラが適当にコメント欄で弄られ始めたタイミングで、音楽が聞こえてくる。
テレビでよく流れている音楽。

——誰が歌ってたんだったかな？

ここ最近動画配信くらいしか見ていなかったので、誰が歌っていたのかわからなくなる。

ただ、その曲を歌っているココネの声はとても綺麗で、思わずコメントを書くのをわすれてしまう。

ココネ：『〜♪』

ユイ：『うにゅ、うまいの……』

ココネが歌い終わるとユイが悔しそうに口を噛み締めていた。

【コメント】

：○○○○○○

：○○○○○○

：○○○○○○

：○○○○○○

雪城ユキ：○○○○○○

：○○○○○○

神宮寺カグラ：○○○○○○

美空アカネ：○○○○○○

：一期生筆頭が見にきてて草

：暴走特急だ！

ココネ：『えっ、あ、アカネ先輩!? スパナつけますね』

ユイ：『うにゅー、おひさー』

ココネ：『こらっ、ユイ。なんてことを言ってるの!?!』

【コメント】

美空アカネ：いいよいいよ、そのくらい。それよりどこ？

：いきなり場所を聞くw

：相変わらずの暴走特急w

ココネ：『えっと、場所を教えるもいいですけど、放送は終わってま

すよ、来られる頃には』

【コメント】

美空アカネ　：なーんだ、じゃあやめとくよ。あと、ユキくん。三万人突破記念イラスト出来てるから使つてね。エチエチに描いたからね

：ユキくんのえっち画像!?

：ちよつと待て。バンされるぞ!?

：その前に見ないと!

雪城ユキ　：ちよ、ちよつと待ってください。僕、そんなこと聞いてないですよ!?

美空アカネ　：うん、今言つたからね。じゃあねー

とんでもないことを言い残した後、美空は姿を眩ませていた。そして、すぐにチャットの通知が鳴る。

——あ、あれっ?　誰だろう?

ココネとユイは今配信しているからこないだろうし、カグラとはまだ個別で連絡を取り合ったことはない。

そう考えると考えられるのは担当さんから……。

——で、でも、何か問題を起こしたわけでも——。

僕は途中で固まってしまう。

問題で言えば起こしていない数の方が少ない。

またお説教か……、と少し気持ちが沈みながらチャット画面を開く。

アカネ：「やっほー、ゆっきーん」

「わっ!?!」

予想外の相手からの連絡で思わず身じろいでしまう。

ユキ : 「こ、こんにちは、美空先輩」

アカネ : 「はははっ、そんな緊張しなくていいよ。先ほど言ったでしよ? イラストだよ、早速使っつてね」

それだけ言うとアカネは一方的にユキくんのイラストを送りつけてくる。

白のワンピースタイプの水着を着ているユキくん。フリルがたくさんあしらわれて、とても可愛く描けているところを見ると、さすがアカネと言わざるを得なかった。

その上からは犬柄の黄色い半袖パーカーを着ているので、水着としては比較的露出は少ない方だろう。

いつもならフードを被っているが、水着バージョンは被らずにぼさぼさの茶色い髪と犬の髪留めが見えている。

ユキ : 「あ、ありがとうございます、美空先輩」

アカネ : 「もう、アカネでいいよ。それに合わせた2Dイラストも送るし、水着で動くユキくんを楽しみにしてるよ、今晚」

ユキ : 「え、っ!?!」

絵だけなら貼ればおしまいだが、動くとなるとまた別だった。

ある意味僕の魂がアバターに入っているようなもの。

いかにも女性らしい格好をしてしまうと本当に女性になってしまっているのでは、と錯覚させられてしまう。

だから抵抗はあるものの、これだけ素晴らしいものを渡されてしまうとやらないとは言えなかった。

アカネ : 「あと、ユキくん段ボールハウスの種類も増やしたからそっ

ちも使ってね」

ユキ　：「あ、ありがとうございます。今度使わせてもらいます」

もらった以上、アバターは水着バージョンにしないといけない。僕の性格を考えてわざわざ露出の少ないワンピースタイプにしてくれたのだから。

それに動かすのが僕自身、と言うことを考えなければイラストはとも可愛かった。

これを見せない、ということは考えられなかった。

アカネ：「それじゃあ、渡したからね。あと、今度コラボしようね」

ユキ　：「はいっ。……えっ!？」

——何か変な言葉を見た気がする。

ついつい初めの文字で返事をしてしまったが、よくよく見るとコラボについてまで書かれてあった。

アカネ：「あははっ、言質とったからねー。担当さんにいつにするか聞いておくよ」

ユキ　：「あうあう、お、お手柔らかに……」

承諾をしてしまったので、そこから断ることもできず、頷くしか出来なかった。

アカネ：「聞いてた通り、いい子だね。騙し打ちみたいに言ったから拒否することもできたのに」

ユキ　：「そ、その、嘘だけは良くないですから」

アカネ：「ふふっ、楽しい子だね。ほどほどに加減してあげるよ。それじゃあ、またねー」

アカネと話している間にユイの歌も終わっていた。

——全く聞けなかった……。

少し残念に思いながら結果を聞く。

ココネ：『うつ、ま、負けた……』

ユイ：『ぶいっ』

【コメント】

：これは予想外の結果に

：ココママ敗北

：信じられない

コメントを見る限り、ユイが勝ったようだ。

ただ、歌に関しては絶対の自信を持っていたココネが負けた、ということを信じられなかった。

【コメント】

雪城ユキ：い、一体何があったの!?

ユイ：『うにゆ、音程の通りに歌うだけなの。採点ゲームならゆいに負けはないの』

ココネ：『うう……、このままだとユキくんが……。ま、負けないうすよ』

ユイ：『歌のうまさか採点の決定的差ではないことを教えてやるの』

ココネ：『うう、みんな、私に力をわけてくださいー!』

【コメント】

：w

：w

：w

：パロw

雪城ユキ　：ココママ、頑張れ。これ以上コラボが増えたら僕の体がもたないよ……

：二人が真剣勝負してる間にユキくんがコラボ増やしてる件w

ココネ：『ユキくん？　どういうことですか？』

ユイ　：『……ギルテイ？』

【コメント】

：修羅場きたーw

：ユキくんピンチw

：さて、ユキくんの回答は？

——こうなったら放送から離れて……。

ココネ：『あつ、逃げないでくださいね。今グループ通話に繋がりますから』

ユイ　：『うにゆ、ユキくんアバターを登場させて……と』

勝手にユキのアバターが表示されてしまう。

そして、本当にキヤスコードから通話がかかってくる。

——この通話、出なくても……。

ココネ：『もし、出なかったらユキくんとのコラボはお泊まりオフコラボにします』

『こ、怖いよ!?　それになんで僕の考えを読んでの!?』

ココネの言葉に思わず通話に出て声をあげてしまう。

ココネ『ユキくん、わかりやすいですからね。と、いうことで皆さんお待ちかね、雪城ユキくんの登場です!』

ユイ 『はちぱちー』

やる気なさそうなユイの声が聞こえて来る。

それに合わせてコメントも一気に流れていく。

【コメント】

：○○○○○○

：○○○○○○

：○○○○○○

：○○○○○○

：ユキくんだw

『ゆ、雪城ユキです。みなさんこんにちは。じゃ、じゃあもう出たからもう良いよね? それじゃあ僕はこれで。お疲れさ——』

ココネ：『まだ帰ったらダメですよ? それよりも誰とコラボすることになったのですか? カグラさんですか?』

【コメント】

神宮寺カグラ : 私なのか? 何も聞いてないけど

: w

: w

: カグラ様じゃなかったw

ユイ : 『うみゆ、それならゆいともコラボするの。明日で良い?』

『ちよ、ちよっと待ってよ。こ、コラボはアカネ先輩からだよ。その

……イラストももらっちゃったし、うっかり僕が領いちゃって——』

【コメント】

美空アカネ : ふふつつ、ユキくんの2回目は私のものだ！

: 出た、暴走特急w

: まさかユキくんに突撃したのか？

: ユキくんじゃ暴走特急を抑えることなんてできないんじゃないか？

: 早く海星パイセンを呼んでくるんだ！

: ユキくんの身が危ないぞ！

——なんだろう。アカネ先輩、すごい言われようだった。

いや、動画を見たらわからなくもない。

常に興味を持った方向へ全力に突っ込む。

それを抑えることができるのは数少ない。

ココネ『ゆ、ユキくん、そのときは私も呼んでね。ユキくんは私が守るから……』

ユイ : 『うみゆ……、骨は拾って上げるの……』

『ちよつと待って!? どうして僕、死ぬ流れになってるの!?!』

ココネ『だ、だって相手はアカネ先輩ですよ!?! シロルームで一番危険な人ですよ!?! ユキくんも警戒なくポンポン受けたらダメですよ!』

『うつ……、ごめんなさい……』

そこまで危険な相手とは思わずにみんなに心配をかけてしまった。さすがに反省をせざるを得なかった。

【コメント】

美空アカネ : 酷い言われようじゃないかな? 何もしないよ?

ただ喋るだけで

海星コウ : 全く、余計なトラブルを起こさないでよ!

：飼育員きたーw

：海星パイセン、お持ち帰りお願いしますw

コメント欄に一期生の海星かいせいこうコウが現れたことで、コメントが更なる盛り上がりを見せていた。

そんなタイミングでユキのスマホから通知音が鳴る。

『あれっ？ 担当さんからだ……。』「コラボはアカネ先輩とコウ先輩、二人一緒にしてもらいます。ユキくん一人だとまだ危ないので。あとコラボ配信をするのはシロルームの規約上、一月先になる」らしいです。断ることは……できないみたい』

ココネ：『コウ先輩がいるならまだなんとか……。』

ユイ：『うにゆ。ユキ、がんばっ。ゆいのコラボも忘れないでなの』

『うん、ありがとう、ユイ……っつて、また!?!』

ユイ：『うみゆ、みんな聞いてたよね？ ユキくんとのコラボが決定なの』

ココネ：『ユキくん……、素直すぎます……。』

【コメント】

：ユキくん草

：草

：w

：w

：w

：ユイちゃんは策士（自称）だもんな

：今のはユキくんが素直すぎるでしょw

：またってことは暴走特急の方も……

美空アカネ：なるほど、これをすればユキくんとコラボし放題

……

海星コウ：ユキくんに嫌われたいの？

美空アカネ　：こ、今回だけだよ

『わ、わかったよ……。約束したのは僕だし、いつかしないといけないことだもんね。頑張るよ……。えっと、日にちは五年後くらいで良いかな？』

ユイ　：『ゆみゆ、長いの！　一応ココママが最初って決まってるから次の日がゆいなの！　アカネ先輩は五年後で良いの！』

【コメント】

美空アカネ　：私は今からでも良いんだぞ？　服を脱いで待ってる

！

海星コウ　：じゃあボクはアカネにかける氷水を準備しておくね

美空アカネ　：やっぱり服を着て待ってる。だから氷水はやめて

：なんだろう、このカオス空間

：別にいつものシロルームだろう？

：それよりカラオケ対決はどうなったんだ？

：満点を取ったユイちゃんの勝ちだろう？　どうやってもココママは引き分けしか取れないわけだし

『あつ、そつか。カラオケ対決の邪魔したらダメだね。僕は今度こそ消えるね』

ココネ：『うん、またね』

ユイ　：『うみゆ、ばいばーい』

二人に見送られて、通話終了を押しす。

そして、僕がいなくなっただけからは再びカラオケ勝負が始まっていた。

二時間にも及ぶ勝負の末、ココネも満点をたたき出し、勝負は引き分けに終わっていた。

ただ、僕としては二人とコラボをすることになってしまったので、この勝負自体に何の意味もないけど。

ココネ：『中々やりますね、ユイちゃん』
ユイ：『うにゆ、そっちも。まさか追いつかれるとは思わなかった
の』

二人の中で熱い友情が芽生えていた。

この放送は終了しました。

『《戦争勃発》ユキくんの初めて争奪カラオケゲリラオフ《真心ココネ
／羊沢ユイ／シロルーム三期生》』

1. 4万人が視聴 0分前に公開済み

☒4, 326 ☒94 ?共有 ≡?保存 :

チャンネル名：kokone | Room. 真心ココネ
チャンネル登録者数3. 3万人

◇◇◇

【コメント】

：いい話だったw

：あれっ、最終回？

：俺たちの戦いはこれからだ

：ココユイ、いいね

：引き分けに見えてユキくんの一人負けw

：確かにw

第8話：三万人記念コラボ配信

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki_yukishiro
4時間前

本日、20時からココママ(@kokone_magokoro)と一緒にライブ配信します。

記念配信と言うことでココママの枠ではなく、僕の枠ですることになりました。わふー #犬拾いました #ココユキ

@654 ? 1. 1万 ♡ 2. 0万

ついにココネとコラボをする日になってしまった。

ただ、自然とそこまで怯えていなかった。

それもそのはずでココネとはすでに二回コラボ……と行って良いかわからないけど、コラボをしている。

一番話しやすい相手だった。

ココネ：「そろそろだけど、ユキくん、大丈夫？」

ユキ：「うん、なんとかなりそう」

ちよつと前までだとすぐに逃げ出したくなっていたのが、嘘みみたいだった。

これも何度も配信を経験したからだろう。

ココネ：「でも、アカネ先輩からもらったイラストを使うんでしょ？
本当に大丈夫？」

ユキ：「……あっ!？」

——すっかり忘れていた。

三万人記念に使うのはユキくんの水着イラストとアバター。
さすがにその恥ずかしさは普段の格好の比ではない。

僕が水着アバターの少女を動かしている。

……変態以外の何者でもない。

それを思い出した瞬間に急に恥ずかしくなる。

そして、胃が痛くなってくる。

ココネ：「もう告知してますから辞められないですよ？」

ユキ：「ま、まだ何も言ってないよ!？」

ココネ：「だから、言わなくてもわかりやすいんですよ、ユキくんは」
ユキ：「ちよつと緊張してきただけだから大丈夫だよ」

ココネ：「それならいいけど、でも、本当に無理してるなら言うってくださいね」

ユキ：「うん、ありがとう。それじゃあそろそろ放送時間だから」

すでに配信時間の五分前。

そろそろ準備をしておいた方がいいだろう。

◇◇◇

『《#犬拾いました #ココユキ》登録者数三人記念コラボ配信。他にも色々と報告があるよ《雪城ユキ／真心ココネ／シロルム三期生》』
1. 8万人が待機中 20XX／05／10 20:00に公開予定

☒774 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：3万人おめでとー

：5万人おめでとー

：おめでとー

：ユキくん、おめでとー

：相変わらずの開幕段ボールw

：おめでとー

・開幕段ボールにも慣れてきたなw
・でも、今日は初コラボだろう？
・ユキくんの場合、初配信コラボとかあったからな
・今日もてえてえの予感
・よく見ろ！ 三人だw
・本当だw

今日もかなりの待機者がいる。

やはり、記念配信ということとコラボということもあるのだろう。
今日も相変わらず画面中央に段ボールが一つ、置かれただけの配信画面。

まさかそれが変わると思っていない視聴者たち。

——やっぱり緊張してきたかも。

大きく深呼吸をして、配信開始を押す。

『わ、わふう……、大好きのみなさん、こんばんはー。き、今日も拾いに来てくれてありがとうございます……』

段ボールの中からちよつとだけ顔を出して、すぐにまた段ボールの中へと戻っていく。

【コメント】

・わふー

・わふー

・あれっ？ 今日はずぐ隠れた

・段ボールユキくんw

・いつものw

・なら俺が拾って行きますねw

・やめろ、俺が拾う！

・通報しました。ユキくんは俺が拾う
・草
・草

『あのあの、み、みなさん、今日はぼ、僕のお気に入り三人記念配信に来てくれて、ありがとうございます。なんか桁がおかしいことになってますけど、本当は三人だと思ってます。ただ、誤表示でも嬉しいです。ありがとうございます』

チラつと顔を見せる。すると勘の鋭い人に気づかれてしまう。

【コメント】

・誤表示草
・お気に入り3人記念配信w
・3人か。俺が貴重な1人だな
・俺もそのうちの1人か
・俺も入ってるぞ
・俺もだな
・すでに4人いて草
・ユキくん、いつものパーカーを着てないな
・そういうえば普通に髪が見えてるな
・まさか新衣装!?
・報告があると言ってたもんな

『あうあう……と、とりあえず今は五人になってますけど、三人、ありがとうございます』

ココネ『もう、ユキくん！ 三万人、ですよ！ 記念配信なんだから頑張りましょう！』

紹介の前にココネが現れて、注意をしてくる。

『で、でもでも、この僕に三万人もお気に入りがいるなんておかしいよ。ほ、ほらっ、きつと今日はココママの三万人記念配信なんだよ。ココママも超えてたよね?』

ココネ『ええ、超えてましたよ。それより、なんで私、段ボールと話をしてるのですか?』

『えとえと、僕は段ボールだから……かな?』

【コメント】

・段ボールだと認めてて草

・ココママも3万人おめでとー

・今日もココママのツツコミが冴え渡る

・まだ早い。何か爆弾を用意してそうだ

ココネ：『そんなわけじゃないですよ……。アカネ先輩とコラボの約束をしてまでそのアバターをもらったんですよね? 私もまだじっくり見てないから見せてくれませんか?』

『うう……、ココママは普通の服だからいいんだよ。さ、流石にこの時期に水着は恥ずかしいよ……』

ココネが苦笑を浮かべている横で真っ赤になりながら言う。その際に再びちよつとだけ顔が見える。

【コメント】

・み、水着だど!?

・ユキくんの水着!?

・ほ、本当だ、いつものパーカーじゃない!

・び、ビキニなのか!?

・わくわく

ココネ『ほらっ、みんな待ってますよ。ユキくん、出てきてください……』

『わ、わかったよ……。そ、それじゃあ……。』

確かにコメントを見てもみんな期待していることは良くわかる。だからこそ僕は頑張って少しだけ顔を出す。

フードを被っていないので、少しボサツとした茶色の髪と犬の髪留めが画面に映る。

『ど、どうかな……。』

ココネ：『うん、ユキくんの顔が今までよりもはっきりと見えますね。でも、みんなが見たいのは頭じゃないですよ？』

【コメント】

：段ボール邪魔w

：段ボール燃やせw

：ユキくん、早くー

ココネ：『ほらっ、みんなユキくんの姿を見たいんですよ』

『でもでも、やっぱり恥ずかしいし……。』

ココネ：『それなら無理やり出しますか？』

『うう……。ココママが怖いよ……。』

ココネ：『ほらっ、私の三万人記念でもあるんですよ？ それなら私のために見せてくれないですか？』

——うう……。ココママのため……。と言われたら……。

今までココネには様々なことで助けてもらってきた。そんなココネの頼みとあっては聞かないわけにはいかなかった。

『わ、わかったよ。で、でも恥ずかしいから少しだけね……。』

『楽しみですね。ではユキくんの新衣装、どうぞ！』

段ボールを横に避ける。
するとその瞬間にコメント欄が爆発する。

【コメント】

：うおおおお、まぶしすぎる

：色っばい

：ユキくんの表情がまた

：可愛すぎる

：ココママのために頑張るユキくん

ココネ：『ユキくん………』

『な、なになな。や、やっぱり似合わない………かな。僕には』

ココネ：『か、可愛すぎますー！ そ、その、も、持って帰ってもいいですか!?!』

『だ、ダメだよ………』

ココネ：『えいつ』

ココネが飛びついてくる。

ただ、アバター上なので、掴める訳でもないのだが、こうした方が喜んでもらえるかなと、ココネを動かして、僕と重ねる。

ココネ：『ユキくんだ……。ユキくんだよ………』

『うう……、なんだろう……。触られてるわけじゃないのに………』

ココネ：『ユキくん、やっぱりオフしようよ。直接触りたいよー』

ココネがどう見てもアウトな発言をしてくる。

それに今のココネは危なすぎて近づきたくなかった。

『お、オフはちょっと………』

ココネ：『でもでも、ユキくん、可愛すぎますから………』

理由が理由になっていない。
それよりもココネがここまで暴走してくるとは思わなかった。

【コメント】

・ココユキは盤石

・ココママw

・魔性の犬、ユキくんw

『はいっ、もう終わり。話が進まないからね』

それをいうと再び段ボールを元に戻す。

ココネ：『ああ、ユキくんの水着が……』

『ほらっ、他にも発表があるからね。次いくよ次!』

【コメント】

・珍しくユキくんが仕切ってるw

羊沢ユイ　：うみゅー、ユキくんの水着はゆいがおいしくいただくの

・ユイちゃんが草すぎる

・他の発表……わくわく

・ココママも実はポンコツだった

・おかしいな。ユキくんが常識枠に見えてきた

・ユキくんはポンコツ枠だw

『っ、次はこっちだよ。アカネ先輩に描いてもらったイラストだよ。こっちも水着だね。むしろこれに合わせてアバターも作ってくれたみたい』

ココネ：『こっちのユキくんもかわいいですね』

——あれっ、ココママの態度がだいぶ戻ってる？

少し不思議に思っただけ聞いてみる。

『もう元に戻ったんだ……』

ココネ：『うん……、あまりに可愛すぎたから少し我を忘れちゃったみたいですよ……。もう大丈夫ですよ……。』

『それはよかった。僕、少しココママとの距離を空けた方がいいのになって思っちゃったよ』

ココネ：『だ、ダメですよ。ユキくんの飼い主は私ですからね』

【コメント】

：ココユキいいなあ

：イラスト、いいね

：でも、これをもらうためにユキくんは生け贄に

：ユキくん、可愛い犬だった……

——なんだろう……。コメント欄、まるで僕が死ぬみたいになってるんだけど……。

『と、とりあえず二つ目がこのイラストでした。そして、三つ目。僕のカタッターでマシユマロを募集することになりました』

ココネ：『ユキくん、頑張ってマシユマロの入れ方とか聞いてきましたからね』

『そ、それは内緒だよ、ココママ……』

ココネ：『ということ、次回からユキくんの質問はマシユマロでお願いしますね』

『そ、それは僕の台詞……』

ココネ：『それじゃあ次にいってみましょうか？ 明日ユイちゃんとコラボするんですよ？』

『そ、それも僕の——』

台詞を全て持って行かれて僕はどんどんと段ボールの中に沈んでいく。

【コメント】

：w

：w

：w

：ユキくん沈むw

：ユキユイもおいしいね

『えとえと、は、配信内容は何かのゲームをするみたいだよ。僕、ゲームって好きだったんだ……』

——一人でできるしRPGとかでコツコツレベルを上げていくのは何も考えずにできるから。

ココネ：『でも、ユイちゃんって結構ガチ勢だから大丈夫ですか？』
うん、「ユキくんも大声出して楽しめるゲームを用意した」って言ってたからちよつと楽しみなんだよね』

ココネ：『そ、そういうえばユキくん、ホラー系の映画って苦手だって言っていましたよね？』

『……？ 急にどうしたの？ 確かに怖いのは苦手だけど……』

ココネ：『そっか……。うん、生きて帰ってきてくださいね』

『……？ 大げさだなあ……。ゲームをするだけだよ？』

【コメント】

…あつ……

…あつw

…なるほどな

…明日が楽しみだ

…ユキくん、ご愁傷様w

：俺たちにとってはご褒美ですw
羊沢ユイ　：ゆいにとつてもご褒美なの

ココネ：』と、とにかく明日のコラボはともかく、他に発表があるんですよね?』

『そ、そうだった。まだ準備中にはなるんだけど、三万人記念にミニアニメを作ってもらえることになったよ。まだまだ先は長いね……』

ココネ：『ユキくんは十万人記念もすでに準備されだしてるよね? ユキくんの3Dアバター、楽しみだなあ』

『あははっ、みんな気が早いよね。そんな十万人なんてすぐに行くはずないよね? だから加速しないでください。お願いします』

お気に入り登録が急激に増え出したので、慌てて謝って増えるのを食い止めようとする。

しかし、更に増加の一途を辿っていた。

『な、なんで!?!』

ココネ：『みんなユキくんの雄志を見てみたいんですよ。頑張って十万人、目指しましょうね』

『うう……、僕は十人くらいで良いんだけど……』

【コメント】

：お気に入り登録しましたw

：3D!?

：全身が動くユキくん……楽しみすぎるw

：果たして動くのは段ボールなのか、ユキくんなのか?

：そんなことを言ってるうちに7万人突破おめでとうw

：早いwww

『ど、どうしてみんな僕のことを見に来るの……?』

ココネ：『みんなユキくんが好きなんですよ』

『あうあう……、そ、その、面と向かって言われるとやっぱり恥ずかしいよ……』

段ボールの中に隠れて、恥ずかしさを紛らわせる。

『そ、そうだ。あと、コラボはアカネ先輩、コウ先輩とも予定しています。楽しみにしてください』

ココネ：『良いイラストもらっちゃったもんね。振り回されない程度に頑張つてね』

『う、うん……、本当に良いイラストだよね……。エチチなイラストつて聞いてたから驚いたけど、本当に僕らしい良いイラストだったよ……。ただ、このアバターはしばらく封印だよ……』

ココネ：『あははっ、まだ夏には早いでもんね。少し寒かったかな？ ユキくん、よく頑張りました』

ココネが頭を撫でる動作をしてくれる。
褒められることが嬉しくて思わず頬が緩んでしまう。

【コメント】

：ユキくん、お疲れ様

：何故だろう、涙が止まらない

：ユキくん、頑張った

『ありがとう、ココママのおかげだよ』

ココネ：『ううん、そんなことないよ。ユキくんが頑張ったからだよ。だからこれからも一緒に頑張っていこうね』

『うん……』

ココネ：『あと私とオフコラボもしようね』

『うん……って、もうその手には乗らないよ。僕、オフは——』
ココネ：『ユキくん、チャットを見てくれるかな？』

ココネがにつこり笑みを浮かべる。
それを見て嫌な予感がする。

『そ、その、僕、またチャット欄を表示したらダメだから——』

ココネ・ユキくんならそう言うと思ったので、私が代わりに読んであげますね。担当さんから「オフコラボもしてくださいね」だそうです』

『わー、わー、な、何も聞こえない。聞こえないよー!』

——た、担当さんは何を考えているんだ!? 僕が男だってバレてしまったらどうするつもりなんだろう？

【コメント】

羊沢ユイ :うにゅ、ゆいもやるの!

:ユイちゃんのコメが早い!?

:ユキくんの反応草

:よっほどやりたくないんだ……w

ココネ・ユイちゃん、ごめんね。今回もまたユキくんの初めては私
がもらうことになるよ。担当さんが「まずはココネさんとのオフでお
願います」って言ってるから』

——なるほど、一応騒ぎにならないように、一番上手く対応してく
れそうなココネに頼んでるんだ……。

いつかはオフコラボもしないといけない。

同じシローム三期生としては当然だろう。
だからこそ慣らしていく必要があるわけだ。

『えと、あの……、お、お手柔らかにお願い……。お、怒らないでね

……』

ココネ：『楽しみにしてますね。日はいつにしましょうか？』

『二十年後くらいかな？』

ココネ：『じゃあ来週ですね。詳しいことは後から相談しましょう』
『さ、流石に来週は心の準備が……』

ココネ：『えっと、十七日の今日と同じ時間にお泊まりオフっと。枠は今度こそ私の方でやりますよ。みんな、よろしくお願いしますね！』

『ちよ、ちよっと待って!?! なんで勝手にお泊りにしてるの!?!』

ココネ：『その方が楽しいから？』

『ぼ、僕の気持ちは？』

ココネ：『ユキくんにも楽しんでもらいますから』

——うう……、もう断れない流れができてしまってる。どうにかして、男だとバレないように気をつけないと。

一抹の不安を抱えながら放送は終わりを迎えていた。

この放送は終了しました。

『《#犬拾いました #ココユキ》登録者数三人記念コラボ配信。他にも色々と報告があるよ《雪城ユキ／真心ココネ／シロルーム三期生》』

4. 4万人が視聴 0分前に公開済み

☒1. 2万 ☒94 ?共有 ≡?保存 …

チャンネル名：Yuki Room. 雪城ユキ

チャンネル登録者数8. 1万人

◇◇◇

【コメント】

：お泊まり楽しみ

：明日はユキユイコラボか

：カグラ様とはコラボしないのか？

第9話：突発!？ コラボオフ会

ココネとのコラボが終わった後、僕は恐る恐るキャスコードの画面を開くと、確かにそこには担当さんからの言葉が載っていた。

——本当にオフを承諾してる……。

一瞬気が遠くなりそうになる。

ただ、僕のことを男だと知ってる担当さんが大丈夫だと思ったんだ。

それなら問題はない……のか？

頭を悩ませていると担当さんから連絡が来る。

マネ : 「同期メンバーには性別がバレても構いませんよ」

ユキ : 「ぼ、僕が構うんですよ!? 変態扱いされたくないんですよ!」

マネ : 「大丈夫ですよ、ユキくん。可愛いは正義ですから!」

ユキ : 「な、何の自信ですか!? それに僕は男らしいですよ!」

マネ : 「ふふっ、それは楽しみです」

担当さんが意味深な言葉を呟いてくる。

そして、その意味がわかるのは次の日の朝だった。

◇◇◇

羊沢ユイ@シロルーム三期生 @Yui_Hitsuzisawa

a 今

うにゆー、今夜、ユキちゃんとコラボでホラー耐久するよー。ユキく

んの悲鳴を見に来てねー(??☒?☒) ???ばんばん

#羊布団 #ユキユイ

カタッターで突如流れた今日の放送内容。

それを見た瞬間に僕はキャスコードを開き、ユイへとメッセージを送っていた。

ユキ : 「ホラーゲームなんて聞いてないよ!？」

ユイ : 「うにゆ? ユキくんが楽しめるゲームって言わなかった?」

ユキ : 「言ったよ! それで僕はホラーが苦手って言ったよね?」

ユイ : 「うみゆ、たくさん叫んでる方がホラーを楽しんでるって言わない?」

ユキ : 「い、言わないよ!? こ、怖いものは本当に怖いんだからね!」

ユイ : 「うにゆ、ゆいの中だどご褒美なの」

ユキ : 「ユイiiiiiiii」

そういうことでユイとのコラボ内容はホラーゲームということになっちゃった。

配信をするだけでいっぱいいいのにユイとのコラボ、更にそれがホラーゲーム、という。

一つでもしんどいのに三つも重なると気持ちが悪くなる。ただ、ここが講義室だったということもあり、僕のことを心配してくれる人がいた。

「小幡^{こはた}くん、どうしたの? なんだか落ち込んでるみたいだけど」

結坂^{ゆいさか}が初めて会ったときのようになどき込んでくる。

ただ、それをまともに相手にできるほど、今の僕には元気がなかった。

「あつ、結坂さん……。うん、ちよつと色々あつてね……」

「どうしたの？ 私で良かったら相談に乗るよ？」
「結坂さんってホラーゲーム、やったことある？」
「うん、ゲームは好きだよ。小幡くんも好きなの？」

結坂が少し食い気味に聞いてくる。

「ううん、僕はホラー系は苦手なんだよ。それなのにやることになつて……」

「あれっ？ えっと、小幡くんがホラーをするの？」

「そうなんだよ……。だから気が気でなくて……」

結坂が不思議そうに首を傾げてくる。

「えっと、小幡くん……。そのホラーって誰かと一緒にするの？」

「うん、そうだよ。同期……。ううん、知り合いと今晚に——」

どこまで言って良いのか迷いながら伝える。

すると、結坂はスマホを取り出して、何か打ち始める。

そして、すぐに僕のスマホから通知音が鳴る。

「やっぱり……。だからオフを嫌がってたんだ……」

「えっ!？」

結坂が何か悟ったように言ってくる。

その理由がわからずに僕は届いたチャットを確認する。
すると、そこにはユイからのメッセージが届いていた。

ユイ ……もしかして、ユキくん？」

「えっ!?!? ゆ、ユイ!？」

「ちよ……。小幡くん！ こっちに来て!!」

思わず声を上げてしまうと、結坂は大慌てで僕の手を引っ張って講義室を出て行く。

◇◇◇

とりあえず近くのカフェへとやってきた。

そして、飲み物だけを頼むと結坂は改めて頭を抱えていた。

「あんな人がいる場所で大声上げたら駄目でしょ？ 私たちは正体がバレたらダメなんだからね！」

「うっ……、ご、ごめん。さすがに驚いてしまっ……」

「まあ、そうだよね……。うん、小幡くんだとそうなるね。でも、確かにマネさんが考えそうなことだよ」

「うん……。特に性別はね……。絶対に黙ってくれって言われ……。てはいないけど、僕の気持ち的にね」

むしろ担当さんは全然バレてもいいとすら言っていたが。

「でも、同期なら大丈夫って言ってたよね？ どうせ今日はコラボなんだし……。そうだ！ 小幡くん、今日のコラボはオフコラボにしない？」

「えっ!? で、でも、僕は男だし、その……」

「あははっ、改めて聞くとやっぱりユキくんそのものだね。小幡くんならかわいいし大丈夫。やっぱりかわいいは正義だよ！」

かわいいと言われ、少しモヤモヤとした気持ちになる。

結坂とはそれほど背丈は変わらない。二人並んでいるとそれこそ姉妹に間違えられるかもしれないほどだ。

だからこそ可愛いと言ってくるのもわかる。

わかるんだけど、男の僕としてはどうしてもモヤモヤとしてしま

う。

「さすがにいきなりうちへ連れて行くのは色々と問題がありそうだからその……」

「それなら私の部屋に來れば良いよ。私、一人暮らしだし、そのあたりは問題ないよ?」

どんどんと外堀を埋めていく結坂。

でもさすがに男女二人きりになるのは……と必死に抵抗をする。

「い、いや、女の子の部屋に僕が行くのも——」

「大丈夫、小幡くんなら」

結坂が笑みを浮かべながら言うてくる。

その表情を見ていると本当に男扱いされてないんだな、と改めて分かる。前々から分かっていたことだけだ。

「で、でも、やっぱり、オフは……」

「——ホラー、怖いんだよね? 配信時間は夜だよ? 一人で誰もいない部屋でやるのって怖くないの?」

「うっ……」

暗がりでも誰もいない部屋。そんな中、一人でホラーゲームをする。考えただけで言葉を詰まらせてしまう。

——絶対に夜寝られなくなるやつだ……。トイレにも行けなくなるやつだ……。

「二人でした方が恐怖感って拭えない? どうか、私の部屋で一緒にオフコラボやろうよ?」

にっこり微笑んでくる結坂。
それを見て、僕はうなだれてしまう。

「わかったよ……。うん、どうせ正体もバレたんだから、オフを断る理由もないもんね」

「やたー、それじゃあ早速準備しよ！ あつ、マネさんにも報告しておくね。あと、ココネを挑発して……」

「こ、ココママ、悲しまないかな？」

「悔しがらるだろうね。ふふつ、次に会ったときが楽しみ」

結坂が悪い笑みを浮かべていた。

それを隣で見ていた僕は苦笑を浮かべることしかできなかった。



結局僕は結坂の部屋へとお邪魔することになった。

結坂の部屋は大学の近くにあるマンションの一室だった。

マンションはセキュリティもしっかりしていて、不審者が入ってくるところが想像できないほどだった。

そして、部屋にはいくつもの可愛らしい小物が置かれており、整理整頓が行き届いていた。

女の子らしいぬいぐるみや大きめのクッションもいくつか置かれているところが結坂らしい。

「うちの親がね、こんなところを用意したんだよ。私一人だと不安だっけ」

「大事にされてるんだね……」

「そうだね。しっかり防音されてる部屋だから動画配信しても正体がバレる心配もないよ。だから思いつきり叫んでね」

満面の笑みを向けて結坂が言ってくる。

こうなつてくると一切叫ばずにクリアしてやろう、という気持ちが強くなってくる。

「それにしても結坂さんって普段の姿からは全然V t u b e rだつてわからないよね」

「放送でも言つてたよ。あのキャラは計算だつて」

「ほ、本当に計算だつたんだ……」

「でも、驚いたのは私の方もなんだからね。ユキくんがまさかの小幡くんだったなんて……。どうりで私にチャンネルを見せられなかったわけだね」

「担当さんに別のチャンネルを作つて良いかと聞いたけど、それもダメだつて言われたからどうするか困つてたところなんだよね」

「あははっ、よかつたね。別に作る必要がなくて——」

「僕としてはちよつと複雑だけどね……」

「それよりも夜まで時間あるけど、試しにゲームをちよつとやっておく? その方が夜も余裕を持つてできるよね?」

「助かるよ。明るかつたらまだ怖くないもんね」

「それじゃあ、ゲームを準備してつと。あと私は配信の告知をしておくね」

「僕も告知しておくよ」

それから結坂はゲームをセットしたあとにパソコンに向き、カタツターで告知をしていた。

羊沢ユイ@シロルーム三期生 @Yui | H i t s u z i s a w

a 今

返信先: @Yui | H i t s u z i s a w

うみゅー。突発だけど、今日のコラボはオフコラボになることが決まったの(??x?x)???ばんばん

ユキくんの生声とっても可愛いの(??x?x)???
???はあはあ……

楽しみにしてて欲しいの

一応僕の方でもユイの眩きを引用して、告知しておく。

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki|yukishiro
今

えとえと、今日はユイに拾われてしまいました。

そのその……、一人でホラーゲームをするのはやっぱり怖くて、二人なら大丈夫かなって。

だからその……、ぜひ見に来てくださいね。

僕の眩きを見た瞬間に結坂は少し不満そうに言ってくる。

「やっぱりユキくん、可愛いね。なんだろう……、負けた気持ちになるよ」

「しよ、勝負してるわけじゃないんだからね……」

「うん、それはわかってるんだけど……」

不服そうな結坂。

すると早速知り合いからリプが飛んでくる。

真心ココネ@シロルーム三期生 @kokone|magoko

ro 今

ど、どういうことですか!? お、オフは私が先って……

羊沢ユイ@シロルーム三期生 @Yui|Hitsuzisaw

a 今

うみゆ、勝ったの(??☒?☒)????

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki|yukishiro

今

ご、ごめんね、ココママ。僕、やっぱり怖くて……

真心ココネ@シロルーム三期生 @kokone|magoko

r o 今

ユイ、詳しい話はあとから聞くからね！

羊沢ユイ@シロルーム三期生 @Y u i | H i t s u z i s a w

a 今

音消して待っておくの (????)
????

そんなやりとりをした後、僕は練習がてらホラーゲームをするのだった――。

◇◇◇

『#羊布団 #ユキユイ』突発オフコラボ！ ホラーゲー、ユキくんがクリアするまで終われまてん『羊沢ユイ／雪城ユキ／シロルーム三期生』』

定 1. 0万人が待機中 2 0 X X / 0 5 / 1 1 2 0 : 0 0 に公開予

4 1 5 2 ? 共有 ≡ ? 保存 :

【コメント】

：唐突にオフが始まったな

：オフはココママからじゃなかったのか？

：待機

：わくわく

：ココママ、初めてを奪われて草

いつもよりも更に多くの人待機している。

それだけでいつもなら緊張してしまうところだったけど、今の僕は涙目になりながらユイの部屋にあったクッションに抱きついていた。

『ぐすっ、ぐすっ、こ、怖かったよ……。あんなの、クリアなんて無理だよ……。』

ユイ : 『あつ、ユキくん、もう音入ってるからね』

『っ?!?!? ま、まだ喋れないよ、僕……まだ配信できる状態じゃないよ。ちよ、ちよつと待ってて……』

【コメント】

：ユキくん泣いてる？

：ユイちゃんにオフを強制されたから？

：ユイちゃん酷い

ユイ 『ち、違うの。ユキくんはただ、今日配信するホラーゲームの練習をしたの』

『うう……、も、もう大丈夫。そ、それに泣いてなんかいないからね……』

【コメント】

：理解したw

：つまり放送中はこうなるとw

：ユキくんw

ユイ 『うみゆ、ユキくんが戻ってきたところで本日の配信を始めるの。ゆいはシロルーム三期生の羊沢ユイなのー』

ユイのアバターが画面に登場する。

相変わらず眠そうなトロンとした瞼と大きなクッションが特徴的な少女だ。

【コメント】

：うみゆ

：うみゆ

：うみゆ

：うみゆ

ユイ : 『そして、もうバレてしまってるけど、今日は色々と伝説を作り上げたユキくんこと、雪城ユキくんに来てもらってるの。あつ、段ボールは剥いでおくよ』

ユイがユキ^ほin段ボ^くールの姿を画面に出した瞬間に段ボールを奪っていた。

『わ、わふう……、ゆ、雪城ユキです。段ボール取られてお化けに怯えながら寒空の下、歩いてます。ひ、拾いに来てくれてありがとうございます……』

【コメント】

：わふー

：わふー

：今日こそユキくん拾うぞ

：ユキくん、ちゃんと挨拶できてる

：本当にオフ会？

『えとえと、オフ会というより、拉致られました？』

ユイ : 『人聞きわるいよー。さすがに一人でホラーをさせるとユキくんが泣いちゃうと思ったからサポートしようとしたんだよ。手取り足取り……』

『わっ!? ゆ、ユイ、くつついてこないで』

ユイ : 『ユキくん、小さくて可愛いよ……なでなで』

『な、撫でるなー。ち、小さいっていうならユイも僕と変わらないでしょー!』

ユイ : 『うにゆー、私の方がアホ毛の分大きいよ……』

『アホ毛を入れるなー!』

【コメント】

：俺たちは何を見せられてるんだ

：というより何も見えない

：映像は!?

：3Dじゃないのが悔やまれる

：ユキユイは可愛らしくていいな

：ユキくんも昨日より自然体な感じがいい。

：どっちも持ち帰りたい……

真心ココネ　：ど、どうして、ユイがオフコラボしてるの!?

：ママ登場

：修羅場w

ユイ　：『段ボールに書かれてた通り、ユキくんを拾ったから』

『ぼ、僕は別に捨ててあつた訳じゃ……なくはないけど』

設定と今の状況とで板挟みになってしまい、ユイの手から段ボールを取り戻すと顔を隠してしまう。

すると、ユイはニヤリと微笑みながら言う。

ユイ　：『だから今日からゆいがユキくんを飼います!』

【コメント】

真心ココネ　：だ、ダメーーーーー!!!

：ママ発狂w

：ユキくんを飼うのは俺だ!

：通報しました

：ユキくん、本当に捨てられてたのか

ユイ　：『うにゆ、ということでは負けコマママは置いておいて、早速ホラーゲームを始めたいところだけど、ユキくんの体がまだ小刻みに震えてるから先にマシユマロ読んでいくの。ユキくん、お願いできるかな』

『ご、ごめんね。えっと、この画面のを読んだらいいんだね?』

さすがにさつきくつつかれたときにまだ震えてることに気づかれてしまったようだ。

ユイの配慮に感謝しながらパソコンに映っている質問を読んでいく。

『えっと、「ユイっち、うみゅー。いつも眠たそうにしているユイっちですが、どのくらい睡眠時間をとってるのですか？ また、どのくらい欲しいのですか？」だって』

ユイ　『うみゅー、ゆいは毎日十二時間しか寝られてないの。あと十二時間くらいは寝たいの』

『って、それだと一日中寝てることになるよ!?!』

ユイ　『うにゅ、一日中寝られるなんて幸せなの』

【コメント】

・ぐうたら草

・寝過ぎw

・ユキくんはどうなの？

『えっ、ぼ、僕!?!』

ユイ　『もちろんだよ。ゆいとお昼寝コラボするためにも聞いておきたいの』

『えっと、そうだね……。昨日は二時間ほどは寝たよ？ その……緊張して——』

ユイ　『っ!?!』

【コメント】

・ユキくん、少ない

・もっと寝て

・少なすぎ草

ユイ : 『ユキくん、今すぐに寝るの！ ゆいのベッドを使っているの』

『いや、それはダメだよ。絶対にダメだよ……』

ユイ : 『そんなことを言ったら倒れるの。ほらっ、早く早く！』
『そ、それよりっ、次の質問にいくよ』

ユイ : 『うにゅ、ユキくんは後からゆいが責任を持って寝させるの』

【コメント】

: ユキくん、逃げた

: ユイっちがお姉さんでユキくんが妹かな

: ママはココママだね

: つまり父親はカグラ様か

: ……: 俺だったらグレルな、カグラ様が親だと

神宮寺カグラ : 私は全てを滑る王女になるのだから当然でしょ？

: 誤字草

: いや、確かに全て滑ってる

: w w w

神宮寺カグラ : ご、誤字に決まってるわよ

『えっと、「うみゅー、ユイっちのモコモコが柔らかくて気持ち良さそうなのですが、実際にどのくらい気持ちいいのですか？ 触った感触も含めて教えてください』

ユイ : 『うみゅ、そうだね。それなら実際に触ってもらう方が良いかもしれない。ユキくん、触ってくれる？』

ユイが自分の腕を差し出してくる。

その小柄な体に相まって細く白い腕。ただ、さすがにそれを僕から触れることははばかられた。

『そ、そ、そんなこと、ぼ、僕にできるはずないでしょ!?!』

ユイ : 『うにゆ、大丈夫。ゆいが良いって言ってるの。ほらほらっ』

更にぐいぐいと腕を押し寄せてくる。

『だ、だって僕……、僕……』

男である僕がそんなことできるはずがない。

顔を赤く染めながら必死にそれを押し返そうとする。その時にふにつと何か柔らかいものを触れてしまう。

ユイ : 『うみゆっ!?!』

驚きの声を上げるユイ。

慌てて僕は自分が触ってしまったものを見る。

それはユイのほっぺだった。

マシユマロのように柔らかく弾力のある頬。

それに気づいた僕は慌てて手を離そうとする。

『は、は、め……』

ユイ : 『うにゆ、少し驚いただけなの。いいの、ユキくんなら……』

ユイが思わせぶりな態度を取ってくる。

確かに映像はあくまでもアバターだけで動きに合わせて左右に動く程度。

でも、声だけ聞くとそこでただならぬことが起こっていると予想することができる。

実際は少し頬を触れて、慌てて僕が離れていっただけ。ということでもそれは画面には映らないのだから。

だからこそユイはそれを最大限に生かそうとしていた。

ユイ : 『うにゆ、どうだった？ 柔らかかった？』
『う、うん……』

僕は慣れないことに蒸発してしまいそうなほど真っ赤に顔を染めながら、小さい声で答えていた。
すると、それに合わせるようにコメ欄が爆発する。

【コメント】

：な、何が起きてるんだ!?

：映像をくれ!

：画面の向こうでえっちい光景が!?

：切り取りだ! 切り取り班はまだか!?

：てえてえ

真心ココネ : ふ、二人とも!?! な、何してるの!?

：ユイっちは柔らかいのか……

：確かに柔らかさそうだな……。大きいし

：ユキユイが至高か

：俺、もうダメだ……。先に逝く

：待て、早まるな。俺が先に逝く

：お前が逝くのか! w

：神宮寺カグラ : ちよ、ちよつと、何してるの!

：ナニをしてるんだね

：w w w

ユイ : 『うみゆ、ユキくん、そろそろベッドへ行くの』

『……………』

【コメント】

：キタアアアアア、ベッドシーンだ!

：あれっ、ユキくん、生きてる?

：俺は死んでる

：俺もだ

：→お前たちw

『あの、ユイ……。分かっててやってるよね?』

ユイ 、『うにゅ、もちろんなの』

【コメント】

…………?

：どういうことだ?

：ユキくんがすごく冷静に

：賢者タイム?

『とりあえず勘違いさせてしまつてごめんなさい。今のは僕がユイのほっぺを触つてしまつて、ユイが悪乗りしただけになります』

僕はその場で何度も頭を下げていた。

すると、ユイは舌を可愛くだして笑みを浮かべる。

ユイ 、『妄想が捗るの?』

『僕は反応に困つたよ!?!』

珍しく大声を出してしまう。

ユイ 、『これはユキくんがどんなシーンでも冷静にいられるか、ホラーゲームの特訓も兼ねてるの』

『そんな風には見えなかったよ。だって、ユイ、すごく悪い笑顔だったもん!』

【コメント】

：悪魔っ子ユイっちwww

：なんでだろう、すごくかわいいのに黒い……

…でも俺は好きだ！

…ユキくんが落ち着いてるw

…大声のユキくん、初めて見たw

真心ココネ …何もなかったんだ……。よかった……

…ココママが安心してるw

…ママ、ママだけど幼女だから……

『ど、とりあえず、この話題はここまで！ ユイは柔らかかった。それでいいよね？』

ユイ …うみゆ。せっかくだし、ゆいもユキくんの感触を見るの』
『へっ?!?!』

【コメント】

…ユイっち、名案

…それだ！

…ユキくんもやっぱり柔らかいのかな？

『ど、どうして同意するの!? ぼ、僕は触っても柔らかくないよ……』

ユイ …うにゆ。ユキくん、覚悟するといいの』

『よ、よくないよ……』

ユイから距離を取ろうとして逃げていくが、ジワジワと距離が詰められる。

そして、ユイは腹黒い声で言ってくる。

ユイ …『待て待てーなの』

『ま、待たないよー……』

【コメント】

…はあ……癒やされる

…俺も追いかけるぞ。待て待てー

：→通報した

ユイ　：『うにゆ、捕まえたの』

『わわっ!?!』

画面に引きずり込まれるユキin段ボール。
実際もユイに腰あたりに手を回されている。

『えいつ………』

こちよこちよ………。

ユイがそのまま脇腹をくすぐってくる。

『あははっ、ゆ、ゆい、こ、こしよばい……や、やめ………』

思わずその場で笑い転げてしまう。

【コメント】

：俺もしたい

：通報しました

：俺もさりたい

：どMおつ

『はあ………はあ………』

ユイ　：『ユキくんを倒したの。ぶいつ』

『ぶ、ぶいつ、て僕はモンスターじゃないよ』

息を荒げながらゆっくりと起き上がる。

【コメント】

：息エロい

：はあはあ

：エロエロ

：切り取り班頼む！

ユイ　：『うみゆ、それじゃあ、ユキくんの緊張もほぐれてきたところで、本動画の目的であるホラーゲームをやっていくの』

『そ、それじゃあ、本日の配信はここまでです。お疲れ様でした』

段ボールに隠れていた僕は配信を終える挨拶をする。
もちろんそれをユイは許してくれなかった。

ユイ　：『ダメなの！　もう、勝手に始めるの！』

【コメント】

：勝手に終わらせようとしてるの草

：まだまだ始まってないのにw

：ユキくんは相変わらずユキくんだったw

：www

真心ココネ　：ユキくん、頑張れー

第10話：大絶叫、ホラー実況

『ほ、本当にやるの……?』

ユイ：『うにゆ、当然なの』

モニターを前にして僕は緊張のあまり体が強張っていた。恐怖をかき立てるような音楽が流れているので、仕方ないだろう。しかし、そんな僕を前にしてもユイは容赦がなかった。

『うう……、どうして今が夜なの……。太陽さん、戻ってきてよお……』

ユイ：『うにゆ、この前、「太陽、堕ちないかな」って言ってなかった?』

『い、言わないでよ!? あれは気の迷いだっただから……』

震える手でゲームコントローラーを持ちながらユイに言う。

【コメント】

：ユキくん、厨二病w

：#太陽堕ちないかな

：#太陽堕ちないかな

：#太陽堕ちないかな

：www

：www

：www

『や、やめてー!? タグ付けて僕の痴態を広めないでー!』

ユイ：『それよりユキくん、始まったの。楽しみなの』

『それよりって、僕にとっては死活問題だよ。ひっ!』

タイトル画面が出た瞬間に驚いて目をギョツと閉じる。これなら

怖いものを見なくて済む。

あとは……どうやって魔王討伐するか……。

アドベンチャー系ならただ会話を進めたらいいだけなのだが、今回は移動パートがある。

進む先がわからないと攻略のしようがない。

でも、今回はオフコラボ。

つまり、一人つきりで攻略するわけではない。

困ったときには素直にユイを頼れば良いんだ。

『ゆ、ユイ……、す、進む先を教えてください……？』

ユイに聞いてみたけど、返事がない。

ど、どうして……？

さつきまで一緒に配信してたはずなのに……。

『ゆ、ユイ……、ど、どこに行ったの……？』

恐る恐る目を開く。

まだボタンを押していないので、モニターはタイトル画面のまま。

配信画面にもユキちゃんとユイの姿が映っている。

しかし、周りにユイの姿だけがなかった。

『えっ!? ゆ、ユイ? ほ、本当にどこ行ったの?』

目を開き、周りを見渡す。

すると、そのタイミングで肩を叩かれる。

ユイ ……『ゆーきーくーん』

『ピイアアアアア……』

突然聞こえたユイの言葉に飛び跳ねそうになるくらい驚いて、その場で顔を伏せ、ぶるぶると怯える。

ユイ　『うにゆ、ユキくん、驚きすぎなの。飲み物とってきたから渡そうとしただけなの』

ユイの手にはペットボトルのお茶が二本。本当に飲み物を取ってきてくれたようだ。ただ、僕はユイが何事もなかった安堵感からその体に思いつきり抱きついてしまう。

『ゆ、ユイ……、よ、よかったああ……。お化けに襲われたのかと思っただよおおお……』

ユイ　『大袈裟なの。それよりその、そろそろ離れてほしいの。そ、その、ゆいも恥ずかしいの……』

ユイが少し照れた表情を浮かべていた。しかし、恐怖から僕はどうしても離れることができなかった。

『も、もう少しだけこうしていい……？』

ユイ　『はあ……。仕方ないの。ユキくんの好きなだけくっついてると良いの』

すると、ユイはため息を吐きながら頷いていた。

『うん……。ありがとう……。』

【コメント】

…まだ始まってないのにw

：悲鳴助かる

：甘えん坊ユキくん

真心ココネ　：ゆ、ユキくん、大丈夫？

美空アカネ　：おっ、いい悲鳴

：ユキくん、クリアできるのか？

ユイ　：『うにゆ、大丈夫？　無理そうならまずはユイが——』

『ううん、が、頑張る。ゆ、ユイが僕のために考えてくれた企画だもん』

ようやく動けるようになったので、僕は再びコントローラを手にホラーゲームに取り掛かる。

ただし、チラチラとユイがどこにも行かないかを確認しながら――

ユイ　：『うみゆ、大丈夫なの。もうどこにも行かないの』

『う、うん……、信じてるよ……』

そう言いながらもチラチラとユイを見るのを忘れない。

ユイ　：『もう、ユキくんにはゆいがないとダメなんだから……』

【コメント】

真心ココネ　：ゆ、ユキくんのママは私だよ!?

：ココママがママ認めてて草

：ママ悔しそうw

美空アカネ　：私が拾って帰るぞ

：w w w

：暴走し始めてるw

『えとえと、怖いんですけど、ゲームの紹介をしてもらいます。ユイに。ぼ、僕は耳を塞いでるから……ってなんでヘッドホンを付けるの

!? うう……、さ、さつきより音がはつきり聞こえちゃうんだけど……』

ユイ : 『やっぱりゲームをするならヘッドホンは必須なの。それじゃあ、今日していくゲームを説明するの』

ユイがそういうと配信画面にホラーゲームの詳細が表示される。

それは有名なホラーアドベンチャーで、美術館から異なる世界へ飛ばされた主人公の少女を操って、元の世界へと戻る。というただのホラーではなく、しつかりとしたストーリーと謎解きの要素があり、名作として名高いゲームであった。

ユイ : 『説明するのは面倒だからいつも通りなの』
『えっ、な、なに……へ、変なことをしないでよ……』

【コメント】

・良いチョイスw
・人気どころできたな
・いつもの物臭さw
・しかし、ユキくんの耳には入らないw

ユイ : 『うみゆ、早速始めていくの』
『うう……、序盤を少し触ったから余計に怖いよ……。ひい……』

ゲームを始めると、すぐにちよつとした仕掛けで悲鳴をあげてしま
う。

【コメント】

・悲鳴いいw
・ユキくん涙目w
・ユキくん、がんばれw
・悲鳴助かる

『はぁ……、はぁ……』

僕は少し息を荒くして、目に涙を浮かべていた。
すると隣でユイが応援してくれる。

ユイ : 『うにゅー、ユキくん、みんな応援してるの。頑張るのー』
『う、うん、頑張……ピイアアアアアア!?!?』

突然ゲーム内でマネキンだと思っていたものが動き出して、思わず
大声をあげてしまう。

ユイ : 『うみゆ、とつても良い叫びっぷりなの』
『うう……、変なことを言わないで……、ピイアアアアアア!?!?』

ユイにツツコミを入れようとしても、ゲームのせいでまともにツツ
コめない。

ユイ : 『うみゆ、好きなことをし放題なの』

【コメント】

真心ココネ : 変なことをしたらダメだよ!?

: 悲鳴助かる

: ユイちゃん草

: 渾身の悲鳴回

: 悲鳴好きにはたまらない

: 悲鳴助かる

コメント欄では散々な言われようだった。

そもそも僕の悲鳴なんて誰が聞きたいんだろう……。

——うう……、こんなホラーなんかに負けては男が廃る。な、何かの本で確か男は包容力で女性を守ってあげるものだと書いてあった。ぼ、僕がホラーゲームからユイを守らないと！

チラッとユイの方を見て、更に気合いを入れる。

その瞬間にまたゲーム内で絵画が動き出す。

『ピイアアアアア……?!?!?』

思わず大声をあげてしまう。

ユイ：『うみゆ、ユキくんも喜んでくれて嬉しいの』

後ろでユイは満面の笑みを浮かべていたが、僕自身はそんなことを気にしている余裕は全くなかった。

◇◇◇

『ひぐつ……、ひぐつ……、そ、そろそろ終わり……だよね?』

ユイ：『ユキくん成分が満タンなのー』

ずっと叫び続けて四時間後。

いつの間にか僕はユイの膝の上に座り、すっぽりと彼女の腕の中に収まっている。

そして、ユイは満足そうな表情を浮かべていたが、僕は全く余裕がなくそのことについては触れない。

ずっと悲鳴を上げすぎて、反抗できる気力がなかったのもある。

しかし、それとは別に側にユイがいるという安心感のおかげでホラーゲームの恐怖も幾分か和らいでいた。

その点だけは感謝していた。

ただ、この企画を持ってきたのもユイ、ということとは忘れていない。

『わふううう……、ゴ、ゴールまだあ?』

【コメント】

：ユキくん、頑張れー

：あまり寝てないって言ってたもんな。そろそろ限界か？

：そろそろユイちゃんの出番？

：でもそろそろ終わりじゃなかったか？

美空アカネ　：いいぞ、もつと叫べー

海星コウ　：アカネ、正座する？

美空アカネ　：ユキくん、あとちよつとだから声を出さずに頑張れ

！

：w w w

：w w w

ユイ　：『ユキくん、もうすぐで一回目のエンディングだよ。あとちよつとだから……』

『そつか……、もうすぐゴールなんだね……。もう、ゴールしてもいいよね……。』

時刻はすでに二時を回っている。

昨日、まともに寝ていない僕はすでに眠気のせいでふらふらであった。

もちろん原因はそれだけではないが――。

ユイ　：『ユキくん、まだゴールしたらダメなの。それは死亡フラグなの』

【コメント】

：ユキくん、頑張れー！

：あと少しだよー！

：エンディングまで突っ走れー！

：死亡フラグwwww

みんなの応援とすぐ近くからユイの声援を受けながら、僕はなんとかエンディングへとたどり着く。

一回目ということもあり、エンディングはノーマルエンド。それでも頑張ったということもあり達成感はすごかった。

『や、やったよ、みんな……。僕、クリアできたよ……。』

ユイ：『よく頑張ったね、ユキ』

ユイが頭を撫でてくれる。

『えへへっ……。あ、ありがとう……。ユイが抱きしめてくれたおかげで僕も恐怖が――』

そこで僕の動きが固まった。

——そ、そういうえば僕、いつからユイに抱きしめられていたのだろ
う？

自然と顔が赤く染まっていく。そして、慌ててその場から離れようとする。

『あわわわっ……。ご、ごめん、ユイ。ぼ、僕、ずっと、ユイに抱きしめられていて……。その……。』

ユイ：『うみゆ、ゆいもユキくん成分をたっぷり補充できたから満足なの』

ユイが笑顔を見せてくれる。

それを見て僕はホツとため息を吐いていた。

だからこそ気づいていなかった。

ココネが「ユイはガチ勢だから、生きて帰ってきてね」と心配してくれた本当の理由を。

【コメント】

：ユキくん、おつ

：おつ

：おめでどう

：おめー

：お疲れ様ー

：おめでとー

美空アカネ　：良くやった。さすがは私のしもべだ！

海星コウ　：お疲れ様。頑張りすごかったよ

——祝福されると気持ちいいね。頑張った甲斐があるよ。

僕は笑顔でみんなに返事をする。

『えへへっ、みんなありがとう。怖かったけど頑張ってよかったよ。すごくストーリーもよくて、その、最後は怖さもあったけど、やっぱり先が気になってなんとかクリアすることができたよ。みんなの応援のおかげだよ。本当にありがとう』

クリアしたという安堵感からようやく心の底から笑うことができた。

ホラーゲーム。

確かに怖かったけど、でもここまで達成感があるのならまたやってもいいかな。

それに気づかせてくれたユイには感謝の気持ちしかなかった。

『ユイもありがとう。すつごく楽しかったよ』

ユイ　：『うにゆ、楽しんでくれてるならよかったの』

……？　なんだろう、今の言葉に何か違和感を感じただけけど？

【コメント】

：いい終わり方だった

：ノーマルエンドだな

：楽しんでくれてる？

：まるでまだ続みたいだな？

：いつものユイちゃんなら全てのエンディングを見るまで耐久だよな？

：やめて、ユキくんのライフはもうゼロよー

真心ココネ　：……ユキくん、まだ油断したらダメだよ

コメントを見てて、ようやく違和感に気がつく。

そうだ、終わりならここで最後の挨拶をしているはずなんだ。

それで綺麗に終われるはずだから。

でもユイは動こうとしない。

まるでまだゲームは終わっていないかのように。

『えとえと、も、もう放送、終わるんだよね？』

ユイ　：『うにゆ、もちろん、ゲームをクリアしたら終わるの』

『そ、それじゃあもう終わらないと……』

ユイ　：『うにゆ？　まだユキくんはクリアしてないよ？　エン

ディング、全部見てないよね？』

『え、!?!?』

嫌な予感はこれだったんだ……。

ユイはゲームのガチ勢だから、全てのエンディングを見て当然。
一つのエンディングを見て終わり、なんて考えはなかったんだ――
」。

僕を抱きしめてくれているユイはにっこり笑顔で告げてくる。

ユイ : 『うみゆ、残りのエンディングも頑張るの』

『あのあの、こ、これ以上は僕の体がその……』

ユイ : 『うみゆ、最後まで楽しまないとなの』

『あうあう……、ぼ、僕はもう十分に楽しんだし、ほらっ、たくさん叫んでもう喉がその……』

ユイ : 『うにゆ、みんなもここで終わるのはよくないよね?』

【コメント】

: ユキくん、頑張れ!

: こうなったらユイちゃんは誰にも止められない

: 耐久でもいつもこうだもんな

: ご愁傷様

真心ココネ : ユキくん……骨は拾うからね

『うう……、わ、わかったよお……。や、やればいいんだよね……』

覚悟を決めた僕は全エンディングを目指して突き進んでいくこと
になった。

もちろんすぐ後に悲鳴が木霊し始めることになる。

◆◆◆

全てのエンディングを見終えた時、すでに日が上りきったあとだった。
た。

『うう……、怖かったよおお……』

ユイ　：『うにゅ。よしよし、よく頑張ったの』

すでに涙目になりながらユイの胸元で震えてしまう。そんな僕の頭をユイはゆっくり撫でてくれていた。

【コメント】

：ユキくん、お疲れ様

：お疲れ様ー

：おつかれー

真心ココネ　：お疲れ様ー

『僕……僕……が、がんばった……、すう……』

ユイ　：『ユキくん、どうしたの？　えっ、ユキくん!?!』

心配そうな声を上げるユイ。

しかし、それに反応することもなく限界が来てしまい、放送中にも関わらず糸が切れたかのように意識が落ちてしまった。

◇◇◇

目が覚めると既に夕方だった。

いつの間にか僕には布団が掛けられており、隣で結坂が微笑みかけてくれていた。

「おはよう、ユキくん」

「うん、おはよ……って、あれっ？　僕、寝てしまって……。ほ、放送は？」

「大成功だったよ。これもユキくんのおかげだね」

結坂が手でVの字を作って笑みを浮かべてくる。

「アーカイブ、見る？」

「うう……、少し怖いけど見たいかな」

「わかったよ、それじゃあこっちに来て」

結坂に促されて、彼女の隣へと移動する。

そして、僕が寝てしまった後の放送を見ることになった。



『僕……僕……が、がんばった……すう……』

ユイ：『ユキくん、どうしたの？ えっ、ユキくん!?!』

結坂が必死に声を上げるが、僕はすっかり寝てしまっており、返事がなかった。

『すう……、すう……』

ユイ：『あつ、寝ちやったのか。ユキくん、頑張ったもんね……』

ユイはどこか安堵の表情を浮かべる。

【コメント】

：ユキくん、寝ちやったんだ

：たくさん叫んだもんね

：俺的にはご褒美でした

：そんなところだと風邪ひくよ？ 俺が持ち帰ってあげよう

：通報しました。代わりに俺が持つて帰る

：お前たちw

：ユイちゃん、素が出てない？
：珍しいな。というか素があつたんだ

ユイ 『うにゆ、ゆ、ゆいの素はこっちなな……。それとユキくんは寝顔も可愛い。持ち上がらない……。仕方ないの』

パサツ。

何かが掛けられる音が聞こえる。

それと同時に配信画面のユキくんの上にも段ボールが置かれる。書かれている文字は「睡眠中」で、更に頭上には『ZZZ……。』の文字が置かれる。

ユイ 『うにゆ、ユキくんも寝ちやつたことだし、寝息を聞きながら今日のゲームの総評にいくの』

【コメント】

：まだ続くのか!?

：ユキくんの寝息……

真心ココネ ：起こしたらダメだよ！

：本当にユキくんのママだなw

神宮寺カグラ ：コラボ……

：カグラ様、羨ましそう

：そういえばカグラ様の初コラボは誰がするんだろう？

神宮寺カグラ ：べ、別にコラボしたいわけではないからね

：わかりやすすぎw

ユイ 『うみゆ、今日のゲームの総評は「ユキくんは可愛かった」に尽きるの。怯えてるユキくんも必死にゲームをしてるユキくんもクリアしてるユキくんも全部全部、とっても可愛かったの。それを引き出せるゲームは最高以外の何物でもないの。みんなもそうだよね

？』

『すう……すう……』

【コメント】

：ユキくん、かわいいよ

：はあはあ

：通報しました

：直接見たい

ユイ　：『うみゅー、直接見れるのはオフをしてるゆいの特権なの。
ユキくんの初めてのお泊まりはゆいのものなの』

ユイは画面に向けてブイ、としていた。

そして、そこで配信は終わっていた。

この放送は終了しました。

『《＃羊布団　＃ユキユイ》突発オフコラボ！　ホラーゲー、ユキくん
がクリアするまで終われまてん《羊沢ユイ／雪城ユキ／シロルム三
期生》』

3．2万人が視聴　0分前に公開済み

☒1．0万　☒87　？共有　≡？保存　：

チャンネル名：Y u i | R o o m．羊沢ユイ

チャンネル登録者数3．7万人

◇◇◇

【コメント】

真心ココネ　：お、お泊まり!?

：俺も泊まりたい!

：通報しました

：ユキくん、もう寝ちやつてるよな?

：二人で一つのベッドか

第11話：ユキくん、動く!?

ユイとのコラボはトレンドに上がっていた。

それも「#ユキユイ」が日本で一位になっていた……。

他にも「#羊布団」や「#太陽堕ちないかな」なども入っていた。

——僕の黒歴史が……。

思わず頭を抱えてしまったのは言うまでもない。

しかも、ユイの家に泊まってしまった訳だし、大学も休んでしまった。

その日一日はとても配信をする、という気分にはなれなかった。

「ユキくん、もう一日泊まっていてもいいんだよ？ ほらっ、今日も

コラボしようよ」

「ぼ、僕は今日は休むよ。流石に疲れたから……。ユイがまた配信するなら見に行くよ」

「そっか……。ユキくんは耐久に慣れてないもんね。しょうがないなあ。わかったよ、それじゃあ、絶対に見に来てね」

ユイは苦笑を浮かべながら言う。

「あと、またオフコラボしようね」

「え、えと、ほ、ホラーじゃなかったらね……」

「えーっ、次はVRのホラーゲームをしようと思ったのに……」

「そ、それはユイが一人の時にするといいよ。そ、それじゃあね」

逃げるようにユイの部屋から出てきた僕は自分の部屋に戻ってきて、ようやく人心地つく。



雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki | yukishiro
今

その……、昨日ちよつと頑張りすぎましたので、本日は配信をお休みさせていただきます。ご、ごめんなさい。また次の配信の時に拾いに来てください……

早速カタッターで本日の休みを報告する。
そして、同期の配信予定を見てみる。

「あつ、今日はカグラさんも放送するんだ……」

ココネやユイも今日は放送するみたいだが、思い返すとカグラの放送をライブで見に行ったことがほとんどないことに気づいた。

「せっかくだし、今日はみんなの放送に顔を出すかな」

配信しないと決めると意外と気持ちに余裕ができて、さっそくココネの配信から見に行くことにした。

◇◇◇

『《雑談》ユキくんの初めて取られたよー《真心ココネ／シロルーム三期生》』

1. 2万人が視聴中 ライブ配信中
☒541 ☒52 ?共有 ≡?保存 …

ココネ：『うう……、ユキくんの初めてを取られましたよー』

配信画面を開いた瞬間にココネが泣いている姿が目映る。
その姿を見た瞬間に驚いて声を上げてしまう。

「えっ、っ、ココママ!?!」

そこまで僕とのオフを楽しみにしてくれていたのだと思うと、なんだか胸がギュツと痛んでくる。

【コメント】

：ユイちゃんが一步先を行ったね

：ユキくんの弱点をうまくついたもんね

：でもココママもオフをするんじゃないの？

ココネ：『うん、オフはしますよ。よーし、こうなったらユキくんを虜にする方法をみんなで考えましょう!』

満面の笑みを浮かべるココネ。

——ココママ、なんて恐ろしいことを考えてるんだ。……って、僕が聞いてたらダメな話なんじゃないのかな？

ココネ：『まず配信前のお買い物は基本だよな？ そのあとはどこかでちよつといいランチを食べて……。うーん、でも、ユイちゃんがいうにはユキくんはユイちゃんよりも小さいみたいだし、お子様ランチとかがあるファミレスの方がいいのかな?』

——ちよつと待って!?! ココママの中で僕の年齢って何歳になってるの!?!

いくらなんでもお子様ランチを食べる年じゃないことくらいわかりそうなのに。

そのことを思わずコメントしそうになるが、グツと堪える。

どういう行動をしてくるかわかれば事前に防ぐ対策を取れるからだ。

【コメント】

：子供扱い草

：ユキくんw w w

：シロルームは18歳以上だよな？

：w w w

：ロリロリ

ココネ：『それからそれから、昼から映画とか行くのもいいかも。ユキくん、表情豊かそうだから見てるだけで楽しめるし、ユイちゃんみたいにホラーの映画を見て……』

——あれっ？ なんだろう。行動がまるでデート……ではないか。そもそも性別を男だと思われてないし、子どもに思われてるなら休日に遊びに出掛けてるだけか。

ココネ：『それで夜は一緒にお風呂に入って、それからパジャマで放送するんですよ。二人で布団に寝転がりながら……。それで放送が終わったらそのまま寝るんです。とっても楽しみですわね』

ココネが幸せそうな笑みを浮かべていた。
ただ、僕は動きが固まった。

【コメント】

：全部放送してくれ

：楽しみ

：雪城ユキ　：い、一緒にお風呂はちよつと……

：あつ、ユキくんがいたw

ココネ：『あつ、ユキくん。ちょうどよかった、今度のオフだけど、どんなパジャマが良いですか？　一緒に見に行きますか？　うーん、

今から楽しみですね』

【コメント】

雪城ユキ ……そ、その、ぼ、僕、パジャマは持つてるから………そ、それじゃあ

：あつ、逃げたw

：逃げたw

：wwwwwwww

ココネ『うーん、やっぱりちゃんと手綱を付けないと逃げられますか……。オフの時も気をつけないと……』

最後にココネの恐ろしい言葉を聞いた僕は次にユイのチャンネルへと向かった。

◇◇◇

『雑談』睡眠枠 《羊沢ユイ／シロルーム三期生》

1. 5万人が視聴中 ライブ配信中

☒652 ☒41 ?共有 ≡?保存 ……

ユイの配信画面は相変わらずだった。
もこもこの服を着たユイがクツションを抱えて眠っている。

ユイ ……『すう……、すう……』

「つて、本当に寝てる!?!」

その姿を見た僕は慌てでユイに対してコメントをする。

【コメント】

雪城ユキ ……ユイ、起きて!

：あつ、こつちにユキくんがw
：ユキくん、逃げて。罨だよ
：ああ、犬が引つかかってる……
雪城ユキ　：えつ、罨？

ユイ　：『うみゆー、ユキくんなの。やっと来てくれたのー』

ユイが突然目を覚まして起き上がる。

ユイ　：『待ってたの。ユキくん、通話して良い？』

【コメント】

：唐突すぎるwww

：wwwwwwwww

雪城ユキ　：えつと、今はそのちよつと……

ユイ　：『うみゆー……、残念なの。ならもう一回寝るの……』

それから本当にユイが眠りだしてしまう。

【コメント】

雪城ユキ　：ちよ、ちよつと待ってよ!?　なんでそうなるの!?

：ユキくん必死w

：罨とも気づかずにw

：開始したときに宣言してたからな。ユキくと喋るまで寝るって

w

ユイ　：『うみゆー！　バラしたらダメなのー!!　ゆいはただユキくんの声が聞きたかっただけなの。今日、ユキくんの配信、お休みだから』

ユイが駄々っ子のポーズをする。
ただ、よく考える。ユイは結坂なんだよな……と。
つまり、これもなにか考えがあつてしていることなのだろう。
じつとユイの考えを読む。
さすがに昨日の今日でコラボをしようなんてことは……まあ、考え
ていても受けてもらえるとは思っていないだろう。
全力で僕は拒否するから。

そうなつてくると本当に声を聞きたいだけ？
いやいや、それこそあり得ない。さつきまで一緒にいたわけだし。
それにどうして僕の声を聞きたいなんて思うの？
しかも配信中に……。

つまり、僕をからかおうとしているのだろう。
現に僕が来てからコメントが多くなっている気がする。

【コメント】

：ユキユイ待機

：やっぱりユキユイはいいよな

雪城ユキ　：わ、わかったよ。配信が終わったら、あとから電話す
るよ

：ユキくん優しい

ユイ　：『うみゆ、なら今日の放送はこれでおしまいなの。今すぐに
ユキくんに電話してくるの』

本当にまだ始まったばかりの放送を終わらせそうなユイの言葉を
聞いて、僕はすぐに通話のボタンを押していた。

『ちよ、ちよっと、ユイ!?　なんで配信を終わらせようとしているの!?!』
ユイ　：『うみゆ?　ユキくんと通話するためなの?　それよりも

ユキくん、通話してよかったの?』

『だ、大丈夫じゃないけど、まだ放送時間があるでしょ。ほらっ、勝手に終わらせないで頑張つて……。僕の声聞いたら大丈夫なんだよね?』

ユイ :『うみゆつ、ユキくんに言われたら頑張るしかないのー』
『そ、それだけ言いに来ただけだから。そ、それじゃあ、僕はこれだー』

ユイ :『に、逃げるの早い!?』じ、自己紹介くらいして欲しいの』
『わ、わかったよ。わふー、羊飼いのみんな、こんばんはー。シロルム三期生の雪城ユキです。じゃあ、今度こそ僕はこれで——』

ユイ :『うにゆ、ユキくんの声を聞けたからゆいは満足なの。今日はこのくらいにしておくの。ユキくん、お疲れ様なの。しつかり二十四時間寝ないとダメなの』

一日丸々休めつてことを言いたかったのかもしれない。

確かに他人の配信を見て回るのもいいけど、普段知らない人の前で配信をするなんて慣れないことを続けているので精神的に消耗している。

たまにはじっくり休むことも必要だった。

もしかして、この注意喚起をするためにわざわざ僕を呼んだのだろうか?

さすがにそれは考えすぎな気がするけど、一応お礼を言っておく。

『……ありがとう、ユイ。今日はゆっくり休むね。羊飼いのみんな。少しだったけど、お疲れ様ー』

ユイ :『またなのー』

【コメント】

: ユキくん、ばいばーい

: 早いwww

: ユキくん、お疲れ様ー

：ユイちゃんが大人しく引き下がってる!?
：明日は雪でも降るのか!?

ユイ　：『うみゆ、明日はユキくんがゆいの放送に降ってくるの』
『降らないよ!?!』

通話を切ろうとしていたけど、思わず言わずにはいられなかった。

『と、とりあえず、またそのうち……』

ユイ　：『うみゆ、あとから電話も待ってるの』

——もしかして、二回話そうと考えたとか? と、とりあえずユイのことは気にせずに、カグラさんの放送へ行こう。

◇◇◇

『《#姫のご乱心》孤高を生きていくわよ! 《神宮寺カグラ／シロルム三期生》』

8, 314 人が視聴中 ライブ配信中

☒ 214 ☒ 11 ? 共有 ≡ ? 保存 …

カグラの放送に来たのだが、なんだか違和感を感じてしまう。まるでお酒でも飲んでいられるかのようなやさぐれ方をしていた。

カグラ『べ、別に私は誰かとオフコラボしたいわけじゃないのよ? 私は一人がいいのだから……』

何やら必死にリスナー達に話しかけていた。

その様子を見ればカグラが誰かとオフ会をしたがっていると言うことが良くわかった。

でも、自分からは中々言うことができないのだろう。

ただ、それなら僕にもできることがある。
なんだかんだでカグラさんは僕のことを助けてくれた。

初配信の時は心配してコラボをしてくれたり、初通話の時も一番最初に声をかけたりしてくれた。

自分からオフ会を言い出せないのなら、僕から声をかけるべきだよ
ね？

恩を仇で返してはダメだ。
しっかりと助けてもらった分は返さないと。

少し手が震えている。
当然だろう。今まで自分からそういったことはしてこなかったのだから。

——もし、拒絶されたらどうしよう。

今まで否定され続けた人生が僕に恐怖を抱かせる。

でも、ここは動くべき！ いや、動かないといけない!!

僕は覚悟を決めるとコメント欄でまずは確認を入れる。

【コメント】

雪城ユキ …えと……、か、カグラさんはオフコラボ、したくないの？

緊張して、文字を打つ手が震えてしまう。

本当はもっとストレートに聞きたかったのだが、少し遠回しに言っ
てしまった。

しかし、僕がいるとは思ってなかったのか、カグラは慌てていた。

カグラ：『ゆ、ユキ!? そ、そんなことないわよ!? わ、私は別にオ
フコラボしたくないわけじゃなくて、その……あの……』

【コメント】

：こっちにもユキくんがw

：カグラ様テンパってるw

：ユキくん、ナイスツツコミw

：ポンコツモード突入w

酷い書かれようであるけど、これはこれでカグラのことを楽しんで
くれているともいえるのだろう。

でも、カグラは嫌がっているわけではないようだった。
それなら――。

僕は覚悟を決めるとカグラに一通、チャットを送る。

ユキ：「今、少しだけコラボに入っても良いかな？」

見てくれたらカグラだったら何らかの反応を見せてくれる。
それがなければコメントでチャットを見て、つて書いたら良いだろ
う。

そう思っていたのだが、案外早くカグラは反応してくれる。

カグラ：『えっ!? ど、どういうこと……!? だ、大丈夫よ』

慌てながらなんとか頷いてくれるカグラを見て、僕はキャスコード
の通話ボタンを押していた。

◇◇◇

他人のコラボに入るのはやはり、緊張はしてしまう。

しかし、今回は覚悟を決めて動いたのだから、と自分に言い聞かせて気持ち^ほを落ち着ける。

カグラがユキくん in 段ボール^くを表示させたのを確認した後で、みんなに向けて挨拶をする。

『わ、わふうー、カグラ親衛隊の皆様、こんばんはー。シロルーム三期生の雪城ユキです。き、今日は僕がカグラさんを拾いに来ました。よろしくお願ひします』

僕が頭を下げるとカグラは慌てて言ってくる。

カグラ『ちよつ、ちよつと、いきなり何を言ってるのよ！ わ、私^が拾われるわけないでしょ!?!』
『えと……、親衛隊のみんなはどう思う？ 僕が拾って行って良いかな?』

カグラが簡単に同意してくれるとは思っていなかったの、リスナーの人に確認をする。

【コメント】

…どうぞ

…どうぞどうぞ

…どうぞどうぞ

…ユキくんが積極的だw

…今日はユキくんが色んなところに現れるw

…珍しいw

…ユキくん、大人になったんだね……

…おま、言い方w

『わ、わふう、ありがとうございます。では、カグラさんは僕が拾っていきます』

カグラ：『だ、だから、ユキもなにを言ってるのよ!』

『えとえと……、そのオフ……』

カグラ：『へっ!』

『だ、だからその……、お、オフコラボを僕としてくれないかなって……』

少し緊張した声でカグラに言う。

もつと話の流れでスムーズに言えると思ったのだが、さすがに緊張してしまつて声の上擦つてしまった。

カグラ：『お、お、オフコラボ!? な、なにを言つて——』

『ら、来週はココママとのオフコラボがあるし、その次はアカネ先輩たちとのコラボがあるから……、あ、明後日とかはどうかな?』

——カグラさんも僕と同じで日が離れてしまつたら断つてくるはず。

日に日に怯えてしまう気持ちはよくわかる。

だからこそあまり予定の日は遠くしない。

それにカグラから日にちを言ってくれることはないだろうから、自分から空いている日を言う。

カグラ：『い、いきなりそんなこと言われても。べ、別にオフをしたいわけじゃ——』

『だ、ダメかな……?』

カグラ：『うっ……、そ、そんなことないわよ! ゆ、ユキがそこまですりたいて言うなら仕方ないわね。ユキの頼みだもんね。しようがなくオフコラボを上げてあげるわよ』

カグラは嬉しそうに上擦つた声で返してくる。

——よかった……、断られなくて……。

僕はどこか心の中でホツとしていた。

みんなこんな気持ちでコラボの申し込みをしていたんだな、と思うと今まで簡単に断っていたのが申し訳なく思えてくる。

——次からはもっと真剣に断ろう……。

『と、ということでも明後日にカグラさんとオフコラボをすることが決まりました。内容は追って報告します。そのその……、わ、梓はカグラさんの方で良いかな?』

カグラ：『ええ、もちろん構わないわよ』

『そ、それじゃあ、僕はこ、この辺りで……。か、カグラさん、あとからチャット送るね』

それだけ言うと僕は通話を消していた。

【コメント】

：【速報】カグユキオフコラボ決定!!

：よかったね、カグラ様

：カグラ様念願のオフコラボ

：ポンコツ同士、どんなコラボになるのか……

：ユキくんもお疲れ様w

：今日のユキくん、積極的だったね

：今から楽しみw

：カグラ様、嬉しそうw

カグラ：『べ、別に私は嬉しいとか思っていないわよ!! ゆ、ユキが言うから仕方なくコラボしてあげるだけなんだからね。ユキ、断ると泣いてしまうだろうし——』

カグラは必死に言い訳をしていたが、その表情から笑みが消えることはなかった。

この放送は終了しました。

『《#姫のご乱心》孤高を生きていくわよ！《神宮寺カグラ／シロルム三期生》』

1. 8万人が視聴 0分前に公開済み

☒ 2,741 ☒ 12 ? 共有 ≡ ? 保存 …

チャンネル名：k a g u r a | R o o m . 神宮寺カグラ

チャンネル登録者数2. 6万人

第12話：十万人記念コラボ配信

——やってしまった……。つい勢いでカグラさんにコラボを申し込んでしまった。しかもオフで……。

カグラの配信終了の文字を見ながら僕は思わず頭を抱えていた。

しかし、自分から申し込んだ以上、悩んでいても仕方ない。

まずは放送の内容を考えるのと、カグラとどこで待ち合わせるのか。あとしないといけないことは……。

頭を悩ませているとチャットの通知音が鳴る。

マネ：「ユキくん、聞きましたよ」

担当者さんからの突然の連絡。

しかも僕に関することらしい。

一体突然なにを言い出しているのだろう、と僕は思わず聞き返してしまう。

ユキ：「えっと、な、なにを聞いたのですか？」

マネ：「オフの件ですよ。ユキくんから申し込んだ、とか。ここまですユキくんが成長してくれて、担当として嬉しいですよ」

ユキ：「ぼ、僕だって本当はしたくないですよ!?! で、でも、カグラさんには色々と助けてもらったし、僕の力になれるなら……」

マネ：「うんうん一応他の人なら私に報告してから決めて欲しいところですけど、同期なら大丈夫ですよ」

あつ、そうか。担当者さんにもコラボを決める前に連絡しておかないといけなかったんだ。

ユキ：「ごめんなさい、勝手に決めてしまって……」

マネ :「いえ、全く問題ないですよ。むしろ毎日でも構わないですよ」

ユキ :「ま、毎日は僕の体が持ちませんので……」

マネ :「わかってますよ。だけど、随時他の人ともコラボしてもらいますよ?」

ユキ :「だ、大丈夫です。もうユイともココママともコラボしましたから……」

マネ :「アカネさん達のあとはユージさんやユキヤさんとかともコラボを予定してます。多分ユキくんならこのお二方はやりやすいんじゃないかなと……」

ユキ :「た、確かにやりやすいです……」

マネ :「炎上の恐れもあるので、男性とのコラボは悩ましいところではあるんですけどね」

ユキ :「えっ!? そ、それはこ、困ります……」

マネ :「大丈夫ですよ。安心してください」

ユキ :「あ、安心できないですよ……」

まさか、同性同士のコラボがそんなに恐ろしいものとは思わなかった。

いや、ユキくんは一応認識は女性になるのだろう。

そうになると、男女の組み合わせは炎上の恐れがあることも分かった。

担当さんは大丈夫と言うけど、僕の新しい悩みの種ができることとなった。

マネ :「あつ、『コラボすることになった』報告は積極的にしてくださいね。特にユージさん達のコラボは」

ユキ :「ほ、本当に大丈夫なのかな……」

マネ :「それよりもユキくん。カグラさんとのコラボ内容、決まってるのですか!？」

ユキ :「えっと、そ、それはまだなんですよ……」

マネ : 「それなら料理対決……なんていうのはどうでしょうか？」
ユキ : 「ぼ、僕、料理なんてできませんよ？」

マネ : 「カップ麺くらい作れますよね？」

ユキ : 「そのくらいなら……」

マネ : 「それなら問題ないです。負けたカグラさんには罰ゲームとして、お泊まりオフコラボを行ってもらいますので」

ユキ : 「ま、まだ、カグラさんが負けると決まったわけじゃないですよ……？」

マネ : 「カップ麺が作れたら勝てますよ。ユキ君のキャラ付けにもなりますし……」

ユキ : 「わ、わかりました。それなら料理対決を提案してみますね」

本当に良いのかな……と思いながらも担当さんから聞いた放送内容をそのままカグラに伝えてみる。

すると、すぐに了承の返事がきた。

——カグラさん、料理は得意って言ってたもんね。杵でしょうと思ってるって。やっぱりこれって担当さんの罠なんじゃないかな？

一抹の不安を抱えながら、放送当日まで必死に料理の練習をするのだった。



そして、オフの当日。

さすがに僕の家は母さんもいるので、カグラさんの家へお邪魔することになっていた。

ガチガチに緊張したまま、カグラの部屋があるマンションへとやってきた。

そして、中々覚悟が決まらずに玄関前をうろろろしていると突然

ドアが開く。

「いつまでそうやって迷ってるのよー!」

出てきたのは長めの金髪の少女だった。

背丈は僕よりも十センチは大きく、スレンダーな体型。そして、白のパーカーと赤いスカートをはいていた。

少しつり目なところがキツイ印象を与えるかもしれない。

それでも綺麗な少女だった。

「えっ、あつ、ごめんなさい……。その、僕……」

「ユキでしょ!? 早く呼びなさいよ、全く……。入って来なさい」

「う、うん……。し、失礼します……」

カグラに案内されるがまま、僕は部屋の中へと入っていく。



カグラの部屋は最低限の家具しか置かれていなかった。

ただ、配信用の部屋にはパソコン機器がしつかり置かれており、いくつかのモニターや見たこともない道具がいくつも置かれている。

「無骨な部屋で悪かったわね」

じろじろと部屋を見ているとカグラが不満そうに告げてくる。

「そ、そんなことないよ……。カグラさんの部屋はー」

「……田島瑠璃香よ」

「えっ!?!」

「私の名前。瑠璃香と呼んでくれたら良いわ」

「あつ、そ、そうだね。ぼ、僕は小幡祐季です……。好きに呼んでくだ

「やい……」

「ユキはユキで良いわけね。あの担当が考えそうなことだわ」

瑠璃香は腕を組んで眉をひそめていた。

確かに普通なら同じ名前にすることはない。

それをあえて同じ名前にする。

色々と理由は考えられる。

「多分、僕がポロツと自分の名前を言うかもしれないって思われたんだろうね」

「ユキならあり得るわね」

「さ、さすがの僕でもそんな事はしないよ!? そうじゃないと自分のことがバレてしまうし……」

「それもそうね。でも、ユキって本当にイメージ通りの姿よね。なんというか、子犬っぽいというか」

「べ、別にそんなことないと思うんだけどな……」

オドオドとしながら、置かれている機械を眺める。

僕の家には担当さんから受け取った分しかないから少し興味があつた。

マイクだけでもいくつも種類があるし、モーションキャプチャーの道具もあつた。

「かぐ……ううん、瑠璃香さんって機械に詳しいんですね。僕は全然だから羨ましいです」

「ど、どうせ女らしくないって思ってるんでしょ?」

「そんなことないよ? むしろかっこいいと思ってるよ!」

「えっ、そ、その、あ、ありがとう……。で、でも、私もユキみたいに女の子らしくになりたいのよ」

「えと……、ほ、僕は別に女の子らしくなくていいんだよ……」

「ーそうだったわね。本当にユキが男だなんて、直接見た今も信じ

られないわよ」

何故か初めから瑠璃香には僕の性別がバレていたらしい。
そのことに驚いてしまう。

「えっ!?! ど、どうして?..」

「普段のチャットとかでわかるでしょ? まあ、V t u b e rには性別は関係ないものね。私としてはボーイチェンでバ美肉してるのかと思っただけだね」

「ば、ばび……?!?」

「まあ、ユキは今のユキのままでもいいってことよ」

「えっ?.. うん、ありがとう……」

「なんか調子狂うわね。まあ、ユキと一緒にだといつもだけどー」

「えと、それって褒めてる?..」

「……どうかしらね」

瑠璃香は楽しそうに笑っていた。

それを聞いて僕は頬を膨らませていた。



「配信までは時間があるわね。ユキ、少しモーションキャプチャーを使ってみる?..」

「えっ、いいの!?!」

流石にアバターの全身が動いている姿は興味がある。

担当からも3Dアバターを作ってるとは言われていたが、それなりの値段がするモーションキャプチャーはまだ手が届かなかった。

「アバターは以前使っていた私のやつしかないけどね」

それでも自分の動きに合わせて動くのは楽しみであった。
そんな事を思っていた時に担当さんから連絡が来る。

マネ : 「ユキくんの3Dアバターとミニアニメができましたよ。
早速使ってくださいね」

ユキ : 「えと……、3Dはお気に入り登録者十万人の時にお披露目
なんじゃなかったのですか?」

マネ : 「ええ、それでユキくんの登録者数は今9・9万人ですよ?
日に日に増えていきますから」

ユキ : 「……えっ!?!」

慌てて自分の登録者を見に行く。

すると担当さんがいう通り、そこには「9・9万人」の文字が浮か
んでいた。

「う、うそ……!?! いつの間にこんなに増えて……」

「まあ、ユキの人気を考えると当然ね」

隣で頷く瑠璃香。

しかし、僕は信じられずに呆然とその数字を見ていた。

「ま、前の配信終わった時はまだ八万人だったのに……」

「アーカイブでも増えていくわよ。このままトップに上り詰めるしか
ないわね」

「うううう……、僕はほどほどでいいよお……」

思わず頭を抱えてしまう。

マネ : 「見ましたか? だから今日は十万人記念配信とコラボ配
信の二つ、してくださいね」

ユキ : 「きよ、拒否権は?」

マネ : 「ニコッ」

ユキ : 「な、ないんですね……」

僕は思わず頭を抱えてしまう。

マネ : 「せっかくなので3D配信をしてみようかしら？」

ユキ : 「そ、そうですね。それをしてみます……」

マネ : 「では、よろしくお願いしますね。アバターとミニアニメを送っておきますから」

ユキ : 「み、ミニアニメまで……」

知らないうちにどんどんとユキくん関係が進んでいつている。一体どこまで広がっていくのか……。

「えっと、3Dのやり方、教えてもらっていいかな？」

「ええ、もちろんよ」

瑠璃香に教わりながら、僕は配信の準備を進めていった。



雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki_yukishiro
今

ま、まもなくお気に入り登録者数が10人ということで、12時から10人まで配信させていただきます。色々と初お披露目もあるので見に来て下さいね。わ、わふー #犬拾いました #カグユキ

相変わらず配信前の告知は緊張してしまう。

しかも今は瑠璃香によって、モーションキャプチャーが付けられている。

更に瑠璃香の家のPCを借りて配信の準備をしていた。

「まあ、こんなところね。開始前にはもらったミニアニメを付けておいたわよ」

「うん、ありがとう……。助かるよ」

「いいわよ。その代わりに昼の記念配信もコラボさせてもらおうわよ？」

「もちろんだよ……。僕一人だどこまで話できるかわからないから……」

「ふふつ、ユキの人気にあやかって私もお気に入り増やすわよ」

「えつと、僕にできることだったらいくらでも手伝うよ」

「それなら概要欄に私のページを張っておくわ。それで十分よ」

配信の準備を全て瑠璃香がしてくれるので、僕としては本当に楽をさせてもらっていた。

サムネまでも準備してくれて、僕はただ放送に備えるだけで良かった。



『《#犬拾いました #カグユキ》登録者数10人超えるまでコラボ配信。他にも色々と報告があるよ《雪城ユキ／神宮寺カグラ／シロルム三期生》』

2.0万人が待機中 20XX/05/14 12:00に公開予定

☒957 ☒6 ?共有 ≡?保存 …

「待ってる人数、おかしくない!?!」

「ユキなら普通じゃない? 私だと考えられないけど……」

瑠璃香はどこか遠い目をしていた。

「だ、だって、今は昼……」

「それよりミニアニメ、流すわよ。音声も入るから注意してね」
「うん、わかったよ」

配信開始を瑠璃香に任せて、僕は息を整える。

そして、画面にミニアニメが表示される。

段ボールに入ってるユキくんが顔を出して、隠れて……を繰り返す
単調なもの。

ただ、やっぱりそれだけでもあるとないだと全然動画の雰囲気
違った。

【コメント】

：うおっ、アニメがついた

：既に登録者は10人超えてる件w

：10万人も超えてないか？w

：ユキくん、今一番伸びてるもんな

：そっか、今日はカグラ様とオフの日か

：10万人超えそうだったから慌ててしたんだろうな

：このアニメとかも設定はカグラ様がしてそうw

：家事以外のことはできるもんな、カグラ様w

：10万人突破おめでとー

：おめでとー

：おめわふー

：おめでとー

羊沢ユイ　：おめでとー

真心ココネ　：おめでとー

美空アカネ　：おめでたー

：アカネさん、違うw

：相変わらずの暴走www

海星コウ　：おめでとー。アカネは回収するね

真緒ユキヤ　：おめでとう。よくやった

野草ユージ　：チーっす、おめおめちゃん

：一期生全員集合w

：ユージ草

：ユージ草

姫乃オンプ　：おめでとーなのですー

貴虎タイガ　：おめっす！

氷水ツララ　：おめでとうございます

猫ノ瀬タマキ　：おめでとーだにや

：うおっ、二期生まで全員いるぞ!!

——えっ!?

驚きのあまり声が出そうになったのをかろうじて抑える。

シロルーム二期生。

シロルーム人気を加速させた人たちで、その特徴はなんとと言っても個性豊かな面々だった。

まるで本物のお姫様。のんびりとした口調で話す。

ウェーブがかったピンクの長髪と白のフリルがたくさんあしらわれたドレス。とてもスタイルが良い。

ゲーム以外はほとんど完璧な姫乃オンプ。

二期生の獣人枠の一人。

黄色と黒のコントラストな髪と同じ柄の袖なしワンピース。トラの耳と尻尾がある。

常に暴走しているのになぜか最後は綺麗に収まるトラブルメーカー、貴虎タイガ。

ミステリアスな少女。

蒼銀の髪は肩より少し長く、水色の少しブカブカのワンピースを着ている小柄な少女。

ジト目をよくする口数少ない氷の女王、こおりみずつらら氷水ツララ。
猫オブザ猫。

茶色のショートカットをしてるが、なぜか制服を着ている。猫耳と尻尾がある。

常に面白い方向に転がるように計算して、場をかき乱すだけ乱していく猫ねこのせたまきノ瀬タマキ。

二期生はまとめるとこんな感じの人たちだった。

一期生同様に僕からしたら雲の上の存在。

そんな人たちが目の前にやってきたのだから、緊張で体が固まってしまう。

そんなタイミングで配信が開始される。

ただ、僕は緊張から声の上擦ってしまう。

『わ、わ、わふうふう……』

【コメント】

：わふー

：わふー

：わふー

：わふー

：わふー

猫ノ瀬タマキ :あれっ? 今日^は段ボールもなしにや?

:姿見えないよー?

:ユキくん、なんか緊張してる?

『あああう、そ、その……あの……、き、今日は僕のお気に入り十人までコラボ配信に来てくれてありがとうございます……』

【コメント】

：10人w

：wwww

：草

：もう10万人も超えてるよw

：まだ姿が見えない……

『あつ、本当だ……。それじゃあ、今日の放送は終わります。お疲れ様でした……』

カグラ：『つて、まだ始めてもいないでしょ!? それに十人じゃなく
て十万人でしょ!』

『ううう……。もう配信の目標は達成したからいいでしょ……』

カグラ：『ダメに決まってるわよ! ほらっ、早くやりなさい!

私、挨拶もしてないのに喋ってしまったでしょ!』

『カグラさんがこのまま喋ってくれて良いんだよ……』

【コメント】

：このやりとり久しぶりw

：いつものユキくんだw

：www

：最近、ユキくん大人だったもんねw

：お帰り、俺たちのユキくんw

真心ココネ：ユキくんは私のですよ!

：ココママ草

：ママ草

『わ、わかったよ……。頑張るよ。頑張れば良いんだよね……。えと
えと、みなさん、こんにちは。雪城ユキです。本日は僕の登録者十人
記念に来てくださってありがとうございます。今日はこのあとのコ
ラボも控えていますので、カグラさんに来てもらいました。それじゃ
あ、あとはよろしく……』

カグラ『今日はユキが仕方なくオフをして欲しいといったから、来てあげたわよ。決して私がしたいって言ったわけじゃないからね。そこは間違えないように。あと、ユキは逃げようとしないうこと!』
『うう……、わ、わかったよ。今日の設定とか諸々はカグラさんにしてもらいました。ミニアニメ、どうでしたか？ 僕、動いてましたよね？』

【コメント】

・可愛かったよ

・お持ち帰りしたい

・ここまで画面には誰もいない

・可愛い

『わふっ……、それはよかった。それじゃあ、今日の配信はここまで――』

カグラ『だーかーらー、違うでしょ!! 今日ユキくん十万人突破記念と言うことで、超えたタイミングから3Dユキくんが登場する予定だったのよ。最初から超えたせいでユキくんが緊張してぐだぐだになってるけど』

【コメント】

・ぐだぐだを見に来てるから大丈夫w

・3D!?

・わくわく

・まだー?

・もう10万人超えてるよー?

羊沢ユイ : うみゅー、段ボールから引きずり出す?

猫ノ瀬タマキ : にやにやにや、ユキくんはイジリがいがありそうだにや

・タマキパイセンに目を付けられたユキくんwww

『うううう……、わ、わかったよ。そ、その、段ボールがないから恥ずかしいんだけど……』

画面に僕の動きに合わせて動くユキくんが表示される。
一番標準のワンピース姿のユキくん。
それが全身で表示されている。
ややうつむき加減なのは、僕が恥ずかしがっているから、というのが大きい。

『も、もういいかな?』

カグラ：『もちろんダメよ。せつかくの3Dなのだからもっと動かないと!』

『うう……、わ、わかったよ……』

カグラ：『それじゃあ音楽鳴らすから踊ってみてね』

『えっ!? む、無茶ぶりだよ……』

本当にカグラは音楽を鳴らし始める。

その音に合わせてとりあえず体を動かしてみる。

ただ、あまりにも突然のことで足が絡まってその場で転けてしま
う。

『わぶっ!』

カグラ：『ゆ、ユキ!? だ、大丈夫!』

カグラが慌てて近づいてくる。

僕は苦笑を浮かべながらその場で立ち上がる。

『う、うん、大丈夫……。ってほ、放送中だよ。い、今のところはカッ
トで……』

カグラ：『ライブ配信でしょ!』

【コメント】

：毎回何かしてくれるユキくんw

：草

：w w w w w

：3Dユキくんもかわいい

：かわいい

：お持ち帰りしたい

：犬のおまわりさん、ここです

貴虎タイガ　：犬と虎、どっちが強いかな勝負しよーぜ

猫ノ瀬タマキ　：猫もいるのにな

羊沢ユイ　：うみゅー、ゆいもいるのー

真心ココネ　：よ、妖精も……

：ココママ、無理ありすぎw

第13話：料理？対決、開始

カグラ：『それよりも今日は色々告知があるんでしょ？ 頑張りなさいよ』

『うん、ありがとう……カグラさん。えとえと、今日はこの3Dの僕とミアアニメの初お披露目でした。そのその、三万人と十万人の記念にもらいましたので……。あとはコラボの予定を発表したいと思います。カグラさん以外は担当さんが勝手に決めちゃってたんだよ……。僕はその……一人で隠れて、誰も見ていないところで配信したかったのに……』

カグラ：『……ユキらしいわね。まあ、私は一緒にやりたいなんて人はいないでしょうけど……』

【コメント】

：また自虐的カグラ様に戻ってしまった

：大丈夫だよ、カグラ様。ユキくんがいるよ。

姫野オンプ：同じ姫ですし、私とコラボしますかー？

野草ユージ：た、担当からってまさかここで発表するのか？ 燃えるぞ？

：ユージ草

カグラ：『えっ、ひ、姫野さん!?!』

『カグラさん、おめでとう。コラボ決まったね』

カグラ：『わ、私は別にしなかったわけじゃないんだからね。で、でも、ありがとうございます。そ、その……また後から連絡します』

【コメント】

：カグラ様おめ

：おめでとう

：おめでとー

姫野オンプ：ではお待ちしますねー

： 姫姫コラボ楽しみ

コメントが祝福の言葉で覆い尽くされる。
今なら言えるかもしれない。

僕は覚悟を決めて言う。

『えとえと。その……、僕がコラボ決まってるのは来週のココママとのオフト、その次はアカネさん達とのコラボ。あとは真緒ユキヤさんや野草ユージさんとのコラボが決まってるよ』

【コメント】

： へっ？

： はっ？

真緒ユキヤ　： うむ、ユキの担当から根性をたたき直してくれと頼まれてな。筋トレ枠をするつもりだ

： はあ？

： ユージ燃やす

： 草燃やす

野草ユージ　： ちよ、ちよい待てよ！　何で俺だけなんだよ!?　ユキヤも同罪だろう？

： 炎炎炎

： 炎草炎

： 炎炎炎

： 真緒さんはユキくんを鍛えてくれるから

： チャラ男許さない

『あ、あれっ？』

カグラ： 『はあ……、まあこうなるわね。一応言っておくとユキに限らずシロルールの全員とコラボしていくわけだから、この順番はたまたまなのよ』

『ま、まだ詳細は決まってないんだけどね。き、筋トレ枠か……。は

はっ……、お手柔らかに……』

【コメント】

：草炎

：草炎

：炎炎

猫ノ瀬タマキ　：炎草炎

美空アカネ　：炎草炎

真緒ユキヤ　：せつかくの3Dだ。試しにここで腕立てでもしてみるか？

野草ユージ　：ちよつとお前たちまで燃やすな!!　ユキヤは関係ないふりをするな！こっちこい！

：草炎

：草炎

コメント欄が一気に燃えている。

さすがの経験に僕は困惑していた。

『あ、あわわわっ、そ、その、僕、ど、どうしたら……？』

カグラ：『こういうのはね、放置するしかないのよ』

『で、でも、みんな怒って……。そ、その、僕が悪くて……』

カグラ：『はあ……。わかったわよ。それならこういうと良いわ』

それからカグラが一度音声をミュートにして、耳元である台詞を言ってくれる。

カグラ：『ほらっ、言ってみるといいわ』

『う、うん』

僕は少し深呼吸をして気持ちを整える。

そして、上目遣いをしながら言う。

『ぼ、僕のために争わないで……。こ、これ以上燃やされると僕、泣いちゃいましゅ……。』

肝心なところで噛んでしまう。

そのせいもあり、一気に顔が真っ赤になり、その場でうずくまる。

『うううう……。箱があつたら入りたいよお……。』

カグラ：『いつも段ボールに入ってるわよね？』

『いつも入ってるけど、今日はないもん。その、家に忘れてきたから……。』

カグラ：『なら次からは忘れないことね。わかった？』

『うん……。そうするよ……。』

【コメント】

：ユキかわ

：ユキくんのためなら仕方ないな

：ユキくん、泣かせたくないからな

：俺はむしろ泣かせたい！

：通報しました

：カグラ様、今日はしっかりしてるな

真心ココネ　：ほ、本当は私がそこにいたはずなのに……

：ココママ草

：あれ？　草燃やすターンは終わり？

『あつ、収まった……。よかった……。』

カグラ：『これに懲りたら安直な発言はしないことね』

『た、担当さんが積極的に言ってくれて言ってたから……。』

カグラ：『なるほど……。確信犯ね。あとで締めておきましょうか』

『だ、ダメだよ。いつもお世話になってるんだから』

カグラ：『それよりも告知はそれくらいかしら？』

『えっ？ うーん、そうだね。あとは来週のココママコラボでお気に入り登録者五人記念配信をするよ?』

カグラ：『もう十万人超えてるでしょ。しかも今日が十万人記念配信だし……』

『えっ？ あつ、そ、それもそうか……。五万人記念ができなかったよ……』

カグラ：『ついに五万人を認めたわね』

『あつ……』

【コメント】

：カグラ様策士w

：時間遡行ユキくん

：草

：草

：ユージ草

：草

野草ユージ　：俺、関係ないだろ!?

：草

『あうあう……。そ、そろそろ僕も自覚しないと思って思ってたね。たくさんの人たちが僕の動画を見に来てくれてるんだって……。こんななにもできない僕を楽しみにしてくれてるんだって……』

カグラ：『はあ……。全く。そんな当たり前のことを今更考えてたの?』

『あ、あた……。ぼ、僕が必死に悩んでたのに……』

カグラ：『だってそうでしょ?　ここにみんな、ユキのことが好きだから来てるのよ。もちろん私も含めてね。だからユキはユキらしくそのまま突っ走ると良いのよ!　その姿をみんなが見たいのだからね』

【コメント】

：ああ、俺たちはユキくんが好きだぞ

：ユキくん、好きだー！

：結婚してくれー

：カグラ様がかっこいい!?

：このカグラ様は偽物だ！

羊沢ユイ　：うみゆ、ゆいもユキくん好きなの

真心ココネ　：当然私もですよ

コメント欄が暖かくて、思わず僕は涙が流れてしまう。

『うう……、みんなありがとう……。ぼ、僕、頑張っていくからね……』

カグラ：『はあ……、全く……』

隣でカグラは苦笑いを浮かべていたが、その表情はどこか穏やかなものだった。



『あつ、そうだ。これは最後の告知になるけど、このあと、今晚十八時から僕とカグラさんのコラボオフがあるよ。料理対決だよ』

カグラ：『ふふふつ、返り討ちにしてあげるわよ』

『ううう……、やっぱり無茶だと思うけど、精一杯頑張るから応援してね。僕が作る料理は僕の枠で、カグラさんが作る料理はカグラさんの枠で放送するよ。そのあと、総評はカグラさんの枠ですから、みんな忘れずに来てね』

カグラ：『実際に食べるのは私たちだけど、見た目とかの評価はみんなにしてもらうからね。必ず来るのよ！』

【コメント】

：ユキくん、大丈夫か？

：食えるものができるのか？

…死なないで……

…ユキくん、悪いことは言わないからやめた方がいいぞ

『えとえと、た、たしかに僕はそんなに料理を作ったことがないし、どこまで食べられるような料理になるかはわからないけど、その……が、頑張るよ!』

カグラ:『まあ、私には敵わないでしょうけど、ほどほどに頑張るといいわよ』

『うん、カグラさんの料理、食べるの楽しみにしてるね』

料理、得意って言ってたもんね。

どんなものが食べられるのか、今からでも楽しみだった。

ただ、コメント欄には僕を心配するコメントが溢れかえていた。

『だ、大丈夫だよ。と、とにかくこのあとの放送もよろしくね。そ、それじゃあ、わふっ……』

この放送は終了しました。

『《#犬拾いました #カグユキ》登録者数十人超えるまでコラボ配信。他にも色々と報告があるよ《雪城ユキ／神宮寺カグラ／シロルム三期生》』

5. 2万人が視聴 0分前に公開済み

☒1. 9万 ☒87 ?共有 ≡?保存 …

チャンネル名: Yuki Room. 雪城ユキ

チャンネル登録者数10. 1万人

◇◇◇

【コメント】

…ユキくん、本当に大丈夫かな？

…毒を食って平気なやつはいないだろ

…前、カレーを作るのに野菜を一切切らずに入れた上で焦がしてた

ぞ？

：まだ食えるならマシだ。肉焼いたときは炭にしてたぞ？

：ユキくん、死ぬな

◇◇◇

無事に放送を終えることができた。そのことで僕はホツとしていた。

燃えるかもしれない、という恐怖を感じたこと。

その際にもカグラに助けてもらったこと。

そのことは感謝してもしたりないくらいだった。

ただ、とりあえず燃やすこと前提だった担当さんには文句を言っておこう。

そう思い、スマホを開いた瞬間に通知が来る。

マネ ；「そのうち必要になると思いまして、カグラさんがフォローできるうちに試してもらいました」

ユキ ；「僕、まだ何も言ってませんよ!？」

マネ ；「ユキくんが考えてることはわかりやすいですから」

ユキ ；「それなら事前に言っておいてくださいよ！ 僕、怖かったですから……」

マネ ；「言ったら放送自体しなかったですよね？」

：……うん、おそらくしなかった。

なにか理由を付けて断っていたことが容易にイメージできる。

マネ ；「まあ、本当なら女性ライバーと男性ライバーはコラボさせないのがシロルームの決まりなんですけどね」

ユキ ；「そ、それじゃあ、やっぱり僕、コラボしなくても……」

マネ ；「それはユキくんが女性と認める……ということですか？」

ユキ ；「うぐっ……」

マネ 「まあ、ユキくんは事情が事情ですから、色々と模索しながらやっていくと思います。今回もその実験だと思ってください」
ユキ 「わ、わかりました。ぼ、僕はやれることをやらせていただきます」

マネ 「うんうん。ただ、ユージくん達とのコラボは燃える可能性があるから二人同時のコラボにするね。何度も燃えたらユキくん体が持たないもんね。あと、二期生達も順番にコラボしていくことが決まってるから」

ユキ 「……きよ」

マネ 「拒否権はないからよろしくね」

うう……、やっぱりコラボは全員か……。

ただ、何度もコラボを繰り返してきただけあって、そこまで抵抗はなくなってきた。そんな自分が怖い。

今回みたいなオフコラボじゃないもんね。

さすがにオフコラボはどうしても緊張する。

既に僕の正体がバレている結坂と瑠璃香さん以外は……。

「あつ、そういえばユキは今日、泊まってくのよね？ どうする、お風呂は先に入る？ 後からにする？」

瑠璃香に言われて、僕は顔を赤くする。

「ぼ、僕はその、か、帰……」

「まさか帰るなんて言わないよね？ オフコラボなんだから、とことんするわよ！ そうね、料理対決のあと、お風呂入ってから寝るまでのコラボをする感じでいいわよね？」

「あうあう、そ、その……」

「ええ、わかっているわよ。私の枠の後はユキの枠で。リレー形式にすれば良いんでしょ？」

「えと、そ、そこはずつと瑠璃香さんの粋で良いけど——」
「本当に!? 助かるわ! 私、少しお気に入り登録者数が伸び悩んでいて、迷ってたの」

「えっと、でももう三万人くらいいいなかった? 十分すぎないかな?」
「まだ三万人に届いてないのよ。ユキは十万人超えてるでしょ!? それにココネやユイはもう四万人……。やっぱり負けられないわ」
「うーん、僕もなんで伸びてるかわからないからなあ。ただ、僕にできることがあつたら手伝うからね」

「ありがとう。なら今日はお泊まりオフ決定ね」
「えっ!?!」

こうして気がつかないうちに外堀を埋められてしまうのだった。

◇◇◇

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki | yukishiro
今

本日二回目の配信。カグラさんとのコラボオフ会になります。なんと料理上手のカグラさんに料理対決を挑みます。お、応援してくださいね。粋はメインがカグラさんの粋、料理中だけそれぞれの粋で行います。わ、わふー #カグユキ料理対決

カタッターで呟いた後、僕は料理の準備を始めていた。

とはいっても、それほど難しいものは作ることができない。

そもそも実家暮らしの僕はまともに料理をしたことすらない。

でも、そんな僕にもできる魔法の料理がある。

味は完璧。

塩分やカロリーは少々気になるものの、食べ盛りの男子だった僕が
気にするほどのことではなかった。

——ほとんど食べさせてもらえなかったけど。

お湯を沸かせばたったの三分で完成。

最近では五分とかのものも増えてきているけど、それだけで食べられる、料理下手の僕でも作れる魔法の料理がある。

カップ麺。

料理対決自体を冒瀆してるようにも思えるが、今の僕にできる精一杯がこれだった。せめて食べられる料理にする必要があるからね。

もちろん担当さんからも許可をもらっている。むしろ担当さんから勧められたものだ。

そして、罰ゲームはお泊まりオフ会。

ただ、すでに僕はユイとお泊まりはしてる。

今日はカグラさんとも強制でするわけだし、唯一してないのはココネだけ……。

でも、一度してしまつたら耐性がつくのか、そこまで罰ゲームという感じがしない。

おそらく担当さんとしてはここで負けさせて、嫌がる僕に強制お泊まり会をさせようとしたのだろう。

慌てる僕の姿を見て『てえてえ』とでも言おうとしたのだろう。

——ふふふっ、すでに目論見は潰れてるよ。いつも僕の考えを読んでくる担当さんだけど、今日は裏をかかせてもらおうからね。

僕は担当さんが悔しがる姿を想像して不敵に笑みを浮かべていた。

◇◇◇

一応お互いが作る料理は作る前まで内緒……ということ、放送開始5分前になる。

『《#姫のご乱心 #カグユキ料理対決》ルール説明&mp;マシユ

マロ読み《神宮寺カグラ／雪城ユキ／シロルーム三期生》

2. 0万人が待機中 20XX／05／14 18:00に公開予定

☒1, 365 ☒2 ?共有 ≡?保存 ∴

既にかかなりの数の待機者がいる。

ただ、最近の僕の配信だといつもこんな感じだ。

これもチャンネル登録者数が増えた影響だろうか？

僕もずいぶんと自分に自信を持てるようになったみたいだ。

正確には自分の枠じゃないから……ということがかかなりの枠を測めているのだが――。

でも、カグラは違ったようだった。

「えっ、な、なにこの待機者数……」

「うん、多いよね」

「って、なんでユキは平然としているのよ」

「僕、いつもこんな感じだからね……」

「はあ……、そういうえば昼もそうだったわね。でも、私のチャンネルだとあり得ない数字よ……。これもユキとのコラボのおかげかしら？」

「力になれたのなら嬉しいよ」

「……なるほどね。ユキはいつもこのプレッシャーと戦ってたのね」

「えっと……、僕の場合は余裕がなくて、そこまで意識が回らなかったのもあるけどね……」

「ふふふっ、それでこそユキよ。うん、大丈夫。行きましようか！」

カグラは自分の中で自己解決したようだった。

——この辺りやっぱりカグラさんは強いな……。僕はみんなに助けてもらってようやく立ち上がったのに……。

【コメント】

：ついに来てしまったか

：地獄の料理……

：ユキくん逃げてー

：カグラ様放送でここまで人がいるのは初か？

：昼の放送の影響もあるだろうな

コメントが賑わいだしたところでカグラが話し始める。

カグラ：『シロルーム三期生、神宮寺カグラ。今日も仕方ないから来てあげたわよ！』

堂々と通る声を出すカグラ。

その姿は純粹にかっこいいなと思える。

おそらく、瑠璃香としての彼女を見たからだろう。

おそらく僕たちの中で一番真剣に動画配信のことを考え、自分で研究して、一人悩み抜いている彼女のことを――。

【コメント】

：待ってたよー

：いや、待ってなかったぞー

：段ボールが転がってるwww

：今日は『拾われました』かwww

カグラ：『もう気づかれてるけど、今日はなんとシロルーム三期生トップ登録者を誇る雪城ユキに来てもらったわ。もちろんオフでね』
『わ、わふう……。どうも、雪城ユキです……。今日はカグラさんに拾われてお邪魔させてもらっています。そ、その……。よろしくお願ひします』

段ボールから覗くように顔を出す。そして、軽く頭を下げた後にすぐに段ボールの中へと隠れる。

——やっぱり段ボールの中って落ち着くよね。

カグラ：『くっ、相変わらず可愛いわね。まあ、私には及ばないけどね』

【コメント】

- ：カグラ様の負けw
- ：可愛さは断トツユキくん
- ：一体どんなポンコツ具合を見せてくれるのか
- ：そもそもポンコツコンビで配信が成立するのか？
- ：ユキくん、すぐに隠れてて草
- ：昼間は段ボールがなかったもんね
- ：ユキくんの全身が見られる貴重な配信だった

『えとえと、酷い言われような気がするけど……？』

カグラ：『そうかしら？ いつもこんな感じよ？』

『あ、愛されてるんだね……』

思わず苦笑いを浮かべてしまう。

しかし、カグラはそれを誇らしげに言い返してくる。

カグラ：『まあ、私にかかればこの程度、造作もないことよ』

『ほ、褒めてないんだけど……』

【コメント】

- ：ユキくんがフォローに回ってるw
- ：自分の枠じゃないときは自然体だよね、ユキくん
- ：普通逆だよねw
- ：カグラ様が早速ポンコツにw

カグラ：』と、とにかく、これからマシユマロを読んでいくわよ。答えるのはユキで良いのかしら?』

『えっ、ち、違うよ。この梓はカグラさんの梓だから、答えるのはカグラさんだよ?』

カグラ：『そういうものなのね。わかったわ。では、まず最初のマシユマロね。「カグヤ様、こんばんは』』

『えっと……、そ、それだけ?』

カグラ：『ええ、これだけね。あと言わせてもらうと、私の名前は神宮司カグラよ。じんぐうじかぐらカグヤじゃないから……』

『あつ、本当だ!? 良く気づいたね』

カグラ：『自分の名前なら当然でしょ』

『うーん、僕だったらスルーしてしまうかも……』

カグラ：『ユキは間違いようがないからね』

【コメント】

：あれっ、名前間違えるフラグ?

羊沢ユイ：カグちゃん

：グラ様ー

：カンペ様ー

：わざと間違えるやつ多過ぎw

カグラ：』だから、私は神宮寺カグラよ! かんぺなんてユキじゃな

いから使ってないわよ!』

『ぼ、ぼ、ぼ、僕だっけ使ってないよ……。今日は——』

【コメント】

：ユキくん、動揺しすぎ

：前も見てたもんね

：カグラ様の持ちネタがついにできたか

：まだまだ持ちネタあるぞw

：これから積極的に名前弄りを入れていこうw

：早速マシユマロに投げてきたw

『ううう……、本当に今日は見てないよー』

カグラ：『このままじゃ先に進まないから次のマシユマロに行くわよ！ 全く、たかが挨拶でどれだけ時間かかるのよ……』

『ご、ごめんね。僕のせいで——』

カグラ：『ユキのせいじゃないわよ。それよりも次はこれ。「得意な料理はなんですか？ ちゃんとした料理で逝ってください」。【言つて】の漢字が違うわよ……』

『えっと、料理で……逝く？ おいしすぎてかな？』

カグラ：『……。私の得意料理はパスタよ。最近はクリームパスタにハマってるわ』

『おいしいよね。僕も好きだなあ。でも、自分で作ろうとすると中々難しいんだよね。僕はレトルトのを食べるばかりだよ』

カグラ：『確かにユキは苦手そうよね。まあ今日は私の料理を見て勉強していくといいわ』

『うん、楽しみにしてるよ』

【コメント】

：ユキくん死亡フラグw

：ユキくん、純情すぎw

：ユキくん逃げてwww

：カグラ様から何を勉強するんだ？

：ユキくんの勝ちに一万賭けるぞ！

：なら俺はユキくんに五万ペリカだ！

：俺は金欠だからユキくんに諭吉一枚だ！

：誰かカグラ様に賭けないと賭けが成立しないだろ

：自分から負けに行く奴はいないだろw

なぜか僕が勝つと思われてるようだった。

そんなに僕、料理できるように見えるのだろうか？

ユキくんのアバターでもあまり料理ができそうには見えない。
ううん、僕がそう見えないだけで意外と料理ができるように思われ
てるのかも。

【コメント】

：三期生で一番料理が出来そうなのはココママだけだな
：ユイちゃんもなかなか作ってくれなさそうだけど、うまそうだよ
な

羊沢ユイ　：うみゅー、めんどろ
：相変わらずで草

カグラ：『も、もう次行くわよ！　えっと「カグラ様のリアルの友達
は何人いますか？」』

『……』

ぼつちの僕たちには中々つらい質問が来てしまった。
思わず言葉に詰まってしまう。

カグラ：『ゼロよ！　文句あるの？』
『えと……、そ、その……、僕もゼロだったから……』

【コメント】

：これは質問主が悪いw
：トラウマを刺すw
真心ココネ　：私は友達だからね
：カグラ様には親衛隊もついでるからな

『と、とりあえず次の質問に行こう。あと、今は僕たち、友達だからね。
ゼロじゃない安心してね』

カグラ：『そ、そうよね。ありがとう、ユキ。それじゃあ次で最後に
しましょうか。「カルマ様、こんばんは」って、私は神宮寺カグラよ！

何で業を背負ってる様な名前になってるのよ!』

『えつと……、その……あははっ……』

カグラ：『ユキも何か言いなさいよ!? まるで私とその通り見たいでしょ!』

『大丈夫だよ。僕はカルマさんがどんな業を背負ってても友達でいるからね』

カグラ：『だから、私はカグラよ! カ・グ・ラ!』

『わ、わざとだよ、わざと。だから叩かないで……』

【コメント】

：俺たちは何を見せられてるんだ……

：ユキくん草

：ぺちぺち

：ユキくん楽しそうw

カグラ：『さて、気を取り直して——。それじゃあ、そろそろ今日の料理対決のルールを説明をさせてもらおうわよ。まずはこの後、お互いの枠で料理を作るわよ。時間は三十分。交互に作らせてもらおうわ』

『概要欄にお互いの放送枠を書いておくので、見にきてね』

カグラ：『書いたのは私よ。まあ、やる順番はクジで決めるわ。それはこれからするけど、料理を作ってる間は別の部屋で待機。食べる時までお互いの料理は見ないでいくわ』

『見たかったけど仕方ないね。あとでアーカイブで見るよ』

カグラ：『それで最後は私の枠で食事会と結果発表ね。大まかに流れはこんなところよ。それで負けた方には罰ゲームね』

『う、うん……、手加減してね……』

カグラ：『ふふふっ、楽しみにしてるといいわよ。何をしたらユキが悦んでくれるか真剣に考えてきたから』

『か、漢字が違う気がするけど、ぼ、僕もカグラさんが喜んでくれるものを考えてきてあるよ』

カグラ：『それは楽しみね。まあ、それが披露されることはないけどね。それで結果発表は私たちの食事レポートと完成した料理を見てもらって、リスナーの人に決めてもらうわ。それが一番公平だからね』

『あつ、そうなんだ……』

——まあ、僕に勝ち目はないんだけどね。

見た目はカップ麺。

味はカップ麺。

その名はカップ麺。

——うん、それでどうやっても勝てるはずないよね。

【コメント】

：俺たちも食べたいぞ！ ユキくんの料理

：カグラ様が羨ましい

：ユキくんに一票だ

：俺もユキくんだ

『ちよ、ちょっと待って!! まだ料理を作ってないからね!! それに僕、本当に苦手だからその……、ちゃんと見て決めて欲しいな……』
カグラ：『くっ……、これが人気の秘訣なのね……。私にはできないわね……』

カグラが隣で悔しそうに口を噛みしめていた。

なぜ悔しがつてるのかはわからない。そもそも僕は普通の態度をしているだけなのに……。

『と、とりあえずクジをするよ』

カグラと二人クジを引く。

その結果、僕が先に料理をすることになった。

カップ麺だと伸びちゃうけどいいのかな……？

そんなことを思いながら料理の準備を始めていた。

第14話：料理？対決、決着

『#犬拾いました #カグユキ料理対決』料理？ 作るよ《雪城ユキ／神宮寺カグラ／シロルム三期生》

2. 5万人が視聴中 ライブ配信中

☒765 ☒3 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

…待ってました！

…ユキくんの手料理だ

…わふー

…わふー

…わふー

…段ボールが『料理中』だw

…本人がいないのに笑わせるスタイル

『えとえと……い、いますよ……?』

ゆつくり顔を出す。

さすがに作るのがカップ麺だと緊張を隠しきれない。

もつと手の込んだものを作れたら良かったのだけど……。

『わ、わふー……。大好きの皆さん、こんばんは。雪城ユキです。今日はカグラさんに拾われて、料理対決をやる、なんておかしなことになってます。でも、やるからには僕ができる精一杯をやろうと思います』

【コメント】

…ユキくん、がんばれー

…わふー

…楽しみ

：間に合った……

真心ココネ　：ユキくん頑張れ

羊沢ユイ　：うにゆ、食べに行つて良い？

『え、えと……、きよ、今日はカグラさんの家だからその……食べに来るのはまた今度……。というか僕がユイの手料理を食べに行きたいよ……』

さすがにわざわざ来てもらうのに、カップ麺しか出せない……なんて思われたくない。

その考えからの返答だったのだが、コメント欄が勝手に盛り上がる。

【コメント】

：ユキユイのお泊まりコラボ決定？

：むしろカップル決定？

羊沢ユイ　：うみゆー、いつにする？　いくらでも料理作るの？

真心ココネ　：ゆ、ユキくん。わ、私も作りますよ

：ユキくん的にはユイちゃんが一步リードか

：ココママ焦りすぎw

『えっと……いつがいいんだろう？　とりあえずユイには後から連絡するよ。ココママの料理も食べたいな……。それにそろそろコラボの話をしたいいし、ココママにもあとから連絡するね。でも、今日連絡できるのかな……。？　料理対決の後、寝るまでオフコラボ配信するか言つてたし……』

【コメント】

：えっ!?

：それは初耳w

：まさかの今日三回放送w

：ユキくん頑張るw
；わくわくw

『えっ!? あっ、ま、まだ言ったらダメなやつだったかも。ゲリラ配信的な予定だったかもしれないし。い、大好きの皆さん、今のは忘れて下さい……。そ、そうじゃないと僕が怒られちゃうので……。』

慌てて頭を下げる。

当日の放送予定は基本的に配信予約していたので、つつい油断してしまった。

ただ、今日の寝るまで配信は完全なゲリラ配信。

僕たち二人が寝間着に着替えてから適当に雑談する感じになるはずだった。

だから、いつもみたいなしつかりとした放送でもないし、本当に適当に喋るだけになる。

【コメント】

：大丈夫、聞かなかったことにして待機してるよ

：うまくいったらユキくんの寝言が聞けるのか

：超楽しみw

：時間空けておく

：草過ぎる

：お前たち、しつかり聞きすぎ。待機するのは俺だけで十分だw

：w w w

羊沢ユイ　：眠たいけど頑張って起きてるの

真心ココネ　：ゆ、ユキくん……

：そろそろ十分経過。ユキくんの料理進行状況は……？

『あっ、もうそんなに……。ま、まだなにもしてないよ。そ、その、経過は写真でカタッターにあげていくからそっちを確認してね。と、とりあえず準備するよ……。』

僕は慌てて、ポットの準備をしていた。

『えとえと、そ、それじゃあ、改めて今日僕が作る料理を説明させてもらいます。ぼ、僕が作るのはこちら！ か、カップ麺です!!』

配信画面に前もって準備しておいたカップ麺の画像を表示させる。

【コメント】

：えつ w w w

：カップ麺 w w w

：w w w w w

：草

：料理 w w w w

真心ココネ　：ユキくん、カップ麺は料理じゃないよ？

：草草草

：これこそ俺たちのユキくん w

『た、ただのカップ麺じゃないよ？ ほらっ、お湯を入れて三分だけだと、料理じゃないし、その……なんと葱と卵を準備しました！ これを完成後に入れちゃいます』

今度は葱と卵の写真を配信画面に表示する。

もちろんカップ麺の封は既に切っており、あとはお湯を入れるだけ。

万全の体制だった。

【コメント】

：余裕のユキくん w w w

：でも、確かにこれなら w

：失敗はないか w w w

：料理ってなんだろうなw

：ユキくんならカップ麺でも失敗はありえるw

『い、いくら僕でもカップ麺での失敗は数回しかないよ。昔、間違えてスープ捨てちゃったこととか、お湯と間違えて水を入れちゃったりとか、そのくらいだよ』

コメントに思わず反応してしまう。

ただ、それがリスナーたちに餌をあげる形となってしまう。

【コメント】

：本当に失敗してて草

：これは良い勝負かもしれない

：まだ食べられるだけマシだろw

：俺はユキくんが出してくれた料理なら毒でも食ってみせる

『ど、毒は食べたらダメだよ!!』　そ、それよりも次の準備をしていくね。えっと、葱を切らないとだね。包丁、包丁……っ』

両手でしっかりと包丁を握りしめて、まな板の上に置いた葱をにらみ付ける。

そして、覚悟を決めると思いっきり包丁を振り下ろす。

ザクッ!!

甲高い音が鳴り、葱が二本に切れていた。

『ふう……。葱を切るだけでも大変だね……。』

半分に切れた葱を見て、額の汗を拭う。

【コメント】

：葱切る音じゃなかったw

：ユキくん、危ないよw

真心ココネ　：ユキくん、猫の手だよ、猫の手。包丁は危ないからね

猫ノ瀬タマキ　：呼んだかにや？

：タマキパイセン現れてて草

：この際ユキくんの身を守るのなら誰でもいいw

みんな酷いことを言っていた。

べ、別に猫の手のことを忘れていたわけじゃない。

そ、そうだよ、あまり料理をしないからうっかりしてただけだよ。

『えと……、猫の手、猫の手……つと』

今度はしつかり猫の手を作り、葱を切る。

『にゃ、にゃー……』

ザクツ!!

結果は同じで葱がもう半分に切れただけだった。

【コメント】

：や、やめてくれ。ユキくんが怪我をする

：猫の手を作っただけで使ってないw

：怖すぎるw

猫ノ瀬タマキ　：ユキくんが猫族の仲間入りにや

真心ココネ　：ゆ、ユキくん、今どこにいますか？　すぐに行きま

す　：ココママ、本気で心配してて草

羊沢ユイ　：うにゆ、時間ないの

『えっ!?　あつ……、と、とりあえず、葱は諦めて……た、卵を……、あっ!?!』

慌てて卵を入れようとしたら、そのまま落として割ってしまう。
さすがに床に落ちたものを入れるわけにはいかない。

『うう……、卵落としちゃった……。あとでスタツフさん僕がおいしくいただきます……』

【コメント】

：w

：w

：草

：w w w w w

：w w w w w

：ユキくんの圧勝かと思っただけど良い勝負してるw

『も、もう予備ないよ……。し、仕方ないから普通のカップ麺でいくよ……』

ただ、そのままカップ麺の容器にお湯を入れて作ったのでは、見た目があからさまにカップ麺なので、敢えてラーメン皿にうつす。
そして、そこにお湯を入れて適当に蓋をする。

『こ、これであとは三分待つだけだよ』

【コメント】

：容器に移すの草

：でもこれはユキくんの勝ちかなw

：食べられるからなw

：見た目にこだわるユキくんw

『さ、三分だよ。と、とりあえずこれで完成だよ』

容器を移し替えたことで、一応ラーメンらしい見た目にはなっている。

葱と卵を無駄にしたのはもったいなかったけど……。

——うん、ちゃんとした料理だね。

一応写真を撮って、カタッターに上げておく。

【コメント】

：w

：草

：w

：www

：草

：ラーメンだな

：カップ麺だからな

『えとえと、こ、これで僕の方は完成です。そ、それじゃあ、カグラさんにバトンを渡しますね。みなさんも概要欄からカグラさんの枠に行ってくれると嬉しいな。そ、その……、僕は見たらダメなことになってるから、ぼ、僕の代わりに……ねっ。それじゃあ、よろしくおね——』

この放送は終了しました。

『《#犬拾いました #カグユキ料理対決》料理？ 作るよ《雪城ユキ／神宮寺カグラ／シロルーム三期生》』

3. 6万人が視聴中 0分前に公開
☒1. 1万 ☒41 ?共有 ≡?保存 ∴
チャンネル名: Yuki Room. 雪城ユキ
チャンネル登録者数10. 2万人

【コメント】

: 挨拶中で切れるのはユキさんの芸だなw
: うおおお、ユキさんに頼まれたら行くしかないぜ！
: でも、あのカグラ様だぞ？
羊沢ユイ : うみゆ、ゆいが直接行くの
真心ココネ : わ、私も行きます
: 同期組が乗り込もうとしているw
猫ノ瀬タマキ : 場所、わかるのかにや？
真心ココネ : うっ……
美空アカネ : 私も行くぞ！ 食べる専門で
海星コウ : はいはい、アカネには私が料理を作っただけから我慢しなさい
美空アカネ : 夕飯、ゲツドだぜ!!
: w w w w w
: おっと、そろそろ移動しないとな



『《#姫のご乱心 #カグユキ料理対決》実力の差を見せつけるわよ
《神宮寺カグラ／雪城ユキ／シロルム三期生》』
2. 1万人が視聴中 ライブ配信中
☒812 ☒12 ?共有 ≡?保存 ∴

カグラ: 『ふふふつ、ついにこの日が来たわね。ユキがどんな料理を作ったかはわからないけど、私が圧倒的実力でねじ伏せるわ』

カグラは意味深に微笑んでいた。

その姿が神宮寺カグラという姫のAvatarにぴったりで、まるで悪役のようにしか思えなかった。

【コメント】

：カグラ様、腹黒w

：圧倒的実力でねじ伏せられるかw

：いや、ユキくんはあれだったぞ？w

：結構良い勝負するんじゃないか？w

：wwww

カグラ：『あつ、料理の中身までは教えるのダメだからね。それはルール違反だから。わかったら返事をしなさい』

【コメント】

：はーい

：はーい

：はーい

猫ノ瀬タマキ　：はーいにゃ

：はーい

羊沢ユイ　：うみゅー

カグラ：『みんな、良い返事ね。それじゃあ、私が作っていく料理を
発表するわ。今日はシンプルなピザを作っていくわ！』

カグラはピザの材料をテーブルに載せ、それをカタッターに上げて
いた。

さすがに生地を一から作るようなマネはしないようで、シンプルに
ピザ生地とトマトソース、チーズやサラミ、ピーマンなどが置かれて
いる。

【コメント】

真ココネ　：カグラさん、意外とできる？

：なんだ、炭かw

：炭になる未来が見える

姫野オンブ　：ピザはおいしいのですー

：まあ、載せて焼くだけなら……

：つまり炭かw

カグラ『そ、そんな失敗はしないわよ！　それじゃあまずはピザ生地を洗って……』

画面から水の流れる音が聞こえてくる。

その時点でおかしな行動をしていることは十分にわかる。

ただ、それだけではなく、洗い終わった生地を突然床にたたき付け始めていた。

カグラ：『えいつ、えいつ!!』

ドスツ!!　ドスツ!!

【コメント】

：既にできた生地を準備してなかったか??

：俺たちは何を見せられているんだ？

：まさか生地を水で洗ってないよな？

真ココネ　：き、生地はもうできてるやつを買ってきたんだよね??

羊沢ユイ　：うみゆ。ユキくん、ご愁傷様なの

カグラ『ふう……、これで生地は良いわね。あとはソースの方を付けて焼くだけね』

額の汗を拭うカグラ。

その目の前には無残なピザ生地が置かれていた。



ドスツ!! ドスツ!!

「な、なんの音?」

突然隣の部屋から響いてきた何かをたたき付けるような音に、僕は思わず驚いてしまう。

とても料理をしているようには思えない。

ただ、料理に自信がある瑠璃香が作っているのだから、そういうものなのだろう。

うどんとかパンとか、そういったものが確か叩いたあとに発酵させたりしてたはず。

——でも、そんな時間ないよね?

何もせずに待っている時間は不安がかき立てられていく。

ジツと部屋の隅に座っているが、意味もなくスマホを開いて自分のMe^ミeTu^{チュ}b^ブe画面を開いたりしていた。

チャンネル名：Yuki Room・雪城ユキ

チャンネル登録者数10・2万人

どう見てもおかしい数字だよね?

きつと一桁くらい間違ってるよね?

……うん、きつとそれだ!

そんなことを思っているとMe^ミeTu^{チュ}b^ブeからメールが届いていることに気づく。

「えつと、何が来たんだろう……。えつ??」

メールを開いた僕は驚きのあまり動きが完全に固まっていた。

【収益化の許可】

それを見ると足が震えてくる。

確かに申し込んだのは僕だし、シロルームという企業に属している以上、それは必要なことだった。

でも、それに見合うだけの配信ができているのか……??

そう考えると不安以外なにも浮かばなかった。

◇◇

『《#姫のご乱心 #カグユキ料理対決》実食。決着 《神宮寺カグラ／雪城ユキ／シロルーム三期生》』

2. 4万人が視聴中 ライブ配信中

☒ 1, 125 ☒ 3 ?共有 ≡?保存 …

完全に固まっていた僕の前にカグラが完成した料理を持ってやってくる。

もちろん配信画面にはユキくん in 段ボールとカグラさんのアバターが左右に配置され、中央にわかりやすいように銀の丸い蓋の画像が二つ置かれていた。

カグラ：『どうしたの? 何か固まってるみたいだけど……』

『な、な、なんでもないよ? えつ、あつ、ほ、放送始まって??』

カグラ：『もちろんよ。これから試食をするんでしょ?』

『い、いつもと違うスタートだったから、その……』

カグラ：『それもそうね。ここから見る人もいるわよね。えーつ、コホン。改めて、よくきたわね、親衛隊のみんな。私は神宮寺カグラ。』

あなたたちの姫よ。そして、こっちは囚われの犬であるユキよ』

『わ、わふー、って、勝手に捕らえないでください！ えとえと、親衛隊の皆さん、犬好きの皆さん、こんばんは。シロルム三期生、最弱の犬こと雪城ユキです。えとえと、捕らえられてないので、今日も拾いに来てくださいね』

【コメント】

：わふー

：わふー

：わふー

：カグラ様ー

：わふー

：今日も段ボールが輝いて……はいないな

：スタートからぐだぐだw

：カグユキらしいw

：ユキくんは登録者数で三期生最強w

：早速拾いに行くぞ！

『わふわふ、と、登録者数のことはようやくわかったんだよ。きっと僕のチャンネル登録者数だけきつと一桁間違ってるんだね。1.02万人ならみんなより少ないくらいだし、納得だよね』

カグラ：『そんなわけないでしょ!? もうじき銀の本が送られてくるわよ』

銀の本とはチャンネル登録者数が十万人超えた人に送られる、一種の称号だった。

百万人を超えると金の本が送られてくる。

ただ、百万人そを超れえるにはかなり難しく、シロルムのV t u b e rにそれを果たした人は未だにいない。

『えとえと、ほ、ほらっ、まだ届いてないから……。だ、だからねっ、

きつとまだ超えてないんだよ……』

カグラ：『はあ……、そんなにすぐ来るはずないでしょ。収益化だって審査で時間がかかるんだから、銀の本もすっかり調べた上で送られてくるはずよ』

『その……収益化つて時間、かかるんだよね？ 一年くらいかかるよね？』

カグラ：『そこまでかからないわよ。早かったら一週間ほど、遅かったら数ヶ月ほどらしいわね。そこは動画再生回数等によって優先順位が決まるらしいからね』

『そ、そうなんだ……』

カグラ：『人気者ほど、やっぱ早いよ。だからユキはそろそろ許可が出るんじゃないかしら？』

『ほ、ほ、ほらっ、に、人気者でいったらココママやユイだって……』

【コメント】

真心ココネ : 私はまだですよ

羊沢ユイ : うみゆ、ゆいもまだなのー

: さすがにまだ早いかな

: スパチャ投げさせろー

: まあ、ユキくんが最初に許可が出るだろうな

: カグラ様を抜く辺りがまたw

『わふっ、そ、その、僕はその……あの……』

思わず慌ててしまう。すると、何か察したカグラが話を変えてくれる。

カグラ：『なるほどね。それよりも、そろそろ料理対決をしないと時間がなくなるわよ？』

『あつ、そ、そうだね。冷めたらもったいないよね』

カグラ：『ええ、そうよ。雑談はあとからゆつくりできるからね』

『お、お手柔らかに……』

思わず苦笑を浮かべてしまう。

【コメント】

：いよいよかw

：果たしてどちらが勝つのかw

：いや、勝者はいるのか？w

：wwwww

：楽しみだ

カグラ：『それじゃあ同時に蓋を開けるわよ』

『う、うん……』

少し緊張しながら、同時に蓋を開ける。

それと同時に配信画面にお互いの料理の写真が表示される。

僕は皿に移されたカップ麺。

カグラのは丸くて真っ黒の……。

『——炭？』

カグラ：『ち、違うわよ!? どこからどう見てもピザでしょ!』

【コメント】

：ユキくん、ナイスツツコミw

：確かに炭だよなwww

：真っ黒だしwww

：草

：草

真心ココネ　：ユキくん、無理して食べたらダメだよ……

『ぴ、ピザなんだ……。あはははっ……』

苦笑い以上のことができなかつた。

確かによく見ると黒の他にもチーズの黄色やピーマンの緑が一部見え隠れしている。

カグラ：『ユキの方は……ラーメンね』

『うん、そうだよ』

カグラ：『この麺はお湯を入れて三分のやつじゃないかしら？』

『えと……、あははっ……』

あっさりカグラにバレてしまう。

自分で料理ができるならあまり食べないかと思っただけど、やっぱりわかるんだな……。

カグラ：『——これはもう勝ったわね』

『えとえと、た、食べられるんだよね、これ？』

カグラは伸びきった麺を、僕は炭^{ピザ}を手に、同時に口へと運ぶ。

ガリッ……。

本来食べ物から聞こえてはいけないような、音が聞こえた後、口の中に広がる苦みと苦み、更にほろ苦さも合わさって、それはまさに炭だった。

『えっと、その……、あの……、うん、お、おいしいよ？』

カグラ：『そんな引きつった顔で言われても信用できないわよ。本当の味を言いなさい』

『そ、そんなことないよ。と、とってもおいしいよ。この……炭？』

カグラ：『ピザよ！』

『あっ……、うん。言い間違えただけ……。その……、後味が苦みしか

ないことと、チーズが伸びる感触とか、ピリツと刺激的なサラミの味とか、酸味がアクセントになるピーマンの味とか、そういった物が一切なくらいで、その……、おいしいよ？ ちよつと焦げ臭さもあるかな』

カグラ：『それはおおいしいって言わないでしょ!? ユキのほうは伸びてしまってるし、お湯が多いからスープは薄いし、冷めてるし……、まあ、もう少し頑張ると良いわね』

『うぐっ……。だ、だって、三十分待つとは思わなかったから……。それに僕が作れるのってこのくらいだし——』

二人でお互いの料理を食べながら品評していく。

そして、完食をするとコメント欄に勝敗が書き込まれ始める。

【コメント】

：ユキくん、優しいね

：ユキくんの切り方は怖かった

：どう見ても炭なのに全部食べてたもんね

：食べられる分だけユキくんの方がマシか？

：正直どっちも変わらないように見える

羊沢ユイ　：うみゆ、引き分けなの

真心ココネ　：むしろ、どっちも負けかな

：それだ

：どっちも負けか

：罰ゲームはどうなるんだろう……

真心ココネ　：担当さんが「どちらも負けなら私が罰ゲームを決めます」って言ってるよ？

：担当さんきたw

『えっ？ だ、だって、僕にカップ麺でいいって言ったのも担当さんで

——。あつ……。』

——もしかしてどっちも負けさせて、二人ともに罰ゲームを言うつもりだった??

【コメント】

：どっちも負けだな

：どっちも負けで

真心ここね　：ちなみに二人負けの場合は「三期生全員で温泉旅行の旅」だそうです

羊沢ユイ　：うみゆー、ご褒美なのー

——ちよ、ちよと待って。もしかして、その旅行をみんなで行かせようとしてたの!? た、確かに僕が勝った場合の罰ゲーム、カグラさんにお泊まりオフをさせるってことも満たしてる。

『か、カグラさん。カグラさんはどんな罰ゲームを考えてたの?』

カグラ：『もちろんユキが同期全員を誘ってのオフコラボよ』

『や、やっぱり……』

——また嵌められた……。

確かに誰か一人とオフでコラボしたり、泊まったり……はしたことがある。

しかし、全員となるとまた話は変わってくる。

更に温泉。つまり——。

【コメント】

羊沢ユイ　：うみゆー、ユキくんたちと一緒に温泉なのー

真心ここね　：ええ、楽しみですね

：夜はもちろんパジャマ配信か

：楽しみ

：四人仲良く温泉……

『む、無理無理。絶対に無理！ 仲良く温泉なんて僕には無理だよ！？
ねっ、カグラさんもそうだよね？』

カグラ：『みんなと……温泉……』

カグラはどこか嬉しそうに惚けていた。

カグラ：『し、仕方ないわね。罰ゲームは罰ゲームなものね。大人しく受けるわよ』

『か、カグラさん!? ま、まだ料理対決は結果が出てないから。ほらっ、みんな。どっちが勝ちかコメント欄に書いて！』

【コメント】

：もちろん両者負け

：ユキくん、ごめん。二人とも負け

：賭け金はスパチャができるようになったら払うよ

：俺もだ

：くっ、生活費が……。ただ、約束は約束だ

：てえてえには勝てない。二人とも負けだ

：ユキくん必死w

：温泉旅行に行つてらっしやい

両者負けではつきり勝敗がついてしまい、思わず僕は項垂れてしまった。

カグラ：『勝敗もついたことだし、今回の放送は終わりよ。罰ゲームの内容についてはまた追って報告するわ。それじゃあ、次の私の放送も見に来るのよ』

『あっ……、えとえと、ば、罰ゲームは嫌だけど、その……約束だから頑張ります。本日はありがとうございます——』

この放送は終了しました。

『《#姫のご乱心 #カグユキ料理対決》実食。決着 《神宮寺カグラ
／雪城ユキ／シロルーム三期生》』

4. 3万人が視聴 0分前に公開済み

☒1. 4万 ☒72 ?共有 ≡?保存 :

チャンネル名:kagura | Room. 神宮寺カグラ

チャンネル登録者数4. 8万人



【コメント】

:いつものユキくんw

真心ココネ :ユキくん、お疲れ様

羊沢ユイ :うみゆ、おつかれなの

:温泉旅行回楽しみ

:次まで待機

第15話：敗者の宴

「ちよ、ちょっと待って!? 何この登録者数——」

料理対決の放送が終わった後、僕が食べ終えた皿を洗っていると、色々とパソコンを弄っていた瑠璃香が大声を上げてくる。

「な、何があつたの!? 問題が起こつたの?」

「どうしてお気に入りに登録者の数が倍近くに増えてるの!?!」

どうやら瑠璃香は自分のお気に入りに登録者数が増えすぎたことに驚いているようだった。

「あー……。うん、よくあるよね、そのバグ……」

「ユキのはバグでも何でもないわよ!? これもユキの力? とんでもないわね……」

「……僕は特に何もしてないよ。瑠璃香さんには色々と助けてもらったからその恩返しができたら、ってコラボをただけだよ?」

「それでもよ! 何か困つたことがあつたら言いなさい! 私にできることなら手を貸すわ」

「それなら、一つ相談に乗ってもらつても良いかな?」

僕は先ほど、Me e Tube^{ミーチューブ}から届いたメールについて相談することにした。

「なるほどね。もうユキは収益化の許可が下りたんだ……」

「うん、それでどうしたらいいのかなって——」

「そういったことはまず担当さんに相談すると良いわよ」

「あつ、そっか。うん、わかつたよ。ありがとう、瑠璃香さん」

「べ、別に大したことはしてないわよ。それに私の方こそありがとうね」

「僕の方こそ何もしてないよ。一緒にコラボできて楽しかったよ」
「……私もよ」

瑠璃香は小声で呟いて、すぐにパソコンの方へと振り向いてしまった。

それを見た後、僕は担当さんに連絡を入れようとスマホを見る。すると、既に担当さんからの連絡が来ていた。

マネ : 「おめでとうございます」

ユキ : 「まだ何も言ってませんか?」

マネ : 「ユキくんのことならわかります。収益化の話をしていたときに明らかに食いついてましたからね」

ユキ : 「うううう……、なるべく平常心を保とうとしたんだけど……」

マネ : 「そうですね。多分数人しか気づいていないと思いますよ」

ユキ : 「気づいている人はいたのですね……」

マネ : 「ええ、ココネさんやユイさんはもちろん、カグラさんも気づいていましたよね?」

カグラ : 「ユキの様子がおかしかったからね」

ユキ : 「そ、それじゃあ、すぐにでも収益化の設定を——」

マネ : 「いえ、それは記念放送にしまいましょう。ただ、ユキくんの予定を考えますと……少しココネさんと相談しますね」

ユキ : 「わ、わかりました。では、僕はいつも通りにしておきますね」

マネ : 「はい、いつも通りに配信してくださいね」

ユキ : 「それは僕のいつも通りじゃないのですけど……。あつ、あと、温泉旅行の件ですけど——」

マネ : 「もう予定に入れちゃってますよ? なしにはできないですからね」

ユキ : 「わ、わかりました。旅行には行ってきます。その……十年

後とかに――」

マネ　：「日もこちらでとっておきます。来月の休日に」

ユキ　：「うう……、早すぎますよ……」

マネ　：「ユキくんが嫌がることは分かっていますからね」

ユキ　：「えっと、当日はその……法事が――」

マネ　：「会長に来月は特に何も無いことは確認済みですよ」

ユキ　：「か、母さん――!!」

やっぱり僕はまだ担当さんを上回ることはできないようだった。スマホを片手にその場でうな垂れていた。

◇◇◇

担当さんとの連絡を終えると瑠璃香が聞いてくる。

「お風呂を入れるけど、ユキは先に入る？　それともあとから？」

「ぼ、僕はそろそろ帰――」

「この後も配信するんでしょ?!　逃がさないからね」

につこりと微笑んでくる瑠璃香。

顔は笑顔なのだが、何故か有無を言わさないような迫力があつた。

「そ、そんな、無理にたくさん配信しなくても……」

「むしろ、今がチャンスでしょ？　せつかくのお泊まりオフなんだから寝るまで雑談配信は基本でしょ？」

「ううう……、瑠璃香さんはすごいね。僕はいかに放送回数を少なくしようかって考えてるし……」

「もちろんよ。私はV t u b e r が好きだからね。何度も私自身励まされてきたの。だから、私もそうなれたらな、ってシロルームに応募したの」

瑠璃香が語ってくれたシロルームに応募した理由。それは奇しくも僕自身も思っていたことだった。

「あれっ、瑠璃香さんって『自分を見せないのは損失だ』とか『友達を作りた』とか言ってたなかった?」

「それはもちろんキャラ作りよ! 私のアバターは姫キャラなんだから、それなりに姫らしい姿を見せないと! あと友達を作りたいっていうのは私が言ったんじゃないから!」

「キャラ……か。瑠璃香さんももつと素直に自分を出してもいいんじゃないかな? ほらっ、たまに僕相手に出てるやつとか」

「で、出てないわよ!? でも、まさかユキに説得される日が来るなんてね……」

「か、カグラさんも僕のことをどう思ってるの!?!」

「えっ? 人見知りで臆病なポンコツ犬?」

「うう……、当たってるから言い返せない……」

「でも……、そうね。わかったわ、次から思いつき私を出していくから覚悟してね、ユキ!」

「えとえと、それじゃあ僕はそろそろ帰るよ」

「だから、何で逃げようとするのよ!? 逃がさないに決まってるでしょー!」

「だってだって……」

「ふふっ、この私を引き出したのはユキなんだからとことん付き合ってもらおうわよ!」

——あれっ? もしかして、僕、余計なこと言っちゃった?

ヤル気になっている瑠璃香を不安に思いながら逃げる機会を失った僕は、結局彼女の家に泊まることになってしまった。



結局風呂には瑠璃香が先に入り、僕が後から入ることになった。
瑠璃香のお風呂は意外と短めですぐに上がってきたのだが、少し濡れた髪と白のシャツと短パンというラフな格好に僕は直視できず、すぐに顔を背けていた。

「ユキ？ どうしたの？」

瑠璃香は僕の態度が面白かったのか、少しからかってくる。

「べ、別に何でもないよ。そ、それよりも僕もお風呂に入ってくるね」
「ええ、いいわよ。あつ、配信の準備をしておくからお風呂から上がってきたら、カグラって呼んでね。念のために」
「そっか……、万が一に音声が入るとまずいもんね。わかったよ。それじゃあ、行ってくるね」

僕は瑠璃香と別れて浴室へと向かっていった。
奇しくもそれが瑠璃香の罫だとは気づかずに。



『#姫のご乱心 #敗者の宴』寝るまで雑談 《神宮寺カグラ／雪城ユキ／シロルーム三期生》

2. 2万人が視聴中 ライブ配信中

☒632 ☒2 ?共有 ≡?保存 ∴

【コメント】

∴敗者たちの宴www

∴草しかない

∴段ボールが二つwww

∴『敗者』って書いてあるねw

∴片方は『入浴中』になってるな

……がたっ

…どっちだ!?

…ユキくんかカグラ様か

カグラ『みんな、さつきぶりね。シロルーム三期生、神宮寺カグラ、来てあげたわよ』

カグラは姿を表すとどこか自信ありげなその言葉遣いにリスナーたちが不思議そうにする。

【コメント】

羊沢ユイ : うみゆ? カグラ、何かいいことあった?

: カグラ様が楽しそうだw

: 敗者なのにw

: 負けたことが嬉しい? w

猫ノ瀬タマキ : カグラちゃん、虐められたいにや?

: やばい人がいたw

: いや、やばい猫だw

カグラ『別に虐められたいわけじゃないわよ!?! そ、それよりもこの段ボール、見えるかしら?』

カグラはにつこりと微笑む。

その隣には『入浴中』と書かれた段ボールが置かれていた。そして、コラボ相手であるはずのユキは声すら聞こえない。そこから導き出される答えは一つだけだった。

【コメント】

…ま、まさか

…ユキくん入浴中!?

…映像を! 映像をくれ!!

：ユキくんはあはあ

カグラ：『もうすぐ、お風呂上がりのユキが来るわよ。ユキからも寝るまで雑談の配信許可はもらってるからね。みんなで思う存分堪能しましょう』

カグラはすごく悪い笑みを浮かべていた。

【コメント】

：あれっ、今日のカグラ様、何だか黒いw

：みんながカグヤ様、カグヤ様って虐めるから

：あれっ、カグヤ様だった？

カグラ：『誰がカグヤよ!? 私は神宮寺カグラよ!』

ある意味持ちネタになりつつある名前弄り。

慣れてくれば逆に美味しいかもしれない。

リスナーからネタを提供してくれるので、こちらとしてはそれを直すだけで笑いが取れるのだから――。

カグラ：『それよりもそろそろかしらね』

カグラのその言葉とともに彼女の後ろから声が聞こえてくる。



お風呂から上がって、服を着替えようとした僕。

しかし、つい先ほどまで、洗面所に置いていた僕の服はなくなっており、代わりにユキくんが着てるような白のワンピースが置かれていた。

それ以外に服はない。

これを着なければ、全裸で女性の前に立つ変態ということになる。着たら女装をしている変態。

どっちがマシか……。

いや、何も着ないで全裸のまま瑠璃香の前に立つのはどう考えてもマズい。

まだ服を着てる方が犯罪的ではないか。

でも、女装……。

いや、とりあえず元の服を取り戻すまでだから……。

覚悟を決めた僕は置かれていた服を着ると、そのまま急いで瑠璃香のいる部屋へと向かっていった。

——— といえば、瑠璃香は配信準備をしているから、名前では言わないで欲しいって言ってたね。

瑠璃香はさっきのラフな格好のままパソコンを触っていた。

そして、喋る練習でもしているのか、画面に向かって話していた。

この辺りが瑠璃香の V t u b e r としてのプロ意識、というものだろう。

僕にはないものなので、これは学ばないといけない。

カグラ：『それよりもそろそろかしらね』

練習の途中で申し訳ないとは思ったけど、瑠璃香に話しかける。

『えと、る……、か、カグラさん、その……僕の服は？ 何故かワンピースに変わってたんだけど？』

【コメント】

：ユキくんきたアアアアア!!

：お風呂上がりユキくんはあはあ

：よし、俺もワンピースを着てくる

美空アカネ　：なら私は一升瓶を持っていこう

：一升瓶w w w w

：ユキくんたちに飲ませたらダメだろw

美空アカネ　：ココママは飲めるでしょ？

：幼女に飲ませる鬼畜w

海星コウ　：アカネは回収してゴミ箱に詰めておきます

美空アカネ　：ひ、酷い

：ワンピースのユキくん、はあはあ

カグラ：『それにしても、本当に似合うのね。なんだか悔しいわね』
『に、似合わなくて良いよ!?　ぼ、僕は——』

思わず男って言いかけたけど、なんとか言い留まった。

『僕は……、こ、子供じゃないからね!?!』

なんとかおかしくない言い訳をできた気がする。
すると、カグラもそれを察してくれる。

カグラ：『そんなことないわよ。子供みたいに可愛らしいし小柄だし、同じ女として悔しいわね。なんでこんなに可愛いなのよ』

カグラに髪をわしやわしやと触られる。

『わふっ……、さ、触らないで……』

【コメント】

：ユキくん可愛い

：ユキくんは小柄

羊沢ユイ　：うみゆ、ユキくんはゆいより小さいの

：アホ毛の分だけw

：ユイツチ W W W

カグラ：『さて、それじゃあ前置きが長くなってしまったけど、コラボ相手のユキくんよ。シロルーム、みんなの妹ね』

『ちよ、ちよと待って?! いつの間にそんなこと決まったの?!』

カグラ：『今私が決めたのよ。でも、反対意見はないと思うわ』

【コメント】

羊沢ユイ　：うにゆ、ユキくんはゆいの妹

真心ココネ　：わ、私は飼い主ですよ？

猫ノ瀬タマキ　：犬は敵にや

美空アカネ　：おつ、妹か？　パン買ってこーい！

海星コウ　：ちよと、アカネ！　それは違うでしょ？　ユキくん

が妹なのは私も賛成よ

：ばらける W W W

：みんな暴走するからな W W W

カグラ：『多数決でユキくんはみんなの妹に決定ー！　はいっ、拍手』

カグラが拍手をするとそれに呼応するようにコメント欄でも祝福の言葉が投げられる。

【コメント】

：88888888

：88888888

：88888888

羊沢ユイ　：88888888

真心ココネ　：88888888

猫ノ瀬タマキ　：88888888

美空アカネ　：ユーヅ88888888

海星コウ ……8888888

野草ユージ ……ちよつ!? 今来たら俺燃やされてないか!?

…ユージ草

…ユージ草

…ユージ草

『ちよつと、勝手に決めないでよ……。わふう……。ということ、知らないうちに妹にさせようと暗躍されているシロルーム三期生、雪城ユキです。段ボールハウスの中に籠もりますので探さないでください……。ふあああ……。』

流石に立て続けの配信疲れが出てきたのか、小さくあくびをしてしまふ。

そのあと、カグラのパソコンを少し弄って、ユキくんを段ボールハウスの中へ入れておく。

段ボールの茶色と屋根の赤色が目印の小さな家。寝転がってようやく入れるサイズ。

結構前からもらっていたのだが、今回が初お披露目だった。

そして、僕自身もカグラが先に準備してくれていた布団へと移動する。

【コメント】

…あくび助かるw

…ユキくん、隠れちゃった……

…怖くないよー、出たおいでー

…通報しました。犬のおまわりさんに

…あくび助かる

美空アカネ ……その家は冷暖房完備、防犯機能付きの最新段ボールハウスだよ

…とんでもない設定来ましたwww

…ユキくん、おねむ?

：頑張ってたもんね

『ぬくぬくするよ……。ふああああ……。』

布団にくるまっただけのつもりだったが、急に眠気が襲ってきて、再びあくびをしてしまい、目もトロンと垂れてくる。

カグラ：『ユキ、もう眠い？』

『うーん、流石に今日は少し頑張りすぎたかな……。料理対決は結構長時間だったし、その前に記念配信もしたから……。』

カグラ：『私のために無理させてしまったわね』

『そんなことないよ。僕がしたかったからしたことだからね……。』

【コメント】

：まだ日が変わる前なんだけど……

真心ココネ：ユキくん、おやすみ

羊沢ユイ：うみゅー、もう寝る時間なのー

：おつー

：おやすみー

：登場五分で退場するユキくんw

：今日ユキくん頑張ったもんね

『わふ……。ご、ごめんね、みんな。僕は先に休むからカグラさん、あととはよろしく……。』

カグラ：『仕方ないわね。なら後はユキくんの寝顔を存分に観察させてもらおうわね』

『うん……。』

そこで僕の意識は落ちていた――。

最後のカグラの言葉は耳に入らずに――。

そして、カグラの配信はいつしか僕の寝息を聞く配信になってい

た。

第16話：ユキくん、冴える？

カグラとのコラボを終えた次の日。

僕は途中で寝落ちしてしまった配信のアーカイブを見て悶絶していた。

「ちよ、ちよっと待ってよ!? な、何で僕の寝息が入ってるの!? しかも音楽消して、瑠璃香さんもわざわざ何も喋らないようにして——」「えっ? もちろんみんな聞きたそうだったからよ?」

「ぼ、僕の寝息なんて聞いてもみんな楽しくないよ!? ううう……、また僕の痴態が広められてしまった……」

「みんな微笑んでたわよ?」

「ど、どうして……。ううう……。ますます僕の正体をばらせなくなっただよ……」

思わず身震いしてしまう。

しかし、もう配信されてしまった後なのだからどうすることもできない。

「と、とりあえず今日は僕、帰るね。えっと……。僕の服は?」

「あー……。うん、それがね……」

昨日洗濯してもらっていた服を探すが、どこにもなかった。瑠璃香に確認をすると、彼女はすごく言いにくそうな顔をしていた。

ものすごく嫌な予感がした僕は、恐る恐る聞いてみる。

「……な、何かあったの?」

「洗濯機が回ってなくて、さっき回したところだからその……。ユキの服はまだ着れる状態じゃないのよ」

「えっ!?!」

「ま、また乾かして持っていくからその……。今日はその格好のまま

「帰ってくれるかしら?」

「そ、そんな……。この格好で帰ったら僕、変態扱いされるよ!」
「大丈夫よ。とつても似合ってるから……」

瑠璃香が顔を背けながら言ってくる。

ただ、僕は必死に抵抗をする。

「嬉しくないよ!? これだとどこからどうみても女装少年だよね!」
「可愛らしい少女にしか見えないわよ。ううん、これはもつとやばいわね。ココネとユイが取り合ってる気持ちがあるかもしれないわ」
「や、やめてよ!? 同期三人が僕を取り合うなんて……」

ココママはしきりに一緒にお風呂に入ったり、寝たりしようとしてくる。

ユイは朝までホラーゲームをしようとしてくる。

最近だと、自分の身の危険すら感じるようになってきていた。

その点、瑠璃香だとあくまでも配信が中心。

確かに恥ずかしいところを撮られたりはするけど、それも配信のためで、グイグイとくる感じは……。そこまでない。

気を利かせたつもりが、ちよつとポンコツして服が着られなくなったりするくらいで――。

「ユキが私を頼ってるのなら仕方ないわね。わかったわ、とりあえずユキが恥ずかしくないようにしてあげるわ」

「ほ、本当!?! ありがとう」

僕が笑みを向けると、瑠璃香は頬を緩ませていた。

そして、タンスの中から大きめのリボンを取りだし、少し険しい表情をしながら、僕の髪に白い大きめのリボンを結んでいた。

「うっ……、この破壊力……。本当にやばいわね。わかっているても可愛すぎるわ……」



——うううう……。ますます恥ずかしいよ……。

瑠璃香の手によって、僕はどこからどう見ても可愛らしい少女になっただけ。

確かに今の格好を見て、誰も僕が男だとは思わないだろう。

つまり、恥ずかしいのは僕だけ。

照れたら変に思われるので、なるべく平静を装う。

あとは知り合いにさえ会わなければ問題ない。

そもそも、僕の知り合いは片手で数え切れるほどしかない。

瑠璃香の家から帰るまでの時間に、その知り合いに会う可能性なんてほぼゼロにも等しいだろう。

「あれっ？ 君って確か小幡くん……。だよな？」

「えっ!？」

まさか声をかけられるとは思わず、ついつい反応してしまう。

そこでしまった、と思い、慌てて訂正する。

「そ、その、僕はこ、小幡ではない……。ですよ？」

「あーっ、やっぱり小幡くんだー!」

振り返ってみるとそこにいたのは、以前結坂の友達として紹介された女性だった。

名前は確か……。

確か……。

「えとえと、知らない人とは話したらダメだから——。その……ごめんなさい」

思わず謝ると女性は苦笑をする。

「あつ、ひどいよ。前も自己紹介したはずだよ？　大代おおしろこより。彩芽あやめちゃんの友達で小幡くんの一つ上の大学三回生だよ」

「あつ、はい。えっと、僕は小幡こはたゆき祐季です。その、よろしくお願いします」

軽く頭を下げると大代は笑みを浮かべていた。

「あははっ、やっぱり小幡くんじゃん」

「あつ……。ゆ、誘導尋問なんて酷いですよ……」

「別にそんなことしてないんだけどね。それより、今日はぜひぶん可愛い格好をしてるんだね？　小幡くんって本当に男の子？」

「えとえと、これには深い事情があつて……」

「うんうん、わかってるよ。彩芽あやめには内緒にしておくよ。……家に持って帰っていい？」

「だ、ダメです……。そのその、これは本当にたまたまなんです……」

考えれば考えるほど、顔が赤くなってくる。

確かに側から見ればただの女装少年。それは変態以外の何物でもなかった。

しかし、そのことを知ってか知らずか大代は普通に話しかけてくる。

「私は可愛かったらオツケーだよ。妹も欲しかったからね」

「っ!？」

思わず後ろに下がって身を守る。

——担当さんといい、ユイといい、大代さんといい、何で僕の周りにはこういう人ばかりいるのだろうか？

「あー、違う違う、取つて食おうとかそういう理由じゃないよ。可愛いものって見ると目の保養になるよね？ 別にそこに性別は関係ないかなって」

手をばたつかせて顔を赤らめながらいう大代。

ただ、ここは道の往来。そこまで人通りが多い道ではないものの、それでも道ゆく人はいる。

そんな道のど真ん中でさっきの言葉。
すぐに大代の顔は赤くなり、急に僕の手を引っ張ってくる。

「ご、小幡くん、ちよつと付いてきてー！」

「えっ、ちよ、ちよつと待って……」

僕の言葉は耳に入らないようで、大代に連れられるがまま僕は近くの喫茶店に入っていた。

◆◆◆

テーブル席に向かい合う大代とワンピース姿の僕。
そして、大代は手を合わせて僕に謝ってきていた。

「ご、ごめんね、小幡くん。勝手にお店に入っちゃって。ここは私が奢るから許して」

「えと、お金は良いのですけど、その……僕は自分の格好が——」

女装をしたままの方が気になって落ち着かなかった。

「そ、それは可愛いから大丈夫だよ。でも、本当にごめんね。お詫びに何でも食べていいから……」

そんなタイミングで僕のお腹が鳴っていた。

よく考えると昨日の晩から、あの失敗作の料理しか食べていない。ろくなものを食べていないのだからお腹が減るのはある意味当然だった。

「えと、そ、それじゃあ僕はサンドイッチのセットを」

「うん、私は苺のパフェにしようかな。店員さん、いいですかー?」

大代は手をあげて大声で店員を呼んでいた。

よくそんなことができるな、と僕は思わず感心してしまう。

コミュ障の僕だと店員さんがそばを通るまで、呼ぶことなんてできない。

そもそも喫茶店に入ることすらままならない。

改めて僕には大代は眩く思えてきた。

「んっ、私の顔に何かついてるかな?」

無意識のうちに大代のことを見ていたようだった。

不思議に思った彼女が尋ねてくる。

「な、何でもないです……。その……眩しいなって」

インドアな僕からすれば陽キャである大代が直視できないほど眩かった。

「そんなことないよ……。店員さんと呼んだだけだよ?」

「僕にはできないよ……。あつ、そうだ……。大代さんはどこで結坂と出会ったのですか?」

「彩芽と？ うーん、初めて会ったのは会社の面接かな？」

——面接？ バイトか何かかな？ そういえば配信についても教えてもらったって言ってたかな？

「バイト仲間だったのですね……」

「バイト……とはちよつと違うんだけどね」

苦笑をする大代。

ただ、そのタイミ^{タミ}ングで僕のサンドイッチが運ばれてくる。

色鮮やかな黄色や緑、赤とい^{たまご}った食材に思わず感動してしまうの

は、昨日の料理が黒一色だったからだろうか？

焦げ臭くもなく、弾力あるパンを見ると思わず喉を鳴らしてしまう。

すると大代が気を遣って言うてくる。

「あつ、先食べてくれていいよ。私のパフェは遅いだろうし」

「すみません。それじゃあ、いただきます」

手を合わせたあと、僕は目の前に置かれたサンドイッチを口に運ぶ。

「お、美味しい……」

「……普通のサンドイッチだよ？」

「普通って幸せですよ。普通って」

昨日のことを思い出して、思わず遠い目をする。

すると、大代が笑いをこぼしていた。

「あははっ、小幡くんって変わってるって言われなかな？」

「そ、その、言われるような友達がいなくて……」

「あつ、ぐ、ごめん。……あれっ？ 彩芽は友達じゃないの？」
「えつと、ユイ……坂が僕の初めての友達かな」

うっかりユイと言ってしまいそうになるが、慌てて訂正する。
気づかれたかな？ つと不安になったが、大代は笑みを浮かべて僕を見てただけで、どうやら気づいてまではいなさそうだった。

「そうなんだ。それなら私が小幡くんの友達第二号に立候補しようかな？」

笑みを浮かべながら、あつさりと saying ってくる大代。

——こんなに簡単に言えるんだ。僕だったら今の言葉を発するのに一晩悩んで、諦めるのに……。

ただ、突然のことに思わず言葉を詰まらせてしまう。

「えっ？ あ、あの、その……」

「も、もちろん無理には言わないよ？」

「えとえと、大代さんとは会ってまだ二回目なのに……その、良いのですか？」

「あつ、私のことはこよりでいいよ」

「じゃあ、僕の話は祐季でいいですよ？」

「うーん、私は小幡くん、のほう呼びやすいからそっちで良いかな？」

ちよつと、祐季くんだと別の人と重なりそうで——

「あつ、はい。わかりました。それじゃあ、僕も大代さんで……」

「こよりでいいですよ？」

「はい、大代さ……」

「こよりでいいですよ？」

「おおし……」

「……こより」

「わ、わかりました……、こよりさん」

こよりからの有無を言わさない圧力に負けてしまう。

友達第二号が圧倒的陽キャのこよりさん。

満足そうに微笑む彼女を見ると僕は苦笑いを隠しきれなかった。

「うーん、まだ少し固い感じだけど仕方ないかな。あと私に敬語はいらないよ。緊張感は徐々にときほぐしていくからね」

——もしかして、早まっちゃったかな？

少し不安を感じた瞬間にこよりが手を伸ばしてくる。

「ひっ!?!」

思わず目を閉じてしまう。

しかし、特に何かされたわけでもなく、一瞬頬に手の感触を感じただけだった。

「小幡くん、口についてたよ」

こよりの手にはサンドイッチに挟まっていた玉子が掴まれていた。

そして、それをそのままこよりはそのまま口へ運ぶ。

「あっ……」

「うん、なかなか美味しいね、ここの玉子」

「なっ、なっ……」

にっこりと微笑むこより。

ただ、僕は自分が食べてたものを、こよりに食べられたことへの驚きと恥ずかしさが入り混じって、うまく言葉を発することができな

い。

頬が赤く染まっっていくのを感じる。

すると、そのタイミングでこよりのパフェが運ばれてくる。

すると、こよりはパフェと僕を見返して、スプーンでパフェのクリームをすくって、僕の方へ差し出してくる。

「はいっ、小幡くん。玉子のお返しだよ？」

「あわわわっ……、そ、その、僕……、僕……、ふきゅう……」

恥ずかしさの許容を超えてしまい、僕は目を回していた。すると、こよりは心配してくれる。

「わわっ、小幡くん、大丈夫!? ご、ごめん、やりすぎたよ」

「きゅう……」

「も、もうしないから。小幡くん、戻ってきてー……」



それから僕が意識を取り戻すのは数分後だった。

目を覚ました時にいつの間にか隣に移動していたこよりは不安そうに聞いてくる。

「小幡くん、大丈夫……?」

まだまともに意識が覚醒していない僕は、何も考えずぼんやりと思ったことを呟っていた。

「ママ……?」

「だ、誰がママですか!」

——あ、あれっ!? も、もしかして、今って配信中だった!?

こよりのその反応がココママに見えてしまい、思わず飛び起きる。しかし、そこは喫茶店で、隣でこよりがぼんやり僕のことを眺めていた。

「あ、あれっ？ こより……さん？」

「小幡くん……、起きたんだ……。ごめんね、少し調子に乗りすぎちゃったみたいで……」

「ううん、僕も慣れてなかったから、その……、恥ずかしさの許容を超えちゃったみたいで……」

「私も可愛い妹ができた気分になって、やりすぎちゃった。反省するよ……」

「そ、その……、僕ももうちょっと耐えられるように頑張るよ……。そのうち……」

「そっか……。じゃあこのパフエを……」

「そのうち！ そのうちだからねっ!？」

追い討ちをかけてこようとすることよりの攻撃をかい潜り、なんとか喫茶店での猛攻を防ぐことができた。

こよりをココママっぽいと感じたからだろうか。知らず知らずに自然としゃべり方は普段の僕に近づいていた。



ようやく解放されて、家に戻ってきたときにはすでに夜になっていた。

流石に今日も配信できる気力がないので、同期の放送を眺めるとココママが配信しているようだったので、見に行くことにした。

『《#心の拠り所》雑談。新しい友達ができたよ《真心ココネ／シロルーム三期生》』

1. 6万人が視聴中 ライブ配信中
☒961 ☒1 ?共有 ≡?保存 …

ココネ『ココフレのみんなー、ここぼんはー！ シロルーム三期生の真心ココネですよー』

【コメント】

：ココママー
：ココママー
：ココママー
：ココママー
：ココママー
：ココママー

ココネ『ママじゃないですよー。それよりココフレのみんな、聞いてください。今日、私に新しい友達ができたんですよー』

ココネは嬉しそうに話していた。
その本当に幸せそうな表情を見ているとこっちまで嬉しくなってくる。

【コメント】

：てえてえの予感
：ぼっちには眩しすぎる
：ココママ嬉しそう
：お、男じゃないよな？

ココネ『白のワンピースと大きなリボンが似合う、とっても可愛らしい子なんですよ。妹に欲しい子なんですよー』

その言葉に僕は一瞬固まる。
ただ、白のワンピースを着てリボンを付けている子ならたくさんい

る。

僕とは無関係なはずだ。

たまたま同じ服を着ていたから一瞬焦ってしまった。
苦笑いのまま、僕はコメントを眺める。

【コメント】

：白のワンピース……、ユキくんか！

：リアルユキくんキタアアアアア!!

雪城ユキ　：ぼ、僕は関係ないよね!?

：本物いたw

ココネ『あつ、でもユキくんに似てるかもしれないです。小柄でこれこそ中学生くらいにしか見えなくて、しかもしかも、ほっぺについたサンドイッチの玉子を取ってあげると顔を真っ赤にしてたんですよ……』

——んっ？　どこかで聞いたことがあるような出来事……。

額から冷や汗が流れる。

——ま、まだ、何人もいるよね。そ、その、ワンピースを着てて、サンドイッチを取ってもらった人なんて……。

ココネ『それがあまりに可愛くて、ついつい私のパフエをあーんつとしてあげたんですよ。すると恥ずかしすぎたみたいで、目を回しちゃって……。とっつてもウブな子だったんですよ。やっぱり可愛いって正義ですよね』

【コメント】

：その子もシロルームに来てくれないかな？

：まだ中学生なんだろう？　数年待て

：ワクワク

：今から楽しみ

：ココママがユキくんから浮気してる

ココネ：『浮気じゃないですよ!! ゆ、ユキくんは私の大切な友達ですよ。そ、そうですね、ユキくん? ……ゆ、ユキくんも何か反応してくださいよ……?』

ココネが不安そうな声をあげていた。

ただ、僕は別の考えに心を揺らされていて、まともに反応が出来なかった。

——こよりさんがココママだったんだ……。

思えば初めて出会った時はココユイのコラボがあった日、ユイである結坂と一緒にいたのはこよりだった。

他にも初めて出会ったのが会社の面接。

その会社がシロルームのことなら、二人が出会っててもおかしいことではない。

それに加えて、今の僕の情報……。

寝起きに感じたココママの雰囲気……。

一個一個だと確証は持てなかったけど、ここまで揃ってしまうとほぼ決まりだった。

——ちよ、ちよつと待つて!! そういえば僕って、あのこよりさんとお泊まりのオフコラボをするの!! そ、そんなの体がもたないよ……。

ゲームで疲れて寝てしまったユイとのオフ会や、気がついたら泊まることになっていたカグラとは違う。

最初から泊まることが決まってる配信。

「ううう……、知らなかったらよかった……」

【コメント】

：あれっ？ 本当にユキくんの反応がない？

：もしかして逃げた？

：ココママ怯えてて草

：ユキくん、落ち込んだじゃったねw

ココネ『そ、そんなことないですよ!! み、見ててください。今通話して私たちの仲を証明してみせますから——』

——ま、まずい……。今ココママから電話がかかってきたら余計な反応をしてしまいそうだよ。と、とりあえずコメントで反応して……。

【コメント】

雪城ユキ : べ、別に気にしてないよ……

：めっちゃ気にしてて草

：ユキくん拗ねたw

：w w w w w

雪城ユキ : えっ、ちが……

コメントも途中にキヤスコードから通話がかかってくる。相手はもちろんココネからだった。

『えとえと……、な、何かな?』

ココネ『ユキくんー、違いますからね。私はユキくんのママですからね』

【コメント】

：ココママの台詞が酷いw

：ココママがママを認めてて草

：珍しいw

：ココママ、ユキくんが絡むとポンコツになるよな？

：人をダメにするユキくん、かw

羊沢ユイ　：うみゆ、ココママがユキくんを手放したのでゆいとも
らっていくの

：ユキくん依存症だな、これは

『ちよ、ちよつと!?　なんで僕がクッションみたいな名前がついてる
の!?!』

ココネ：『ユキくんー、私を許してー』

『ゆ、許すも許さないも僕は別に怒ってないよ。ほらっ、ココママには
いつもお世話になってるし、その……とつても感謝してるんだから』

ココネ：『ゆ、ユキくん……』

ココネは涙を拭う仕草をする。

『そ、それよりも一応僕、自己紹介した方がいいかな？　ココママも僕
のアバター、出す？　今ならなんとか話せるよ?』

ココネ：『そ、そうですね。ユキくんにフォローされるなんて……』

『ぼ、僕も昔のままの僕じゃないんだからね。みんなのおかげで成長
したから……』

ココネ：『あとは声が震えてなかったら完璧でしたね』

『あう……』

ようやく本調子に戻ってくるココネ。

それを見て、僕は少しほっとしていた。

ココネ：『改めてユキくん、自己紹介をよろしくおねがいします!』
『それじゃあ、僕は帰るね。お疲れ様で——』

僕ならこういう対応をする方が自然かな、とわざと帰ろうとする。すると、ココネが慌てて言ってくる。

ココネ：『ちよ、ちよつと待ってください！ ユキくんから言ったことですよ!! 最後まで責任を取ってください。私はもう、ユキくんがないとダメな体になってしまったのですから』

『ちよ、ちよつと言いつつ わざとでしょ!? ねえ、わざとだよね!!』
ココネ：『……だって、ユキくんの初オフも私だって言っていましたよね?』

ココネが少しすねた口調になる。

確かにココネから言ってきたこととはいえ、その約束は守れなかったことになるので、僕は申し訳なく思う。

『それはその……、ごめん。その、成り行きで……』

ココネ：『しかも、カグラさんともオフしてましたよね?』

『……うん、それは僕から誘ったことだし言い訳できないかも』

ココネ：『ツーン……』

『ご、ごめん、ココママ。その……ぼ、僕にできることなら何でもするから——』

ココネ：『……それならコラボ配信の前に一緒に買い物へ行ってくれますか?』

『そ、そのくらいなら……』

ココネ：『ユイちゃんがしてたみたいに、配信中にギュツと抱きしめてもいいですか?』

『えっ!? うううう……、それはその……』

ココネ：『ユイちゃんにはよくて、私はダメなんですね……』

ココネのアバターが落ち込んでみせる。

——いつもココママには助けてもらってるから、断れない……よね？
でも、オフ会で抱きしめられる……。ココママではなくこよりさんに……。

真剣に頭を抱えて悩む僕。

『うううう……。ど、どうしたらいいんだろう……。』

【コメント】

：ユキくん苦渋の決断www

：頼む、ユキくん。俺たちのためにも

：ユキくん、頑張れ

羊沢ユイ　：うみゆー、ユキくんは柔らかかったの

：火に油を注いでて草

ココネ：『どうですか、ユキくん？』

『うううう……。わ、わかったよ。オフ配信の時も同じ様に抱きしめた
いって思うのだったらいいよ……。』

ココネ：『ありがとうございます。ならあとは、一緒のお風呂と同じ
ベッドで寝るだけですわね』

『さ、流星にそれはダメ!!』

ココネ：『むううう……。恥ずかしがり屋のわんこさんですね。大丈夫、
少ししか襲わないですから——』

『お、襲う気だったんだ!?　ぜ、絶対にダメだよ!!』

【コメント】

：ココママ草

：絶対見に行く

：楽しみ

羊沢ユイ　：ゆいは一緒に寝たの

：www

：まだ油を注ぐw w w w w

ココネ：『ユキくんと一緒に寝るの、楽しみですね』

『えっ!? そ、それは断ったはず——』

ココネ：『ユイちゃんはよくて私はダメなの?』

『ココママ、怖い。怖いよ……? そ、それにユイの時もカグラさんの時も僕は先に寝ちゃったから詳しく知らないんだよ……』

ココネ：『あつ、そういう方法があったんですね。なら私も——』

『あつ、よ、余計なことを……。だ、大丈夫、僕は起きてるから……』

【コメント】

：ユキくん自爆してて草

：いつものユキくんだw

：w w w w w

：いつも先に寝るユキくんw

：緊張して前日寝られないらしいもんなw

：子供なんだなw

：ここままでユキくんの自己紹介なしw

『あつ、わ、忘れてた。わ、わふうー、み、皆さん、初めまして。シロルーム三期生の雪城——』

ココネ：『では、次回のオフコラボ配信をお楽しみに。乙ココー』

『あー、ちよ、ちよつと、まだ僕の自己紹介が終わってな——』

この放送は終了しました。

『《#心の抛り所》雑談。新しい友達ができたよ《真心ココネ／シロルーム三期生》』

2. 4万人が視聴 0分前に公開済み

☑1. 0万 ☑24 ?共有 ≡?保存 ∴

チャンネル名：kokone | Room. 真心ココネ

チャンネル登録者数4. 8万人

【コメント】

- ・自己紹介の途中で終わる犬 W W W
- ・毎度飽きさせないな W
- ・ユキくんらしい W
- ・17日が楽しみだ W

第17話：急募、お泊まりオフ対策配信

結局ココネの配信はグダグタのまま終わってしまった。

それも僕らしいと言えば僕らしいけど……。

ただ、ココネのライブ放送が終わった後、僕はしばらく呆けていた。

——まさかココママがこよりさんだったなんて……。

しかもオフ配信の前に買い物物の約束や配信中に抱きつかれる約束、更に僕が先に寝てしまったら、隣に寝てくるなんてことも言っていた。

そんな状態で平静を装うのは難しく動きが固まっていたのだが、キヤスコードの通知音で我に帰ることができた。

ピコッ！

「わわっ、だ、誰?！」

慌ててスマホを開くと、メッセージはココネからだった。

ココネ：「明後日は10時に駅前でいいですか?」

どうやら買い物へ行く時間の確認だった。

ユキ ……「いいよ……」

こよりと二人で出かける。

そのことを考えた瞬間に胃がキュツと締め付けられるように痛んでくる。

ユイやカグラと一緒に配信したときはあくまでも配信だけ。

こうやって一緒に出かける様なことはしなかった。

ユキ　：「やっぱり僕、少し体調が悪くて——」

ココネ　：「それは大変ですね。私の家でしつかり看病しますね」

ユキ　　：「えと、ち、違つ……」

ココネ　：「私、料理も得意ですから。美味しいお粥とか作りますよ」

ユキ　　：「美味しいお粥……」

一瞬それもいいな、つて思ってしまった自分がいた。
しかし、すぐに首を横に振つてその考えを振り払う。

ユキ　　：「そ、そういうことじゃなくて、その……」

僕が気にしていることはココネがこよりだつてことだった。

しかし、そのことに気づいていないココネはいつもの僕だと思つていた。

ココネ　：「大丈夫ですよ。私を手取り足取り案内しますから、ユキくんは体だけ持ってきてください。あとは全て私に任せてくれたらいいですから——」

ユキ　　：「あああう……。へ、変なことをしないでよ……」

ココネ　：「………はい」

ユキ　　：「なに、その間は……」

ココネ　：「あははっ、気にしないでください。あと当日の配信予定なんですけど、カグラさんのところでした、寝るまで雑談配信でいいですか？」

ユキ　　：「わ、枠はココママの枠だからお任せするよ」

ココネ　：「分かりました。思う存分に楽しんでもらえるように頑張りますね」

ユキ　　：「楽しんで………つてホラーゲームじゃないよね？」

ココネ　：「あははっ、違いますよ。あっ、映画は見に行きましようね。あと、夜は楽しくおしゃべりをしましよう」

ユキ : 「えっ!? ほ、ホラー映画!？」

ココネ : 「楽しみです。一緒に見ましようね」

ユキ : 「で、でも、一緒に行くのは買い物って——」

ココネ : 「買い物ついでに映画を見るのは普通ですよね?」

ユキ : 「そ、それならもつと楽しい映画を——」

ココネ : 「ちようど見たい映画があつたんですよ」

ユキ : 「あうあう……、ぼ、僕、目を瞑ってても良いかな?」

ココネ : 「もちろんですよ。一緒に来てくれるだけでいいですから」

ユキ : 「わ、わかつたよ。そ、それなら……頑張る」

ココネ : 「あと、私とのコラボの次の日に、ユキくん単独で収益化解禁の記念配信をしてほしいって担当さんから連絡がありましたよ」

ユキ : 「記念ばっか……」

毎週どころかそれこそ数日に一回のペースで記念配信をしてる気がする。

それこそ記念が日常粹のように……。

しかも、今度は収益化の記念。

考えない様にしてたけど、思い出したら緊張で足が震えてくる。

ココネ : 「収益化、おめでとうございます。やっぱりユキくんはすごいですよね。恥ずかしがりながらも、みんなの期待に応えようと必死になって……」

ユキ : 「あ、ありがとう……。で、でも僕は自分のことに必死で、ただ闇雲に頑張っただけですよ」

ココネ : 「そういうところがみんなユキくんに惹かれる理由なんですよ。ね——」

ユキ : 「えっ?」

ココネ : 「あ、あははっ……。な、何でもありませんよ。そ、それじゃあ当日楽しみにしてますね」

こうして、ココネとのチャットは終わった。

「と、とりあえず今日の配信の準備をしないとね……」

さすがに明日は準備とか、ココネのオフや記念配信の緊張から配信できる気がしない。

そうなるとうちのうちに配信しておく必要があった。

◇◇◇

『《#犬拾いました》た、助けて……《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

1. 1万人が待機中 20XX／05／15 22:00に公開予定

☒682 ☒1 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：なんだか不穏なタイトルだな

：さっきのやつだろ？w

：wwww

：ユキくん的にはピンチかw

：俺たちのにはご褒美だw

：ユキくんの段ボール、久々だw

：『拾ってください』だなw

：今日こそは俺が拾うぞ

：俺、この間犬を拾ってしまったんだ

単独配信に、大好きの人たちが盛り上がりを見せていた。

配信前の画面には段ボールが一つ、映ってるだけなのに……。

でも、よく考えるとこの画面も久々に思える。

そして、配信予定の時間になったので、ミアアニメを開く。

段ボールから見え隠れするユキくんのちびキャラ。

【コメント】

：ユキくん可愛い
：ちびキャラ可愛い
：ユキくんだけでも設定できる様になったんだ
：成長するユキくん

ミアアニメが終わるタイミングで、ユキくんをダンボールに入れて表示させる。

『わ、わふー……』

ちよつと顔を覗かせながら言う。

ただ、普通に言ったつもりが緊張で声が震えてしまっていた。

【コメント】

：わふー
：わふー
：わふー
：わふー
：わふー
羊沢ユイ　：うみゅー
神宮寺カグラ　：来てあげたわよ
美空アカネ　：わふー
貴虎タイガ　：よつす
：今日は多いなw
：常識枠がないぞwww

『えとえと、突然の配信なのにたくさん来てもらえてありがとうございます。シロルーム三期生の雪城ユキです。わ、わふー。き、今日はちゃんと言えた……』

【コメント】

：w

：w

：w w w

：おめ w

：w

：w

羊沢ユイ　：ユキくん、えらいえらいなの

：挨拶を言うためだけの粹 w

『ユイ……ありがとう……。——あつ、ち、違うよ？　挨拶を言おうと

して粹開いたんじゃないよ？　み、みんなに相談したいことがあった

んだよ』

僕は一度引つ込めた顔をゆっくり出すとコメントを眺める。

さすがにココネの前では言えないことなので、コメント欄に彼女の
名前がないことを確認してから言う。

『相談っていうのはそのその、明後日のことなんだよ』

【コメント】

：楽しみ w

：楽しみ w

：明後日か。開けておかないと w

美空アカネ　：私も行きたい!!

貴虎タイガ　：トレーニングか？　俺も行く！

羊沢ユイ　：うみゆ、ゆいも行くの！

：w w w

：自由な先輩たち w w w

『絶対に一緒にお風呂入ろうとしてくるよね？　一緒に寝ようとしてくるよね？　それにホラー映画にまで連れて行かれるんだよ……。』

絶対に僕の体が持たないよ……』

考えただけでも緊張で体が震えてしまう。

そもそも性別を考えるとお風呂は絶対にダメだ。そこだけは回避しないと——！

『それで、どうにかしてオフコラボをなしにすることはできないかな？』

僕としては真剣に相談していたのだが、コメントによって一刀両断されてしまう。

【コメント】

真心ココネ …できないですよ

：ココママ来てて草

：w w w

：ユキくんの相談終わりw

：w w w

『へ、ココママ!?! ど、どうしてここに?! ……あつ、ち、違うよ。ココママとコラボオフをするのが嫌なわけじゃない——。ううん、嫌か嫌じゃないかと言えば、誰かとコラボすること自体がその……、嫌なだけで。……でもでも、それはココママが嫌とかそういうわけじゃなくて、そのその——。……ごめんなさい』

必死に言い訳を考えていたものの、僕とのコラボを楽しみにしてくれていたココママを裏切ってしまうことになりそうだったので、素直に謝る。

段ボールにその身を隠しながら——。

【コメント】

：ユキくんw

：素直に謝るユキくん

：謝れて偉いよ

真心ココネ　：ユキくん、もしかして私のこと嫌いですか？

『き、嫌いじゃないよ?! そんなことあるはずないよ?! だってココママは最初からずっと僕のことを助けてくれた恩人で、その……感謝しかないよ』

僕は必死に答えていると、ココネは更にコメントを書いてくる。

【コメント】

真心ココネ　：じゃあ好きですか？

：ココママがストレートだw

：www

：草

：ココママw

『あうあう……。そ、その……あの……』

恥ずかしくて返答に困ってしまう。

ただ、ここで答えなかったら、ココママのことを嫌いと言うことになりかねない。

ずっと僕のことを助けてくれた恩人にそんな真似をできるはずもなく、僕は覚悟を決める。

『そ、その、「ココママのことは……、す、好きだよ……』

——何を言わされてるのだろう、僕は。

茹で上がりそうなほど顔を赤くしながら、小声で言う。

ただ、恥ずかしくなっちゃってしまい、言うときは顔を出していたものの、すぐに段ボールへと隠れてしまう。

画面のユキくんだけではなく、僕も同じように担当さんからもらったユキくん段ボールに――。

【コメント】

：だめだ、俺はもう逝く

：骨は拾ってくれ

：俺も逝く

真心ココネ　：えへへっ、私もユキくんのこと、大好きですよ

：誰か切り抜きを頼んだ……。俺は逝く……

羊沢ユイ　：うみゅー、ゆいは？

美空アカネ　：私は？

貴虎タイガ　：俺に隙はない！

：一人違うwww

：やめてあげて。ユキくんのライフはもうゼロよ

：さりげなく混ざるアカネパイセンw

『えとえと……、い、言わないとダメなの……？　ダメ……なんだよね？』

ほんの少し、フードの部分だけ見え隠れしながら、僕は大好きさんたちに確認をする。

願わくば、逃げ道を用意してもらえることを期待しながら。

【コメント】

：一思いに逝かせてくれ……

：楽しみ

：ユキくん、任せた

羊沢ユイ　：うにゅ、言って……くれないの？

美空アカネ　：うにゅ、言ってくれないの？

：→暴走してて草

貴虎タイガ　：言う？　果たし合いか？

：→暴走してて草

：常識枠が足りないw

：ココママがいるぞ!?

：ココママはユキくんを前にした場合だけポンコツだ

：ポンしかないないw

犬好きの人たちから圧倒的に望まれているようだった。

そうなると思うしかない……よね？

——うううう……。恥ずかしいのに……。

顔を真っ赤にしながら、もう一度ゆつくり段ボールから出す。

一瞬脳裏に結坂の顔が浮かぶが、それを振り払い、心を無にして言う。
う。

『ゆ、ユイももちろん好きだよ……。アカネさんは……。海星先輩にお返しします。そのその、は、果たし合いはお、お断りさせてもらいます……。』

【コメント】

：はっ、ここは天国か!?

：かわいすぎる

：ユキくん可愛い

羊沢ユイ　：うにゅー、ゆいもだよー

美空アカネ　：うっ、こ、コウはやめてくれ。死にたくない……

：アカネパイセンのトラウマを刺激w

海星コウ　：アカネ、好きだよ？（ニコツ

：コウパイセンきたアアアアアwwww

美空アカネ　：こ、こ、コウ!?! わ、私も好きだよ!?!

海星コウ　：その話は後からゆっくり聞くから、ね

美空アカネ　：た、助け……

：パイセン、ご愁傷

：パイセン草

『あ、あれっ？　なんの放送だったかな？』

いつものように犬好きさんや同期の面々に振り回されてしまう。
なんの放送をしていたのか、とタイトルを見て思い出す。

『あつ、そ、そうだった。明後日のことだった。ど、どうしよう……、
僕の体、持つのかな？』

【コメント】

：ようやく本題に入ってた草

：でもココママ本人がいるのにw

真心ココネ　：大丈夫です。全て私に任せてください！

：ココママ草

：ココママに任せておけば安心w

『それはほらっ、ダメでしょ。一緒に出かけるのなら全部をココママ
に任せるのじゃなくて、その……ぼ、僕もココママを楽しませてあげ
たいし……。で、でも、僕に何ができるのかわからないし……』

遊びに行くのなら一方的に何かをしてもらおう、というのは違う気が
していた。

友達同士なら一緒にいて楽しくないと本当の友達とは言えない。

『そ、それにココママは綺麗なお姉さんだし、その……明るいいし、眩し
すぎるよ……』

【コメント】

：ユキくん優しい
：あれっ、ユキちゃんとココママって会ったことある？
真心ココネ　：えっ？　ああ、ユイから聞いたのですか？
羊沢ユイ　：うみゆ？　教えてないの
真心ココネ　：面接……でも会ってないですよね？

『えと、あの……、その……。め、面接の時は会ってない……よう？』

ピコッ。

『あつ、ま、また忘れてた……』

キヤスコードの通知音が鳴る。

これももはやお家芸になりつつある。

【コメント】

：この音もユキくんらしさだよなw

：www

：草

：通知音助かるw

慌ててキヤスコードを開く。

すると、連絡はココネからだった。

ココネ「もしかして、私とユキくんって出逢ってるのですか？　面

接の時以外に」

「えと……、うん」

「ここは誤魔化してもどうせ明後日にバレてしまうので、素直に答える。」

ココネ：「……そういうことですか。私とユイちゃんの共通の知り合い……。そうなるかと小幡くんしかいないですよ……」

「あ、あははっ……。お、驚くよね、やっぱり」

ココネ：「いえ、もしかしたらユキくんかなって思ってたんですよ。でも、わかってたならもっと早くに教えてくださいよ」

「ぼ、僕も気づいたのはさっきのココママの配信で、だから……」

ココネ：「それでお風呂を嫌がったり、一緒に寝るのを嫌がってたのですね」

僕の正体もようやくココネに伝わったようだ。

でも、最初からこれでよかったのかもしれない。

僕が男だとわかったら無理にお風呂へ入ったりとかしないはず。

ココネ：「でも私は気にしないので、一緒に寝ましょうね」

「っ!? き、気にしてください!!」

ココネ：「ユキくんみたいな妹、欲しかったんですよ」

「だ、だから最後まで話を——」

ココネ：「それよりもユキくん、こっちに集中して配信の方を忘れてない?」

「あっ!?」

【コメント】

：ユキくん、黙っちゃったね

：何かあったのか?

：待機

『あつ、ご、ごめんなさい。そ、その、ココママに相談してたら喋れなかったよ……。で、でも、少しでも不安が解消されたよ。みんな、相談に乗ってくれてありがとう』

僕は犬好きのみんなに頭を下げていた。

【コメント】

：ええんやで

真心ココネ　：ユキくん、可愛かったです

羊沢ユイ　：うみゆ、ゆいも混ぜるの!!

真心ココネ　：当日はもちろんいつものワンピースを着てくるのですよね？

『えっ!?　いつものって僕が毎日ワンピースを着てる様に言わないでよ!?!　普通の服だよ?』

やっぱり、僕。いつもワンピースを着るように思われてたんだ……。

【コメント】

：やっぱりユキくんだとワンピースとパーカーだよな

羊沢ユイ　：ゆいの際はパーカーだったの。犬の足跡がついてるやつで可愛かったの

：やっぱり犬のパーカー

：ユキくんは可愛い

真心ココネ　：わかりました。なら可愛い服も準備しておきますね

『も、もう、だから僕は自分の服くらい持つていくからね。そ、それじゃあ、今日の放送はそろそろおしまいにするよ。犬好きさんのみんな、今日も来てくれてありがとう。また次の放送もお楽しみに。明日はオフ会の準備で、明後日はココママと放送だから、次の放送は明後日になるかな。では、お疲れさ——』

この放送は終了しました。

『《#犬拾いました》た、助けて……《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

3. 3万人が視聴 0分前に公開済み
☒ 1. 1万 ☒ 11 ? 共有 ≡ ? 保存 :
チャンネル名 : Yuki Room. 雪城ユキ
チャンネル登録者数 10. 3万人

【コメント】

: もうちゃんと挨拶ができないのは芸になってるな。
: ユキくん w w w w w
: 結局問題解決してなくて草
: 明後日も楽しみ

第18話：ココママ5万人記念配信

——どうしてこの世はこんなに無情なのだろう……。

窓の外から明るく燦々と照らしてくる太陽に向けて、眉をひそめていた。

カーテンレールには逆さに釣られたたくさんのもてる坊主。

風邪を引かないかなと思つて敢えて薄い服を着ていたのだが、風邪も引かなかった。

ただ、ココママとのオフ会や収益化の記念配信があると考えるところ、ここ数日ろくに眠ることができてない。

そんなこともあり、体調、精神ともに最低でココママとのオフの日を迎えた。

服装はもちろんいつもの少しぶかぶか気味のパーカーとジーパン。犬の足跡付きパーカーがまさかユキちゃんと結び付けられるとは思わなかったが、それほどたくさん服を持っているわけでもないの、結局着やすいこの服を選んでしまう。

そして、駅前にたどり着く。

時間は朝の九時。

約束の時間より一時間は早い。

行くのは嫌だったが、それでも約束は約束。

万が一にも遅れることのないように早めに出てきたら早く着きすぎってしまったようだった。

「遅れてこよりさんに迷惑をかけるよりマシだよな？」

そんなことを考えていると突然知らない人から声をかけられる。

「君、こんなところに一人でいるの？ 迷子なら一緒に親御さんを探してあげようか？」

怪しい人から声をかけられたのかと思い、顔を上げるとそこにいたのはメガネをかけ、きつちりと髪を整えたいかにも会社員といったスーツ姿の男がいた。

どう見ても真面目そうな人だったので、僕は少しだけホツとする。ただ、知らない人には違いない。絶対その口車に乗せられてはダメだ。

「ご、ごめんなさい。その……知らない人とは話したらダメだって——」

「いや、別に怪しいものじゃない——」

「ご、小幡くん!? だ、大丈夫!?!」

突然、僕と男の人の間を割って入る人がいた。

それは大代こより……つまり、ココネだった。

今日は白のフリルがついたカーディガンとピンクのスカートを履いていて、とても可愛らしい。

ただ、そんなこよりが鋭い視線で男の人を睨んでいる。

——あれっ、その役目は普通、男の僕じゃないの？

何故か庇われている……。

いや、確かに背丈はこよりの方が高いし、理由はわかるけど、どうにも腑に落ちない。

「こよりさんこそ、ここは僕に任せてください」

こよりの代わりに僕が前に立つ。

すると、男の人が目を大きく見開いていた。

「ああ、その子は大代さんの知り合いだったのですか？」

「えっ、あれっ、高田太一たかだたいちさん？ どうしてここに？」

「いや、これからシロルームに向かうところですよ。ちよつと打ち合わせにね。そこで周りをキョロキョロ見回している迷子の子がいたからね」

「ああ、そういうことですか……」

「ぼ、僕、迷子じゃないですよ……。子供でもないですよ……」

「それは悪かったね。なんかすごく困ってる風に見えたから」

「どうやらこの人はシロルーム関係者のようだった。男の人ってことは裏方の人とかかな？」

首を傾げながら、一応関係者なら……と挨拶をする。

「あっ、いえ、わざわざ気を遣っていたありがとうございます。ぼ、僕は小幡祐季こはたゆきといいます。その、よろしくお願いします」

「俺は高田太一。よろしくお願いします。……えっ、小幡祐季？」

やはり小幡、と言う名前に反応するようだった。

——シロルームの会長……だもんね。僕もいまだに信じられないけど。

「それより、私の小幡くんをどこに連れて行こうとしたのですか？」

「いくら高田さんといえど、返答次第では——」

「ちよつ、ちよつと待ってよ!?! いつ僕がこよりさんのものになったの!?!」

「はははっ、確かにこれはママって言われるわけですね。最初の頃と雰囲気がいぶん変わりましたね」

「えつと……、僕の意見は？」

「なんていっても小幡くんは私の友達ですからね」

僕抜きに話が進んでいく……。

ただ、微笑むこよりを見て、僕も笑みを浮かべる。

「そ、そうだよ。うん、こよりさんとは友達だもんね」

「やっぱりまだ少し固いね」

「……ご、ごめん」

「気にしないでいいよ。小幡くんも慣れてくれたらマシになるだろうし」

「……やっぱりそうですか。小幡くんがあつ……。そして、これが噂の三期生随一のとえてえコンビ。おつと、そろそろ行かないと。二人とも、また今度」

腕時計を確認した後、高田は慌てて去って行った。



「ごめんね、小幡くん。待たせちゃったかな？」

こよりが不安そうに聞いてくる。

「そ、そんなことないよ。時間も待ち合わせより一時間も早いし……。でも、いきなり声をかけられたのはびつくりしたかな」

「小幡くん、かわいいからね。もっと注意しないと」

「えつと、ぼ、僕は男だから……」

「関係ないよ！ そんなことをしていると悪い人に拾われていくよ！」

「うつ、ご、ごめんね。心配かけて……」

「うん、気をつけてね。でも、ちゃんと謝れて偉いね」

こよりから頭を撫でられる。

「むう……、もしかして、僕のこと、子供扱いしてる?」

「あははっ、そんなことないよー」

こよりが目をそらしながら言ってくる。

「そういえばさっきの人ってシロルームのスタッフさん? こよりさんは知ってたみたいだけど……」

「えっと、小幡くんになら言っても良いのかな? ちょっと待ってね」

こよりがスマホで何か確認をしていた。

一つずつ確認して打つ僕とは違い、ものすごい勢いで文字を打っていた。

そのことに驚いていると、こよりが一度頷いて僕の方を向いてくる。

「担当者から許可をもらったよ。とりあえず歩きながら話そっか」

「うん、わかったよ」

こよりの隣に並んで歩き出す。

「手でも握る?」

「に、握らないよ!?!」

「あははっ、もう、顔を真っ赤にして……。やっぱりユキくんはかわいいなあ。……はっ!? ち、違うね、小幡くんだね……」

「もしかして、僕、身の危険? 今すぐに逃げた方が良いよね? うん、そうだね。自分の身が可愛いもんね」

「だ、ダメだよ! 今日配信を私がどれだけ待ち望んでいたか。やっと念願叶ってできるオフコラボなんだからね」

「うん、わかってるよ」

「あっ、それとさっきの高田太一たかだたいちさんは一期生の野草ユージさんだよ」

「そうなんだ。……へっ!？」

あまりに簡単にこよりが言ってくるのでスルーしかけてしまったが、話の内容を理解すると驚いてしまう。

——あの人が野草ユージさん!? ぜ、全然印象が違うんだけど……。

野草ユージと言えば『ユージ草』を代表とする炎上芸が得意で、チャラ男風の見え目とそれに付随する行動。

ただし、たまに見える真面目な雰囲気ギャップを生み、人気を出している一期生の男性V t u b e rだ。

「えとえと、ほ、本当なの? だ、だって、すごく真面目そうな人だよ!？」

「ユイちゃんと同じでキャラを作ってるみたい」

「い、色んな人がいるんだね……」

「小幡くんも、だよ」

「あっ……」

確かに僕みたいに性別まで偽ってる人はシロルームにはいない。そう考えると、高田さんのこともおかしいことには思えなかった。

「それじゃあ、早速服を買いに行こうか。前のワンピースも可愛かったし、リボンももちろんいるし、他にも色々と買いたいね」

「……もちろんこよりさんのもの、だよね?」

「あははっ、何を言ってるの? もちろん小幡くん用だよ」

「——僕、やっぱり帰って良いかな?」

「ダメだよ!?! だってほらっ、これからユキくんとして出かけるときもあるでしょ? そのときに男物の服で行くの? 正体ばれてしまっしょっ!」

「た、確かにそれは一理あるね」

「でしょ。だから今日は女性用の服を探します！」

……あれっ？　なんでこうなるんだろう？

結局僕はこよりに手を繋がれて、そのまま一緒に買い物や映画に連れ回されていた。

途中で女性ものの服に着替えさせられて――。



『《#心の抛り所　#ココユキ》登録者数5万人記念。寝るまで雑談

《真心ココネ／雪城ユキ／シロルーム三期生》』

2. 1万人が待機中　20XX／05／17　22:00に公開予定

☒475　☒0　？共有　≡？保存　…

【コメント】

…ついにこの日が来たか

…てえてえ爆撃の準備はできている

…ココママ、5万人おめでとう

…おめでとう

…おめでとう

…おめでとう

…オメー

…全裸待機しててよかった

待機画面に表示されているのはココネとユキが楽しそうに笑い合っている姿。

ココネの元にファンアートとして届けられたものだった。

配信時間開始になるまで待機しているココネ。

彼女の下にもミニアニメが届けられ、それが本日初お披露目でもあった。

配信まであと五分。

さすがに緊張を隠しきれない。

大きく深呼吸をして、ジッとモニターを眺める。

そして、ついに配信時間がやってくる。

手はず通りに流れるミニアニメ。

チビキャラのココネが画面上を飛び回り、ユキくんを抱きついたり、ユイとバチバチと視線をぶつけ合ったりする。

そんなアニメをしばらく流した後、ココネのアバターが配信画面に登場する。

ココネ：『みんなー、ここばんはー!! シロルーム三期生、真心ココネですよー』

【コメント】

：ココママー

：ココママー

：ココママー

：ココママー

：ココママー

：ココママー

配信と同時にいつものココママ爆撃が来る。

ただ、それも慣れたものでココネはいつもの返答をする。

ココネ：『ママじゃないですよー。それよりも今日は私の五万人記念配信に来てくれてありがとうございます。こんなにすぐに五万人を超えるなんて思っていなくて、驚いちゃいました』

ココネがみんなの前で頭を下げる。

ただ、配信画面には未だにココネしか現れていない。
いつもだとユキくんの段ボールが置かれているはずなのに……。

【コメント】

：五万人おめでとう
：おめでとう
：おめでとう
：あれっ、ユキくんはー？
：段ボールがないよ？
：まさか逃げられたの？
：おめでとう

ココネ：『やっぱり気になっちゃいますよね、ユキくん。では、ユキくんに登場してもらいましょう』

ココネはそういうとマイクを動かす。
自分の膝の側へ。
すると、そこには寝息を立てて眠っている祐季がいた。

『すう……、すう……』

【コメント】

：あつ……w
：寝息w
：ユキくんwww
：寝ちやつてるんだ……www
：あれだけ先に寝ないって言ってたのにねw
羊沢ユイ：ユキくんはお子ちゃまなの
：寝息助かる

ココネ：『ちよつと今日、はしやぎすぎて寝ちやつたみたいです。そ

れに、今日のこととか色々と考えてて、この数日まともに寝てないみたいなんですよ。そういう事情ですから少し休ませてあげて、ユキくんが起きるまでは私が一人で進行していきます。ということ、ユキくんの段ボール……つと』

ココネは「睡眠中」と書かれた段ボールを配信画面に表示する。

ココネ『それじゃあ、まずはマシユマロ読みからはいりますね。その後、今日のオフ会のことを話していききたいと思います』

【コメント】

：寝息助かる

：楽しみ

羊沢ユイ　：うみゅー、ゆいも行きたかったの

：わくわく

：ユキくんの寝顔が見たい

ココネ：『ダメですよ。ユキくんの寝顔は今日は私が独占するのですから。では、まず最初のマシユマロから』

「ココママ、ユキくん、ここぼんは。最近、ユキユイがてえてえすぎで、ココユキが疎かになっている気がします。ココユキ推しの僕としては是非ともっとコラボをしてもらって、てえてえところをたくさん見せて欲しいです」

ココネ『良いことを言いますね。では、早速担当さんにユキくんの予定を抑えてもらいましょう。少し待って下さいね』

カタカタと文字を打つ音が聞こえる。

【コメント】

：ココママw

：こうやってユキくんを抑えてたんだw

：ココママ、黒いw

：寝てる間に予定を入れられるユキくんw

：いや、これが本来の予定の組み方なんじゃないのか？

ココネ：『だって、よく考えてくださいよ。オフコラボ、とっても楽しみにしてたんですよ。それなのに、私の膝で寝ちやつてるんですから』

【コメント】

：膝枕だど!?

：なんだその空間はw

：俺、ココユキを信じてよかった……

羊沢ユイ：うみゆ、ユキくんをとられたのー

：wwww

ココネ：『では、そろそろ次のマシユマロにいきますね』

「ユキくんのダンボールの中は、“あつたかくい”ですか？ それとも、“つめたかくい”ですか？」

ココネ：『うーん、これはユキくんに答えてもらいたかったですね。ただ、今は寝ちやつてますので、代わりに私が、一緒に入って確かめちゃいますね。よいしょっと……』

段ボールの中にココネのアバターを動かす。
そのあと、実際にユキくんの肌に触れる。

『うみゆ……、すう……すう……』

一瞬驚いた声をあげるもののユキくんは目覚めることなく、そのまま眠っていた。

ココネ『ユキくんは……いえ、ユキくんの段ボールはとっても暖かかったです。ぷにぷにで……』

【コメント】

：ユキくん可愛いw

羊沢ユイ　：うみゆ、ユキくん、柔らかいの

：w w w w w

：ユキくん依存症が二人もw

：ユキシンドロームかw

；ユキローム被害者かw

：ユキローム草

ココネ『それじゃあ、そろそろ今日のオフ会について話させていただけますね。まずは私とユキくんが買い物に行った話から——』



「ユキくん、猫耳フードのパーカーも似合うんじゃないかな？」

シヨツピングモールに行った僕は、まず女性ものの服屋へと連れて行かれた。

もちろんこよりが選んでいる間、僕は店の外で待っているつもりだったのだが、なぜか一緒に連れて入られて、今に至る。

「えっと……、それって女性向けだよね？　そもそも僕に似合うはずがないですよ……」

「あらっ、お客様、とてもお似合いですね。試着をさせていただきますか？」

店員さんに声をかけられてしまう。
しかも、似合うと言われると複雑な気持ちになってくる。

「えっと、その僕は……」

「ほらっ、ユキくん！ 実際に来てみましょう。きっとお似合いですよ」

「に、似合いたくないですよ!?!」

「えっと、他にも似合いそうなのは……」

——こ、これは早く着ないとどんどん服が増えていくやつ？

「えとえと、ぼ、僕は試着室へ行ってくるね」

「あつ、待って。私も一緒に行くよ!」

「べ、別に着るくらいなら一人でできるよ?」

「私も見たいんですよ」

「仲がいいのですね。姉妹ですか?」

店員さんが微笑ましそうに聞いてくる。

すると、こよりは嬉しそうになづいていた。

「はいっ！ 姉妹です」

「ち、違いますよ!?! ただの友達ですから!」

「むう……、いい加減私の妹だって認めてよ」

「そ、それならこよりさんだって、ママってことを認めてよ」

「私はユキくんのママだよ?」

「うっ……」

——そうだった……。なぜか僕が言ったときだけママって認めてるんだった。

「と、とにかく僕はこの服を着てくるよ」

「楽しみに待ってるね。えっと、デジカメデジカメ……」
「と、撮らなくて良いよ!?!」

◇◇◇

それから試着室で猫耳のフードがついているパーカーを着てみた。

「えっと……、やっぱり僕が猫は変じやないかな?」

「うーんそうですね。やっぱり小幡くんは犬耳ですよね」

「……ないものは仕方ないよね。うん、それじゃあお店から出て……」
「こちら犬耳フードのついたパーカーです」

店員さんがタイミングを見計らって黄色のパーカーを持ってくる。

「わわっ、な、なんであるの!?!」

「最近の人気商品になりますね。V t u b e rの方が犬耳フードを着てるみたいで——」

完全に僕ゆきくんのことだった。

ガツクリと肩を落とす僕とは打って変わり、こよりは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「ありがとうございます。これなら小幡くんに似合いそうですね。まるでユキくんみたい……。あつ、そうだ。それならユキくんに合わせて、白のワンピースを下に着てみましょうか」

「えっ、い、嫌だよ!?!」

「大丈夫、似合いますから!!」

「で、でも、僕、ズボンは履きたいから——」

「それならこっちのレギンスを履いて、その上からワンピースを着て、パーカーを羽織るといいですよ。きつと似合いますから!」

こよりが力説してくる。
ただ、前みたいにワンピース単独と比べると抵抗心は少ない。

——ズボンさえあれば、少し丈の長い服を着てる感じだもんね。それなら昔、母さんによく着せられた気がする。

「わ、わかったよ。これならいいよ……」

それだけ言うと僕は実際に服を着てみた。

それをこよりに見てもらうと彼女は目を輝かせて、いきなり抱きついてきたので、逃れるのが大変だった。

「こ、小幡くん、まるで本物のユキくんみたいで可愛いです……」

「こよりさん、そ、その、ココママが出てるよ……。は、離して……」

「はっ、ご、ごめんね。つい、小幡くんが可愛すぎて……。とりあえず今日の服はそれでいましょう。私がお金を払いますので」

「えっと、悪いよ。それにお金くらい僕が……」

「大丈夫だよ。それにこれはユキくん登録者数十万人のお祝いだから。どこかでしたかったんだよ。できればユキくんにちなんだ物を……」

「そ、そうなんだ……。うん、ありがとう……」

誰かにこうやって祝われるのは初めてだったので、嬉しく思い、素直にうなづいていた。

——僕もココママにサプライズを準備してるもんね。

僕と同じでこよりも何かサプライズをしたかったのだろう。

「だからこの服は私が買うよ。あとはユキくんのパジャマだね」

「えっと、お泊まりだって言ってたから寝巻きは用意してるんだけど

……」

「あつ、あの着ぐるみパジャマとか良さそう。ほらっ、犬の着ぐるみだよ」

楽しそうに僕を引っ張っていくこより。

僕の祝いも兼ねていると言われたらあまり強いことは言えず、僕もなす術なくそのまま引きずられて行った。



ココネ：『買い物は主にこんな感じですね。ちなみに今はユキくん、犬耳パーカーと白のワンピース、あとは黒のレギンスを着てますよ。アバターと近い格好ですね。頭には勝手に大きなりボンをつけちゃいましたけど』

【コメント】

：ユキくん可愛いw

：こういうのが聞きたかったんだ

：ユキくんがこれを聞いてたら恥ずかしくてたんだらうな

：→それも聞きたかった

羊沢ユイ　：うみゅー、ゆいには何をくれるの？

：ユイちゃん、自由すぎw

ココネ：『こんな感じにユキくんが起きるまで今日の出来事を話していこうと思います。では、次は服を買い終わった後、映画館に行った話ですね』



「ほ、本当にホラー映画見るの？」

恐怖のあまり足が震えていた。

右手は映画の半券を。そして、左手は知らず知らずのうちにこよりの服を掴んでいた。

そんな僕を見て、こよりは満面の笑みを浮かべていた。

「えっ、違いますよ？ 今、ホラー映画はやってませんから」

「……えっ？ でも、この前の連絡で——」

「私はホラー映画なんて一言も言っていないよ？ 小幡くんが勝手に勘違いしたんじゃないかな？」

「う、うそ……。だ、だって……」

僕は改めてココネとのチャットを確認する。

すると、確かにココネはホラー映画ではないって否定していた。

ただ、映画に関しては一切内容には触れず、ココネが見たかったもの……としか言っていない。

「よかった……。ホラーじゃないんだね。それなら安心して見られるよ」

「うん、グロ系だから安心だね」

それを聞いた瞬間に僕は回れ右をして、そのまま出口の方へ向かって駆け出す。

ただ、すぐにこよりに腕を掴まれてしまう。

「待って!? どこにいくの?」

「えっと、その……、トイレ?」

「トイレは逆方向だよ! もう、堂々と逃げようとしなないで!」

「うっ、ご、ごめんなさい……。グロ系も怖いから……」

「嘘、嘘だから。本当は今流行の感動の恋愛ものだから」

こよりは慌てて訂正をしてくる。

僕があまりにも怖がっていたから、ちよつと騙しただけのつもりだったみたいだ。

確かに受け取った映画の半券にも恋愛もののタイトルが書かれていた。

それをもたらっていたにも関わらず気づかなかつたのは僕の落ち度でもあつた。

「よ、よかつたよ……。これなら僕でも見られそう……」

「うん、小幡くんにも楽しんでもらうって言つたもんね」

「ありがとう……。ココママ……」

「もう、こんなところでその名前はやめてよ」



映画が終わると僕は涙を流していた。

というのも、こよりと見た映画は悲運の恋愛を描いた作品で、最後は死に別れる……。というものだった。

それがあまりにも悲しくて、涙を流さずにはいられなかった。

「うううう……。どうしてあそこで死んじゃつたの……。は、ハッピーエンドでも良かったんじゃないの……」

「感動の大作って言われてたものだからね。大丈夫、小幡くん。ハンカチ、使う？」

「うん、ありがとう……」

こよりから受け取ったハンカチで涙を拭う。

すると、こよりが僕の頭を撫でてくる。

「小幡くん、感受性が強いんだね……。こういう話も嫌いだった？」

「ううん、大丈夫……。ただ、やっぱり僕は物語の中ではハッピーエンドがみたいよ……」

——きつと、それが求められてるのも僕たちなんだね。

リスナーの人たちが僕たちを求めて見に来る。

疲れた気持ちを癒やしたり、心が穏やかになったり、日々のちよつとした日常に砂糖を加えることのできる存在。

一緒に楽しんだり、喜んだり、たまには悲しんだり、怒ったり……。リスナーの人と一緒に寄り添っていくことこそ、求められることなんだろう。

「そっか……。あつ、そういえば小幡くん、この前私の料理が食べたって言ってたね。せっかくだし、夕食は食材を買って一緒に作る？料理も教えてあげるよ。この前みたいにならないためにも」

「あ、ありがとう……」

「配信中は小幡くんを抱きしめる権利をもらってるからね。このくらいならお安いご用だよ」

「えつと、やつぱり抱きしめたままの配信はするの……？」

「もちろんだよ。ユイちゃんもしてたんだし、私もユキくん成分を堪能したいからね」

「ぼ、僕からは何の成分も出てないよ。マイナスイオンとか……」

「ユキくん依存症は大変な病気だからね。定期的にユキセラピーをして、症状を落ち着けないと」

「ゆ、ゆきてらぴー……？」

「うん、アロマセラピーのユキくんバージョン」

「そ、そんなのないよ!？」

「なんだったら、今すぐ試してみる?」

「しないよ!?! 絶対にしないからね!?!」



ココネ：『映画館ではこんな感じだったんですよ。泣いてるユキくんもとっても可愛かったんですよ!』

ココネが幸せそうに話していた。

【コメント】

：ユキくんなら容易に想像ができるw

：でも映画館なんてよく行ってくれたな

：ユキくん、基本逃げるもんなw

羊沢ユイ　：うみゆ、うらやましい……

：ユキテラピーwwww

：なるほど、ユキテラピーに行けば良いのかw

ココネ：『ユキテラピーは今は私の特権ですよ?』

膝で眠るユキを撫でながらココネは嬉しそうに笑みを浮かべる。

ココネ：『それで映画の後は食材を買ってきて、一緒に料理をしたんですよ』

【コメント】

：……えっ!?

：悲劇が再び

：ゆ、ユキくん、怪我してない!?

：炭……

：いや、カップ麺か

ココネ：『そんなことないですよ。ユキくんはただ料理をほとんど作ったことがないだけでしたので、教えてあげたらちゃんと切ることができましたよ』

【コメント】

- ・ママすごい
- ・さすがママ
- ・その調子でカグラ様も頼む
- ・幼女が幼女に料理を教える
- ・はあはあ
- ・通報しました

ココネ：『だいたい今日一日はそんな感じでしたね。一緒にお風呂だけはできませんでしたが、楽しかったです。それにユキくん、私にサプライズをしてくれたんですよ』

ココネは嬉しそうに写真を画面に表示させる。
今も部屋に飾ってある犬のぬいぐるみ。
座った状態のそれは手に小さな看板を持っていた。

『ココママ、登録者数5万人おめでとう。いつも助けてくれてありがとう。雪城ユキ』

ユキがこっそりサプライズとして用意したココネへのプレゼントだった。

いつもココネにお世話になっているお礼として。
買い物と映画が終わり、ココネの家へ着いてから恥ずかしそうに渡してきた。

それをもたらった瞬間にココネは嬉しさのあまり涙が流れ、それがまたユキを慌てさせてしまった。

それはもうココネの一生の宝物だった。

ただ、それを誰かに自慢したかった。だからこそ、リスナーのみんなに見せていた。

【コメント】

：これをユキくんが？

：ユキくん優しい

羊沢ユイ　：うみゆ、羨ましいの!!

：ココママ、本当に嬉しそう

ココネ『普段、いっぱいいっぱいなのに……。しかも、自分の記念日は一向に認めなくせに、こういうところだけはしっかりしてくれるんですよ。このわんちゃんは……』

ココネが慈しみの視線を送り、その頭を優しく撫でていると、ユキの瞼がゆつくりと動いていた。

第19話：ココユキ、オフコラボ配信

なんだか周りがまぶしい……。

あれっ、そういえば僕、いつの間に寝てたんだろう？

意識がはつきりと覚醒しないまま、僕はゆっくりと瞼を開けていた。

すると何か頭に柔らかい感触があった。

そして、目の前にはこよりの顔がある。

ココネ：『ユキくん、おはようございます』

『……おあよー、ココママ』

まだ意識がはつきりしないので、ろくに呂律が回っていない。どうして目の前にこよりがいるのか……。

きつとまだ夢なのだろう……。

そう思い、再び微睡みの中へ意識を落とそうとしたときに、モニターに映る配信画面が目に残る。

『うにゆー？ あ、あれっ？』

目を擦り改めて、画面を見る。

勢いよく流れるコメント。

一瞬ぼんやりとしていた意識が瞬時に覚醒する。

【コメント】

：おあよー

：ユキくん、おあよー

：おあよー

：おあよー

羊沢ユイ　：うにゆー、おあなのー

：おあよー

・寝ぼけ声助かる

・おあよー

『ふえっ!? えとえと……、そ、その……、これはどういうこと??』

ココネ：『ほらっ、ユキくん。配信するって言ってたじゃないですか。時間が来たので配信をしてたんですよ』

『ちよ、ちよっと待って。そ、それって今始まったところ?』

ココネ：『そろそろ三十分が過ぎるところですね。今日のオフ会の話をして、今はユキくんのサプライズプレゼントの話をしてたところなんですよ』

『ふえっ??』

僕はもう一度配信画面に視線を向ける。

いつものココネのAvatarとユキく^{ほく}んの段ボール。それと犬のぬいぐるみ。その手に持っている看板には――。

『ぴいああああああ……。な、なんでそれをみんなに見せてるの!?!』

ココネ：『もちろんみんなに自慢したかったんですよ。ユキくんが私のためにプレゼントしてくれたものですから』

『で、でも、その……。ぼ、僕は恥ずかしいよ……』

思わず顔を俯けてしまう。

頬は熱を帯びたかのように赤くなり、配信画面を直視できない。

『ど、とりあえず、もうそれはいいよね? みんな、見たよね? ほ

らっ、早くしまっ……。みんな忘れてね……』

【コメント】

・ユキくん、必死w

・良い贈り物だと思っよ

：ユキくん可愛いw

：悲鳴助かる

羊沢ユイ　：うみゆ、ユキくん。ゆいのは？

『ゆ、ユイの時も何か考えるよ。た、ただココママには一番お世話になったからね。まず最初に渡したかったんだ……。だって、今こうやって僕がみんなの前で配信をできているのはココママのおかげだから——』

思い返せば僕が初配信の時に手を差し伸べてくれたのはココネだった。

それにコラボをすることになったときも真っ先にしてくれて、僕が安心してコラボをできる道を作ってくれた。

ココネ：『ゆ、ユキくん……』

ココネは嬉しそうに目に涙を溜めていた。

『それでせつかくだから形に残るものが良いなって思って、それで僕だったら犬のぬいぐるみが良いかなって。喜んでもらえたのならよかったよ……』

ココネ：『あ、ありがとう、ユキくん。ユキくんがそこまで私の事を考えてくれていたなんて……』

『わわっ、だ、抱きつかないで、ココママ。……と、とりあえず、こ、この話はおしまい！　そ、それよりも今日は記念配信でしょ。し、しっかりしないと——』

【コメント】

：ココユキはいいな

：なんだろう、俺も泣けてきた

：やっぱりココユキだな

：先に逝く

：俺ももうダメだ……

：お前たち、まだ逝くな。俺が先だ

：お前もかw

ココネ：『ぐすつ……、そ、そうですね。今日は寝るまで記念配信ですもんね。ユキくんも起きたことだし、改めてユキくんの自己紹介をしてもらいますね』

『わ、わふー、み、みなさん、今日は僕が寝てしまっていて申し訳ありません。シロルーム三期生、雪城ユキです。今日はココママに拾われてやってきました。よ、よろしくお願いします』

ココママが改めて僕のアバターを表示させる。

もちろんしっかりと段ボールの中に入れてくれる。

ココネ：『まずは段ボールユキくんからですね。今日は私の記念配信なので、ユキくんの可愛いところを思いつき話したいと思います』

『えっと、それは違うんじゃないかな？　ココママの記念だから、ココママのすごいところを話さない！』

ココネ：『むう……、意見が分かれましたね。こうなったらココフレのみんなに聞いてみましょうか』

『うん、そうだね。ココフレのみんなはココママのすごいところを聞きたいよね？　僕に料理を教えてください話とか——』

ココネ：『あつ、それも話しちゃいました』

『えっ!?!』

ココネ：『それよりもユキくんのすごいところとか、可愛いところとかを聞いてみたいですよ？』

『ちよ、ちよつと……、もう話してるって聞いてないよ？　えっえっ

……、い、一体どこまで話したの!?!』

【コメント】

：これはユキくんの話を聞きたいな

：どつちも聞きたい

羊沢ユイ　：どつちもなのー

：どつちも聞きたい

ココネ『あははっ、やっぱりどつちもになりますか。時間もありませんし、ゆっくり話していきましようね』

『うん、ココフレの人がそう言ったから仕方ないけど、そろそろ僕を離してくれないかな?』

ココネ：『嫌ですよ?　今日は一日ギョツとユキくんを抱きしめながら配信するって決めてましたから』

『うう……、やっぱり僕の体が持たないよ……』

ココネ『私の記念配信なので、このくらいのがまま、いいですよ?　それに配信中は抱きしめて良いって言ってましたよね?』

『うっ……』

た、確かに今日はココママの記念だ。僕が恥ずかしいだけで我慢すればココママにも喜んでもらえる。

『わ、わかったよ……。今日だけ……だからね』

ココネ：『わーい、ありがとうございます』

『むぎゅ……』

ココネが力一杯抱きしめてくるので、思わず声が漏れてしまう。

【コメント】

：画面の向こうで一体何が!?

：これだ、これ待っていた!

羊沢ゆい　：うみゅ!?　ゆいも混じるの!

『と、とりあえずこのままだと話が進まないよ……。えっと、どんな話をしたらいいのか？』

ココネ：『そうですね。お互いの好きな部分を言っていくっていうのはどうでしょうか？』

『……えっと、それってすごく恥ずかしくない？』

ココネ：『ユキさんに私の好きなところを言ってもらえるのなら本望ですよ』

『うっ……、が、頑張るよ』

既に顔が赤く染まってる感じがする。

それでもここは頑張るしかない、と必死に耐える。

ココネ：『そうですね。でも、ただ言い合うのも芸がないですね。ここは勝負をしませんか？』

『勝負？』

ココネ：『ええ、お互いが見つめ合ったまま好きなところを言うんですよ。それで先に顔を背けた方が負け。負けた人は罰ゲームとかどうですか？』

『わ、わかったよ……』

顔を背けなかったら良いだけなら簡単だよな？

そんな軽い気持ちで受けてしまった。

【コメント】

：これはやばいw

：ユキくんの負けw

羊沢ユイ：うみゆ、ゆいも参加したい

：ユキくんwww

：そもそもじつと見てられるのか？w

猫ノ瀬タマキ：罰ゲームは何がいいかにや

美空アカネ　：おっ、コウと一緒にしたやつ
海星コウ　：ボクが圧勝したやつね
美空アカネ　：っ、次は負けないから！

『そ、それじゃあ、ココママ、離してくれる？』

ココネ：『どうしてですか？』

『だ、だって、見つめ合うにはその——』

ココネ：『このままでもできますよね？』

ココネと見つめ合う。

その瞬間に僕は安易に勝負を受けてしまったことを後悔した。

すぐ目と鼻の先にココネの顔がある。そう考えると自然と顔が熱くなり、今すぐにでも顔を背けたくなった。

でも、背けてしまったら負けてしまう。

なんとか我慢して、ジッとココネを見る。

『や、やっぱり近すぎない？』

ココネ：『すぐ近くでユキくんの顔を見られて嬉しいです』

ココネはまだまだ余裕があるようで、にっこり微笑んでみせる。

ココネ：『それでは先にどちらから言いますか？』

『僕からで良いかな？』

こういうのは先に相手を負かせてしまうのが必勝法だ。

あまり長く続けられるほど、僕にも余裕はない。

——こうなると先手必勝だ！

ココネ：『もちろん構いませんよ。それじゃあ、ユキくん、私の好きなどころを言ってください』

じつと期待した視線を送ってくるココネ。
そう見つめられると言う側でも恥ずかしくなってくる。

『ココママはいつも困ってる僕を助けてくれるとつても優しい人なんだよ。初めての配信で何もできなかった僕に優しく手を差し伸べてくれたし、何もできない僕に対して必ず最初に助けてくれるのが、ココママだったんだ……。だから、ココママは僕にとって特別で、その……』

流石に話していると恥ずかしくなってくる。

ただ、いつもの感謝を示す良い機会かもしれない。

僕は笑みを浮かべながら言う。

『そんなココママが好きだよ。……いつも感謝してるよ』

多分顔がゆでだこのように赤くなっているだろう。それでも素直な気持ちを伝えられたことが何よりも嬉しかった。

ただ、配信されていることは完全に頭の中から抜け落ちていた。

【コメント】

：うっ……。俺は先に逝く

：ユキくん……

：可愛すぎる……

：切り抜きはまだか!?

：ボイスで売って欲しい

：ユキくん、お持ち帰りできないかな

：破壊力抜群すぎ

ココネ『ゆ、ユキくん……。私のことをそんな風に思ってくれてたんですね……。ありがとうございます』

僕の渾身の言葉を聞いていたココネは顔を背けるどころか、むしろ真剣に僕の目を見て、嬉しそうにお礼を言ってくる。

その表情を見て、僕は恥ずかしさのあまり慌てふためいていた。

『あわわわっ……、そ、その……。その……。うう……。恥ずかしいよお……』

ココネ：『まだ、これから私の番ですよ』

『で、手加減してね……』

ココネ：『そうですね。ユキくんが出会った頃の話で来たわけですし、私もそうしますね』

ココネがジツと僕に視線を合わせてくるので、既に恥ずかしくなりながらもその視線を外さないようにする。

ココネ：『ユキくんは困ったことがあるとすぐに逃げようとするんです』

『ふえ!?!』

まさかいきなり貶されるとは思わずに呆けてしまう。

ただ、ココネの話はそこでは終わらない。

ココネ：『しかも、恥ずかしがり屋で人見知り。他人を前にするとオドオドとして、ろくに話せなくなるんですよ』

『あ、あの……。そ、その、これって好きなどころを言うんじゃない?』

なんだろう……。穴があつたら入りたくなってきた。段ボールには入ってるけど。

【コメント】

・ココマママ W

：辛辣w

：ユキくんのライフはもうゼロよー

：なんだ、俺のことか

：俺もユキくんだったか

：お前らw

ココネ：『でも、そんなユキくんですけど、一度決めた約束は絶対守ってくれるんですよ。約束の中身を変えようとはしますけど、決めたことだけは絶対に守ってくれるんです。それに、常に私たちのことを考えてくれてるんですよ。カグラさんが困ってた時は真っ先にオフロラボをしましたよね？』

『えつと……、あ、あれは、たまたまカグラさんがしたそうだったから……』

【コメント】

：そういえば三期生の配信ではだいたい見かけるな

：見れなかったのは全部アーカイブで見てるらしいし

：確かに一番同期愛がすごいのか

神宮寺カグラ：あ、あれはユキがどうしてもっていうから仕方なくやったのよ

：ユキくんのことならよく見てるココママ

ココネ：『ユイちゃんの時もそうですよ。あれだけ嫌がってたホラーゲームとオフ会。その二つが重なってるのに、断らずに頑張りましたよね。しかも、最後までずっと……』

『あ、あれはユイが僕のことを思っしてくれたコラボだから……』

ココネ：『嫌なら最初から断ることもできたんですよ。ユイちゃんも別にユキくんが嫌がることをしようとしてたわけじゃないですから』

『そ、そんなこと、考えもしなかった……。だってそんなことをしたらユイが悲しむよね？』

ココネ：『そういうところがユキくんの良いところなんですよ。今日だって、まともに眠れてないのに私に付き合ってくれましたし、私たちが悲しむことはしない。ユキくんはすごく優しいんですよ』
『そんなことないと思うけど……』

【コメント】

：確かにあの時のユキくん、頑張ってたよな

：ユイちゃん、容赦ないから

羊沢ユイ　：うにゅ!?　ユキくん、また寝てないの!?

：ユイちゃん驚きすぎw

：爆弾級のとえてえが襲ってきそうだ

ココネ：『だから……ですよ。自分のことよりも他人のことを優先して、必死に頑張ってくれるユキくんのが……、私は好きですよ』
『っ?!?!?』

耳元で囁くように言われる。

それを聞いた瞬間に僕は驚いて顔を真っ赤にする。

『あのあの、ぼ、僕……、その……、ふきゅう……』

思わず目を回して視線を背けて逃げようとしてしまう。
すると、ココネはにっこりと微笑んでくる。

ココネ：『やったー、勝ちましたー!』

【コメント】

：あの迫力はやばかったw

：ユキくん、どんまい

：ココママ、おめー!

：ココママが本気出す

『わふう……。ココママ、ずるいよ……』

ココネ：『えへへっ、落としてから上げる。基本ですよ？』

ココネはにっこりと微笑んで一度僕から離れてくれる。

ココネ：『それじゃあ罰ゲームですね』

一度離れたかと思うと、すぐに戻ってくるココネ。

その手には……、いつの間にか今日買ってきたたくさんの服が握られていた。

ココネ：『ユキくん、それじゃあ、この服に着替えましょうね。ユキくんのファッションショーです』

『わ、わふうふう……、だ、誰か助け——』

ココネ：『ユキくん、約束の罰ゲームですよ。買ってきた服、全部着て下さい』

『ううう……、さ、さすがにはずかしいよ……』

ココネ：『大丈夫です。絶対に似合いますから……』

ピコッ！ ピコッ！

ココネに追い詰められた瞬間にスマホの通知音が鳴る。

ユイ：『うみゆ、写真よろなの』

カグラ：『私にもその写真をくれないかしら？』

三期生のチャット欄に表示された無情なその言葉。

どうやらここに僕を助けてくれる人はいないようだった。

ココネ：『仕方ないですね。公開はしたらダメですよ』

ユイ : 「うみゆ、もちろんなの。夜のお供にするの!」

ユキ : 「ちよ、ちよつと!?! な、何に使うつもりなの!?!」

ユイ : 「それはもちろん内緒なの!」

ユキ : 「怖い、怖いよ!?! か、カグラさんはそんな変なことに使わないよね?」

カグラ : 「も、もちろんよ。拡大コピーをして部屋に飾るくらいよ。おかしい使い方はしないわ!」

ユキ : 「そ、それも十分おかしい使い方だからね!?!」

ココネ : 「本当に二人ともおかしい使い方をしますよね。大丈夫ですよ、ユキくん。私は普通の使い方しませんから安心してください!」

ユキ : 「いやいや、それもおかしいよ!?! そもそも使うって何!?! しゃ、写真を撮るだけ……だよな?」

ココネ : 「……もちろんですよ?」

ユキ : 「ちよ、ちよつと待って!?! 何、今の間!?! 絶対別のことも考えてたよね!?!」

ココネ : 「安心してください。何も痛くないですから!」

ユキ : 「あ、安心してできないよ? や、やめて……!」

なんとか逃げようとするものの既に身動きはココネによって押さえられている。

それに罰ゲームを受けると言ったのも僕だ。

一度領いた以上、素直に受けるしかない。

だから僕は覚悟を決めることにした。

『そ、その……、じ、自分で着替えられるから——』

ココネ : 『えーつ、ユキくんを着替えさせてあげるのも楽しみの一つだったんですけどね。うーん、仕方ないですね。その代わりちゃんと全ての服に着替えてくださいいね!』

【コメント】

：俺たちも見たいぞ

：せ、せめて服だけでも

羊沢ユイ　：ぶいつ

：ま、まさか、ユイちゃん、手に入れたのか？

：ぐぬぬっ、なんとか見る方法はないのか？

『み、見る方法なんてないよ!?　そ、その、みんなに見せるなんて、僕がもたないからね!?!』

ココネ：『うん、私のコメントで妄想を捗らせてね』

『そ、それも禁止だよ!?　こ、ココフレと犬好きのみんな、妄想もしたらダメだからね。僕との約束だよ!?!』

【コメント】

：はーい

：はーい

：はーい

：ユキくんがどんな服を着るのか楽しみ

美空アカネ　：妄想が捗る!　うおおおお!

海星コウ　：アカネ、うるさい!

：草

：w w w w w

それから仕方なしに隣の部屋で違う服に着替えて、ココネの前に姿を現した。

それは袖なしワンピースだったり、普通のパーカーと短めのスカートだったり、何故かかなり大きなシャツ一枚だったり、女性用制服だったり……。

そして、最後には着ぐるみパジャマを着ていた。

『こ、これでいいかな?』

ココネ：『はいっ、たつぷり堪能させていただきました。この写真は

ユキくんフォルダに大切にしまっておきますね』

『……すぐに消して』

ココネ：『ダメですよ!? 私の一生の宝物なんですから!』

『そ、そんなものを宝物にしなくても……』

【コメント】

：写真を撮られるたびにユキくんが悲鳴あげてて草

：悲鳴助かる

：ココママ草

『そ、それじゃあ、これで罰ゲームも終わりだね。そ、そろそろ寝る時間かな?』

ココネ：『まだダメですよ。ユキくん、むぎゅー……』

『ココママはいつまで抱きついてるの、もう……。ふわああ……。』

後ろからずっとココネが抱きしめてきている。

ただ、流石に今日一日ずっと抱き締められていたら僕も慣れてくる。

ずっと顔は真っ赤だし、最初はジタバタしてたので、騒ぎ疲れてしまった……。とも言える。

しかも寝不足もあって、さつき少し寝たにも関わらず、再び眠気が襲ってくる。

ココネ：『もちろん寝るまでですよ。違いますね。寝る時もずっと一緒ですよー』

【コメント】

：ユキくん、おつかれ?

羊沢ユイ：うにゅ、ユキくんはそろそろ寝る時間なの

美空アカネ：あとから完成したイラスト送るからね

：暴走特急が暴走してて草

美空アカネ　：もちろん今日ユキくんが着た服装のイラストだよ
：わくわく

：楽しみ

：暴走特急が仕事してくれた

『ぼ、僕はもうそろそろ眠くなってきたんだけど……』

ココネ：『はいっ』

『えっと……、まだ抱きついたらまま……？』

ココネ：『はいっ』

『や、約束だから仕方ないよね……。で、でも、僕はもう……うにゅ……』

次第に瞼が重くなっていく。

コクリ……、コクリ……、と頭が上下に揺れてしまう。

ココネ：『ユキくん、起きてますか？』

『……うん』

遠くの方でココネの声が聞こえる。

だからこそ、その内容はわからないまでもとりあえず頷いておく。

ココネ：『ユキくんは私のこと、好きですか？』

『……うん』

ココネ：『三期生の中で私が一番好きですか？』

『……うん』

【コメント】

：ココママの誘導尋問草

：ユキくん、何を言わされてるのか

：誘導草

：寝言助かる

：ユキくん、やっぱり子供だね

羊沢ユイ　：うみゆ、ユキくんの一番はゆいなの!!

ココネ：『それじゃあユキくん、また私とオフコラボしてくれませんか?』

『……………』

ココネ：『ちよ、ちよつと、なんでここで黙っちゃうのですか!?!』
『すう…………、すう…………』

ココネ：『あつ…………、寝ちやったのですね…………』

【コメント】

：ユキくん、お疲れ様

：w w w w w

：ココママの作戦失敗w w w

：草

：草

：w w w w w

ココネ：『ちよつとはしやぎすぎちやいましたね。ユキくん、反応が大げさで楽しいですから…………』
『すう…………』

【コメント】

：わかるw

羊沢ユイ　：うみゆ、わかるの

：わかるw

：ユキくん可愛いw

ココネ：『さすがに長く続けてもユキくんを起こしちゃうから、今日

はこの辺りで終わりにしますね。乙ココでしたー』

この放送は終了しました。

『《#心の抛り所 #ココユキ》登録者数5万人記念。寝るまで雑談

《真心ココネ／雪城ユキ／シロルーム三期生》』

3. 6万人が視聴 0分前に公開済み

☑1. 2万 ☑2 3 ?共有 ≡?保存 :

チャンネル名:kokone | Room. 真心ココネ

チャンネル登録者数:5. 3万人

◇◇◇

【コメント】

:乙ココ

:乙ココ

:乙ココユキ

羊沢ユイ :うみゆ、二人ともおつかれなの

:おつー

美空アカネ :できたぞー。ユキくんに送りつけたー。おつかれー

海星コウ :おつかれさまー

神宮寺カグラ :おつかれ

:おつかれさまー

◇◇◇

翌朝、目が覚めると僕はベッドの上に寝かされていた。

そして、当然ながら隣にこよりの姿が……なくて、こよりは床に布団を敷いて寝ていた。

——言ってることやってることが全然違うよ……。

配信中は散々抱きついてきた癖に、僕が寝てしまうと一切手を出し

てこない。

やはりあれは配信用の姿だったのだろう。

こよりを起こさないように僕はスマホを確認すると、アカネ先輩からチャットが届いていた。

アカネ：「イラストができたから送るね」

簡潔な一言と共に、数枚のイラストが添付されていた。

それは昨日僕が着せられた服をユキくんに着させた、服違いのイラストだった。

そして、最後にはユキくんとココネが二人寄り添い合って、楽しそうに笑うイラストが添えられていた。

そのイラストはあまりにも尊すぎて、一人で見ているのがもったいなく思えてくる。

ユキ：「ありがとうございます、ユキ先輩。大切にに使わせていただきます」

アカネ：「いいよいよよ。それよりも来週のコラボ、楽しみにしてるからね」

ユキ：「は、はい。緊張しますが、頑張ります」

アカネ：「大丈夫、全てこのアカネお姉さんに任せておきなさい。弄んであげるから」

ユキ：「そ、その……、お手柔らかに……」

アカネにお礼を伝えた後、僕は再びイラストを眺めていた。

まさにてえてえとしか言いようがない、とても良いイラスト。これを僕一人で見ているのはなんだか違うような気がした。

だから、僕はこよりが起きるのをしばらく待っていた。



こよりが目覚めた後、僕はすぐさま彼女にアカネからもらったイラストを見せていた。

すると、こよりも思わず笑みをこぼしていた。

「とつても良いイラストだね」

「うん、本当にアカネ先輩には頭が上がりないよ……」

「あつ、でも、配信中はまた別だからね。私たちの時みたいになんでも領いていたらダメだよ！」

「それは大丈夫……かな？」

「ううう……、心配だなあ。私もコラボに入れたら良かったんだけど……」

「何か用があるの？」

「うん、他期生コラボ解禁日だからね。私もユイちゃんもカグラさんも全員コラボがはいってるんだ……」

「あつ、そっか……。あれっ？ でも、僕以外は男性とはコラボしないよね？」

「うん、私は氷水ツララ先輩、カグラさんは姫野オンブ先輩。それでユイちゃんが猫ノ瀬タマキ先輩だったかな。基本的には雑談枠で、先輩からの質問を答える枠になると思うよ」

「そっか……。一期生は僕だけなんだ……」

「油断したらダメだよ！ アカネ先輩を舐めたらダメだからね。答えたらダメな質問は答えないこと！」

「うーん……。わかったよ。なるべく気をつけるね」

「あと、このイラスト、私ももらって良いかな？ 私の待機画面にも使いたいよ」

「うん、もちろんだよ」

こよりにもイラストを送った後、僕は今日の配信のために早めに家へと帰ることにした。

「小幡くん、今日は頑張つてね。収益化の記念配信、きつと大変なこと

「なるから」
「えっと、うん。が、頑張ってくるよ……」

第20話：緊張の収益化記念配信

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki | yukishiro
4時間前

本日、20時から収益化が通ったことの記念配信を行います。その……、今日も拾いに来ていただけると嬉しいです #犬拾いました

@2,684 ?5.3万 ♡11.0万

カタッターで早速呟いておく。

そして、しばらく放置しているとんでもない数の反応があり、思わず足が震えてきてしまう。

「だ、大丈夫、大丈夫……」

呪文のように何度も自分に言い聞かせる。

ただ、それでも早くなった心臓の鼓動は止まらない。

収益化……。つまり、これから僕の配信で広告収入や投げ銭スパチャをしてくれる人たちが出てくるわけだ。

果たしてそれに見合うだけの配信ができているのか……？

そう考えると不安以外になにも浮かばなかった。

今までの配信はまだ気が楽だった。

でも、企業に所属するV t u b e rとしてはやはり、収益のことを考えないといけない。

その凄まじい重圧に一人で立ち向かうことを考えると恐怖で体が震えて、目の前が真っ暗になってくる。

そんな状態で僕は配信の準備をしていた。



『《#犬拾いました》収益化記念配信。マシユマロとか読んでみるよ
《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

3. 0万人が待機中 20XX/05/18 20:00に公開予定

☒935 ☒1 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：ユキくん、おめでとー

：おめでとー

：あれっ、まだ投げられないのか？

：おめでとー

真心ココネ …おめでとー

羊沢ユイ …うみゅー、おめなのー

神宮寺カグラ …おめでとー、ユキ

：おめでとー

：おめでとー

美空アカネ …おめでとー

姫野オンプ …おめでとー

猫ノ瀬タマキ …おめにゃー！

氷水ツララ …おめでとーごさいます

海星コウ …おめでとー！

貴虎タイガ …おめつす！

真緒ユキヤ …よくやった

野草ユージ …おめでとーちゃん

——多くない？ 待機してる人もコメントの数も。

しかもシロルームメンバー全員が見に来ている。

確かに十万人記念配信の時も全員が来ていた。

あのときはすぐ隣にカグラがいてくれたけど、今は一人。

その孤独感が僕に不安をかきたてる。

でも、収益化の記念配信なのだから一人で頑張らないといけない。

今までココネやユイ、カグラに力になってきてもらった。

今度は僕が成長している姿を見せる番だ。
既に配信五分前。

緊張感から汗がにじり出ている。
それはまるで初配信の時の様だった。

一応配信画面に今朝、アカネ先輩からもらった色んな服を着た
ユキくんのイラストを表示させておく。

【コメント】

：ユキくんの新衣装だ

：いや、これは昨日ユキくんが着てた服じゃないか？

：あつ、本当だ

：ユキくん可愛い

服装は概ね好評だった。

ただ、その反応で僕の緊張が晴れるわけでもない。

そんな状態のまま、配信が始まってしまった。

『わ、わふー。そ、その、あの……し、シロルーム三期生の雪城ユキで
す。きよ、今日もぼ、僕を拾いに来てくださってありがとうございます
す……』

緊張をしたまま、声を出す。

ガチガチに震えた声で――。

すると、早速ミスをしてしまう。

【コメント】

：あれっ、アバター出てないよ？

：アバターまだー？

：また3D？

真心ココネ　：ユキくん、大丈夫？

『だ、大丈夫……、えとえと……これをこうで……と』

まさかこんな初歩的なミスをしてしまうなんて思わなかった。
少し泣きそうになりながら慌ててアバターを表示させる。
しかし、それだけではなく、誤って以前ユイとしていたホラーゲ
ムも流れてしまう。

『ぴあっ!? な、何!? 何が起きたの!?!』

【コメント】

：ユキくん、落ち着いて

：大丈夫だよ

羊沢ユイ　：うみゆ、ゲーム配信？

『うううう……、い、今消したよ……。こ、これで大丈夫……かな?』

ゲームの音も切った。アバターも表示できた。
これで問題はないだろう。

『えとえと、改めてこんばんはー』

声を出すものの反応が返ってこない。

【コメント】

：あれっ? ユキくん、喋ってる?

：何も聞こえないよ?

神宮寺カグラ　：ユキ、ミュートになってない?

『えっ、ミュート?』

「僕は慌てて確認をする。
すると、本当にミュートになったままだった。
慌てて、ミュートを解除する。」

『ご、ごめんなさい。そ、その……、ぼ、僕、気づかずにずっと一人で喋ってた……』

既に涙声になっている。
せつかくの記念配信。

収益化を発表するこの場でミスの連発。
頭の中は混乱して、目から涙が流れていた。

『ど、どうしよう……、そ、その、僕……、僕……』

【コメント】

：ユキくん、落ち着いて

真心ココネ　：大丈夫？

羊沢ユイ　：うみゆ？

神宮寺カグラ　：ユキ、いける？

同期たちの声が優しい。それが余計に悲しくなってくる。
目からは涙が溢れ、すでに止まらなくなっている。

『ううう……、ぼ、僕……、初配信で失敗したから、今回のこの収益化配信では成長した姿を見てもらおうと思ったんだけど……、ま、また失敗してしまって、その——』

【コメント】

：大丈夫だよ

：ユキくん、泣かないで

：落ち着いて

海星コウ　：大丈夫。問題ないからね

コメント欄で優しい言葉を掛けられるのが、余計に悲しくなってくる。

すると、そのタイミングでキヤスコードの通知が来る。

もちろん、動揺していた僕が音を消しているはずもなく――。

ピコッ！　ピコッ！　ピコッ！　ピコッ！

『ぴいああああ……。あつ、つ、通知音か……。』

【コメント】

：いつものやつ

猫ノ瀬タマキ　：落ち着くにや

美空アカネ　：誰からー？

早速キヤスコードを開くと同期のメンバーと担当さんからチャットが来ていた。

ココネ：「ユキくん、一人で抱え込まないで。私たちは同期で仲間なんだよ。私で良かったらいつでもコラボはいるよ」

カグラ：「私もユキに助けてもらったからね。いつでも助けるわよ」

ユイ　：「うみゅー、コラボ入るー？　二人で教えてえさせるの」

マネ　：「コラボしてもらっても構いませんよ。時間も伸びてしまっても大丈夫ですの」

その画面を見た瞬間に僕の目から涙が流れる。

僕がどれだけ彼女たちの力になれてるのかわからないけど、それでも助けてくれる。

最終的には僕一人でなんとかしないとダメだと思っていたけど、そうではないようだ。

だって、僕たちは仲間でお互い助け合う関係で、一人だとしてえは生み出せないのだから……。

ようやく自分が見えてきて、覚悟を決めることができた僕は涙を拭い、まっすぐ配信画面の先にいるリスナーたちを見据える。

そして、落ち着いた声で言う。

『ありがとう……、ココママ、カグラさん、ユイ。……そうだよね、僕は一人でここまで来たわけじゃない。みんなで協力して、時に助け合って、時にふぎけ合って、そうやってこの場所へ来たんだもんね。この放送に来てくれてる犬好きさんたちも、いつも僕を支えてくれたんだもんね。僕、一人でなんとかしないとイケないって勘違いしてたよ。みんな、僕の記念配信のために力を貸してもらってもいいかな？』

【コメント】

：泣いた

：ユキくん……悩んでたんだね

：俺たち犬好きはみんなユキくんの味方だぞ！

真心ココネ　：もちろん

神宮寺カグラ　：任せて

羊沢ユイ　：うにゅ！

『と、言うことで今日の記念配信は突発的だけど、三期生全員のコラボだよ。じ、自己紹介もまだだけど、みんな集まったら一人ずつ紹介していくね。その……僕の大事な仲間を』

【コメント】

：ゲリラコラボ来たああああ

：同期四人コラボだ!!

：ユキくん、がんばれー！
姫野オンプ　：頑張つてなのー

◇◇◇

早速僕は三人にコラボの承諾を出すと、みんなのアバターを表示する。

そして、チャットの方で確認をする。

ユキ　：「いきなりで悪いけど、みんな準備はいいかな？」

ココネ：「もちろんですよ」

ユイ　：「うみゆ！」

カグラ：「ユキの方こそ準備いいかしら？」

『うん、ありがとう。それじゃあ改めて、本日は僕の収益化記念配信に来ていただいて、ありがとうございます！ シロルूम三期生の雪城ユキです。今日はココママ、ユイ、カグラさん、そして、たくさんの大好きさんたちに拾われてここまでたどり着くことができました。今日も楽しんでいってもらえたら、と思います。よろしくお願ひします』

もう僕に迷いはなかった。

しっかりと通った声で挨拶をすると、コメントにお祝いの言葉が流れる。

【コメント】

：おめでとー

：おめでとー

：全俺が泣いた。一生応援するぞ！

：おめでとー

氷水ツララ　：おめでとーございます

ユキくん、おめでとー
おめでとー

『あ、ありがとう……。ぐすつ……。みんな優しいね。そ、それじゃあ、早速、僕の同期……。ううん、違うね。僕のかげがえのない仲間を紹介します。まずはココママからお願い』

ココネ：『えへへっ、改めて言われると照れちゃいますね。シロルム三期生。ユキくんママで、一番の友達で、大好きな仲間である真心ココネです。よろしくお願いします』

ココネが頭を下げる。

すると、それと同時に割って入る声があった。

カグラ：『待った!』

ユイ：『異議ありなの!!』

ココネ：『異議を却下します!』

指を差しながらいいうカグラとユイに対して、ココネは木槌を叩く仕事草をしていた。

ユイ：『うにゅー、ユキくんの一番はゆいのものなの!』

カグラ：『いや、私のものだぞ?』

『ぼ、僕はみんな一番だから、け、喧嘩はしないで……』

【コメント】

ユキくん戦争勃発w w w

やっぱりこの四人のコラボはいいな

ユキくんが自然体になった

ただし、進行は遅くなるw

『えとえと、そ、それじゃあ、気を取り直して、ポンコツ姫だけど、研

究熱心。配信のことを一番真剣に考えてくれてるカグラさん、お願いね』

カグラ：『だ、誰がポンコツ姫よ!? 全く、仕方ないわね。シロルム三期生、神宮寺カグラよ! ユキに請われて仕方なく来てあげたわよ! 感謝しなさい』

『うん、いつも助かってるよ。カグラさん、本当にありがとう』
カグラ：『っ!? べ、別に私がしたいからしてるだけよ。そ、そんなにストレートにお礼を言われると調子が狂うわね……』

【コメント】

：カグラ様 w

：お礼を言われ慣れてないカグラ様 w

：自己紹介だけで三十分過ぎるな

：てえてえだからこのままずっと続いてくれたらいい

ユイ：『最後に僕が三期生の中で最も信頼してる、一番大好きな同期を紹介します。ユイ、お願いね』

ユイ：『うみゆー、紹介に預かった羊沢ユイなの。よろしくなのー』

『……えっと、なんで、僕のモノマネをしてるの、ユイ』

ユイ：『うみゆ、バレちゃったの』

『さすがに目の前で、僕のモノマネをしてたらわかるよ』

ココネ：『そ、そっくりでした……』

カグラ：『わ、私はわかっていたぞ?』

【コメント】

：本当にそっくりだった…… w

：ユイちゃんの新たな一面が w

：まあ、普段は見せてくれないよな

：ようやく自己紹介が終わった w

『犬好きのみんな、本当に長々と待たせちゃってごめんね。僕一人だとまだまだダメダメだから……』

ココネ：『そんなことないですよ。ユキくんは頑張ってますよ』

ユイ：『うみゅー！』

カグラ：『一人でダメならみんなで頑張ればいいだけよ』

『うん、まだみんなを頼らせてもらうから……。』ということで、この度はたくさんの方に支えられて、収益化の許可がおりました！ これも僕を支えてくれた同期のみんな、担当さん、シロルールの先輩方、犬好きさんたちのおかげです。本当にありがとうございます』

僕が頭を下げると、ココネが言ってくる。

ココネ：『ユキくん、ほらっ、みんなが待ってるから収益化の設定をしないと』

『あっ、そうだった。ちよっと思行ってくるね……』

【コメント】

：いてらー

：スパチャ待機

：この時を待っていた

：ずっと投げたかったんだ

：爆撃するとユキくん、驚きそうだなw

：むしろそれが見たいw

僕が収益化の設定をしている間にコメントが盛り上がっていた。

『ただいまー。無事設定できたよー』

ココネ：『ユキくん、おかえりなさい。それじゃあみんな、一斉に爆撃をどうぞー！』

ココネが手を差し出す。

すると、その瞬間にコメント欄が赤や黄色と言ったさまざまな色に染まる。

【コメント】

・ユキくんおめでとー

《美空アカネ　：？10,000　一番はもらった!!》

《：？20,000　おめでとー》

《：？10,000　以前の賭け金》

・ユキくんおかえりー

《：？10,000　俺の食費だけ》

《：？50,000　ペリカがなかったから円で》

《：？1,000　ごめん、これだけしかなかった》

《：？5,000　おめでとー》

《：？10,000　本日のおてえ費》

《さすらいの犬好き：？50,000　頑張ったで賞》

《：？500》

《：？200》

《：？300》

・お前ら投げすぎw

《：？1,000　ずっと待ってたからな》

《：？2,000　おめでとー》

《：？30,000　収益化おめでとー》

『わ、わふっ!!?　み、みんな投げ過ぎですよ!!　そ、それにその……金額は一円とか二円で良いんですよ!』

カグラ：『そんな額、投げられないわよ!』

ユイ　：『うみゆ、せつかくだからもらっておくと良いの』
ココネ：『そうですよ。みんな、ユキくんが好きで、応援したいからこうしてスパチャを投げてくれるんですよ。だからユキくんはみんなにお礼を言うといいんですよ』

『わ、わかったよ。えとえと、みなさん、本当にありがとうございます。』

ダメダメな僕ですけど、もつともつと頑張つて行きますね。た、ただ、無理はしないで下さいね……』

【コメント】

《：？10,000 大丈夫だ、問題ない》

：お金で殴るスタイルwwww

：ユキくん、相変わらずだったw

『と、とりあえず、スパチャありがとうございます。えつと……、名前を読んでいった方が良いのかな？』

カグラ：『最後はまとめて読むか、別枠で読むので良いと思うわよ。ただ、ユキの場合は別枠の方が良さそうね』

『わ、わかったよ。それじゃあ、別の枠でお礼を言うね。えとえと、次は何をするんだっけ？』

ユイ：『マシユマロなのー』

『あつ、そうだった。マシユマロ、マシユマロ……』

ココネ：『私が読みますね。ユキくんが答えてください』

『ありがとう、ココママ……』

【コメント】

：良い関係

：ココユキ……いい

：ココママ優しい……

ココネ：『ママじゃないですよー。それじゃあ、まず最初のマシユマロから読みますね』

「ユキくん、わふー。最近ココママとたくさん服を買ったユキくんですが、一番気に入っている服はどれですか？」

ココネ：『これは昨日買ったユキくんの服への質問ですね。えつと、

私は制服が似合ってたと思いますよ？ せつかくですからカグラさんとユイちゃんにも昨日の中で一番好きな服を聞いてみましょうか？』

ユイ : 『うみゆー、裸ワイシャツが良かったのー』

『ちよ、ちよつと!?! は、裸じゃなかったよ!?!』

【コメント】

: ユキくんの裸シャツ

《: 2, 000 シャツ代》

美空アカネ : ユイっち、わかってるー!

貴虎タイガ : 装備なしで戦うのもいいな

: 戦うの草

『ちよ、シャツ代つてもう買った後だから、これ以上買わないよ!?!』

ココネ : 『それなら新しい服を買いにいきましょうね。また今度――』

『も、もうしばらくは要らないよ。ココママにはたくさん買ってもらったから……。そ、それよりカグラさんはどうだったの?』

これ以上裸シャツの話題が続くのが辛かったので、カグラに話題を振る。

カグラ : 『……着ぐるみ』

『えっ!?!』

カグラが小声で言ってきたので、思わず聞き返してしまう。するとカグラはすぐに首を振っていた。

カグラ : 『いえ、なんでもないわ。どれも似合ってたわよ!』

ユイ : 『うみゆ、カグラは着ぐるみパジャマユキくんが好きすぎて、はあはあしてたからお持ち帰りしたいらしいの』

カグラ：『そ、そこまでは言っていないわよ!?!』

【コメント】

：wwwwww

：着ぐるみユキくんも良かったな

：カグラ様、わかってるな

：犬らしさが一番出てたもんな

《：?2, 000 着ぐるみ費》

『だ、だから、その……持つてるからね?! 服の代金はいらさないからね』

ココネ：『新しい着ぐるみも買って欲しいんですね。私に任せてください!』

『も、もう着せ替え人形は嫌だよ……』

ココネ：『ほらっ、大好きさんが望んでるから仕方ないですよ』

『こ、ココママの笑顔が怖いよ……』

ココネ：『それより次はユキくんの番ですよ。どの服がお気に入りでですか? あと今はどの服を着てますか?』

『あああう……。い、今着てるのはココママが初めに選んでくれたやつだよ。その……犬耳のパーカーのやつ……が一番、好きかな』

実際にはこの収益化配信のことで頭がいっぱいだったので服を着替えるのを忘れてただけだった。

昨日ココネと買いに行った犬耳パーカーと白のワンピースと黒のレギンス。

意外と着てても落ち着く……。

——はっ!? ベ、別に女装したいわけじゃないからね!?

ココネ：『ゆ、ユキくん……。うん、私も一番好きだよ!』

ココネが抱きつく仕草をしてくる。
もちろん今日はオフではないので、直接抱きつかれているわけではない。

でも、やっぱり直接『好き』と言われることは何度言われても慣れない。

思わず顔を俯けて照れてしまう。

『あうあう……、そ、その……それだと僕のが好き……みたいに聞こえるよ……。服……。服だよね?』

ココネ：『もちろんユキくんのことですよ!』

ユイ：『うみゆ、ココママ、ずるいの! ゆいもユキくんのこと、好きなの』

『わ、わふっ、服、服のことだからね?! 僕、関係ないからね?!』

カグラ：『全く、全然話が進んでないじゃないの! ほらっ、次に行くわよ! ココネ、読んでちょうだい!』

ココネ：『わ、わかりました。では、次のマシユマロにいきますね! 時間的にも次が最後ですね』

『えと……、は、早くないかな?』

ココネ：『時間は大丈夫ですけど、ユキくんが限界ですよね? 無理したらダメですよ』

カグラ：『そうね。今も気力で保ってるだけでしょうからね』

ユイ：『うみゆ、今日は寝るの。ユキくんの頑張りはみんなわかってるの』

【コメント】

・数日まともに寝てないんだもんな

・昨日も寝落ちてたし

・ユキくん、おやすみ

《…?10,000 早く寝なさい》

・スパチャでw

『みんな……、うん、ありがとう。それじゃあ次のマシユマロを最後にするね。ココママ、最後にふさわしいのをお願い』

ココネ『うん、そうですね。……あつ、これなんかいいかもしれないです』

「ユキくん、こんばんは。ユキくんが今、一番大切なものはなんですか?」

ココネ：『どうですか? みんな、ユキくんに聞きたくないですか?』

ユイ：『うみゆ、聞きたいの』

カグラ『まあ、コラボ前に言っちゃってるようなものだけど、締めるにはちようどいいわね』

『ふ、ふえっ!? ど、どうしてそんなことに!?!』

【コメント】

・もちろん聞きたい

・わくわく

・楽しみ

・ユキくんの大切なもの……

・なんだろう?!

『えっと、みんなが聞きたいなら——。といつても最初言ったことと変わらないよ? 僕が一番大切にしたもの……、失いたくないものは、三期生のみんなや大好きさんたちとの絆だよ。そのおかげで僕はここまで来られたわけだから。だから、みんなありがとう、大好きだよ……。ううう……。やっぱり直接言うのは恥ずかしいね……。』

思わず顔を伏せてしまう。

ココネ：『ユキくん……。私もユキくんのおかげでここまで来るこ

とができたんですよ』

カグラ：『そうね。私もユキのおかげで色々吹っ切れたからね』

ユイ：『うみゆ、ホラーゲーム配信、楽しかったの』

【コメント】

《：？50，000 泣いた》

《：？50，000 ユキくんのために》

：俺たちもユキくんのためになつてたんだな

：これからも推していくからな

《：？50，000 感動した》

：てえてえを期待してるぞ

『わわっ、だからスパチャは本当に無理したらダメだよ。みんながお金で苦しむことの方が僕は嫌だからね』

上限いっぱいスパチャが立て続けに来たことに慌てて、僕は犬好きの人に注意を促す。

すると、どういうわけか更にスパチャが加速していた。

【コメント】

《：？10，000 投げたら心配してもらえると聞いて》

《：？5，000 ユキくんが笑ってくれるなら》

：ユキくん、優しいな

《：？500》

《：？1000》

《：？10，000 今月の食費》

『ちよ、ちよっと。食費を投げたらダメ!? で、でも、本当にたくさん応援してくださいありがとうございます』

『ココネ』それじゃあ、そろそろ今日の放送は終わりにします。ユキくんは後から強制で休ませておきますね』

カグラ：『まあ、元はといえばユキが自分で思い悩んだのが理由だからね。私からは説教をしておくわ』

『えっ、せ、説教!?!』

ユイ：『うみゆー、ならゆいはユキくと添い寝するの』

ココネ：『そ、それはダメですー!!』

ユイ：『うみゆ、それじゃあ本日の配信はここまでなの。お疲れ様なの』

カグラ：『お疲れ様でした』

ユコネ：『ユイちゃんはおとから注意しておきます。お疲れ様でした』

『また僕の配信を……、お、おつ——』

この放送は終了しました。

『《#犬拾いました》収益化記念配信。マシユマロとか読んでみるよ』

《雪城ユキ／シロルーム三期生》

5. 0万人が視聴 0分前に配信済み

☒2. 1万 ☒27 ?共有 ≡?保存 :

チャンネル名: Yuki Room. 雪城ユキ

チャンネル登録者数11. 0万人

◆◆◆

【コメント】

：成長したと思ったけど、やっぱりユキくんだったw

：むしろ最初より話せなくて草

：でも、これがユキくんw

：お前たち、すっかりユキくん依存症だなw

：治療薬くださいw

：治療薬ってユキくんの悲鳴じゃね？

：喜んでくれてる姿もそうじゃないか？

：つまり、どうやってもユキくんから離れられないわけだw

閑話：先輩たちと四期生募集

第0話：新しい後輩ができたよ #赤コウ

『#天体観測 #赤コウ』後輩ができたよ《美空アカネ／海星コウ／シロルーム》

1. 6万人が視聴中 ライブ配信中

☒641 ☒47 ?共有 ≡?保存 …

シロルーム一期生の筆頭。暴走特急とも名高い美空アカネ。

ピンクの長い髪に星の髪飾り。

スタイルはよく、黄色の星柄のワンピースを着ている。

そんな彼女は配信画面にて楽しそうな笑顔を浮かべていた。

そして、その隣には魚の頭の形をしたパーカーと白のスカートを履いている水色の短めの髪をした少女——海星コウの姿もあった。

アカネ：『やっほー！ みんなのアイドル、美空アカネだよ！』

今日、シロルームの三期生が初配信をすると聞いて、いてもたってもいられなくなったアカネはコウに頼んで、後輩たちの配信前に枠をとっていた。

今回の後輩は四人。

最初は三人だと聞いていたのだが、急遽一人追加されて四人になっていた。

何でも三期生の担当が自らスカウトしてきたとっておきの子らしい。

妖精少女、真心ココネ。

ポンコツ姫、神宮寺カグラ。

ぐうたら羊、羊沢ユイ。

そして、噂のスカウトを受けた臆病犬、雪城ユキ。

中々個性的な面々が集まっている。

これだけ見ているとみんな暴走しそうで、これから楽しいことになりそうだった。

【コメント】

：やっほー

：やっほー

：やっほー

：今日はどんな暴走を見せてくれるんだろう？

：わくわく

アカネ：『おやおやー、私の暴走が見たいのかい？ いいよ、ライブ配信では言えないような、コウの恥ずかしい秘密をあれこれ暴露しちゃうぞー！』

コウ：『って、何言おうとしてるのよ!? この枠はライブ配信でしよ!』

コウは力の限り、アカネの頭を叩いていた。どこから出てきたのか、巨大なハリセンで。

運動神経抜群のコウとインドア派のアカネ。

そんなコウが思いっきり叩くと結果は分かりきっている。

アカネ：『痛ああああああい。折れる折れる。首折れるよ!』

コウ：『軽く叩いただけだよ。ぷちつと蚊を潰す感じに』

アカネ：『蚊か!? 私は蚊なのか!』

コウ：『もう一回軽く叩いておく? 壊れたテレビってこう斜め三十五度に思いっきり叩くと直るって言うよね?』

アカネ：『わ、私はテレビじゃないよ? た、叩いても直らないよ?』

コウ：『手遅れなら破棄しないとね?』

アカネ：『優しく包むように捨ててね。ユキくんの段ボールの隣に

うずくまるから』

【コメント】

：ユキくんって？

：段ボールといえば三期生に一人いたな

：段ボール単独ヘツダーの子か

：確か今日から配信開始じゃなかったか？

アカネ：『うん、何を隠そう。そのイラストを描いたのが私だよ！
これ以上ないくらいの上がりになったと自負しているよ』

コウ：『とつても可愛らしい子だね。ボクも早く会いたいな』

アカネ：『本当なら初配信の一番コメントを奪いに行きたいんだけどね。担当がダメだって。全く担当も人が悪いよね』

コウ：『ボクとしては担当さんの意見に同意するよ。だってアカネでしょ？ 私は何も言われてないし……。それにどんなことをコメントするつもりだったの？』

アカネ：『もちろんガチガチに緊張してるだろうから、先輩としてのその緊張をほぐす優しい質問をね——』

コウ：『うん、とりあえずその質問とアカネはゴミ箱に捨てておくね』

アカネ：『ま、待つて！ せめてその質問の中身くらいは聞いてよ！
私が昨日寝ずに考えたやつなんだから！』

コウ：『ボクとの電話中に寝てた人が何を言ってるのよ』

【コメント】

：草

：草

：w w w w w

：草

：寝てるやんw

：草

アカネ：『……てへっ』

コウ：『えっと、不要品回収のちらしはなかったかな?』

アカネ：『ちよ、ちよっと!? 私、不要なものじゃないよ!? 三期生のえつちいイラストとか、どう考えても必須だよね!』

コウ：『……当面はアカネと三期生は接触させないように言われてたから、見つからない様に捨てておこうかなって』

アカネ：『み、みんな、えつちいのは好きでしょ? だから緊張をほぐす質問は、まず下着の色を聞いて、スリーサイズを聞いて、風呂でどこから洗うかを聞くのは基本でしょ!』

コウ：『そのどこが基本なのよ!? どう見てもセクハラでしょ!』

アカネ：『えっ?! 何を言ってるの、コウ。確かに異性が聞くなら犯罪だけど、同性の私が聞くのは問題ないよ。ただのスキンシップだから』

コウ：『そんなわけないでしょ! 全くもう……』

アカネ：『それよりもコウ。自己紹介はもういららないかな?』

コウ：『あっ、もうアカネのせいで……。リスナーのみんな、こみー。ボクはシロルールの海星コウだよ』

アカネ：『はははっ、全くコウは……。配信の邪魔をしたらダメでしょ?』

コウ：『うん、わかった。とりあえず十回でいい?』

アカネ：『私に愛を囁く回数か?』

コウ：『えっ? 右ストレートの回数よ?』

アカネ：『死んじやうから。私、死んじやうから——』

コウ：『それじゃあ、アカネは後から殺しておくとして、今日はこのあと配信予定の後輩くんたちについて、話したいと思います』

アカネ：『まて、まだ私は納得していない——』

コウ：『アカネ、うるさいよ!』

アカネ：『はいっ……。ううう……。私の放送枠なのに……』

アカネは隅の方へアバターを移動させていじけてしまった。しかし、コウはそれを気にすることなく話を続ける。

コウ 『とは言っても、詳しい話は直接見に行つてほしいから、私が話すのは簡単な説明とコラボが解禁されたらどんなことをしたいか、とかかな?』

【コメント】

《: 1, 000 飼育費》

: 相変わらずで草

: やっぱりアカネパイセンの暴走を抑えられるのはコウパイセンだけ

: コラボ解禁されてもアカネパイセンとコラボしてくれる人はいるのか?

: 悪名高いもんな

コウ 『そこはほらっ、一応全員とコラボをすることになっているからそのうちね……』

アカネ 『はははっ、私はきつとコラボが殺到するよ。いやー、人気者は困るなあ』

コウ 『はいはい、別の世界線の話はいいからね』

アカネ 『この世界線の話だよ!』

【コメント】

: 草

: 草

: 確かにお気に入り登録で言うならw

: ただそれもつらたんに抜かれてたよな?

アカネ: 『どうせ私はクソ雑魚ナメクジなんだ……。全ての後輩に抜かされていつて、老害とか言われるようになるんだ……』

コウ 『大丈夫、アカネ。ちゃんとアカネのことをわかってくれる人はいらよ』

アカネ：『コウ……』

コウ 『ほらっ、壺を売りたいそうにしてる人とか、仏像を売りたいそうにしてる人とか』

アカネ：『どっちも詐欺じゃん!？』

思いつきり机を叩くアカネ。

それを聞いてコウは笑い声をあげる。

コウ 『あははっ、冗談よ、冗談。もちろんアカネのことをわかってるのはボクに決まってるでしょ。後輩くんたちにうつつを抜かしてるから、ちよつとからかいたくなっただけよ』

アカネ：『あっ……、うん、ごめん』

【コメント】

：落としてから上げるw

：おとなしい暴走特急はかわいいな

：でも、話は進まないw

アカネ：『そうだよ。でも、コウも大切だけど、これから配信する後輩たちも気になるよ？ その中の一人、雪城ユキは私がイラストと2Dデザインを担当したんだから』

コウ 『あの時はデザインに迷って、ボクに何度も相談に来てたもんね。苦労しただけあって、やっぱり想いも人一倍あるよね』

アカネ：『他の子も可愛いんだけどね。特にあの段ボール！ あれこそ一番力を入れた部分だからね！』

コウ 『あれを描くために何度も段ボールを買ったもんね。一番大切だからって』

アカネ：『楽しむことに全力を出さないでいつ出すの?』

コウ 『はいはい……、普段から出してくれたならいいんだけど』

ね』

アカネ：『労働と愉悦は違うものだからね！ 私を働かせたいならそれ相応の対価を持ってこーい！』

コウ：『はいはい。この放送枠をちゃんと終わらせることができたら、お菓子持つていってあげるよ。一緒に食べよう』

アカネ：『よーし、今日の配信は終わり——』

コウ：『ちゃんと最後まで配信を終わらしたらよ？』

アカネ：『まで一気に話して、さっさと終わらせるぞー！』

【コメント】

：w

：草

：餌に弱いw

：飴と鞭w

：なんだかんだで面倒を見るコウパイセンw

：w

アカネ：『とりあえず、コラボをしてやりたいこと……。やりたい……』

コウ：『なんでそこを強調するの!? 意味も変わるでしょ！ 全くもう……。ボクは雑談したり、一緒に遊んだりしたいね。二期生の子は特徴のある子が多かったから後輩って感じがしなかったんだよね』

アカネ：『あははっ、コウがそれをいうの?』

コウ：『アカネに言われたくないよ!』

アカネ：『私はポンだからな!』

コウ：『……そんな自信満々に言わないでよ』

アカネ：『えっと、三期生としたいことだね。配信途中にえっちなイラストを送りつけてから、雑談をするのとかも——』

コウ：『……やるなら自分の枠でやりなさいよ』

アカネ：『なるほど、その手があったか!』

コウ :『本当にするのなら全力で止めるからね。そういうことだから、この後配信されるボクたちの後輩、応援してあげてください。会ったことはないけど、とっても可愛い子たちですの』

アカネ :『任せて！ 舐め回すようにじっくり見てくる！』

コウ :『アカネはボクと一緒におやつを食べるんでしょ？ その時に一緒に見るからね』

アカネ :『まさかこのことを予想して、おやつに誘ってたのか!? 海星コウ、なかなかやるね……』

コウ :『いらなの？ それならお菓子は全部ボクが食べるけど』
アカネ :『いるー!』

【コメント】

：草

：落ちたな w

：w

：やっぱ飼育員はすごいな

：ただ、暴走特急がママになるのか。かわいそうだな

：雪城ユキ……か。見にいつてみるかな

コウ :『それじゃあ、本日二十時からボクたちの後輩である三期生の配信があるからぜひ見にいつてあげてね。詳細は概要欄に貼つてあるからね。最初は真心ココネちゃん、からかな』

アカネ :『どう見てもロリにしか見えない妖精だね。じゅるり……』

コウ :『はい、食べ物じゃないからね。手をあげたら通報するよ』
アカネ :『そ、そ、そんなことしないわい』

【コメント】

：説得力なさすぎ w

：w w w

：草

：絶対手を出す w w w

コウ　：『ほらっ、これがアカネの信頼度よ』

アカネ　：『くっ……、私はただ本能の赴くまま生きてるだけなのに……』

コウ　：『それがダメなのよ。アカネのいいところでもあるんだけどね』

アカネ　：『コウがいいなら私は問題ない!』

コウ　：『もう、それよりも次に行くよ。後輩くんを紹介するんだよね?』

アカネ　：『そうだった。次はポンコツ姫だな。これはヒメノンの対抗馬かな? ヒメノンはゲーム以外は完璧だけど、こっちの子は完全にポン酢だな。私もそうだが……、はっ、まさか私のライバル!? コウはやらんぞ!』

コウ　：『全く、決めつけは良くないよ。すぐできる子かもしれないからね。それにボクはアカネのものではないからね?』

アカネ　：『な、なんだと……。うう……。落ち込んだ。やる気が出ない……。もう流しでいいよね? 次は羊。以上!』

コウ　：『こらこら、それだけで済むわけないでしょ!? 確かに羊だけど、ちゃんと羊沢ユイって名前も言っただけで!』

アカネ　：『めんどい……。眠そうな顔をしているのと、枕を持っているところを見るとこの子もポン酢かな?』

コウ　：『だから勝手に決めつけない! そんなみんながみんなだったら、まとめるの大変でしょ!? アカネ一人でボクがどれだけ苦労しているか……。』

アカネ　：『私は数少ない常識枠だよ?』

コウ　：『お菓子いらなの?』

アカネ　：『私はポンです。お菓子ください……。』

コウ　：『よろしい。それじゃあ、最後だね。この子がアカネの子だね』

アカネ　：『私とコウの愛の結晶だな』

コウ 『はいはい、名前は雪城ユキくんだね。あれっ、くん表示なの？』

アカネ 『……流された』

【コメント】

：同期の三人がユキくん呼びをしていたから

：俺たちもユキくんって呼んでるな

：アカネパイセン草

：まさかの全員ポン酢かw

：意外と最初のロリがまとめ役なのかもw

コウ 『えっと、この子は恥ずかしがり屋のわんこさんですね。段ボールに隠れてるんですよ』

アカネ 『ああ、良く聞いてくれた。なんと言ってもあの少し照れた顔つき。涙目になりながら段ボールから顔を覗かせる仕草。本来動くはずがない犬耳フードを擬似的に動かす。他にも小柄な見た目とぴったりの細っそりとした体型。更に更に、肌の色とあう白のワンピースと黄色のフードパーカー。犬っぽい茶色の髪。どれをとっても最高の出来だ。さすが私！』

やはり自分が描いたからか、アカネは興奮混じりに早口になりながら語っていた。

コウ 『はいはい、アカネは最高ですね。ただ、確かにこの子も可愛いですね。守ってあげたくなる感じがありますし』

アカネ 『適当にあしらわれた……』

コウ 『だいたい三期生の簡単な説明はこんな感じかな。イラストと設定だけで判断してるだけで、実際にボクたちも話したことがあるわけじゃないからね。コラボできることが楽しみだな』

アカネ 『よし、早速コラボを申し込んでくる！』

コウ 『こらっ、まだでしょ。でも、自分が描いたイラストの子だ』

もんね。うん、わかったよ。ボクの方から三期生の担当さんに話をしておくよ。ボクの方からね。できるだけ早くにコラボができるように』

アカネ：『よし、早速担当に言ってくる！』

コウ：『ボクが、つて言っただでしょ!? 余計なことをするとお菓子を抜きにするよ?』

アカネ：『コウ、任せた！ 私はユキくんに投げつけるイラストを描いておく』

コウ：『恥ずかしがり屋っぽいからエッチくしすぎたらダメだからね。私がチェックするから』

アカネ：『任せて！ きわつきわのビキニに——』

コウ：『ボクの話、聞いてた?』

アカネ：『……わかりました』

【コメント】

：草

：初めての先輩コラボが暴走特急になるわんこ

：かわいそうwww

：人見知りなのに、初先輩コラボかw

：案外コウパイセンみたいなタイプかも

：wwwwww

アカネ：『おっと、そろそろお菓子……いや、放送終了の時間かな。また次の配信で会おうね。ばいばーい』

コウ：『バイバーイ!』

この放送は終了しました。

『《#天体観測 #赤コウ》後輩ができたよ《美空アカネ／海星コウ／シロルーム三期生》』

3. 1万人が視聴 0分前に公開済み

☒ 1. 1万 ☒ 24 ? 共有 ≡ ? 保存 …

チャンネル名：A k a n e R o o m. 美空アカネ
チャンネル登録者数：63万人

【コメント】

- ・本当にコウパイセンは暴走特急を止められるのか……
- ・三期生楽しみ
- ・ばいばーい
- ・ばいばーい
- ・待機しておくね

第20．5話：四期生募集

シロルーム本社。

三期生担当である ゆきりまい 湯切舞は送られてくるたくさん書類と睨めっこをしていた。

シロルーム四期生募集。

ユキくんたち三期生が想像以上に活躍してくれたこともあり、早期に四期生を募集することとなった。

活動の開始は七月頃を予定。

ユキくんたちが五月だったことを考えるとかなり急ピッチの募集になっている。

更にその募集数を増やした要因は他にもある。

カタッター上で少しバズっていた募集要項。

シロルーム【公式】 @shiroroom 5月18日

【お知らせ】

シロルーム四期生、女性Vtuberを募集中。

募集要項：18歳以上。性別不問。

配信経験：歌、ゲーム等の配信がある方（なくても可）

@1,425 ?21.5万 ♡11.1万

——うん、我ながら馬鹿げていると思う。

年齢が十八歳以上なら誰でも良いですよ、と言っている様な募集。

これならたくさん来てもおかしくない。

更にこの募集に油を注いでくれたライバーがいた。

雪城ユキ@シロルーム三期生 @yuki | yukishiro

5月18日

僕の後輩さんを募集してた……。ぼ、僕、まだ先輩になる自信ない

よ……。

でも、僕も頑張つて先輩さんらしくなるから、どんどん応募してね
@2, 684 ? 15万 ♡ 31万

——あざとすぎるよ、ユキくん。これを天然でやってくるのだから
恐ろしい……。

ユキくんのこの眩きをきっかけに募集人数がかなり増加してしま
まった。

主に犬好きたちから、ユキくんに会うために……。

そして、募集に対する質問がユキくんに集まった様で、彼は慌てて
連絡をしてきた。

ユキ :「た、担当さんー、なんか僕のところにどうやって応募した
ら良いのって質問がたくさん来てるんだけど……」

マネ :「公式の方で募集の仕方を眩きますので、それをRTしても
らつても良いですか？」

ユキ :「り、リツ……ですね。わ、わかりました」

これでユキくんの騒動は終わったものの、ダブルでバズった効果は
大きく、その結果がとんでもない応募数だった。

そこから少しでも可能性のある子に分けていくのは中々大変な仕
事。

とりあえず最初は性別で分けていく。

ユキくんみたいなタイプはまずいないので、よほど気になる人以外
は弾いてしまう。

あくまでも募集しているのは女性V t u b e rなのだから——。

そうなつてくると、結局最後に残るのはいつもの数ほどだった。

舞はため息を吐きながら、書類を全て確認していった。

すると、珍しく気になるプロフィールの子を発見する。

年齢は十八歳でようやく今年から応募できる様になった様だ。

ただ、問題はその驚くべき経歴。

既にMe eTubeでかなりの人気を博しているMe eTube rだ。

お気に入り登録者数二十万人もいるのならそのまま続けて行くこともできるだろう。

しかも、顔出しをしている。

添付されている動画を確認するとそこに映っているのはとても小柄で可愛らしい少女だった。

チャンネル名は『夏瀬なな』。

本名？　と思っただが、どうやら少しもじってるだけで、別名の様だった。

本名は七瀬奈々。

どこか現実離れした可愛らしさと長い銀髪をしており、確かにMe eTubeとして人気が出るだろうと思わされた。

更に透き通る様な綺麗な声をしており、少し棘のあるしゃべりも人氣の一因だった。

段々とシロルームのことが知れ渡ってきた様で、お気に入り登録者がそれなりにいる配信者は増えてきた。

数万人のお気に入りがある人はちらほらと見受けられ、当然ながらそういった人たちは一次面接を通過させている。

ただ、彼女の場合は即決していいのでは……と思えるほどの実績だった。

——とにかく一度会うにしても、一応上の人と相談しておきましょう

うか。

どうしてそんな人が来てくれたのかというと、理由はユキくんを見て……とのことだった。

どうやら彼女は、隠れてユキくんの配信を欠かさず見ている上に上限いっぱいのパチャを投げている、という強者だった。

ここまでのファンは珍しいが、今のユキくん人気を考えたらそういう人間が出てもおかしくはない。

ただ、それが人気配信者となるとありがたい限りだった。

「ユキくんと組み合わせると面白そうですね——」

ニヤリと微笑んだ舞は彼女の書類を持って上へ掛け合いに行っていた。



とあるマンションの部屋の中。

そこに置かれたパソコン画面には、どこか怯えながらも楽しそうに話す雪城ユキの姿が映っていた。

同期の三人と楽しそうにしている姿。

それを見たら自然と自分も励まされる。

「よし、今日も頑張ろう。ユキくんと会うために……」

側に置いている姿見で自分の今の姿を確認する。

さらさらで、腰あたりまで伸びた銀色の髪。

五歳は若く見られるほどの童顔。

146cmしかない小柄な体型。

その姿を生かせる様に服装は白の袖無しワンピース。

どこからどう見ても可愛らしい少女である七瀬ななせ奈々。

七瀬はMeerTuberに憧れて配信を始めていた。

いつも楽しそうに笑っている動画配信者たちのように、みんなに笑顔を届けられたら自分も楽しいだろうな。

がむしやらに……。とにかく必死にやってきた。

その結果、収益化を果たしチャンネル登録者数もうなぎ登りに増えていき、人気配信者の道を駆け上がっていった。

ただ、人気になればなるほど、その重圧が七瀬を襲う様になる。

七瀬はリスナーの人に楽しんでもらうことを第一に考えていた。

自分のことなど考えず、とにかくリスナーが楽しんでもらえる動画を……。を……。

人気配信者なのだから、それが当たり前だと――。

それはもう孤独な戦いだった。

何か一つが狂ってしまうと、築き上げた牙城が一気に崩れてしまう気がしていた。

本当は好きで始めたはずの動画配信だけど、次第に配信すること自体が怖くなっていった。

常にギョツと胃が締め付けられる様に苦しくなり、恐怖とストレスからまともに夜も寝られない。

こんなに苦しいならいっその事辞めてしまおうかと思ったことも何度もあった。

しかし、それをするにも別の悩みが出てくる。

まずは金銭面の問題。

Me e T u b e rで稼ぐことはできるが、まだ収益化が通って間もない。

それほど生活に余裕があるわけでもなかった。

それを辞めるとなると別の仕事が必要になってくる。

しかし、顔出しして既に有名になりすぎている。

結局雇ってもらえたとしても、そこで求められるのは配信者としての自分だろう、と。

結局はどんなに悩み苦しもうが、動画配信を続けるしか道はなかった。

この苦しみから解放してくれるものはないんだ、と諦めていた。

そんな絶望の中で出会ったのがユキくんの放送だった。

最初は新人V t u b e rがあたふたと配信してる良くある光景にしか見えなかった。

今一番伸びているシロルームにしてはらしくない初心者を選んだものだと思っていた。ただ、次第にその配信から目が離せなくなった。

そもそも、ユキくんは一人で頑張っているわけではない。

むしろ一人ではできないことを認め、助けてくれる仲間たちと楽しそうに配信をする。

そんな姿に七瀬は心を打たれていた。

本当に自分がやりたかったのは、ユキくんたちみたいに仲間と笑い合って、楽しそうに配信をすることだったんだ――。

そして、収益化配信で七瀬と全く同じ『配信は自分一人で行うのか
しないといけない』という悩みを涙ながらに語ったユキくん。

それを仲間たちと乗り越えた姿を見て、七瀬は自然と目に涙が浮か
んでいた。

本当に自分がしたいものはそこにある。

それなら、自分がすることは今までと同じだがむしろ前に前へと進
み、それを勝ち取るまで！

それを決意した七瀬の目には既に涙はなかった。

ユキくんみたいな配信者に……。

——ううん、違う。本当に私が欲しているのはユキくんたちの様な
絆の輪に入ること。

それからユキくんの配信は全て欠かさずに見ている。

ライブは絶対に見に行くし、そのあとアーカイブで見るとも忘れな
い。

それだけで摩耗した精神が癒やされていた。

次も頑張ろうと思えた。

だからこそ、その感謝の意味も込めて、ユキくんに初スパチャを投
げたのは良い思い出だった。

流石にそのままの『夏瀬なな』のアカウントは使えないので、別ア
カウントとして『さすらいの犬好き』を作った——。

少しでもユキくんの助けになるなら、と毎回スパチャを投げている。

そして、待ちに待ったシロルーム四期生の募集が始まった。それを見た七瀬はすぐに応募を済ませていた。募集要項は簡単で、年齢さえクリアしていたら良い。ただ、配信経験が書かれている以上、動画もあった方がいいはずと思いい、自分の中で一番再生回数が多い動画を添えて送る。

今のシロルームの成長速度を考えるとライバルは同じ人気配信者になるはず。

でも、自分は負けない。

本当に自分がやりたいこと。

自分も夢がそこにあるのだから。

ダメなら何度でも挑戦する！ 絶対に合格するために！

そんな決意の下、応募したシロルーム四期生。

そして、すぐに七瀬の下に三期生の担当が直接会いたいという返事を送ってくるのだった。



『《#犬拾いました》 後輩さん、募集中です《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

2. 1万人が視聴中 ライブ配信中

☒ 1, 154 ☒ 0 ? 共有 ≡ ? 保存 …

今日もいつもと同じ雑談配信。ただ、僕は少し緊張していた。その理由は配信の内容にあった。

【四期生募集】

後輩ができることを喜んだだけだったのに、それを呟いた結果、なぜかバズってしまった。

結果的に応募人数がかなり増えたみたいなので、僕はやはり緊張を
してしまおう。

——まだ自分のことではいっばいいいっばいなのに本当に後輩ができ
るなんて……。

ただ、そこはそれ以上気にしても仕方ないので、配信の準備をする。
開幕のミニアニメ後、随分と慣れた手つきで段ボールに入ったユキ
くんを表示させる。もちろん最初は段ボールの中に隠れた状態で。

『わふう……、み、みなさん、こんばんは。シロルーム三期生の雪城ユ
キです。きよ、今日も拾いに来てくださってありがとうございます』

ちらつと顔を覗かせる。

しかし、すぐに顔を引っ込めていた。

【コメント】

…わふう

…わふう

…わふう

《…500 わふう》

…わふう

…わふう

《…5,000 わふう》

『わわっ、いきなりきた!? す、スパチャありがとうございます。そ、
その……、本当に無理をしないでくださいね。た、ただの挨拶だから
……まだ』

突然の挨拶と同時のスパチャに驚いた僕は、投げてくれた人にお礼
を言いつつ、心配もしていた。

ゆっくり顔を出して、不安げな表情を見せる。

【コメント】

《：▪1,000 投げると心配してもらえると聞いて》

：w w w w w

《：▪500 わふー》

《：▪500 わふー》

《さすらいの犬好き：▪50,000 今日の犬好き費》

『わわわっ……、そ、その……、そんなにたくさん投げられると僕……その……。そ、それにさすらいの犬好きさん、その……犬好き費はいらないからね。そ、そんなにたくさん投げなくてもいいんだよ……』

【コメント】

：スパチャに怯えてダンボールに隠れてしまったw

《：▪1,000 怖がらなくていいんだよ》

：w w w w w

：ここまで自己紹介のみw

：むしろ自己紹介が終わってるだけ成長してるw

『えとえと……、か、隠れたらスパチャで殴られるのなら、その……、顔を出すね……』

恐る恐る顔を出す。

本当ならすぐにも顔を隠したくなるのだけど、そうするとまたスパチャで殴られそうなので、涙目ながら耐える。

【コメント】

：なんだろう、苛めたくなる

：w w w

：ユキくんかわいい

さすらいの犬好き：しまった、もう投げられない
：草

『な、投げすぎはダメだからね。そ、そろそろ本題に入るよ。そうじゃないと放送枠が終わりそうだから……』

時間を確認しながら進行する。

もうすでに十分が過ぎている。

このままだとコメントに流されて何もできずに終わってしまうだろう。

『と、とりあえず今日は前に僕が呟いた後輩さんの募集について話したいと思います。とはいっても、僕も募集要項以上のことは知らないんだけどね』

カタッターで書いた呟きを配信画面に表示させる。

『えとえと、まだまだ配信したばかりなのに、もう後輩ができるみたい。きつと、僕より配信経験がある人だよ……』

【コメント】

：間違いない

：ユキくん、配信経験ゼロだったもんな

：夏頃からだったか？

：その頃までにはユキくんもしっかり配信できるよ

：ユキくんも先輩か

『ううう……、先輩になったら色々教えていけないんだよね？ ぼ、僕にできるかな……』

でも、よく考えてみると僕自身がまだ先輩から何かをしてもらった

記憶はない。

むしろコラボをするのはこれからになるので、それを受けてから考
えるので良いかもしれない。

そうなると思うだけ気が楽になる。

『そ、そうだ。犬好きさんたちの中に四期生の応募をした人はいるの
かな？ 今回は結構たくさんの人が募集してくれたみたいだから』

【コメント】

：俺も応募したぞ

：俺もだ

さすらいの犬好き：もちろん応募した

：もちろん

羊沢ユイ：うみゆ

『つて、ユイは違うよね!? それに意外と男の人も応募してるんだね。
……ユージさんみたいになりたいのかな?』

男性V t u b e rでパツと名前が浮かんだのは、この前に会った野
草ユージだった。

アバターのキャラを演じるために自分とは遠いキャラを演じる、配
信者の鑑の様な人だった。

僕自身も性別を偽って配信していることもあり、尊敬しているし、
直接会ってから一緒にコラボをするのが楽しみな人でもあった。

【コメント】

：しまった、シロルームにはユージ草がいた

：お、俺は燃えたくない

：これもユキちゃんと会うためだ

：ユキさんに面接で会えるのならどんな無茶でも引き受けてやる

『ふえっ!? ぼ、僕は会いませんよ? 僕は面接とは無関係だから……』

突然のコメントに僕は少し慌てていた。

『そ、それにオフもあまりしたくないから……。担当さんに言われたら仕方ないけど……。でもでも、男性の方だとどうなんだろう??』

僕の性別を考えると男性とのコラボは何もおかしくない。

現に真緒さんやユージさんとはすることになっている。

でも、それも担当さんから言われたことなので、自分で決めたものではない。

担当さんも他期生とのコラボは連絡して欲しいと言われているので、無理にする必要もないだろう。

【コメント】

羊沢ユイ : うみゆ? ユキくん、もうオフコラボしてくれないの?

: くつ、敵はユキくんの性格だったか

: そもそも会えるかどうかは書類選考が通ってからだ

さすらいの犬好き: 問題ない。通るまで送れば絶対通る

: →本気すぎて草

『ゆ、ユイはまた今度温泉行くことになってるよね? と、とにかく、僕も早く後輩ができるの良いなあ。オフじゃなくて、ただのコラボとかなら、ちよつと不安だけど頑張るし……。それに困ったことがあったら、チャットとかでも答えたりできると良いな……。僕が教わる側かもしれないけど——』

でも、先輩に話しかけるなんて早々にできないよね?

だって、僕も一応シロルームみんなのチャットは知ってるけど、未

だにやりとりをしたことがあるのはアカネ先輩だけだったりする。

同期のチャットは毎日、ほぼ全ての時間で動いているけど。

昼間はココネがいるし、夕方はカグラさん、夜はなぜか寝てるはずのユイがいる。

僕は常にキヤスコード画面を開いているので、寝ていない限り返答はしている。

——もしかするとそれがずっと動いてる理由かもしれないけど。

あとはカタッター。

通知数が増えなくてもいいことになるのもずいぶんと慣れてきて、ようやくリプを返したりとかも出来る様になった。

【コメント】

さすらいの犬好き：その……、通ったら色々教えて欲しい

：→草

：流石に通る前からの約束は草

『そうだね。うん、わかったよ。もし、さすらいの犬好きさんが通ったら、僕になんでも聞いてね。頑張つて答えるから』

笑顔を浮かべながら返答をする。

——うん、そうだね。困ってる後輩に頼られるのもいいよね。

本編第2章：先輩と後輩

第1話：コラボ解禁!?! 暴走特急と臆病わんこと飼育員 #あかわふこみー

僕が動画を配信する様になって早一ヶ月。

月も変わり、いよいよ他期生とのコラボが解禁される日になってしまった。

先週からちよくちよくと海星先輩やアカネ先輩と打ち合わせという名の雑談チャットを繰り返していた。

色々と実りのあるものもあれば、アカネが勝手に暴走してるだけの日もあったが……。

コウ :「ユキくん、大丈夫かな? 一応ボクの方でアカネの暴走は抑えるけど、たまに飛び火するから気をつけてね」

ユキ :「ぼ、僕にどうにかできるのかな……?」

アカネ :「そんな時は私に任せろ!」

コウ :「ほらっ、たまにこんなアホなことを言うでしょ? そんな時は無視したらいいからね」

ユキ :「せ、先輩相手にそんなことできないですよ……」

コウ :「うんうん、ユキくんはいい子だね。でも、アカネを先輩なんて思ったらダメだよ。猛獣の類だと思っておかないと」

アカネ :「どうせ私は猛獣なんだ。がおー、つてユキくんを食べる側なんだ……」

ユキ :「た、食べたらダメですよ!?!」

アカネ :「がおー!」

ユキ :「わ、わふっ!?!」

コウ :「こらっ、アカネ! 今は打ち合わせでしょ? 余計な話は時間の無駄になるから後からにしなさい」

アカネ :「……うん、ごめんね。後から思いっきり襲うことにする」

よ」

ユキ …「えっと、あの、で、できたら襲うのもやめてください……。そ、それで僕はどうしたら……?」

コウ …「ごめんね。本当ならボクたちがリードしないといけないんだけどね」

アカネ …「そうだぞ、コウ。邪魔するんじゃない!」

コウ …「……何回喰らいたい?」

アカネ …「……お菓子?」

コウ …「ううん、膝蹴り」

アカネ …「コウの膝蹴りを受けたら死ぬよ!」

ユキ …「そ、その……、海星先輩? さ、さすがに暴力は良くない……ですよ?」

アカネ …「やっぱりユキくんはいい子だな。よし、私がモミモミしてあげよう」

ユキ …「えっと、モミモミ……ですか?」

アカネ …「ああ、もちろんだろう? その慎ましやかな二つの双丘を」

コウ …「ごめんね、ユキくん。ちよつと、このアカ^バネ^カを捨ててくるね」

アカネ …「す、捨てるな!」

ユキ …「えと……、そのままじゃ捨てにくい……ですよ? 僕の段ボール、使います?」

コウ …「あははっ、いいねその返し。その段ボール、喜んで使わせてもらうよ」

アカネ …「ゆ、ユキくんの裏切り者!」

ユキ …「えと……、その……、打ち合わせは終わりですか?」

コウ …「あつ、ごめんね。ちよつと、アカネのいないところで二人で打ち合わせしましょうか?」

アカネ …「わ、私を除け者にするなんて、ひどいぞ! さては私がないところで二人、イチャイチャするんだな。私もまぜろ!」

コウ …「ねっ、ライブ配信の話ができないから後からゆつくりしま

しよう。とりあえず配信はユキくんの枠ですから準備だけ頼んでもいいかな？」

ユキ　：「あつ、はい。わ、わかりました。がんばりますね」

アカネ　：「頑張らなくていいぞ。私は生まれてこのかた、頑張つてないからな。自分の好きなことを好きにだけすればいい」

コウ　　：「まあ、アカネに同意するのも癪だけど、ボクたち相手に緊張しなくていいよ。アカネが適當だからね」

アカネ　：「そうそう、私が適當だから気にするな！　あはははっ」

ユキ　　：「そ、それでいいのですね……」

コウ　　：「アカネの考えを深く考えたらダメ。何も考えずに本能で動いてるから」

ユキ　　：「わ、わかりました。気をつけますね」

アカネ　：「あと私から一つ、敬語は使わなくていいよ」

ユキ　　：「で、でも、海星先輩はもちろん、アカネ先輩も一応先輩だし……」

コウ　　：「ふふつ、一応、ね」

ユキ　　：「あつ!?　ご、ごめんなさい、僕、とんでもないことを……」

コウ　　：「気にしないでいいよ。ボクももつとユキくんには素を出して欲しいかな。まあ、今は難しくても、大好きさんたちの前だと……ね」

ユキ　　：「あつ……。そ、そうですね。見にきてくれる犬好きさんたちに楽しんでもらわないといけないですもんね」

コウ　　：「そういうことね。だから、ボクたちへの敬語は考えなくていいからね。それよりも中身をしっかりと考えましょう」

ユキ　　：「はいっ!」

アカネ　：「おやつ、なんだか疎外感を感じるな」

コウ　　：「いつものことですよ?」

アカネ　：「それもそうだな」

ユキ　　：「あ、あははっ……、本当にそれでいいんだ……」

二人のやりとりに思わず僕は苦笑を浮かべてしまう。

結局三人の打ち合わせで決まったのは、僕の枠で配信をすること、だけだったので、もう一度コウ先輩と二人で話し合うことになった。



海星先輩の説明はわかりやすく、二人で打ち合わせすると安心できるほどだった。

ただの雑談なのだが、話す内容についてはトークカードを準備してくれており、今まで僕がしてきたような、行き当たりばったりの雑談はしていないことがよくわかった。

トークカードの中身はさまざまだった。

「好きなお菓子」

「最近買ったもの」

みたいな定番のものから

「お風呂でどこから洗うか」

「一番好きな同期」

など、答えるのがちよつと恥ずかしいようなものもあった。

この辺りはやっぱり海星先輩。

安心感がすごいのと、リスナーの人が喜びそうなもののバランスを考えて配信の準備をしてくれるので、勉強になった。

コウ : 「ユキくんは真面目だね。ボクも教え甲斐があるよ」

ユキ : 「そ、そんなことないですよ。僕、知らないことが多いのでとつても勉強になりました」

コウ : 「うんうん、たまにはこういうのもいいね。ユキくんみたいに素直な子だと。ただ予定はね、まあ、壊されるものなのよ……」

なんでだろう……？

海星先輩から哀愁のようなものを感じる。

ユキ : 「海星先輩……」

コウ : 「ユキくんもコウって呼んでくれていいからね。同じアカネに迷惑をかけられる人間として仲良くしましょう」

ユキ : 「そ、そうですね。わかりました、それじゃあ、コウ先輩って呼ばせてもらいます」

コウ : 「うんうん、本当にユキくんは素直でいい子だね。アカネもこうなってくれると良いんだけど……」

ユキ : 「あ、あははっ……」

僕はコウ先輩の言葉に苦笑しか浮かべられなかった。

◇◇◇

『＃犬拾いました #あかわふこみー』コラボ解禁。雑談枠 《雪城ユキ／美空アカネ／海星コウ／シロルーム》

2. 6万人が待機中 20XX／06／01 20:00に公開予定

☒2, 541 ☒3 ?共有 ≡?保存 :

【コメント】

: ついに来たか。暴走日

: コウパイセンがいるからどうにかなるはず……

: ユキくん、無事に戻ってきて

《: ? 500 通報用の電話代》

: 待機画面は……初めて見るイラストだな

: アカネパイセン、良い仕事するな

今回のコラボ用にアカネ先輩が僕とユキくん、コウ先輩、アカネ先輩の三人が

描かれているイラストを準備してくれた。

僕がアカネ先輩にちよっかいをかけられているのをコウ先輩が止めているイラストは、まさに先日のチャットの光景そのものだった。

緊張は少しある。

でも、つい先ほどまでコウ先輩と話していたからか、それとも先月までココネたちとたくさんコラボをしたからか、ずいぶんと落ち着いていた。

ちやうど同じ時間にココネたちもコラボ配信をしていると頑張らないと、と思わされる。

だからこそ、僕は配信が始まる前に一言、三期生のチャット欄に書き込みをする。

「み、みんな、頑張つて……」

それだけ打つとすぐに配信画面の方を注視する。

ちやうど開始時間になったのでミアニメを流した後、三人のAvatarを表示させた。

そして、大きく深呼吸をすると、段ボールからユキくんの顔を出して声を上げる。

『わふー、大好きのみなさ——』

しかし、思わぬ方向から邪魔が入り、僕の言葉は遮られてしまう。

アカネ『やつほー、みんな、お待たせしたねー！ みんなのアイドル、美空アカネだよ！』

『……へっ!?!』

僕が挨拶を言おうとした瞬間に、それに被せる様にアカネが言葉を発してくる。

それに思わず口から声が漏れてしまう。

コウ　『ちよつと、アカネ!?　何をしてるの!?　まずはユキくんの挨拶からでしょ?』

アカネ　『いやー、ちよつと緊張してるみたいだったからね。緊張をほぐそうかと』

コウ　『それでいきなり段取りを崩す人がどこにいるのよ!?!』

アカネ　『ここにいるよ?』

コウ　『はあ……。ちよつとアカネは締めておくから、ユキくんは先に進めてくれるかな?』

『えと……。わ、わかりました……。』

アカネ　『ま、待て、私は何も悪いことをしてな……。あああああ』

【コメント】

：初手、乗っ取りw

：草

：流石パイセンw

：これ、本当にまともに進まないんじゃないか?!

：一期生のアバターが消えたw

『す、すみません。ちよつと放送事故があったけど、後からカットしておくね』

アカネ　『ライブだからカットなんてできないぞー』

『遠くの方からアカネ先輩らしき声が聞こえるけど、とりあえずコウ先輩に任せて……。改めて、わふー。犬好きのみんな、こんばんはー。シロルーム三期生の雪城ユキです。本日はイラストという名のアカネ先輩の罠にかかってしまい、こうしてコラボをすることになったちゃ

いました。危ないと思っただら通報をよろしくお願いします……』

アカネ：『あ、危ないってなんだ!? わ、私は何もしないぞ?』

コウ：『はいはい、出番まで待つてないとね』

『あ、あははっ……で、では気を取り直して、まずはコウ先輩から自己紹介をお願いします。その……、アカネ先輩は勝手にしちやいましたし』

コウを呼んだタイミングで改めて二人のアバターを登場させる。

コウ：『それもそうだね。大好きのみんなー、こみー! シロルールの海星コウだよ。今日はアカネの暴走を抑えるために呼ばれたからよろしくねー』

【コメント】

：こみー

：こみー

：こみー

：わふー

：わふー

：俺たちのユキくんを守ってくれ!

《さすらいの犬好き：?50,000 出遅れた》

『わわっ、さすらいの犬好きさん、今日もありがとうございます。そ、そんな無理して投げなくても——』

アカネ：『直接貢いでくれてもいいんだよ』

『うん、直接貢いで……って、そんなこと言わないよ!?!』

つついアカネにつられて変なことを言いそうになる。しかし、慌てて言い淀む。

ただ、その僕の一瞬の言葉にコメントが反応していた。

【コメント】

《：？1,000 貢ぎます》

《：？500 ユキくんのためなら》

《：？10,000 友達代》

《：？10,000 心配してもらえると聞いて》

《：？1,000 犬好きならもちろん》

『ちよ、ちよつと待つて。だ、だから投げすぎだつて!?!』

アカネ：『今のユキくんの言葉を訳すと「もつと投げてこーい！」だね』

『ち、違うよ!?! そんなこと言わないからね!?!』

コウ ……アカネ?』

コウがアカネに対してにつこりと微笑む。

すると、アカネは慌てふためていた。

アカネ：『べ、別に私は何もしていない……。ただ、少しでもユキくんの助けになれば……。』

コウ ……ユキくん、封印——』

『えつと……。う、うん……。』

僕は慌てて自分が入っている段ボールを大きく表示して、アカネの上から被せてしまう。

アカネ：『わ、私の姿が見えないなんて世界の損失でしょ？ だ、だから段ボールの封印はやめて……。』

コウ ……『悪は滅びるの。しばらくは段ボールの中で反省するといいよ』

『僕の段ボール……。』

口元に指を当てて、羨ましげに段ボール^{アカネ}を見る。

【コメント】

・暴走特急が封じられてるw

・こんな押さえ方があるなんて……

・コウさん、すごい

・ユキくんだけ相変わらずだったw

・段ボール、返して欲しそうだねw

・段ボールに入っていないユキくんは久々かも

《：・1,000 私服代》

《：・?500 段ボール代》

『だ、だから、新しい服を買わなくても持つてるからね？　だ、段ボール代はありがたく貰っておこうかな……、うん……』

コウ　：『ユキくん、そろそろ次に進みましょうか？』

『そ、そうだね。えっと、まずはマシユマロ……』

アカネ：『マシユマロなら任せて！　とっておきのやつを選ぶよ！』

アカネが巨大段ボールから顔だけ出して言ってくる。

コウ　：『——本当に大丈夫よね？』

アカネ：『私を信じて！』

コウ　：『はあ……、わかったわよ。それじゃあ、一旦アカネにまかせてみるわね』

アカネ：『よし、それじゃあ読つむよー』

「ユキくん、わふー！　いつも同期と楽しそうにしているユキくんですが、同期の中で一番好きなのは誰ですか？」

アカネ：『これはこれは、三期生同士で火花がバチバチと出そうなマシユマロだ。とっても楽しそうだね』

コウ　：『アカネのコメントはともかく、これは気になる人が多いか

も。実はトークカードに準備してた一つだもんね。ユキくん、答えられるかな?』

『えっと……、その……』

僕は今までのオフ会のことを思い出す。

ホラーゲームをした結坂。

料理対決をした瑠璃香。

一緒に買い物へ行ったこより。

みんなそれぞれ良いところがあって、その中から一人を選ぶなんてことはとてもできなかった。

『ご、ごめんなさい……。やっぱり僕には一人を選ぶことはできないよ……。ユイはあえてふざけてる素振りを見せてるけど、僕を楽しませようとしてくれる。カグラさんは何事も必死で、僕に機材の使い方を見せてくれた。ココママはいつも僕の心配をしてくれている。みんな僕のことを考えてくれるのに、一人なんて選べないよ——』

コウ : 『ユキくん……。確かにユキ君の言う通りね。みんな違ってみんな良いんだね』

アカネ : 『なるほど、つまりユキくんはハーレム狙いということだね』

『は、は、ハーレム?!?!? ち、違うよ!? ただ、僕はみんなのことを大切な仲間って思ってるだけで……』

アカネ : 『うん、同期全員を侍らせる犬の王……。うおおお……。たぎってきたー……!!』

コウ : 『はいはい、じゃあそのまま一人でたぎっておいてね』

興奮するアカネを適当にあしらうコウ。

その二人に僕は振り回される一方だった。

【コメント】

：混ざりたい

：→草

：俺も混ざりたいぞ

：草

アカネ：『おっと、ごめんね。マシユマロ一つで昇天するところだった。次を読んでいくよ』

「最近ユキくんのことを考えると夜も三食しか食べられません」

コウ：『食べ過ぎだね。一日に何回食べるんだろう?』

『えっと、ぼ、僕も朝昼晩の三食だから同じだね……、うん』

アカネ：『質問はまだ先だね。えっと』とところでユキくんの今日の下着は……』って、ぐはっ!?!』

アカネが下着と言った時点でコウの右ストレートが炸裂していた。

コウ：『もう、アカネは……。あまり変なことを言うのと殴るわよ?』

『あ、あの……、コウ先輩……。もう殴ってますよ?』

コウ：『大丈夫、峰打ちよ』

『峰ってなんだろう……。? パンチにもあるのかな?』

アカネ：『死ぬ……。本当に私が死んじゃうよ!?!』

コウ：『大丈夫。ボクのアカネがそんなに簡単に死ぬはずないよ? でしょ?』

アカネ：『うっ……。こ、コウにそう言われたら死ぬわけにはいかな……い……』

『えっと、あれっ? なんのマシユマロだったかな?』

アカネ：『下着の色だろう?』

『あつ、そうだった。えっと、今日の僕の下着の色は……。? ってなん

でそんな質問があるの?!?!? 教えないよ!?!?』

アカネ：『聞いたか、みんな! ユキくんの下着の色はし……、つてコウ、ごめん。も、もうやめるから……。こ、これ以上殴られたら私の体が持たないよ……。』』

喜び勇んで話そうとするアカネだったが、側で笑顔を浮かべているコウの威圧を感じて慌てて謝っていた。

コウ …『それならわかるわよね?』

アカネ：『あ、ああ……。わかったよ。私はド派手な赤い下着だよ』

コウ …『そうそう……。つて、違うわよ!?!?』

アカネ：『そして、コウの今日の下着はみず……。つてやめて。痛い、痛いよ?』

顔を赤くしたコウが無言でアカネのことを叩いていた。

『あ、あははっ……。えっと、話が進まないって言ったのはこのことなんだね……。』

アカネ：『はあ……。はあ……。そ、そんなことないよ。きよ、今日はまだ進んでる方かな……。』

満身創痍で息も絶え絶えになりながら、アカネは答えていた。

コウ …『はあ……。せつかく会話カードを準備したのに全て無駄にして……。もう放送時間が終わるじゃない……。』

アカネ：『よし、延長だ!』

『それじゃあ、今日の配信は終わるね。乙わふーでした』

コウ …『乙こみー』

アカネ：『ちよつと待て! まだ私は戦えるぞ!?!?』

コウ …『もう、誰と戦うのよ……。』

アカネ：『そ、それにまだ最大の問題を解決してないよ』

『えと……、最大の問題……？』

アカネ：『ああ、タグだよ！　なんでユキさんとコウだけ挨拶で私だけ名前なんだ!？』

コウ：『でも、あかねの挨拶って「やつほー」でしょ。タグに入れても誰か分からないわよ?』

アカネ：『だから、私の新しい挨拶を考えてよ!』

コウ：『でも、配信時間がね……。ユキさんの予定もあるだろうし……』

『えっと、僕は延長しても大丈夫——』

特にこの後の予定もないから問題ないかなと思ったのだが、そのタイミングでキャスコードの通知が鳴る。

何故かグループチャットの通話で、そこに複数のココネアイコンがあったが。

ピコピコピコツ……。ピコピコピコツ……。

『あつ、ココママから電話がかかってきたから、その——』

アカネ：『うん。せっかくだし、放送しながら出るといいんじゃない?』

『で、でも……。その……。いいのかな?』

コウ：『一応聞いた方がいいかもだね、延長するなら。でも、配信してることは知ってるはずだから』

アカネ：『よし、私が先輩らしく聞いてあげよう。通知をとってくれたまえ』

『えとえと、本当にいいのかな?　と、とにかく聞いてみるよ』

不安になりながらその通話をとっていた。

第2話：氷の女王と優しき妖精 #ココツララ／ポン
コツ姫の大進撃 #ヒメ姫

『《#心の抛り所 #ココツララ》コラボ解禁。ツララ先輩と歌うよ
《真心ココネ／氷水ツララ／シロルーム》』

2. 0万人が待機中 20XX／06／01 20:00に公開予
定

☒325 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

…ま、マジか!?

…つらたんが歌ってくれるのか!?

…いつもはよほどのことがないと歌ってくれないのに

…しかも、ココママと一緒に

…楽しみだ

ココネは珍しく配信前に緊張していた。

自分のコラボ相手はシロルームで一番のお気に入り登録者数を誇る氷水ツララ。

確かにココネも五万人を超え、最近になって収益化の申請も通っている。

ユキくんに比べると一歩劣るが、それでもシロルーム新人だと言うことを考えるとかなり伸びている。

ただ、これもやはりユキくんとのコラボによるところが大きい。相手がトップの人物だと考えると緊張で動きが固まってしまう。

「が、がんばらないとー」

待機画面の状態で気合いを入れるために声を上げる。

【コメント】

：あれっ？ ココママの声、聞こえた？

：もう放送開始してるのか？

：ココママのミス？

——えっ!? あっ、ミュートになってない!?

ココネからしたら珍しいミス。

急いで音量をミュートにして、気持ちを落ち着ける。

そのタイピングで、まるで測ったかの様にチャットに文字が書き込まれる。

ユキ ：「み、みんな、頑張っ……」

一期生二人とのコラボという大役を任されているユキくん。

ただでさえ人見知りで怯えがちのユキくんなのに、こんな時にまで他のみんなのことを心配してくれている。

緊張しながら打ったであろうその文字を見て、ココネは自分の緊張が解れていくのを感じた。

おそらくユキくんはみんなのアーカイブを見る。

——せっかくユキくんに励まされたのに、下手なところは見せられないよね。

両頬を叩き、気合いを入れ直すとツララから連絡が来る。

「大丈夫ですか？ 配信、できますっ？」

「まかせて下さい！ 頑張りますっ！」

「そうですか。では、よろしくお願いします」

簡潔で業務的な内容の連絡。

ただ、それでもココネの雰囲気が変わったことをツララは読み取って、小さく微笑んでいたことをココネが気づくことはなかった。

ココネ『みんな、ここぼんはー!! シロルーム三期生の真心ココネですよー。さっきは急に声が入っちゃってごめんなさいねー。緊張からミュートにし忘れちゃって』

【コメント】

・ココママー

・ココママー

《…?500 ママー》

《…?1,000 ココママー》

・ココママー

・緊張珍しい

ココネ：『ママじゃないですよー。それよりも今日はなんとこの人に来てもらいました。うん、驚きですよ。では、どうぞ。ツララ先輩』

画面にツララのアバターを表示させる。

蒼銀の長い髪をした小柄な少女。

水色の大きめのワンピースを着て、冷たいジト目を向けてくる。

ツララ：『こおりみずつらら氷水ツララ』

ココネ：『あ、あははっ……。相変わらず簡潔ですね、ツララ先輩。

そのほうがわかりやすい……。のかな? 早速ですけど、今日は歌枠…….というところで一緒に歌う枠の予定です』

ツララ：『——可愛い後輩のため』

ココネ：『せ、先輩……。ありがとうございます。ここは先輩のご厚意に存分に乘っっちゃおうと思います』

ココネは思わずツララに抱きつこうとする。

しかし、ツララは長い髪をなびかせて、サツとココネを躲していた。

ココネ：『ううう、躲されちゃいました。ユキくんなら上手くいくんですけど……。』

ツララ：『——次は歌う？ それともマシユマロ？』

ココネ：『展開が早いです……。なんか新鮮です。それにツララ先輩、クールです』

ツララ：『——そう。ありがとう』

【コメント】

：草

：草

：確かにいつも自己紹介だけで半分くらい使うからな

：つらたんはむしろいつもこのペースw

：ココママは相変わらずで草

：つらたんも相変わらずw

ツララ：『——雑談が良かった？』

ココネ：『そうですね。今回は初コラボですから、ココフレのみんなは少し戸惑っているかもしれないですね。少し雑談を入れた方が良かったかもしれません』

ツララ：『——面倒』

ココネ：『め、面倒って……。ほ、ほらっ、みんなが望んでいることですから……。』

ツララ：『——冗談』

ココネ：『あ、あははっ……。そ、そうですね』

ツララの態度に思わず苦笑を浮かべてしまう。

【コメント】

：ココママが振り回されてるw

：つらたんの不思議空間が勝ったか

：いや、雑談が長くなってきてるところを見ると互角か？

：確かにつらたんが冗談を言うなんて初めてじゃないか？

ココネ：『そ、それじゃあ、次はマシユマロを読んでもらってもいいですか？』

ツララ：『——わかった』

「ココママ、ここぼんは。他期生との初のコラボと言うことで、どんな気持ちで挑んでますか？ 緊張してますか？」

ツララ：『——私はいつも通り』

ココネ：『あははっ……、そ、そうですね。私はやっぱり少し緊張していました。音の件もいつもなら念を入れてチェックするのに、それもうっかりするくらい緊張してました。ユキくんの気持ちが変わった気がしますよ』

ツララ：『——んっ、過去形？』

ココネ：『はいっ、この放送の前にチャットでユキくんに励まされたんですよ。これはもう頑張るしかないですよね!?!』

ツララ：『——そう』

ツララの短い言葉。しかし、その口には笑みがこぼれていた。

ツララ：『——良い関係ね』

ココネ：『はいっ!』

ツララ：『——次のマシユマロ』

「ココママ、つらたん、ここばんは。最初はココママがユキくんを飼っているのかと思いましたが、今はまだ捨てられているままなのかと思ってきました。拾って帰っても良いですか？」

ツララ：『——どうぞ』

ココネ：『だ、だめですよ!? ゆ、ユキくんは誰がなんと言おうと私が飼うのですから、持って帰ったらダメです！ ツララ先輩も勝手にあげないで下さい!!』

ツララ：『——今は私とコラボ中だから』

ツララはそれだけ言うと言顔を背けていた。

【コメント】

：つらたんすねたw

：初めての後輩とのコラボだもんなw

：草

ココネ：『そ、その……、ツララ先輩にも感謝してます。今回のコラボ、歌枠を引き受けてくれて……。私、ツララ先輩の歌が好きでいつか一緒に歌いたって思ってたんですよ』

その思いを聞いて、ツララはココネの方へと顔を戻していた。

そして、いつもよりほんのりとピンクに染まった顔のまま、表情を変えずに言う。

ツララ：『——そろそろ歌う?』

ココネ：『そ、そうですね！ 喉がかれるまで、放送が続くまで歌い続けましょう!!』

ココネが笑みを浮かべながら大声を出す。

ツララ：『——帰って良い?』

ココネ：『ダーメーでーすーよー! 歌うのは約束ですー! ほらほらっ、コメントで曲のリクエストをお願いします。ツララ先輩が逃げる前に』

【コメント】

：草

：ココママ、調子取り戻してきたねw

：これはこれでいいなw

：つらたんが珍しくたくさん歌う?

：つらたんのシングル曲は?

ツララ：『——一曲は歌う。約束だから』

ココネ：『私、ツララ先輩が歌ってる姿、好きなんです。そんな大好きな先輩と一緒に歌えて嬉しいです。一曲だけなんて寂しいこと、言わないで下さいよ』

ツララ：『——そう? わかった。可愛い後輩のために歌う』

ツララは赤く染まった顔を隠す様に背けていた。ただ、その口には笑みがこぼれていたが。

【コメント】

：つらたんちよろすぎw

：直接好きって言われることはないもんな

：二期生のメンバーはあれだからなw

：直接煽られる耐性がないのかw

：一期生もあれだなw

：この絡みは三期生ならではだな

ココネ：『それじゃあ、まずは先輩のシングル曲と一緒に歌いませよ』

う。それから募集していく感じで』

ツララ：『——私、知らない歌は歌えない』

ココネ：『その時は残念だけど、違う歌に変更します。ココフレのみんな、わかったかなー？』

【コメント】

：はーい

：はーい

：はーい

：はーい

：すっかりココママにw

それからココネの綺麗な声とツララの透き通るソプラノボイスが響き、みんな静聴していた。

一曲、二曲……と歌う毎に、ココネの笑顔に釣られて、ツララの硬かった表情も次第に和らいでいった。

そして、ツララは最後に小さな声で呟いていた。

ツララ：『——楽しかった』

それを聞いたココネは満面の笑みで答える。

ココネ：『はいっ！ また一緒にやりましょう！』

この放送は終了しました。

『《#心の抛り所 #ココツララ》コラボ解禁。ツララ先輩と歌うよ
《真心ココネ／氷水ツララ／シロルーム》』

4. 5万人が視聴 0分前に公開済み

☑2. 1万 ☑14 ?共有 ≡?保存 ∴

チャンネル名：kokone | Room. 真心ココネ

チャンネル登録者数9. 1万人

◇◇◇

『#姫のご乱心 #ヒメ姫』コラボ解禁。 姫同士の優雅なゲーム《神宮寺カグラ／姫野オンプ／シロルーム》』

1. 9万人が待機中 20XX/06/01 20:00に公開予定

☒2, 189 ☒1 ?共有 ≡?保存 …

憧れのVtuberである姫野オンプとのコラボ。

三期生の中では比較的配信に慣れているカグラですら緊張してしまふ。

それも当然で今も、チャットで連絡を取り合っているのがまさしくその憧れの女性。配信画面で見るとしか叶わないと思っていた相手なのだ。

そんな人物とコラボをできる、となると慌てても仕方なかった。

カグラ：「そ、そ、その、先輩。きよ、今日はよろしくお願いします」

オンプ：「あれー？ 緊張してるのですー？」

カグラ：「あつ、はい……。やっぱり憧れの先輩を前にするとどうしても……」

オンプ：「初々しいのですねー。私も初めての頃はそんな感じでしたよー。でも、私相手に緊張しなくていいのですよー」

カグラ：「そ、そういうわけには——」

オンプ：「いつもの「なのじゃー」口調でいいのですよー？」

カグラ：「そ、そんな口調、使ってないですよ!？」

オンプ：「あはは、その調子ですよー。もうちょっと緊張を解いていくのですよー」

どうやらオンプは緊張をほぐしてくれようとしているようだった。

——そういえば私もユキに対して同じことをしてたわね。

この感覚は緊張する側になってみないとわからないものだった。むしろユキはこの感覚と毎回戦っていたのだと思わされる。そのタイミングでチャットが書き込まれる。

ユキ　：「み、みんな、頑張つて……」

自分が一番緊張しているのに、他の人を心配してくるわんこ。

「ユキにだけは負けていられないわね。このくらいのコラボ、余裕でこなさないとね」

オンプ　：「聞こえてるのですよー」

カグラ　：「えっ!? ああ、す、すみま——」

オンプ　：「いい感じなのですー。ユキくんさんに心配をかけないためにもこのコラボ、余裕で終わらせるのですよー」

安心した声をあげるオンプ。

——そうよね。先輩に気を遣って、リスナーに楽しんでもらえないなんて配信者としてダメよね。

カグラ　：「そうですね、頑張ります!」

覚悟を決めるとカグラは配信画面にミニアニメを表示する。

カグラが色んな家事を挑戦して、その上で失敗していくような、カグラとしては物申したくなる。

でも、リスナーのことを考えると、少しでも笑ってもらえる方がいいのではないかな、とそのままミニアニメとして設定していた。

【コメント】

：ついにカグラ様にもミニアニメがついた
：ポンカグ草
：これで三期生全員についたな
：収益化も無事に通ってたな
：今日も楽しみ

緊張しているはずなのに、どこか楽しみに思っている自分がいる。
小さく微笑んだ後、ミニアニメの終わりを確認してアバターを表示させる。

カグラ：『みんな、今日も来てあげたわよ。シロルーム三期生。万能
姫の神宮寺カグラよ！』

【コメント】

：ポンひめー
：ポンかぐー
：カグラ様ー

《：？1, 000 ポンひめー》

カグラ：『誰がポンよ?! 私以上にしっかりしてる三期生はいない
でしょ?』

思わずツツコんでしまうカグラ。
ただ、いつものことなので、深呼吸をして、話を続ける。

カグラ：『コホンっ、と、とりあえず今日からコラボ解禁だからね。
以前コメントで約束したオンプ先輩に来てもらったわよ』
オンプ：『はうう……、みなさん、こんばんはー。シロルーム、二期
生の姫野オンプなのですよー。同じお姫様だからお邪魔しちゃった
のですー。ポン姫ですよー』

【コメント】

：万能姫きたw

：ゲームだとポンだからある意味間違ってる？w

：自分から名乗るの草

カグラ：『今日はこのオンプ先輩と一緒にゲームをしていくわよ！
えっと、レースゲーム……ね』

オンプ：『はいー。キャラが可愛いのでしょー。亀さんとかキノコさんとか恐竜さんとかおひげさんとか』

カグラ：『オンプ先輩はやったことがあるわけね。私は初めてだから、どこまでオンプ先輩にくらいつけるか、の勝負になるわね』

オンプ：『胸を借りるつもりで思いつきくるといいですよー。返り討ちにしちゃいますからー』

自信ありげな声を出すオンプ。

かたや初心者。かたやゲーム配信をメインとする経験者。
その差は歴然とも言える。

カグラ：『それなら三回勝負で負けた方は罰ゲーム……とかはどうかしら？』

不敵な笑みを浮かべるカグラ。

どう見ても負けに行く勝負。

それでもあえて罰ゲームを付けるのには理由がある。

リスナーのみんなはその方が盛り上がってくれるから。

ただの勝負よりも遥かに盛り上がってくれるので、罰ゲームを付けない理由はなかった。

オンプ：『いいですねー。もちろんお受けするですよー。私が勝ったらそのパッドを外してもらおうですよー』

オンプの視線がカグラの胸へと向いていた。

カグラ：『ふえ!? ぱ、ぱ、パッドじゃないわよ!』

オンプ：『楽しみですねー。それじゃあ早速始めましょうか』

カグラ：『ちよつと待って。まだ話は——』

カグラの静止をものともせず、オンプはゲームを開始していた。

カグラ：『わわっ、ちよ、ちよつと待ってよ。私、やり方がまだわからな——』

オンプ：『簡単なゲームですから大丈夫ですよ。十二人のキャラでレースをして勝てば良いだけですからー。私たち以外CPUにしておくので勝てますよー』

【コメント】

：これは流石にカグラ様が負けるな

：罰ゲームwww

：でも、オンプ先輩のプレーを考えると

：……良い勝負か？

◇◇◇

三回の勝負が終わり、勝敗はあっさりとついてしまった。

オンプ：『ううう……』

涙目になりながらギュッとコントローラーを握りしめるオンプ。彼女の画面には十二位の文字がデカデカと輝いていた。

カグラ：『えつと、オンプ先輩……? も、もう一回やりましょうか』

？』

カグラの画面にはデカデカと一位の文字が輝いている。初めはさすがに慣れていなかったカグラ。

七位からスタートしていたのだが、次第に慣れてきて、二回目は四位。そして、三回目には一位になっていた。

ビギナーズラックもあったかもしれない。

しかし、それだけでは説明できないこともあった。

妨害の亀甲羅やバナナの皮にはわざとかと思うレベルで悉く引つかかっていき、池という池には落ち、見ていて可哀想になってくるレベルだった。

結果的にはまさかの一度も触つたことがないカグラの三連勝。

さすがにかわいそうに思ったカグラは、思わず声をかけていた。

オンブ『ううう……、約束は約束なんですー。なんでも罰ゲームを言つて欲しいのですー』

カグラ：『わかったわ。それじゃあ罰ゲームね』

オンブ：『も、もっとかわいいたんツをはいておけば良かったですよー。と、トレーニングに付き合うのだけは嫌なんですー。ほ、ホラーも苦手なんですー』

青ざめるオンブ。その罰ゲーム内容から誰が言ったのか容易に想像がつく。

パンツはおそらくアカネ先輩かタマキ先輩。

トレーニングはタイガ先輩。

ホラーはツララ先輩。

だいたいこの辺りの人が罰ゲームに指定してきそうだ。

男性とはおそらく罰ゲームがある様なものはしていないだろうし、コウ先輩は怖がる様な罰ゲームはしなかったのだろう。

三期生で言うなら、ユイは相手が恥ずかしがる様な罰ゲームをしてくるだろう。

ココママやユキくんはコウ先輩と同じタイプ。

カグラはむしろ罰ゲームを受けるタイプだった。

そのカグラがまさかの勝利をしてしまった。

負けるつもりでいたのだから、内容には少し困ってしまう。

【コメント】

：まさかの三連勝w

：ヒメノン、ここまでポンだったとは

：どうかカグラ様、普通に上手くないか？

：カグラ様、実はポンじゃなかったのか？

：一体どんな罰ゲームを言うのか

カグラ：『それじゃあ、罰ゲーム。また今度、別のゲームと一緒にコラボをすること！』

オンプ：『——それでいいのですかー？ 全然罰じゃないのですよー？』

カグラ：『罰よ！ だ、だって、また私に負けに来るのだからね』

オンプ：『わかったのですよー。次は私が勝てるようなソフトを持ってきますねー』

こうして、次のコラボを取り付けつつ、良い雰囲気のままカグラの放送は終わっていた。

この放送は終了しました。

『《#姫のご乱心 #ヒメ姫》コラボ解禁。 姫同士の優雅なゲーム《神宮寺カグラ／姫野オンプ／シロルム》』

3. 9万人が視聴 0分前に公開済み

☒ 1. 5万 ☒ 2 2 ? 共有 ≡ ? 保存 …

チャンネル名：k a g u r a | R o o m . 神宮寺カグラ
チャンネル登録者数 8 . 7 万人

第3話：凸撃、隣のモノマネ対決!? #猫羊

『#羊布団 #猫羊』凸撃、隣のモノマネ対決!? 《羊沢ユイ／猫ノ瀬
タマキ／シロルーム》

2. 1万人が待機中 20XX／06／01 21:00に公開予定

☑1, 290 ☑2 ?共有 ≡?保存 ∴

ユイはタマキと相談して、あえてコラボ配信のタイミングを一時間ずらしていた。

もちろん担当には事前に確認済みで、許可はもらってある。

理由は簡単で今回の配信内容にあった。

特定の誰かのものまねをして、シロルームのライバーに電話。

モノマネをしたユイたちが本物か、それとも別の人物かを当ててもらうというもの。

そのためにシロルームメンバー全員のキャスコードアイコンも集めた。

さすがに自分の名前のアカウントで通話したら、誰かバレてしまうので、そこを誤魔化すために準備したものだ。

そして、皆が放送を終えるこのタイミングで通話。

それなら流石に他人の放送は見えていないだろう、と。

そして、本人か偽物かを答えてもらい、ユイとタマキのどちらが多
く騙せるかを競いあうゲームだった。

タマキ：「絶対に負けないのにや!」

ユイ：「うにゅ、頑張つてなの。ゆいは適当にするの!」

タマキ：「とか言つて闘争心メラメラなんだにや。それともゲーム

で負けを認めるのかにや?」

ユイ : 「うにゆ? それは違うの。猫相手だと適当にやつてもぼろ勝ちしてしまうって意味なの。ゆいを本気にさせてから言うといいの」

タマキ : 「適当と言いながら、やる気満々なのにや。でも、油断していられるのも今のうちにや。七色の声を持つにやーに勝てるなら勝ってみるといいにや」

ユイ : 「うみゆ。罰ゲーム忘れてない? 負けの方は勝った方のいうことを一つ聞くの」

タマキ : 「わかってるのにや。とつても楽しみだにや」

ユイ : 「うにゆ、猫が跪いて謝ってくるのを楽しみにしてるの」

チャット画面から目を離れたユイはユキからもらった羊の着ぐるみに身を包み、気合を入れる。そして、ユイは軽く自分の声色を確かめる。

「わ、わふう……。ぼ、僕はシロルーム三期生の雪城ユキです。そ、その、今日は拾いに来てくれてありがとう……」

「ごこぼんはー、シロルーム三期生の真心ココネですー。ママじゃないですよー」

「仕方ないから来てあげたわよ。神宮寺カグラ。カグヤじゃないからね!」

同期三人の声を出してみる。

「うん、大丈夫……。でも、相手は何を考えているかわからないタマキ先輩。これだけじゃ不十分かも。本当に何を考えているか分からないもんね」

相手は二期生の裏のまとめ役、と称される人物。

一体何を考えているのか、全く読めなかった。

——わざわざ私の得意分野で勝負してくるなんて……。

ただ、ユイとしても主導権を相手に握られるつもりもない。それに、何よりもゲームで負けるわけにはいかない。

「勝つのはユイなんだから」

少し気合を入れた後、みんなの配信前に送られてきたユキくんのチャットを見る。

ユキ　：「み、みんな、頑張つて……」

いかにもユキくんの緊張が伝わってくるその言葉。

でも、同時に三期生みんなのことを心配してくれていることもよく伝わってくる。

「これはユキくんのためにも、負けられないね」

さらに覚悟を決めるとユイは配信画面にミニアニメを流し始める。



ミニアニメが終わると配信画面に二つの段ボールを表示させる。ユキくんがいつも使ってる段ボールだが、その文字が違う。

「私は誰でしょう」

そう書かれた段ボール。

それだけ画面に表示させるとユイは声を出す。ただし、それはいつものセリフではなかった。

ユイ 『わふう……、羊飼いのみなさん、こんばんは。シロルーム三期生の雪城ユキです。今日も拾いに来てくれてありがとうございます。』

【コメント】

…えっ!?! ユキくん?

…ユキくんもコラボだった?

…タイトルには書いてないな

…もしかして、前みたいにユキくんを誘拐したのか?

——あれっ? ちょっとコメント欄が酷くないかな?

思わず苦笑いを浮かべてしまうが、それを画面では見せないようにする。

タマキ:『うみゅー、コメントうるさいの』

ユイがユキくんの声で登場したからか、タマキは敢えてユイの声で登場してくる。

ただ、微妙に違う声。

少しトーンが低いし、掠れてる感じがする。

でもここがユイの放送、と言う付加価値が加わると違和感は和らいでいた。

【コメント】

…ユイちゃん、風邪でもひいた?

…早く治した方がいいよ

《…?1,000 治療費》

…いや、待て。タイトルを考えると偽物?

ユイ :『うみゅー!! ゆいは風邪なんて引いてないの! 猫は嘘をついたらダメなの!』

タマキ :『うみゅー、治療費ありがとうなの。ゆいは本物のゆいな』

ユイ :『全然違うの! みんな、猫に騙されたらダメなの!』
タマキ :『にやにや、羊にも騙されたらダメなのにや』

【コメント】

・草

・ユイちゃんは相変わらずモノマネが上手いな

・たまきさんは微妙に違うんだけど、特徴を捉えてるんだよな
・意外とわからないかもしれない

ユイ :『うみゅー、改めてシロルーム三期生の羊沢ユイなのー。開始早々疲れたので今日の配信は終わるの。お疲れなのー』

タマキ :『にやー! ちよつと待つにや! にやーの自己紹介がまだにや。にやーはシロルーム二期生の猫ノ瀬タマキなのにや。それじゃあ、お疲れ様なのにやー!』

二人で手を振って、そのまま配信画面がエンディングに切り替わる。

【コメント】

・まさかのw

・終わった? w

・ツツコミ役が不在だからw

・何もせずに終わったw

・モノマネ対決は? w

・ツツコミを……。ツツコミを呼べ!

・草

流石にこのまま配信が終わらせることはせずに、すぐに画面を元に戻す。

ユイ : 『うみゆ、ツツコンでくれないと本当に終わっちゃうの』
タマキ : 『それはそれで楽しいかな、と思ったのにや。二人でことんボケ倒すのにや!』

ユイ : 『うにゆ、それもいいの。それならツツコミは通話する相手に期待するの』

タマキ : 『それだにや! 早速通話だにや!』

ユイ : 『うみゆ、最初の相手はタマキ先輩に任せるの』

タマキ : 『んにや、それじゃあまずはこの人にや』

ピコピコピコツ……、ピコピコピコツ……。

キヤスコードの通知音が鳴り響く。

【コメント】

：一体誰にかけたんだ？

：たまきさんなら二期生か？

：ユイちゃんの枠だから三期生という可能性もあるな

：いや、黒い猫だぞ？ きつと暴走特急を召喚するはずだ

：ツツコミ役が欲しいと言っただろう？ つまり召喚するのはポン

枠だ! カグラ様だ!

：なぜポン? w

：ポンじゃツツコメないぞ!? ますますカオスに w

：むしろそれが狙いか w

：呼ばれそうなポン……、ユキくんか!?

電話相手を予想するコメントが流れていた。

つまり、タマキ先輩が呼ぶ相手は、ここで一切名前が上がっていない

い相手ということをユイは予想がついた。

ユイ : 『うみゆ、草先輩か真緒先輩?』

タマキ : 『にやにや、よくわかったのにや』

タマキが驚いた表情を見せたその瞬間に電話がつながる。

ユキヤ : 『——どうした?』

繋がったのは、ユイが予想した一人。

真緒ユキヤだった。

一期生のミステリアスな雰囲気を持った男性V t u b e r。
そのクールな声が通話先から聞こえてくる。

【コメント】

：まさかの真緒さんだw w w

：ど、どうなるんだ!?

：一番冗談が通じないタイプじゃないか?

：も、物真似をするんだよな?

ユイ : 『やつほー! ゆつきーだねー。どうしてこんなところに来たの?』

ユイは迷わずに美空アカネの真似をしていた。

あまり接点がないであろう二期生や三期生よりも一期生のまねで行った方がバレやすい分、力の差がはつきりとわかるだろう。

ユキヤ : 『……美空アカネか? いや、違うな。なんの真似だ、羊沢

ユイ。いや、それだけじゃない。三期生が簡単に俺にかけられるはずない。そうなる……猫ノ瀬タマキもいるのか?』

タマキ : 『にやにやにや!?! な、何も言う前から当てるのはずるいの

にや!』

ユキヤ:『なるほど、モノマネを当てていくゲームだったか。それはすまないな。俺はそういった類のものは苦手だ』

ユイ :『うみゆー、仕方ないの。これはどっちも引き分けなの』

タマキ:『にや、にやーの作戦が裏目に出てしまったのにや』

ユキヤ:『俺はもう用事はないな? それじゃあ、失礼するぞ』

悔しそうに口を噛み締めるタマキ。ただ、その仕草は明らかに嘘っぽい。

きつと、この結果も予想通りだったのだろう。

そんな中、ユキヤは電話を切っていた。

ユイ :『うみゆ、次はゆいが掛けるの』

タマキ:『にやにや、ユキくんかにや? そろそろ声が聞きたくなくなってきた時間なのにや?』

ユイ :『ユキくんは後からゆつくり電話するの。だから大丈夫なの。今は勝ちに行くの』

タマキ:『それは楽しみなのにや。一体どんな人物でくるのにや?』

【コメント】

: ユイちゃんならそう言いつつユキくんに平気でかけるからなあw

: 予想外のところでくるならユージ草か?

野草ユージ : 人の名前に草を生やすなー

: ユージがいて草

: 本物w

: 略してユージ草

タマキ:『ユージ草が配信見てるから別の人しかないのにや。誰を選んだのにや?』

ユイ :『うにゆ、もちろんこの人なの』

ユイは自信たっぷりに答える。
そして、自分のチャットから連絡をとる。

ココネ：『あれっ、ユイ？ どうしたの？』

普段の敬語じゃないココネが電話に出る。

【コメント】

：ココママ、同期相手だと砕けた話し方になるんだw

：何も言わずにバレてて草

：何を考えてるんだ、ユイちゃん

：草

ユイ：『私はシロルーム三期生、真心ココネですよー』

ユイは敢えてココネの声色で話し始める。

タマキならこの意図をわかってくれると信じて――。

【コメント】

：草

：草

：まさかの本人w

：絶対バレるだろw

：草

：草

ココネ：『ユイ？なんで私の真似をしてるの？もしかして配信
中？』

ユイ：『配信中ですよ。どれだけ物真似で騙せるかをしてるんで
すよ』

その二人のやりとりを見て、ピンときたタマキは二人の間に割って入る。

タマキ：『私が本当の真心ココネですよ。ほらっ、ママじゃないですよー』

ユイ：『私がシロルーム三期生のココネですよ』

ココネ：『ちよ、ちよっと、配信してるならリスナーの人が困惑しちゃいますよ!? それに私が本当の真心ココネですよ!?!』

【コメント】

：草

：混沌としてきたw

：ユイちゃん、本当にうまいなw

：たまきはまだわかるw

：ココママが必死で草

：草

ユイ：『うにゅ、これだと誰が本物かわからないの』

タマキ：『こうなったら別の人に聞きに行くしかないにやー』

ココネ：『ちよ、ちよっと待って!?! どこをどう見ても私が本物ですね!?!』

ユイ：『うにゅー、仕方ないの。こうなったら三期生のことを一番わかってるユキくん聞くしかないの』

タマキ：『にやにや、まだ向こうも配信をしているみたいだから、ちようどいいにや』

ココネ：『わ、私も参加するのですか? ゆ、ユキくん迷惑かからないかな……』

ユイ：『うみゅー、それじゃあアイコンと名前をココネに変えるの。それでグループにユキくんを——』

タマキ：『まだ配信が続いているのだったら、アカネパイセンとコウパイセンも誘わないとダメなのにな』

ココネ『えっ!? わ、私、コウ先輩と話すの、これが初めてなんですけど、こんな形になるのですか!?!』

ユイ :『うみゆ、きつと名前を覚えてもらえるの』

ココネ :『ぜ、全然良くないですよー!?!』

タマキ『んにや、それじゃあココネっちは参加なしっつと。にやーとユイっちのどっちかが本物のココネっちとユキくんに認めてもらえるわけだにや』

ユイ :『ゆいはそれで全然いいの。ユキくんを独り占めなの』

ココネ『だ、だめです!?! わ、私も参加します! ユキくんはココネと認めてもらうのは私です!』

ユイ :『仕方ないの。それじゃあ、ココママはゆいたちの正体がバレてからしか話したらダメなの。一緒に話すと流石にココママだとわかるの。だから、一番最後に話してそれで正体を当てられたらココママの勝ち、もし間違えたらユイたちの勝ちなの』

ココネ『わ、わかりました。ユキくんなら私の事をわかってくれるはずですから——』

ユイたちに負けたくない一心でつつい引き受けてしまう。途中で話せないというかなり不利な状態で——。



ライブ配信中に突然かかってきたココネからの通話。

一応アカネやコウに確認をした後、僕はその通知を取っていた。

『あの……、ココママ? 今、まだ放送中なんだけどその——』

アカネ :『パンツの色を教えてください?』

僕の言葉に割り込むようにアカネが余計なことを言ってくる。

——しかも、僕の声色を真似て……。

慌てて僕はココママに訂正を入れる。

『えと、あの、ち、違うよ？　今のはその……、あ、アカネ先輩が言ったことで——』

ココネ？・『もう、ユキくんは。そんなに私のパンツが知りたいのですか？　教えるのはユキくんだけですよ？　ちよつと待つてください。今確認しますので——』

——あ、あれっ、なんかココママがおかしい？　って、今の反応はユイだよな？　モノマネでもしてるのかな？

一瞬訳もわからずに固まってしまう。

でも、すぐに我に返るとこのままだと僕が変態だと言うことになりそうなので、反論をする。

『ち、違うよ!?!　そ、その、見なくていい……。見なくていいから!?!』

アカネ：『そうだよ。僕が見に行くから!』

『あ、アカネ先輩!?!　ぼ、僕そんなこと言わないよ!?!』

【コメント】

・アカネパイセンの暴走が始まったw

・というか、この人、自分が見たいだけだよな？　w

・草

・でも、なにげにユキくんに似てるなw

・本人がいなかったらわからないんじゃないか？　w

・ココママは何か変だな

・でも、ユキくんが絡むとこんな感じじゃないか？　w

・確かにユキくん依存症だもんな。ココママ

コウ　：『ユキくん、もう一回封印しちゃう?』

『あつ、そ、そうだね……。えいつ』

アカネに再び段ボールを被せる。

これで段ボールが二つ重なっていて、ちよつこのことでは顔が出せない様になった。

アカネ『ぐっ……。しまった。これだと出られない。段ボールに僅かに残るユキくんの残り香を嗅ぐことしかできないじゃないか!』

『か、嗅がないで下さい!! もう、僕が使つてた分は取り戻します。代わりにこつちに入っていて下さい!』

僕は段ボールを取り戻すと、コウと二人準備していた真っ黒に塗つた怪しげな段ボールにアカネを閉じ込める。

取り戻した段ボールは当然僕の方へ……。

——やっぱり段ボールがあると落ち着くね。

アカネ『うおつ、な、なんだこの段ボール……。私はこんなのを用意してないぞ!』

コウ『ええ、私とユキくんの合作よ。アカネの暴走が止まらなくなったときに使おうと思つてたのよ』

『そ、その……。できたら使わないならそれでも良いと思つてたんだけど。全くユイは……。アカネ先輩を暴走させたらダメだよ』

アカネ『くっ……。せつかく合法的にユイちゃんのパンツを聞くチャンスだったのに……』

コウ『えっ!? 今のユイちゃんだったの!』

【コメント】

…へっ!?

…今のユイちゃん!?

…ココママじゃないの!?

：ユキくん、わかってたの??

：全然気づかなかった

：アカネパイセンも気づいていただど!?

：コウさんが気づいてなかったのに

確かに声だけだとわかりにくいよね。

どちらかと言えば、話の内容だから普段から接してないとわかりにくいかも。

『アカネ先輩、わかってたんですね』

アカネ：『当然だよ？ さすがに嫌がる相手に聞くななんてそんなこと……、いつもしてるけど、でも、相手の本質を絵に落とし込む私が、明らかにココネちゃんじゃない話し方を見逃すわけがないよ』

少しだけアカネ先輩のことを感心してしまう。

だから、黒段ボールの封印を解いて、僕と同じ段ボールに入れておく。

コウ：『あ、あれっ？ これじゃあ、ボクだけ仲間はずれみたい

じゃない?』

アカネ：『ユイちゃんだとわからなかったコウが悪いよ。それじゃあ、あらためて、ユイちゃん、今日のパンツは——』

ユイ：『うみゆ……、ばれたのなら仕方ないの。ゆいの配信、モノマネ対決だったからうまく相手をだませたら勝ちだったの。敗者のゆいは当てた暴走特急の言うことを聞くの。今日のパンツは——』

ココネ??：『ちよ、ちよつと、そんなに簡単にパンツの色を教えたらダメですよー!』

別のココネが話に加わってくる。

今度は雰囲気や話の内容は本物のココママに思える。でも、声が微妙に違う……。

でも、風邪を引いてるとか、マイクが変わったとか、そういう事情で違うくらいにも思える。

——でも、そもそもココママなら最初から止めてこなかったのはおかしくないかな？ それならモノマネをしているのはユイのコラボ相手の——。

『えと……、もしかして猫ノ瀬先輩？』

第4話：勝利は誰の手に？ #あかわふこみー

タマキ：『うにゃ、上手くだませると思ったのに惜しかったのにゃ』
『さ、流石にわかるよ……。ココママの声は何度も聞いているから』

ユイ：『うみゆ、ユキくんが想像以上に強敵だったの』

悔しそうにするユイとタマキ。

一応、僕の配信画面に二人のアバターも静止画だけど表示する。

ただ、あまりにも人が多くなりすぎたので、緊張してきた僕は次第に段ボールの中に体を埋めていった。

コウ：『えつと、ボク達の方もまだ配信中だったけど、よかったのかな？』

ユイ：『うみゆ、問題を出す側と答える側の両方が見られるからきつと楽しいの』

『で、できたら事前に教えてほしかったよ……。』

ユイ：『それだとモノマネが来るとわかって身構えてしまうの。それにまだモノマネは終わってないの』

『……えっ?? で、でも、ユイのコラボって猫ノ瀬先輩だけだったよね?』

ユイ：『特別ゲストなの。どうぞなの』

ココネ：『えつと……。今更ですごく出にくいんですけど、三期生の真心ココネですよ』

ユイ：『本物のココママも連れてきたの』

につこりと微笑むユイのかけ声と共に現れたのは三人目のココネだった。

その瞬間にアカネがきつぱりという。

アカネ：『よし、偽物だ!』

コウ：『……。確かにココネちゃんならもつと早くに二人にツツコ

んでいそうだよね?』

真つ先にユイのことを言い当てたアカネとコウは偽物、という方に傾いている様だった。

確かにこのタイミングまで一切何も言わなかったのは、ココネとしては違和感がある。

事実、僕もさつきその違和感で猫ノ瀬先輩を当てている。

——でも、なんでだろう……。ココママと言われても全く違和感がない……。

猫ノ瀬先輩の場合は声色が少し違った。

ユイの場合は話す内容がおかしかった。

でも、このココネにはその違和感が全くない。

それこそ本人にしか思えないレベルだ。

——ユイがわざとらしく「本物」って言葉を付けたのも気になるかな。

今までユイは嘘を言って騙したことはない。

敢えてそう思わせる様に言うことで、相手から勘違いさせていた。

——つまり僕は……。うん。素直にユイとココママを信じたらいんだね。

につこり微笑むとアカネとコウに向けて言う。

『アカネ先輩、コウ先輩、違うよ。この人は本物のココママだよ』

タマキ：『にやにや、意見が分かれたのにや』

ココネ：『ゆ、ユキくん……』

ユイ : 『うみゆ、どうするの？ 多数決？』

アカネ : 『ユキくんがそういうなら私は全力で乗っかるよ！ この枠はユキくんの枠だ！ あえて間違つてそんな方を選ぶ。これぞ、配信者つて感じだよね？』

『えっ!? ち、ちが……』

コウ : 『はあ……、アカネはまた適当なところを言つて……。でも、ボクたち以上にココネちゃんを知ってるユキくんがいうなら間違いないね。ボクもユキくんに乗るよ』

タマキ : 『間違えたら当然、罰ゲームなのにや。それでもいいのかにや？』

アカネ : 『もちろんだよ!!』

コウ : 『ちよ、ちよつと!? またタマキもいきなりそんなことを追加をしてこないでよ。アカネも勝手に乗らない! ……ユキくん、大丈夫?』

『うん、大丈夫。むしろ、今の猫ノ瀬先輩の言葉が致命的かな。相手に猜疑心を植えつけて悩ませようとしてるんだね。僕はユイとココママの言葉を信じるだけだから……。この人は本物のココママだよ』

段ボールから少し顔を覗かせて、はつきり言う。

ココネ : 『ゆ、ユキくん……。や、やっぱりわかってくれたんですね』

ココネが声を震わせながら喜んでくれる。

【コメント】

：さすがユキくん

：この流れは絶対に偽物だと思った

：まさかの本物だった!

野草ユージ : うそつ、本物なのか!?

：驚きすぎ草

ユイ …『うみゆううう!! ま、負けたの……』
タマキ …『にやははっ、ユイっちは自信あったからにや』
『えっと……、当てることができたのはユイのおかげだよ』
ユイ …『うみゆ? ど、どうということなの??』
『だって、ユイが「本物」のココママって言ったでしょ? ここでユイが嘘をつくはずないもんね』
ココネ …『確かにユイはそんな嘘はつきませんね。わざと言葉を隠すことはあっても』

僕のいうことにココネが同意してくれる。

コウ …『なるほど、同期だからこそわかる……か。ボクとアカネみたいな感じだね』

アカネ …『えっ!? バットで一方的に殴られる関係なのか?』

コウ …『また喰らいたいのか?』

アカネ …『お菓子?』

コウ …『もちろん右ストレートよ♡』

アカネ …『死ぬよ!』

『えっと……、その……、ほ、暴力を振るい合う仲ではない……かな。僕も痛い嫌いだし……』

ユイ …『うにゅー、全力を出して負けたのは悔しいけど、でも楽しかったの。またやりたいの』

『あ、あははっ……、そ、そのときは事前に教えてよ……』

ユイ …『うみゆ、もちろん、内緒ですの』

タマキ …『それじゃあ、そろそろ罰ゲームを決めてもらう時間なのにや。今回の勝者はココネっちなのにや』

ココネ …『えっと……、今回は私というよりユキくんの勝ちに見えるますけど』

ユイ …『うみゆ、確かにユキくんはすごかったの』

タマキ …『それじゃあ、ユキくんの勝ちなのにや。はい、拍手なのにや』

【コメント】

：○○○○○○○○

《：？：○○，○○○○》

：○○○○○○○○

野草ユージ　：○○○○○○○○

：○○○○○○○○

アカネ：『あははっ、ユージが書くど燃えてるみたいだね』

アカネがコメント欄を見て爆笑していた。

確かにパチパチ……という音が火花を出して燃えている音にも聞こえる。

【コメント】

：ユージ○○○○○○○○

野草ユージ　：勝手に燃やすな

：ユージ○○○○○○○○

《：？：○○，○○○○》

『わわっ、スパチャで拍手、ありがとうございます。何が何だかわからないまま勝者になってしまいました……』

ユイ　：『うみゆ。罰ゲームの発表、よろしくなの』

『へっ!?!』

タマキ：『そうにや。勝者が敗者に罰ゲームを与えることができるのにや。今回の勝者はユキくんなのにや。好きな罰ゲームを言うといいのにや』

アカネ：『くーっ、せっかくユイちゃんとタマキのあられもない姿を見るチャンスだったのに……。はっ!? ゆ、ユキくん……。ものは相談だけど——』

コウ　：『はいはい、アカネはちよつとあっちへ行つてましようね』

アカネ：『わ、私はまだ何も言ってるな——』

アカネ先輩の声が小さくなっていく。

ココネ：『ほらっ、なんでも好きなことを言ってるよ。ユキくんがしたいこと、して欲しいことはなんですか？』

ココネが優しい言葉を掛けてくれる。

——僕がしたいこと……か。

後輩ができたらまたシロルームの雰囲気が変わるかもしれない。突発的な大人数でのコラボだったし、雰囲気にも飲まれてあたふたとしてしまったわけだけど、でも楽しかったかな……。

『また、こういう大人数でのコラボもその……してみたい……かな？ た、大変だったけど……』

ユイ：『うみゆ、ゆいに任せておくと良いの！ ユキくんとのお大人数オフコラボ、考えてみるの！』

タマキ：『にやにや、それもいいかもしれないのにや。担当の根回しは任せるにや』

『えっ!? ち、違うよ？ オフじゃないよ……？』

コウ：『なんともユキくんらしいと言うか、罰ゲームらしくないというか……』

アカネ：『よし、全員集合のサムネなら任せて！』

【コメント】

：シロルーム全員でのコラボか。

：今だと十二人か？ すごい数になるな

：ただ、オフだと配信されないのか？

野草ユージ：俺たちもちろん参加するぞ！

ココネ：『オフだと集まる場所が大変かもしれないね。集まるのは同期で、コラボは全員で……という形の方が良いかもしれないです』

コウ：『それもそうね。私たちは更に男女で分かれることになりそうだけどね』

『あつ、それなら僕は——』

ユイ：『うみゆ。もちろん、ユキくんはゆいたちと集まるの！』

ココネ：『当然ですね。ユキくんは三期生のメンバーですから』

『あうう……、そ、そうなるよね。うん、お手柔らかにお願いね……』

タマキ：『全員でやるとなると急いだ方が良いかもなのによ。今は四期生募集で担当たちも忙しくしているのによ』

『そ、そうだ、四期生……。僕たちにも後輩ができるんだよ。どんな子なんだろう。楽しみだね』

思い出した様に言うとココネがすねた口調で言ってくる。

ココネ：『ユキくんは三期生なんですからね』

『えっ？。もちろんそうだけど……？』

ココネ：『あんまり四期生の子に浮気したらダメですからね』

『浮気!?。し、しないよ、そんなこと……』

ユイ：『うみゆ、そうなの。ユキくんはちゃんと次にゆいとコラボをしてくれる良い子なの』

『えっ?!?!。は、初耳だよ!?!』

ユイ：『今言ったの。約束なの』

『わ、わかったよ……。えと……。真緒さんたちとのコラボの前ならできかな……』

ココネ：『あーっ、わ、私もコラボを……』

『えとえと……。あつ、ご、ごめん。ユイのを入れたら次は少し先になるかも……。さ、再来週で良いかな?』

ココネ：『ううう……。わかりました。それをお願いします』

ユイ　：『うみゆ、早い者勝ちなの。ブイツ！』
アカネ：『なら私も——』
コウ　：『はいはい、ボクがコラボしてあげるから我慢してね』

【コメント】

：大人気ユキくん w
：コラボだらけ w
：ユキくんも成長したね。あれだけコラボ嫌がってたのに
：同期だと慣れたのかな

コウ　：『ユキくん、そろそろ時間が——』

『あつ、そ、そうだね。それじゃあ、最後にみんな挨拶と報告が何かあつたらどうぞ』

アカネ：『次こそはみんなが聞きたいエチエチな情報を聞き出すから楽しみにしててね。あと、私のタグはユキくんに任せたい！』

『えっ!? き、聞いてな——』

コウ　：『ボクはその情報を聞き出そうとするのを全力で阻止するよ！ でも、今日はユキくんとのコラボ、新鮮で楽しかったよ。真面目な後輩くんもいいね』

アカネ：『こ、コウは渡さないよー！』

ユイ　：『うみゆー、勝負に負けたけど、ユキくんとのコラボできることになったからチャラなの』

タマキ：『にやにや、全員コラボ、楽しみだにや。次はどんな罠を仕掛けるかにやー』

ココネ：『なんかものすごく振り回された気がしますけど、たまにはこういうのも良いかもしれませんね』

『あの、アカネ先輩。僕、タグのことは全く聞いてな——』

この放送は終了しました。

『《#犬拾いました #あかわふこみー》コラボ解禁。雑談枠 《雪城ユキ／美空アカネ／海星コウ／シロルーム》』

6. 3万人が視聴 0分前に配信済み

☒3. 1万 ☒47 ?共有 ≡?保存 …

チャンネル名: Yuki Room. 雪城ユキ

チャンネル登録者数17. 0万人

◇◇◇

【コメント】

: 相変わらずのユキくんだったw

: おっーw

: お疲れ様

: タグ押しつけられてて草

: お疲れー

◇◇◇

配信後、僕はアカネのタグに頭を悩ませていた。

相手は先輩。

下手なもののはつけられない、と考えると僕一人では荷が重かった。

——ううん、動画のネタをもらった、と考えればいいのかな？

そんなタイミングで送られてくるコウからのグループチャット。

コウ :「ユキくん、大丈夫？ アカネのタグは適当に「あかー」とかでもいいからね」

アカネ :「それ、適当すぎない!？」

コウ :「つまり、そこまで悩まなくていいってことよ。ユキくんは思い込むタイプでしょ？」

アカネ :「よし、それなら今日からみんな、挨拶は「あかー」だ！」

コウ :「……アカネ一人でやってよ。そういうわけだから、同期の子につける感じで大丈夫だよ」

コウは僕に気を遣って、こんなメッセージをくれていた。ただ、それでも僕自身が納得できるものを渡したい……と色々と案を出して消してを繰り返していると、いつの間にか朝になっていた。窓から見える眩しい朝日を見て眉をひそめていた。

——なんで太陽っていらないうちに限って登ってくるのかな。

部屋には紙が周りに散らかっている。

そこまでして、ようやく候補を絞ることができた。

「ソラー」

「キラッ」

「シユタッ」

——うん、我ながらボキャブラリーのなさに驚く。

「って、も、もう大学に行く時間だよ!?!」

時計を見ると既に走って行かないと間に合わない時間。

——今の僕の格好……、ココママに買ってもらった服だ。

昨日の配信はすごく緊張していたので、三期生のみんながくれたものを手元に置いて勇気をもらっていた。

ココママが買ってくれたユキくんに近い服。

なぜか服装のことを話したあと、ユイが押しつける様に渡してきた犬の足跡を模した腕時計。

カグラさんからもらった巨大骨クッション。

骨クッションは今、ユキくん段ボールの中に入っている。

配信中は段ボールを側に置いて、ギョツと骨クッションを抱きしめながら配信をしている。

恥ずかしいときとかはそれに顔を埋められるし、たまにしてしまう寝落ちもクッションがあれば安心だった。

そして、腕にしている腕時計。なぜか女性用なのは犬にちなんだ男性ものが見つけられなかったのだろう。

腕まで気にする人はいないし、これは普段から愛用していた。

ココママの服はやっぱり黒のレギンス、白のワンピース、黄色い犬耳パーカー、の組み合わせが一番落ち着くので、みんなの力を借りたときはこの格好でいたのだ。

——部屋の中だから、問題ないよね……。そ、外に出るわけじゃないし……。

そう言い聞かせて着ていたのだが、今はもう家を出ないと遅刻をしてしまう。

着替えている時間は——。

「ううう……。悩んでる暇はないよね？　ち、遅刻よりはマシかな……。」

ろくに寝ていない、思考が停止した頭で下した結論はそのまま大学に行く……。というものだった。

慌てて鞆を持つと、僕はそのまま部屋を飛び出す。



まずは駅に向かって、必死に走って行く。

時間はギリギリ。でも、休まずに走れば間に合うはず……。

今まで運動してこなかったことが悔やまれる。

すぐに僕の息は上がってしまった、呼吸を荒くしながらも気力で駅へと向かっていた。

——全ては遅刻を免れるために……。

駅に着くと、呼吸を落ち着けながら電車の時間を確認しているタイミングで、突然声をかけられる。

「すみません……、少し良いですか？」

突然声をかけられたことに驚きつつ、そちらに振り替えると、そこには長い銀髪の小柄な少女がいた。

僕よりも少し小さな少女。

頭には赤のキャスケットを被り、白のワンピースを着ており、幼い顔立ちもあって、数歳年下のようにも見える。

でも、僕自身がよく言われていることなので、相手が年上のつもりで接する。

「あっ……、はい。えっと……、その……、どうしました？」

「この場所に行きたいのですが、場所がわからなくて……。どの電車に乗ったらいいかわかりますか？」

彼女が見せてきた手紙には見知った名前が書かれていた。

【シロルム】

直接足を運んだことはないものの、やはり自分が所属する企業。その場所等はしっかり調べてあるし、行き方ももちろんわかる。でも、気になるのがその手紙に書かれていた先の言葉だった。

【シロルーム四期生、一次試験合格。二次試験のご案内】

どうやらこの子はシロルームの面接へ向かう様だ。

——もしかすると僕の後輩になるかもしれない子……。さすがに無碍にはできないよね？

「あつ……」

少女と話しているうちに、乗る予定の電車が出発してしまう。

——つまり、今から向かっても遅刻……。

今日の講義もそれ一つだったので、大学へ行く理由がなくなってしまう。まった。

「その……よかったら案内しようか？ 僕の予定もなくなったから……」

「えっ!? いいのですか？ で、でも、そこまでしてもらったら悪いですよ……」

「大丈夫、僕もシロルームには少し用事があるから——」

——せっかく行くのだから担当さんにでも挨拶していいのかな。

そんな軽い気持ちで提案してしまった。

今までの僕だと自分からそんなことを言うなんて考えられないのだが、少しずつ配信をすることで僕も成長しているのだろう……。

「ありがとうございます。本当に助かります。あつ、私、七瀬ななせ奈々ななつて
いいいます」

「僕は小幡こはた祐季ゆうきです。それにしても君、シロルームの面接を受けるん
だね」

「そうなんですよ。やっぱりシロルームのV t u b e r って憧れます
よね」

「えと……、そ、そうだね……」

目を輝かせて言ってくる七瀬。

流石に自分がそのシロルームに所属しているとは言えずに、苦笑を
浮かべてしまう。

「特に三期生！ ユキくんが私の推しなんですよ。見てて癒やされる
し、どこか応援したくなるんですよ」

目の前でユキほくんについて熱く語る七瀬。

流石にそれを聞いていると恥ずかしくなってくる。

「と、とりあえず急いだ方が良いんだよね？ い、行こうか？」

「はいっ！ よろしくお願いしますー！」

第5話：七瀬奈々と夏瀬なな

「そういうえば、どうして僕に声をかけてきたの？ 駅だと色んな人がいたよね？ 駅員さんとかもいたし……」

「そ、その……やっぱり大人に声をかけるのは怖くて。私の事を知ってる人がいるかもしれせんし。そ、それとお姉さんは話しやすそうでしたから」

——まあ、僕も知らない人に声をかけるのは怖いし、同じことだね。お姉さんじゃないけど。

「えつと、ぼくはお姉さんじゃ——」

「あつ、えつ?? もしかして年下ですか?? その、私十八歳なんですけど」

「僕は十九……って、そういうことじゃなくて——」

「あははっ、やっぱりお姉さんじゃないですかー」

「そ、その……、僕は男……だよ?」

「えっ!? あつ……、そうなんです。おにーさんだったんですね」

意外とすんなり納得してもらえる。

そこに僕は少しだけ違和感を覚えてしまった。

「でも、やっぱり私からしたらお姉さんです。お姉さんって呼んで良いですか?」

「そ、それなら僕の名前で呼んでよ。小幡でも祐季でもどっちでもいいから——」

「祐季姉様……」

上目遣いでぽつりと呟く。

その姿を見ていると思わず僕も頬が染まってしまう。

「姉様はいらないから……。ゆ、祐季だけでいいよ」
「ダメなのですか？ 残念です……」

露骨に落ち込んでくる七瀬。

「あつ、だ、ダメってわけじゃなくて、その……。僕は男だから、お姉さんって呼ばれるのは恥ずかしいって言うか、なんというか……」
「あははっ、わかってますよ。今は小幡さんって呼ばせてもらいますね」

「うん、そうしてくれると嬉しいな。……今は??」

「はい。それじゃあ、シロルームまでよろしくお願いします」

どこか引つかかったが、シロルームの最寄り駅に着いたので、そこで話は途切れてしまった。

◇◇◇

シロルーム本社はオフィスビルだった。

入り口にはガードマンが立ち、中はスーツを着た人たちが行き交っていた。

それを見上げる僕と七瀬。

見た目はシロルームに興味を持っている少女にしか見えないう。う。

「ここがシロルーム……。なんですネ」

「そうみたい。僕も直接来たのは初めてだけど、広いね……」

本来なら中に入るのも躊躇ってしまうような場所。

でも、僕たちは関係者なのだから入っても問題ないはず。

そう思っていたのだが――。

「ここは小学生が遊ぶ場所じゃないですよ。危ないですから」

入り口のガードマンによって止められてしまう。

ただ、背が低い見た目少女にしか見えない二人が中に入ろうとしているのだから、当然と言えば当然だった。

「えつと、僕はその……小学生じゃ……」

「そ、そうですね！ 私たちは別に小学生なんかじゃありませんよ！」

「中学生でしたか。それは申し訳ありません」

「ちゅ、中学生でもないですよ!? ぼ、僕は大学生ですよ!」

「だ、大学生!? あつ、も、もしかして小幡祐季さんですか?」

何故かガードマンの人に名前を言い当てられてしまう。

「えつ、ど、どうして……?」

「見た目中学生くらいにしか見えない子は小幡祐季さんで、関係者だからもし来られたら通すように、と仰せつかっております」

「こ、小幡さんって一体何者なんですか?」

七瀬から驚きの目を向けられる。

——母さんが担当さんの仕業だろう……。もつと別の言い方があ
るでしょ……。

僕は苦笑を浮かべてしまう。

「ぼ、僕はただの大学生だよ……。と、とにかく僕たちは通らせてもら
いますね」

「は、はい。お止めして申し訳ありませんでした」

やたら恭しく頭を下げてくる警備員に見送られて、僕たちはシロ
ルーム本社の中へと入っていった。

◇◇◇

本社に来たのはいいけど、そこで僕は固まってしまふ。

周りを見ても知らない人だらけ。

後ろには僕の後輩……になるかもしれない子。

流石に何も知りません……とは言えない。

——こ、こういう時は担当さんを呼べばどうにかしてくれるよね？

とりあえず真っ直ぐ受付へと向かっていった。

「シロルームへようこそ。どのようなご用件でしょうか？」

「えっと、たんと……じゃなかった。ゆきりまい湯切舞さんを呼んでいただけ
ませんか？」

「かしこまりました。では、お名前をお聞きしてもよろしいでしょう
か？」

「そ、その……、小幡祐季……です」

「では、少々お待ちください」

受付の女性が内線で話をしてくれている間、七瀬が小声で聞いてく
る。

「湯切舞さんって？」

「えと……、なんていうのかな。僕の知り合い……でいいのかな？」

流石にシロルーム三期生の担当さん……とは言えないもんね。

そんなことを思っていると、内線での話が終わったようだった。

「確認できました。上の部屋に来て欲しい、とのことでしたのでエレベーターで四階へと行っていただけですか？」
「かしこまりました」

言われた通りに四階へと向かう。

ただ、エレベーターを降りた瞬間にシロルームのアバターたちに出迎えられる。

そこで動きが固まってしまう。

「あつ……、ポップか……」

エレベーターホールに置かれていたのは等身大ポップだった。

まず最初に元気に笑顔でピースをした美空アカネと優しそうに微笑む海星コウ、ジト目を見せる氷水ツララと段ボールから涙目で顔を覗かせる雪城ユキのポップが目立つ場所に置かれていた。

「つて、僕!?!」

「えっ??」

「あつ、ううん、なんでもないよ……」

——そうだった……。驚きすぎてうっかりしてたけど、隣に七瀬がいるんだった。

その七瀬は僕のポップを前にして目を輝かせていた。

「……すごいですね、この等身大ユキくんポップ。持って帰りた……」

「え?!?!」

「あつ、ち、違いますよ!?! ただ私の部屋に飾って、一日中眺めていただけですよ!?!」

——それでも十分危ない気がするんだけど……？

少し七瀬から距離を開けてしまう。

ただ、七瀬はユキくんほくのファンらしいから、そういったグッズみたいなものは欲しいのかもしれない。

まだユキくんグッズは発売していないから。

他のシロルームメンバーのことを考えるとすでに作り始めてるんだろうな、とは思うけど。

——流石に僕は自分のポップはいらないかな。

とか、そんなことを考えていると担当さんがホールにやって来る。

「ここにいたんですね、ユキくん。なかなか来ないので、誰かに拾われたのかと心配しちゃいました。って、そっちの方は？」

「えっと、この子は七瀬——」

「ああ、夏瀬ななさんですね。なかなか来ないと思ったらユキくんと一緒にいたのですね。はじめまして、シロルーム三期生担当の湯切舞といいます。よろしくお願いします」

「さ、三期生の担当……?! あっ、は、はじめまして。夏瀬ななの名前で配信させてもらってます七瀬奈々です。よろしくお願いします」

一瞬困惑する七瀬だが、すぐに頭を下げて挨拶をしていた。

「あれっ？ なっ……せ？」

さつき聞いた名前と違うような……？

不思議に思った僕は、七瀬の方に向く。

「えっと、驚かせちゃいましたか？」

「えっと、名前がいくつもあるの？」

「ち、違いますよー。私の配信者としての名前です。聞いたことないですか？ 夏瀬なな。ちよつとは名前が知られてきてると思ったのですけど」

「ご、ごめんね。僕、そこまで詳しくなくて……」

「いえ、私がまだまだなんですよ。もっと頑張らないと！」

七瀬はギョツと両手を握りしめて気合を入れていた。

「うん、そうだね。あつ、面接、頑張ってね」

「そうですね。すぐにでも面接を始めたいのですけど大丈夫ですか？」

「もちろん大丈夫です！」

「あつ、面接官は小幡会長になるのですけど、ユキくんも会って行きませんか？」

「ぼ、僕は帰ろうかな……」

回れ右をしてエレベーターの方へ行こうとしたときに、後ろから抱きつかれる。

「どうして帰っちゃうのよ、ゆうくん！ ママがこんなに会いたがってるのにー」

「こういうところだよ!? と、とにかく離れてよ！ 七瀬さんが見てるんだから」

慌てて離れると母さんは目をキョトンとさせている七瀬をじつくり見ている。

「へえ……、ゆうくんはこういう子が好きなんだ……。てつきりココネちゃんやユイちゃんのが好きなんだと思ったよ」

「ちよ、ちよつと、母さん!? 別に七瀬さんはそういう仲じゃないよ!?

困ってたからシロルームに案内してあげただけだから……」
「……？　えっと、そちらの方は？」

母さんの対応に困惑する七瀬。
すると、冷静に担当さんが答えてくれる。

「こちらはシロルームの会ちよ——」

「ゆーくんママだよ！　よろしくね」

担当さんの言葉を遮る母さん。

僕に抱きつく手でブイの文字を作りながら七瀬に話しかけていた。

「ぼ、僕はもういいよね？　母さんにも会ったことだし、あとはたんと……舞さんと少しだけ話をしてから帰るよ」

「そうですね。私の方も今後の予定を確認しておきたかったので、ちようどよかったです」

「えと……、本当に小幡くんって何者なの？」

「ぼ、僕は普通の大学生だよ……」

「もう、普通じゃないでしょ！　とおーつても可愛い大学生だよ。今日もユキくんみたいな格好をして……。あつ、ユキくんといえば、どうかな、この等身大ユキくん、いいでしょ」

「うん、ゴミ箱にでも捨てておくね」

「だ、ダメですよ!?　捨てるなら私がもらいます」

僕と母さんを割って入るように七瀬が言ってくる。

「えっ？」

「あつ、七瀬ちゃんはユキくんファンなの？」

「あつ、は、はい……。そ、その……」

七瀬は顔を染めて俯けていた。

その反応はまるで恋をする乙女のように、全てを理解した母さんは僕の顔を見て、ニヤリと微笑んでいた。

「じ、実はその……、ユキくんがいたから私は配信を続けて来れたんです。それで、四期生に応募したことを伝えたらユキくんが色々教えてくれるって……、その、約束してくれて——」

「へえー、ユキくんがそんな約束をしてくれたんだ……」

母さんがジト目で僕のことを見てくる。

——えっ？ そんな約束、してないけど？

僕は首を傾げていた。

「あつ、でもでも、配信中のやりとりですから、その……たくさんコメントの一つだと覚えていないかも——」

「大丈夫、配信中の約束でもユキくんは約束を守ってくれるよ。ねっ、ゆーくんもそう思うよね？」

「えっ？ あ、うん。そ、そうだね。約束したならユキくんは守ってくれる……よっ……」

「はいっ！ そう信じて私は合格を目指します！」

につこりと微笑む七瀬に迷いはなさそうだった。

——でも、どうしよう……。僕がその雪城ユキだとバレると幻滅しないかな。このままこっそり隠れて帰ってもいいかな。

身を縮こめて、エレベーターの中へ乗り込もうとするが、それがバレて母さんに捕まってしまう。

「そっか……。うんうん、そこまでやる気なら問題なさそうだね。V
tuberは皮も大事だけど、シロルームでは中の人間を特に重視し
てるの。見た目で最初に人を集めることができても、結局長期的な人
気はその人の内面によるところが大きいからね。それは七瀬ちゃん
もよくわかってるよね？」

必死に逃げようと手足をばたつかせる僕。

しかし、全く逃がせてもらえない。

そんな僕をよそに七瀬は一度頷いていた。

「さすがお気に入り登録者数二十万の人気MeTubeだね。で
も、一人でやってきたってことはただ、楽しいだけじゃなかったんだ
よね？ 苦しいことも辛いこともたくさんあったんだよね？ だか
らこそこのシロルームに応募したんじゃないかな？」

母さんの鋭い視線が七瀬へと向く。

ただ、僕は別の意味で驚いていた。

——えっ、チャンネル登録者数二十万!? ぼ、僕より多いんだけど。

ぽっかりと口を開けて呆けていた僕をよそに、七瀬は震える声で聞
く。

「わ、わかるの……ですか？ ただリスナーのためだけに動画を作る。
そこに自分はいない。本当の自分がどこにいてるのかって虚無感が
……」

「もちろんだよ。だからこそみんな幸せに——。それがシロルームの
企業理念だよ。リスナーだけじゃない。ライバーも幸せに……楽し
まないよね。困った時に助け合える仲間たちがいる。こんなに素晴
らしいことはないよね？ これはゆーくんが一番わかるかな？」

突然話を振られて一瞬呆けてしまうが、大事な話をしているので僕も真面目に答える。

「ふえっ? ……あつ、うん、そうだね。今の僕がいるのも助け合える仲間たちのおかげだから……。みんなには感謝してもらいたくないよ」

につこり微笑む母さんに七瀬は思わず涙を流していた。

「ぐすつ……。い、色々教えてくれてありがとうございます。やつぱり私がここを目指して間違いなかったです。なんとか合格できる様に頑張ります」

「うんうん、七瀬ちゃんもいい子だね。あつ、でも、合格の努力はもういらなかな?」

「えっ? ど、どういうことですか!? まさか不合格——」

「か、母さん!? ど、どういうこと!?

「元々七瀬ちゃんの実績は十分だからね。それに今の応答で七瀬ちゃんの為人はわかつたよ。シロルム四期生、大変なこともあるだろうけど頑張つてね。舞ちゃん、七瀬ちゃんのアバターの準備、よろしくね」

母さんは優しい笑みを浮かべる。僕を抱きしめたまま——。

すると、七瀬は深々と頭を下げていた。

「あつ、は、はいっ! ありがとうございます」

「えっと、あの……母さん。そろそろ離してくれないかな?」

「そうだったね。ゆうくん、もう逃げ場はないよ。ちゃんと約束を果たしてあげてね」

「ううう……。わかっててやってたよね? もしかして、僕を苦しめて楽しんでる?」

「そんなことないよ。ゆうくんを慕って凄いい子が来てくれたんだよ。

これを喜ばない親なんていないよ」

まっすぐに言われるとどこか恥ずかしく思えてくる。

確かに七瀬は僕がいたからこそシロルームへと来てくれた。

これは誇るべきことであって、恥ずかしがる様なことではないだろう。

「そういえば小幡さんがやたらシロルームで名前を知られていたのは、お母さんが会長だったからなんですね」

「あつ、違うよ？ 元々ゆうくんは知らなかったからね。ゆうくんは正真正銘シロルームの関係者だよ。えっと、ゆうくん、どうする？ ママから言おうか？」

本当は黙っていたかったのだが、もう四期生として合格してしまったのなら隠し通すこともできない。

確かに本格的に活動するのはまだ先だが、それでも色々教えてあげる約束もしてる。

思わず僕はため息を吐く。

「大丈夫、自分で言えるよ。僕の後輩になるわけだもんね。すーはー……」

どうしても緊張はしてしまう。

大きく深呼吸をして気持ちを落ち着け、覚悟を決めると僕は母さんの手から脱出を図る。

そして、失敗する。

逃げられない様に固く掴まれる。

「ちよ、ちよつと、母さん!? いつまで僕を掴んでるの!?!」

「もちろんゆーくん成分を吸収し終えるまでよ」

「もう、大事な話をするときくらい離してよ!」

「ダメよ。だつてゆーくん、逃げるでしょ? 今も逃げようとしたし……」

「そ、そ、そんなことないよ。た、たまにしか逃げないから……」

——うん、逃げることの方が多いかな。だから、母さんはしっかり捕まえていたんだ……。

「わ、わかったよ。ちゃんと言うからもう大丈夫……」

「えつと、どういうこと……ですか?」

七瀬が困惑気味に聞いてくる。

「その……、つまり、僕がその……」

どうしてもリアルで言うとなると緊張してしまう。

それでも相手は僕の後輩。頑張らないと。

「ぼ、僕がシロルーム三期生の雪城ゆきゆ……」

……………。

ここ一番の大切なところで思いつきり噛んでしまった。その恥ずかしさから顔が真っ赤に染まっていくのを感じた。

「………帰る」

「ま、ま、待つてください! 小幡さんがユキくん様!」

「ちよ、ちよつと待つて!?! 何その呼び方!?! さっきまで普通にユキくんって呼んでたよね!?!」

「わ、私だつて分をわきまえていますから。でも、突然目の前に憧れの存

在が現れたら混乱しますよね!? だって、私にとっては救世主様でもあるんですよ?」

目を輝かせながら尊敬の眼差しを向けてくる七瀬。

「きゅ、救世主?!?!? ぼ、僕は何もしてないよ。ほ、ほらっ、普通に呼んでいいから」

「わ、わかりました。それが他ならぬユキくん様の頼みなら涙を飲んで、ユキくん……と呼ばせていただきます。ユキくんの前では——」

わざとらしい泣き真似をしてくる。

「ぼ、僕がいない時には「様」付けで呼ぶんでしょ!? そうなんだよね!?」

「それは私の配信を見て調べてくださいね」

ちよろつと舌を出して、いたずらっぽく言う。

その姿からもさつきのはやっぱ泣き真似だったんだとわかる。

「ぼ、僕よりも七瀬さんの方がすごいからね!? 僕から教えることなんて何も無いよね?」

「そ、そんなことないですよ!? 私もV t u b e r になったことはありませんから、その……」

「そ、それもそうか……。うん、約束したもんね。僕でよかったら聞いてね」

「はい、ありがとうございます。それじゃあ、連絡先を交換しましょう!」

僕たちはスマホでキャスコードやM I N Eの連絡先を交換しあつた。

「うんうん、青春だね。これでゆーくんにも春が訪れ——」

「えっ、あつ、そ、その、私に春だなんてそんな……。流石に中の人の恋愛は企業系V t u b e rだと御法度。……あれっ、異性じゃないならいいのかな？」

「えっと、僕は男だよ？ さつきも言ったと思うけど」

「ええ、ちゃんと聞きましたよ。ユキくんも男だって——」

「えっ!?! 僕も？ ま、まさか——」

困惑する僕に対して、担当さんが説明してくれる。

「はい……。七瀬さんもユキくんと同じ……。ですよ」

「そっか……。ゆーくんに訪れたのは春じゃなくて、同性の友達……。だったんだね。うんうん、ママはどっちでも歓迎するよ。だって、二人とも可愛いからね」

母さんが嬉しそうに笑みをこぼしていたが、僕は困惑のあまり動きが固まっていた。

第6話：タグ決めるよー #犬拾いました

ついに僕のMINEに四人目が追加された。

四期生の七瀬奈々。

僕よりも小柄な少女……だと思っていたのだが、実は同性の後輩。

なぜか僕のことを神の如く崇拜していることと、見た目がどう見ても可愛らしい少女……、ということを除いたら今まで得ることができなかった男の友達だった。

しかも、僕と似た……少女っぽい見た目をしていることで、悩みを共感してもらえるかもしれない。

例えば、ココママたちに女性ものの服を着させられることとか――。

「あれっ？ でもよく考えると七瀬ってワンピースを着てたよね？」

――もしかすると七瀬にとっては女性服は抵抗のある物ではない……ということ？ いやいや、そのことで相談に乗ってもらえなくても、頼れる味方であることには違いないよね。

それを考えると今まで感じていた重圧が少し軽くなった気がした。ココネたちも確かに仲間だけど、異性であると言うことを考えると、どうしても一歩引いてしまう。

でも、七瀬の場合はそんなことを考える必要がない。

「あつ、そろそろ配信の準備をしないと……」

今日はソロでのライブ配信日。

明日はユイとのコラボであることを考えると、そこまで長時間の配

信はできない。

「うーん、犬好きさんたちと一緒にアカネ先輩のタグを考えればいいよね」

◇◇◇

『#犬拾いました』タグ決めるよー『雪城ユキ／シロルーム三期生』
1. 2万人が待機中 20XX/06/02 20:00に公開予定

☒473 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：はじまった

：こんばんはー

：タグ決めw

：昨日言われたやつかw

：暴走以外に思いつかない

今回はミニアニメを短めにさつとアバターを表示させる。

『わ、わふうー……。犬好きのみなさん、こんばんはー。雪城ユキです。今日も拾いに来てくださってありがとうございます。今日はあまり時間が取れませんが、その……。ゆっくりしてってください』
いつもならさつと段ボールに顔を隠すところだけど、今日は顔を軽く覗かせたままにする。

【コメント】

…あれっ？

…今日は隠れないの？

…ユキくん必死w

《…?1, 000 餌代》

…ユキくん拾いたい

『え、餌代!? ぼ、僕、ちゃんとご飯食べてるから安心して。で、でも、ありがとうございます。そ、それじゃあ、早速本題に入っていきたいと思えます! その…、明日はユイとのコラボだし、準備もあつて長い時間の配信ができないから…』

僕はサツと考えていた三つのタグを表示させる。

「ソラー」

「キラツ」

「シユタツ」

でもここから選んでもらうより一から考えた方がいいかもしれない、と思った僕は慌ててさっきの表示を消す。

『えとえと、今のはその…見なかったことに…してくれる?』

顔を赤くして段ボールに隠れながら言う。

【コメント】

…ソラー、任せて!

…シユタツ、忘れた

…キラツ、何も見てない

…→お前たちw

…草

『あわわわっ、そ、その、僕も昨日一晩考えてたんだけど、全然思いつかなくて…。朝からさつきまでは少し出掛けてたから、せつかくだし大好きさんたちにも意見をもらえたら嬉しいなっ…』

段ボールから再び顔を覗かせる。
上目遣いで、お願いするように……。

【コメント】

：いつそ、全部渡してみるのはどうかな？

《さすらいの犬好き：う？50,000 出遅れた。詫び代》

：暴走特急ならアカーとかでも良さそうだな

：前のタグ、アカだったw

：というかいつも赤だよなwww

羊沢ユイ　：うみゆ、サボりさんだ

『わわっ、な……、違う。さすらいの犬好きさん、そ、そんなに投げなくていいんだからね。僕に詫びる必要なんかないよ。それに配信も始まったところだからね』

動揺してうつかり七瀬と言いかけてしまう。

それをなんとか踏みとどまる。

『あ、あと、ユイ。今日はサボりじゃなくて、その……、色々と用事があつてシロルームに行つてたんだよ……』

【コメント】

羊沢ユイ　：うみゆ、あとからじっくり聞かせてもらうの。コラボの打ち合わせしながら

真心ココネ　：私も聞きたいですね

さすらいの犬好き　：大丈夫だ、問題ない

：混沌としてきたなw

：本題を忘れてないか？

コメントにココネまで参加してしまう。

とういか、みんな僕のライブ配信によく顔を見せるけど、自分の配信は大丈夫なのかな？

ふとそんなことを思い、みんなのMe eTubeチャンネルを見ている。

『ええ!?!』

そこで見たライブ配信のタイトルを見て、思わず声を上げてしま
う。

『《#心の拠り所 #ココユイ》ユキくんのライブ同時視聴しましょう

《真心ココネ／羊沢ユイ／シロルーム三期生》』

1. 2万人が視聴中 ライブ配信中

☒541 ☒2 ?共有 ≡?保存 ∴

『ちよ、ちよつと待って!?! どうしてココママたちがコラボで同時視
聴枠を取ってるの!?!』

【コメント】

∴ユキくんが同時視聴に気づいたw

∴草

羊沢ユイ ∴うにゅ、ユキくんの声を聞かないと元気でないの

真心ココネ ∴気づかれちゃいましたねw

『ううう……、もう二人は』

——後からチャットで文句を言っておこう。

『あれっ? それでなんの話をしてたかな?』

【コメント】

：w

：ユキくん草

真心ココネ　：タグの話だよ

羊沢ユイ　：うみゆ、明日のコラボの話と次のゆいとのコラボの話なの

『ゆ、ユイのは……違うよね？　タグ……。うん、タグの話だね。……どうしよう？　コウ先輩は適当に渡してくれたらいいって言ってたけど、普通に使ってもらえるタグにしたいし……』

その割に僕が考えたのはあまりいいもの……とはいえない。

——アカネ先輩で思いつくこと……、段ボール??

『そうだった……。アカネ先輩はかなり段ボールを調べてたって言ったね？　僕も段ボールに入ってるし、その……「段ボール研究会」とかはどうかかな?』

【コメント】

：段ボールww

：さっきのよりはタグらしいかも

美空アカネ　：それだ!!

：本人いて草

羊沢ユイ　：ゆいもユキくん段ボールに入るの。二人でぬくぬくなの

海星コウ　：それだとボクは関係さなそうだけどねw

美空アカネ　：ならコウは脱会だな。

真心ココネ　：むしろユキくんのメンバーシップの名前にいいかも。

海星コウ　：確かにボクたちのタグというよりはメンバーシップだね

メンバーシップ。

月額料金を支払いメンバーに加入すると、さまざまな特典がある。

シロルームの場合だと、加入者限定の絵文字や限定公開の配信等だった。

そして、僕もすでにメンバーシップの許可は降りている。絵文字も段ボールメインに色々用意してもらっていた。

後は名前を決めるだけだったが、まさか今決まるとは思わなかった。

『えつと……、そ、それじゃあ「段ボール研究会」は僕のメンバーシップの名前に使わせていただきます。特典はいくつか用意してますので、また折を見て募集します。えとえと……、シロルームだと月々七百円になるのかな？ む、無理しない程度にメンバー加入してくれると嬉しいよ。せっかく始めたのに0人だと僕、泣いちゃいそうだから――』

【コメント】

《：？700 メンバーになります》

《：？700 加入します》

《真心ココネ :?700 加入しますね》

《羊沢ユイ :?700 うみゆ、当然!》

《美空アカネ :?7,000 私のメンバー力は10だ!》

さすらいの犬好き:くつ、もう投げられないせいでメンバーになれない。

《:??700 メンバー費》

《:??700 段ボール研究会に入ります》

突如として投げられるメンバー加入費と同額のスパチャ。
それを見て僕は慌てて言う。

『ちよ、ちよっと!?! ま、まだだよ。まだ開始してないからね!?! な、なるべく早くに開始するからそれまではちよっと待っててね。あ、あとココネとユイまで乗らないで! アカネ先輩は……うん、言っても無駄かな』

今までのアカネの行動と実際にコラボをした感覚から、諦め混じりにため息を吐く。

『あとは、な……、ううん、さすらいの犬好きさんはたくさん投げすぎです。嬉しいですけど、その……、もし無理をしているなら僕、悲しくなっちゃいますよ……』

僕は顔を染めてサツと隠してしまう。

【コメント】

：ユキくん w

さすらいの犬好き：わかった。ユキくんを悲しませないように全力で投げる

：→辞める気なくて草

海星コウ　：アカネ? ユキくんを悲しませたらわかるよね?

美空アカネ　：わ、私はスパチャを投げただけだぞ!?!

『と、とにかくメンバーシップ名は「段ボール研究会」で、特典は絵文字とたまに限定配信するくらいかな? 他にもできることがあったらしていきたいかも。僕を応援してくれるって人はよろしくお願ひします』

少し頭を出して、小さく下げる。

『あと決めることは……。そうだ、タグだった。研究会は使ったから……作成委員会？ コラボ配信用のタグならおかしくないよね？』

【コメント】

美空アカネ : それだ!!

: 草

: 暴走特急草

海星コウ : 結局アカネはなんでもいいんだよね。でも、今回のならボクも関係してるのかな？

: 暴走特急、飼育員、犬のコンビで段ボール作成委員会かw

: コラボタグを作ったってことは、またコラボをするわけか

美空アカネ : よし、ユキくんとのコラボ決定だよ!!

: ああ……。ユキくんがまた捕まった……

: 草

海星コウ : そのときはボクも行くから安心してね

真心ココネ : 今度こそ私も一緒に行きます!

: ココママ草

羊沢ユイ : うみゆ、それならゆいも行くの!

: ユイちゃんw

: また前みたいに多数のコラボがw

『多すぎるよ。ほ、ほらっ、全員コラボをもうすぐするんでしょ？ それで我慢して欲しい……。かな、今は。と、とにかくタグが決まったので、今日は終わります。相談に乗ってくれてありがとう(ぎ)います。明日はユイのところにお邪魔するので、そっちまで拾いに来てくれると嬉しいです。では、乙わふーでした』

『《#犬拾いました》タグ決めるよー《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

2. 1万人が視聴中 ライブ配信中

☒ 1. 0万 ☒ 14 ? 共有 ≡ ? 保存 :

チャンネル名：Yuki Room. 雪城ユキ
チャンネル登録者数17.6万人

【コメント】

：ユキくんが最後まで言えただど!?

：信じられない。最後まで言えない芸風だと思ってた

：乙わふー

：乙わふー

：お疲れ様ー

真心ココネ　：お疲れ様ですー

羊沢ユイ　：うみゅー

海星コウ　：お疲れ様

美空アカネ　：おつー

さすらいの犬好き：あれっ？　まだ配信中？

真心ココネ　：ま、まさかユキくん!?

◇◇◇

『ふう……、今日の配信も無事に終わったな……』

配信を終えた僕は安堵のため息を吐いていた。

ギョツと骨クツションを抱きしめて、そのまま机にへばりついて
いた。

『ふあああ……、流石に一日、バタバタしてたから疲れたよ……。本当に
母さんも無茶振りをするよね。あっ、ココママやユイにチャット送
らないと……。あれっ、もう来てる?』

半分寝ぼけたまま、僕はパソコンからキャスコードの画面を開いて
いた。

そこに表示されているグループは三つ。

「シロルーム」

「三期生『1』」

「段ボール作成委員会」

『あつ、もうグループ名が段ボール作成委員会に変わってる……。これはアカネ先輩かな？ 相変わらず仕事が早いなあ……。』

三期生のグループに「1」の文字が表示されている。誰かが送ってきたのだろう。

『誰からかな？ あれっ、ココママ?!』

迷うことなくそのメッセージを開くと、そこには短い文字が書かれていた。

ココネ：「ユキくん、配信画面!!」

『配信……画面？ なんだろう?!』

それを見た瞬間にさらにキャスコードの通知が連続でくる。

ユイ：「配信画面見て!!」

コウ：「配信に戻ってきて!!」

アカネ：「切り忘れ配信ナイスb」

みんなのチャットを見てようやく自分が何をしてしまったのかわかる。

『え、っ?!?!』

慌ててパソコンのモニターを見る。

そこには切ったはずのライブ配信がそのまま続いていた。

『う、嘘っ!? き、切り忘れた?!?! あうあう……、み、みんな、もしかして今までの声、聞こえてたの?!?』

【コメント】

：もちろん

：悲鳴助かる

：落ち着いてるユキくんもよかった

真心ココネ　：よかった……、戻ってきてくれた

羊沢ユイ　：うみゆ、よかったの

美空アカネ　：帰ってきてしまったんだ。残念

海星コウ　：こら、楽しんだらだめでしょ!

『うううう……、へ、変なこと言っただけだったよな?? 僕……、うつかりしてたよ。本当にごめんなさい……』

顔を真っ赤にして困惑しながら頭を下げる。

『そ、それじゃあ、今度こそ配信を終わります。お、乙わふ——』

この放送は終了しました。

『《#犬拾いました》タグ決めるよー《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

2. 5万人が視聴　0分前に配信済み

☒1. 3万　☒16　?共有　≡?保存　…

チャンネル名：Yuki Room・雪城ユキ

チャンネル登録者数17.7万人



【コメント】

：やっぱりこの終わり方だよなw

：ちゃんと言えたら消し忘れなんだなw

：乙わふー

：乙わふー

真心ココネ　：今度こそお疲れ様です

羊沢ユイ　：うみゅー

さすらいの犬好き：乙わふ

海星コウ　：お疲れ様

美空アカネ　：おつっー

◇◇◇

——ううう……、やってしまった。

配信の消し忘れ。

自分のプライベートを晒してしまう危険な行為。

いつも気をつけていたのだけど、疲れや寝不足からかうっかりしてしまった。

——と、とにかくもう一度配信が消えてるか確認して……と。

配信の切り忘れが怖くなった僕は声を出すことなく、自分のMee Tubeチャンネルへと飛んでいた。

「あっ……、今度は大丈夫だった……」

しっかりライブ配信が終わっていることを確認した後、今度は消し忘れのことを教えてくれた人たちにお礼を言うのと、担当さんに謝っておく。



配信切り忘れの件は翌日の朝になっても引きずっていた。ただでさえ二日続けてあまり寝ていないので、体力的にはかなり限界に近い。

でも、それ以上に精神が参っていた。

「はあ……、やっぱりこのままだとダメだよね……」

大学の講義が終わった後、目に見えるほど大きなため息をしていると、心配してくれた結坂が声をかけてくる。

「大丈夫？　すごく顔色が悪いよ？　それに何か悩んでるみたいだけど？」

「うん……。その……昨日のやつ、失敗しちゃったなって……」

「消し忘れの件だね。それなら大丈夫だよ。担当さんも怒ってなかったでしょ？」

「うん、全然怒ってなかった……」

「私も前にうっかり配信したまま一日すぎてたけど、何も言われなかったからね」

「さ、さすがにそれは長すぎるよ……」

「あははっ、よく消えなかったよね。それが驚きだよ」

「……僕が気にしすぎなのかな??」

「うーん、それが祐季くんの良さでもあるんだけどね。でも、それでユキくんが体調を崩すなら……。あっ、そうだ。それなら今日のコラボ配信、こんなのはどうかな？」

結坂が何かを伝えようと僕の耳に口を近づけてくる。

すぐ側に結坂の顔があると少し緊張して、僕は思わず息を呑む。

すると――。

「ふうー……」

突然息をかけられて、僕は顔を赤くして慌ててその場を離れてしま
う。

「わふっ?!?!? な、な、何をするの!?!」

「あははっ!、相変わらず祐季くんは反応がいいね。ごめんごめん。次
はちゃんと教えるから——」

「うん……、もうやめてよ」

再び隣に戻るともう一度結坂が口を近づけてくる。

そして、今度は小声で言ってくる。

「せっかくだから、ユキくんが昨日してしまった配信の切り忘れが罪
かどうか、リスナーさんに聞いてみない? 裁判形式で、他にもいく
つか事案も募集して……。題して『うみゅー裁判』!! どうかかな?」

にっこり微笑みながら言ってくる結坂。

きつとこのままだと僕が悩んだままだと感じたのだろう。

それならいつそみんなに罪かどうかを問うてみる。そうすること
で僕の気持ちや和らぐと考えて……。

——うん、本当に僕は仲間に恵まれているよね。

嬉しさのあまり、目に涙から涙を流す僕。

それを見て結坂は慌てていたが、気にすることなく僕は大きく頷い
た。

「ありがとう……。それでお願いして良いかな?」

第7話：うみゆー裁判。ゆいが裁くのー #ユキユイ

『#うみゆー裁判 #ユキユイ』うみゆー裁判。ゆいが裁くの『羊沢ユイ／雪城ユキ／シロルム三期生』

2. 0万人が視聴中 ライブ配信中

☒351 ☒2 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：まさかのユイちゃん裁判長登場w

：ユキユイきたあああ

：待ってた

：うみゆー裁判w

：わくわく

ミニアニメ後に登場したのは木槌をもち、頭に偉そうな黒い帽子を被ったユイといつも通り段ボール。

その段ボールには「ひこくにん」と可愛らしくポップ体で書かれていた。

そして、配信画面だけではなく、現実にも僕はユイの部屋にお邪魔していた。

その理由は僕の体調面にあった。

あまりにも顔色が悪かったので、結坂に強制的にベッドインさせられていた。

「配信時間に起きられないよ……」

「そのときは私が場を持たせるから、祐季くんは休んで！ 今のままだと本当に倒れるよ！」

本当に僕を心配して出てきた言葉だとわかったので、ここは大人しく聞くことにした。

「それじゃあ、僕は家に帰って——」

「私の家で寝ていくと良いよ。そうすれば配信時間ギリギリに起こしてあげられるから」

「えっ?? で、でも、さすがにそれは——」

「あははっ、今更だよ。前も一回泊まつてるんだから遠慮しないの。ほらっ、行くよー!」

こうして、僕は再び結坂の部屋へお邪魔することになった。

ただ、相当無理をしていたのか、ベッドへ押しやられるとすぐに眠りについてしまった。

そして、起きたら既に配信画面が付いていたのだ。

始まったばかりだけど、結坂が僕に気を遣ってわざと起こさなかったのは容易に想像が付いた。

寝ぼけ眼で結坂の顔を見る。

結坂はいつの間にか羊の着ぐるみに着替えていた。

——あれって僕が五万人突破記念にあげたやつだよな? 使ってくれてるんだ……。

それを見ると僕の口から自然と笑みがこぼれていた。

ユイ : 『うみゆー、静粛に、静粛に、なの!』

カンカンカン!!

結坂はどこから持ってきたのか、本物の木槌を鳴らしていた。

【コメント】

・うみゆー

：うみゆー

：うみゆー

：木槌助かる

：うみゆー

：誰一人黙ってなくて草

ユイ 『うみゆ、今日はどうみゆー裁判所へようこそなの。ゆいは裁判長の羊沢ユイなの。今日は面倒な事案をとことん放り投げていくからよろしくなの』

ユイは当初予定していた僕の事案を後回しにしようとしていたので、僕は起き上がり、ユイの隣へと移動する。

『わ、わふう……。今日最初の被告人、雪城ユキです。唐突にうみゆー裁判所へ連れてこられました。よろしくお願いします』

突然の僕の登場にユイは跳びはねそうなくらい驚いていた。

ユイ 『ゆ、ユキくん!? まだ休んでなくて大丈夫??』

『うん、ありがとう。少し体調も戻ったから大丈夫だよ。あと、少し素が出てるよ……』

ユイ 『うみゆ!? す、素って何なの?? ゆいにはわかんないの』

思わず元に戻ってしまうほど心配してくれたのだろう。

僕はユイを安心させる様に微笑みかける。

【コメント】

：わふー

：わふー

：わふー

：うみゆー裁判所 w

《：？：1, 000 裁判費》

：ユキくん被告w

：ユイちゃん、優しいね

：ユキくん、大丈夫？

真心ココネ　：無理したらダメだよ

素が出てしまった恥ずかしさからか、ユイは顔を染めながら木槌を叩いていた。

ユイ　：『うみゆー。静粛に、静粛に、なの。騒がしいとゆいが寝られないの』

『ね、寝たらダメだからね!?!』

ユイ　：『うにゆ……、とりあえずユキくんの事案なの。有罪なの』

カンカンカン!!

何か説明する前から有罪にされてしまった。

『な、なんでとりあえずで有罪扱いされてるの、僕!?!』

ユイ　：『うみゆー……、眠たいからなの。睡眠罪なの……』

『それ、違うよね?! 僕のせいじゃないよね!?!』

【コメント】

：睡眠裁判w

：有罪www

：ユキくん、ドンマイw

《：？：1, 000 判決代》

『と、とりあえず、まずは事案を紹介してよ……。というか、僕のは僕が紹介したらいいんだね』

ユイ　：『うみゆー、よろしくー』

『えとえと、僕のは昨日の配信のことだよ。その……配信の切り忘れをしてしまつて、色んな人に迷惑をかけちゃつたから……。みんなに改めて謝りたいなつて。ご、ごめんなさい。それでその……みんなに迷惑をかけてしまった僕の罪を裁いてください』

僕は段ボールから顔を出して頭を下げる。

ユイ : 『うにゆ、羊飼いか裁判員のみんなはどう思うの?』

【コメント】

: みんな通る道だよなw

: ユイちゃんは既に何回かしてるしな

神宮寺カグラ : 気をつけないとプライバシーとか色々危ないわよ

: カグラ様も実は一回してるもんなw

: 三期生でまだしてないのはココママくらいじゃないか?

: 三期生のポントリオw

真心ココネ : ミスは誰にでもありますよ

: これは無罪だな

: 無罪

コメント欄でも僕をフォローしてくれる温かい言葉が流れている。それが嬉しくて、ゆつくり顔を上げて声を漏らす。

『み、みんな……、あ、ありがとう……。うん、次からは注意するね……』

ユイ : 『うみゆ。それじゃあ、とりあえず有罪なの』

カンカンカン!!

『つて、ちょよ、ちょっと待ってよ!? この流れでなんで有罪なの!?』

ユイ : 『うみゆ? コインを投げて裏だったから?』

確かにユイの手元のテーブルには裏向けのコインが置かれていた。

『こ、コインで決めないでよ!? ほらっ、ちゃんと裁判長らしく……
ね』

『うみゆー……、わかったの。それじゃあ、改めて……』

カンカンカン!!

ユイが木槌を鳴らし、意味深な間を置く。

…。

……。

……。

……。

ユイ : 『すう……』

『つて、寝たらダメだよ!』

ユイ : 『うみゆ!! 仕方ないの。ユキくんは「もつと自分を労^{ねぎら}つてあげましょう罪」で有罪なの』

『えっ!?! な、なんの罪なの、それ……』

ユイ : 『うにゆ、ユキくんはなんでも自分一人でしょうとするの。それが結果的に自分を追い込んでしまってるの。今日もいつ倒れるかって凄く心配してしまったの』

『あつ、うん……。それはごめんね……。ベッドまで借りてしまつて……』

【コメント】

・まさか前と同じでオフコラボだったのか!?

・確かにユイちゃんのいうことももつともだな。

：配信の消し忘れて俺たちが迷惑することはないもんな
：体調面で心配をかけたのなら仕方ない
：有罪だな

ユイ　：『ユキくんはもつとゆいたちを頼ってくれても良いの。だから一人で悩まないで、「もつと自分を労ってあげましょう罪」なの』『うつ……、ま、前よりはマシになったんだよ……。ほらっ、こうやって普通にオフコラボもできる様になったでしょ？　連絡も怯えずに出来る様になったし……』

ユイ　：『まだまだ足りないの。今日も倒れるギリギリまで無理をしてたの。だから有罪なの』

カンカンカン!!

無情にも甲高い音が響き渡る。そこで僕はガツクリと肩を落としていた。

配信画面にはユイのミニキャラが「ゆゝぎい」と書かれた紙を掲げたスタンプが表示される。

【コメント】

：有罪w

：これは仕方ないw

真心ココネ　：これはユイちゃんが正しいですね

神宮寺カグラ　：ユキは頑張りすぎ

：ユキくん倒れたら困るから有罪だなw

ユイ　：『うみゆ、決まりなの。ということ、ユキくんには今日の配信中「ゆいを抱きしめる」の刑に処すの』

『えええええ!!?!?　な、なんでそうなの!?!?』

ユイ　：『ユキくんが一人で頑張ってるからなの。もつと他人がいることをぬくもりで感じてもらうの』

【コメント】

真心ココネ : 異議あり!!!!

: →ココママが力の限り叫んでるwww

: ココママ草

: ココママw

ユイ : 『うみゆ、異議は却下なの。傍聴人は静かにするの』

ユイはそう言いながら僕の方に移動してくる。

ユイ : 『うにゆ、いつもゆいたちから抱きしめることはあってもユキくんからはないの。だから、ユキくんの練習にもなるの』

『ううう……、ぼ、僕には難易度が高いよ……』

配信画面ではユキくんとユイだが、リアルでは僕と結坂である。さすがに結坂を抱きしめる……と考えると普通の緊張では収まらない。

『よっ……』

覚悟を決めた僕は結坂の体を抱きしめる……ことなく、その場から立ち去る。

ただ、結坂は僕に対して飛びついてくる。

ユイ : 『うみゆ、まだまだ訓練が足りないの。ユキくんの行動なんてお見通しなの』

『ううう……、離してよー。ぼ、僕には荷が重すぎるよお……』

ユイ : 『今日のところはゆいが抱きしめておくの。次までに頑張って特訓しておくの』

『えっと、ユイとのコラボはもうないよね……?』

ユイ : 『明日するの』

『ほ、ほらっ、僕体調が悪いから明日は配信を休むよ……。そ、その……、明後日には真緒さんたちのコラボがあるし』

ユイ : 『うみゅー、残念なの。明明後日……はダメだったの。そこはタイガとコラボなの』

『ぼ、僕もそこにはココママとのコラボが——』

ユイ : 『うみゅー!! そんなに予定が詰まってるユキくんは罰としてユイの膝に座ってもらおうの!!』

結坂の膝の上に座らされる。もはやここが定位置というかのよう
に——。

【コメント】

: いつもの光景w

真心ココネ : 私のコラボ、覚えていてくれたんですね

神宮寺カグラ : べ、別に私はコラボしたいわけじゃないからね？
でもユキがしたいならいつでも言ってくれて良いのよ？

: →ここまでもいつもの流れw

『えとえと、カグラさんとのコラボも入れたいけど、その日にちが
……。ココママと3人のコラボでも良いかな??』

悩んだ末の結論。

ただ、こればかりはココネに聞かないことには判断ができなかつ
た。

【コメント】

真心ココネ : そうですね。私は構いませんよ。カグラさんとのコ
ラボもしてみたかったですから

神宮寺カグラ : わ、私も構わないわよ。ユキがしたいならね

: 3人コラボ開催決定

：どんな配信になるのか楽しみw

ユイ　：『うみゆ、ユイもしたかったの!!』

バンバンと机を叩くユイ。先にコラボが入っているならどうすることもできない。

『ほ、ほらっ、ま、また今度コラボするんでしょ？　それで我慢してよ……』

ユイ　：『うみゆー。もう一回コラボの約束を取り付けたの。楽しみにしてるの』

【コメント】

：ユキくん w

：こうやってコラボばかり組まされていくんだな w

：ユキくん優しいから w

：ユキユイ決定しました w

『えとえと、日はまだいつかわからないからね。僕、予定見ないと全然わからなくなってきたし……』

ユイ　：『うみゆ、仕方ないの。ユキくんの事案が解決したから次に移るの。ユキくんはユキくん裁判員として、判決を下すお手伝いをしてもらうの。ゆいの膝の上で——』

『ひ、膝は関係ないよね?!　とりあえず僕がこの事案として集められたものを読んでいけば良いんだね?』

ユイ　：『うみゆ、任せるの。終わったら起こして欲しいの』

『ごらっ、ユイもちゃんと聞かないとダメでしょ』

ユイ　：『うみゆう……、ユキくんが愛を囁いてくれたら起きるの』
『はいはい……、ユイ、好きだよ。これでいい?』

コウがアカネに対処していた様に僕もため息交じりにユイに言う。

意識をすると恥ずかしいが、ただ文章を読んでもだけの感じで言えば意外と気にすることなく言うことができる。

ユイ 『うみゆ……、ユキくんが適当なのー。恥ずかしがってるユキくんを返して欲しいの』

『いつまでも同じ僕じゃないからね。何度も言ったら慣れてくるよ……。それよりも起きたのなら早速読んでいくよ』

【コメント】

・【悲報】ユキくん成長する

・塩対応のユキくんか

・コウパイセンを見習ったんだろうな

・いつまで持つのだろう？

・この配信の最後までもつといいけどw

『えつと、それじゃあ読んでいくよ』

「ユイ裁判長、ユキくん裁判員、こんばんは」

『わふう、こんばんは』

ユイ 『うみゆ、有罪なの！』

『ま、まだ内容を言っていないよ!? つ、続きを読むね』

ユイ 『うにゅー……、任せるの』

「最近、どこかの羊が私の犬を狙っているみたいなんです。人のもを取るのって泥棒だと思うんですよ。この羊を裁いてくれませんか？ お願いします」

『牧場の人なのかな？ 確かに泥棒はよくないよね？ でも裁くのは羊さんなんだ……』

ユイ 『この羊は無罪なの。むしろこの事案を持ってきた人が有

罪なの』

『えええ!? な、なんでそうなるの?』

ユイ : 『うみゆ。だって考えてみるの。犬と羊が戯れているのはどう考えても癒やしの空間なの。そこに争いなんてないの』

『うーん、言われてみたらそうかも……。羊さんもかわいいし、犬さんもかわいいもんね』

ユイ : 『つまり、そんな楽しそうな光景を曲がった目でしか見れないこの人こそが諸悪の根源なの! 有罪なの!』

『そ、それじゃあ、この罪状は何になるのかな?』

ユイ : 『もちろん、「ユキくんはゆいかわいいのものはかわいいの罪」なの』

『なるほど……。かわいいものには罪がないってことだね』

ユイ : 『うみゆ、そうなの。ユキくんには罪はないの』

『僕、関係ないよね? それにさつき、思いつきり有罪って言われたけど……。』

ユイ : 『さつきはさつき、今は今なの』

『……。深く考えないことにするよ。とりあえずこの羊さんは無罪と言うことで』

カンカンカン!!

【コメント】

：草

：絶対ココママだw

：ユキくん、気づいてないw

：自分が犬だっかってわかってないのか? w

：段ボールだと思ってるもんなw

真心ココネ : ど、どうして私が有罪なのですか!?

：ココママがバラしてて草

ユイ : 『うみゆ、ココママは放っておいてさつきと次に行くの』

『えっと、さつきの事案ってココママからのものだったんだ……。あ

れっ？ ココママって牧場持ってたの？』

ユイ : 『ココママには頑張ってたくさんの羊を育ててもらおうの』
『ココママ、頑張ってたね……。それじゃあ次の事案だよ』

「ユイ裁判長、ユキくん裁判員、こんばんは」

『わふう、こんばんはー』

ユイ : 『うみゆ、ゆうぎ——』

『ユイは放っておいて続き読むよ』

ユイ : 『放っておかれたの……』

「最近、電柱を見かけるたびに「拾ってください」と書かれた段ボールが落ちてないか探してしまう自分があります。ペット飼育不可のアパートに住んでるのに。こんなユキくん依存症の僕を裁いてもらえませんか？」

『わふう、そんなところに僕は落ちてないから探さなくても大丈夫だよ。ちゃんと拾いに来てもらうときにはカタツターで告知を出すから』

ユイ : 『うみゆ、これは無罪なの。すぐに入院して治療するの。ユキくん依存症は大変な病気なの』

『ぼ、僕依存症なんてないからね!』

【コメント】

: 俺もユキくん依存症だな

: 俺もだな

: ここにいるみんなそうだろうw

: ユイちゃんもだなw

真心ココネ : ユキくん依存症にはユキセラピーですよ

神宮寺カグラ : 私は大丈夫よ!

『もう、みんなも勝手なこと言つて……』

ユイ　：『うみゆー、ユキセラピー癒されるのー』
『た、ただ抱きついてるだけだよね!!　もう、次行くよ。時間的に次が最後かな?』

ユイ　：『うみゆ、有罪!』

『まだ選んですらいらないよ!!　えつと……あつ、これがいいかも』

「ユイ裁判長、ユキ裁判員、こんばんは」

『わふっ、こんばんはー』

ユイ　：『うみゆー、こんみゆー』

『ま、まともに挨拶を!!　それにそれは初めて聞く挨拶……つてそうじゃないね。まずは事案つと』

「最近名前を間違えられることが多くなりました。その都度、訂正をしているのですが、日に日に間違える人が増えていきます。そんなにわかりにくい名前をしてるでしょうか?　特に最近ではスパチャで間違えた名前を言われるので、強く言おうにも言えなくて困っています。最近ではそれをどこか望んでいる自分もいます。これは贅沢な悩みなのでしょうか?　それともわざと間違えてくる人たちがおかしいのでしょうか?　Z宮寺Kグラ」

『名前を間違えられるのは悲しいね。僕だったら落ち込んじゃうかも』

ユイ　：『うみゆ。でも、このケグラさん、名前を間違えられることに喜びを感じてるように見えるの』

『よ、よろこび!!?』

ユイ　：『うみゆ。だからこれは双方にメリットがある行いなの。もちろんどちらも罪になんて問えないの。喧嘩両成敗なの』

『えと……、なんか意味は違う気がするけど、つまり、無罪つてことだね』

ユイ : 『うみゆ、そうなの!』

カンカンカン!!

ユイが木槌を鳴らすと最後の判決も下っていた。

【コメント】

: ケグラ様草

: なんだ、カグラ様喜んでたのか。もつとやるか

神宮寺カグラ : そんなことないわよ!? それに私じゃないわよ!

: わかりやすすぎ草

ユイ : 『うみゆ、本日はこれで閉廷なの。また次回開催までおやすみなの一』

『わふっ、おやすみなさ——』

この放送は終了しました。

『《#うみゆー裁判 #ユキユイ》うみゆー裁判。ゆいが裁くの《羊沢ユイ/雪城ユキ/シロルーム三期生》』

4. 2万人が視聴 0分前に公開済み

☒ 1. 3万 ☒ 17 ? 共有 ≡ ? 保存 :

チャンネル名: Y u i | R o o m. 羊沢ユイ

チャンネル登録者数 9. 5万人

第8話：フイツトネスゲームで勝負をするよ #囚われのユキ犬姫

ユイとの配信が終わった瞬間に、僕はスイッチが切れた様に意識が遠のいていった。

最後に聞いた言葉は――。

「やっぱり、元々限界だったんだよね、祐季くん。お疲れ様……」

という結坂の心配そうな声だった。

◇◇◇

そして、翌朝はすっきりとした目覚めで起きることができた。

――久々にゆつくりと寝れたかも……。

いい気晴らしになったので、ユイには感謝してもしたりなかった。

「また顔色が悪かったら、今度は強制的に拾って帰るからね！　だから無理しないこと！　わかった？」

「気をつけるよ。ありがとうね、結坂……」

「うん、私も見に行くから頑張つてね。炎上放送」

「や、やっぱり燃えるのかな……」

――できたら僕としては穏便に放送を終えたいところだけど……。

「ユージ先輩がいるからね。あの人がいる放送で燃えないことの方が珍しいよ？　むしろ、そうなる様に考えてるのかな？」

「ううう……、今から胃が痛いよ……」

「難しく考えなくても、そういうものだと思っておくと良いよ。燃えても祐季くんのせいじゃないからね」

「う、うん……、頑張ってみるよ」

「あつ、でも、なにか心配なこととかあったら連絡してよ。いつでも相談に乗るからね」

「いつもありがとうね。何かあったらすぐにチャットを送るよ」

「そういつて祐季くんはいつもため込むんだから……。気になったら逆にこつちから送るからね！」

帰りにもう一度結坂に注意されてしまう。

——確かにすぐに思い悩んでしまうのは僕の悪いところだよ。三期生の絆とか言つて、全く頼らないのは逆にみんなに不義理を働いている。むしろ、悩んでいるときこそ相談するべきだったな……。

次に何かあったときはしつかり相談させてもらおう。

◇◇◇

真緒さんやユージさんとコラボ。幸いなことにオフではないので、まだ気持ちは楽だった。

でも、男性V t u b e rとして最前線で戦う尊敬すべき先輩たち。いつもとはまた違った不安は抱く。それはチャットでも出てしまう。

ユキ :「あ、あの、その……、きよ、今日のコラボ……ですけど、どうしますか？」

ユキヤ :「——なんでも良い。何かやりたいことはあるか？」

ユキ :「ふえ!? あ、あの……、その……。ほ、僕もなんでもいいです……。」

ユージ：「確か筋トレ枠にするって言ってましたよね？ 本当に筋トレをするわけにはいきませんので、フィットネスゲームとかはどうですか？ ミニゲームの成績で勝負するのも楽しそうですし」

ユキ：「えとえと……、その……、ぼ、僕は大丈夫です……」

ユキヤ：「——問題ない」

ユージ：「了解。勝負なので一番成績が悪かった人は罰ゲームで……良くある『カタッター名を変更する』とかですね。あと枠はユキくんの枠でいいですか？」

ユキ：「ぼ、僕の枠ですか？」

ユキヤ：「——全く問題ない」

ユージ：「はあ……、ユキヤは相変わらずですね。サムネとタイトルは俺が準備しますから、ユキくんは配信の準備をよろしくお願いします」

ユキ：「は、はい。わかりました」

ただのチャットではあるものの、ユージがいなかったらまともに配信内容も決まっていなかっただろう。

普段の配信に出しているチャラい感じはチャットでは全くない。むしろ場をまとめてくれる良きお兄さんといった感じがしていた。

一方の真緒さんは普段の配信と変わらないので、二人だと萎縮してしまいそうだ。

——本当にこんな状態で配信ができるのかな？

そんな不安を感じたまま配信時間を迎えていた。

◇◇◇

『《#囚われのユキ犬姫》フィットネス勝負。真の犬力を見せつけるよ！ 《雪城ユキ／真緒ユキヤ／野草ユージ／シロルーム》』

2. 0万人が待機中 20XX／06／05 20:00に公開予

定

☒ 3 4 5 ☒ 5 3 ? 共有 ≡ ? 保存 :

【コメント】

：ついに来てしまったか。

：燃やす準備はしてきた

：ユキくんには勝ち目はあるのか？

：ユージ草

：真緒さんに勝てるのか？

：いやいや、無理だろw

ミニアニメと共にコメントがかなり加速していた。

今まで以上のコメントの速さに怯えながら、アニメが終わった瞬間に三人のアバターを出現させる。

段ボールに入っている犬風アバターの僕。

今日の段ボールは「助けてー!!」と書いてある。

一応今日は二人に捕まっついて、そこから何とか逃げだそうとして
いる設定だった。

真緒さんは白銀の長髪に二本の角が生えた魔王風のアバターだった。腕を組み、服装もそれらしく黒のマントを羽織り、同じく中にも黒の服を着ていた。

ユージさんは相変わらずチャラチャラとした雰囲気のアバターだ。

トゲトゲと言えるほど尖らせた金髪と煌びやかな服装の前だけを
開けさせて、筋肉質な体を見せつけていた。

そんな二人に挟まれているユキくん……。

うん、確かに囚われているようにも思える。段ボールに入ってるわけだし。

そんなことを思いながらいつもどおり段ボールをユキくんほくに被せようとしたのだが……、うっかりミスをしてしまい真緒さんに被せてしまう。

『あつ!?!』

思わず声を漏らしてしまうが、真緒さんは気にした様子もない。真緒さんの魔王風アバターが段ボールの中に入る。そこに書かれている「助けてー!!」の文字。

青ざめてしまう僕を他所に、ユージが思わず笑っていた。

ユージ：『くくくつ。いっすね、それ。ユキヤにお似合いっすよ』
ユキヤ：『なんだ、段ボールか。いつも雪城が使ってるものだろう？
問題ない』

【コメント】

：w w w w w

：まさかの初手段ボール攻撃w w w

：ユキくんが挑発w

：草

：真緒さん相手にやるなw

：ユキくんw w w

パフォーマンスだと思われてしまったようだ。

真緒さんも同意しているので、もう戻すこともできない。

——と、とりあえず僕も段ボールに入って……。

恥ずかしさを紛らわす意味も込めて、僕も段ボールに入り、顔を隠

してしまおう。

そして、少しだけ顔を出しながら言う。

『わ、わふー。み、皆さんこんばんはー。今日ほど、囚われのユキ犬姫……。——つて、誰が姫なの!? と、とにかく、姫なんかじゃないからね……。普通の犬の雪城ユキです。今日はフィットネスゲームで真緒さんやユージさんをばっさばっさと倒して、ここから逃げ出したと思います。よろしくお願いします』

【コメント】

：犬姫草

：わふー

：わふー

：どう見ても真緒さんたちには勝てないだろw

：わふー

：わふー

《…?500 わふー》

：ユキ犬姫わふー

ユキヤ：『ふっ。この魔王である我、真緒ユキヤ相手にいつまで平静でいられるかな』

ユージ：『ちよつち、俺つちのことも忘れないで欲しいっす。シロルーム最強のイケメンこと、野草ユージを。ほらっ、ユキつちはもつと俺を頼ってくれて良いんだよ？ 力になるっすよ。カモーン』

ユージがわざとらしくウインクをしてくる。

もちろんそれはスルーするのがいつもの流れなので、僕もスルーする。

『えとえと、真緒さんは強敵だけど、ぼ、僕も三期生のみんなから力をもたらってるから負けるわけにはいかないよ。全力でいくからね』

ユージ：『お、俺っちは無視っすか……』

【コメント】

：ユキくんスルーw

真心ココネ　：ユキくん、頑張って下さい

：ユージ草

：ユージ草

羊沢ユイ　：うみゆ、涙目ユキくんかわいいの

神宮寺カグラ　：ユキなら大丈夫よ

：ユージ草

：ユージ草

：草生えすぎて、すごく燃えそうだw

美空アカネ　：燃やす？

：ユイちゃんだけ応援してなくて草

ユージ：『ちよっち!!　まだ燃やしたらだめっすよ。ここは俺の枠じゃないんっすから』

『そ、その……燃やさないで貰えると、助かる……かな。僕じゃ止められないし……』

ユキヤ：『——それもまた一興だ』

『一興じゃないですよ!?　そ、それよりも今日はフィットネスゲームで勝負をするんですよね?　えっと、この輪つかを使うのかな?』

ユージ：『今人気のやつっすね。その輪つかを押し込んだり引っ張ったりして変形させたり、適度な筋トレをして物語を進めるゲームっすね』

ユキヤ：『——ゲームだからな。このくらい余裕だろう?』

『僕はその……初めてだからどうだろう?　あとこの輪つか……、ゲームが始まったら変形するんだね。今は全く動かないけど』

丸い輪つかを実際に押ししたり引いたりしてみたけど、今は何も動か

なかった。

ただ、その僕の話聞いてユージは固まっていた。

ユージ『べ、別にこの硬さはゲームが始まっても変わらないっすよ？ ま、まあ、やってみたらわかるっすね。早速始めるっすよ！』

ユージは苦笑を浮かべていた。

『わかったよ。早速起動するね』

【コメント】

：ユキくん、見た目通りひ弱w

：今日はユキくんの負けかw

：真緒さん、勝ってくれ！

：ユージ草には負けるな！

：でも、今日はユージ草が一番まともw

真心ココネ　：ユキくん、無事に帰ってきて下さい……

美空アカネ　：そこだよ、ユージを燃やすんだ

海星コウ　　：いけないことをするとアカネを燃やすよ？

美空アカネ　：しよ、消火器はしっかり用意してあるから

：→草

ゲームを起動させるとフィットネスゲームらしくまず最初に身長と体重を求められる。

『えっと、身長は150cm……。次は体重——』

【コメント】

：流石に隠すよな

：いや、ユキくんのことだ。うっかりとBMIの数字をさらしてくれるはずw

羊沢ユイ　：うみゆ、ゆいと同じ身長……

：計算の準備はできている

：→お前たちw

：まあ、何人もさらしてるV t u b e rがいるもんな

：ある意味罨だよな、ここ

真心ココネ　：ユキくん……、大丈夫かな

『体重は40kg……』

普通に隠すことなく体重も入力する。

すると、ユージが慌てた様子で言ってくる。

ユージ：『ちよ、ちよい待ち!!　そこは隠すところっしょ!!』

『ふえ??　別に隠す必要なんてないよね?』

——別に体重なんて見られて困る様なことはないし。確かに痩せすぎてるから、母さんからもっとたくさん食べろ、と言われるけどその程度だもんね。

ただ、他のみんなからはそうは思われていなかったようだ。

【コメント】

：珍しくユージに同意だ

：まさか隠すこともしないとはw

：ユキくんらしいといえばらしいかw

：でも、痩せすぎだな

真心ココネ　：やっぱり!?

：ココママ、驚きすぎw

：いや、驚くでしょw

：今日のためにBMIの計算を覚えたのが無駄になった

コメント欄の勢いが加速したそのタイミングでキャスコードの通知音が鳴る。

ピコッ！

『わっ……、あつ、チャットか。』

どうしても突然音が鳴るこのチャット音は慣れなかった。慌てて中を確認するとココネからのメッセージだった。

ココネ：「ユキくん、体重なんて言ったらダメです!! か、隠して下さいー!」

『えっ……、なんで言ったらダメなの?? 別に僕は気にしないよ?』

ユージ：『いや、あのな……。まあ、ユキっちがいいんだっいたらいいっすけど……。ユキヤからも何か言ってくれっすよ』

ユキヤ：『——何か問題があるのか?』

ユージ：『はあ……。あんたたちに聞いた俺がバカだったっす』

『えとえと、何かはわからないけどドンマイです』

ユージ：『いやいや、なんで俺っちがミスしたいになってるんっすか? 全てユキっちのことっすよ!?!』

『……??』

【コメント】

真心ココネ : ユキくん……、あとでお説教です

: ココママのお説教入りまーすw

: 体重がバレる恥じらいも見たかった

: ユキくんらしいw

: おかしい。ユージが普通に見える

: まさか今日のユージは別人?

: →それだ!

：草が生えない……。燃やせない……

『と、とにかく体重も入れ終わったし、先に進めるよ。えっと、まずは力の調整？ 負荷を選択?? えっと……、ど、どれがいいのかな?』

ユキヤ：『大したことはない。最強でいいだろう』

ユージ：『ちよい待ち！ ユキっちの見た目を考えると最弱でいいと思うっすよ』

『ぼ、僕としてはその……、できたら普通を選びたいんだけど……』

ユージ：『後から負荷は変更できるから、俺の言う通りにした方がいいっすよ?』

『あつ、そうなんだ……。わかったよ、それじゃあ一番弱い負荷で……』

ユージ：『まずは軽いミニゲームから始めるっすよ！ 一応練習で』

ユージが選んだのは軽く走って、コインを集める物だった。

ベルトコンベアの上を早く走ったり、遅く走ったりして、コインを取りに行く。

たまにジャンプしたりとかも必要になる物だった。

ユキヤ：『——この程度、問題ない』

『えっと……走ればいいんだよね？ それに輪っかを押す?? うん、だ、大丈夫』

ユージ：『ユキっちは本当に大丈夫っすか？ まあ、とにかく練習で一回してみるっすよ』

僕たちの返事を聞いたあと、ユージはゲームをスタートしていた。



『はあ……、はあ……、はあ……』

軽いやつから始めたはずなのに僕は肩で息をして、まともに喋ることがすらできなかつた。

——い、意外と大変なんだね……。

ゲームと思って侮っていたかもしれない。

すっかりとしたフィットネスゲームみたいで、すでに汗が流れている。

そして、画面にはスコアランク『—』という文字が表示されている。

つまり、0点。

計測不能だった、ということだ。

——こ、これ、勝てるの？ ううん、ここまで大変なゲームなんだから、そんなに悪い数字じゃない……よね？ みんなきつと一緒に数字……だよ？

淡い期待を抱いていたのだが、それは粉々に粉碎される。

ユージ：『それじゃあ俺たちから言うつすよ。俺はランクA。凡ミスしてしまつたつすね。ユキヤはどうだった？』

ユキヤ：『—S。ふつ、この程度造作もない』

ユージ：『流石つすね。今回は簡単なものを選んだから当然つすよね。そうそう低いスコアは取らないつす』

『あ、あはははっ……』

もう乾いた笑みしか浮かべることができなかつた。

ユージ：『それでユキっちはどうだったんつすか？』

『わふっ!? ほ、僕はその……あの……、な、なし……です』

恥ずかしくなって、ゆっくり顔を段ボールへと隠す。
ただ、僕の返答を聞いてユージも固まっていた。

ユージ：『なし……って、0点ってことっすか!? う、嘘じゃないっすよね?』

『えと……、うん。そ、そう書いてあるし……』

次第に泣きそうになってくる。

【コメント】

：0点って初めてみた

：ユキくん……

真心ココネ　：ゆ、ユキくんは必死に頑張ったよ

：つ、次から本番だから

羊沢ユイ　：うみゆ、ユキくんらしいの

《：？1, 000　お疲れ様》

僕の顔がゆっくり段ボールへ沈んでいくそのタイミングで、真緒さんが顔に手を当てて笑い出していた。

ユキヤ：『くくくつ。はははははつ。中々興味深いやつだ、雪城ユキ!』

『ま、真緒さんまで!? わ、笑わないでくださいよ。そ、その……、僕は必死に……』

思わず涙目のまま真緒さんに対して大声を上げてしまう。

しかし、それはユージによって止められる。

ユージ：『ちよつと待つつす!　ユキヤがこんなに楽しそうにしてるなんて、初めてみたっすよ』

『えっ!?　それってただ、僕の痴態が笑われてるだけですよね!』

ユキヤ：『——よし、今日は雪城に0点以上を取らせる！ ユージもいいな？』

真緒さんは本当に楽しそうに笑いながらユージへ言う。

ユージ：『……まあ、ユキヤがそれでいいならいいですよ。珍しいっすね、ユキヤが自分の意見を言うの……』

『あ、あの……。ぼ、僕の意見は——？』

ユキヤ：『はーっははっ、次のミニゲームへ行くぞ！ 我が必ず一定の成果を上げさせてやるぞ！』

『わ、わふうふう………?!?!?』

僕の意見は聞かれることなく次のミニゲームへと進んでしまう。

【コメント】

：ユキくん、ご愁傷……

真心ココネ　：ユキくん、無事に帰ってきてね……

羊沢ユイ　：うみゅー、ゲームなら負けないの！ ゆいともするのー！

◆◆

放送終了ギリギリまでミニゲームを続けた。

真緒さんの特訓やユージさんのアドバイスもあり、かろうじてランクが表示される最低である、Cランクに到達することができた。

『わ、わふ……。も、もう動けないよ……』

ユキヤ：『——今日はこのくらいか。最初から飛ばすわけにはいかないからな』

ユージ：『いやいや、十分飛ばしてたっすよ!? ユキっち、大丈夫っすか?』

『だ、大丈夫……。で、でも、さすがに疲れたかな……。』

息を荒くしている僕。今にもその場に倒れそうだった。

【コメント】

真心ココネ　：ユキくん、お疲れ様

《：？2,000　乙わふ》

：吐息エロい

：でも、これって捕らえられたままじゃないのか？

：犬姫を助けるのは一体誰なのか？

羊沢ユイ　：ゆいななの！

《：？10,000　捕虜生活に使って下さい》

ユージ：『それじゃあ、今日最下位の成績だったユキつちには罰ゲームつすね』

『ううう……。お、お手柔らかに……。』

ユキヤ：『——カタッター名を選べるのだったな。囚われのユキ犬姫でいいんじゃないか？ @の後ろにでもつけてくれ』

ユージ：『なるほどつすね。それは良いアイデアです。今日から全体コラボまでユキつちは囚われのユキ犬姫つすよ。それじゃあ拍手』

【コメント】

：8888888

：8888888

：8888888

真心ココネ　：ゆ、ユキくんは私が救い出しますから

羊沢ユイ　：うみゆ、囚われ……。働かなくて良い……。羨ましいの

神宮寺カグラ　：罰だから仕方ないわね

：8888888

美空アカネ　：なんだ、ユージが燃えてる音か？

《：？10,000 ユージ88888888》
《：？10,000 草88888888》
《：？10,000 ユージ火》
《：？10,000 ユージ炎》
《：？10,000》

『わ、わふっ!? さ、最後の最後に赤スパで燃やさないでー』
ユージ：『仕方ないっすね。むしろ良くここまで持ったと感心するっす』

『そんなこと言っていないで止めて……』

ユキヤ：『——放送終了だな』

ユージ：『おーつかれちゃーん♪』

『ちよ、ちよっとまつ——』

この放送は終了しました。

『《#囚われのユキ犬姫》フィットネス勝負。真の犬力を見せつけるよ！
《雪城ユキ／真緒ユキヤ／野草ユージ／シロルーム》』

3.9万人が視聴 0分前に配信済み

☑1.3万 ☑61?共有 ≡?保存 …

チャンネル名：Yuki Room. 雪城ユキ

チャンネル登録者数18.2万人

◇◇◇

雪城ユキ@囚われのユキ犬姫 @yuki_yukishiro
今

わ、わふー。フィットネス勝負に負けたので、しばらくは囚われのユキ犬姫として生きていくの……。誰か助けに来て……。

約束通りカタッター名を変える。

結局配信の最後は赤スパ一色で、派手に燃えていたので反応が気に

なった。

だからカタッターを確認していたら色んな人からリップが来る。

真心ココネ@シロルーム三期生 @kokone | magokoro 今

返信先：@yuki | yukishiro
今すぐに助けに行きます!!

神宮寺カグラ@シロルーム三期生 @Kagura | Zinguuzi 今

返信先：@yuki | yukishiro
不当な扱いを受けたら言いなさい！ すぐに行くわ

羊沢ユイ@シロルーム三期生 @Yui | Hitsuzisawa
a 今

返信先：@yuki | yukishiro
うみゅー、三食昼寝付き労働なしなら代わってあげるの(??☒?☒)
????

——みんな相変わらずだな。

どうやら反応自体がそれなりにあるようなので、これはこれでユキくんのアカウントとして考えるならおいしい結果になるだろう。

そんなことを思っているとチャットが来る。

アカネ「ユキくんの新衣装を準備したよ。でも、まさかちょうど良いタイミングになったかもしれないね。早速使おうと良いよ」

まさかのアカネからだった。

そして、いつから描いていたのか、そこにはいつもとは違うユキくんの展開図が描かれていた。

第9話：ユキくん、新衣装発表!？ #ココユキカグラ

真緒さんたちのコラボの次の日、僕は筋肉痛で身動きが取れなかった。

「ううう……、動けない……」

さすがにこの状態でオフコラボは無理なので、前もってココネとカグラには伝えておく。

ユキ　：「そ、その……、僕、今日は筋肉痛で動けなさそうで……、ごめんね」

ココネ　：「仕方ないですね。ユキくん、昨日頑張っていましたからね」
カグラ　：「ええ、そうね。ユキは動かない方が良いわね」

——わかってもらえてよかった。

僕は少しホツとしていた。

ユキ　：「じ、じゃあ次コラボする日を決め——」

ココネ　：「私たちが行くなら問題ないですよね？」

ユキ　：「ふえ!？」

カグラ　：「それもそうね。ココネの家がユキの家が変わるくらいよ」
ユキ　：「で、でも、その……、ぼ、僕の家は——」

ココネ　：「あつ、ユキくん、両親と住んでたんだった？　一応確認だけしてもらって良いかな？」

——そんなことを母さんに聞いたら二つ返事が来るよ。

ため息交じりに一応確認だけ取りに行く。

筋肉痛を庇う様にまるでロボットの様な動きをして——。



「あれっ、ゆうくん？ どうしたの、面白い動きをして」

「……ちよつと筋肉痛だね。それで母さんに頼みがあるんだけど良いかな？」

「大丈夫だよ。それで誰がゆうくんの初めてをもらうのかな？ ココネちゃんかな？ ユイちゃんかな？ それともカグラちゃん？」

あつ、もしかして七瀬ちゃん？」

「ま、まだ何も言っていないよ!! それに言い方!! 変な勘違いをしないでよね!!」 ただ、コラボ配信のために部屋に来てもらうだけだよ!!

た、確かに僕の部屋に人が来るのは初めてだけど……」

「でしょー。これでもゆうくんのママだから言いたいことくらいわかるよ。でも、せっかくゆうくんの記念日にお仕事があつて出ないといけないんだよね。……サボろうかな」

「ダメだよ!! シロルームのみんなに迷惑がかかるでしょ!!」

「ううう……。ゆうくんの初体験と一緒に祝いするんだー!!」

「な、何大声出してるの?!?!」 み、みんなに勘違いされるでしょ!!」 ほらっ、早く行ってきて。ぼ、僕の配信を見たらどういう状況かわかるでしょ?!?!」

僕はピリツと体が痛むのを堪えながら、母さんを玄関へと押しつけてく。

「あつ、それもそうだね。動けないゆうくんがあんなことやこんなことをされてる姿を妄想すれば良いんだね。わかったよ、あとから何回も見るとね」

「そ、そんなことしないよ!!」 もう、そんなこというなら見なくて良いよ」

「ママは会長としてシロルームライバーのチェックをしないと。だからこれはお仕事。しっかりとゆうくんの成長を見ないといけないん

だよ。お仕事だもん。別にゆうくんの動画の切り抜きを作ったりとかはしてないから安心してね」

——どうしてだろう。自分の母親ながらあまり信用はできないのだけど……。

「……信じるよ。……信じてるからね」

「あははっ、大丈夫。とつてもかわいいところを選びすぎるから任せてよー」

母さんがビシツと親指を立ててくる。

「つて、それって切り抜きをするってことですよ!?!」

「んーっ……、ほらっ、ゆうくんのかわいいところを見てもらうのも會長の仕事だから」

「関係ないよね、それ!?!」

「それにしても今日のゆうくんもかわいいね。そのユキくんの服、お気に入り?」

今の僕の格好はいつものワンピースと犬耳パーカーとレギンスだった。

普通の男物を着ていたらこよりに着せ替え人形にさせられるのが目に見えていたので、それならまだ着慣れている今のユキくんスタイルが一番マシだった。

「こ、これはココネにもらったものだからその……」

「ああ、なるほどね。うんうん、仲が良いのはいいことだね」

母さんが子供扱いをするかのように僕の頭を撫でてくる。

「わふっ……。か、母さん、僕はもう大学生だよ……。そ、それにそろ

そろ会社行くんだよね？ 行ってらっしゃい」
「うう……、やっぱり行きたくないよー。ゆーくんと一日も離ればなれになるなんて……」
「はいはい、他の人に迷惑がかかるでしょ」
「ゆーくんが冷たいよー……。うう、行ってくる。帰ってきたらお帰りのハグをしてね」
「覚えてたらいいよね。……。秒で忘れておくけど」
「ママが覚えておくから強制ですからね」

それだけ言うと母さんは悲しそうな視線を送りながら家を出て行った。

◇◇◇

ユキ　：「ただいま。確認してきたよ……」

ココネ　：「それじゃあ、今日の18時頃にユキ君の家でいいですか？」

カグラ　：「ええ、構わないわ」

ユキ　　：「ほ、僕……。まだ何も言っていないよ？」

ココネ　：「ユキくんのことだからわかりますよ。ダメだったら、本当に申し訳なさそうにまず謝ってきますからね」

すっかり僕の考えを読まれている様だった。

——そんなにわかりやすいかな……。

ユキ　　：「ま、まあ、確かにOKはもらってきたんだけど……」

ココネ　：「ありがとうございます。ユキ君の家、楽しみですわね」

カグラ　：「な、何か持っていた方が良いのかしら？ 菓子折とか」

ユキ　　：「今日は僕しかいないから大丈夫だよ」

ココネ　：「えっ!?! ゆ、ユキくん一人でいるのですか!?! あ、危なく

ないですか?」

ユキ :「——たまに思うんだけど、ココママって僕のことを小学生くらいに思っただけ? 僕、大学生だよ?」

ココネ :「あっ、そ、そうでしたね。うん、ユキくんは大学生。大学生でしたね……。し、知っていましたよ」

ユキ :「うん、ココママにはすっかり抗議しないといけないね」

カグラ :「それはあとからにして。それよりも今日の配信のことよ」

ユキ :「僕にとっては死活問題なんだけど……。まあ、雑談のネタにもなるか——」

ココネ :「それで、どんな配信が良いですか? ユキくんが動けないなら雑談メインの方が良いですか?」

ユキ :「あっ、それなら僕、新衣装もらったんだよ。その公開配信をしてもいいかな? 動けないから、どこまでできるかわからないけど」

ココネ :「ほ、本当なんですか!? どんな衣装ですか!?!」

ユキ :「えとえと、せっかくだから内緒にしておくよ。でも、すごくかわいいよ」

ココネ :「ううう……。ユキくんのいちわる……」

ユキ :「わ、わふつ。でもでも、その方が放送中に楽しんでもらえるかなって……。あうあう」

カグラ :「はあ……。気づきなさいよ、ユキ。ココネはわざとそう言ってるのよ」

ユキ :「えっ!?!」

ココネ :「もう、カグラさん。ばらさないでくださいよ! せっかくあとちよつとでユキくんが新衣装を見せてくれそうだったのに」

カグラ :「ユキが私たちを喜ばそうとしてくれてるんでしょ? なら乗っておきなさいよ」

ココネ :「うっ、そ、そうですね。わかりました。楽しみにしていますね」

ユキ :「そ、そこまで期待されると少し自信がなくなっちゃうんだけど……。うん、た、楽しみにしててね」

それからみんなが来ても大丈夫な様に僕は夕方に向けて部屋を片付け始めていた。

動ける範囲で……。

◇◇◇

約束の十八時まであと五分ほどになると、僕はそわそわして、意味もなく部屋の中を行ったり来たり歩いていた。

やはり部屋に誰かを上げるといには初めての体験で、その緊張は今までの比ではない。

——何か変なところはないよね??

部屋は掃除したし、パソコンの他には骨クッションと段ボールくらいしか置かれていない。

僕自身の格好はココネがくれたユキくんセット。

腕にはユイがくれた腕時計。

どこをとつても全く問題のない格好だと思う。いつもこの格好だというのは言いつこなした。一番楽な格好だから……。

そして、ちょうど五分前になると呼び鈴が鳴る。

ピンポーン！

「あつ、は、はい……」

少し緊張しながら、玄関へと向かい、扉を開ける。

すると、笑顔を見せるこよりと瑠璃香の姿が現れる。

「やつほー、祐季くん。待たせたかな？」

「あつ、え、えつと、大丈夫……。うん、僕も今来たところだから……」
「あははつ、ここ祐季くんの家だよ。今来たも何もずつといたでしょ？」

「あつ……。!? そ、そうだね……」

かなり緊張していた様で、変な返事をしてしまう。

ただ、こよりはいつも通り笑顔で返してくれるので気は楽だった。

「こらっ、祐季が困惑してるわよ。とりあえず中に入らせてもらっても良いかしら？」

「あつ、ごめん。どうぞ。その……。散らかってるけど——」

それから二人を僕の部屋に案内する。

「へえ……。ここが祐季くんの部屋か……。噂には聞いてたけど、本当にユキくん段ボールがあるんだね」

「うん、担当さんがパソコンと一緒に送ってきたんだよ……」

「それでこの骨クッションがカグラさんがくれたやつだね」

「そ、そうだよ。僕も良く抱きしめてるんだ……」

「へえ……。えいっ！」

こよりは骨クッションを抱きしめる。

「……ふかふかで良い気持ち。このまま寝ちやいそう」

「うん、おやすみ……」

「本当に寝ないよー。オフ会が終わってからだよー」

「そ、そうだよね……。あつ、る、瑠璃香さんは何を見てるの？」

僕のパソコンを興味深く見ている瑠璃香へ視線を向ける。

「——このパソコン、中々良いものを使ってるわね。さすがシロルム、侮れないわね。私もそろそろパソコンを新しくしようかしら」
「えっと、僕はどんなパソコンなのか全くわからないんだけどね……」

瑠璃香が言うのだったら間違いはないのだろう。

その点、パソコンを準備してくれた担当さんには感謝だな。

「十分片付いてますね。わ、私が綺麗に掃除して上げようと思ったんですけど……」

「そ、そんなこと、こよりさんたちにさせられないよ!? ゆ、ゆっくりにくつろいでよ」

僕は急いで二人に座布団を準備する。

そして、向かい合う様に座ると急に緊張してくる。

「こ、こう集まったのはいいけど、何話して良いかわからないね。ぼ、僕、人を部屋に呼ぶのって初めてで……」

「別に普段通り私の膝の上に来てくれたら良いんだよ？ ほらっ」

こよりは両手を広げてくる。

——うん、断言できる。それだけは絶対に普段通りじゃない。

苦笑を浮かべつつ僕たちは雑談をしたり、一緒に食事（作るのはこよりで、瑠璃香は台所立ち入り禁止令が発動）したり、こよりが一緒にお風呂に入ろうとしてくるのを妨害したりして時間を潰していた。

◇◇◇

『《#ユキ犬姫拾いました #ココユキカグラ》ユキくん、新衣装発表
!?! 《雪城ユキ／真心ココネ／神宮寺カグラ／シロルム三期生》』

2. 8万人が待機中 20XX／06／06 22:00に公開予

定

☒657 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：今日は少し遅かったんだな

：唐突の新衣装だど!?

：ユキくんの場合、作る方が追いついてないんだろな

：このタイミングの新衣装……、どんな感じなんだ？

：わくわく

既に待機してる人が期待のコメントを送ってくる。

あまり期待されすぎると逆に不安になる。

そんな気持ちを抑えつつ、僕はミニアニメを流し始める。

その間にココネたちの準備が良いかを確認する。

カグラは既に配信モードになっている。

ココネは……。

「ユキくんの着ぐるみ姿……、かわいいですー」

寝間着の犬着ぐるみを着た僕を見てココネは笑みがこぼれていた。

——うん、ポンモードだね。平常運転かな。

思わず苦笑を浮かべてしまう。

「そろそろミニアニメ終わるからミュート消すよ。よろしくね」

二人にそれを伝えたあと、段ボールで姿を隠したユキちゃんとココネ、カグラのアバターを表示させる。

『わ、わふー、犬好きの皆さん、こんばんはー。囚われのユキ犬姫こと雪城ユキです。き、今日は助けに来てくれてありがとうございます』

【コメント】

：わふー

：犬姫に違和感がないw

：わふー

：わふー

《：？500 わふー》

：わふー

『スパチャ、ありがとうございます。ふふっ、このくらいじゃ僕、驚かなくなつたよ。成長の証だね』

前までスパチャが来るたびに慌ててたのが嘘のように、冷静でいられる様になつた。

これもずつと弄ばれ続けてきたから、の成長だろう。

ただ、それもすぐに勘違いだと思ひ知らされる。

【コメント】

《：？10, 000 ほう》

《：？20, 000 本気出していいのか？》

《：？50, 000 成長したユキくんなら驚かないよな？》

《：？20, 000 今月の食費》

《：？30, 000 お前ら、赤スパばっかw》

《：？50, 000 犬姫にお仕置きを》

《：？30, 000 ユキくんへ》

《：？20, 000 成長したユキくんなら耐えられるよね？》

《：？10, 000 お友達代》

僕の言葉に反応して怒涛の赤スパラツシユがやってくる。
これには流石の僕も慌ててしまう。

『わ、わふうううう?! み、みんな、投げすぎ!? 投げすぎだから……。
ぼ、僕がわるかったよ。謝る。謝るから赤スパで殴らないで……。』

僕が涙声になっていると隣からカグラがため息交じりに言うてくる。

カグラ：『はあ……。今の言い方だとスパチャくるってわかるで
しょ?』

『ふえ!? わ、わかるの!?!』

ココネ：『……。わかりますね』

——つまり、知らず知らずのうちに僕がスパチャをおねだりしてしま
ったようだ。

『ご、ごめんなさい。そ、その、僕は大丈夫ですから、無理に投げない
てください……。』

【コメント】

《：?：10, 000 いいから投げさせろ!》

：→スパチャで殴るw

《：?：10, 000 ユキくん、応援してるよ》

：ユキくんかわいいw

『あわわわっ、ま、まだくる……。』

カグラ：『ユキのことを応援したいって気持ちなんだから素直に受け
取りなさい。「ごめんなさい」より「ありがとう」の方が喜んでくれ
るわよ』

『わ、わふっ。み、みなさん、本当にありがとうございます』

ココネ：『ユキくん、そろそろ先に進めないと！』
『そ、そうだね。えと……、き、今日はなんと僕の家にはココママとカグラさんをお招きしています。お、お泊まり会です。強制です。しくしく……』

【コメント】

：な、なんだと!?

：ユキくんが家に人を招くと!?

：明日は雪か

：ユキくんだけにな

……

：ユキくん泣いてるw

『えとえと、それだと僕が人を招いたことないみたいだよ。……うん、ココママたちが初めてだし、来てもらった理由も僕が筋肉痛で動けないからなんだけどね……』

【コメント】

：それでこそ俺たちのユキくんだ！

：ユキくん、お帰り

：明日は普通の天気だな

《：?・10,000 おかえり、ユキくん》

：よかった。ユキくんがどこか遠くへ行ったのかと思った

『うう……、みんな僕を馬鹿にしてないかな？　そ、そうなんですよ!?!』

ココネ：『ユキくん、そろそろ私たちも紹介して下さい』

カグラ：『ユキ、今日は姿を見せてないんだから、透明人間が喋ってるみたいですよ』

『そ、それもそうだね。まずは三期生のママ、ココママだよ』

ココネ：『犬好きのみなさん、ここばんはー。ユキ犬姫のママ、真心

『ココネですよ』

【コメント】

・ココママ

・ココママ

・ココママ

・ココママ

ココネ：『みんなのママじゃないですよー。ユキくんのママですか
らね』

『うん、ココママは僕のママなのであげないですよ』

ココネ：『うんうん、そうですね』

ココネが後ろから更に力強く抱きしめてくる。

ただでさえ筋肉痛でゆっくりとしか動けない僕はそこから逃げる
ことができなかった。

『む、むぎゅ……こ、ココママ、動けな——』

ココネ：『あつ、ごめんなさい。ついついユキくんが嬉しいことを
言ってくれたから——』

ココネが僕から離れて、頭を下げてくる。

『い、言うだけならいくらでも言うよ……』

ユイの問いかけにも素で返せるほどに僕は成長している。

そのくらいで恥ずかしくなっていた昔の僕ではない。

ココネ：『そういえば、ユイちゃんの時もそうでしたね。それなら私
にも同じように好きって言ってくれますか？』

『うん、もちろんだよ。ココママ、す……』

以前同様にあつさり言おうとしたのだが、ジツとココママが僕の日を見て真剣な表情を見せていた。

それはユイの時にあつた冗談の様な空気ではなく、真面目に答えないといけない様な気がした。

すると、途端に恥ずかしくなってきた、顔を背けてしまう。

『そ、その……、あの……、あ、あううう……』

ココネ：『ふふふつ、ユキくんもまだまだですね』

ココネは嬉しそうに笑みを浮かべたあと、ようやく元の笑顔に戻ってくれる。

『ううう……。辱められたあー。僕、まだまだだったよお……』

涙目になりながら呟くと、カグラが呆れた声を出してくる。

カグラ：『ねえ、私はどうしたらいいのかしら？ このまま帰ったら良いの？』

『あつ、ご、ごめん。つ、次はカグラさん、お願い』

カグラ：『犬好きのみんな、来て上げたわよ。神宮寺カグラよ。今日はユキ犬姫の段ボールだけもらって帰るからよろしくね』

『?!?!? こ、この段ボールはあげないよ!? ぼ、僕のだからね』
カグラ：『それが嫌ならちゃんと配信を頑張ること！ ほらつ、今日は発表があるのでしよう?』

『あつ……、うん。ありがとう。頑張るよ!』

【コメント】

・カグラ様がすっかりお姉さんに

・ポン姫の汚名返上か?

・ユキくんも犬姫だから

：ポン三人w

：あれっ、三期生の常識枠は？

：ユキくんじゃない？

：ここまで枠主アバター登場なしw

『わ、わふっ、今日はなんと僕の新衣装の発表があるんだよ。しかもココママたちにもまだ内緒にしてるんだよ』

ココネ：『ユキくんがいぢわるしてきたんですよ。あとからお仕置
きが必要ですね？』

『わふっ?!?!? お仕置き!?! ほ、ほらっ、ただ、ココママたちも大好きさ
ん達と一緒に驚いて欲しかったただだよ!?!』

ココネ：『ふふっ、冗談ですよ』

【コメント】

：うおおお

：楽しみだー

：だから今まで段ボールから出てこなかったのか

：段ボールから出ないのが、今更すぎて気づかなかった

：もしかして新衣装は段ボール？

《：？：2000 服代》

『ふ、服代はいらないですよ。も、もう着てますからね。ま、まずは頭
から……』

いつものようにソロソロ、と頭を出していく。

髪色はいつもと同じ茶色なのだが、フリルと犬耳があしらわれた
ヘッドドレスを付けている。

『ど、どうかな？ いつもフードじゃなくて違うタイプの犬耳なん
だよ』

「ココネ：『か、かわいいですー』
『わふっ、まだ頭だけだから……。後ろから抱きつかないで……。』」

【コメント】

・ロリータ系か？

・かわいい

・どこか姫っぽいなw

・ココママw

・ユキくんも嬉しそう

・あれっ？ 髪伸びてない？

『わふっ、気づいちゃった？ うん、実は頑張って髪を伸ばした……。っ
ていう設定で……。って、あわわっ。今の話はなし。設定はなし。
が、頑張って伸ばしたんだよ。変なところまで読んじやっただけだか
らね!?!』

カグラ：『全く、気をつけないとダメでしょ。ユキは』

【コメント】

・草

・それ、カグラ様が言うのw

・設定w

・なんだ、やっぱりいつものユキくんか

・続き早くー

・初配信で設定全て晒してたカグラ様に言われるユキくんw

カグラ：『あれは初配信だったからちよつとミスしただけよ!?!』

『う、うん……。つ、次にいくね。えつと、服……。服……。』

更にゆっくりと服が見えるように立ち上がる。

薄黄色のフリルやりボンがたくさんあしらわれた純白のドレス風

ワンピース。

その上にはピンクのリボンが付いた白のボレロを着ていた。

『どうかな。この服、とってもかわいくないかな？ アカネ先輩が言うにはユキ犬姫バージョンなんだって。元々はロリータドレス風に書いてたらしいけど、ちょうどいいからユキ犬姫にするって言ったよ。姫って言うより、貴族のお嬢様って感じにも見えるけど、でも僕に合ってるからいいんだろうね。あと足も、すごく装飾に凝ってるんだ……』

今度は足の方へとカメラを切り替える。

少し厚底の靴で、デフォルメされた犬が描かれた白の長めの靴下を履いている。

パーツパーツで見せ終わったので、最後に全体を見せる。

そして、すぐに段ボールに戻りたくなるのを我慢して、頬を染めながら聞いてみる。

『ぼ、僕的にはすごくかわいいと思うんだけど、みんなはどう思うかな……？』

少し反応が気になってそわそわとしてしまう。

ただ、その姿に真っ先に反応する人物がいた。

ココネ：『ゆ、ゆ、ユキくん！ と、とってもかわいいですー！』

ココネが抱きつこうとしてくる。

ただ、さすがにこのタイミングで抱きついてくるのは予想が付いたので、準備しておいた骨クッションでガードする。

『ふふふっ、さすがに何度も抱きつかれたからね。今のは僕でも読めるよ』

ココネ：『ううう……、ユキくんがグレてしまいました……』

ココネが目元に手を当てて泣く真似をする。それを見た僕は慌ててしまう。

『わわっ、べ、別に僕はグレたわけじゃないよ。そ、その……、泣かないで……』

ココネ：『今ですー!』

ココネが骨クッションを退けて僕に抱きついてくる。

『わ、わふっ!?!』

手足をバタつかせても逃げる事ができない。
そして、ココネは満面の笑みを浮かべていた。

ココネ：『えへへっ、ユキくん成分補充ですう……』

『わふわふ……、は、離して……』

ココネ：『だめですよお……』

カグラ：『はあ、全く……』

頬をスリスリしてくるココネとそこから必死に逃げようとする僕。そして、その側でカグラはため息を吐いて僕を助け出してくれる。すると、ココネは名残惜しそうな表情を見せてくる。

カグラ：『ユキ……、そろそろ衣装について詳しい説明してくれるかしら』

『わふっ!?! あっ、助かったよ……』

ココネ：『ゆ、ユキくんを取られました……』

カグラ・』と、取ってないわよ!? こうしないといつまでも話が進まないでしょ!?!』

『うん、捕まったらまだと何もできなさそうだったよ……』

ココネ：『ゆ、ユキくんが可愛すぎるのが悪いんですよ。姫風の口リータファツションなんて、ユキくんに似合いますぎててお持ち帰りしなくなつて当然なんですよ! 犬好きのみなさんもそうですよね!?!』

【コメント】

：ユキくん拾いたい

：犬姫かわいい

：かわいいは正義

：ユキくんを拾うのは俺だ!

：ロリ犬姫最高

《…?5000 姫代》

『わ、わふつ?!? ぼ、僕の味方はいないの!?!』

ココネ：『これでユキくんの可愛さが証明されました』

カグラ・』はあ……、また話がズレてるわよ。ユキくんの新衣装の話をするのでしよう?』

『そ、そうだった。実はアカネ先輩から、この新衣装の展開図をもらつてるんだよ。正面から見たユキくんほくと横から見たユキくんほくと後ろから見たユキくんほくがわかるんだよ。えつと、どこだったかな?』

パソコンを弄つて展開図を探す。

『あつたあつた。みんな、これを見てくれるかな? ユキくんほくの展開図なんだけど、さっきのだと後ろまでは見れなかつたけど、後ろもしっかりとフリルが描かれててとってもかわいいんだよ。それにそれに背中からみるとどれだけ髪を伸ばしたかよくわかるよね。あとは……あれっ、この右下のつて——』

よく見るとそこにはとんでもないものが描かれており、僕は思考が停止してしまう。

そして、すぐに顔が赤くなって、モニターを手で隠してしまう。

『だ、ダメええええ。み、見たらダメえええ!!』

展開図にはユキくんの下着についても書かれていたのをすっかり忘れていた。

可愛らしい犬の足跡模様がついた白のパンツ。

その下にアカネさんの文字で「パンツもこだわっておいたよ。犬柄パンツだよ」と書かれていた。

【コメント】

：犬柄パンツw

：パンツ助かる

：まさかの下着大公開

《：?5, 000 パンツ代》

：パンツ助かる

慌てて、画面を弄って、下着の部分を見えないように調整する。

ただ、それでも恥ずかしさは消えなくて、顔を真っ赤にしていた。

『ううう……、みんな、今のは忘れて……。何も見なかったことにして……』

ココネ：『切りぬきさん、お願いしますね』

『み、身近に裏切り者がいたっ?!?』

ココネ：『だってかわいいものはじっくり見たいですよね?』

『た、確にかわいいものは見たいですけど、ぼ、僕はその……。かわいいわけじゃない——』

ココネ：『かわいいです！ ユキくんはどこをどう見てもかわいいですよ!? カグラさんもそう思いますよね?!?』

カグラ：『え、ええ、確かに悔しいけど、ユキはかわいいわね。そこは間違いないわ』

ココネ：『ほらっ、カグラさんもそう言ってますよ。だからユキくんのかわいいところを見るのは何もおかしいことじゃないですよ』
『そ、そうなのかな……?!?』

【コメント】

：ココママの洗脳w

：ユキくんwww

：さっきのことも忘れてそうw

：なんだろう……、今日はカグラ様よりココママの方がポンコツに見えるw

『わ、わふっ!? そ、そうだよ、かわいいとかそういうのじゃないんだよ!? 全世界に僕の痴態が公開されてしまったんだよ……!? ううう……恥ずかしいよおお……』

カグラ：『——今更気にしても仕方ないわよ。それよりも犬好きたちが配信を待つてるわよ。ほらっ、頑張って』

『か、カグラさん……。うん、ありがとう。そ、そうだよね。僕たちを見に来てくれてるんだもんね。僕、頑張るよ』

ぐつと両手を握りしめて気合を入れる。

まだ少し恥ずかしさは残るものの、もう目を回して動けなくなるよ
うなことはなかった。

第10話：幸運虎とぐうたら羊 #羊虎／雑談する
よー #ココユキカグラ

『《#羊虎》うみゅー、王冠を取るの！《羊沢ユイ／貴虎タイガ／シロ
ルーム》』

2. 8万人が視聴中 ライブ配信中

☒847 ☒2 ?共有 ≡?保存 …

ユキくんがライブ配信をしていた頃、ユイもコラボ配信を行っていた。
た。

コラボ相手は貴虎タイガ。

内容はゲーム配信ということもあり、パーティー系のアクション
ゲームを準備していた。

基本的な操作は移動やジャンプ、掴む……くらい。

ラウンド毎に参加者が減っていったって、最後の一人になるまで競い合
うといったパーティーゲームだった。

タイガは基本壁があれば壊して進むタイプ……、ということを知り
ていたので、こういったシンプルなゲームの方がいいのでは、と思っ
たのだ。

【コメント】

：珍しい組み合わせ

：動物ペアだな

：のんびりユイっちと暴走タイガか

：しかも今日するゲームってオンライン対戦のやつか

：ユイっち勝てるのか？

——— どういうこと？

ユイはかなりのゲーマーとして知られているはず。
そうなると思えば普通はタイガが勝てるのか、と思うはずなのに……。

疑問を抱きながらユイは配信を始めていた。

ユイ 『うみゆー、こんみゆー。ゆいはお布団の守り神、羊沢ユイなのー。よろしくなのー』

【コメント】

：うみゆー

：うみゆー

：こんみゆー

《：うみゆー うみゆー》

：こんみゆー

：お布団の守り神w

ユイ 『うみゆー。それじゃあ、そろそろ配信を終わりにするの。
お疲れ様なの』

タイガ 『おっ!?! もう終わりなのか? お疲れー!』

ユイのボケに対して、ツツコミが来ずにタイガも乗っかって来る。

ただ、そこまでは想定通り。むしろ先を読みやすいタイガだからこそ準備できた流れだった。

ユイはそのままエンドロールを流す。

【コメント】

：w

：ユイちゃんw

：本当に終わりそうw

：ついにぐうたらするユイちゃんの悲願が果たせるか？w
：タイガがこの流れを破壊してくれるはず

エンドロールも終わり、配信を終了させようとした、そのタイミン
グでキャスコードの通知音がる。

ピコっ！

いつもなら絶対にしない通知音鳴らしというミスを敢えてする。
その送り主はもちろん担当。

マネ　：「ちゃんと配信はしてください」

よく見てるな、と思わず感心してしまう。

ユイがぐうたらしすぎた時にいつもこの注意が飛んでくる。

ユイ　：『うみゆー、担当さんに怒られたから仕方なく配信を続ける
のー。めんどいのー』

タイガ：『続けるのか!?　よし、任せろ！』

何事もなかったかのようにエンドロールを消して、アバターを表示
する。

羊型アバターのユイに対して虎型のアバターのタイガ。
黄色と黒のコントラストな髪の中に耳があり、スレンダーな体つき
と細く長い尻尾。

そして、服装も黄色と黒の袖なしワンピースを着ていた。
それはもう、どこからどう見ても虎にしか見えない。

そして、食物連鎖から考えると、ユイは食べられる立場にいた。

ユイ　：『うみゆー!?　よく見るとゆいは羊だから食べられちゃう!?』

大ピンチなの』

タイガ：『ジンギスカンって美味しいもんな』

斜め上の回答をしてくるタイガ。

確かにこれは他の人とは違う対応が必要になりそうだった。

ユイ：『うみゆみゆ!? 食べる気!? ゆいを本当に食べる気なの

!?!? ゆい、ピンチなの!?!?』

タイガ：『ユイってジンギスカンだったのか!?!?』

口元に手を当てるタイガ。

それをみると本当によだれを垂らしている様に思えてしまう。

ユイ：『うみゆ、ち、違うの!? ゆいはゆいなの! ラム肉じゃないの!』

タイガ：『あははっ、なら問題ない!』

ユイ：『うみゆー……、調子狂うの……』

【コメント】

：さすが暴走枠w

：ユイちゃんが手玉に取られてるねw

：下手に考えるとドツボ嵌まるからなw

《：?2, 000 ラム肉代》

：二期生は三期生みたいに素直な子が少ないからなw

ユイ：『と、とりあえず気を取り直して……。今日はタイガと一緒にゲームをするのー』

タイガ：『ゲームと言えば俺だからな。任せておけ!』

ユイ：『うみゆ、どこからこの自信が来るのかわからないけど、一緒に王冠を目指すの』

タイガ：『おう! んっ、なんだこのマトリョーシカみたいなやつ

は。敵か?』

ユイ 『うにゆ、それは自分の操作キャラなの。自分で自分を倒したらダメなの。ふう……、今日はツツコミが大変で疲れそうなの……』

【コメント】

：ユイちゃん頑張れ

：なんだろう、結末が既に見える

：石橋を叩いて粉碎するタイプだからな、タイガ

：自分が……だよな? w

：もちろん周りにいる全員を……だよ w

タイガ：『早速始めるか……って、いきなりどこかに落ちてるぞ?』

ユイ 『参加者を探してるだけなの。しばらく待つと良いの』

タイガ：『よし、始まった。で、なんだこれは? たくさん扉があるぞ?』

ユイ 『うみゆ。それはいくつかある扉のうち、通れるのが数個だけあるの。それを何回か繰り返して、規定人数以内にゴールするといいの』

タイガ：『なるほど。要するに突っ込めばいいわけだな!』

ユイ 『うみゆみゆ!? ち、違うの。た、正しい扉を見つけないとダメなの!』

【コメント】

：ユイちゃん草

：まあ、説明を聞くタイプじゃないもんな w

：でも、これってタイガ最強のやつじゃないか?

：ああ、運が絡むものでタイガに勝てる人間はいないだろう?

：でも、羊だ w

そして、ゲームが開始される。

六十人ほどのキャラが一斉に動き出してゴールを目指していく。まっすぐにゴールを目指すのもあり、妨害もあり。とりあえずなんでもできるゲームだった。

タイガ：『数がいたらとりあえずぶっ飛ばしたくなるよな？ パンチはどのボタンでできるんだ？』

ユイ：『うみゆ!? そんなボタンはないの!?!』

タイガ：『ちっ、残念だ。とりあえず俺はとことんまっすぐ進むぜ!!』

そういうとタイガはまだ開いていない扉に向かってまっすぐ進んでいく。

すると、その扉は正解だった様であっさり先に進んでいく。

ユイ：『うみゆ、運がいいの……』

タイガのあとを追いかけていくユイ。

これは椅子取りゲームの様なもので最初は一位になる必要はない。脱落さえしなければ良かった。

——最終的に勝てば良い。

そう思っていたのだが、運が良かっただけに思えたタイガから嫌な雰囲気を感じ取った。

理由はわからない。

でも、全力を出さないと負ける様な気がした。

自分の全力……。つまり手の内を隠しつつ、最後の最後で勝利をつかみ取る。

ゲームにおいてユイに負けはない。

この嫌な感覚を感じたからこそ平静を保たないといけない。
ユイは大きく深呼吸をして、いつもどおりの態度を取る。

ユイ : 『タイガは初っぱなから飛ばしすぎなの。最初は流すだけで良いの』

タイガ : 『はははっ、負け惜しみか？ 悔しかったら勝ってみろ！』

ユイ : 『うみゆ、言ってるの良いの。最後に勝つのはゆいな。本気を出すまでもないの』

【コメント】

：ユイちゃんはいつも通り挑発してるw

：ゲーム勝負だから本気なんだなw

：ゲーム操作は下手だけど、幸運だけで全てを破壊するタイガw

：選ばれるゲームは全て運系か。

：勝てるのか？

：幸運虎にぐうたら羊が挑む！

瞬時に判断して、最短ルートを辿っていくユイ。

しかし、突っ込んだ先、全てが正解の扉であるタイガに勝てるはずもなく、初戦は二位という結果になった。

ユイ : 『うみゆ、無事に通過したの』

タイガ : 『はははっ、まだまだ俺には勝てないな。もっと全力を見せてみる！』

何もせず、運だけで勝った様に思ってしまうのは初心者のことだろう。
ユイほどのゲーマーになるとはつきりわかる。

運も実力のうち。

そして、タイガは自分の力を遺憾なく発揮している。

だからこそ、ユイも全力を出して立ち向かわないといけない。

ユイ：『うみゆ、最後の最後はゆいが勝つの』

◇◇◇

それからユイとタイガは一進一退の勝負を繰り広げていた。

完全に運だけのものはタイガが圧勝。

少しでも技巧が必要な物だと競い合う。

そして、ついに最終戦。

最後に勝ち残った者が優勝となるまで来た。

残った人数は八人。

ゲーム内容は妨害してくる障害物を避けて、頂上にある王冠をとる。

タイガ：『なかなかやるな』

ユイ：『うみゆ、ついに最後の勝負なの。覚悟するの』

ユイとタイガは二人、バチバチと火花を飛ばし合っていた。

【コメント】

：ど、どっちが勝つんだ？

：ユイちゃん、頑張れ

：タイガも負けるな

：目が離せなくなってきた

最後の勝負が始まる。

ユイもタイガもまっすぐに頂上を目指していった。ただ、タイガだけはほぼ障害に引つかからずにまっすぐ進める一方、ユイはどうしてもそれを躲すのに時間がかかる。でも、それをユイ自身が最短ルートを見極め、ミスのないプレイで差を縮めていく。

そして、山頂にほぼ同時にたどり着く。

——あとは王冠を取るだけ。

そして、ほぼ同時に王冠をつかみ取る。

タイガ：『……………』

ユイ：『……………』

最後の最後に運の勝負。

でも、ユイとしては全力で挑んだ結果の勝敗。どちらに転んでも納得するつもりだった。

タイガ：『……………負けたよ』

タイガのその言葉でユイはようやく自分が勝利していることに気づいた。

いつもならわかりやすいように喜ぶのだが、今回ばかりは違った。

ユイ：『うみゆ……………、良い勝負だったの』

タイガ：『そうだな。またやりたいな』

お互い友情の様なものが芽生えた気がしていた。だからこそユイはにっこり微笑んで言う。

ユイ：『うみゆ、疲れるからもう嫌なの』

タイガ『えっ!? ち、違うだろ!? そこはがっちりと拳をつけ合っ
て再戦を約束するところだろう?』

【コメント】

・草

・ユイちゃんらしいw

・予測できない羊w

・ぐうたら羊が買った

《:う:10,000 おめでとう》

・良い勝負だった

・ユイちゃん、おめでとう

ユイ : 『嘘なの。楽しかったの。またやるの。次は最初から本気
を出すの』

タイガ : 『ああ、正面から粉砕してやる!』

結果的にお互い笑い合って終わることができた。

ユイ : 『うみゆ、次は一切運が絡まないゲームを用意するの』

この放送は終了しました。

『《#羊虎》うみゆー、王冠を取るの! 《羊沢ユイ／貴虎タイガ／シロ
ルーム》』

3.9万人が視聴 0分前に公開済み

☑1.1万 ☑24 ?共有 ≡?保存 :

チャンネル名:YuiRoom.羊沢ユイ

チャンネル登録者

数10.1万人

◇◇◇

【コメント】

：ユイツチ酷いw
：確実に勝つつもりだw
：まあ、タイガのあの幸運はチート級だからな
：乙うみゅー
：草

◇
■
◇

『《#ユキ犬姫拾いました #ココユキカグラ》ユキくん、新衣装発表
!?! 《雪城ユキ／真心ココネ／神宮寺カグラ／シロルーム三期生》』

5. 8万人が視聴中 ライブ配信中

☒ 5, 874 ☒ 21 ?共有 ≡?保存 …

新衣装発表が終わり、顔を真っ赤にしていたもののカグラのおかげ
で僕の気持ちは落ち着いていた。

『えとえと……、衣装の話が終わったし、僕の家で過ごした話でもしよ
うかな?』

ココネ：『私とユキくんが一緒にお風呂に入った話ですね』

【コメント】

：ユキくんとココママがお風呂か……

：ユキくんが体を洗ってもらったのかな?

：泡を嫌がるユキくん……

：ダメだ、俺はもう逝く……

『ちよ、ちよっと、堂々と嘘をつかないで!! い、今はココママの妄
想話だからね。そんなこと、一切なかったからね!!』

ココネ：『もう、ユキくんは照れちゃって……。私が優しく体を洗っ
て上げたじゃないですか』

『わ、わふっ、そ、そんなことないよ!!』

カグラ：『はいはい、ココネもその辺にしておきなさい。またユキが

目を回して倒れるわよ』

『ぼ、僕は大丈夫だよ!? もうそんなことはないよ……。もう子供じゃないんだし……。子供?? あっ、そうだ。一つ、ココママを問い詰めないといけない話があったんだ……。』

ココネ：『——そろそろ配信終了にしましょうか?』

『しないよ!? それよりココママは僕のこと、小学生だと思っ
てない? さつきははぐらかしてきたけど』

【コメント】

：ユキくん小学生疑惑w

：確かに見た目的には十分ありえる……。w

美空アカネ　：ランドセルユキくんも良いね

：暴走特急だww

：あれっ、これって次の新衣装……。w

：ユキくんは小学生

：なんだ、ロリかw

『な、なんで小学生派の方が多いの!? こう見えてもちゃんと十九歳だよ!? 今月末に二十歳になるよ!? お酒も飲めるよ!』

ココネ：『えっ?? ユキくん、今月末が誕生日だったのですか!』

『えっ? あっ、うん。そ、そうだけど、どうして??』

ココネ：『……。誕生日記念配信をしないといけませんね』

一瞬間を開けたココネ。ただ、にっこり微笑んでとんでもないことを言ってくる。

『こ、ここでも記念配信が来るの?!?!』

カグラ：『こればかりはしかたないわね。まあ、頑張りなさい』

『ううう……。わかったよ。担当さんから連絡があったら考えるよ
……。』

【コメント】

・誕生日と言うことは記念品も発売するのか!?

・楽しみ

・そういえば三期生の誕生日を忘れていたな

・今月末か。バイト代貯めておく

『わわっ、ま、まだ決まったわけじゃないから!？　そ、それにお金は無理に使ったらダメだからね!？　自分の生活を優先してね!？』

カグラ：『誕生日だと記念ボイスとかを販売するわよね？　ユキ、本当に何も聞いてないの?』

『うーん、まだ全然……』

カグラ：『なら覚悟しておくの良いわ。どんなボイスにするか考えないといけないから』

『う、うん……。ちよつと覚悟しておくよ』

ココネ：『前もって担当さんに確認しておいて、ちゃんと予約しておかないと——』

『——ココママ?』

ココネ：『べ、別に私はユキくんのボイスを買えばいつでも聞ける、とかそんなことは考えていませんよ!?!』

それはほとんど答えを言っている様なものだった。

僕はため息交じりに言う。

『ココママならいつでも僕の声聞けるでしょ?　ほ、ほらっ、キヤスコードの通話でも話せるわけだし……』

ココネ：『えっ?　通話しても良いのですか?　ユキくん、嫌がるかなって極力チャットにしてたんですよ?』

『も、もちろんだよ。き、緊張はするけど、その……、さ、三期生のみんななら断る理由はないよ』

ココネ：『あ、ありがとうございます』

『わわっ、だ、だから抱きつかないでー』

再びココネに捕まった僕はそのままバタバタと手足を動かしていた。

【コメント】

：今まで通話してなかったのかw

：ココママ草

：また捕まったw

美空アカネ　：妄想が捗るね。一体ナニをしてるのかな？

：カタカナw

カグラ：『まったくもう……』

『わふわふ……、ココママ、離してよ……』

ココネ：『ユキくん、暖かいですう……』

『ぼ、僕で暖を取らないで……。というか、もう蒸し暑くなってくる時期だよね!?!』

カグラ：『ほらっ、じゃれ合うのは後からにきなさい。そろそろ放送時間が終わるわよ？　最後に衣装をもう一回見せた方が良いわよね？』

『わ、わふっ、わかったよ。ほらっ、ココママ、離れて……』

ココネ：『……仕方ないですね。ユキくんの晴れ姿のためですから——』

ココネが離してくれた瞬間に僕はカグラの後ろへと移動する。

カグラ：『ユキ、私の後ろに隠れてないでほらっ、最後の挨拶をして』

【コメント】

：ココママ警戒されてて草

：カグラ様がお姉さんにw

：ユキくんw

『わ、わふっ、きよ、今日は僕の新衣装公開ライブに来ていただいたありがとうございます。途中で、その一部お見苦しいものをお見せしましたが、無事放送することができて良かったです……』

ココネ：『大丈夫ですよ、ユキくん。みんなわかってますから』

カグラ：『そうね、ユキがミスをするのは今更だからね』

ココネ：『ええ、すっかり切り抜いて後世にユキくんのかわいいところを広めてもらいますね』

『そ、そんなことをしたら僕、その……、泣いちゃいますからね。だから、あのシーンは切り抜かないで……。お願いします……。』

【コメント】

：はい

：はい

：はい

《：う・50,000 ユキくん、泣かないで》

美空アカネ　：誰も切り抜かなかったら私がするね

：草

：みんな返事だけ良すぎw

『そ、それじゃあ、本日もありがとうございました。乙わふ——』

この放送は終了しました。

『《#ユキ犬姫拾いました #ココユキカグラ》ユキくん、新衣装発表!? 《雪城ユキ／真心ココネ／神宮寺カグラ／シロルーム三期生》』

6. 7万人が視聴　0分前に配信済み

☑2. 0万　☑23　?共有　≡?保存　…

チャンネル名：Yuki Room・雪城ユキ

チャンネル登録者数19.1万人

第11話：引退配信 井夏瀬なな＋α

ココママとのコラボが終わってから数日が過ぎた。
記念配信をすることになってしまったので、僕は慌ただしい日々を送っていた。

まずはボイスの収録。

これは自分で犬好きさんたちへ向けたメッセージを言うのだが、やはり喜んでもらえるようにしたい。

そうなるたた喋るだけでは不十分。

出来るだけ気持ちを込めたものにしたい。

しかも、ボイスの内容は僕のおまかせらしい。

「や、やっぱり告白するようなセリフ……だよな?」

考えただけで顔が赤くなってしまう。

一応このことでココネたちにも既に相談はしているのだが――。

ココネ：「ユキくんの告白が聞きたいです! 一生の宝にします!」

カグラ：「そうね。日々のお礼でも言ったらどうかしら?」

ユイ：「うみゅー、寝言をいれておくのー」

ココネは本能剥き出しだし、カグラさんののは硬い気がする。

ユイは……まあ特殊な需要はあるかもしれないけど、どれもピンと来なかった。

一番近いのはココネのやつだろうけど、流石に特定の誰かに対する告白なんて恥ずかし過ぎて、考えるだけで、頭が蒸発しそうになる。

——もう少し僕にも言えて、それらしい台詞はないかな？ でも、他に相談する人は……。

「キャスコードの連絡先を見る。」

——七瀬とかはどうか？ 僕の悩みも共感してくれるかもしれないし……。

それとは別に七瀬について気になることもあった。

今までは「さすらいの犬好き」として配信に来て、スパチャを投げ続けていた。

更にコメントもしっかり残してくれていたのが、ここ最近のライブ放送ではその姿を見かけていない。

最初はこういう日もあるかな……くらいに思っていたのだが、それが何日も続くと流石に気になって来る。

「二応連絡を送っておこうかな。何かあったのなら力になれるかもしれないし……。」

そう考えた僕は七瀬へチャットを送る。

既にできている四期生のアカウントへ。

アカウント名は「天瀬ルル」。

小さいアイコンでしか見れないが、青銀色の髪をしていて、長さは肩くらいのショート。その頭の上に金の輪っかが見えるので、天使系のアバターだと推測できる。

それがシロルームでの七瀬のアカウントだった。

ユキ : 「最近あまり姿を見かけませんが、お元気にしてますか？」

ココネとかに送るときはこんなに堅苦しく送らないのに……、と思わず苦笑してしまう。

そもそも七瀬にチャットを送ること自体、これが初めてなので仕方がない。

忙しいならばらくは返ってこないかも、と思ったが、すぐにチャットが返ってくる。

ルル : 「す、すみません。ここ最近、四期生の活動の準備と夏瀬なの活動を終えることの後始末に追われて、ライブ配信に行けてないんです。で、でも、その分アーカイブは毎日ずっと聞いてますよー」

毎日ずっと聞いている、って部分は聞きたくなかった。

元氣そうでよかった……。

すると、そのアイコンから通話がかかってくる。

ルル : 『もし、よかつたらなんですけど、今度夏瀬なの引退放送をするので、そのときに枠に来てくれませんか？ ち、ちよつとだけでもいいので……。ユキ先輩がいるってわかると私、頑張れる気がするので——』

七瀬の声は少し震え、怯えている様子が見てとれた。

引退放送となると今までのファンから何を言われるかわからない。それに今まで続けてきたアカウントでの最後の配信。

恐怖や悲しみ、その他色々な感情が入り交じっていて押しつぶされそうになっているのだろう。

僕が行くだけでそれが和らぐなら力になりたい。ただ、実際に顔を出すと色々と問題がある。

「僕はあくまでも企業所属のV t u b e r。」

他人のところには顔を出すには担当の許可がいる。でも確認をするくらいならいいはず。

ユキ　：『色々確認してみるよ。ただ、期待しないで待っててね』
ルル　：『は、はい。あ、ありがとうございます……』

今は怯えている七瀬だが、きつと配信になったら自分を押し殺して、夏瀬ななを演じるのだろう。

それがどれほど苦しいのか、僕にはわからない。

僕にできることはだが、七瀬を応援して背中を推してあげることだけ。

七瀬自身が決めたシロルーム四期生。その楽しさを教えてあげることだけだった。

——うん、そうだよ。七瀬は僕に来て欲しいって言ったんだから、僕ができることは七瀬の力になることだけだよ。

覚悟を決めた僕はすぐに担当さんに連絡を取る……前にまずは母さんに電話をしていた。



『《引退放送》今までありがとう。夏瀬なな最後の放送だよ！』

8. 0万人が視聴中　ライブ配信中

☒ 2, 3 8 4　☒ 2 7 1　? 共有　≡? 保存　…

【コメント】

：夏瀬ちゃん、本当に引退するの??

：始まった

：嘘……。今知った

：ずっと推しだよ

なな 『みなさん、こんばんは。夏瀬ななです。今日はたくさん集まっていたいただいてありがとうございます』

七瀬はいつもの雰囲気話し始めていた。

そこに変わった様子はない。

でも、よく見ると体が小刻みに震えている。

なな 『突然の発表、驚いたよね。うん、私も驚いた。まさか私がこんな決断をするなんて。本当にごめんなさい』

七瀬は頭を下げて謝っていた。

なな 『で、でも、これだけは言わせてほしいの。悪い理由での引退ではなくて、むしろ逆！ 私の夢のために。どうしても私のやりたいことをするために、引退を決意しました！』

【コメント】

：ほ、本当に引退するのか？

：夏瀬ちゃんの夢、応援するぞ

：がんばれー

なな 『みんながいたから私はここまで来られたんだよ。だから、みんなには感謝してもし足りないよ。本当にありがとう……。』

【コメント】

：夏瀬ちゃん、今までありがとう

：俺も感謝してるよ

：寂しいよー

なな　：『それじゃあ、最後の配信、いっくよー!』

七瀬が笑顔を見せて楽しそうに歌い出す。

そこには先ほどまでの震えていた七瀬奈々はいない。

今いるのはみんなを楽しませようとしている夏瀬ななだけだった。



なな　：『……楽しい時間ってあつという間に過ぎていくね。うん
……、色々とあつたけど、夏瀬ななとして過ごしていた時間は私に
とって大切なものだったよ。少しだけ心残りがあるとすれば、その
……最後には来て欲しかったかな……。うん、仕方ないんだけどね
……』

七瀬はコメント欄に視線を向ける。

もしかしたら……. と思っていたけど、やっぱり難しかったのだら
う。

別アカウントでコメントしてくれたのかもしれないけど、その場
合、やっぱり判断することはできない。

かといって、ユキくんアカウントだと、どうしてもシロルームの企
業としての意向がある。

——仕方ないよね。

そう思い、苦笑いしてコメント欄から視線を外す。

すると、このタイミングでキャスコードの方から通話がかかってく
る。

相手は——ゆ、ユキくん!?

なな 『み、みんな、ごめんね。ミュートにするからちよつと待ってて』

大慌てでミュートにしたあと、通話をとる。

なな 『ゆ、ユキくんですか!?!』

ユキ 『わふつ、お、驚きすぎだよ。……うん、僕が遅れたのが悪いんだよね。ごめん……』

なな 『そ、そんなことはないですけど、その——』

ユキ 『と、とりあえず詳しい話は後にしよう。コラボ許可をもらってきたよ』

ユキの声が震えている。

かなり無理をしているのがよくわかる。

——私のために? まだ会って数回の、ただ先輩後輩の間柄である私のために? ううん、ユキくんはこういう人なんだ。臆病なくせに優しいんだ。先輩後輩関係なく、困ってる人なら助けてくれる。だから私も惹かれたんだ——。

今日もただ一言、コメントをしてくれるだけでよかった。私も言葉足らずで全部伝えていなかったのは悪かった。

でも、私のためにかなり無理をしてくれたのだろう。企業系Vtuberであるユキが、今は個人のMe eTuberである夏瀬ななとコラボをするなんて……。

並大抵のことで承諾が得られるとも思えない。

それでもそんな苦労をお首に出さないで、いつものように……。

——全くこの先輩は……。本当に最高のサプライズプレゼントを

くれるんですね……。

七瀬は目に涙を浮かべながら笑顔を見せていた。



【コメント】

：遅いな……

：何かトラブルか？

：電話でもきたのか？

：あつ、戻ってきた

：ななちゃん、泣いてる？

なな　『み、みんな、ごめんね。すごく待たせちゃったね。そ、その……、私も突然のことで驚いちゃって……。ある人が私の引退にあたってサプライズプレゼントをくれたんだよ。それが嬉しくてその……』

七瀬の目からは涙が止まらずに溢れ出ている。

しかし、その表情は笑顔で悪いことがあったのではない、ということだけわかる。

ただ、その涙もすぐに拭って笑顔を見せていた。

なな　『と、とりあえず、ここにも来てくれたから、みんなにも挨拶をしてもらおうね』

七瀬に促された僕は覚悟を決めて、大きく深呼吸をする。
そして、気合を入れて大声で言う。

『わ、わふうー!!　み、皆さん、こんばんはー!!』

しかし、音量調整に失敗しているのか、その声はほとんど聞こえなかった。

【コメント】

：誰が来たんだ？

：全く聞こえないよ？

：遠くの方から小さい声だけは聞こえたな

速攻帰りたくなる。

自分の枠だったら今すぐにでも切っていたかもしれない。

でもここは七瀬の枠。

しかも、最後の配信枠だ。

この程度で負けるわけにはいかない。

一旦音量調整を行なった後、もう一度僕は挨拶をする。

『わ、わふうー。こ、こんばんは。こ、今度は聞こえてるかな？ まだダメなら言っしてほしいな？』

なな　：『私の方は大丈夫だよ。だから隠れようとしなくてね』

【コメント】

：聞こえたけど、この声って……

：ま、まじか？

：大事な時にミスをして場を和ますこの感じ……

：どうやって連れてきたんだ??

：他のライバーならともかく同期からも逃げる臆病だぞ？

：ユキ犬姫だああああ
!!!!

散々な言われようだった……。

……。
というか、七瀬のリスナーたちにも僕のこと、知られているんだ

そう考えるとどこかいつもと同じような雰囲気を感じてくる。

『えっと……、ぼ、僕だってやる時はやるんだよ……。本当は今も逃げ出したいくらい緊張してるけど、今日に限っていえばやらないといけない時だからね。それとユキ犬姫……は広めたくていいよ。ただの犬、でいいからね。シロルーム三期生、雪城ユキです。その……、夏瀬ななさんが引退されると聞いて、コラボの許可を取ってきました。ど、どうぞよろしくお願いします……。』

僕が言い終わると七瀬はユキくんのイラストを画面の端に表示してくれる。

なな　：『本当にびっくりしたよ。確かに私の枠に来て欲しいって言ったけど、まさかコラボの許可まで取ってきてくれるなんて……。』
『えっと、だって「来てほしい」ってコラボのことだよ？　だからちよつと色々頑張ったんだよ』

普通ならかなり厳しいコラボ許可。

だから僕はまず母さんに相談を試してみた。七瀬の個人アカウントでの最後の活動を応援してあげたい……。と。

ただ、いつもなら二つ返事をくれる母さんでもこの時ばかりは回答を渋っていた。

だから、何度も何度も説得を繰り返して、ようやく母さんが頷いてくれるから担当さんに相談をした。

僕にしてはかなり動いたと思う。

母さんにはココネに買ってもらった服を着て写真を撮らせる約束をさせられたが――。

なな　；『えっと、それはコメントがほしいなってことだったんだよ。流石にユキくんは企業所属のVtuberなので、できてもこの辺りかなって……。』

『……僕、コメント欄に帰るね。乙わふ様でした』

なな　：『待つて待つて！　せつかくきたんだからゆつくりして
いつてよ。わ、私、本当に感動したんだから……』

【コメント】

：コラボしないでいいと分かった瞬間に速攻帰ろうとするユキくん
草

：いつものユキくんだw

：コラボ慣れしすぎたなw

：でも楽しそうな雰囲気

：ななちゃんが引退するんだって忘れそうだな

『ううう……、ここまで来ちゃったから仕方ないよね。今までお疲れ
様』

なな　：『あ、ありがとう……。ユキくんから言われると照れちゃう
ね』

『でも、本当に今日で最後なんだね……。その……、初めてコラボでき
たのもうお別れになっちゃうんだね……』

そのことを考えると、僕の方が悲しくなってくる。

七瀬の最後の配信だから楽しんでもらえるようにしないとイケな
いのに、目からポロポロと涙が出てしまう。

すると、七瀬は優しい笑みを浮かべる。

なな　：『ユキくん、私の代わりに泣いてくれたんだね。ありがとう
……』

『だって……。だって……。これが最後だと考えると本当に悲しく
なって……。これからもいてほしいのに……』

なな　：『大丈夫だよ、確かに夏瀬わたしなはいなくなるけど、天瀬わたしルル
はいるから。だから、これからもずっとよろしくね』

『うん……。うん……。そ、そうだよね。そうなんだよね……。こんな
ところで泣いてたらダメだよね』

僕も涙を拭いとる。

流石に七瀬みたいにすぐに元通り、と言うわけにはいかず、涙声のままだった。

なんとか笑みをこぼせるくらいにはなっていた。

でも、終了時間が迫ってくるややはり涙が堪えられなくなってくる。

そして、それは七瀬も同じのようだ。

なな　『本当に私は幸せだったよ……。リスナーに見守られて、ユキくんが駆けつけてくれて……。最高の引退配信だった……。今までの私だったら考えられなかった。グスツ……。ほ、本当に、本当にありがとう……。明日から夏瀬なはいなくなるけど、それでもみんなの心には残り続けるから。そして、私がこうして、Me e T u b e rとして成長できたのもみんなのおかげだから——』

『ううう……。ほ、本当にいなくなっちゃうんだね……。ぼ、僕は忘れないよ。ちゃんと心に刻みつけるからね……。』

なな　『ユキくん……。うん、大丈夫だよ。私自身はいなくならないよ。ちよつと違う道へ進むだけだからね。だから、もし別のところで新しい私に会えたら……。その私が今よりも……。ううん、今とは比べ物にならないほど楽しそうにしていたなら、そつと背中を押してほしいな。もし、その私が不幸だと思うなら、無理やり夏瀬なへの道に戻してほしいな』

『大丈夫だよ……。夏瀬さんが楽しい生活を送れるように僕も協力するからね』

僕を見て決意したという七瀬。

先輩として、仲間として、そして、この配信に呼んだもらった友人として……。七瀬に楽しんでもらえるように頑張らないと。

【コメント】

：今までありがとう
：絶対に忘れないよ
：お疲れ様
：本当にありがとう

なな　：『みんな、本当にありがとう。……お、終わるタイミングがないね。私だと終われないかも……。ゆ、ユキくん、終わりの挨拶、お願いしてもいいかな？』

『ぼ、僕!?! うん、わ、分かったよ。でも終わりじゃないよね？　始まりの挨拶だよね？』

なな　：『で、でも、今日は最後の配信で……』

『な、夏瀬さんが新しい道へ進む記念の日だから……。そ、その……。終わりじゃないよ。だから、今までありがとう。これからも頑張っていこうね!』

なな　：『う、うん！　みんな、本当に今日はありがとう』

この放送は終了しました。

『《引退放送》今までありがとう。夏瀬なな最後の放送です』

9. 8万人が視聴　0分前に配信済み
☒ 2. 0万　☒ 13　？共有　≡？保存　：

◇◇◇

『《＃ユキ犬姫拾いました》いまのきもち……聞いてほしいな《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

1. 2万人が待機中　20XX／06／13　23:00に公開予定

☒ 392　☒ 0　？共有　≡？保存　：

夏瀬なな引退放送の後、僕は落ち込む気持ちを隠しきれずに思わずゲリラ配信をしていた。

引退自体はどうすることもできないこと。

——だからこれは僕の愚痴……。

それを犬好きさんに言うのは気が引ける。

でも、この気持ちを隠したままにするのも何か違う気がしたので、思いきって梓を取っていた。

すでに始まっているミニアニメ。

いつものようにコメント欄が流れていく。

【コメント】

：ユキくんの気持ち？

：珍しいタイトルだな

：何かあったのかな？

：昨日のアレじゃないか？

：ああ、ユキくん泣いてたもんな。

すでに察しがついている人もいるようだった。

ミニアニメが終わったのを確認したあと、犬姫バージョンのユキくんを表示する。

もちろん段ボールの中に入れるのを忘れない。

『わ、わふう……』

いつもの挨拶をしようとしたのだが、言葉が出ず、声が漏れただけになってしまった。

弱々しい声……。

これだけで何かあったのだと理解できる。

【コメント】

：わふう

：わふう

：元気ないね

《：？10,000 元気出して》

：ユキくん大丈夫？

コメントでも心配されてしまう。

『だ、大丈夫……。うん、大丈夫だよ。ごめんね、心配かけて……。』

せつかく見に来てもらったのに、逆に心配させてしまったら申し訳ない。

もつとしつかりしないと……。

『そ、その……。き、今日はさつきあったことを話そうと思います……。』

思い出した瞬間に目から涙が出てくる。

『ううう……。も、もう知ってる人はいるよね。そ、その……。僕の知り合いだった夏瀬ななさんが引退を――』

ここまで言っつて、もう涙がだらだらと流れて、まともに言葉が出なくなってしまう。

【コメント】

：ユキくん頑張れ

：無理しなくていいんだよ

：落ち着くまで待つよ

『あ、ありがとう。む、無理じゃないよ。言わずにそのまま別の配信をすることもできたんだよ。でも、いつも来てくれるみんなには聞いて

欲しいなって思っ……』

涙を拭いながら、なんとか笑みを作ろうとする。

しかし、うまく表情を作れずに引き攣った笑みになってしまう。それでもなんとか話を続けていく。

『夏瀬さんが引退するのは聞いてたんだ……。悪い意味での引退じゃないことも知ってるし、夏瀬さんが完全にいなくなるわけではないことも知ってる……。でも、今まで頑張ってきたものが簡単に無くなっちゃう。それが急に怖くなったんだよ……。僕はいつまで雪城ユキでいられるのかなって……』

また涙が流れてしまう。

【コメント】

：安心して

：ユキくんはユキくんだよ

：大丈夫だよ

『うん、ありがとう。大丈夫、僕はもう大丈夫……』

涙を拭うと強い視線を向ける。

『僕は今のシロルームが好きだよ。友人でもあり、仲間でもあるココママやユイ、カグラさん……三期生のみんなが大好きだよ。少し暴走気味なアカネ先輩や落ち着いてるコウ先輩、他にも面白おかしくてもなんだかんだ優しい先輩たちが好きだよ。これから入ってくる四期生の後輩たちも好きだよ。そして、大好きさんたちのことももちろん大好きだよ……』

少し顔を染めながら言う。

恥ずかしいけど、大事なことなので顔だけ段ボールから出しながら……。

【コメント】

・告白助かる

・逝く……

・俺もダメだ

・衛生兵、衛星兵はいないか!?

・俺も逝く……

『だからね。僕はこの場所をなくしたくない。この場所は僕にとって
はかけがえのない宝物だから。だから、僕はこの場所を守っていく
よ。逃げ出したくなる時もあるけど、その……頑張るから。でも、僕
は何もできないただの犬だからね。もしよかったらだけど、犬好きさ
ん、これからも僕に力を貸してね』

ようやく持てた覚悟。

スカウトされたから……、とどこか他人事のように思っていた。

でも、これからは僕自身……。ううん、僕を含めたみんなといわれ
るこの場所を守るために頑張ろう。

【コメント】

《真心ココネ ……50,000 ユキくんは十分頑張ってますよ》

《さすらいの犬好き……50,000 やっぱり強いよ、ユキくん》

《……1,000 ユキくんのためならいくらでも手を貸すぞ!」

《……5,000 ユキくんがテンパつてるところは好きだ》

《……10,000 力になるぞ》

《神宮寺カグラ ……50,000 ユキが力を貸して欲しいなら仕方
ないわね》

《……50,000 少ないけどユキくんのためなら》

《：？30,000 今月これだけしか投げられない。ごめん》

《羊沢ユイ …？50,000 交通費とゲーム代なの》

《美空アカネ …？50,000 次のコラボ、いつにする？》

『わわっ、きゅ、急に来た!? た、たくさんありがとうございます。みんなが力を貸してくれるから今の僕がいるんだよ。でも、その……。無理は本当にしないでね。みんながいなくなると僕、悲しいからね』

いつもみんなには助けてもらっている。感謝してもし足りないくらいだ。

この放送は僕だけじゃなくて、みんな一緒に作ってるんだよね。

『あつ、あとユイ? そのゲーム代と交通費ってなにかな? アカネさんのコラボは……、ほらっ、来週にシロルーム全員のコラボがありますから、それで……』

【コメント】

：アカネパイセン、体良く断られて草

：全体コラボって何するんだろうな？

：シロルーム全員で12人か

：まだできるゲームがあるな

美空アカネ …くっ、かくなる上はえっちいイラストを人質に無理やりコラボを……

海星コウ …アカネ、何言ってるのかな? 最近あまりパソコンで暴走してないなって思ったらスマホでしてたんだね

美空アカネ …こ、コウ!? くっ、見つかってしまったか……。

羊沢ユイ …うみゅー、もちろん次にするVRゲーム用のお金なの。ユキくん、機材持ってないから

『いつの間にか僕の持ってる機材まで把握されてるのはなんでかな？

前のお泊まりの時? なんか部屋漁りしてたもんね』

VRゲーム機ってやっぱり値が張るから中々手を伸ばせなかったんだよね。

コラボで使うなら買ってもいいかもしれない。

『アカネ先輩はご愁傷様……。最近コウ先輩を見なくなって思ったらそんなことがあったんですね。全体コラボの内容は……。そろそろ発表されるのかな？ オフじゃなくなりそうだから僕としては嬉しいかな。うん……。』

【コメント】

真心ココネ : 予定通り配信が終わりましたら三期生でオフ会をしますよ？

: ココママ草

: ユキくんどんまい

『で、でも、夜だし、ぼ、僕、配信終わったら寝ちやうかも……。』

【コメント】

真心ココネ : わかりました。では、私の方が行きますね

: 草

: コラボ楽しみ

『わ、わふっ、本当に皆さん、ありがとうございます。おかげで少し気持ち楽になったかも……。で、ではそろそろ今日の放送を終わります——』

この放送は終了しました。

『《#ユキ犬姫拾いました》いまのきもち……。聞いてほしいな《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

2. 3万人が視聴 0分前に配信済み

☑ 1. 0万 ☑ 14 ? 共有 ≡ ? 保存 :
チャンネル名 : Yuki Room. 雪城ユキ
チャンネル登録者数 23. 0万人

第12話：大暴走！ 才オカミは誰だ!? ぱーとわん
#ポソコツルーム

結局ボイスは僕の……大好きさんたちへの気持ちを素直に言うことにした。

僕が決意したこと。みんなのことを好きなこと。

それが何故か担当さんには大好評で「是非とも次もお願いします」と言われてしまう。

成長して、ユキくんバージョン2になった僕は今までの僕とは違う。
前までならオドオドと断っていたところ。でも今は――。

『わ、わふう……、そ、その……、拒否権は?』

——うん、気持ちは変わっても人はそう簡単には変わるものじゃないよね。

まず当然のごとく断りから入ってしまう。
すると、担当さんにはつこりと悪魔のほほえみをしてくる。

マネ …『もちろんないですよ!』

『はあ……、なら僕に聞く理由がないですよね?』

マネ …『いえ、ユキくんが乗り気かどうかで、「たкусん」か「超たкусん」を決めようとしたんですよ』

『ど、どっちも変わらないよ!?!』

マネ …『今のユキくん人気、凄いですからね。そろそろ二期生を抜かしそうなほどに……』

『……僕、まだ何もできてないんですけどね』

むしろこれから本気を出してやっていこうと考えているくらいだった。

マネ : 『あつ、そうそう。今度のシロルームライバー全員による人狼ですけど、梓はユキくんのところで行きますので』

『えっ?!? ど、どうして僕の梓で?!?』

マネ : 『事の発端はユキくんの一言でしたからね。だからユキくんの梓であるのが一番自然なんですよ』

確かに全員コラボのきっかけは、僕が「大人数でコラボしたい」と言ったからだった。

そこからとんとん拍子に予定が組まれて、気がついたら全員でコラボすることになっていた。

まだまともに話したことがない人もいる。

それなのに全員コラボ……。

しかも梓主で……。

——ぼ、僕にできるのかな……。

マネ : 『大丈夫ですよ、ユキくんなら』

『だ、だから、僕の考えを読まないで!?!』

マネ : 『何もしなくても読めてしまうからダメなんですよ。わかりやすすぎますよ』

『うぐっ……。こ、こうなったら見ててくださいよ。次の人狼では僕が最後まで生き残りますから』

マネ : 『はい、楽しみにしてますね』

つつい担当さんに乗せられて、変な約束をしてしまった。でも、勝てば問題ないわけだよね。



『《#ポンコツルーム人狼》大暴走！ オオカミはだれだ!? 《シロルーム》』

3. 0万人が視聴中 ライブ配信中

☒ 1, 283 ☒ 5 ? 共有 ≡? 保存 …

ついに配信日当日。

配信画面にはシロルームのメンバー全員が映っていた。

そして、特殊なツールを使った上でのチャットが準備されている。

サムネはわざわざこの日のためにアカネが描いてくれた全員集合しているイラスト。

一応ゲームの司会進行を務めるGMはコウになっていた。

アカネ：『おい、なぜ私じゃないんだ!?!』

と、一部反対意見も出たが、そもそもこの暴走気味のシロルームメンバー全員を抑えられる常識人は数えるほどしかない。というより、おそらくコウしかいなかった。

コウ：『決まったものは仕方ないよ。ボクの代わりにアカネが生き残ってね』

アカネ：『仕方ないな。全力で生き残るよ!』

コウの一言であっさりアカネが引いてくれる。

これこそが飼育員と言われる所以だった。

『えとえと、そろそろ開始しますので、準備お願いしますね』

一応ライター皆に確認をした後、僕はライブ画面を切り替える。知らない人もいたので、緊張も一倍だった。

それでも頑張っていくと決めたのだから、気合を入れる。

配信画面はサムネと同じで全ライターが載っている。

流石に今日は2Dを使うわけにもいかないので、全員静止画だった。

ただ、話している時にはその人の画面が光ってくれる。準備はこのくらいでいいだろう。

早速僕は配信を開始する。

『わ、わふうー、みなさんこんばんは。えっと、ここからどうするんだろう?』

ココネ：『まずは村の紹介ですよ、ユキくん』

『そ、そうだった。ありがとう、ココママ。えっと、ここはシロルールのライバーが集まる村です。では、一人ずつ自己紹介と意気込みを言ってもらいますか?』

アカネ：『ふははっ、私は美空^{みそらあかね}アカネ。この村を統べる王ぞ。今日は村人を支配する王という役割をするよ。よろしくねー』

真つ先に自己紹介をするアカネ。

もちろん全力でネタに割り振ってきてくれるので、次の人も言いやすい空気を作ってくれる。

ユキヤ：『ふっ、我こそが真の王、真緒^{まおゆきや}ユキヤだ。何もしなくても皆、私の前にひれ伏す運命だ』

真緒さんはいつも通りの挨拶をしてくる。

言っている台詞はアカネとほぼ同じなのに冗談で言っている感じは全くしない。

むしろ本心で言っている様に思える。

ユージ：『ちーっす』

アカネ：『草っす』

ユージの挨拶を遮る様にアカネがモノマネをしてくる。

ユージ：『そうっす、草っす……。って、違うっすよ!? 俺っちは野草^{のぐさ}ユージっす。今日こそは……。』

アカネ：『炎の海に飛び込みたいっす』

ユージ：『全く違うっすよ!? ちよくちよく似てない俺っちのまね、やめてほしいっすよ!?!』

ユージの慌てる声が聞こえてくる。

ただ、他の人はそれを気にすることなく自己紹介を続けていた。

オンプ：『はうう……。姫野^{ひめの}オンプ^{おんぷ}なのですよー。オオカミさんなのですよー。がおーなのですよー』

タイガ：『よっ、貴虎^{きとら}タイガ^{たいが}っす。今日は村人もオオカミも全て粉碎するぞ!』

ツララ：『——氷水^{こおりみず}ツララ。役職をきっちりこなすだけよ』

オンプ：『オオカミさんになつたらがおーつていうのですねー』

ツララ：『——それが役職ならね』

オンプの楽しそうな声を軽くかわし、ツララはいつもの冷たい返しをする。

タマキ：『うにゃ、にゃーは猫ノ瀬タマキにゃ。オオカミで最速キルをするのにゃ』

『えっと、別に殺す速度は変わらないんだけどね……。それじゃあ、次は三期生だね』

ココネ：『ならまず私は私からいきますね。みなさん、ここぼんはー。三期生、真心^{まじこころ}ココネ^{ここね}ですよ。今日はユキ^{オオカミ}くんを守るために行動します。よろしくお願いします』

アカネ：『狂人だ。狂人がいる!』

ココネ：『ユキくんを守るためなら狂人でもなんでもやりますよ』
『えっと、僕の身より自分の身を案じてね……。あと、僕は犬だけど、

オオカミじゃないからね?』

思わずココネに口出ししてしまう。

カグラ：『神宮寺カグラよ。今日こそはポン姫なんて言わせないんだからね』

ユイ：『うみゆー、ポンポン姫なの』

カグラ：『ポンの数を増やしてくれって言ったわけじゃないわよ!』

ユイ：『ゆいはゆいな。羊なの。とつてもおいしいから襲ってくるといいのー』

『えっと、僕は雪城ユキです。あと、ユイはしっかり自己紹介しないと。羊沢ユイって』

ユイ：『うみゆー、めんどいからやっついてなの』

『ま、まあ、もうやっちゃったもんね。えっと、意気込み……。ぼ、僕は犬だけどオオカミじゃないから……。こ、殺さないでね』

コウ：『ボクは今回のゲームマスターを仰せ使った海星コウです。あまりにもアカネが暴走するようならゲーム外から鉄槌を下すのでよろしくね』

『そ、それじゃあ、僕からルール説明をします』

一応梓主だから、ということでゲーム説明をすることになっていった。

補足はコウがしてくれるので、安心して言うことができる。

オオカミは三人。

オオカミは毎晩一人ずつ村人を殺す。

村人は怪しい人を毎日一人処刑する。

オオカミを全員処刑できたら村人の勝利。

村人を殺して行って、オオカミと同じ数にできたらオオカミの勝利。

『えつと……、こんなところかな』

用意してもらったカンペを読み上げていく。なるべく棒読みにならないように……。

すると、コウに褒められる。

コウ ・『ユキくん、よく頑張ったね。それじゃあ役職の方はボクから説明するね』

「占い師」：1人

毎晩一人だけ、人が狼かを占える。最初の一人はランダムで教えられる。

「霊媒師」：1人

死んだ人間を占って、処刑された人間か狼かわかる。

「段ボール」：1人

村人を守ることができる。でも、自分を守る事はできない。

「狂人」：1人

アカネのこと。人狼が勝つと狂人も勝つ。

「オオカミ」：3人

毎晩一人美味しく食べる。その人はオオカミ同士のチャットでできる。

「村人」：4人

なんの力も持たない普通の人。

コウ ・『こんなところかな』

『……あの、一つ聞いていいかな?』

コウ ・『うん、言いたいことはわかるよ。いつの間にか役職を書き換えられて段ボールになってるの。通常だと騎士とか狩人の役職だね』

『段ボールってオオカミから人を守れるんだ……』

コウ ・『守れないよ!? 普通は守れないからね!』

『だ、だよね……』

最近段ボールに入りすぎて、万能の防具に思えてたけど、やっぱり段ボールも紙だもんね。

コウ …『それにしても、意外と普通に進行できてるね。驚いたよ』
『えとえと、これで普通……なのでしょうか?』

コウ …『……周りを見るとわかるよ』

コウに言われてメンバーを見て、思わず苦笑を浮かべてしまう。

『あ、あははっ……。うん、普通に進むって難しいんですね』

コウ …『だからユキくんも早くGMができるほど成長してね』
『が、頑張ります……』

コウ …『うんうん、それじゃあゲームの方を始めるよー!! まずは自分の役職を確認してね。配信画面にも表示しないのでリスナーの方も一緒に推理してみてね』

◇◇◇

『わふっ!?!』

僕は自分の役職を見て思わず声を上げてしまう。

まだミュートになっていないことを気づかずに――。

『わわわっ、みゆ、ミュートにしないと……』

「段ボール」

それが僕の役職。

——うん、段ボールが本体とか言われてた僕らしい職業ではある。

でも、誰をオオカミから守るかを考えないといけない、重要な役目でもあった。

自分は段ボールでは守れない。

常にオオカミに食べられる可能性を考慮して、下手に正体を明かすべきではない。

——それなら僕は村人らしい行動を心掛ければいいだけだよな？

◇◇◇

コウ：『みなさん、役職を確認し終えましたか？ それじゃあ、ゲームを始めます。ここはシロルームのメンバーが暮らす小さな村。平和な日常を送っていましたが、ある晩、村人が一人亡くなりました。なんと、この村にはメンバーに化したオオカミがいるそうです。村人たちは疑わしいものを毎日一人ずつ処刑することに決めました。ということ、朝を迎えました。ゲームマスターの海星コウがオオカミに襲われて無残にもなくなっていました。では、議論の方をどうぞ』

コウの言葉と共にアカネが大声を上げる。

アカネ：『こ、コウウウウウー！！！！』

うん、大げさすぎるこの態度がまたアカネらしい。

アカネ：『くっ、かならず私が敵を取ってやるからな、コウ！！』

タマキ：『にやにや、そんなことを言っておアカネがオオカミなんじゃないのかにや？』

アカネ：『なるほど、私がオオカミでコウを食べたのか。それは気がつかかった』

ユージ：『えっ、それでいいんっすか!? い、いや、それよりも早くオオカミを探す必要があるっすね?』

アカネ：『いやオオカミかオオカミじゃないか、の前にみんなに一つ言いたいことがあるよ——』

深刻な口調でアカネが問いかけてくる。

もしかすると何か気づいたのかもしれない、と僕たちは全員静かにする。

ツララ：『——なにかしら?』

アカネ：『……とりあえずユージを吊らない?』

『……』

一瞬場を沈黙が襲う。

そんな中、まず声を上げたのが吊られそうになっているユージ本人だった。

ユージ：『ちょ、ちよつと待っつすよ!? 何で理由もなく俺っちが吊られそうになってるんっすか!?!』

アカネ：『いつも燃やされてるから、処刑され慣れてるかなって』

ユージ：『そんなこと慣れたくないっすよ!? ちよつ、ユキヤからも何か言ってくれっすよ』

ユキヤ：『——それもまた一興だ』

ユージ：『一興じゃないっすよ!?!』

『えっ、あの……。ちよつといいかな?』

このままだと一向に話が進まなさそうなので、僕から声をかける。

アカネ：『ユキくんもユージは燃やし……。吊った方が良いと思うよね?』

ユージ：『ちよつ、ま、まさかユキっちもそんなことを思ってるっす

か!?!』

『そ、そんなことないよ。た、ただ、ちゃんと話し合わないとその……、オオカミの人が有利になっちゃうかなって——』

ココネ：『それもそうですね。ユージさんが燃やされるのは良いですけど、ユキくんが吊られるのだけは避けたいです!』

ユージ：『お、俺たちは吊られるの確定なんっすか?』

カグラ：『あれっ? その言い方だとユキもオオカミなのかしら?』
『えっ?!? ど、どうして……?!?』

ユイ：『うみゆー、ユキくん、役職配られたときに驚いてたの。村人だと何も驚かないはずだから、何かの職持ちかオオカミで決まりなの』

『そ、そ、そんなことないよ?!? ほ、僕はその……、む、村人……だよ?』

アカネ：『あははっ、ユキくんはわかりやすすぎるね。オオカミの耳が見えてるよ』

『わふうー、ち、違うよ? こ、これは犬耳だよ!?! ち、違うよ、僕はその——』

オンプ：『あの一、すこしいのですー?』

『あっ、お、オンプさん。ど、どうしましたか?』

オンプ：『私、実は占い師さんなのですー。それで初日の結果なのでですけど、ユキくんは白なのですよー?』

『お、オンプさん……。あ、ありがとうございます!』

これで僕がオオカミである疑惑は晴れたはず。

すると、これに合わせて声を上げる人物がいた。

ユキヤ：『ふはははははっ、お前が占い師だと!?! 笑止! 真の占い師はこの俺だ!!』

いやいや……。ただの魔王にしか思えなかったんだけど……。

思わず苦笑を浮かべてしまう。

ココネ：『真緒さんが占い師だったら初日は誰を占ったのですか？』
ユキヤ：『そうだな。初日はカグラだ。白だったかな』

『えっと、この場合ってどうしたら良いのですか？』

ココネ：『多分、オンプさんと真緒さんのどちらかが嘘をついてるんだと思いますけど……』

『じ、じゃあ、もう一人がオオカミってことだよ？』

ココネ：『違いますよ。狂人って可能性がありますね』

『あつ、そ、そっか……。えっと、僕としてはオンプさんを信じたいんだけど……』

カグラ：『まあ、この二人は吊らなくて良いわよ。狂人が占い師だから』

『……なら他の人だね』

ツララ：『——タイガ。あなた、どうしてさっきから黙ってるのかしら？』

タイガ：『その、役職がわかんないっす』

オンプ：『それはどういうことなのですか？』

タイガ：『……読めないっす』

読めない？ えっと、そんな難しい漢字があったかな？

思わず僕は首を傾げる。

できるだけわかりやすく進めるようにしたつもりなんだけど……。

ツララ：『——もしかして、霊媒師……かしら？』

タイガ：『それだ！ 霊媒師だ!! 悪を払う伝説の職業だな！ 拳で全てを潰す!!』

ツララ：『——全く違うわよ』

オンプ：『でも、タイガちゃんは嘘は言わないから間違いないのですよー』

『えとえと……、そうなると怪しい人は誰だろう??』

カグラ：『出てない役職は騎士だけね。ユキがオオカミの確率があつたんじゃないかしら?』

『だ、だから僕はその……、村人だよ』

騎士とバレてしまうとオオカミに殺される確率がどうしても上がってしまう。

だからこそ、僕は自分の職業をオープンにするわけにはいかなかった。

すると、そんな僕を見たココネが声を上げる。

ココネ：『私は騎士……ううん、段ボールだよ。それで今晚はユキくんを守るね』

『ココママ……』

僕を庇っていつてくれたのだろう。

それは率直に言つて嬉しかった。

——でも、どうしてその役職を言ってくるのか……。その役職を
持っているのは僕なのに。

アカネ：『やっぱりユージを燃やすしかないね!』

ユージ：『ついに吊るじゃなくなつたつすね!? お、俺たちはアカネが怪しいつすよ。オオカミであることを否定しなかつたつすからね』

アカネ：『はははっ、私はオオカミだぞー。がおーーー』

アカネは笑いながら言ってくる。

でも、本物のオオカミがそんなことを言うだろうか?

ユイ：『うみゅー……、アカネは凄く嘘っぽい』

カグラ：『でも、候補には違くないわね。今の候補はアカネ先輩とユージ草さんとユキね』

『わふっ!? 僕は違うよ!? ち、違うからね。だ、だから吊らないで……』

アカネ：『はははっ、私を止められるコウはもういない！ 私は自由だああああ!!』

ユージ：『誰が草っすか!? 俺っちはやってない！ 無実っすよ!』

コウ：『はい、討論の時間は終わりです。では全員投票をしてください』

コウの声と共に僕たちはミュートにする。

——議論の時間が足りなかった……。みんな思い思いに暴走するから……。それにまさか自分がオオカミの候補になるとは思わなかった。

「えとえと、だ、誰に投票したら良いんだろう??」

僕も含めて候補は三人。ただ、それとは別に堂々と嘘を言ってきたココネ。

それも含めて候補は四人になる。

この中で一番怪しいのは……。

「うん、アカネさんに入れよう」

僕は論外だし、ユージさんはいつものノリで吊られそうになっていた感じに見えた。

ココママは情報が少なすぎる。

騎士なら真っ先にオオカミに食べられちゃうのに、それがわかってて名乗り出るなんて……。

色々と不明確な部分がありすぎるけど、この一晩を乗り越えたらそ

れもわかるだろう。

つまり、今回で一番疑わしいのはアカネと言うことになる。アカネはオオカミであることを一切否定していない。

暴走特急なので、わざとそうしているようにも見えるけど。

あと、なにげに凄く話していた様に思える。

その辺りからも僕は彼女に投票を決めていた。

コウ 『では、投票結果を開示します。今回投票されたのは以下の方です』

美空アカネ：ユージ、オンプ、ユキ、ココネ、カグラ

野草ユージ：アカネ、ユキヤ、タイガ、ユイ

雪城ユキ：タマキ

猫ノ瀬タマキ：ツララ

コウ 『ずいぶんばらけましたね。でも、一番多いのは美空アカネさんですね。さあ、アカネ、最後に一言どうぞ』

アカネ：『私は帰ってくるぞ!! あいるびーばーっく!』

コウ 『では、オオカミの人と役職持ちの人はそれぞれ指定先を選んでください』

えっと、これで僕は誰を守るのか指示しないといけないんだよね。

普通なら占い師の人や霊媒師の人を守るべきなんだろうけど……、
なんでだろう。

——僕はここでココネを守らないといけない気がしていた。

もしココネがオオカミなら守っても不発に終わるだろう。

でも、あのとき僕を庇うただけに嘘のカミングアウトしてくれた
のなら……。

「ダメでも何か失うわけじゃないもんね。よし——」

第13話：大暴走！ オオカミは誰だ!? ぱーとつー
#ポンコツルーム

コウ 『夜が明けました。殺された人はいませんでした。では、討論を開始してください』

どうやら僕の思惑通り殺された人はいなかったようだ。

ココネが騎士を偽装してくれた。

オオカミはココネを狙いにくるはず。

それなら僕はココネを守るだけだった。

そして、その思惑がうまく行って今日殺された人はゼロだった。序盤に上手く防げたのは大きなアドバンテージになるはず。

タイガ：『殺されたものがない？ どういうことだ？』

ココネ：『私が守ったユキくんを狙ったことでしようね。私の目が黒いうちはユキくんには手出しさせませんよ』

タマキ：『それは不自然だにや。ココネは段ボールをカミングアウトしてたにや。それならココネを食べちゃうのが普通じゃないのかにや？』

カグラ：『ど、どういうことかしら？』

『えつとね。騎士……違う。段ボールはね、自分自身を守ることができななんだよ。だから、今回みたいなきょうが起こらないように、まずオオカミさんは段ボールを美味しく食べるのが基本なんだよ』

ユイ 『うみゆ、そうなの。きつとユキくんがあまりに美味しそうだったからココネより先にパクパクしたいと思ったの』

『ぼ、僕は食べてもおいしくないからね!』 そ、その……、た、食べないでね……』

カグラ『そうなるとココネは段ボールじゃない?? えつと、なんで

自分が殺されるのに段ボールだと言ったの?』

ユイ : 『うみゆ、オオカミの食べる相手を絞るためなの。もしくはココママが狂人なの』

ユージ : 『あれっ、狂人って占い師の二人のどっちかじゃないっすか?』

ユイ : 『うみゆ、まだどっちかがオオカミの可能性もあるの』

ユージ : 『あつ、そうっすね。確かにその可能性もあるっすね』

ココネ : 『——そういうユイちゃんも怪しいですよ? ユキくんがオオカミって印象を強くしたのはユイちゃんの一言でしたよね?』

ユイ : 『うみゆ? なんのことなの?』

ココネ : 『ユキくんが「役職持ちかオオカミ」って言ってましたよね?』

ユイ : 『うみゆ、そうだと思ったの。役職を見たときに悲鳴を上げてたの』

ココネ : 『わざわざオオカミと言ったところが怪しいんですよ。ユイちゃん、もしかしてオオカミですか?』

『えっ!? や、やっぱりユイがオオカミさんだったの!?!』

ユイ : 『うみゆー、ユイは羊なの。おいしく食べられる側なの』

タイガ : 『ジンギスカンか!?!』

ユイ : 『やっぱり嘘なの。ゆいを食べてもおいしくないの』

ツララ : 『——ラム肉はまず臭みを取らないとね』

『あ、あはは……、また変な方向に進んでるね』

オオカミ候補にユイが加わったが、どうにもはつきり黒という証拠はない。

それでもどこかユイの台詞には違和感を感じていた。

ユージ : 『それにしてもなんとか生き延びたっす。助かったっす』

タマキ : 『なら、次は草を吊るにや!』

ユージ : 『ちよっ?! な、何を言ってるっすか!? 俺たちはまだ生きてっす!』

タマキ：『オオカミには裁きを下すにや』

オンプ：『あの……、今回もその……、占い結果が出たのです』

『そ、そっか、オンプさん、占い師だもんね』

ユキヤ：『我が占い師だ』

『ああ、そうだった……。二人いたんだね……。』

やっぱり真緒さんって占い師って感じがしないんだよね。

見た目で判断するのはダメだけど。

『それじゃあ占った理由と誰を占ったのか聞いていいかな？』

オンプ：『はうう、私は少し怪しかったのでカグラさんを占って白だったのです』

カグラ：『えっ?! 私がどうして怪しいのよ?!』

オンプ：『はうう、カグラさん、「ユキもオオカミなの」って言うたのですよ』

カグラ：『ユージ草さんとユキで二人だったでしょ?』

ユイ：『ポンポン姫のポンポン具合を忘れたらダメなの。きつと今も草とユキくんをオオカミだと思ってるの』

カグラ：『まあ……。ユキは違うわね。見てたらわかるわ』

ユイ：『うみゆ、確かに見たらわかつちやうの』

『ちよつと待って、それってどういう——』

ユイ：『うみゆー、それよりも占い結果なの』

『そ、そうだった。ま、真緒さんはだれを占ったのですか?』

ユキヤ：『我はもちろん、雪城を占ったぞ! 一番怪しかったからな。結果は当然クロだった。そうなつてくると真心も怪しいな?』

二人は確実に繋がっているからな。これでオオカミは全員確定だな』
『ふえっ?!』

ユイ：『実はユキくんは黒かったの?』

ココネ：『ちよ、ちよつと待ってください! オンプさんの占いだとユキくんは白でしたよ!?! いきなり決めつけるのは良くないですよ』

タイガ：『全員吊れば問題なしだ!』

ココネ『全員は吊れないですよ!』　　そういえばタイガさん、死んだ人を白か黒、見れるんですよね?　アカネさんはどうでしたか?』
タイガ『んっ?　ああ、オオカミだったぞ?　でも、元々オオカミだって言ってただろう?』

ココネ『なるほど、つまり、オオカミはあと二人なんですネ』
『えっと……、まだ二人もいるんだね……』

やっぱりアカネさんがオオカミだったんだ……。

ユージ『なるほど……、今回のオオカミ候補はユイという訳だな』

ユイ『うみゅー、草とユキくんなの』

『ぼ、僕はオンプさんから白だって。ま、真緒さんからは黒と言われたけど——』

ユイ『うみゅー……、オンプは狂人の可能性は残ってるの。ねむねむなの……』

『ゆ、ユイ!?　ま、まだ寝たらダメだよ!?　最後まで頑張つて……』

ユイ『うにゅー、最後まで頑張るの……』

ユキヤ『やっぱり雪城だな。最有力といっても過言ではない』
『ぼ、僕は違うからね!』

——ユキヤさん……、やっぱり狂人っぽいね。僕が段ボールつてことに気づいてそうだし、殺そうとしてるよね?

コウ『はい、討論の時間は終わりです。では全員投票をしてください』

コウの声とともにミュートにして、誰に投票するかを考える。

ココネが指摘したユイ。

言動からはつきり黒だと言える部分はない。

ただ、怪しい部分はいくつもある。

いつもよりも微妙に口数が多いことと、オオカミに食べられたがっている言動をしていること。

そして、なにより僕やココネが違和感を感じていた。

次にユージ。

キャラ的に疑われてる可哀想な人。

おそらく白に近い人だとは思うけど、確定にまではできない。

そして、僕。

……うん。僕は自分がオオカミじゃないことはわかってる。

最後に疑われてるのはココネ。

ただ、ココネがオオカミなら他のオオカミに狙われる理由がない。

——そう考えるとやっぱりユイかな。

他に怪しい人もいないので、今回はユイに投票しておく。

コウ 『では、投票結果を開示します。今回投票されたのは以下の方です』

羊沢ユイ：オンプ、タイガ、ユキ、ココネ、カグラ、ユイ

雪城ユキ：タマキ、ユキヤ

真心ココネ：ユージ

猫ノ瀬タマキ：ツララ

コウ 『ついにユージさんの投票数がゼロになりましたね。一番多いのは羊沢ユイちゃんですね。って、自分で自分に入れちゃってますね。では、ユイちゃん、最後に一言どうぞ』

ユイ：『うみゆ、やっぱり最大の敵はユキくんだったの』

コウ 』では、オオカミの人と役職持ちの人はそれぞれ指定先を選んでください』

コウの声で誰を守るか考え始める。

ただ、やはりココネを守る必要があるだろう。

僕の代わりに騎士を偽ってくれてるのだから。

そう思い、迷わずにもう一度ココネを選んでいた。

◇◇◇

コウ 、『夜が明けました。貴虎タイガさんが無残に亡くなっていました。では、討論を開始してください』

『た、タイガさんが!?! ど、どうして!?!』

ツララ 、『——霊媒師だったからね。対抗馬もいなかったし』

タマキ 、『うにゃ、タイガ……いいやつだったにゃ』

ツララ 、『——ねえ、少し聞いてもらえるかしら?』

ツララが意味深な間を取ってくる。

そして、場が静まったのを見計らって言ってくる。

ツララ 、『——タマキ? あなた、オオカミよね?』

タマキ 、『にゃにゃ!?! い、いきなりなんなのになににゃ!?!』

今までまともに話題に上がっていないタマキを疑ってきたツララ。

——全く疑う余地なんてなかったと思うけど……。

でも、よく考えると投票の度にツララはタマキに入れていた。

僕たちがユイに違和感を感じた様に同期にしかわからないことがあったのかもしれない。

ツララ：『私から言うことはそれだけよ。判断はみんなに任せ
るわ』

タマキ：『にやにやにや、こんなことを言ってくるツララは凄く怪し
いのにや。絶対黒なのにや！』

ツララ：『それもみんなの判断に任せるわ』

『えつと……、どっちが本物なんだろう？』

ココネ：『さすがに判断の基準が少なすぎてなんとも言えないです
ね。こういう場合は順番に吊っていくしかないのですけど……』

ユキヤ：『ふふふつ、そのための我であろう。しかと占ってあるぞ。

猫ノ瀬は白だ！』

オンプ：『ご、ごめんなさいなのです……。私はその……。ココネさ
んを占って白だったのです』

占い師と言っている二人がそれぞれ占い結果を言ってくる。

ユキヤは偽者だとわかっているのに、この場合信じるのはココネの
結果だろう。

ユージ：『あれっ？ でももうオオカミは二人吊れてるんっすよね
？ あとはユキっちを吊ったら終わりじゃないんっすか？』

タマキ：『そういうわけじゃないのにや。霊媒師が死んでしまった
から本当にユイっちがオオカミだったのかわからないのにや』

オンプ：『そうなのです。私が調べたらわかるのです……。』

『それならオンプさんを次、段ボールの人が守れば——』

ユージ：『でも、段ボールの人って誰っすか？ 未だに名乗りあ
げてないっすよね？』

ココネ：『私が名乗り上げてますよ？』

ユージ：『いやいや、ココネっちはどうみても違うっすよ!! 狂人っ
すよね？ あれっ？ それだと占い師の片方がオオカミっすか!?
あれあれっ?』

『えつと、ココママは普通の村人……。だよね？』

——ずっとココママが身を挺して僕のことを守ってくれてたわけだもんね。オオカミはあと一人のはず……。ここは余計な選択肢を減らすことで、確実に勝利をものにする。

ココネ：『ユキくん、もういいのですか？』

『うん、もう大丈夫。あとは任せるよ』

ココネ：『わかりました。私は段ボールって言いましたけど、本当は普通の村人でした。その……。わざと私を狙ってもらった方が本当の段ボールの人が守りやすいかなって……。』

ユージ：『ほ、本当の段ボールっすか？』

『うん。今わかっている役職の人って真緒さんが狂人。姫野さんが占い師。ツララさんかタマキさんがオオカミ。それでオオカミの人は別にあと一人いるかどうか……。』

ユキヤ：『待て、我は狂人などではないぞ……。』

『……。わかりますよ。僕が騎士……。段ボールですから』

ユージ：『ど、どういうことっすか!? ユキっちが段ボール??』

カグラ：『まあ、ユキがオオカミではないということはわかってたからね』

『カグラさん、口ではなんだか言っても、ずっと僕に投票を入れてなかったもんね。あと、役職持ちは段ボール以外全員名乗り出てたから、ココママが出てくれないと多分最初に僕が食べられてたと思うよ』

ココネ：『あははっ……。ユキくん、役職を見たときに悲鳴上げちゃいましたからね。それで何か役職を持っていることはわかりましたからね』

『うん、だからあとをお願いね、ココママ。次、僕は食べられちゃうけど、明日にツララさんとタマキさんのどっちがオオカミさんかわかるし、あと白かどうかの判断ができてない人はユージさんだけだからね。オオカミさんが生き残ってるならユージさんを吊って終わりだよ』

カグラ：『えっ、ほ、本当に?』

『うん、僕とココママとカグラさんは白判定を受けてるからね。ツララさんとタマキさんは今晚分かるからね。生き残った方をオンプさんが調べてくれたら……』

カグラ：『でも、今晚オンプさんが吊られたら終わりじゃないのかしら?』

『今晚、僕はオンプさんを守るよ。だから今晚オンプさんは死ぬことがない。狂人はオオカミさんを勝たせたいわけだから、既に名乗り出てる真緒さんと考えるのが自然で、そうなるはまだ分からないのはユージさんだけだから……』

カグラ：『な、なるほどね……。でも、それだとユキは名乗り出る必要がなかったんじゃないかしら?』

『一応、ココママが本当に狂人の可能性も合ったからね。僕が聞いても騎士……段ボールを名乗り続けるならココママが狂人で真緒さんがもう一人のオオカミさんかなって……』

ココネ：『つまり……詰みですね』

ツララ：『その推理にはまだ粗がありますけどね。ユキが本当にオオカミの場合、ココネがその相手である可能性が高い。今回私かタマキ吊ってオオカミが一人食べる。明日も残った方を吊ってオオカミが一人食べる。すると、オオカミが二人村人が二人になります。——二人を見てるとオオカミじゃないことくらい分かりますけど』

——なるほど、そういうパターンもあったのか。

『どちらにしてもツララさんとタマキさんの役職が分かれば終わりますね』

ツララ：『今回は私に入れると良いわ。占いで黒認定されるタマキも楽しそうだからね』

タマキ：『にやにやにや!?』

コウ：『はい、討論の時間は終わりです。では全員投票をしてください』

タイミング良く討論が終わり、ミユートにする。

投票先はツララかタマキ。

最後にわざわざ僕の補足をしてくれたツララは白の様な気がする。

——どちらにしてもローラーをするのだから同じ気がする。

ならツララが最後に言った様に今回はタマキで統一するべきだろう。

コウ 『では、投票結果を開示します。今回投票されたのは以下の方です』

氷水ツララ：ユキヤ、ユージ、ツララ、オンプ、ユキ、ココネ、カグラ、

猫ノ瀬タマキ：タマキ

コウ 『なんか異様な光景ですね……。一番多いのは氷水ツララちゃんですね。では、ツララちゃん、最後に一言どうぞ』

ツララ：『——やることはやったし、何も言うことはないわ』

コウ 『では、オオカミの人と役職持ちの人はそれぞれ指定先を選んでください』

——これで僕の仕事も終わりだな。

最後にオンプを守る。そして、僕はそのまま食べられちゃうだろう。

でも、しっかり仕事を果たしたのだからこれでいいはず……。

そして、次の朝が来る——。



コウ : 『夜が明けました。野草ユージさんが無残に燃やされてい
ました。では、討論を開始してください』

まさかのコウの言葉に僕は一瞬耳を疑った。

『えっ!? ぼ、僕の推理が外れてたの!?!』

ココネ : 『大丈夫ですよ、ユキくん。オンプさんに調べてもらえばそ
れでおしまいだから』

『そ、そうだね。オンプさん、お願いします』

オンプ : 『はいなのですー。えっと、タマキさん、真っ黒さんなので
す』

『あっ、よかった……。そ、そうだよね……。やっぱりタマキさんがオ
オカミさんだったんだ……。』

タマキ : 『うにゃ。勘の良いツララをすぐに吊らなかつたのは失敗
だったのにゃ』

『えっと、それでどうして最後に僕を食べなかつたのですか?』

タマキ : 『どうせ吊られるのにゃ。それなら全力でネタに走るの
にゃ!』

『あ、あははっ……。そ、そういうことだったんだ……。』

どうしてだろう……。

裏で「ネタで俺っちのことを燃やすなー!!」と言ってるユージの声
が聞こえる。

『とにかく今度こそ終わりだね』

最後にタマキを吊って、人狼ゲームは終了した。

コウ　：『では、タマキちゃん、最後に一言どうぞ』
『にゃーを倒しても第二、第三のにゃーが現れて、必ず草を燃やすの
にゃー!』

——うん、既に燃えたあとだけど……。

僕たちは苦笑いでタマキの声を聞いていた。
そして——。

コウ　：『さて、村に平和が訪れました、村人チームの勝利です!』

無事に僕たちは勝利を手にすることができていた。

ココネ：『ユキくん、やりましたよー!』

『うん、ココママやオンプさん、他のみんなのおかげだよ!』

ユージ：『なんで俺たちだけ食べられずに燃やされたんっすか?』

アカネ：『それは私が要望しておいたよ』

ユイ　：『うみゆ、ココユキを崩さないとやっぱりゆい一人じゃ勝て
ないの』

ユキヤ：『うむ、こういうのも中々楽しかったぞ』

タイガ：『次は簡単な文字にしてくれ!』

オンプ　：『はうう……、生き残っちゃいましたのです……』

カグラ　：『なかなか楽しかったわよ』

ツララ　：『——ユキ、中々興味深いわ』

タマキ：『にゃにゃ、悔しいのにゃー!　上手く隠れてたと思ったの
にゃー!』

コウ　：『はい、と言うことでみんなの役職は以下の通りでした。こ
こまで見てくれてありがとうございます。お疲れ様でしたー』

美空アカネ：オオカミ

野草ユージ：村人

真緒ユキヤ：狂人
姫野オンプ：占い師
貴虎タイガ：霊媒師
氷水ツララ：村人
猫ノ瀬タマキ：オオカミ
雪城ユキ：段ボール（騎士）
真心ココネ：村人
神宮寺カグラ：村人
羊沢ユイ：オオカミ

『お、乙わふ——』

この放送は終了しました。

『《#ポンコツルーム人狼》大暴走！ オオカミはだれだ!? 《シロル
ム》』

11.0万人が視聴 0分前に配信済み

☒3.4万 ☒24 ?共有 ≡?保存 …

チャンネル名：Yuki Room・雪城ユキ

チャンネル登録者数25.0万人

第14話：成長の登録者数25万人＋誕生日記念凸待ち配信

『《＃ユキ犬姫拾いました》25万人＋誕生日記念凸待ち配信 《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

3. 6万人が待機中 20XX/06/30 18:00に公開予定

☒2, 145 ☒0 ?共有 ≡?保存 ∴

ついにこの日が来てしまった。

——僕の誕生日……。

まさかの記念配信をさせられるとは思わず、ココネに相談をしたら、凸待ち配信をしてはどうかと勧められた。

向こうから通話が来るのを待つ……という恐ろしい企画。

しかも、掛かってきた人に対して僕から話しかける、という無理難題。

——ううん、僕も覚悟を決めたんだから頑張らないと！

まだまだシロルームの中にはコラボをできていない先輩も多い。今回のことが話すきっかけになるかもしれない。

それと、今回に関して言えば四期生たちが既に動き出している。

あませるる
天瀬ルル

小柄な体型をした白い肌の天使。青銀色の肩くらいの髪。

青の刺繍が施された白の袖なしワンピース。

頭には金の輪っかと背中には白の羽を持っている。

やはり七瀬のアバターは天使だった様だ。
カタッターのヘッダーでその全体像がわかる。
そして、七瀬以外のアバターもそこで初めて見ることができた。

まかいのえみり
魔界エミリ

短めの黒い髪と二本の黄色い角。七瀬に負けず劣らず小柄な背丈。
黒と赤のワンピースを着た悪魔型のアバター。

あねがわいつき
姉川イツキ

茶色の長い髪をしたお姉さん。
胸は大きめでそれを協調したバニー衣装を着ている。

たぬがわふう
狸川フウ

短めの茶色の髪と丸い耳。頭になぜか金の王冠を被っている。
小柄な体型で白のワンピースを着ている狸の少女。

四期生はこんな組み合わせになっていた。
僕と同じ動物枠の少女もいるし、なかなか癖の強そうな人もいる。
そして、なぜか今回凸してくる中に四期生のメンバーもいるかもしれないらしい。
今のユキくん人気にあやかってスタートダッシュを決めたいのだろう。

あと、七瀬が懇願したのかもしれない。
担当からも既に許可が出ていると聞いている。

——誰も来てくれないかもしれないけどね。

考えていると悲しくなってくるけど、その可能性も考慮しないといけない。

他の人たちも自分の放送があつたり、用事があつたり、と予定があるだろうから無理を言うわけにはいかない。

——ただ、それでも、ちよつとだけでも時間があるなら来てくれると嬉しいな……。

すでに凸待ち配信をすることは伝えてある。

僕の方もせっかく来てもらうのに、うまく話せないなんてことがあつてはダメなので、コウ先輩とアカネ先輩に相談（アカネ先輩はいつのまにか勝手に参戦してたのだが——）して、トークカードを作っていた。

『僕のことをどう思ってるか』

『今、ハマってること』

『今日のパンツの色は？』

最後のを提案された時には思わず赤面してしまったが、これを出してきたのはコウ先輩だった。

コウ : 「今のユキくんなら大丈夫だと思うから」

ユキ : 「だ、大丈夫じゃないですよ……。は、恥ずかしいですよ……」

コウ : 「でもね、これはシロルールの伝統あるトークカードで、凸待ち配信だとしても使われるんだよ。まあ、パンツ以外は無理に聞かなくてもいいよ。時間と相談で使つてね」

ユキ : 「パンツは強制なんだ……」

アカネ : 「元々、そのトークカードは私が準備したものだ」

ユキ : 「このアカネさん、吊つていいですか？」

コウ : 「もちろんだよ」

アカネ : 「吊ーるーなー。コウも了承するなー。ううう、ユキくんのお祝いにイラストを描いてきたのに」

ユキ : 「あつ、ご、ごめんなさい。そ、その……、ありがとうござ

います」

アカネ：「うんうん、当日のサムネにでも使つてよ。それじゃあね」
コウ　：「あつ、もうアカネは。それじゃあユキくん、頑張つてね」

こんなやり取りをして、トークカードの準備をしていた。

そして、今配信画面にはオープニングのミニアニメを流している。
その間、僕は心臓の鼓動が速くなっているのに気付く。

手は震えている。

大きく深呼吸をして気持ちを落ち着けようとしていた。

——大丈夫、誰か来てくれるはず……。

今すぐ逃げ出したくなる気持ちをギリギリのところまで堪えていた。
そして、アニメ終了と同時にユキ犬姫と段ボールを表示する。

【コメント】

・お誕生日おめでとー

・おめでとー

《…?5, 000 おめでとー》

・ユキくん、おめでとー

・おめでとー

《…?5, 000 おめでとー》

『わ、わふっ?! み、みなさん、早速のお祝い、ありがとうございます。
シロルーム三期生、ユキ犬姫こと雪城ユキです。あつ、も、もうユキ
犬姫にしなくてよかったね……』

【コメント】

：わふー

：わふー

：ユキ犬姫がすっかり定着してるな

：ユキ犬姫でも大丈夫

《：？：3, 000 ユキ犬姫かわいい》

：ユキくん、今日も可愛いよ

『そ、それならこのままで行きたいと思います。今日は僕のお気に入りに登録者数二十五万人突破と誕生日の記念配信に来てくれてありがとうございます』

一瞬段ボールから顔を出して、すぐにさっと隠してしまう。

『わふっ、間違えてた。二十五万人じゃなくて、二十五人だった……。どっちにしてもとんでもない数だね……。信じられないよ……。』

【コメント】

：間違えてないよ

：25万人で合ってるよ

《：？：25, 000 おめでとー》

：25万人と誕生日おめでとー

《：？：25, 000 25万人おめでとー》

：誕生日おめでとー

《：？：2, 525》

『み、みんな……。ぐすっ……。あ、ありがとう。本当にありがとう……。こうやってたくさんの人にお祝いされると嬉しいな……。』

母さんも家にいることが少なかったので、誕生日も一人寂しく過ごしていた。

それがこうやって、たくさんの方好きさんたちに祝ってもらえる

……。

それだけで今日の配信をした甲斐があった。
誰も来てくれなかったら、犬好きさんたちとゆつくり雑談をしよう。

『ぐすつ……。ほ、本当に嬉しいよ。い、今まで、誰かと過ごす誕生日なんてしたことないから……。犬好きさんたちが祝ってくれただけで幸せだよ……。』

【コメント】

…泣いた

…なんだ、俺か

《…?5,000 ケーキ代》

《…?10,000 プレゼント代》

《…?50,000 誕生日のお祝い》

『あ、ありがとう……。その……。今日は誕生日ということもあって、いろんな人たちと話したいなと思います。……。ということ、シロルームのメンバーからの凸待ちをします。誰か来てくれるといいな……。誰も来なかつたら犬好きさんたち、慰めてね……。あつ、あと今日、僕の記念日ということで記念グッズがいくつか発売されます。えと……。ボイスといくつかのグッズかな? みんなへの気持ちを込めたので、聞いてもらえると嬉しいかな……。は、恥ずかしいけど……』

【コメント】

…もちろん聞いたぞ

…ユキくん、可愛かった

…グッズも注文した

《…5,000 グッズ代》

『わわっ、グッズ代はその、販売店の方にお問い合わせしますね……。そ、それで今日は流石に何も準備なしだと話せないの、トークデッキを準備しました。先輩と相談して決めたやつ……。だよ。えとえと……。トークデッキも表示して……。と』

画面の右上にコウ先輩と考えてたトークデッキを表示しておく。

『僕のことをどう思ってるか』

『ハマってること』

『今日のパンツの色は?』

【コメント】

…あっ……

…このトークデッキ

…暴走特急か

…ユキくん……。聞く先輩が違うよ

…草

『あつ、違うよ……。このトークデッキはコウ先輩と決めただよ。その……。シロルームの伝統らしくて、でも、今の僕ならきつと使いこなせるからって……。それなら成長した僕を見てもらいたいなって……。』

【コメント】

…まさかのコウ先輩w

…ユキくん、聞けるのか？

…それも含めての成長なんだろうw

…先輩からの試練w

『それじゃあ、そろそろ凸待ちのサーバーに……。って、あれっ?』

——すでに待ってる人がいる？

『あつ、アカネ先輩とコウ先輩か。うん、前もって相談したし来てくれたんだね。そ、それじゃあ、早速繋げるよ……』

僕も凸待ちサーバーに入る。

すると間髪を容れずにアカネが話してくる。

アカネ：『やはー、来たよー、ユキくん。おめでとー』

コウ：『ユキくん、お誕生日おめでとー』

『あつ、アカネ先輩、コウ先輩、ありがとうございます。は、早いですね……』

アカネ：『一番は私のためにある！』

コウ：『とか言ってる、「ユキくんは誰も来ないと不安がるから速攻で顔出すよ！」って言ったのはアカネなんだよね』

アカネ：『言ーうーなーよー!!』

『あははっ、いえ、本当にありがとうございます。ありがとうございます』

暴走してるように見えて、なんだかんだで僕のことを心配してくれてる。

だからこそ、アカネ先輩は信頼できる先輩の一人だった。

コウ：『あつ、ユキくん、そろそろトークゲツキ——』

『あつ、そうだね。作るときに相談に乗ってもらった二人に聞くのはあれですけど……、えっと、僕のこと、どう思いますか？』

アカネ：『もちろん好きだぞー！』

『ふえー!』

コウ：『あははっ、もちろんボクも好きだよ。ただ、それだけだと話にならないよね。ユキくんはついつい手を貸したくなるんだよ。臆病なのに、頑張ってるところを見るとね。妙に母性をくすぐるよね』

アカネ：『うむ、好物だ！ 甘い味がしそうだ』

コウ：『アカネは後から沈めておくね』

『あははっ……、相変わらずだね。えっと、次は最近ハマってること？』

アカネ：『もちろん、ユキくんだ！』

コウ：『アカネは最近よくユキくんイラストを描いてるもんね。ボクは手作りでちよつとした小物を作ってるよ。ユキくんに合いそうな髪留めも作ったから今度渡すね』

『えと、その……、ぼ、僕は髪留め、あまり使わな……。いえ、大切に使わせてもらうね』

断るのは簡単だけど、わざわざ僕のためにくれると言うのを断るのも悪い気がして、僕は頷いていた。

コウ：『うんうん、やっぱりユキくん、強くなったね』

アカネ：『あつ、コウがさりげなくユキくとオフ会の約束を取り付けてる。私も私も！』

『も、もちろんですよ。また、やりましょう。その……、五十年後に』
アカネ：『コラボより伸びてるよ!?!』

『あ、あははっ……。あ、あと最後にその……あの……』

流石に最後の質問をするのは緊張を通り越して、顔が強張ってしま
う。

コウ：『ユキくん、頑張れ』

『あつ、コウ先輩……。ありがとうございます。そ、その……、最後に
パン——』

アカネ：『私はもちろん履いてないぞ！』

『えっ？ は、履いてな——？ えっ、えっ??』

コウ：『全くアカネは……。ユキくんその反応を見たいがために脱いでたもんね。ちなみにボクは水色のやつだよ。じゃあね』

そこでコウとアカネは去って行った。

『ちよ、ちよつと待って。履いてないってどういうこと!? あれっ、ぼ、ボクの知らない世界があったんだけど……』

【コメント】

・さすがアカネパイセン

・わざわざ脱いでくるのかw

・コウパイセン、すごく先輩してるな

・ユキくんが一番信頼してそうな先輩だもんな

『それにしても僕のためにわざわざ待ってたくれたんだ……。優しい先輩たちだよ……。あつ、もう次が……』

オンプ：『はうう、お誕生日おめでとうなのでー』

今度はオンプ先輩が一人で来てくれたようだった。

この前の人狼以外では話したことのない先輩。

少し緊張してしまう。

『お、オンプ先輩……。あうあう……。あ、ありがとうございます……。その……。嬉しいです』

オンプ：『はうう、緊張しすぎなのですよー。この前、一緒にオオカミさんを追い詰めた仲なのですよー』

『そ、そうですね。うん、大丈夫。僕は大丈夫……』

オンプ：『まだまだ固いのです。そうなのです、今度一緒にコラボするのですよ。きつと、緊張しなくなるのですよー』

『ふえ!? いいのですか?』

オンプ：『もちろんなのですよー』

『あ、ありがとうございます。楽しみにしていますね。あつ、あと最後にその……。あの……。ぱ、パンツの色は?』

オンプ：『はうう!? ぱ、パンツの色なのですか!?!』
『えとえと、あの、……う、うん』

すると、しばらく間が空いた後、オンプが小声で言ってくる。

オンプ：『し、白のレースのやつなのです。そ、それじゃあ、またチャットするのです』

ちゃんと答えてくれたあと、オンプは去っていった。

——でも、よく考えると僕、最後にパンツの色を聞いたあとでコラボするの?!

『ううう……、こ、今度謝っておこう。へ、変なことを聞いちやったから……』

【コメント】

・コラボすらしてないのにパンツの色を聞く犬w

・それにしても二番目にひめのんか

・まずは三期生の誰かだと思った

『あつ、もう次が——』

誰も来ないかも……と思っていたのが嘘のように、間をおかずに続々と人が来てくれる。

嬉しい反面、慌ただしくていっぱいいっぱいになってしまう。

タマキ：『はうう、ユキくん、お誕生日おめでとうなのですよー』
タイガ：『どこかからオンプの声がするぞ?』 ユキ、誕生日おめでとう!』

『今回はアイコンを変えてないから分かりますよ、タマキ先輩。あと

タイガ先輩も、わざわざありがとうございます』

タマキ：『にやにや、バレちゃったのにや。ちなみにやーのパンツは黄色いやつにや』

タイガ：『んっ？ 俺のは黒だぞ？』

『わわっ、先手を取って言わないで……。そ、それはば、ぱんつの話は締めなんだから……。』

タマキ：『にやにやにや、人狼ではいいようにされたから仕返しにや』

タイガ：『先手必勝、いい言葉だよな？』

『えとえと、まだ質問は残ってますよ。そ、その……。お二人は僕のことをどう思ってますか？』

タマキ：『んにや？ 食べ放題？』

『な、何を食べるのですか!? ぼ、僕、犬だから食べられないですよ!』

タイガ：『ジנגスカン食べ放題……。』

『ゆ、ユイ逃げてー!!』

タマキ：『にやにや、冗談は置いておいて、よく頑張ってるのにや。にやーはユキの状況が一番よくわかるのにや。また今度ゆつくりお酒を飲んで語り合うのにや』

『僕まだお酒は……。って、今日から飲めるのか。うん、わかったよ。また今度ゆつくり話そうね』

タマキ：『一升瓶を準備しておくのにや』

タイガ：『樽がいるな!』

『さ、流星にそんなに飲めないよ……。』

タマキ：『にやにや、それじゃあまたにやー』

タイガ：『今度試合しような』

『えっ!? 試合って――』

意味深な言葉を残して、二人は去ってしまった。

【コメント】

：相変わらずの猫だったw

：ちやつかりオフロラボの約束してるけどなw

：ユキ犬姫とポンタイガーの対決か

：ユキくんが勝つなw

《：？10,000 ユキくんの勝ちに1万》

《：？30,000 ユキくんの勝ちに今月の食費》

『ちよ、ちよつと待つて！ ぼ、僕、戦うことなんてできな——』

今はいないタマキたちに言おうとした言葉。

それを次に入って来た人に聞かれてしまう。

ユキヤ：『なんだ、我と戦いたかったのか？』

ユージ：『ちーつす、ユキっち。誕生日おめおめちゃん』

ユキヤ：『ふっ、祝いだな』

『真緒さんと草さん、ありがとうございます！』

ユージ：『誰が草っすか!?!』

ユキヤ：『お前だろう?』

『えっと、その……、誕生日だから、こういうノリも許されるかなって。その、怒ったのなら、ご、ごめんなさい……』

ユージ：『怒ってない。怒ってないっすよ!?! むしろ、美味しいっすからどんどん言ってくれっす!』

『あっ、はい。これから草さんって呼びますね』

ユージ：『だから俺は草じゃないっすよ!?!』

ユキヤ：『ふむ、それもまた一興だ』

ユージ：『全然一興じゃないっすよ!?!』

『あははっ……、えと、それじゃあ、せっかく来ていただいたので、お二人は最近ハマっていることってありますか?』

ユージ：『俺たちは俺っち自身を飾り付ける宝石探っすね。この世の宝はまさに俺っちのために存在するっすよ!』

ユキヤ：『草だな』

ユージ：『草じゃないっすよ!?!』

『宝石か……。綺麗だけど、僕はあまり欲しいって思わないかも。小さいし無くしそうで……』

ユキヤ：『それならば無くさないサイズの宝石を買えばいい。私は最近トレーナーの学習をしておるぞ』

『えっ!? そんなことをしているのですか?』

ユキヤ：『うむ、雪城をより効率的に鍛えるために必要なことだな。中々いい勉強になるぞ』

『ぼ、僕のためだった!? そ、そこまでしてくれなくてもいいんだよ……。?』

ユキヤ：『我がしたいからしてるまでだ。別に雪城のためではない』
『僕のことなのに!? ま、まあ、真緒さんがそれでいいんだったら

……。あつ、そのあと最後に……』

ユージ：『ユキっち、ちよつと待つつす!』

『どうかしましたか?』

ユージ：『最後の質問は俺たちには不要つす。そもそも男のパンツの色を聞きたい人なんているわけないつす』

『……。? 結構みんな喜んでますよ?』

僕が答えそうになるとコメントの流れが加速していた。

きつと、ユージや真緒さんでも同じだろう。

ユージ：『くっ、これだから天然は……。ユキヤも何か言うつす!』

ユキヤ：『我は黒のボクサーだ!』

ユージ：『違うつすよ!? そういうことじゃないつすよ!? はあ……。まあいいつすよ。俺っちは黒と青のタイプつす』

大きなため息と共にユージたちは去っていった。

『何が言いたかったんだろう……。?』

【コメント】

：ユキくん草

：予定を崩さないユキくんw

：これで半分以上来たのか

：そろそろ三期生か？

しかし、次に来たのは予想外の人だった。

ツララ：『……』

『えっ、あつ、ツララ先輩。よ、ようこそ……』

ツララ：『——誕生日おめでとうございます』

『あ、ありがとうございます』

ツララ：『……』

『……』

か、会話が続かない。

独特な空気を持つツララ先輩にどう話しかけたらいいのか迷ってしまう。

しかし、覚悟を決めるとトークデッキを使っていく。

『あつ、えつと……。ツララ先輩、僕のことどう思ってますか？』

ツララ：『——面白い子よ』

『あつ、はい。あ、ありがとうございます』

ツララ：『……』

『……わ、わふっ』

ツララ：『——このまま拾って帰っていいかしら？』

『わふっ、だ、だめですよ!?!』

ツララ：『——そう』

本当に残念そうな声で言ってくる。

『えとえと……その……パ——』

ツララ：『——人のパンツを聞く前に自分のを答えるべきじゃないかしら?』

『あうあう、そ、そうですよね。えとえと、ぼ、僕のやつは……そ、その……犬が描いてある白の……』

ツララ：『——それじゃあ行くわ。次はコラボするから』

『あつ、まだツララ先輩のを——』

き、切れてしまった……。

もしかして僕、辱められただけ?

『ううう……、は、恥ずかしいよ……』

【コメント】

・つらたん草

・ユキくんが言わされてて草

・パンツ助かる

《…?10,000 パンツ代》

・つらたんはココママでも苦戦してたからな

・本当に三期生が来ないな

・これで一期生と二期生は全員来たもんな

・次かかって来たら三期生か

『うう……、みんな、どうして来てくれないんだろう……?』

不安に思い始めたそのタイミングで更に人がやってくる。

『あつ、なんだ……。みんな遅れてただけか……』

安心しながらアイコンを見る。

『えっ!? あっ、る、ルル!?』

ルル : 『ユキ先輩ー、お誕生日おめでとうございます!』

『ありがとう。わざわざ来てくれたんだね』

ルル : 『先輩のためならたとえ、ユージ草先輩が燃えてる火の中でも、アカネ先輩が暴走して海星先輩に押さえてる水の中でも飛び込んで、油を注ぎますよ!』

『うん、それはやめてね。取り返しがつかなくなるから』

ルル : 『はい、わかりました。ユキ先輩を困らせる人たちはギルテイしておきますね』

『もつとダメだからね?!』 と、とりあえずルルは一度自己紹介してくれるかな? ほらっ、知らない人も多いだろうし』

ルル : 『わかりました。真の犬好き、天瀬ルルあませるるです。ユキ先輩に手を出す愚か者を片っ端からやつつけるためにここに来ました。よろしくお願ひしまーす!』

『えっ、ち、違うよ!? 何その破滅天使みたいな役割……。ほ、ほらっ、ルルは明日から配信開始するシロルーム四期生でしょ?』

ルル : 『あっ、そっちはかりそのめの姿です』

『ぞ、そうだったの!』

【コメント】

・草

・ユキくん大好きっ子か

《:?:10,000 新人教育費》

・また濃いキャラを

・でも、話し慣れてるな

・どこかで聞いたことのある声だな

ルル : 『それよりも先輩、ぼくには聞いてくれないのですか?』

トークカード……』

『あっ、そうだね。まずは僕のことをどう思ってるのか……』

ルル : 『しっかり百万文字ほどに抑えて書いてきましたよ』

何だか恐ろしいことを聞いた気がしたので、別のカードを使うことにする。

『……は飛ばして、最近ハマってること……』

ルル　：『そっちはまだ八十万文字くらいですね。いかに先輩の動画が良くてハマってるのかを書き綴って……』

『……そっちも飛ばして、今日のパンツ——』

ルル　：『もう、先輩。そんなにぼくのパンツが見たいのですか？

いいですよ、先輩なら直接見せても……』

『はい、四期生の天瀬ルルちゃんでした。拍手——』

ルル　：『あつ、待ってください、先輩。ぼくはまだ話したいことが——』

このままだといつまでも居座りそうだったので、僕はルルとの会話を終わらせる。

【コメント】

：四期生の配信は明日からか

：楽しみな子だったな

：見に行くか

：まさかの四期生だったな

一応チャットでルルに途中で通話を切ってしまったことを謝っておく。

すると、入れ違いにまた別の人がやってくる。

エミリ：『あの、おめでとうございます……』

『あ、ありがとうございます……』

やって来てくれたのは、四期生の魔界エミリまかいのえみりだった。

——もしかして、僕と一緒に人前だと緊張するタイプなのかな？
そ、それなら僕が先輩らしいところを見せないと……。

僕は覚悟を決めて話しかける。

『わ、わふっ、あの、あの……』

エミリ：『……ません』

何かボソボソつと小さな声が聞こえた。

『えと……、ご、ごめんね。き、聞こえなかった……』

エミリ：『えつと……、ルルは渡しません』

『わ、わふう……。えとえと……ルル……？』

あれっ、この子つてルルと繋がりのある子？

『だ、大丈夫だよ。ぼ、僕はとったりするつもりはないから……』

エミリ：『でも、あの子、四期生の集まりの時も先輩、先輩、先輩……。あの子は私たちの仲間です。わ、渡さない……。じゃないですね。私たち、先輩には負けせんから！ ルルの気持ちは私が勝ち取ります』

『あうあう……。そ、それはごめんね……。ルル、シロルームに入ってきたきっかけが僕みたいだから……』

エミリ：『あつ、そ、それはわかる気がします。私もユキ先輩たち三期生の仲の良さを見てシロルームに入ったんですよ。あんな風に仲良くなりたいて……。でも、いざ四期生で仲良くしようとしたらルルがあんな感じでしたから……』

『ああ……。うん。なるほどね。やっぱり同期で仲良くしたいもんね』
エミリ：『わかつてくれますか？』

『よくわかるよ。僕だって、三期生のみんなとはずっと仲良くしたい

と思ってるし……、その……、今も誰も来てないのが寂しくて……』
エミリ：『もしかして、それって……。いえ、私の口から言うべきではないですね。そうですね、またルルのことで相談させてもらってもいいですか?』

『もちろんだよ。あつ、じ、自己紹介がまだだったね。よかつたら初配信の日も含めて宣伝していく?』

エミリ：『いい、いいのですか!? ありがとうございます。私は魔界エミリまかいのえみり。シロルーム四期生で初配信は二番手。明日、ルルの後にします。よろしければ見に来てくださいね』

『犬好きのみなさん、ぜひよろしくお願いしますね。さ、最後にその……、えっと、あの……』

エミリ：『私は紫のレースのやつですよ。それじゃあ、失礼します』
不穏な空気で始まったけど、綺麗に収まってくれてよかった……。

【コメント】

・悪魔っ子か

・ルルちゃんをめぐる不穏な争いが……

・それを言うならすでにユキくんを巡って三期生同士の争いが……

・そこにルルちゃんも参加してるんだよね

『後輩の子も含めてたくさん来てくれました。僕、こんなに誕生日をたくさんの人から祝われたの初めてだよ……。でも、みんなはどうしたのだろう? 今日配信もしてないはずなのに……』

改めてみんなのチャンネルを見に行く。

やっぱり誰も配信はしていない。チャットも特に動いていない。

もしかすると、今日に凸配信をする連絡が届いてないのかも、と見てみるとすっかり既読がついていた。

『うう……、みんな……』

【コメント】

・ココママ、早く来てあげてー！

・時間間違えたか？

・ユキくんのことになると目の色が変わるココママがそんなミスをするか？

・ユイちゃん、寝てないよな？

・カグラ様は……普通に日を間違えてたとかありそう

『あつ、また来た……』

しかも二人。

今度こそは……、と通話を始める。

イツキ：『ユキ先輩、お誕生日おめでとうございませう』

フウ：『おめでとうございませうポコ』

次にやってきたのも四期生の二人だった。
あねがわいっき たぬがわふう
姉川イツキと狸川フウ。

『わふう、二人とも、わざわざきてくれてありがとう』

イツキ：『私もユキ先輩と話すことができて嬉しいですよお』

フウ：『ルルちゃんとエミリちゃんだけおめでとうを言いすぎて、ふうたちが何も言わない訳にはいかないポコですから』

『えっと、いきなり先輩のところに来るのは緊張したよね』

イツキ：『それがユキ先輩の場合はそこまで緊張してないんですねえ』

フウ：『ふふふつ、なんだか妹みたいな感じがするポコですよ』

『わ、わふっ!?!』

イツキ：『本当に妹ですねえ』

『ち、違うからね。あつ、二人も宣伝していくといいよ』

イツキ：『ありがとうございます。私は姉川あねがわイツキ。エロと百合をこよなく愛するシロルーム四期生です。初配信は明後日です。よろしく願います。』

フウ：『ふうは狸川たぬがわフウポコ。シロルーム四期生でイツキちゃんと同じく明後日に配信を予定してますぽこ。よろしく願いますポコ』

『よかったら、見に行ってくださいね。後、ぼ、僕は妹ではないからね。ほらっ、これでも先輩だからね』

イツキ：『その段ボールごと持って帰って、家で色々としてもいいですかあ？』

『い、色々？』

イツキ：『それはもちろん家ですることと言ったら、数えるほどしかないですよ？ ベッドでモニョモニョとかお風呂でモニョモニョとか……』

『わ、わふっ?!?! た、助け……』

この人からアカネ先輩のような匂いを感じた。
思わず僕は段ボールの中に姿を隠していた。

フウ：『こらっ、イツキちゃん。また変なことを言っポコ』

イツキ：『ならフウが付き合ってくれるかしらあ？』

フウ：『はあ……、エッチなことをしないならいいポコ』

イツキ：『エッチなことをしないなら何をするのよお』

フウ：『何もしなくていいポコ。嫌なら行かないポコよ？』

イツキ：『わ、わかったよお……』

『あ、あははっ……、大変だね……』

フウ：『イツキちゃんも悪い子じゃないポコですから……』

『そ、それじゃあそろそろパンツの色を教えてくださいかな……』

フウ：『えっ?!? せ、先輩?!?!』

イツキ：『あははっ、なんです、先輩も乗り気だったのですねえ。いいですよお、パンツの色だけじゃなくて脱ぎたての現物を——』

フウ　…『そ、その……、あの……、ううう……、セクハラポコよお……。ご、ごめんなさい。ご想像にお任せします』
『わふっ。う、うん、それで十分だよ。これを答える人たちがおかしいよね。シロルームにはたくさんいるけど……』

そこで四期生の二人は去っていった。

フウの反応は僕の反応に近く、妙に親近感が湧いてしまったが。

【コメント】

・暴走姉とエロ耐性ゼロのためきか

・ためきがまとめ役になるわけか

・楽しみだね

・初めてきてくれた後輩にパンツの色を聞いていく犬w

・ユキくんも成長したね……

・毒された、とも言えるかw

『これで……ぜ、全員になるのかな？　そ、そろそろ配信を終えないといけないんだけど……』

——やっぱり三期生は来てくれなかった……。

がつくりと肩を落としてしまう僕。

すると、そのタイミングで通知……ではなく、家の呼び鈴が鳴る。

『た、宅配便でもきたのかな？　ご、ごめんね。ちよつとミュートにするね……』

ミュートにすると僕は玄関へと急いで向かった。



戻ってきた僕は困惑したままミュートを消していた。

『わ、わふっ……。ちよ、ちよつと何が起こったのかわからないんだけど、その……。あの……。ちよつと待ってね……。』

僕は急いで配信画面を準備する。

すでにいるユキくんアバターの他にもう三人。

【コメント】

…えっ!?

…ま、まさか……

…いや、三期生ならあり得る

…わくわく

『あ、あの……。僕の凸待ち配信……。なんと、三期生のメンバーが直接僕の家に出してくれました』

ココネ：『ユキくん、お誕生日おめでとうございます。本当なら通話しようとしたんですけど、どうしても直接言いたくて、来ちゃいました』

ユイ：『うみゅー、ユキくん、おめでとーなのー。ココママの準備が遅かったの……。』

ココネ：『ゆ、ユキくんの誕生日プレゼントを準備してたんですよ!?!』

カグラ：『ユキ、おめでとう。まあ、私たちは見てるだけしかできなかったからね』

ユイ：『ゆいは手伝ったの。見てたのはカグラだけなの』

ココネ：『いえ、色々と食材を準備してくれたのはカグラさんですよ。ユキくん、これ、私たちからのプレゼントです。受け取ってくださいますか?』

ココネから大きな箱を渡される。

『えっと、ほ、本当にいいの？ ぼ、僕がもらっても……』

ココネ：『もちろんですよ。むしろ受け取ってくれないと困ります』

ユイ：『うみゆ、遠慮なくもらうの』

カグラ：『これはユキのために作ったんだからね。いらないと言われても困るわよ』

ココネ：『早速開けてみてください』

『うん……』

箱を開けてみると中には生クリームのケーキが入っていた。

中央に「ユキくん、誕生日おめでとう」と書かれており、その周りには僕たち四人の-avatarを形取った砂糖菓子が置かれていた。

カグラ：『この砂糖菓子を準備したのが私なのよ』

ユイ：『うみゆー、文字を書いたのはゆいな』

ココネ：『それで私がケーキを作りました』

それぞれが笑顔で教えてくれる。

ただ、このプレゼントは僕にとってはこの贈り物以上の価値があった。

親以外からの初めての誕生日プレゼント。

大切な……、本当に大切な仲間からの贈り物。

しかも、僕のためにわざわざ三人が協力して手作りで作ってくれたもの……。

それを受け取った僕は喜びを通り越してポロポロと涙を流してしまふ。

ココネ：『ゆ、ユキくん!? き、気に入らなかったですか……?』

僕の姿を見てココネは慌てふためいていた。

『ぐすつ……、その、すごく嬉しくて……。ほ、本当に嬉しいのに、どうして涙が……』

何度拭つても涙が留まることなく流れて、止まることがなかった。

『ぐすつ……。あ、ありがとう……。ほ、本当にありがとう……。ぼ、僕、こんな風に他人から祝ってもらうのは初めてで……。そ、その……。本当は今日ずっと不安だったんだ……。みんな来てくれないの。かなって、心配してたんだ……。そ、それがこんなにも素敵なおプレゼントを準備してくれていたなんて、そ、その……。』

泣いている僕の頭をココネはそっと抱きしめてくれる。そして、何度も頭を撫でてくれた。

ココネ『ユキくん、嬉しい時は思いっきり泣いていいんですよ。胸ならいくらでも貸してあげますから……。』

『あ、ありがとう、ココネ……。』

いつもなら慌てふためくところだけど、今日はなぜか心が落ち着き、自然と頭を預けることができた。

そして、涙が止まるまでココネの胸で泣かせてもらうことになった。



『ご、ごめんね、せつかくみんな来てくれたのに、僕、泣いてしまった……。』

ココネ『いえ、構いませんよ』

ユイ : 『むしろ役得でした』

ココネ : 『そうそう、役得……つて、ユイちゃん！ また私の真似をして……』

ユイ : 『うにゅ、ココネの気持ちを代弁してあげただけなの』

『あつ、役得は否定しないんだ……』

カグラ : 『それよりもケーキは冷蔵庫に入れておくわよ。ユキ、食事まだよね？』

『う、うん、まだだよ』

ココネ : 『そうだと思つて、色々と準備して来ましたよ。流石にこちらは買って来たものですけど……』

ユイ : 『うみゅー、だから配信が終わったら一緒に食べるのー！』

ココネ : 『そうですね。これから盛大にユキくんの誕生日パーティーをしましょう』

『わ、わふっ!? うん、そうだね』

一瞬驚いたものの僕は大きく頷いていた。

そして、配信画面をじつと見る。

結局凸待ち配信にはシロルールのライバーが全員来てくれた。

総勢十五人。

今までの僕だと一対一になるとまともに話せなかっただろう。

特に初めて喋る相手だと特に――。

そう考えると雪城ユキとして活動する様になって、アカネ先輩たちや七瀬と接することですいぶんと話せる様になった気がする。

まだまだ振り回されることも多々ある。

ちよつとしたことで驚いてしまったり、言葉が出なかったり、怯えたり、泣いてしまったり……。

どうして他の人たちに比べると経験不足だった。

それでも、地に足を付けて頑張っという……。
一歩一歩前に進んでいこう……。
みんなが僕のことを見に来てくれてるのだから――。

僕は笑みを浮かべて配信画面の向こうにいるであろう人たちに向けて言う。

『今日来てくれた先輩さん、後輩さん、ココママ、カグラさん、ユイ、そして大好きさんたち。本当にありがとう。今日一日、忘れられない誕生日になったよ！ 一生思い出に残る記念日になったよ！ だからその……本当にみんな大好きだよ……。わ、わふう……は、恥ずかしいね……。あははっ……。』

僕は素直にお礼を言うと言った顔を真っ赤にしていた。

『それじゃあ、本日の配信はここまでにさせていただきます』

ココネ：『乙ここでしたー』

ユイ：『うみゅー、乙みゅー』

カグラ：『お疲れ様！』

『乙わふさまでした!!』

この放送は終了しました。

『《＃ユキ犬姫拾いました》 25万人＋誕生日記念凸待ち配信 《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

12・0万人が視聴 0分前に配信済み

☑4・1万 ☑2 ?共有 ≡?保存 …

チャンネル名：Yuki Room・雪城ユキ

チャンネル登録者数26・1万人



【コメント】

- ・ユキくんが最後まで言ってる!?
- ・また消し忘れか??
- ・いや、ちゃんと消えてるぞ!?
- ・マジか……
- ・ユキくん、成長したんだな……
- ・少し寂しい気もするな……
- ・お疲れ様でした



配信を終えると、早速テーブルに色々な料理を並べていった。

お寿司やチキン、色とりどりのサラダ、おにぎり、ハンバーガー、ピザ、パスタ……。

「えっと、祐季くんの好みがわからなかったから適当に買って来たよ」

こよりがテーブルに並べながら苦笑を浮かべる。

「ううん、どれも好きな料理だよ」

「だよね、祐季くんはお子様だからこういう料理、好きだよね?」

「そ、それは偏見だよ? それに僕、結坂と同じ歳だからね!」

「こらこら、彩芽^{あやめ}。今日の主役をからかってどうするのよ」

瑠璃^{るりか}香さんが紙コップにジュースを注いでくれる。

そして、紙皿や割り箸もそれぞれに配ってくれていた。

「ありがとう、瑠璃香さん」

「このくらい当然よ」

「料理も配り終わったね。彩芽も大丈夫?」

「うん、もちろんだよ！ この後に遊ぶゲームもしつかり準備したよ！」

「パジャマも準備したし、お泊まりパーティーだね。前もって会長に確認しておいて良かったよ」

「みんな……、本当に今日はありがとう。僕、こんなに楽しい誕生日、初めてよ……」

「祐季くん、何を言ってるの?」

お礼を言うところよりが不思議そうに言ってくる。
それを聞いて、僕は声が漏れてしまう。

「ふえ?」

「だって、誕生日パーティーは今からだよ。もつともつと楽しくなるんだよ? 今で満足してどうするの?」

「そうだよね、まだ祐季くんへの誕生日プレゼントも渡してないんだからね」

「えっ、さつきももらったよ。大きなケーキ……」

「あれはシロルーム三期生としてのプレゼント。これから渡すのは私たち、個々からのプレゼントだよ」

そういうと結坂は鞆から小さな袋包みを取り出して、渡してくる。

「はいっ、私からは新作ゲームだよ。また一緒に遊ぼうね」

「えっ!? あ……、うん……。ありがとう……」

困惑しながらもなし崩し的に結坂からゲームをもらい、それをギョツと抱きしめていた。

「次は私ね。本当はパソコン回りの道具をあげたかったんだけど、祐季のところは完璧すぎたからね。今回はブルーライトカット入りの伊達眼鏡にしておいたわ。結構目を酷使するから長時間モニターを

見るときに使うと良いわよ」

瑠璃香は相変わらず利便性を優先していた。しかし、僕のことを何よりも思ってたの選択。それが素直に僕には嬉しかった。

「最後に私からはこれですね。頑張って作ったんですよ」

こよりからは手作りのぬいぐるみを四体渡される。それはどこか僕たち四人のアバターに似たもの……。

「祐季くん、三期生大好きっ子だからね。こういうものの方が喜ぶか
なあって思ったんだよ」

三者三様のプレゼントを両手で抱きしめると僕は再び目から涙が
流れてくる。

「み、みんな……、本当にありがとう。だ、大事にするね……」

「ほらっ、祐季くん。まだまだパーティーはこれからだよ!? こんな
ところで感動してたら先まで持たないよ！ まずは一緒にご飯食べ
ようー！」

「祐季の分、お皿に装っておいたわよ」

「ゲームもするからね。休んでる暇はないよ」

「ぐすっ……。そ、そうだよね。うん、そうだよね。今日はまだまだこ
れからだもんね」

僕は涙を拭くと三人に向かって笑顔を浮かべていた。

第1話：ユキくん大好き天使、天瀬ルル

結局、パーティーはすぐにお開きとなっていた。

その理由はもちろん僕にある。

精神的にも肉体的にもかなり無理をしていたようで、ココネたちとケーキを食べた後、ゲームをしている途中に力尽きてしまった。

そして、気がついたら次の日の昼になっていた。

「あ、あれっ、僕……？」

気がつくのとベッドに寝かされていた。

そして、床には布団が敷かれ、そこでココネたち三人は眠っていた。
いや、寝ていたのは二人だけだった。

「あれっ、祐季くん？ もう起きたんだ……」

「結坂こそやけに早く起きてたんだな」

「んっ……？ 私はまだ寝てないだけだよ？ 祐季くんの寝顔、堪能させてもらったよ……」

「えっ!?.. ね、寝てない!? そ、それはちゃんと寝ないとダメだよ!? それに僕の顔なんて見ても面白くないよね？」

「そんなことないよ。祐季くんの幸せそうな顔を見てたら、こっちまで幸せになつてくるんだよ。一晩見ても飽きないよ」

「わ、わふっ!?.. 一晩中見てたの!? こ、怖いよ!..」

「あははっ、さすがにそこまではしてないよ。祐季くんが何か寝言を言う度に見てただけだよ。でも、役得役得。大丈夫だよ、とつても可愛かったから」

「あうう……。そ、そういうことじゃなくて、ぼ、僕が恥ずかしいんだよ……」

「可愛いは正義だよ？ つまり祐季くんは正義だよ？」

「も、もう……。そういうことが言いたいんじゃないよ……。まあ、何かしたわけじゃないならいいよ……」

「……うん、ナニモシテナイヨ」

「えと……、何をしたの？」

「大丈夫、祐季くんには何もしてないよ……。祐季くんにはね」
「ゆーいーさーかー？」

ジト目を向けると、結坂は手を合わせて謝ってくる。

「ごめん、祐季くんがあまりに幸せそうに寝てたからその……。写真
を撮っちゃった……」

そういつてスマホを見せてくる結坂。

そこには嬉しそうに眠る僕の姿があった。

「はあ……。まあ、そのくらいならいいよ。僕の写真なんて撮っても仕
方ないだろうけど……」

「拡大コピーして部屋に飾っておくよ」

「それはダメー!？」

「あはははっ、それは冗談だよ。それよりも昨日、私たちにはトーク
デッキ使わなかったんだね？」

「えっ？ だって配信も終わってたし、そもそもあれは初対面の人と
かに緊張するから使ってただけで、みんな相手だと使う必要はないよ
ね？」

「それもそうだけど、せっかく気合の入れたパンツ履いてただけど
な。ユキくんを驚かせよう……」

「えっ!？」

「あはははっ、それも冗談だよ。それよりももう昼だけど、ご飯食べる
？ 昨日の残りでよかつたら温めるよ？」

「うん、ありがとう……。少しもらえるかな？」

結坂にご飯の準備をしてもらっていると、こよりや瑠璃香も起きて
きて、昨日のパーティーの続きをすることになった。

◇◇◇

『#ユキ犬姫拾いました #コユカオフ会』四期生初配信、同時視聴するよー 《雪城ユキ／真心ココネ／神宮寺カグラ／羊沢ユイ／シロルム三期生》』

1. 4万人が待機中 20XX／07／01 20:00に公開予定

☒964 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

結局、四期生の初配信までみんなで過ごすことになったので、同時視聴枠をとって一緒に見ることにした。

本当だったら一人で配信もせずに見るつもりだったけど、担当さんから既に声を交わしてるから、僕たちはコメント等をしていいと言われていた。

それなら、と同時視聴枠をする許可をもらったのだった。

一人だったらわざわざ枠を取ることなく、軽くコメントして終わりだったけどね。

せっかくみんないるなら枠を取った方が大好きさんたちも喜んでくれるもんね。

【コメント】

…まさかの三期生勢揃い

…昨日の凸からずっと一緒だったのかw

…本当に仲がいいなあ

…シロルム随一の仲の良さじゃないか？

…ユキくんを中心にまとまってるもんね

『わ、わふう……。みなさん、こんばんはー。わわっ、今日もたくさん。僕の放送じゃなくて、ルルの放送へ行っただけでいいね』

【コメント】

：開幕追い出し宣言w
：ユキくんらしいw
：ユキくんと一緒に四期生を見守るぞ
：楽しみだなw

『そ、そうだったね。レベルアップしたユキ犬姫バージョン一です。今日は誕生日以降、同期三人と一緒にいたので、そのまま後輩さんを見守りたいと思います』

ココネ：『ユキくん、今までは一以下だったんですね……』

ユイ：『うみゆ、そろそろ寝る時間？』

カグラ：『まあ、私以上の姫が現れるわけないわよね』

ユイ：『うみゆ、カグラはポンコツ界最強の姫なの』

カグラ：『それって、単にすぐくポンって言うだけじゃないの？』

ユイ：『ポンポン姫は伊達じゃないの』

『あ、あはははっ……。ちよつと話が逸れそうだけでも、その、今日は時間に限りがあるので、早速四期生一番手の天瀬ルルの配信を見に行きたいと思います』

そうして僕は画面にルルの放送を表示していた。



『《天瀬ルル初配信》自己紹介……はほどほどにユキ先輩の魅力を語るよ 《天瀬ルル／シロルーム四期生》』

1. 2万人が待機中 ライブ配信中
☒247 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：一人目はユキくん大好きっ子か

：妙に喋り慣れてた子だよな？

：近視感があるんだよな

：どこかで聞いた声……

ルル 『こんるるー！ どうも初めまして、ぼくは段ボール研究会
No. 1の天瀬ルルあませるると言います。あつ、あとついでにシロルーム四期
生なんかもしてます』

初めて配信画面上で姿を表すルル。

小柄な体型をした白い肌の天使。青銀色の肩くらいの髪。

青の刺繍が施された白の袖なしワンピース。

頭には金の輪っかと背中には白の羽を持っている。

そうだったものは、カタッターのヘッダーと同じだった。

背中のは動きに合わせてひよこひよこ動くので、より天使感が
増しているくらいだろうか？

【コメント】

：四期生はついでw

：まさかの段ボール研究会No. 1

：ユキくん好きもここまでできたかw

：小柄で可愛いらしい子だな

ルル 『まずはプロフィールを……と。あれっ、ユキ先輩がライブ
してる？』

ルルの動きが固まり、そして、やってきたリスナーたちに告げる。

ルル 『ユキ先輩が配信してるので、これからこの放送は同時視聴
枠にしようと思います。いえ、します!!』

プロフィール紹介やダク決めをすつ飛ばして、いきなり同時視聴宣

言をしてくるルル。

そして、本当に画面にユキくんたちの配信を表示させていた。



『な、なんで初配信なのに、僕たちと一緒に同時視聴枠をするの!?!』

ユイ …『うみゆ、開幕ポンなの』

『と、とりあえず通話を……』

僕は慌ててルルに電話を掛けていた。

すると、ワンコールも鳴らないうちにルルが通話に出る。

それをみんなに聞こえるようにしてから話す。

ルル …『ユキ先輩、どうしました? ぼくの声が聞きたくなかったのですか?』

『いやいや、なんで同時視聴枠になってるの!?! ほらっ、初配信は色々決めるものがあるでしょ!?!』

ルル …『ぼくの初配信とユキ先輩の放送。大切なのはもちろん先輩の放送ですよね!?!』

『そんなわけないよ!?! 僕の枠はおまけで、今日のメインはルルの初配信なんだからね!?! ほらっ、リスナーさんが待ってるよ』

ルル …『えっと、コメント欄を見る限りだと「いいぞ、もっとやれ」とか「期待の新人だ」とかいうコメントが流れていますね。つまり、これはリスナーさんが望んでること、です』

同時視聴してなくても、ルルがいたずらっぽい笑みを浮かべているのが良くわかる。

『はあ……、わかったよ。ルルがこっちを見てるなら、ルルのタグは僕の方で募集してみるよ』

ルル …『え、っ!?! せ、先輩からのプレゼント!?! 一生大事にしま

す』

『大袈裟だよ!? 大袈裟すぎるからね!?』

ルル : 『先輩にぼくの初めてを捧げますね……』

『もう、勝手に言ってるといいよ。はあ……』

ルル : 『ため息じゃなくて、もつと照れてくださいよ。ユキ先輩、冷たいです……』

『はいはい、わかったよ。恥ずかしい恥ずかしい……。じゃあ、タグを決めようか』

ルル : 『なんだか扱いが適当ですよ……』

口を尖らせているルルを放っておいて、僕は決めないといけないタグを確認する。

押しマークは既に決まっているはずなので、決めるのはファンネームとファンアートタグと配信タグか……。

『まずはファンネームタグだね。みんな、何かないかな?』

【コメント】

: ユキくんが先輩してる!?

: ユキくんを見ると暴走するタイプか

: ココママか

: ココママを暴走特急で混ぜた感じだな

: 塩対応ユキくん登場だw

ユイ : 『うみゆ、ユキ天使で』

『僕は関係ないよね!』

ココネ : 『わ、私はユキくんを見ても暴走しないですよ?』

『胸に手を当てて考えてみるといいよ』

ココネ : 『触りたいのですか? いいですよ、ユキくんなら……』

『ぼ、僕が触りたいって言ったわけじゃないからね!? だ、だからじわ

じわ近づかないで……』

ルル …『むう……ぼくと違う反応……。やっぱり時間の差を埋めるのは大変です。で、でも、負けないよ!』

『そ、そんなことで競わないで! ルルもココママは僕の恩人だからね』

ココネ:『ゆ、ユキくん……』

ルル …『ううう……、これで勝ったと思うなー!』

『はいはい、何も競ってないよ……』

カグラ:『もう、天使さんでいいでしょ』

『うん、そ、それで。きまらなさそうだし、カグラさんのそれでいいね』

【コメント】

・ポンが集まるとカグラ様が真面目モードに

・期待のポン天使だ

・どちらかと言えばユキくんが新人みたいだw

『ど、どンドン決めていくよ。次はファンアートタグを——、って、なんで僕が進めてるの?』

ルル …『ぼくは自分のイラストよりユキ先輩のイラストが欲しいです。どンドン犬写真へ送ってください』

『そ、それは僕のファンアートだよ! それにほらっ、僕と一緒に描かれたファンアートが来るかもしれないよ?』

ルル …『なら天使写真でいいですよ』

『ず、ずいぶんと適当に行くんだね……』

ルル …『ちなみにここでいう天使はユキ先輩のことです』

『僕は天使じゃなくて犬だからね!』

ルル …『簡単でわかりやすい良いタグだと思いますよ』

『……本心は?』

ルル …『……難しいのだとぼくが覚えられない』

『みんなー、もっと複雑なやつをお願いねー』

ルル …『ユキ先輩が僕に無理難題を!? ぐっ、せ、先輩からの試練

……、受けるしかないです』

ユイ　：『天写真はどうなの？』

カグラ　：『短くなってるわよ』

ルル　　：『そ、それにします！』

『なら、あとは配信タグだね。僕だと「犬拾いました」とか「ユキ犬姫拾いました」だね。うん、ココママが勝手に決めちゃったやつ……』
ココネ　：『ユキくんがぼんやりしてましたからね。私からの初めての贈り物ですね』

ルル　　：『むうう……』

ルルは頬を膨らませて拗ねていた。

『こ、ココママ、今は抑えて……』

ルル　　：『僕もユキ先輩に配信タグを決めてもらいたいです！』

『や、やっぱりこうなった……。うーん、僕、こういうの考えるの苦手なんだよね……。た、たとえば「生天使」とか……。？』

ココネ　：『ゆ、ユキくん……』

カグラ　：『……そのままね』

ユイ　　：『ゆいよりもまつすぐなの……』

『ほ、本当にこういうのを考えるのは苦手なんだよ……』

ルル　　：『いえ、これ以上ない完璧な配信タグです！　写生させてもらって額に入れて飾りますね！』

『や、やめて!?　そ、そんなすごいものじゃないから！　むしろ僕の痴態を広めてるだけだから！』

ルル　　：『いえ、ユキ先輩がぼくのために考えてくれたものですから。これ以上ない宝物ですよ。……えへへっ』

——まあ、ルルが嬉しそうだからいいか。

僕は満面の笑みを浮かべてるルルを見て苦笑いをしていた。

『後はプロフィールだよね？ 本当なら最初に言わないといけないやつだったんだけど、ルル、準備はしてる？』

ルル : 『一応準備してありますよ。ユキ先輩の配信より重要度は低かったですけど』

『いやいや、僕の配信はアーカイブに残すから、自分の配信を優先してよ……』

ココネ : 『とりあえず今貼ってくれるかな？ せっかくだから、ここでプロフィール紹介をしてみましようか』

ルル : 『がるるる……。ママには負けない』

ココネ : 『な、なんで威圧されてるのですか？ プロフィール紹介に勝ちも負けもないですよ？』

『ルル、お願いね』

ルル : 『はい、わかりました。大至急貼らせていただきます!!』

ルルが敬礼をして、すぐにプロフィールを貼ってくれる。

——ルルは何故かココネを敵認定しているけど、僕としては仲良くしてほしいな……。

●天瀬ルル（あませるる）

年齢：18歳

性格：悪戯好き

好きなもの：動画配信。かわいいもの。ユキ先輩

嫌いなもの：孤独。

詳細：楽しいことを求めて天界より降り立った天使。少し悪戯好きで、かわいいものにちよっつかいをかけることを生業としている。

V t u b e r になつたきっかけ：ユキ先輩と一緒にコラボをするため。あわよくばオフ会をして一緒にお泊まりをして、お風呂にも一緒に入って、それでそれで——。

座右の銘：ユキ先輩命

配信予定：ユキ先輩についての雑談。ユキ先輩とコラボ。その他適

当に

『うん、なんだろう……。僕、身の危険を感じるから放送終わってもいいかな?』

ルル : 『ま、待つてください。冗談です。冗談ですから』

ユイ : 『うみゆー? どのあたりが?』

ルル : 『いくらユキ先輩がかわいくても、そこまでたくさん悪戯しないでですから』

『それじゃあ、今日の配信はこの辺りにします。犬好きのみなさん、乙わふさまでした』

ルル : 『早いですよ!? ほ、ほらっ、ぼくのわからないことを優しく手取り足取り教えてくれるって言ったのは先輩じゃないですか!? あの時からもうぼくは先輩なしでは生きられない体になってしまったんですよ?』

『色々妄想で変換されすぎてるよ……。僕が言ったのは「わからないことを教える」って部分だけだよ……』

カグラ : 『まあ、ユキに手取り足取り教えるなんてこと、できるはずないもんね』

ココネ : 『ユキくん、恥ずかしがり屋さんですからね』

ユイ : 『うみゆ、ユキくんはこっちから突っ込んでいかないとなかなか難しいの』

ルル : 『なるほど……。メモ帳、メモ帳……』

『ちよつと待つて!? 何をメモするの!?』

ルル : 『あつ、ちよつとユキ先輩は聞かないでくださいね。今、ユキ先輩の落とし方をユイ先輩に聞くとこですから』

ユイ : 『うみゆー、任せるといいの』

『ユイはそんなこと教えなくていいから!! ルルも聞かないの!』

ルル : 『ユキ先輩のお願いでもそれは聞けないです。ユキ先輩を落とせるのなら、ぼくは悪魔にでも羊にでも魂を売りますから』

『落とせないよ!? ユイも変なことを言わないで!!』

ユイ : 『うみゆー、残念なの……』

カグラ：『はあ……、どっちにしてもそろそろルルの配信時間は終わりじゃないかしら？ 次はエミリの配信でしょ？』

ルル：『わかりました。では、急いでぼくの配信を締めてきますね。それでこっちに合流します！ 通話そのまま繋いでおいてください！』

『えっと、それって僕の枠でコラボするってこと?? い、いいのかな……?』

ココネ：『一応担当さんには確認を取っておきましたよ。色々と型破りな方ですけど、ユキくんならいいって言われました』

『ありがとう、ココママ……』

ココネ：『いえ、ユキくんのためならお安い御用ですよ』

ルル：『むうう……、こ、これで負けたなんて思わないからね！

次こそ勝ってみせるから！』

ココネ：『えっと、勝負なんてしてないですよ？』

『あ、あははっ……』

変な方向に暴走を続けていただけで、ルルの初配信は終わってしまった。

しかし、ルルのリスナーもコメント欄で喜んでいたようなので、これはこれでよかったのだろう。

——なんだろう。僕の気苦労が増えそうだな……。

第2話：四期生の絆は？ 魔界エミリ #ココユカオ フ会

『《魔界エミリ初配信》自己紹介と四期生の魅力を話すよ 《魔界エミリ／シロルーム四期生》』

1. 4万人が待機中 ライブ配信中

☒571 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：二人目だ

：天使っ子のルルちゃんとは正反対の悪魔っ子か

：かわいいね

：いたずらっ子っぽいな

二人目の配信が始まった。

その様子を僕は不安げに眺めていた。

いや、エミリの配信自体には不安はないのだが、逆に同時配信枠を取っている僕の枠。

今、僕の周りを包む空気感が不安を醸し出していた。

ココネ：『ほらっ、ルルちゃん。同期の子の放送ですよ。私たちとコラボするよりエミリちゃんとコラボした方が良くないですか？』

ルル：『いえ、エミリも放送に慣れてるので、ぼくが行く必要なんてないですよ。そんなに心配ならココ先輩が行ってください。ぼくはユキ先輩と一緒にいますから』

通話越しにココネとルルが火花を飛ばしあっていた。

ユイ：『うみゅー、みんな仲良しなの……』

カグラ：『これのどこが仲良しなのよ!?!』

『あ、あははっ……』

早くも混沌とし始めた僕の配信。

——おかしいな……。ココママもルルも自分の配信の時はもつと落ち着いた、しつかりとした雰囲気なのに……。

『ほらっ、始まったよ。……ってあれっ？ ミニアニメがついてるっ。』
ルル：『あっ、そうでした。エミリって、こういうことが得意みたいでぼくも作ってもらってたんですよ』

『あれっ?? でも、ルルの配信画面では見なかったよね?』

ルル：『はい、今思い出しました……』

『ああ、そういうこと……』

僕もよく忘れることがあるから仕方ないよね。

すでにミニアニメを持つてたことを知ってたら、注意することでもできたんだけど、今知ったところだし……。

カグラ：『あっ、放送が始まったわよ』

カグラのその声と共に僕たちは意識をエミリの放送へ向ける。



エミリ：『みんなー、こんばんはー。シロルーム四期生、まかいのえみり魔界エミリだよ。今日は私の放送へ来てくれてありがとうー！ まだまだ至らない点はあるけど、よろしくねー!』

悪魔のアバターと共に元気よく飛び出してくるエミリ。

短めの黒い髪と二本の黄色い角。七瀬に負けず劣らず小柄な背丈。

黒と赤のワンピースを着た悪魔。

ただ、そのアバターの姿からは想像がつかないほど爽やかな雰囲気だった。

ココネ：『なかなか爽やかな子ですね』

『う、うん……、そうだね……』

——あれっ？ 昨日の通話の時はもつと暗い、闇墮ちしていそうな声をしていたはずなのに……？ もしかして別人だったのかな？

同時視聴していた僕は首を傾げていた。

カグラ：『まあ、ルルがこんな感じだからいいんじゃない？』

ルル：『ぼくほどしつかりした人はいないですからね。大丈夫です、ユキ先輩。四期生はぼくがまとめあげますよ！ ユキ先輩の名を賭けて』

『勝手に僕の名前を賭けないでくれるかな……』

ユイ：『うみゆ……、この子、少し違和感があるの』

ユイが珍しく画面をジッと見ていた。

ココネ：『えっと、みんなが暴走するので、まともな人が増えるのは嬉しいです』

『ココママも暴走しなかったらいいんだけどね……。最近だと僕が三期生をまとめてるなんて誤報が広まってるんだからね』

カグラ：『まあ、それは間違っていないわよ』

ユイ：『うみゆー、ユキくんはゆいのものなの。すりすりー』

『わわっ、ユイ、頬をすりすりしないで!』

ココネ：『ダメですよ、ユイちゃん!? それは私の役目です!』

空いている方の頬をココネがすりすりとしてくる。

『ど、どっちも違うよ!?　だ、だから離れて……』

ルル　：『むうう……、そうですよ!　それはぼくの役目ですよ』
『ルルの役目でもないからねっ!?!』

カグラ：『ユキの取り合いは後からにしてくれる?　プロフィール紹介が始まったわよ』

ルル　：『プロフィールよりもユキ先輩の方が大事ですよ?』

『僕はその、新しい後輩さんのプロフィールは見たいな……』

ルル　：『ほらっ、ココネ先輩、ユイ先輩、ポン先輩、早くエミリのプロフィールを見ますよ!　遊んでる暇なんてないです!』

ココネ：『あははっ……、ルルちゃんってユキくんが関わると人が変わるね……』

ユイ　：『うみゅー、ココママは人のことを言えないの』

カグラ：『誰がポン先輩よ!?!』

『と、とにかく、エミリさんの放送を見ようよ……』

騒いでる四人を焚き付けて、僕たちは再びエミリの放送を注視していた。



エミリ：『それじゃあ、まずはプロフィールを紹介するね』

●魔界エミリ《まかいのえみり》

年齢：20歳

性格：寂しがりや

好きなもの：四期生、愛、賑やか

嫌いなもの：悲哀、孤独

詳細：魔界に住んでいた悪魔。でも、愛に飢えており、愛を求めて人間界にやってきた。人恋しさに憧れを持つやさしき悪魔

V t u b e r になつたきっかけ：三期生の仲良さにあこがて
配信予定：コラボをたくさんしたいな

エミリ：『その……、たくさんの人に愛してもらえると嬉しいな』
エミリが上目遣いで微笑んでいた。

【コメント】

・任せろ

・愛してるぞ

・四期生大好きっ子か

・そういえばルルちゃんがもうユキくんたちとコラボしてたな

エミリ：『え、っ!?!』

ユキくんという文字を見てエミリが驚きの声を上げる。

エミリ：『う、嘘ですよ？ エミリだってまだコラボをしたことが
ないのに……。四期生はみんな仲良しのはずなのに……。あつ、ご、
ごめんなさい。今のは独り言です。気にしないでください』

【コメント】

・黒いw

・草

・今もユキくんたち、見てるんじゃないか？

エミリ：『あつ、そうですね。それならルルちゃんに通話を掛けてみ
ますね』

その言葉と同時にルルの方で通話音が聞こえる。

ルル : 『エミリから通話が来た。うん、無視しよう』

『さも当然のように無視したらダメだよ!』

ココネ : 『あははっ……、ユキくんの初めてを思い出しますね。理由は違いましたが、すぐ逃げようとしてましたし……』

ルル : 『その話、詳しく!』

『ほらっ、ルルはその前に通話だよ』

ルル : 『わかりました。最速で切ってきます』

『切ったら可哀想だよ!』 ほらっ、同期の仲間でしょ?』

ルル : 『そうですね。ユキ先輩が仰るのなら——』

一度ルルが僕たちの方から消えて、エミリとの通話に出る。

それを僕たちはエミリの配信で見守る。

ルル : 『エミリ、どうしたの?』

エミリ : 『あっ、ルルちゃん。よかった、出てくれた……』

ルル : 『普通に出るよ。ぼくたち、同期でしょ?』

エミリ : 『うん、そうだよ。私、心配しちゃったよ。ほらっ、ルルちゃんをユキ先輩に取られるんじゃないかって……』

ルル : 『そんなことないよ。ぼくは誰にも取られないから安心してよ。ぼくがユキ先輩を魔の手ココママから救おうとしてるだけだから——』

エミリ : 『うん……? どういうことかわからないけど、とりあえずよかったよ。あっ、そうだ。よかったら私とコラボしてくれないかな? ほらっ、一人だと心細いし、昔の三期生みたいに……』

ルル : 『ごめんね。ぼく、これからユキ先輩とのコラボに戻るから。それじゃあね』

それだけ言うとルルは通話を切っていた。

一人、口をぽっかり開けたままのエミリ。

笑顔のまま、固まっていた。

そして、配信画面からは鈍い音が聞こえてくる。

ポカポカ……。

どうやらエミリが机を叩いているようだった。

エミリ：『……取られないって言ったじゃない。なんでエミリとのコラボじゃなくて、ユキ先輩を選ぶのよ。同期でしょ。仲間でしょ。普通はエミリのところに来るんじゃないの』

ポカポカ……。

ひたすらエミリは叩くのをやめなかった。

【コメント】

：黒い……

：ヤンデレか

：まあルルちゃんはユキくん大好きっ子だから

：台パン助かる

そんな感じにエミリの気持ちをかき乱すだけ乱してきたルルは何事もなかったかのように戻ってくる。

ルル　：『ただいまー』

『あつ、おかえりー。……じゃないよ!?　せっかくだからコラボをしてあげたらよかったのに……』

ルル　：『いえ、ユキ先輩をお待たせするわけにはいかないですから!』

ココネ：『えっと……、すごく闇堕ちしてますよ……』

ユイ　：『うみゅー、クロクロなの』

『ぼ、僕のことはいいいからとりあえず、コラボしてあげて……。このま

まだと可哀想だよ』

ルル　：『むうう……。ユキ先輩、ぼくがここにいるのは嫌なのですか？』

『そ、そんなことないよ。ほらっ、今度また一緒にコラボするから今は行つてあげて』

ルル　：『わかりました！ オフコラボ、約束ですよ！』

ルルは今までで一番明るい声を出して戻っていった。

ココネ：『ユキくん……。、いいように約束させられていますよ……。』

ユイ　：『うにゅー、オフコラボなの』

『まあ、ルルは一度会ったことがあるし、気が楽だからね』

それに同じ性別だから滅多なことは起きないだろう。



エミリ：『……。どうしてユキ先輩のほうがいいのよ。確かにとつても可愛らしい先輩だけど、それでも私は同期の仲間なんだよ。それなのに、それなのに……。』

段々と闇落ちが激しくなっていた。

すると、そのタイミングで通話が掛かってくる。

相手はルル。

一瞬笑みを浮かべたものの、すぐに元の態度に戻り、通話に出る。

ルル　：『エミリ、大丈夫かな？』

エミリ：『っーん。今更どうしたの？　ユキ先輩とコラボをするつて言つたじゃない』

ルル　：『えっと、そうなんだけどね。やっぱりエミリと一緒に話ができたらな、って戻ってきたんだ。でも、迷惑なら行くね』

エミリ：『べ、別に迷惑なんて言っていないよ。ただ、やっぱり寂しかったの。ほらっ、ルルちゃんは同期なのに、いつもユキ先輩、ユキ先輩、つて言って私たちのことはあまり話さないから。その……、あまり親しくないんじゃないかなって……』

ルル：『……そんなことない。ぼくにとって、エミリは大切な同期だよ。たった四人しかいない仲間だからね』

エミリ：『そ、そうだよね!? うん、やっぱりそうだよね!? 心配して損したよ。やっぱり同期は好きあつて当然よね。愛し合つて当然だよね!?!』

ルル：『えつと、そこまでは言っていない……』

エミリ：『えつ……、エミリのこと、好きじゃないの……? 愛してくれないの……?』

ルル：『怖い! 怖いよ!? ぼ、ぼくはいつものエミリのほうが好きかな。ほらっ、いきなり刺されそうじゃないし……』

エミリ：『そ、そうだよね。うん、ごめんね。ほらっ、私つてすぐに不安になつちやつて……』

ルル：『わかつてくれたなら大丈夫だよ、ぼくもイツキもフウもいるんだから安心してね。みんないなくなったりしないから』

エミリ：『うん、そうだよね。心配して損したよ。それじゃあ、このままコラボしてくれる?』

ルル：『仕方ないなあ……』

【コメント】

：ルルちゃん、優しい

：悪を払う天使

：でも既にユキくん依存症にかかつてるんだよな

エミリ：『それじゃあ、ルルちゃんとコラボすることになったので、二人で私の配信タグを決めていききたいと思いまーす!』

何事もなかったかのように笑顔を見せてくるエミリ。

そんな彼女の様子にルルは苦笑を浮かべてしまう。

エミリ：『まずは配信タグだけど、どんなのがいいかな？』

【コメント】

：ヤンデレさん

：悪魔っ子

：包丁

：ルルっ子

ルル：『ぼくの名前はやめてね。えっと、流石に怖いのは除いたら悪魔っ子しか残らないんだけど……』

エミリ：『ヤンデレって誰のことだろうね。私、清純だからわからないよ』

ルル：『鏡を見てくるといいよ』

エミリ：『ルルちゃんに抱きついてる私が見えたよ』

ルル：『うん、その鏡は壊れてるから破壊しておくね。本物ならばくとユキ先輩が抱き合ってるのが映るから』

エミリ：『そんなのが見えたら割っちゃうよ？』

【コメント】

：似たもの同士w

：割られる鏡が可哀想w

：四期生はこういう方向なのか

：またポンがポンを呼んでいく……

エミリ：『どんどんいくよー。次はファンアートタグだね』

ルル：『ぼくは天写真になったよ』

エミリ：『なら私は悪写真？ 流石に語呂が悪いね』

ルル：『悪魔絵とかはどうかな？』

エミリ：『ルルちゃんが出してくれたものだから、それにするね。そ

れで最後は……配信タグだね。ルルちゃんはもうどうやって決めたの？』
ルル　『えっ、ぼく？　ぼくはユキ先輩に決めてもらったよ。ぼくの宝物だよ』

エミリ　『むうう……、そ、それなら私の配信タグはルルちゃんが決めて！　それを私の宝物にするから！』

ルル　『別にいいよ。でも、何か怒ってる？』

エミリ　『怒ってないよ！』

ルル　『やっぱり怒ってる……。そうだね、エミリは悪魔っ子だから魔界配信とかどうかな？』

エミリ　『あつ、いい感じだね。それにするよ』

ルル　『そんなにあっさり決めてよかったのかな？』

エミリ　『だって、同期の大切な仲間が決めてくれたものだもん。大切に使うよ』

ルル　『それならよかったけど……。あつ、もうちよつとでユキ先輩の放送が終わっちゃおう！　今日はまだスパチャ投げてないんだよ。ごめんね、エミリ。ぼく、ちよつと行ってくるね！』

エミリ　『あつ、ちよつと待って。まだ私の放送は——』

そこで会話がぷつりと途切れてしまった。

それから配信終了までポカポカと机を叩く音が鳴り響いていた。

エミリ　『絶対に負けないんだから。ルルちゃんは私たち四期生のメンバーなんだから……』

第3話：百合姉と健全たぬき

ある意味初配信からとんでもないインパクトを与えてしまったルとエミリ。

その様子を狸川たぬがわふうフウこと立木たつきみくみ未来美と姉川あねがわいつきイツキこと宇多うたのあおい野葵の二人は呆然と眺めていた。

「二人とも、なかなか強烈だったね……」

未来美は苦笑をしていたが、葵は大爆笑をしていた。

「あははっ、なかなか面白いよ。エミリちゃん……、要チエツクだね」
「……変なことしたらダメだからね」

「そんなことするはずないでしょ。お姉さんはただ全裸でオフ会を――」

「わああああ……?!?!? だ、ダメだよ!? ダメだよ!? ぜつつつつたいにダメだからね!?!」

未来美は顔を真っ赤にして、手をばたつかせて慌てていた。それを見た葵は未来美に抱きついていていた。

「あーっ、もう。みくちゃんは可愛いわね。お姉さんがハグハグしてあげよう」

「わわっ、や、やめてよ……。もう……」

口では文句を言いつつも、抵抗する素振りを見せない未来美。むしろ、大人しくされるがままになっていた。

「それにしても、また一緒にこうしていられるなんて、信じられないよ……」

「お姉さん的には全然気にしてなかったのに、みくちゃんが遠慮し

「ちゃったからでしょ」

「だ、だってえ……」

未来美が配信したきっかけは葵にあった。

葵がMe e Tubeでゲーム実況をしていたのを見て、同じ話題ができればもつと葵と話せるよね……という考えで始めていた。

ただ、それが裏目に出てしまい、未来美のチャンネル登録者数はあつという間に葵を抜いてしまい、それをきっかけに少し話しくくなつて葵とは疎遠になつてしまった。

何かを話しかけると葵が気にするのでは……、と未来美が遠慮してしまつたのだ。

でも、巡り巡つてこうして同じシロルールの、しかも同期として配信できるようになつた。

それがきっかけでこうして葵と元の仲に戻ることもできた。

いや、今まで離れていた分、思いつきり甘えていた。

「初配信で少し緊張してるから一緒にいていい？」

と、無理を言つてこうして葵の部屋にお邪魔していたのだ。

「ま、まずは葵ちゃんの放送だね。大丈夫？ 準備はできてる？」

「大丈夫。エミリちゃんからもらつたミニアニメは準備できてるし、プロフィールは……まあ、適当に作つたから」

「適当って、大事なところだからね!? 最初にたくさんの人に見てもらわないとお気に入りの伸びび方に差が出てきてしまうからね!?」

「お姉さんはそこまで気にしないんだけどな……」

「私が気にするの!? もう、前みたいに疎遠になるの、嫌だからね、私……」

「大丈夫よ。もう同じ企業ライバーの同期なんだからいつでも会えるよ。家も隣でしょ？」

「う、うん……。そ、そうだね。ありがとう……。つて、なんで私のス

カートをめくってるの?!?!?」

未来美は顔を赤面させて必死にスカートを押さえていた。

「はははっ、目の前に可愛い子がいるのにスカートを捲らないなんて、失礼だとは思わないか?」

「思わないよ!? もう……、相変わらずなんだから……」

「とにかく安心して見ててよ。しっかりお姉さんが暴走して、最後のまとめを任せるから」

「ちよつと、なんで私がまとめる役なのよ!?!」

「お姉さんがまとめられると思ってるの? できると思う?」

久々に見にきた葵の部屋はかなり散らかっており、未来美がそれを片付けていた。

しかも、シロルームとの細かい打ち合わせも未来美が予定を組んで、葵と一緒に رفتっていた。

年齢的には葵の方が上なのだが、しっかりしているのは未来美。

いや、年齢で言うならルル同様に未来美もシロルームで最年少。

でも、四期生全員が暴走するわけにはいかない。

自分がしつかりするしかなかった。

「葵ちゃんにはできないね。昨日の様子だとルルちゃんやエミリちゃん……にも任せられないし、うん、消去法だと私になるんだね——」

「大丈夫! みくちゃんならできるよ!」

「うん、励ましてくれるのは嬉しいけど、いい加減スカートから手を離してくれないかな?」

「それは気にしなくていいよ!」

「き、気にするよ!?!」



『《姉川イツキ初配信》お姉さんの紹介よ 《姉川イツキ／シロルーム四期生》』

1. 0万人が待機中 ライブ配信中

☒362 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：色っぽいな。

：珍しいお姉さんタイプ

：まさかコウ先輩タイプか!?

：いや、今のところ暴走枠しかない四期生だぞ？

：全員暴走枠かw

ミアアニメを流し終わるとイツキはその姿を表していた。

茶色の長い髪をしたお姉さん。

胸は大きめで、それを協調したバニー衣装を着ている。

そして、何より自身が色っぽいことを理解しているイツキが、それらしい表情を見せていた。

イツキ『あららっ、みんな、お姉さんの配信にきてくれたの？ ありがとうね。お姉さんはシロルーム四期生、姉川あねかわイツキよ。よろしくね』

【コメント】

：色っぽい

：よろしくー

：意外と普通だw

：ついに新しい真面目枠が来たか

イツキ『あらあら、みんなお姉さんの真面目な話が聞きたいの？

でもちよつと待ってね。今日は色々決めないといけないからね』

イツキはそういうと自身のプロフィールを表示させていた。

●姉川イツキ 《あねがわいつき》

年齢：22歳

性格：自由奔放

好きなもの：酒、エロ、フウ、百合

嫌いなもの：エロくないもの、BL

詳細：エロと百合をこよなく愛するお姉様

自身は暴走しがちだが、他人が暴走したときはなぜか抑える役割に回る。

V t u b e r になつたきっかけ：女の子同士がわちやわちやする様子を見て

配信予定：歌枠、コラボ枠、ゲーム枠



イツキが普通に配信できているところを見てフウは少しホツとしていた。

これなら大丈夫だろう、と自分の配信を準備することにした。しかし、それがすぐに間違いだったことに気づく。

イツキ：『プロフィールもタグもすぐに決まっちゃったわね。それじゃあ、お姉さんからひとつ、真面目な話をしましょうか。そう、宇宙誕生の話よ』

【コメント】

：まさかの宇宙w

：突拍子のない話w

：草草

イツキ：『そもそも、宇宙とは女の子のスカートの中から生まれるものよ！ 具体的にはフウのパンツよ！ つまりパンツには宇宙の真理全てが詰まっているのよ。それでフウのパンツなんだけど、さっき見た時は——』

突然訳もわからない前振りから斜め上のエロ談義を始めるイツキ。それを隣で聞いていたフウは動きが固まっていた。

【コメント】

：まさかのエロw

：フウって次の子だよな？ w

：ワクワク

狸川フウ：な、何勝手に人のば……下着について語ってるの!?!?

：本人居て草

イツキ：『でもでも、みんな可愛い子のパンツは見たいわよね？ 色を知りたいわよね？ この愛の伝道師たるお姉さんがその夢を叶えてあげるわよ。でも、フウはまだまだお子様だから白の小さいリボンがついたやつなのよね。もっと大人のやつを履いてもいいと思うんだけど……。って、痛い、痛いわよ、フウ』

ポカポカポカ……。

フウは無言でイツキのことを叩いていた。その顔は真っ赤で目に涙を溜めて……。

フウ：『か、勝手に言わないでよ……。は、恥ずかしくて外に出られなくなるよ……』

イツキ：『大丈夫よ！ フウが家を出られないならお姉さんが一生面倒見るからね』

フウ : 『イツキ……』

イツキ : 『だから安心してお姉さんに身も心も全て捧げてくれていいんだよ。むしろ今からレッツツゴ―!!』

フウ : 『……っ?!?!? あうあう、な、何を……、何を言ってるのよ、ば、ばか!! 本当にばか!!』

ポカポカポカ……。

【コメント】

: やっぱり暴走枠だったw

: 次のフウって子が四期生の真面目枠か

: 楽しみだな

: どうか一緒にいたのか

: 初配信からオフ会か

フウ : 『もう、次余計なことを言ったらしばらく家に行かないからね! 部屋も片付けないからね!』

イツキ : 『うん、大丈夫だよ。お姉さんが代わりにフウの部屋に行くから』

フウ : 『い、家にも入れないから!!』

イツキ : 『わかったよ。今は余計なことを言わないから』

フウ : 『それでいいの。そ、それじゃあ、私は自分の配信準備をしてくるからね』

それだけ言うとフウは言葉を発することがなくなった。

◇◇◇

『《狸川フウ初配信》自己紹介ポコー 《狸川フウ／シロルーム四期生》』

1. 2万人が待機中 ライブ配信中

☒483 ☒0 ?共有 ≡?保存 :

【コメント】

- ・さっきの子だな
- ・もしかして、語尾があるのか？
- ・さっきなかったぞ？ w
- ・苦勞屋狸

さつきイツキの枠でついつい声を出してしまったせいで、少し枠に顔を出すのが恥ずかしい。

それでも出ないわけには行かないので、ちよつと顔を出す。

短めの茶色の髪と丸い耳。そして、頭に乗っている金の王冠が顔を覗かせる。

フウ 『ご、こんポコー。ふうは狸川たぬがわふうフウポコ。そ、その……、さっきの話はできれば忘れてください。ついつい、口を挟んでしまいました……。あつ……ぽ、ポコ』

次第に調子が戻っていき、全身を表示させていた。小柄な体型で白のワンピースを着ている狸の少女。

【コメント】

- ・語尾は意識しないと忘れちゃうのか w
- ・かわいい
- ・しかも純情 w
- ・照れてる顔がまたいいな

フウ 『ご、語尾つてなんのことポコか？ ふうは自然体です……ポコよ』

凶星を突かれて慌ててしまう。

しかし、深呼吸をして気持ちを落ち着けると画面にプロフィールを

表示させる。

●狸川フウ《たぬがわふう》

年齢：18歳

性格：純情で真面目

好きなもの：ゲーム。四期生、イツキ

嫌いなもの：一人。孤独。えっちなこと

詳細：四期生のまとめ役をしている狸少女。自分以外全員がポン役と言うことで気苦労が絶えないが、明るく楽しそうに話す。えっちなことを言われると顔を赤面させて、頭が働かなくなる。

V t u b e r になつたきっかけ：知り合いを増やしたかった

配信予定：ゲーム枠、コラボ枠、雑談枠

【コメント】

：嫌いなものの欄www

：言ってみたいw

：まさかのまとめ役w

：まとめ……られるのか？

フウ：『ふえっ!! な、なんで？ そんなこと書いてないはずなのに……。あっ!! も、もしかして——』

フウは隣にいるイツキを睨みつける。

すると、イツキはイタズラがバレた子供のように舌を出していた。

フウ：『や、やっぱり……。イツキちゃんが勝手に書いたんだね。わ、私がそんな……。え、えち……。そ、そんな変なこと書くはずないもん!!』

イツキ：『ほらっ、フウ。語尾、忘れてるよ』

フウ：『っ!?! ほ、ポ……』

イツキ：『それにフウはお姉さんのこと、好きでしょ？ 間違つてな

いよね?』

フウ …『う、うん……』

イツキ …『それにえっちなことはいつもしてるよね?』

フウ …『そ、それは嘘ポコ!! ふうはそんなことしないポコ!!』

ポコポコポコ……。

イツキを何度も叩く。

イツキ …『もつとオープンになろうよ。お姉さんはいつでもウエルカムだからね』

フウ …『やっぱり身の危険ポコ。誰か応援を呼ばないとだめポコ』

そう言った瞬間にキヤスコードの通話が鳴る。

相手は……エミリだった。

エミリ …『応援が欲しいんだよね? 来てあげたよ?』

フウ …『丁重にお帰りくださいポコ』

エミリ …『ど、どうしてよ!? 応援が欲しいんだよね?』

フウ …『うん、応援が欲しいポコ。でも、ポン柀はいらぬポコ。これ以上増えるとふうだと扱いきれなくなるポコ。それに、エミリだとイツキの力にもなるポコ。より悲惨なことになるのが目に見えるポコ』

エミリ …『うぐつ……、確かに否定できないね……』

フウ …『でも、イツキちゃんとも仲良くしてくれてありがとうね。そこは感謝してるポコよ』

エミリ …『つ!? き、気にしなくていいよ。同期で仲間だもんね。仲良くするのは当然だからね』

イツキ …『仲間なら裸の付き合いをするのも当然よね?』

フウ …『い、イツキちゃん?!?! な、何を言ってるの!? そんなこと当然のはずが——』

エミリ：『そうよね。同期同士愛し合ってるならそのくらい当然よね？ ルルちゃんも呼んでやりましょう』

フウ：『ふうがおかしいポコかな？ 違うよね!? どう考えても二人がおかしいよね？』

【コメント】

：やっぱりぽん二人を抑えきれないかw

：まだポンはもう一人いるw

：おとなしそうな子だもんな

イツキ：『よし、お姉さんが全力で協力しよう』

エミリ：『流石イツキさん、よくわかってる』

二人の間で熱い友情が芽生えていた。

ただし、それはモザイクのかかったピンクの感情からだったが――

フウ：『わかったポコ。そこまで言うならふうはルルちゃんを連れて、三期生のユキ先輩の下へ行くよ。きつと、ユキ先輩ならこの配信を見ているはずだし、ふうたちが困っていたら見放さないと思うから……ポコ』

【コメント】

雪城ユキ：えつと……、困ってるなら手を貸すよ？

：ユキくん、本当にいたw

：まあ、昨日の配信も見てたもんな

：今日は同時視聴枠は取ってないんだな

フウ：『ユキ先輩……ありがとうございます。それでどうするポコ？』

フウがにつこり微笑むとすぐにエミリが折れていた。

エミリ：『そ、その……、二人が嫌がることはしないから安心して……』

イツキ：『お、お姉さんは諦めないから……』

フウ：『はあ……、イツキちゃんは後からお仕置きしておくポコよ……』

イツキ：『えっ？ お仕置き?? はあはあ……』

フウ：『うん、晩御飯にイツキちゃんが嫌いな野菜炒めを作っただけのポコ。ふうの作った料理、ちゃんと食べてくれるポコね？』

イツキ：『うぐっ、そ、そういうお仕置きは嫌だー!!』

こうして四期生、二人のポンに挟まれて、フウの初配信は無事に終わっていた。

第1話：夏瀬はルル？ #ユキルル

約束した以上、オフコラボをするために僕は動いていた。

コラボ解禁されるのは一ヶ月後……そのはずだから――。

一応担当さんにもいつからコラボをしているのか確認をする。すると、担当さんからは予想外の返答がくる。

マネ :「えっ、四期生とコラボですか？ ユキくんはいつでもいいですよ？ 暴走して後輩を潰すようなことはしませんから――」

ユキ :「えっ!? でも、僕たちの時って――」

マネ :「いきなりアカネさんとコラボすることになったら、ユキくんが帰らぬ人になってしまう恐れがありましたからね」

ユキ :「ああ……」

今でこそアカネ先輩とは親しくさせてもらっているが、その行動は自由奔放そのもの。

いつ暴走するかわからない彼女といきなりコラボをしてしまうと、今後にも影響が出てきそうだった。

ユキ :「わかりました。それじゃあ、ルルと一緒にオフコラボをさせていただけます」

マネ :「あつ、でも、食べられないように気をつけてくださいね？」

ユキ :「あははっ、僕は食べ物じゃないですよ」

マネ :「いえ、そういうことでは――」

担当さんは何を気にしているのか……。

僕は苦笑をしながら、七瀬にオフの日程を連絡していた。



七瀬と二人でオフ会をすることになった。

場所は七瀬の部屋……と言うことになったので、僕はいつもの格好をして出かけていた。

「ユキ先輩、いらっしやいませ。お待ちしました」

七瀬の部屋に着くと嬉しそうに出迎えられる。

「えっと、部屋でもその格好なんだね」

七瀬は以前同様、白のワンピース姿で見ていると普通の少女にしか見えなかった。

「この格好が楽なんですよ。昔からこういう服ばかり着てきたので――」

「ああ、そういうことだね。僕も昔、母さんに着させられたよ……」

「それにしても、今日のユキ先輩、可愛いですね！」

七瀬が嬉しそうに抱きついてくる。

――なんだろう……。こうやってみてると可愛い弟？ 妹？ が出た感じかな。

僕はそつと七瀬の頭を撫でていた。

「えへへっ……」

嬉しそうに微笑む七瀬。その表情を見ると僕も嬉しくなる。

「あれっ？ でも、この服は初めて七瀬と会ったときと同じ格好だよ

？」

「ユキ先輩はいつも可愛いってことですよ。もう、言わせないでくださいよ……」

七瀬は恥ずかしそうに照れていた。

「えと……、僕なんかより七瀬の方が可愛いよ」

男の七瀬にこういうのはどうかとも思ったけど、七瀬は目を大きく見開いた後、嬉しそうに微笑んでいた。

「ありがとうございます、ユキ先輩。私、ユキ先輩のこと、だーいすきですよー！」

再び七瀬が僕に飛びついてくる。

◇◇◇

『《#生天使 #ユキルル》ユキ先輩とお泊まりするよ 《天瀬ルル／雪城ユキ／シロルーム》』

1. 0万人が待機中 20XX／07／05 20:00に公開予定

☒473 ☒2 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：まさか同期コラボより先にユキくんとのコラボがくるとは

：よくユキくんが承諾したな

：約束してたもんな

：ユキくん、約束の言葉に弱いから

：ミニアニメがもうついているのか

：四期生は全員ついているよな

今回は忘れずにミニアニメを流していた。
そして、すぐに僕たちのアバターを表示させていた。

ルル 『みんなー、こんるるー！ ついに念願が叶って、ユキ先輩に初めてをもらってもらった天瀬ルルです。ぼく、幸せになります……』

『ちよっ!? 開幕早々に変なことを言ってるの!? ただ、ルルの家にお泊まりに來ただけだからね。あつ、僕はシロルム三期生の雪城ユキです。わ、わふっ、よろしくね』

ルル 『ユキ先輩と二人つきりでお泊まり……。これは何をしても許されるってことだよな? ……ごちそうさま』

『な、なにをする気なの!? ぼ、僕は普通に楽しく過ごすつもりだよ? もしかして、僕ライオンの檻に閉じ込められちゃった? に、逃げないと!』

ルル 『逃げたらダメですよー! それにさつきギユツて抱きしめてくれましたよな?』

『あつ、そんなことでいいの? はいっ、これでいいかな?』

さつきと同じようにルルを抱きしめる。

相手がココネやユイとかの異性なら緊張してしまうが、同性のルルならそれほど抵抗はなかった。

もちろん人と接すること自体の抵抗はあるもののそのくらいだった。

ルル 『はわわわっ、み、みなさん。ぼ、ぼく、今、ユキ先輩に抱きつかれてます。ここは天国ですか? ぼく、ゴールしてもいいのですか?』

『何変なことを言ってるの? それよりも話を進めるよ』

ルル 『すうー、すうー……。はあ……。ユキ先輩はいい香りがします……。幸せです……。』

『だからそういう話じゃないよ……。ルル、今すぐ危険な人に見え

るよ……』

【コメント】

：ユキくんが冷静だw

：あれっ？ このユキくんは本物？

真心ココネ：ユキくん、私の時は嫌がるのに

羊沢ユイ：うみゅー！ ゆいもゆいも

魔界エミリ ……：やっぱり敵はユキ先輩でしたか

姉川イツキ ……：お風呂の話はまだー？

狸川フウ ……：イツキちゃん、変なことを言ったらダメだよ！

：やっぱりこの声……

『そ、それじゃあ、今日はマシユマロを読んでいくね。ルルもそれでもいいよね？』

ルル ……：『ぼくはもう少しユキ先輩の人肌を感じていたい——』

『ルルもいって事なので、読んでいくね。えつと……』

『ユキくんとの初コラボ、ルルちゃんは何をしてもらいたいですか？』

ルル ……：『えつ？ これ言ってもいいのですか？ といってもあと
は添い寝くらいですよ？ ギョツて抱きしめてもらいなから寝た
いです』

『えつ!? 今日はどちらかといえば雑魚寝じゃないかな？』

ルル ……：『いえ、おんなじ布団で寝たら添い寝です！ ユキ先輩が抱
きしめてくれないならぼくから抱きつきに行きます！』

『えと、あつ、うん。まあ、それは構わないけど……』

ルル ……：『だから先輩、あとから二人、くんずほぐれずの状態で寝ま
しょうね』

『えとえと……、多分僕は先に寝ちやうよ？』

ルル ……：『わかりました。隣でじっくり寝顔を堪能します！』

『僕の寝顔なんて見ても楽しくないよね?』

【コメント】

真心ココネ：私は楽しいです！

羊沢ユイ：ゆいも見たいの

魔界エミリ：ぐぬぬぬっ

狸川フウ：エミリちゃん、ただのオフ会だからね

姉川イツキ：女の子同士、くんずほぐれずのお泊まり会……、妄想が捗るね

美空アカネ：うんうん、わかってるね、後輩くん。えっちいことは正義だからね

海星コウ：はあ……、アカネ、変なことを言うなら押し込めるからね

美空アカネ：押し入れなら快適空間に改造してあるぞ？

海星コウ：洗濯機の中にだよ？

美空アカネ：わ、私は汚れてないから回しても落ちないぞ!?

ルル：『あつ、そういえば、ユキ先輩はぼくとのオフでやりたいこととってありましたか?』

『えっと、そうだね……。うーん、僕はどちらかといえば頼られたかった……。かな。僕、後輩さんっていなかったから……。』

ルル：『あははっ、本当にユキ先輩は可愛いですね。はむはむしていいですか?』

『は、はむはむ?』

ルル：『はい、こうするんですよ』

ルルは笑顔を見せると突然僕の耳を啜えてくる。

そして、口を動かしてくるので、僕は思わず声が漏れてしまう。

『わわっ!?! わ、わふっ……!?!?!?』

【コメント】

：悲鳴助かる

：ルルちゃん、幸せそうだな

真心ココネ：ゆ、ユキくんは渡しませんよ！

羊沢ユイ：うみゆ？ ユキくん、いつもより嫌がってない？

『も、もう、ルルは……。つ、次の質問に行くからね』

ルル：『はい！』

「今、すごく楽しそうなルルちゃんのことを応援しています。これからも頑張ってください。一生推していきます！」

『あれっ？ これだけ?!』

マシユマロだから質問以外もくるだろうけど、今日の質問として募集した結果これが来ていた。

ただ、そのマシユマロを見て、ルルは目に涙を浮かべていた。

ルル：『うん、そっか……。ありがとう……。ぼく、頑張るよ……。』
『……？ うん、よかったね、ルル』

よくはわからないけど、ルルにしかわからない意味が込められているのだろう。

だからこそ、僕は何も言わずにルルが泣き止むのを見守っていた。



ルル：『ごめんなさい、変なところを見せてしまって……。』

『気にしなくていいよ。それより次が最後の質問かな?』

ルル：『最後はぼくが選んでもいいですか？ ユキ先輩に聞きたい質問があるんですよ』

『うん、もちろんいいよ。どれにするの?』

ルル : 『もちろんこれですよ!!』

「シロルームの中で誰が一番好きですか?」

【コメント】

魔界エミリ : ガタツ

真心ココネ : ガタツ

美空アカネ : ガタツ

猫ノ瀬タマキ : ガタツ

姉川イツキ : ガタツ

羊沢ユイ : スウ……

: 一気にメンバーが反応してて草

: ルルちゃんはともかくユキくんは誰なんだ?

『えつと、これって戦争になるやつじゃないのかな? 大丈夫??』

ルル : 『大丈夫です! ぼくはもちろんユキ先輩ですよ!! 大好

きですよ!!』

『うん、ありがとう』

僕が好きな人……か。

やっぱり同期三人はみんな好きなんだよね……。

その中から一人を選ぶなんて僕にはできないよね……。

『やっぱり僕は選べないよ。ココネもユイもカグラさんも僕のために色々と力を貸してくれたんだから……。みんな好きだよ』

【コメント】

真心ココネ : ユキくん……私もですよ

羊沢ユイ : ゆいもの

美空アカネ：まーけーたー

ルル：『むう……、まだぼくは入れないんですね……』

隣でルルは頬を膨らませていた。

『えっと、あははっ……。る、ルルのことももちろん好きだよ?』

ルル：『……おまけみたいです。むうう……。それなら一緒に風呂に入ったことを話しちゃいますよ!』

『別に普通にお風呂に入ってたただけだよ?』

ルル：『体の洗いっこをしましたよね?』

『うん、まあルルがどうしてもって言ったからね。でも、それ以外何もなかったよね?』

ルル：『ええ、何もなかった……。ですね』

ルルは意味深な笑みを浮かべていた。

でも、本当に何もなかったからそれ以上のことは言えない。

【コメント】

真心ココネ：ユキくん、あれだけ頼んでもお風呂に入ってくれなかったのに

羊沢ユイ：うにゅ、次はゆいも入るの

：さつきからえみりんの霊圧がないんだけど

：今頃机を叩いてるんじゃないか?

確かにエミリはルルのことを気にしてたからな。

放送が終わったらフォローしておかないといけないかな。

『つて、ココネもユイもお、お風呂は一緒に入らないからね』

ルル：『えっへーん、ぼくだけの特権だよ』

『ルルも余計なことを言って挑発しないで!』

ピコピコピコ……。

妙なタイミングで通知音が鳴る。

『……誰からだろう？』

ルル　：『出たあああ！　ユキ先輩の得意技、通知音鳴らしですね』
『別に得意技って訳じゃないけどね。あれっ、エミリから？』

不思議に思いつつ、通話に出る。

『どうしたのかな？』

エミリ：『……エミリは負けませんから！（ポカポカ……）』

『えっと、なんのこと？』

エミリ：『ルルちゃんのことです！　エミリ、ユキ先輩に勝負を挑みますー！』

『えっ……？　あっ、コラボでの対決？　ゲーム対決とかかな？　もちろんいいよ』

エミリ：『逃げる気ですか……って、えっ？　いいの……ですか？』
『僕でよかつたらいくらでもコラボに乗るよ？』

エミリ：『あっ、そうですか……。ち、調子が狂う……。（ポカポカ……）。それなら四期生と三期生のコンビでの対決にしませんか？』

エミリはルルちゃんと組みますので』

『うん、いいよ。僕は誰と組もうかな？　また連絡入れるね』

エミリ：『あっ、は、はい。お願いします……。また色々決めたらご報告しますね』

『うん、よろしくね』

こうしてエミリとの通話が終わった。

——わざわざこのタイミングでコラボの申し込みをしてきたのは
どういう理由なんだろう？

ルル : 『ぼく、ユキ先輩と組みたかったですよ』

『エミリが三期生と四期生の対決をしたかったみたいだからね』

【コメント】

: ゲーム対決か。ユキくんはパートナーに誰を選ぶんだろうな

: さつきはみんな好きって言って誤魔化してたもんな

: ゲームならユイっちじゃない？

真心ココネ : 私とやりましょう！

羊沢ユイ : ゲームならゆいな

美空アカネ : 私とコウのペアも参戦するぞ！

海星コウ : こらっ、勝手なことを言わないの

『それじゃあ、今日の配信はここまでかな？』

ルル : 『これからぼくは大人の階段を登ってきますね』

『ただ一緒にお泊まりオフをするだけだからね？』

ルル : 『お泊まりがただのお泊まりだと思わないで下さいね』

『それじゃあ、僕はそろそろ帰るね』

ルル : 『ゆ、ユキ先輩、帰ろうとしないでくださいよ。な、何も
しないですから!!』

『その言葉信じるからね』

ルル : 『任せてください!』

『はあ……、わかったよ。それじゃあ、みんな、乙わふーでした』

ルル : 『乙ルルですー』

この放送は終了しました。

『《#生天使 #ユキルル》ユキ先輩とお泊まりするよ 《天瀬ルル／
雪城ユキ／シロルム》』

3. 1万人が視聴 0分前に配信済み

☒1. 1万 ☒17 ?共有 ≡?保存 …

チャンネル名：Ruru Room. 天瀬ルル

チャンネル登録者数10. 1万人



「なんか七瀬のチャンネル登録者数、一気に伸びてないかな？」

「えっと、多分私が夏瀬なな、ということが広まったから……ですね」

「えっ!?! ど、どうして!?!」

「そもそも、声とか変えたりしてなかったですからね。いつかはバレるかなと思ってました。想像よりは早かったです」

「そ、そんな……。それじゃあ、バレたことで炎上を——」

「その心配はなさそうですね。むしろ私を応援してくれるって、マシマロでも来てましたよね？ あれは嬉しくて思わず泣いちゃいました」

七瀬は微笑んでいた。

ただ、やはり少し怖かったようで、その体は震えていた。

だから、僕は苦笑をしながら言う。

「大丈夫だよ。何があっても僕は七瀬の味方だからね」

第2話：パートナーは誰の手に？ #ココユイ大決戦

ココネ：『彩芽、ちよつといい？』

ユキルルの放送後、ココネはすぐユイに通話をしていた。

ユイ：『どうしたの？ 何か用？』

ココネ：『ユキくんのパートナーの件だよ』

ユイ：『さっきの放送で言ってたやつだね』

ココネ：『うん、せっかくだから祐季くんへのアピールも兼ねて、コラボで勝負しない？』

ユイ：『いいの？ ゲームだと私に勝てる人はいないよ？』

ココネ：『もちろん！ 彩芽を倒して、私は最強の座を手に入れるよ』

実際はどこまでくらいつけるのか、自分の力を見るために勝負を挑んだ感じだけど、できればユキくんのパートナーになりたいという気持ちはあった。

◇◇◇

『《#ココユイ大決戦》ユキくんのパートナーを賭けて《真心ココネ／羊沢ユイ／シロルーム》』

1. 0万人が待機中 20XX／07／06 18:00に公開予定

☒624 ☒2 ?共有 ≡?保存 ∴

唐突にその勝負は始まっていた。

僕のパートナーをかけて勝負するのに僕は何も聞いてない。

それに三期生ならカグラさんも入れないといけないはずだけど

……。

【コメント】

：やっぱりこうなったか

：ユイつちにココママがどこまで食らいつくか見ものだな

：がんばれココママ

：カグラ様は？

雪城ユキ　：えと、僕は見てたらしいのかな？

：ユキくんがいたw

ココネ：『みなさーん、ここばんはー。シロルーム三期生のまとめ役、真心ココネです。ユキくんは今日も景品なので、ゆっくり見てくださいねー』

ユイ　：『神宮寺カグヤよ。よく来てくれたわね！』

ココネとユイのアバターが表示されたのだが、何故かカグラの声が聞こえてくる。

【コメント】

神宮寺カグラ　：私はカグヤじゃないわよ！

：本物いたw

雪城ユキ　：相変わらず似ててびっくりしたよ

：羊草

ユイ　：『うみゆー、羊さんなのー。今日はゆいが勝つところを見に来てくれてありがとーなのー。ゲームはココママに任せただけ、勝つのはゆいな』

ココネ：『そんなことを言っていていられるのも今のうちですよ。今日はいろんなパーティーゲームができるやつでとことんトランプをしたいと思います』

ユイ　：『うみゆ？　トランプ？』

ココネ：『はい、大富豪をとことんするんですよ』

ユイ　：『うみゆ？　大丈夫なの？　ユイ勝っちゃったの』

ココネ『大丈夫ですよ。私、こう見えても得意なんですよ、大富豪……。つてなんでもう勝った前提なんですか!?!』

ユイ 『ゆいに負けはないの』

【コメント】

…ああ……

：ココママの敗北が見える

雪城ユキ ：ココママがんばれ

神宮寺カグラ ：ココネの負けね

ココネ『なんで、みんな私の負けを予想してるのですか!? 見ててくださいよ、圧勝して見せますからね!』

ユイ 『ココママ、どんまいなの』

ココネ『まだ負けてないですよ!?! これからやるところですよ!?!』

ユイ 『今日の配信はこれでおしまいなの。乙みゆー』

ココネ『つて、勝手に終わらせないでください! 見ててくださいよ、圧倒的差で勝ってみせますから……!』

◆◆◆

それから大富豪が始まった。

ただ、すぐに決着はついてしまう。

ココネ『見てください。なかなかいい手札じゃないですか?』

ユイ 『うみゆ、それはよかったの。それじゃあ、革命なの』

ココネ『なっ!?!』

ユイ 『うみゆ、これであがりなの』

当然のように手でブイの字を作るユイ。

一方のココネは涙目になっていた。

ココネ：『ううう……、いい手札が裏目に出ちやいました。だ、大貧民……』

ユイ：『うみゆ？　ココママは大富豪、得意じゃなかったの？』
ココネ：『と、得意……です。で、でも、まだ勝負は終わってないですよ！　十回勝負ですからこれからです！』

ユイ：『返り討ちなのー』

それから勝負はすぐについていた。

ユイは一度も大富豪から落ちずに、逆にココネはずっと大貧民のままで――。

ココネ：『ううう……、ボロ負け……』

ユイ：『うみゆ、ゆいが十連勝なの。まだするつもりなの？』

ココネ：『ま、まだまだ……、う、運が少し悪かっただけです。きつとそうに決まっています……』

ユイ：『運も勝負のうちなの。幸運虎でも引つ張つてくるといいの』

ココネ：『ま、まだ負けけないの。ユキくんは渡さないの……』

ユイ：『なら次のゲームにするの。何がいいの？』

ココネ：『う、運が絡まない神経衰弱で……』

◇◇◇

神経衰弱をやり始めた二人。

数回お互いの番がまわったら、あとはずっとユイのターンだった。

ユイ：『ゆいのターン！　ドロー！　七なの。更にゆいのターン！　ドロー！　七なの。揃ったの。更にゆいのターン！　ドロー……』

ココネ：『……。わ、私の番が回って来ないです……』

既にココネの目には涙が浮かんでいる。
その手にはまぐれで当たった一組のペアが握られていた。

【コメント】

：掛け声が違うゲームだw

雪城ユキ　：こ、ココママがんばれ

：ユイちゃん圧勝

《：？500　ココママがんばれ》

：ココママは偶然当てた一組だけか

：ユイツち、おめでどう

ユイ　：『うみゆー、まだするの？』

ココネ：『も、もちろんですよ……。私が勝つまでしますよー』

ユイ　：『いくらでもかかってくるといいの。一度でも負けたらゆい
の負けでいいの』

ココネ：『じ、じゃあ次はポーカー……。』

◇◇◇

ココネ：『やった、これなら勝てそうです……。』

ユイ　：『うみゆ、ユイはあんまりなの』

ココネ：『えへへっ、ついに私の勝ちですね』

嬉しそうにカードをオープンする。

ココネ：『ストレート』

ユイ　：『フォーカードなの』

ユイのカードを見た瞬間にココネの表情が固まる。

ココネ：『っ、次……。』

◇◇◇

ユイ : 『ブラックジャックなの』

ココネ : 『……っ、次』

◇◇◇

なんだろう……。

段々とココネを見てるのが辛くなってくる。

今も7並べで一枚も出せずに目に涙を溜めていた。

ココネ : 『ううう……、やっぱりゲームだとユイには勝てないのかな

……』

ユイ : 『ゆいにはまだまだ届かないの』

【コメント】

: 圧倒的勝利w

《: ? 5, 000 勝利おめでとう》

美空アカネ : 私参上！ 勝負なら乗るぞ！

貴虎タイガ : おっ、勝負か？ 粉碎してやるぞ？

: ポンが集まる

姉川イツキ : お姉さんもやりますよ。脱衣麻雀

猫ノ瀬タマキ : にゃーもやるのにや。たくさん脱ぐのにや！

雪城ユキ : 脱ぐのがゲームじゃないですよ!?

狸川フウ : わわっ!?! イツキちゃん、変なこと言ったらダメポコよ

!?

神宮寺カグラ : 私も参戦してあげるわ

: メンバーがやばいw

海星コウ : 全く、全員でやるなら私も参戦しないとね。でも、フ
ウちゃんにも協力してもらわないとね

狸川フウ：わ、私ポコですか！
：たくさん集まったwww

ココネ：『えとえと……、なんかすごい人数が集まってしまいました……。ユキくんのパートナーを決めるはずなのに……。しかも四期生の子もいますね……。今スパナつけておきますね』

ユイ：『何人でもかかってくるといいの！ ユイは負けない！』
ココネ：『ここまで人数が増えてしまったら勝負の内容をどうしましょうか？』

ユイ：『うみゅー、ここまで増えるとチーム戦になるの』
ココネ：『わかりました。こちらの内容はまたコウ先輩やフウちゃん、あとは二期生もいるのでツララ先輩に相談しますね。それよりも今回の勝負です！ 次に行きますよ！』

【コメント】

魔界エミリ：いいですね。それぞれの期生同士の対決

天瀬ルル：ぼくはユキ先輩と

雪城ユキ：あつ、その方が僕は助かるよ。一人に選ばなくていいから……

魔界エミリ：ならその方向で考えますね

ココネ：『えっ？ パートナーを決めない？』

ユイ：『ココママが先走り過ぎなの』

ココネ：『だってだって……。わ、私早とちりしてました。そ、その……。ユキくんのことになると――』

ユイ：『ココママはユキくんのこと大好きなの』

ココネ：『う、うん……』

ユイ：『ユイも大好きなの』

【コメント】

雪城ユキ：わ、わふっ!?

：告白合戦始まるw

天瀬ルル　：ぼくもユキ先輩のことが好きですからね！

狸川フウ　：ルルちゃんはここで話をややこしくしないでポコ

魔界エミリ　：フウちゃんはエミリの味方なんだ

：闇落ちしてるw

ココネ『でもでも、私は他にもユイちゃんのことカグラさんのことも大好きですよ！　その……、ユキくんはなんで言いますか、放っておかない感じがありますので——』

ユイ　：『うみゅー、よくわかるの。ついつい虐めたくなるの』

なんだろう……。すごく酷い言われようだ。

【コメント】

雪城ユキ　：ココママやユイとは後からじつくり話す必要がありそうだね

神宮寺カグラ　：私も久々に入るわ

：三期生の話し合い、聞きたい

：配信してほしい

《：うみゅー、000　配信待機》

美空アカネ　：私も加わりたいぞ！

海星コウ　：ダメよ。大事なお話だからね

魔界エミリ　：四期生も話し合いをしましょうか

天瀬ルル　：ぼくはユキ先輩たちの話し合いに

姉川イツキ　：お姉さんは賛成よ

狸川フウ　：わかったポコ。枠を準備するポコ。ルルちゃんも来る

ポコよ

ココネ：『わ、枠を開くかどうかはまたみんなで相談しますね』

ユイ　：『うみゅー、今日は圧倒的勝利だったの』

ココネ：『ううう……。次までにユイに勝てるように特訓します

……』

ユイ：『乙みゆーなのー』

ココネ：『乙ココでした』

この放送は終了しました。

『《#ココユイ大決戦》ユキくんのパートナーを賭けて《真心ココネ／羊沢ユイ／シロルーム》』

3. 1万人が視聴 0分前に公開済み

☒ 1. 0万 ☒ 2. 6万 ? 共有 ≡ ? 保存 …

チャンネル名：kokone | Room. 真心ココネ

チャンネル登録者数：15. 0万人

【コメント】

：乙ここー

：乙みゆー

：おい、既に三期生の枠があるぞ

：カグラ様のチャンネルか

：よし、待機しよう

◇◇◇

『《#ココユカ反省会》オフ雑談。お酒でも飲みながら本音をぶつけ合うわよ《神宮寺カグラ／雪城ユキ／真心ココネ／羊沢ユイ／シロルーム》』

2. 6万人が待機中 20XX / 07 / 07 00:00に公開予定

☒ 3. 2. 7万 ☒ 0 ? 共有 ≡ ? 保存 …

ココネの配信が終わるとすぐにカグラさんが枠を取ってくれたので、そちらで三期生全員の配信を行う。

ただ、普通に配信するのではなく、急遽オフをすることになった。

ユキ　：「えつと……、お酒？」

カグラ　：「ええ、そうよ。みんな、もう飲めるでしょ？」

ユイ　：「うみゅー、ユイの誕生日は——」

ココネ　：「明日だったよね？」

ユキ　：「えっ!?　な、なんで教えてくれなかったの!?!」

ユイ　：「ユイはアバター誕生日は別の日で設定してるの。二回も祝ってもらうのは変なの」

ユキ　：「ダメだよ！　ちゃんとお祝いしなきゃ！」

ユイ　：「うみゅー、こういう時のユキくんは頑固なの」

ユキ　：「大切なユイのお祝いだからね」

カグラ　：「そうなのよ。実は明日からみんなお酒が飲めるのよ。だから、本音で話し合うならその方がいいかなって思ったの。梓も明日からにしたのはそれが理由よ。もちろん無理に飲まなくてもいいわ」

ユキ　：「それでどこに集まろうか？　オフをするんだよね？」

カグラ　：「えっ？　ユキの部屋でしょ？」

ココネ　：「ユキくんの家ですね」

ユイ　：「もう向かってるの」

ユキ　：「えっ!?　ど、どうして？」

カグラ　：「だって、まず寝るのはユキでしょ？」

ユイ　：「うにゅー、ユキの部屋は落ち着くの」

ココネ　：「飲み物とかおつまみとかは準備していきますね」

こんなやりとりがあり、しばらくすると僕の部屋にみんなが集まっていた。

【コメント】

：お酒!?!

：ユキくん……、あつ、そうか。この前誕生日だったんだ

：みんな一応成人してるのか

《…?500　お酒代》

：ユキくん、お酒弱そうだな

ミニアニメを流しながら、僕の部屋のテーブルにはチューハイやおつまみが広げられていった。

そして、ミニアニメが終わると四人のアイコンが表示される。

カグラ：『みんな、来てあげたわよ。神宮寺か・ぐ・ら・よ！ どうせ間違えてくるから今日は強調してあげたわよ』

【コメント】

：ポン姫ー

：カグヤ様ー

：ジン様ー

：カラク様ー

：カクヤ様ー

：→ここままで正解なし

カグヤ：『だから神宮寺カグラよ！ と、とにかく今日は三期生みんなに集まってもらった………というかユキの家に集まったわよ』

ココネ：『みんなー、ここぼんはー。妖精さんこと真心ココネですよー』

ユイ：『うみゆー、ポンコツ羊なの。ねむねむなのー』

ユキ：『わふう………、こんばんは。雪城ユキです。なんか急にみんなが家に来ちゃいました………』

【コメント】

：こんばんはー

：うみゆー

：わふー

：ここぼんはー

カグラ：『まずはみんな飲み物は渡ったわよね？』

僕たち全員がチューハイを持っていることを確認して、カグラは声を上げる。

カグラ：『それじゃあ、かんぱーい』

ユキ：『かんぱーい』

ココネ：『かんぱーい』

ユイ：『うみゅー』

僕は生まれて初めてお酒を口にする。

ユキ：『わふっ、思ったより飲みやすいんだね……』

ココネ：『そこまで強いのは買ってきてませんからね』

ユイ：『うみゅー、なかなか美味しいの』

カグラ：『たまにはこういうのもいいわよね』

ユイ：『うみゅー、それじゃあそろそろお疲れ様なのー』

ココネ：『こら、ユイ。また勝手に終わらせようとして……』

ユキ：『あはははっ、相変わらずのユイだね』

カグラ：『勝手に終わらせたらダメよ。まだ雑談らしい雑談はしてないでしょ』

【コメント】

：みんな楽しそう

：これこそ三期生だな

天瀬ルル：『ぼくも行きたかった……』

：ルルちゃんがいきなりいたw

ココネ：『ユキくん、眠たくなったらいつでも膝を貸しますからね』

ユキ：『うん……。って、やっぱりココママは僕を子供扱いしてるよね?』

ココネ：『私はユキくんのママですからねー』

ユイ : 『うみゆー、ユキくんはまだまだお子様なの』

ユキ : 『ユイも僕のことを子供扱いしてる？ 同じ歳なのに……』

ユイ : 『とつても可愛い妹なの』

カグラ : 『私からも一つあるわよ。そろそろ私はポン姫から脱したと思うのだけど……』

ユイ : 『ポンカグ姫なの』

ユキ : 『えっと、確かに最近はカグラさんよりココママの方がポンの確率が高いかな？』

ココネ : 『えっ、私ですか!?!』

ユイ : 『うみゆー、ココママはユキくんの前だとポンに変わるの』

ココネ : 『ううう……。だって、ユキくんが悪いんですよ。私たちと一緒に風呂入ってくれないのに、ルルちゃんとは入って……。私たちよりもルルちゃんとの仲を取っちゃうのかなって不安だったんですよ!』

ユキ : 『えっ……。あつ……。うん。それはごめんね』

流石に理由がココネたちは異性でルルは同性だから……。とは言えずに頷くくらいしかできなかつた。

ココネ : 『ユキくん、私たちのこと好きですよね?』

ユキ : 『も、もちろんみんなのことは好きだよ』

ココネ : 『えへへっ……。好きって言ってもらいました』

ココネの顔は少し赤く染まっていた。

ただ、それは恥ずかしさからきているものではなく、どうやらお酒で酔って赤くなっているようだった。

そういえば僕も少し暖かくなってきた気がする。

カグラ : 『ココネとユキは大丈夫？ 普通のジュースも買ってある

わよ?』

ココネ : 『大丈夫ですう。私、お酒は好きですから。でも、みんなで

こうやって飲める日が来るなんて思ってなかったですよ』

ユイ : 『うみゆー、思ったより早くに終わることになりそうなの』

ユキ : 『ふわあああ……、なんだか眠たくなってくるね』

カグラ : 『ココネは酔うと甘え上戸になって、ユキは眠たくなるタイプみたいね』

ユイ : 『うみゆー、カグラは強いの』

カグラ : 『ユイもね』

ユイ : 『うみゆー、ジュースみたいなものなの』

結局、配信中に僕とココネは眠りについてしまい、カグラとユイの二人で雑談をすることになった。

間話：四期生初配信

第3話：#ココユカ反省会二人脱落済み／四期生全員集合。ポンコツ王は誰の手に？

ユキ ：『すう……すう……』

ココネ：『すう……、ゆきくん……』

ユキとココネは二人、先にベッドで眠っていた。
その寝言を背にカグラとユイは配信を続けていた。

カグラ：『本当にこうやって見ると姉妹にしか見えないわね』

ユイ ：『うみゆ、ゆいも混ざるの』

カグラ：『こらこら、起こしたらダメだからね!』

ユイ ：『残念なの。写真で我慢しておくの』

カグラ：『それもダメよ。起こしちゃうでしょ! それにしてもユイと二人、こうして話し合うのって初めてよね?』

ユイ ：『うみゆー、カグラはなかなかコラボしてくれないの』

カグラ：『その理由はわかるでしょ? ゲームコラボはどう考えてもユイには勝てないわよ』

ユイ ：『——負けるとわかってて勝負を挑んでくるといいの』

カグラ：『私にそんなココネみたいなことはできないわよ。これでもしつかり勝算をつけてからしか挑まないんだから——』

ユイ ：『うみゆ!?! りよ、料理対決も勝算があつたの!?!』

【コメント】

：ユイがちが本気で驚いてるw

：あれじゃ仕方ないだろうなw

：でも負けてないからある意味勝算はあつたのか

《天瀬ルル …?50,000 あとでユキ先輩の寝息を切り抜かないと》

カグラ：『あ、あの時はとりあえず誰かとコラボしたかったのよ。ほらっ、ちようどお気に入り登録者数が伸び悩んでた時期だったから』
ユイ：『ゆいに相談してくれたら——』

カグラ：『中々、相談できなかつたのよ。特に同期はライバルって思ってたから——』

ユイ：『ゲームで叩き潰してたの』

カグラ：『潰したらダメでしょ!?!』

ユイ：『うみゆー、冗談なの。でも、言ってくれたらみんな力を貸したの。カグラもユキくんと一緒に自分でなんとかしようとしすぎなの。もつと頼って欲しいの』

カグラ：『そうね。ユキとコラボをして私も反省したわ。それからちよくちよくコラボをするようになったからね』

ユイ：『ならゆいともするの。ボコボコにするの』

カグラ：『だからなんで負けに行かないといけないのよ!』

【コメント】

：カグラ様が弱音って珍しいな

：少し酔ってるのか？

：ユイつちは本当に何も変わらないな

カグラ：『でも、協力プレーのゲームなら楽しそうね』

ユイ：『うみゆ、それもいいの。今度はゆいとコラボをするの』

カグラ：『ええ、そうね。ユイとは初めてのコラボになるわね』

ユイ：『うみゆ、背後からざっくり殺るね!』

カグラ：『きよ、協力プレーのゲームでしょ!?!』

ユイ：『敵の敵は味方なの。逆もまたしかりなの』

カグラ：『味方は味方でしょ!?! 全く、ユイは相変わらずね……』

ユイ：『うみゆ、ゆいはゆいなの。最強なの』

【コメント】

：協力プレーという名の個人戦w

：ユイちゃんw

：カグユイコラボ決定！

：おめでとー

カグラ：『ユイ、ちゃんと飲んでる？』

ユイ：『うみゆ、一升瓶でもよゆうなの』

カグラ：『つて、それジュースよね!？』

ユイ：『飲み潰れるほど飲まないの』

カグラ：『まあ、ユイはそうよね。ユイこそもっと自分を出してくれ
てもいいんじゃないのかしら?』

ユイ：『うみゆ、十分に出してるの。ほらっ、すりすりー』

カグラ：『はあ……、それが隠してるって言うのよ』

カグラはため息混じりに頬をすりすりとしてくるユイを見ていた。

ユイ：『うみゆー、照れてくれないとつままないの』

カグラ：『もつと本気で来てくれたら恥ずかしくなるわよ……』

ユイ：『難しいの……』

カグラ：『だって、それなら私もできるわよ?』

カグラの方からユイに抱きつく。

ユイ：『うにゆっ!?!』

カグラ：『あれっ? ユイはやられるほうは苦手?』

ユイ：『うみゆー!?! は、離すのー!!』

ジタバタと手足を動かすユイ。

カグラ：『ユイ、小さいから抱き心地いいね』

【コメント】

：ユキくんが寝てるからユイちゃんがその役目に
：抱きつくカグラ様
：ユイっち、ジューズだったんだ……
：照れてるユイっちは珍しいね

カグラ：『それじゃあ、今日のところはそろそろ終わりにしましょうか？ 私もそろそろ眠くなってきたから——』

ユイ：『うみゅー、ゆいはあと百時間は戦える』

カグラ：『自分の枠で頑張るといいわ。それじゃあ、お疲れさま』

ユイ：『乙みゅー』

ユキ：『すう……』

ココネ：『あ、あれっ、私寝ちやつて……』

この放送は終了しました。

『《#コユカ反省会》オフ雑談。お酒でも飲みながら本音をぶつけ合うわよ《神宮寺カグラ／雪城ユキ／真心ココネ／羊沢ユイ／シロルム》』

6. 1万人が視聴 0分前に公開済み

×2. 0万 ×6 ?共有 ≡?保存 …

チャンネル名：k a g u r a | R o o m. 神宮寺カグラ

チャンネル登録者数14. 7万人



三期生のオフ会を見て、エミリは早速四期生全員に連絡をとっていた。

エミリ：「私たちもオフ会をしない？」

イツキ：「おふ……ろ。はあはあ……」

フウ：「イツキちゃんの変なことをしたらダメですよ!? オフ会、

私も構いませんよ」

ルル 「えつと、私は……、うん、そうだね。一度私のことも話したほうがいいかもしれないね。今はユキ先輩の切り抜きくらいしかしてないし、配信がないタイミングだといくよ」

フウ 「あははつ……、ルルちゃんは相変わらずですね。今日の夜だとユキ先輩は放送していませんね。どうですか？」

エミリ 「またユキ先輩……。エミリ負けない……」

イツキ 「お姉さんは大丈夫よ」

ルル 「それなら私も大丈夫だよ」

こうして、一度四期生同士が集まることになっていた。

◇◇◇

集まる場所は七瀬の部屋。

時間は夕方。

一応二十時から配信をする予定をしていたから、その前から集まるうという話だった。

流石に七瀬は色んな事情を抱えているので、少し緊張していた。

そして、約束の時間の五分前に呼び鈴が鳴る。

「あつ、はーい」

七瀬が扉を開けると、家に来る前に集まっていたのか、三人の女性がいた。

黒のショートカットで、ボーイッシュな見た目。動きやすそうな黒の半袖パーカーと赤のミニスカートを履いた少女。

癖がかった金髪ととてもスタイルの良い体つき。白のTシャツと黒のパンツというラフな格好をしたお姉さん。

肩ほどもでの明るい茶髪の小柄だけど、女性らしい見た目。ペー
ジユのワンピースとその下から黒のレギンスを履いた少女。

と、三者三様の見た目をしていたが、誰が誰か判断がつく。

「いらっしやい。とりあえずここにいるのもあれだから、中に入って
よ」

七瀬が奥の部屋へと案内する。

昔から使っている配信用の部屋。

当然ながら夏瀬なの時代から使っているものなので、見る人が見
たらわかるものだった。

「やっぱりルルちゃんが夏瀬なの、だったんですね」

茶髪の少女がしみじみと言ってくる。

「うん、そうだよ。昔は夏瀬ななを名乗ってたよ。でも、もうそっちは
引退したからね。今は天瀬ルルだよ。あつ、本名は七瀬ななせ奈々ななだよ。外
で呼ぶ時はそっちでお願いね」

すると、今まで黙っていた黒髪の少女が突然七瀬に抱きついてい
た。

「わわっ……」

「七瀬ちゃん、配信では見てたけど、やっぱり凄く可愛いよ。あつ、私
は犬飼冬華いぬかいとうか。配信では魔界エミリだよ」

「う、うん、よろしくね。あと、離してくれないかな」

「満足したら離すよ」

「うう……、身動きが取れない……」

背丈が人一倍低い七瀬。

すっぽりと犬飼の体に収まってしまふせいで、逃げようにも逃げられない。

「お姉さんは宇多野葵よ。うたのあおい可愛い子がくんずほぐれつする姿は良いわね。目の保養になるわ。あつ、配信では姉川イツキの名前でしてるわよ」

金髪のお姉さんである宇多野は頬に手を当てて、ニヤけていた。すると、茶色の小柄な少女が呆れた表情を見せる。

「葵ちゃん、初対面の人に変なところを見せたらダメだよ……。私は立木未来美《たつきみくみ》。その、狸川フウです。本当の夏瀬なさんの配信部屋に来られるなんて、夢みたいですよ……」

立木は目を輝かせて部屋を見ていた。

やはり部屋で配信していたこともあって、それなりの広さの部屋でカメラやテレビくらいしか置かれていない。

今はパソコンも置いているが、それでも部屋の広さは完全に持て余していた。

「このくらい大したことないよ……」

「えっと、私や葵ちゃんも配信はしてましたけど、普通の部屋でしたよ……」

「お姉さんたちはゲーム配信メインだったもんね」

「あれっ、ということは二人も配信してたの？」

「うん。ただ、七瀬ちゃんに比べるとお気に入りも少なかったし、まだまだだったけどね。あと、犬飼さんも……だよね？」

「うん、そうだよ。今回は期間が短かったから配信経験がある人を優先したって聞いたかな」

「でも、募集要項には驚いたかな。今回は性別の指定がなかったもんね」

「あつ、そのことで私から少し話があるんだよ……。その……。私は男だよ」

「……えっ!?!」

七瀬がそのことを告げると周りのみんなは固まっていた。

ただ、すぐに笑い出していた。

「私は全く問題ないよ。この程度で壊される四期生の絆じゃないもんね。ずっとこのまま抱きしめてたいかな」

「お姉さんも見た目が可愛いなら問題なし。むしろ男女なら合法？なるほど、これは特殊な性癖じゃなくて、一般的な感情……。よし、これからみんなでお風呂に入ろう！」

「ちよ、葵ちゃん!? へ、変なことを言わないで！ 男女で一緒のお風呂はないよ！ でも、私も問題ないかな。七瀬ちゃんは七瀬ちゃんだもんね」

「みんな……。ありがとう……」

七瀬はようやく肩の名が降りて、ホツとしていた。すると、犬飼が嬉しそうに言う。

「これで四期生同士の絆が深まったね」



『《ルエイフオフ会》四期生だよ、全員集合。ポンコツ王は誰の手に？
《天瀬ルル／魔界エミリ／姉川イツキ／狸川フウ／シロルーム四期生》』

1. 0万人が待機中 20XX／07／08 20:00に公開予

定

☒964 ☒0 ?共有 ≡?保存 :

【コメント】

：四期生コラボも全員か
：中々面白いメンバーだよな
：そうか、ルルちゃんは四期生だったな
：ユキくんにくつついてるから三期生みたいなものだったからな
：台パンまだかな

ルル 『みんな、こんるるー。ぼくは天瀬ルルだよー。今日は残念ながらユキ先輩と一緒にじゃないけど、同期の四期生に来てもらったよ』

エミリ：『ちよつと!? それだとエミリたちはおまけみたいでしょ!? (ポカポカ……)』

ルル：『エミリ、まだ早いよ。順番に出てきてくれないと』

【コメント】

：こんるるー
：こんるるー
：台パン助かる
：ルルちゃん草

ルル 『それじゃあ、改めて。四期生のみんなに自己紹介してもらおうよ』

エミリ：『(ポカポカ……) ルルちゃんは渡しません!』

イツキ『お姉さんはルルちゃんがユキ先輩を選んでも、エミリちゃんを選んでもどっちも好物よ。そろそろ先は進展してくれても——』
フウ 『もう、エミリちゃんもイツキちゃんもちゃんと自己紹介をしないと……ポコ』

ルル：『……語尾、忘れてたね』

イツキ：『もう、フウは可愛いわね』
フウ：『わわっ。イツキちゃん、抱きつかないで……ポコ!』
エミリ：『エミリはルルちゃんに……』
ルル：『わっ!? ま、また捕まった……』
エミリ：『えへへっ、ルルちゃんは可愛いよ……』

【コメント】

：自己紹介なしw
：ある意味これが自己紹介w
：混沌としてるw
雪城ユキ：みんな仲良さそうでよかった

ルル：『あつ、ユキ先輩! 先輩もコラボ入りますか!』
エミリ：『むう……(ぼかぼか……)』
ルル：『痛い、痛いよ、エミリ。叩かないで』
フウ：『イツキちゃんもいい加減離れてポコね。そうじゃないと明日の朝ごはんに野菜——』
イツキ：『朝からやめてー!』

【コメント】

雪城ユキ：えっと、今日はやめておくよ。みんな楽しんで
：カオスw
：お姉さんの弱点は野菜w
：この流れが自己紹介w

フウ：『ようやくイツキちゃんが離れてくれたので、ふうがみんなを紹介するポコ。机を叩いてるのが魔界エミリちゃん。さつき怒ったのが姉川イツキちゃん。それでふうが狸川フウ……ポコ』

ルル：『ユキ先輩……』
エミリ：『(ポカポカ……)』
フウ：『もう、ルルちゃん! しっかりしてポコ。あと、ルルちゃ

ん、四期生のことどう思ってるポコ?』

ルル : 『えっ? みんなのこと? もちろん好きだよ?』

エミリ : 『っ?!』 そ、そうよね。うん、そうだよ。みんなのこと、大好きよね? もちろん私も好きよ』

イツキ : 『お姉さんはみんな好きよ。もつとくんずほぐれつしてくれたら更に好きになるわよ?』

フウ : 『はいはい。イツキちゃんは水を差さないようにね……ポコ。もちろんふうもみんなのこと、好きポコよ』

【コメント】

: あのカオス空間がうまく収まったw

: 狸すごい

: 伊達にコウ先輩の後釜と言われてないな

美空アカネ : んっ、私のことを呼んだか?

: コウ先輩の名前に反応する暴走特急w

フウ : 『それじゃあ、改めてマシユマロを読んでいくポコよー!』

ルル : 『フウちゃんが選んでくれたんだね。ありがとう』

フウ : 『任せてポコ! しっかりとしたやつを選んだポコ』

イツキ : 『なるほどね。フウらしいね』

フウ : 『それじゃあ読むポコ』

「四期生の皆さん、こんばんは。僕はご飯が好きで一日三杯食べています。皆さんの好きな食べ物はなんですか?」

フウ : 『そうポコね。ふうはラーメンとか好きポコよ。ついつい悪魔の時間に食べたくなつて困るポコ』

ルル : 『わかるよ。夜に食べた後から後悔するつてわかるんだけど、それでも食べたくなるんだよね。えっと、ぼくはチョコレートとかが好きだよ。カカオが多めのやつを朝に食べてるんだよ』

フウ : 『ふうはカカオが多いのは苦手ポコ。その……苦くて……』

イツキ：『フウはお子ちゃまだからね』

フウ：『も、もうふうは大人ポコ……』

イツキ：『あらつ、本当かしら。なら、お姉さんが大人らしいエツチな話——』

フウ：『ふうは子供でいいポコ！』

エミリ：『私は辛いものが好きよ。激辛って書かれた文字を見るとつつい食べたくなるの。ルルちゃん、今度一緒に行かない？』

ルル：『えと……、ぼくは少し苦手かな。ちよつと辛いくらいのものなら食べられるけど……』

エミリ：『大丈夫、普通の辛さのもあるから』

ルル：『うん、それなら大丈夫だね。みんなで一緒に行く？』

エミリ：『えっ!? い、いいの!?!』

フウ：『ふうも辛いものは苦手ですけど、食べられるものがあるならいいポコ……』

イツキ：『可愛い子が必死に汗をかきながら、食事をする……。そそられるわね』

フウ：『イツキちゃんはお留守番ポコね』

イツキ：『嘘よ、嘘！ お姉さんも一緒に行くわよ!』

ルル：『全員参加だね。エミリもそれでいいかな?』

エミリ：『も、もちろん！ うん、後から行く日を相談しようね』

ルル：『あつ、それなら後からユキ先輩も——』

エミリ：『そ、そのお店は四人しかダメなところなの。だからユキ先輩はまた今度で』

ルル：『そっか……。それなら仕方ないね。個人的に誘うことにするよ』

【コメント】

雪城ユキ：『ぼ、僕は辛いものが全くダメだから……』

：速攻断られてて草

：四人しかダメな店w

：四期生も暴走はよくするけど仲はいいな

：ルルちゃんが意外と普通の対応してるw

イツキ：『最後はお姉さんの好きな食べ物ね。お姉さんの好きな食べ物
は女の子の——』

フウ　：『ダメー!!　ダメポコー!!』

よからぬことを言いそうになっていたイツキをフウが大声で止めていた。

第4話：四期生全員集合。ポンコツ王は誰の手に？
ぱーとつー

フウ ：『き……、気を取り直して、次のマシユマロに行くポコ』

イツキ：『お姉さんはまだ途中——』

フウ ：『それはもう良いからね！ えっと、次は……』

「最近買ったものはなんですか？」

フウ ：『最近買ったものですか……。ふうは服を買っちゃったポコ。今着てるやつポコ……。って、わわっ』

イツキ：『フウ、かわいいよ……』

エミリ：『フウちゃん、かわいい……』

二人が抱きついてくるのでフウはアタフタとしていた。

ルル ：『えっと、ぼくも抱きついた方が良いのかな？』

フウ ：『そ、それはダメポコー！ そ、それより、ルルちゃんが買ったものはなんですか？』

二人に頬をスリスリされながら必死に進行をするフウ。

ルル ：『えっと、ぼくはユキ先輩の記念ポ——』

フウ ：『っ、次の質問行きます!!』

【コメント】

：危険を察したw

：この狸、できるw

：でも、捕まったままw

イツキ：『あらっ、お姉さんは聞かなくて良いの？』

エミリ：『(ぼく)ぼく……』

フウ：『ふう、叩かれてるからいいポコよ。叩くものがないからってふうを叩くな、ポコー！』

エミリ：『あっ、ご、ごめんね。つい……』

フウ：『ふうも質問が悪かったポコ。次の質問に移るポコ』

「尊敬する先輩は誰ですか？」

フウ：『それじゃあ、まずルルちゃんからどうぞポコ！ この質問なら思う存分答えてくれても良いポコよ』

ルル：『尊敬する先輩……。もちろんユキ先輩だよ!! 臆病だけど、とつても優しい先輩。本当は人前に出るのも苦手なのに、みんなに喜んで欲しいからって頑張ってる、それが三期生みんなに伝わって、それが本当に良くて……。あとあと、ぼくが本当に困っていたときに無理を言ったら、笑って力を貸してくれて……。本当に頭の上がない先輩なんだよ』

ルルが少し早口になりながら、興奮していた。

その様子を見てフウたちは微笑ましい視線を送る。

フウ：『確かにユキ先輩は良い人ですもんね。たまに逃げようとするけど』

イツキ：『ルルちゃんとのセットは目の保養になったわ』

エミリ：『私にも相談に乗ってくれてるって言ってくれくらい良い人ではあるね。もちろんルルちゃんは渡さないけど』

【コメント】

雪城ユキ：わ、わふう……。ぼ、僕は何もしてないよ……

：公開処刑w

：今のシロルームを引っ張ってるのはユキくんだもんなw

：本人は段ボールに隠れてるけどなw

エミリ：『私はココネ先輩ですね』

ルル：『あー、分かる気がする。ぼくに対する扱いとか……』

エミリ：『ち、ちがうよ!? 確かにユキ先輩を見ると暴走するところはあるけど、他の時はしつかりとメンバーをまとめてるし、とっても優しい先輩ですよ』

ルル：『あ、あははっ……、そうですね。確かにエミリちゃんに少し似てるかも……』

イツキ：『ココユキは鉄板ですよ。お姉さんも好きよ。やっぱり女の子がイチヤイチャとしてるところは良いよね。特にココユキは密着度が——』

フウ：『ほらっ、イツキちゃん。また変な方向に話が行ってるよ……ポコ』

エミリ：『三期生の仲の良さは羨ましいよね。私たちも負けていないけど』

フウ：『ふうたちはまだまだこれからポコね。これから三期生に負けないほど仲良くなるポコ』

イツキ：『お姉さんとしてもみんなが仲良くイチヤイチャしてくれるのはおいしい……、ううん、嬉しいわよ』

フウ：『それならみんな変な方向へ暴走したらダメポコ! これからはどんどんコラボをして仲良くなっていくポコ』

【コメント】

：ココユキは鉄板だよな

：四期生は暴走棒だからどうまとめるかが問題になるな

：エミリンの尊敬する人はココママか。それっぽいな

：ユキルルを見ると暴走するw

イツキ：『お姉さんは当然だけどアカネ先輩よ。やっぱりえっちなイラストを描いてくれるのは良いわよね』

フウ : 『えっちいのはダメだよ!』 それにアカネ先輩、口ではそう
いってもあまり描いてないような……』

ルル : 『ユキ先輩のイラストもとってもかわいいものでしたよね
!?!』

エミリ : 『確かに暴走特急って言われてる割にはあまり暴走してな
い様な気がするね』

【コメント】

：暴走特急、昔はすごかったもんな

：今は飼い主がしっかり手綱を握ってるから……

：シロルーム代表にえっちいイラストを送りつけたのは伝説だよな

フウ : 『えっ?!』 あ、揚津^{あがつ}代表に!?!』

エミリ : 『ええ、そうらしいわね』

イツキ : 『暴走特急と言われる所以ね。揚津代表も元々V t u b e
rだから』

ルル : 『揚津代表?』 えっと、会長は違う人……だよな?』

フウ : 『ルルちゃん知らないポコか?』 シロルームは揚津代表
と小幡会長が作ったポコよ。ツートップポコ』

ルル : 『そういうことなんだ……』

イツキ : 『あの暴走……、すごいわよね。惚れ惚れするわ……』

フウ : 『イツキちゃん、お願いだからそんなことしないでね』

イツキ : 『さすがのお姉さんでもそこまではできないわよ』

【コメント】

：よく無事だったよな

：むしろあれがきっかけで一期生に誘われたって聞いたぞ?

：元々アカネパイセンが一人だったんだよな

フウ : 『イツキちゃんは少し心配ポコ。……えっと、フウはやっぱ
りコウ先輩ポコ。あのみんなをまとめ上げる姿はかっこいいポコ』

イツキ：『四期生はフウがまとめてるものね』

ルル：『えと……、ぼ、ぼくも手伝うよ?』

エミリ：『私も協力するからね』

フウ：『みんな……。手伝ってくれるつもりならもう少し暴走を減らしてくれると嬉しいポコ』

イツキ：『それは無理ね。えっちいのは私の生きがいだから』

フウ：『わわっ!?　だ、だからそれがダメポコよー!!』

ルル：『ぼくはそこまで暴走してないよね?』

エミリ：『私も全然暴走してないわね』

フウ：『二人とも正座ポコ』

ルル：『えっ!?』

エミリ：『ど、どうして!?』

【コメント】

：ポンは自分がポンだと知らずw

：ルルちゃんはユキくんを見ると暴走するもんな

：エミリンはそんなルルちゃんを見たら暴走するし

：フウちゃん、大変w

：返事してるけど、どうなるか

フウ：『そ、そろそろ次のマシユマロぼこ。今度は逆のパターンなの』

「好きな四期生は誰ですか?」

フウ：『ふうはもちろんイツキちゃんポコ。たまにちよつと恥ずかしいことを言うけど、それでもふうにとっては優しいお姉ちゃんポコ』

イツキ：『私もフウのこと、大好きよー!』

フウ：『わわっ、抱きつかないでー!　って、服の中に手を入れてこないで!!』

エミリ：『私は四期生みんなのことが大好きよ！』
イツキ：『私もエミリのこと好きよー！』

イツキはエミリのこと抱きしめてくる。

フウ：『って、イツキちゃんはいいい加減にしてポコ!!』

フウはようやくイツキを引き離すと威嚇してみせる。

ルル：『えっと、ぼくもみんなのことを好きだよ』

イツキ：『よしルルちゃんもお姉さんがハグハグしてあげよう』

ルル：『えと、それは遠慮しておこうかな』

エミリ：『なら私がするね』

ルル：『わわっ、だからダメだって!!』

ルルはエミリに捕まり、足をバタつかせる。

エミリ：『ルルちゃん、かわいいよ……』

【コメント】

：やばい、暴走してるw

：三人のアカネパイセンを相手にしてるようなものだもんな

：四期生⇨暴走ポン組

：三人のコウパイセンを呼んでこないと！

フウ：『と、とりあえず、落ち着いて欲しいポコ。四期生は暴走ポン組なんて変な呼ばれ方をしてるポコ』

イツキ：『暴走組……良いわね』

フウ：『イツキちゃんはいしばらく静かになの。ややこしくなるポコ』

エミリ：『うっ、それは確かに嫌かな』

ルル　：『僕はそこまで気にしないけど……』

フウ　：『とにかく、四期生正常化計画をするポコ』

ルル　『おー!』

エミリ　『おー!』

イツキ　：『お姉さんはポンなフウも可愛いと思うけどね』

【コメント】

：不服そうなイツキ姉様 w

：ポンコツフウちゃんも可愛いかも

：全員ポンだとひどいことになるぞ!

：三期生のことか w

フウ　：『つ、次は最後のマシユマロポコ』

イツキ　：『はい、これね。読んでくれる?』

フウ　：『わかったポコ。イツキちゃんもやっと真面目にしてくれるようになったポコ。えつと……今履いているパンツの色は何色ですか?　つてえつ?!　えええええ?!?!』

質問を読み上げた瞬間にフウは顔を真っ赤にしていた。しかし、そんなことを気にすることなく三人は質問に答えていく。

ルル　：『パンツかあ……。今日は黒いやつかな』

フウ　：『ちよ、ちよつと待つ——』

エミリ　：『私は紫のレースよ』

フウ　：『だ、だから、待って——』

イツキ　：『お姉さんはもちろん履いてないわよ!』

フウ　：『?!?!　い、イツキちゃん?!　は、履いてな……?!　えつえつ?!』

イツキ　：『次はフウね』

フウ　：『?!?!　うううう……、だ、だからこういうところですうう!!　こんなにあつさり答ええないで!!』

ルル : 『フウちゃん、語尾……』
フウ : 『ポコーラー!!』

この放送は終了しました。

『《ルエイフオフ会》四期生だよ、全員集合。ポンコツ王は誰の手に？
《天瀬ルル／魔界エミリ／姉川イツキ／狸川フウ／シロルーム四期生》』

2. 5万人が視聴 0分前に配信済み

☒ 8, 291 ☒ 12 ? 共有 ≡? 保存 :

チャンネル名: Ruru Room. 天瀬ルル

チャンネル登録者数12. 0万人

◇◇◇

放送が無事？ 終了した。

ただ、立木は顔を真っ赤にして、すでに茹で蛸のようだった。

「みんなに言いたいことがあるの!」

「どうしたの？ ついに観念してパンツの色を答える気になったかしら?」

「ち、ち、違うよ!?! なんでこんな質問が紛れ込んでいるの!?! 私、入れた覚えはないよ!?!」

「もちろんお姉さんが混ぜておいたからよ。シロルームと言ったらこの質問でしょ?」

「そうだけど……、そうだけど……」

立木は宇多野のことを叩きながら不服そうな表情を見せる。

「まあ、嫌なら無理に混ぜる必要もないんだけどね。でも、リスナーの人たちは盛り上がるよね」

七瀬が宇多野に同意する。

リスナーのことを最も大事にする。

夏瀬ななが一躍人気になったそのスタイルは天瀬ルルとなった今も健在だった。

「でも、宇多野さんの場合、違う思惑があったよね？ みんなのパンツ、聞きたかったの？」

犬飼がジト目を向けていた。

「もちろんお姉さんは聞きたかったわよ!!」

「つて、葵ちゃん!! やっぱりそうだったんだね!」

「えっちい方向になるとみくちゃんはポンコツになるからね。ほらっ、暴走ポン組って呼ばれたくないんでしょう?」

「あうあう、こんな質問、答えられるはずないよ!? 七瀬ちゃんも犬飼ちゃんもなんで普通に答えられるの!?!」

「えつと、別に減るものじゃないかなって?」

「私もこの手の質問はくると思ってるから、決まった回答を準備してたの」

「ううう……、私に変なの？ 普通は恥ずかしいと思うの……」

「大丈夫、みくちゃん。恥ずかしがってる姿も可愛いから!」

宇多野がグッドポーズをしてくると、なおさら立木は顔を赤くしていた。

「と、とにかく、これからどうしたら四期生が暴走ポン組と言われないようにするか考えたいと思います!」

顔を染めたまま立木は仕切り直しに声を出す。

「ユキ先輩を呼べば良いよ!」

「またユキ先輩……（ポカポカ……）」

「ほらっ、こういうところだよ!?!」

「えっ？ ユキ先輩を呼んだらダメなの？」

「四期生って言うてるよね？（ポカポカ……）」

「葵ちゃん、ど、どうしよう……」

「お姉さんに任せなさい。二人とも、裸で話し合いましう！」

「っ!?!? な、なんで裸になるの!?!」

再び顔を赤面させる立木。

一方宇多野は自分から脱ぎ出し始めている。

「赤裸々に話すんでしょ？ なら脱ぐところからよね!?!」

「違うよ!?! なんでそうなるの!?! それに七瀬ちゃんがいるんだよ!?!」

そんな中で脱げるはずが——」

「ううう……、四期生の絆のため……。四期生の絆のため……」

恥ずかしそうにしている犬飼。それでも上のシャツから脱ぎ始めようとしていた。

「脱がなくていいからね!?! もう、こういうところが暴走してるって言われるんだよ！ って、イツキちゃんも何でスマホを向けてるの!?!」

「おかず用に?」

すでに上の服を脱いでいる宇多野からスマホを没収して、無理矢理服を着せておいた。

「ううう……、宝物があ……」

「と、とにかく、これからえっちいことは禁止だからね！ 四期生がこれからしつかりやっていくためには必要なことだからね！」

「四期生に必要……!?! う、うん、わかったよ。絶対しない！」

犬飼があっさり頷いてくれる。

「ルルちゃんもユキ先輩は四期生が仲良いことを喜んでくれてたよね？　こんな風に仲違いしてていいの？」

「わ、私もそんなこと絶対しないよ！　ユキ先輩のためにみんなで仲良くするよー！」

——なるほど。思ったより素直なのかも。そうなるかとあとは一人。

立木はじつと宇多野を見る。

「ふふふつ、私はその程度の言葉じゃ屈しないわよ！」

「葵ちゃん、野菜——」

「うん、言わないわ」

こうして、立木は無事に四期生全員を陥落することに成功していた。

ただ、ポンたちはその数分後には言ったことを忘れるのだった——

第5話：結坂の誕生日 プレゼントはどうする？
ユキ犬姫拾いました #

突然知った結坂の誕生日。

すでに日にちは一日過ぎてしまっている。

でも、何もしないというわけにはいかなかった。

「えっ？ 何もなくて良いよ……」

結坂自身はこういつてくれているが、それでもやっぱり大好きな仲間であり、かけがえのない友達である。

こういつた記念日は一緒に祝って上げたい。

でも、自分の誕生日は祝ってもらったものの、他人の誕生日をお祝いしてあげたことはない。

いったいどんなことをしてあげたら結坂は喜んでくれるのか？

やっぱり何か贈り物をしてあげた方が良いよね？

結坂の場合は……ゲーム？

何が好きそうかと考えてもそんなことしか思い浮かばない。

ただ、こういつた時に相談できる仲間が僕にはいる。

早速ココネとカグラに連絡を取ることにした。

ユキ : 「二人に相談したいことがあるんだけど、いいかな？」

ココネ : 「どうしましたか？ なんでも聞いてくださいいね」

カグラ : 「配信のことかしら？」

ユキ : 「ううん、ユイの誕生日のことなんだよ」

ココネ : 「そういえば昨日が誕生日って仰ってましたね。と、いうことはプレゼントのことですね。一緒に観に行きますか？」

カグラ : 「それはいいわね。私もユイには何かプレゼントしたいわ

ね。一緒にいきましようか」

ユキ：「えっ、いいの？　ありがとう」

ココネ：「いえ、私たちもユイにはプレゼントをしたいですからね」
カグラ：「同期で仲間だからね。当然よ」

ユキ：「うん、それじゃあ明日でいいかな？」

ココネ：「もちろんですよ」

カグラ：「分かったわ。それじゃあ、十時頃に集合でいいかしら？」

ユキ：「大丈夫。みんな、ありがとう」

本当に優しい仲間を持つことができ僕は幸せだな。

◇◇◇

『《＃ユキ犬姫拾いました》雑談だよ。三期生の二人とお出かけしたよ
《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

1. 2万人が待機中 20XX／07／09 20:00に公開予定

☒729 ☒0 ?共有 ≡?保存 ∴

雑談枠をとった僕はいつもどおり段ボールに入ってるユキくん、ユキ犬姫バージョンを表示させていた。

「拾ってください」

この言葉が書かれた段ボールは久々に使ったかもしれない。
簡単に段ボールの文字も変えられる様になってきたので、その枠に合わせて色々と変えてきたのだが、やっぱりこの文字が一番落ち着く気がした。

【コメント】

：今日こそユキくんを拾って帰る！

：久々な気がする。その段ボール

…三期生の二人？

…ユイツちとココママじゃないか？

…カグラ様……

《天瀬ルル …？50,000 間に合った》

…今日もルルちゃんがいるw

《…5,000 ユキくん飼育費》

『わ、わふっ!? またルルがいる!? ほらっ、もう投げなくて良いよ。あと、飼育費はいらないよ。でも、ありがとうございます』

開始前にスパチャに反応してしまう。

でも、すぐに深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

『こんわふー。みなさん、こんばんはー。雪城ユキです。今日もたくさん拾いに来てくれてありがとうございます』

【コメント】

…こんわふー

…わふー

…拾いに来たよー

《…？5000 …こんわふー》

…わふー

『えとえと、今日はココママ、カグラさんの二人と一緒に出かけしたよ。その……、色々とサプライズをしたくてね』

珍しくいらざら子っぱく舌を出してみる。

『実はユイにいつもお世話になっているプレゼントを贈ろうとひっそり買いに行ったんだよね。内緒だよ』

【コメント】

：ユイちゃんもこの放送を見てるんじゃないのか？ w

天瀬ルル　：ぼくもユキ先輩からプレゼント欲しいな

：ルルちゃん w

『あつ、えと……。そうだね、ユイが見てるかもしれないからプレゼントの中身についてはまだ話さないよ。今日はね、その買い物に行った話をしようかなって……。僕がどんなプレゼントを買えば良いか迷っていたときに二人が助言してくれたんだよ……。』

僕は今日、出かけた時のことを思い出しながら語っていく。

◇◇◇

「祐季くん、待った？」

待ち合わせ時間の一時間前。

僕は相変わらず一人で待っていると、すぐこよりがやってくる。

「待ってないよ。今来たところ」

「むしろ待つ気だったんだよね？　来るのが早すぎるよ。祐季くんは可愛いから遅れてくるくらいでちょうどいいんだよ！　前も草さんに襲われてたよね？」

「あれは別に襲われてたわけじゃないよ？　それにさすがに遅れてくるのは悪いよ……。あと、僕はこうやってみんなを待ってる時間も好きなんだよ。こよりさんや瑠璃香さんとどんなところを見て回ろう……。とか、ご飯は何食べよう……。とか。それを考えてるだけで時間って過ぎていくよね。ってわふっ!？」

突然こよりから抱きしめられる。

「祐季くんは相変わらずの可愛さだね。ギュツと抱きしめたくなるよ」

「抱きしめてる!! もう抱きしめてるから!!」

必死に手足をバタつかせるけど、こよりから抜け出すことはできなかった。

「でも、出かけるのに今日もユキくんスタイルなんだね」

「あつ……」

僕の今の格好はいつものワンピースとレギンスと犬耳パーカー。通称ユキくんスタイル。

こよりからのプレゼントで、意外と落ち着くので家ではこの服装でいることが多かったのだが、最近はこのまま外に出ても違和感を覚えることが減ってきた。

「ぼ、僕は男なのに……」

「祐季くん、いい加減認めよう。祐季くんは可愛いんだよ。可愛いは正義だよ」

「ううう……、そ、そんなことないよ。ぼ、僕だっけいつかはみんなから頼られる様な……、ユージさんや真緒さんみたいな大人の男になるんだ……」

「祐季くんは私の妹になるんだよ」

「なれないよ!?!」

「もう、二人してなに漫才をしてるの。こんな道の往来で……」

僕とこよりのやりとりは瑠璃香がやってくるまで続いていた。



「それで今日はユイの誕生日プレゼントをかうのよね?」

瑠璃香が確認がてら聞いてくる。

「うん、そのつもりだよ」

「それならせっかくだし、ユイに来てもらって突然プレゼントを渡すのはどうかしらっ？」

「あつ、サプライズだね。うん、せっかくだしやろう」

「そうだね。一応彩芽ちゃんに来てもらう話だけしておくね。今日は配信はするの？」

「えっと、元々僕は配信枠を取ってて……」

「それならそのあとに来てもらう様に連絡するね。あとは担当さんに彩芽ちゃんの誕生日についての話をしておいて……。ケーキは流石に作る時間ないね。買っていいこうか」

「ありがとう……。助かるよ……」

「それじゃあ、早速プレゼントを買いに行きましょうか。そのあとで一緒にご飯を食べて——」

「な、なんで当然のように手を繋いでくるのかな？」

「祐季くんが迷子にならない様にするためだよ」

「まあ、祐季ならフラツとどこかに出かけていきそうだからね」

「そ、そんなことないよお……」



『そんな感じでみんな一緒に出かけてきたんだよ。でも、僕はフラツと迷子になりそうだからって無理やり手を繋がせられたんだよ？ 酷くないかな？ 僕、そんなに子供に見えるかな？』

【コメント】

…見える

…むしろ手を繋いでおかないと怖い

…どこかでうずくまって泣いてそうw

天瀬ルル　：先輩が迷子になっても僕が探し出します！
：ルルちゃんの本心がダダ漏れw

『まあ、そのあと、本当に迷子になって迷子センターに連れて行かれたんだけどね。犬耳フードのパーカーを着た小学生くらいの女の子が迷子になってます……。なんて放送されて凄く恥ずかしかったよ……』

迷子センターではずっと俯いたまま、恥ずかしさを隠すために手はギュツと握って足の上に置いていた。

きつと顔も真っ赤だったし、涙目だったかもしれない。

その職員さんには何度も「大丈夫、すぐに親御さんが来てくれますよ」って、励まされたけど。

『本当に何で僕が大人だつて説明しても聞いてくれないかな。もうお酒も飲めるんだよ……。まあ、飲んだ次の日、頭が痛くなったから無理して飲まないけど……』

【コメント】

：w

：本当に迷子になってたw

：ユキくんらしいw

天瀬ルル　：ぼ、ぼくがその場にいたら拾って帰ったのに！

猫ノ瀬タマキ　：ダメにや。にやーが連れて帰るのにや！

美空アカネ　：私が連れて帰るよ。私がユキくんのママだから

姫野オンプ　：ダメなのですよー。ユキくとココネちゃんは私が保護するのですよー

：ユキくんの取り合いが勃発w

：ヒメノンがユキくん取り合いに参戦しましたw

：そういえば三期生の誰も顔を出してないな

『ちよつ、なんでみんなして僕が迷子になる前提なの!? あとみんなはちよつと別の用で来られないんだよ。だから今日は僕一人の配信だよ……。久々だと少し寂しいよね』

特にシロルームの面々は暴走……。ううん、ちよつと個性的な人たちが多くて一緒にいると僕まで楽しくなってくる。

そんな日が続いていると、いざ一人で配信すると寂しく感じてしまう。

『でも、来週からまたたくさんコラボがあるもんね。えっと、四期生こうはいさんたちが考えてくれてる全体コラボに、姫乃オンプ先輩とのコラボ……』

【コメント】

：全体コラボがあるのか

：こっちのひめ姫コラボはほのぼのしそう

：眠くなりそうだな

姫乃オンプ　：そんなことないですよお。シューティングゲームでバチバチなのですよお

『シューティング、いいよね。僕も好きだよ。あんまり上手くはないけど……。』

ゲーム自体はそれなりにしてきたけど、どうにも反射神経を使うものは苦手だった。

普段の運動神経も影響してるのだろうけど、どうしてもワントンポズれてしまったり、隙をつかれて負けることが多かった。

【コメント】

姫乃オンプ　：大丈夫なのですよ。私が教えますのですよ

：不安しかないw
：結末が見えるw
：いや、姫を信じろ

『えとえと、他にはツララさんもコラボをするって言ったな。あとは……動物園だった』

【コメント】

：動物園？

猫ノ瀬タマキ　：うにや、忘れたらダメなのにや!?

貴虎タイガ　：一撃で粉砕してやる

：犬vs虎の最弱決定戦w

『ぼ、僕は最弱じゃないからね!?　きつと貴虎先輩も猫ノ瀬先輩も軽く倒して勝つからね』

正直勝てる気はしないけど、ここは強く言っておく方が面白いよね？

『あつ、動物園だから他にも誘える人がいるね。やるゲームによっては別の人？　動物？　も誘ってもいいかも』

【コメント】

天瀬ルル　：ピクッ

：いやいや、ルルちゃん、天使でしょw

狸川フウ　：もしかしてふうぽこ？

：そっか、フウちゃんは狸だもんね

猫ノ瀬タマキ　：フウも参加決定にや!

貴虎タイガ　：狸もまとめて吹き飛ばす!

狸川フウ　：ふう、吹き飛ばされるポコか!?

『あつ……、フウちゃんも加わるということで僕、猫ノ瀬先輩、貴虎先輩、フウちゃんの四人でコラボします。タグは……令和遊び合戦ぽんぽことか?』

【コメント】

：ぽんぽこwwwwww

：ついにユキくんが自分のことをポンだと認めたw

：いや、ユキくんは常識枠だろ? w

：たまきんとタイガは間違いなくポン枠だw

狸川フウ　：あのあの、ふうでいいポコか?

『もちろん僕は賛成だよ?　断る理由はないし、フウちゃん、かわいいもんね』

自然と可愛いといってしまうあたり、僕も随分とシロルームに染まってきたのかもしれない。

ただ、口に出すまでは自然と出てくるのだが、言った後すぐに顔が赤く染まってしまう。

『わわっ、今のはその……。こ、後輩としてかわいってことだからね。あのあの……。べ、別に他意はないからね……。』

【コメント】

天瀬ルル　：むうう……。フウの裏切り者……

狸川フウ　：!?! ふ、ふうは裏切つてないポコ!?

：ルルちゃんwww

天瀬ルル　：ぼくもユキ先輩にかわいいって言われたいよ

『えっ?　ルルももちろん僕のかわいい後輩だよ?』

ルル相手なら別に照れることなくいうことができるので、普通に言う。

【コメント】

天瀬ルル …えへへっ。ユキ先輩に愛してるって言われちゃいました

魔界エミリ …ポコポコ……

狸川フウ …エミリちゃん、それだとふうを呼んでるみたいポコ

…みんな暴走しすぎて草

猫ノ瀬タマキ …にやにやにや、にゃーには言ってくれないのかにや

『も、もうこれ以上はその……配信時間的に厳しいかな。と、とりあえず今日はこのくらいで……。乙わふ——』

この放送は終了しました。

『《#ユキ犬姫拾いました》雑談だよ。三期生の二人とお出かけたよ《雪城ユキ／シロルーム三期生》』

4. 1万人が視聴 0分前に配信済み

☑1. 2万 ☑5 ? 共有 ≡? 保存 …

チャンネル名: Yuki Room. 雪城ユキ

チャンネル登録者数28. 5万人

◇◇◇

僕の配信が終わるとこよりや瑠璃香がにつこりと微笑む。

「そろそろいいかな?」

「そうだね。もちろん準備はできてるよ」

「祐季が配信してる間にばっちりよ」

「うん、二人ともありがとう」

「祐季くんがいるって言ったらすぐに来てくれましたよ」

「早速中に入ってもらおうね」

二人が結坂を呼びに行ってくれる。

その間に僕はクラツカーの準備をする。そして――。

「うみゆ？ ゆいはなんで呼ばれた――」

パンツ!!

結坂が不思議そうに部屋に入ってきたタイミングでクラツカーを鳴らす。

「お誕生日おめでとうー!」

「彩芽ちゃん、おめでとうー!」

「おめでとうー!」

「う、うみゆ？ こ、これはどういう――??」

困惑する結坂に対して、僕が説明をしていく。

「ほらっ、ちょっと前が結坂の誕生日だったでしょ？ だからお祝いしようと思ったんだよ」

「そ、そんなの良いつて言ったのに……」

「僕たちがお祝いたかったんだよ。少し遅れちゃったけどね」

「きっかけは祐季くんだったけどね」

「そうね。こうやって仲間やっていくのだから当然よね」

「みんな……、うみゆ、ありがとうなの」

結坂は嬉しそうに笑みを浮かべていた。

本編第3章：ココユキの対立？

第6話：誰の絆が最も強い？ #ポンルーム伝言ゲーム

ついにシロルーム全体コラボの当日になってしまった。しかも、期生対抗の対決ということでチーム戦だった。負けたら当然だけど罰ゲーム……。

「ううう……、大丈夫かな……？」

伝言ゲームということだけど、本当に上手く伝えることができるのか、僕のせいで負けないか……と、今から不安でしかなかった。

「体調が悪くなったから今日はお休みにさせてもらおうかな……」

なんだが頭がふらふらする気がする。

うん、きつと一日しつかり寝て休まないとダメだね。

僕がベッドへと向かおうとした瞬間にキャスコードの通知音が鳴る。

ピコピコ……。

えっと、誰からかな……。ココネから？

『どうしたの？』

ココネ：『ユキくん、配信の準備はできてますか？』

『えっと、それだけど、僕やっぱり——』

ココネ：『もちろん休むなんて言わないですよね？』

『うっ……』

ココネ：『最近なかったけど、やっぱり大人数の時は緊張しますか

？』

『……うん。それもあるけど、やっぱりチーム戦ってというのがね。みんなに迷惑をかけちゃうんじゃないかなって——』

ココネ：『大丈夫ですよ。誰も迷惑なんて思っていませんから。それに三期生は私たち四人で初めて全員が揃うんですよ？ 一人でも欠けたら三期生じゃありませんからね。だから、三期生の絆を見せつけるのにユキくんが欠けたらダメなんですよ！』

『そっか……。うん、そうだよ。僕、頑張るからね』

ココネ：『その意気ですよ！ でも、本当に体調が悪いなら言ってくださいね。そのときは無理したらダメです！』

『大丈夫……。みんながいるから頑張るよ……。』

◇◇◇

『#ポンルーム伝言ゲーム』誰の絆が最強か？ 《シロルーム》』

1. 6万人が待機中 20XX/07/14 20:00に公開予定

☒634 ☒5 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

…ついに始まった

…ちゃんと伝わるのか？

…全く違うものをいいそうw

コウ …みなさん、こみー。ボクはシロルーム一期生の海星コウだよ。今日はフウちゃんと二人でゲームの進行をさせてもらうよ』

フウ …こ、こんぽこー。お、恐れ多くもコウ先輩と一緒に進行を担当させてもらうことになりました、四期生の狸川フウ、ポコ。そ、その、尊敬する先輩と一緒に進行することになって凄く緊張してるポコが、頑張るポコ』

コウ …『はい、よくできました』

フウ …『えへへっ……。』

頭を撫でる仕草をされたフウは嬉しそうに笑みを浮かべていた。

アカネ：『コウは渡さないぞ！』

エミリ：『フウは四期生よ！』

進行の途中に声を挟んでくる人がいるけど、もちろんコウはバツサリと切り捨てる。

コウ：『外野はまだ喋らないでね。ルール説明のあとに順番に紹介していくから』

フウ：『えつと、エミリも邪魔したらだめポコよ。四期生は暴走ポン組じゃないことをみせるポコよ』

【コメント】

：さすがコウパイセンがいるとスムーズにいくな

：ぽんぽこも中々

：安心して見てられる

コウ：『それじゃあ、早速ルール説明をフウちゃんにしてもらおうね』

フウ：『は、はいポコ。えとえと……、今回する伝言ゲームは出題された内容をその名前を使わずにチーム全員に伝えるゲーム……ポコ。伝え方は毎回変わって、指定した方法で伝えてもらうポコ。【カタカナのみ】【英語のみ】【名詞のみ】【擬音のみ】とか色々な条件を出していくポコ。それで出題者一人の方に伝えてもらって、残り三人の方に回答してもらおうポコ』

コウ：『うん、ありがとう。正解したら三点。あと条件を満たしていない伝え方があったらアウト宣言していくよ。一回アウトで減点一。三回アウトで終了になるからね。回答者は開始の合図をした後は気をつけてよ。それじゃあ、順番に名前と意気込みを言ってもらおうか』

な。まずは一期生チーム。アカネ、お願いね』

一期生のアバターを表示させる。

アカネ：『やつほー！ 宇宙一の美少女、語彙力つよつよアイドルこと美空アカネだよー。今日は私の語彙力で草を燃やしていくからよろしくねー』

ユージ：『ちよい待つつす!? 俺っちは味方のはずつつすよ!?』

ユキヤ：『ふつ、真緒ユキヤだ。我が勝つことは決まっているので、適当に草を持ってハンデを背負ってやる』

ユージ：『は、ハンデって酷くないっすか!? 俺っちも頑張るっすよ!?』

必死にユージが訂正しているが、それもコウは容赦なく切り捨てる。

コウ：『はい、時間が押してるからユージくんの自己紹介はそれでいいかな?』

フウ：『こ、コウ先輩!?』

フウは隣で驚いていたが、コウはニコニコと微笑んでいた。

ユージ：『ちよい、だめっすよ!? 俺っちは——』

アカネ：『草っす。今日は燃えるために頑張る——』

ユージ：『——っす。って、なんで俺の声真似してるんっすか!?』

コウ：『はい、一期生チームでしたー』

フウ：『ぱちぱち……』

ユージ：『ちよっち待つつす。俺はまだ——』

容赦なく一期生の面々の音が消されていた。

コウ : 『チームワーク抜群のメンバーでしたね』

フウ : 『あ、あははっ……。ものすごく個性的な方たち……。ポコね』

コウ : 『最初の頃は纏めるのが大変だったのよ……。まあ、フウちゃんなら分かってくれると思うけど——』

コウが遠い目を見せる。

おそらく元々は今フウの置かれている、周りがポンで暴走している……という状況だったのだろう。

フウ : 『た、大変ポコ……』

コウ : 『頑張つてね。ボクの代わりに』

フウ : 『こ、コウ先輩の代わりは無理ポコ!!?』

コウ : 『ふふっ、それじゃあ次は二期生チームね』

二期生のアバターが表示される。

オンブ : 『はうー、二期生の姫野オンブなのですよー。精一杯ボケられるようにがんばるのですよー』

タイガ : 『なにつ!!? ボケたら良いのか? 貴虎タイガだ! ボケるってどうするんだ?』

ツララ : 『……貴方は普通にしていると良いのよ。氷水ツララ……。適当にやるわ』

タイガ : 『んっ、普通で良いのか!?!』

タマキ : 『にやつふー、こんにゃー、にゃーにゃー。挨拶だけでもこれだけの語彙がある最強の猫、猫ノ瀬タマキなのにな。今日はユキくんをけちよんけちよんにやつつけて、みんなに涙目上目遣いのユキくんを披露するのにな。よろしくなのにな』

タイガ : 『挨拶を増やしたら良いのか?』

コウ : 『はい、二期生のみんな、ありがとう。安定感が凄いね。一番落ち着いてる気がするよ』

フウ ……羨ましいポコ。あまり暴走してなくて』

コウ …『ある意味一番カオスなんだけどね』

フウ …『……??』 どういう意味ポコ??』

コウ …『まだこれはフウちゃんには早いわね。あまり暴走はしないポンだと思ってくれたら良いわよ』

フウ …『良くわからないけど、わかったポコ!』

コウ …『さて、それじゃあ、次にいきましようか。大本命。シロルームで一番絆が強いのは……と言われたら真っ先に上がるのがこちら。三期生、いきますね!?!』

ついに僕たちの名前が言われてしまう。

すこし緊張しながら僕はミュートを解除していた。

『え、えとえと……、あの……』

ココネ『あつ、まずは私が自己紹介しますよ。ユキくんは深呼吸でもして落ち着いてください』

『う、うん……、ありがとう……』

ユイ …『うみゆ。早速、三期生の絆を見せつけてるの。ユイも混ぜるの』

ココネ『じ、時間がないですよ。ほらっ、ユイちゃんもしっかりしてください』

ユイ …『うみゆー、残念』

ココネ『では、改めて、シロルーム三期生の真心ココネですよ。今日は三期生を纏めて頑張って行きたいと思います』

ユイ …『ママなの』

ココネ『ママじゃないですよー。それじゃあ、次はカグラさん、お願いしますね』

カグラ『全く、相変わらずね。私は神宮寺カグラよ。でも、三期生にはユキのことなら全て分かるココネとゲーム最強のユイ。そして、最強の——』

ユイ…『ポン姫』

カグラ『——である私がいるのよ。段ボール一つ抱えても余裕ね。って、ユイ、何勝手に話しているのよ!』

ユイ『大したことじゃないの。本当のことを言ったの。あと、ゆいは羊なの。数字を数えて寝るのがお仕事なの。今日もすぐに寝たいと思うの』

ユキ『ゆ、ユイ、寝たらダメだよ! わ、わふっ。そ、その、僕はえと……、段ボールです。えとえと、喋るのは苦手だから足引つ張っちゃうと思うけど、が、頑張りますね』

ココネ『ユキくんは段ボールじゃなくて、ユキくんですよ。それに今日は動かないので隠れられないですよ』

ユキ『あうあう……。その、僕以外のみんな、頑張つて……。』
コウ『はい、というこで三期生、段ボールと愉快的仲間たちでした』

フウ『やっぱりあまり暴走してないポコね……。』

コウ『まあ、三期生はどちらかといえばオフになったときに暴れまくるからね。ココママが』

フウ『ううう……。次が心配ポコ……。』

コウ『大丈夫よ。それじゃあ四期生、お願いね』

ルル『みんな、こんるるー。ユキ先輩の一番弟子、天瀬ルルだよ。今日はぼくとユキ先輩の絆を見せつけるために徹底的に間違えていきたいと思います。よろしくねー』

エミリ『(ぼ(ぼ(ぼ(……)))]

イツキ『はい、お姉さんは姉川イツキよ。今日もみんなを辱めていきたいと思うからよろしくねー』

フウ『はあ……。やつぱり……。』

コウ『ポンとすぐ分かるね。さすがポンポコ組』

フウ『ポン組ポコ……。ち、違うポコ。普通に四期生ポコよー!』

エミリ『ちよ、ちよつと待って。エミリはまだ自己紹介を——』

慌てて話すエミリだが、そのままミュートにされてしまった。

画面の向こうでいつものように台パンをしているエミリを想像して、

フウは苦笑を浮かべていた。

コウ : 『それじゃあ、そろそろゲームを始めていくね』

フウ : 『まずは一期生から……ポコね。コウ先輩も混ぜるポコ?』

コウ : 『ええ、そうなるわね。今回のお題はフウちゃんが考えてくれた物でおねがいね』

フウ : 『ま、任せるポコ。とっておきのものを考えてきたポコ』

コウ : 『それは楽しみね。それじゃあ、回答者の発表をお願いね』

フウ : 『わかったポコ。回答者はアカネ先輩ポコ。お代は直接アカネ先輩に送るポコ』

『鍋を名詞のみで伝える』

フウ : 『まずは簡単などころを選んでみたポコ。それじゃあ、スタートポコ!』

◆◆

アカネ : 『ふははははっ、来たぞ来たぞ、私の時代が!!』

自信たっぷりなアカネが笑い声を上げていた。しかし、その様子を見てコウは慌て出す。

コウ : 『アカネ!? もう始まつてるのよ!?!』

アカネ : 『へっ?』

フウ : 『一期生チーム、アウトポコ』

コウ : 『はあ……、言ったでしょ? 開始の合図をしたら気をつけてって』

ユージ : 『草しか生えないっすね』

ユージのその言葉にアカネは少しピクツとしていた。

そして――。

アカネ：『草！ 炎！ 草！ 肉、汁。土器！』

ユージ：『ちよっ!? 俺っち、燃やされてないっすか!? しかも思いつきり絞られて』

ユキヤ：『うむ、草は良く燃えるからな』

ユージ：『理由になってないっすよ!』

コウ：『えっと、草つてもしかして何かの野菜?』

アカネ：『葱、白菜、白滝、ユージ、炎』

ユージ：『やっぱり、隠れて俺っちを燃やしてるっすよ!』

ユキヤ：『ユージを食材にしたもの……、闇の儀式か?』

コウ：『えっと、葱と白菜を使うもの……』

ユージ：『俺っちは食材じゃないっす!!』

具材の名前を言うだけで予想できる今回は用意した問題の中でも比較的簡単な方だった。

ただ、一期生……、主にアカネによってそれは変な方向へと進んでいく。

コウ：『火を使うと炭ができるよ? ユージさんを炭に……』

ユージ：『もういいっす。俺っちだけでも真面目に考えるっす』

ユキヤ：『ユージ……、草……、燃える……、炭……、はっ!? 暗黒物質か!!』

コウ：『それだね! うん、ボクが料理をするとアカネがいつも言ってきたよ! 「コウの料理は暗黒物質ができあがるから私が作る」って』

ユージ：『えっと、絶対に違うと思うっすけど?? 普通に俺っち以外は具材名って考えると鍋とかじゃないっすか?』

コウ：『そんなことないかな。アカネがボクに向けて食材名で言ってきたんだから、失敗したものを言ってるはずだよ』

ユキヤ：『うむ、相手は暴走特急だ。まともな答え方をするはずがな』

い』

アカネ：『わ、私だつてまともな回答をすることもあるんだよ!』

フウ：『えとえと、二回目のアウトポコ』

フウが無情に宣言するとアカネは悔しそうに口を噛みしめて、それ以上何も言わなくなっていた。

ユージ：『今回はもっとシンプルなやつじゃないっすか? ほらっ、

美空がそこまで言ってるんっすよ?』

コウ：『うーん、普通に考えたら鍋だと思っけど……』

ユキヤ：『ユージが燃えてるもんな』

ユージ：『だから俺たちは関係ないっすよ!?! きつと鍋っすよ!!』

フウ：『えっと、では、回答は「鍋っすよ」ってことでよろしいポコか?』

ユージ：『全く良くないっすよ!?!』

コウ：『えっと、フウちゃん。回答は「鍋」でお願いね』

フウ：『はい。では正解は……』

フウは少し口を閉ざして、意味深な間を開ける。

これはコウから頼まれていたことだった。

フウ：『正解です! おめでとうございます!! ぱちぱちぱち

……』

フウの拍手が響き渡る。

ユキヤ：『我が間違えるはずなからう』

ユージ：『思いつきり暗黒物質って言ってたっすよね?』

アカネ：『本当に私を何だと思ってるの!?!』

コウ：『普段の行動のせいでしょ?』

アカネ：『うぐっ……』

フウ : 『ということで、一期生チームのポイントは一点でした』

第7話：誰の絆が最も強い？ぱーとつー #ポンル
ム伝言ゲーム

コウ …『やってみたら中々難しいね』

フウ …『えっと、自分から難しくしてたように見えたポコけど……？』

コウ …『そんなことないよ。本気で考えてたんだけど？』

フウ …『その……、コウ先輩って料理……。えと、何でもないポコ』

コウ …『そうね。そろそろ次にいきますね。優勝候補の二期生に登場してもらいますね』

フウ …『優勝候補ポコ？』

コウ …『ええ、一番バランスがいいのが二期生だからね。回答者は

……あつ——』

フウ …『えっと、貴虎タイガ先輩ですね』

コウ …『二期生は残念ながら不正解でした。次は三期生にいくね』

フウ …『まだ終わってないポコよ!』

コウ …『見たらわかるよ。問題文を——』

フウ …『……??』

「段ボールを英語のみで伝える」

フウ …『シンプルな問題ですよ？ それこそ直接言っても良いですし……』

コウ …『聞いてたらわかるよ』

コウの不安をよそにタイガに問題が伝えられる。



タイガ …『よし、任せろ！ 英語だな!』

オンプ：『はうう!?!』

ツララ：『——降参しても良いかしら?』

タマキ：『にやははつ、これはやられたのにゃ』

タイガの言葉を聞いて二期生の間に諦めのムードが漂っていた。

フウ：『えっと、それじゃあ、スタートポコ!』

フウの合図と共にタイガが英語? を言い出す。

タイガ：『英語、英語……。ダンボールって英語じゃないのか!?!』

ツララ：『——はあ、やっぱりこうなるわよね』

ツララがため息交じりに言う。

フウ：『普通に日本語ポコね。しかも答えを言ってるポコ! ア

ウトポコ!!』

コウ：『さすがに答えを言ってしまうとね……。』

タイガ：『どうしてだ? ダンボールはカタカナだから英語だろう??』

ツララ：『——カードボードボックスよ』

オンプ：『なのですよ』

フウ：『えっと、この場合はどうするポコか?』

コウ：『……例えば狸、だと英語でなんて言うかしら?』

コウはフウの姿を見ながら言う。

タイガ：『肉だ!!』

フウ：『っ?!?!? ふ、ふうは食べ物じゃないですよ!?!』

オンプ：『その前に英語ですらないのですよ』

コウ：『フウちゃん、語尾忘れてるよ』

フウ：『……ポコ』

タマキ：『仕方ないのにや。回答者がタイガになってしまったからにや。運が悪かったのにや』

ツララ：『——むしろ運が良いのでは？』

オンプ：『ボケボケさんなのですよー』

タマキ：『そういえば全力でボケるっていつてたのにや。本人の希望通りなのにな』

コウ：『それじゃあ、二期生組は失格ということだ』

フウ：『お疲れ様ポコ』

◇◇◇

フウ：『凄かったポコね。色々』

コウ：『回答者に当たった人が悪かったね。でも、大本命が撤退したとなるとどこが勝つかまだわからないね』

フウ：『よ、四期生も頑張るポコ！』

コウ：『では、次は今のシロルームを象徴している三期生たちに登場してもらおうね』

フウ：『回答者は……あつ、ユキ先輩ですな』

『えっ!? ぼ、僕!?!』

突然な前を言われて、モニターの前でビクツと飛び跳ねてしまった。

ココネ：『大丈夫ですよ、ユキくん。私たちに任せてください!』

ユイ：『うみゅー、負けはないの』

カグラ：『私がいるのよ。余裕で勝つわ』

『み、みんな……。う、うん、精一杯頑張るよ……。』

フウ：『それじゃあ、ユキ先輩への問題はこちらポコ』

「傘を擬音で伝える」

『えっ?!?! こ、これを擬音で?!』

コウ …『では、スタート!』

『ぼつぼつ……、ちやぶちやぶ……』

なんとなく傘を差した状態で歩いてる音を想像して言ってみる。
ただ、思いのほか伝わってくれない。

カグラ：『雨かしら?』

ユイ …『うみゅー、眠くなるの』

ココネ：『水の音ですね』

『ぎーぎー、ちやほちやほ……。えとえと……。あつ、ばさばさ……。
ばしばし……。』

傘を開く音や、雨を弾く音も追加してみる。

カグラ：『やっぱり雨で決まりよ』

ユイ …『うみゅー、まだ決めるのは早いの』

ココネ：『そうですね。もう少しヒントが欲しいところですね』

ヒント……。か。

でも、傘ってそのくらいの音しかしないような……。
形を音で表す?

先が尖ってるところとか持ち手の部分が湾曲してるところとか
……。

『ちくちく……。にゅーん、にゅっ!? ひ、ひたっ……。』

湾曲した部分を表すのに言った時に思い切って舌を噛んでしまい、
涙目になる。

それでも、余計な言葉を出すことは何とか堪えていた。

しかし、それでも漏れた言葉はあり、みんな驚きの表情を見せてい

た。

カグラ：『えっ??』

ユイ：『うみゆ』

ココネ：『ゆ、ユキくん……』

えっ、ど、どうしたの!? 今のアウト??

みんなの言葉を聞いて焦りだしてしまう。

でも、それを口に出したら一回アウトになってしまいうから、みんなの出方を待つことにした。

ココネ：『ゆ、ユキくん、今のとっても可愛かったです。もう一回、もう一回お願いしてもいいですか? 今度はちゃんと録音しますの
で』

ユイ：『うみゆ、ゆいはばっちり録音してるの』

カグラ：『べ、別に私はもう一回聞きたいとは思ってないわよ? でも、問題を解くためには必要なことだからね』

えと……、もう一回言うの?・

『ちくちく……』

さつきと同じ、傘の先端を表した擬音を口にする。

ココネ：『そ、そっちじゃないです……。も、もう一つの方を……』

『えっ、にゅーん、にゅーん?』

ユイ：『うみゆー、もう一つの方なの』

『もう一つって、今は二つしか言ってないよ!? あっ……』

フウ：『擬音以外の言葉を言ったので一回アウト……ポコ』

——しまった。思わず口を挟んでしまった。

一度深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

——もう余計な言葉に耳を貸さない。うん、大丈夫。

頭の中で考えを纏めて、今度は続けて言ってみる。

『カチャっ、バサッ。テクテク……、ザーザー、ぽちやぽちや……。カチツ。カランっ……』

——どうかな？ 一応帰宅シーンを想像して擬音を出してみたけど、通じたかな？

不安げに三人の反応を待つ。

カグラ：『雨の時の帰宅シーンみたいね』

ココネ：『ユキくんと二人で相合い傘……』

ユイ：『うみゆ、段ボールで捨てられてたユキくんに傘を差して上げる感動のワンシーンなの』

フウ：『はい、終了ポコー。では、答えをお願いしますポコー』

ココネ：『それじゃあ、せーので言いますね。せーの』

コユカ：『『傘（です）（なの）』』

コウ：『それじゃあ、正解はユキくんに発表してもらいますね。どうですか？』

『えっと、うん。正解だよ』

フウ：『さすがの連携だったポコー』

コウ：『そうね。しっかり可愛さをアピールしつつボケてくれて、最後には正解してくれたね』

『えとえと……、僕、全くボケてないんだけど……。それに可愛さのアピールなんて——』

ココネ：『噛んだときのユキくん、とっても可愛かったです。あとから切り抜いてその部分だけリピート再生します』

『や、やめて!? どう見ても僕の痴態だからね。そこは』

ユイ：『そうなの! そんなことをしたらダメなの!』

ユイが僕の味方をしてくれる。

そこで思わず笑みがこぼれる。

『そ、そうだよね!? そんなことをしたらダメだよね?』

ユイ：『うみゆ、それはユイがするの!』

『そ、そういう問題じゃないよ!』

カグラ：『はあ……、ユキも諦めなさい。二人がしなくても誰かするわよ。それならまだ気心の知れた二人の方がマシでしょ?』

『それもそうか……。うん、なら二人にお願いするよ……』

ココネ：『任せてください! ユキくんの可愛さを存分に出して見せます!』

ユイ：『うみゆ、ゆいもトコトンこだわってみせるの!』

『ううう……。はやまったかな……』

コウ：『三期生、段ボール組は二点でした。現在トップだね。さすがナンバーワンの絆と言われているだけあるよね』

フウ：『ふ、ふうたちも負けないポコよ!』

コウ：『そうだね。次はみんなお待ちかね。新生ポンポ組の登場だよ!』

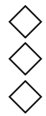
フウ：『四期生。四期生ポコ!』

コウ：『回答者は……。あつ、まさかのフウちゃんだね。頑張り』

フウ：『えっ!? ちよ、ちよっと待って欲しいポコ。それだと答える側が暴走して——』

コウ：『では、早速登場してもらいましょう』

無情にも四期生のアバターを表示されて、それ以上何も言えなくなってしまうた。



コウ：『では、ここからはボクが一人で進行していくね。早速お題をフウちゃんに送ります』

ルル：『ユキ先輩、可愛かったよ……』

エミリ：『(ぽこぽこ……)』

イツキ：『やっぱり百合百合してるのはいいわね……』

既に暴走を始めてる四期生の面々に不安を覚えつつ、フウはお題を見る。

「ロリポップ（ペロペロキャンディー）をカタカナのみで伝える」

フウ：『こ、これって……。危ない問題ポコ……』

コウ：『はい、ではスタート!!』

コウの合図と共に開始されたのだが、しばらくフウは何も言わずにジツとしていた。

イツキ：『どうしたの、フウ？何か困ったことでもあるの?』

エミリ：『大丈夫よ。私たちの絆が試されているんだからなんとし
ても答えるわ!』

ルル：『うん、ぼくも精一杯頑張るからね。ユキ先輩が見てるんだから格好悪いところは見せられないよ』

意外と四期生たちはまとまりを見せてくれていた。

そのことに安心したフウは改めて、お題を見る。

——ペロペロキャンディーをカタカナだけで……。

流石にお題の回答をそのまま言うのは反則だ。

それなら伝えるべきことは飴であることとその形になる。

フウ : 『グルグルー。ペロペロー』

擬音と変わらない……。。

でも、カタカナを使っているので間違いはないはず。

ルル : 『グルペコ?』

エミリ : 『犬かな?』

イツキ : 『フウ、かわいいよ……。 はあはあ……。』

ルルとエミリはしっかり考えてくれるが、イツキだけは吐息を漏らしていた。

フウにはこのあとに続く言葉は予測できるので、嫌な汗が流れていた。

ただ、フウが何かを言う前にエミリが声を出していた。

エミリ : 『イツキもそういうことは後からにきなさい! あとならじっくり話を聞いてあげるから』

イツキ : 『それもそうね。あとからエミリちゃんとはじっくりフウの可愛さについて語り合おうかしら』

エミリ : 『望むところよ!』

——望まないでー!!

司会ということもあり、フウのアバターは他の人たちとは違って動く2Dアバターだった。

だからこそ恥ずかしがっていることがよくわかってしまう。

フウ : 『あうう……。』

エミリ : 『ルルちゃんもユキ先輩が見てるのよ! しっかりやらな

いと!』

ルル : 『ユキ先輩が……見てる!? で、でもユキ先輩には勝って欲しい……』

エミリ : 『ユキ先輩に成長した姿を見せて褒められたくない?』

エミリのその言葉を聞いた瞬間に、ルルの表情は変わっていた。

ルル : 『ペロペロとグルグル……。それとフウの恥ずかしがる様子と戸惑った口調。犬とかの動物ならここまでの表情にはならないはず。きつと、このペロペロは本当に自分のすること……。そうならたらグルグルは見た目? もしかして、ロリポップ?』

イツキ : 『そうね。お姉さんもそうだと思うわ。フウのあの表情はまず食べ物よ。まだまだ確証はないけど、その可能性が高そうね』

エミリ : 『はあ……。そこまでわかっててわざとさつきまでの行動をしていたの?』

エミリがため息混じりの声を出す。

それほどまでに二人の様子はこれまで見たことない、真剣な様子だったのだ。

もちろん進む先は己が欲望のため。

それでも、元々人気配信者。

こういったイベントには慣れていたので。

ルル : 『フウ、他にヒントはあるかな?』

フウ : 『カラフル、アマアマ』

ルル : 『二人はどう思う? 僕はほぼ間違いないと思うけど?』

イツキ : 『お姉さんも同じ意見よ』

エミリ : 『なら、私も否定する理由はないね』

コウ : 『もういいのかしら? では、回答をどうぞ!』

ルエイ：『『ロリポップ』』

コウ：『それじゃあ、フウちゃん。答えをどうぞ』

フウ：『せ、正解ポコ……。すごいポコ……。』

驚きの声を上げるフウ。

それもそのはずで、思い思いに暴走すると思っていたみんながまともだったのだ。

これでもうポン組なんて言われることはない――。

イツキ：『さあ、終わったわよ。エミリちゃん、お姉さんといえちえちな話をしましょうね！ 今すぐに』

エミリ：『四期生の絆を見せつけられたからね。イツキとは四期生の素晴らしさについて語りあうよ』

ルル：『ユキ先輩、見てくれました！ 貴方のルルが活躍しましたよー！』

伝言ゲームが終わった瞬間に暴走を始めてしまう三人。それを見た瞬間にフウは肩を震わせていた。

フウ：『せっかく……。』

コウ：『ミスなく正解で四期生チームは三ポイント。優勝は四期生チームでした！』

フウ：『せっかく誉めようとしたポコなのに、やっぱりポン組だポコー!!』

第8話：つよつよしゅーていんぐ #音犬

「ううう……、本当に切り抜かれてる……」

僕は恨みがましくMe e Tubeの切り抜き動画を見ていた。

昨日の全体配信で僕が噛んでしまった部分だけを繰り返し流して何が楽しいのだろうか……。

そう思ったのだが、その切り抜きを作っているのがココネとユイ。それを見た瞬間に僕は二人に連絡を入れていた。

ユキ : 「ううう……、切り抜き、本当に作ったんだ……」

ココネ : 「当然です！ ユキくんのかわいいところは共通財産ですから」

ユイ : 「うみゅー、当然」

ユキ : 「別にかわいいところでも何でもなしよ。ただ、僕が恥をかいてるだけの部分だよ……」

頬を膨らませて文句をチャットに書き込んでいると、三期生チャットとは別の連絡が届く。

オンプ : 「はうう……、今、お時間よろしいですか？ その、ちやつと慣れなくて……、良かったら通話の方で……」

ユキ : 「もちろん大丈夫ですよ」

チャットを返した瞬間に通話が鳴る。

オンプ : 『は、はじめまして。姫野オンプです』

『えっと、はじめまして……？ でいいのですか？』

オンプ : 『その、いつもの感じで話してもらったら良いですよ。私は元々こんな感じですから』

『でも、先輩ですから……』

オンプ：『先輩も後輩もないですよー。同じシロルーム仲間ですよ？』

『わ、わかりました。そ、その……がんばりますね……』

オンプ：『全然変わってないですよー。コラボまでに慣れてくださいねー』

『わふっ!? が、がんばります』

オンプ：『それでコラボの話ですけど——』

『あつ、そうでしたね。えつとシューティングゲームをするんですよ？ どれをするのですか？ 準備しますので』

オンプ：『あつ、準備はいらないですよ。私の家にもうありますから』

『……えつと、それってどういうこと——？』

オンプ：『それよりどこに迎えに行ったらいいですか？ コラボの日は明日ですよ？』

『迎えに行く?? も、もしかしてオフコラボなんですか?』

オンプ：『——?? 違うのですか？ その方がコラボってしやすいですよ?』

——えつと、三期生とはオフをしたことがあるけど、二期生の場合はどうなんだろう？

『その……、担当さんに確認してから——』

オンプ：『あつ、担当さんには連絡しましたよ。コラボをするのですから報告がいりますもんね』

『あつ、そうなんですよ……』

——担当さんが良いのならそれでいいのかな？ 事前に確認しているってことは僕の性別も知ってるってことだもんね。

一抹の不安は抱えたままだけど、とりあえず僕は承諾をしていた。

『集まるなら駅前とかの方が良いですか？』

オンプ：『少し目立つと思いますけど、大丈夫ですか？』

目立つ？　もしかして、オンプさんって有名人なのかな？

『僕はその……、普通の格好で行くので大丈夫だと思いますけど……？』

オンプ：『ユキくんスタイルですよ？　私も見るのは楽しみですよー』

『えっ!?　あの、えっと……』

できれば普通の格好で行きたかったけど、前もって言われてしま
う。

確かにあの格好はあまり街では見かけないので、見間違えることも
ない。

相手の容姿がわからない以上、目立つ格好をするのはおかしいこと
ではなかった。

それにあの格好をしていると男性に思われない。

それが良いことかと聞かれると頭を悩ませてしまう。

『わかりました……。その、当日は犬耳フードがついたパーカーを着
ていきます。その……。オンプ先輩はどんな格好をしますか？』

オンプ：『私ですか？　そうですね……。真っ黒の車で行きますよ。
では、よろしくお願ひしますね』

『えっ!?　く、車?!』

クルマの絵が描かれた服ってことなのかな？

あまりオンプ先輩のイメージではないけど、あくまでも僕が持って
いるイメージはアバターでの先輩だもんな。

実際に会ってみると全く違う人、という可能性もあるよね。

苦笑を浮かべながら明日の準備を始めていた。



翌日、約束通り僕は犬耳フードのパーカー、白のワンピース、黒のレギンス、というユキくんセットを着た上で待っていた。

「えっと、黒の車の服を着た人……黒車の人……」

容姿はわからないので、とりあえず言われた通りの人を探していた。

ただ、場所は駅前。

たったそれだけの情報で見つけられるほど、周りの人は少なくな
い。

「うーん、いないなあ……」

ただ、時間はまだ待ち合わせの一時間前。

ココネじゃないからそんな早くに来るはずもないか……。

ついついいつもの感覚で探してしまった。

うん、僕が早く来すぎてしまったただけだもんね。約束の時間まで
ゆっくりしようかな。

「すみません。その服ってもしかしてユキくんのですか？」

「えっ??」

突然男の人から声をかけられて驚いてしまう。

もちろんその人物は知っている人ではない。

知らない人に声をかけられたので思わず警戒してしまう。

一步後ろに下がり、鋭い視線を向ける。
ただ、その人が着ている服が車が描かれた黒い服だった。

——もしかしてこの人がオンプ先輩??

いやいや、オンプ先輩は女性のはず。

確かに僕がルルみたいなパターンもあるかもしれないけど、この人の場合は明らかに男の人とわかる声をしている。

——そういえば以前ココネからも注意されたな。

知らない人とは話してはいけない。

明らかに怪しい人だもんな……。

「よろしかったら写真を撮らせてもらっても——」

「そ、その、僕、人を待つてるだけなので——」

一体僕の写真なんて撮って何をしようとしているのか……。

全くその意図が分からずに警戒心をあらわにしてしまう。

すると、その瞬間に僕の目の前に黒塗りされた車が止まり、中からスーツ姿でサングラスの男の人が出てくる。

——もしかして、写真を口実に僕を誘拐するつもりだった??

思わずその場から逃げ出そうとする。

しかし、その瞬間に体を掴まれて逃げることができなかった。

「は、離して——」

「えっと、ユキくん……ですよね?」

僕にだけ聞こえるように小声で聞いてくる。

その声は聞き慣れたオンプ先輩の声そのままだった。確かに僕の体を掴んでいるのは黒服の男ではなく、別の女性だった。

白のワンピースをきた、それこそお嬢様としかいえないような人。長くもこもことした茶色の髪。

優しくゆつくりとした声。

イメージしたオンプ先輩そのままの姿の人がそこにいた。

そして、その人がにつこりと微笑みながら僕に声をかけてきた男の人に話しかける。

「この子は私の連れで、別にコスプレをしてるわけじゃないですよ。だから写真は遠慮してもらっても良いですか？」

「あつ、そうなんです。それは申し訳ありません」

男の人は素直に謝ってその場から去っていった。

その様子を見て僕はほっと心を撫で下ろしていた。

「遅れてしまつて申し訳ありません。なるべく早く着くようにしたのですけど」

「いえ、時間はまだ早いですから……。えつと、オンプ先輩？ ですよ
ね」

「はい。ただ、ここでは西園寺綾子さいおんじあやこと呼んでもらつても良いですか？

色々と問題がありますので」

「あつ、そうですね。申し訳ありません」

「いえ、私は良いのですけど、その黒服さん達がですね——」

「綾子様。流石に人目が集まつております。そろそろ出発した方が宜しいかと」

「そうですね。ユキくんがよろしければ」

「ぼ、僕は大丈夫ですよ……。ただ、ずっと抱きしめられてるとその……恥ずかしいです」

「それもそうですね。確かにこの格好だと人目が集まりますよね。で

は、車に乗ってください」

そのまま言われるがまま、黒塗りの車へ乗り込んでいた。でも、乗った後に再び抱きしめられていた。

「あ、あの……、さつきも言いましたけど、抱きしめられたら恥ずかしい——」

「大丈夫ですよ。ここだと人目を気にする必要はありませんから——」

「そ、そういう意味じゃなくてその……」

「あれっ？ 違いました？ ユキくんの担当さんからは『ユキくんは恥ずかしがり屋だから抱きしめて落ち着かせてあげると良いですよ』って聞いていたんですけど」

「ち、違います!! その……、逆に落ち着かないです……。色々当たって……」

西園寺は女性らしい体つきをしている。

そんな状態で抱きつかれていたら当然ながら僕に色々当たっている。

そんな状態なので思わず頬を染めていた。

「あつ、すみません。お見苦しいものを——」

「いえ、むしろ僕の方がすみません」

「私は気にしていませんので大丈夫ですよ。別に女の子同士なわけですから——」

につこり微笑みかけてくる西園寺。

「えっと、こんな格好をしていますけど、僕はその……男……ですよ?」
「ふえっ!？」

抱きついたらままの西園寺の表情が固まっていた。ただ、この後の反応はココネたちで分かっている。シロルムの面々は僕が男と知っても全く気にしない。むしろ、それを知った上でさらに抱きついてくるような人たちだった。

だからこそ僕もさらに抱きしめられるのを覚悟していた。しかし、西園寺はすぐに僕を離して、俯いていた。

「ほ、本当に申し訳ありません。わ、私、その……、あの……、男の人に接するのは初めてで——」

「えっと、僕の方こそなんだかごめんなさい」

結局西園寺の家へ辿り着くまで無言のまま微妙な空気を漂わせていた。



一体どんなところに行くのだろう……と思っているとやたら大きな建物へと連れて行かれた。

「えっと、ここが西園寺先輩の家……?？」

「あっ、は、はい。そ、そうです……えとえと、それである……ほ、本当にコラボ、するんですよね?？」

緊張した様子の西園寺。

ここまで緊張されていると僕の方も反応に困ってしまおう。

「えっと……、し、しないならしないでも大丈夫……ですよ?？」

「あっ、いえ、気にしないでください。するって言っちゃいましたから……」

「む、無理はしないでくださいね。僕はその……、無理にしくなくても」

「いえ、大丈夫です。そ、その、まさか男の人とは思わずに。ど、どう接して良いのか分からなくて……」

「えとえと、僕の性別を知ってる三期生たちは何も変わらずに接してくれてますね。逆に僕の方が申し訳なく思うほどで——」

「あつ、そ、そうですね。ごめんなさい。私の方が先輩なのに。ぜひ一緒にコラボしましょう」

再び微笑みかけてくれる西園寺。

その顔は赤く染まっているものの決意に満ちたものだった。

「そ、それが普通の反応だと思いますよ。でも、よろしくお願いします」

その様子を見た僕は苦笑を浮かべながら頭を下げていた。

◇◇◇

『《#音犬》つよつよしゅーていんぐ《姫乃オンプ／雪城ユキ／シロルーム三期生》』

1. 9万人が待機中 20XX／07／18 20:00に公開予定

☒690 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：珍しいコラボ

：つよつよとは？

：安心して見られそう

：ユキくん、先輩との単独コラボはこれが初めてだな

オンプ：』はうう……。みなさん、こ、こんばんは。姫乃オンプなのです。き、今日は後輩のユキくんさんを招いてシューティングゲームをしていくのです』

少し緊張した様子を見せるオンプ。

——いや、違うか……。

チラチラと僕のことを見ているところを見るとどう接したら良いのか迷っているみたいだった。

相手が緊張していると分かると僕自身も緊張してしまう。

『えとえと……、わ、わふう。あ、あのあの、ゆ、雪城ユキ……です。きよ、今日はオンプ先輩のおうちにお邪魔してます。そ、その……、あの……、だ、誰か拾いに来てください……』

すると、僕が緊張していると分かったのか、オンプは大きく深呼吸をして、にっこり微笑みかけてくる。

そこにさつきまでの恥ずかしそうにしていた姿はなかった。

オンプ『はうう……、今日は私が拾ってきたのですよ？ 誰にも渡さないのですよ？ それに今日のユキくんさん、ちよつと固いのです。緊張してるのですか？』

——さすがに僕よりも長く活動をしているだけある。

気持ちを切り替えたオンプは赤い顔をしながらもいつもの話し方をしていた。

ただ、僕はまだそこまで上手く切り替えができない。

今すぐにも段ボールに隠れなくなる気持ちを抑えながら、何とか声を出す。

『そ、その……、やっぱり先輩とのコラボって緊張してしまって……。で、では、乙わふでした……』

オンプ：『ほう!? 勝手に終わったらダメなですよ!? まだこれからなのでですよ。それにさつきからずっと敬語を使ってるのですよ。わかりました。ユキくんさんは今日一日敬語禁止令なのですよ。破ったら罰ゲームなのですよ』

『えとえと……、そ、そんなことを急に言われましても……いたっ』

実際は痛みなんて全く感じないほど軽く頭を小突かれただけなのだけど、急なことだったので思わず声に出してしまう。

オンプ：『禁止したばかりなのですよ』

『そ、それをいうならオンプ先輩も同じことです……だよ』

オンプ：『私は語尾なのですよ。抜いたら私じゃなくなってしまうのですよ』

『で、ですよ、の部分は抜くことができま——できるよね?』

オンプ：『はうう……、気づかれちゃったの。仕方ないので、今日はこの話し方でいくの』

『あとあと、別に普通のコラボでも良かったんじゃないで——? それにこの部屋、広すぎ……るよ? なんかモニターも僕より大きいし——』

オンプ：『……? ここはうちだと狭い方の部屋なの?』

オンプが不思議そうな顔をしている。

それを見るかぎり本当のことを言ってるのだろうけど、なおさら恐ろしかった。

『え、えと……、僕の家のリビングより広いよ……』

【コメント】

・ヒメノンはお姫様だもんな

・ユキくんは拾って帰ります

天瀬ルル：ユキ先輩が捕まってる……。助けに行かないと

：ルルちゃん草

：敬語禁止か。

：普段のユキくんは敬語じゃないもんな

：むしろヒメノンの方が大変だ

オンプ：『へ、部屋の広さはいいの。それよりも早速始めるの』

『そ、そうですね……。が、頑張りま……。いたっ』

気を抜いたらまたオンプに叩かれてしまう。

今度は部屋の中にあったくまのぬいぐるみで。

オンプ：『ダメなの。私も頑張ってるの。だからユキくんさん……。ユキくんも——』

『は……。う、うん。頑張る……。』

ギョツとくまのぬいぐるみを抱きしめて気合いを入れる。

オンプ：『では、今日のゲームを紹介するの。とはいっても、銃を持って互いに打ち合うだけの簡単なゲームなの』

『えっと、僕は初めてするのだけ……。だ、大丈夫？』

オンプ：『任せてなの。私はこう見えても何回かしたことあるの。つよつよなの』

『えっと……。どこかで見たことがある展開で、恐怖しか感じないんだけど……。』

そういえばカグラとコラボをしていたときも同じようなことを言っていた気がする。

ゲームの種類が違うからかもしれないけど、あまりその自信を信じられずに恐怖を抱いていた。

オンプ：『大丈夫なの。対戦ならともかくこれは協力して相手チームと戦うの。私に任せてほしいの』

『わ、わかりま……わかったよ。ぼ、僕も精一杯頑張りま……頑張るね。そ、その……、しゃべり方に気を取られるかもしれないけど……』

【コメント】

：数回でつよつよw

：怯えるユキくん久々w

：結果が見えるwww

第9話：つよつよしゅーていんぐぱーとつー #音犬
／協力対戦。敵の敵は味方?? #カグユイ

ゲームをやり始めて数分後。

オンプはあっさり倒されて、必死に抵抗した僕もすぐに倒されてしまった。

——本当に一瞬で……。

『あ、あの、オンプ先輩……？ えっと、つよつよ……は？』

オンプ：『ううう……。こんなはずじゃないの……』

オンプは涙目になりながら、ぎゅっと自分のスカートを握りしめていた。

——よほど負けたのが悔しいのかな？

『だ、大丈夫です。ちよ、調子が悪いときってありますよね……いたっ』

オンプ：『ううう……。敬語はダメなの……』

涙目になりながらも、いつの間にかそばに置いていたハリセンで叩いてくる。

『えええ……、今も継続で……なの!?!』

オンプ：『も、もちろんなの……』

『わ、わかり……。わかったよ。気をつける。でも、その……つよつよは??!』

オンプ：『ううう……。たまたま……。たまたまなの。本当はもつとつよつよなどところを見せるの』

『だ、だよね……。うん、びっくりしちやったよ』
オンプ：『つ、次は大丈夫なの。うん……。』

【コメント】

：いつもの光景

：つよつよw

：少し涙声w

真心ココネ：ユキくん、オンプ先輩。頑張って……

それから数回挑戦していくと段々やり方が分かってきて、僕もすぐには死なくなってくる。

ただ、一方のオンプは……。最初と変わらずに速攻で死に続けた。

これは協力して相手と戦うシューティングゲーム。

最終的に二対一になったら勝てないので、結果的に僕たちは負け続けていた。

オンプ：『ううう……。私、何度もやったことがあるのに……。』

『その……。げ、元気を出して……。まだ始まったところだから。ほらっ、一緒に一勝を目指そうよ……。』

オンプ：『ゆ、ユキくん……。あ、ありがとうなの……。』

オンプが涙目になりながら僕の方をじっと見てくる。

すぐ近くにオンプの顔がある。

僕が頬を染めて、思わず顔を背けてしまう。

すると、オンプも同じように顔を背けていた。

ただ、その動きはアバターにも反映される。

アバターも照れた表情でお互い顔を背け立っていた。

【コメント】

：照れてる w

：初々しいな w

天瀬ルル：ゆ、ユキ先輩……。ぼくのは遊びだったのですか!?

：→草

『えつと、ルルとはまだあそび配信はしたことない……。かな？ ほらっ、雑談オフだけだし、一緒に泊まったくらい?』

オンプ：『ふええええつ?!?!? と、泊まったの!?!?』

『えつ? 別に何もおかしいことではないで……。よね?』

オンプ：『えつ?!?!? だ、だって……。えつ?!?!?』

オンプは何度も僕の姿を見てくる。

別にルルとは同じ性別だし、それにオフ自体は他の人ともしている。今更驚かれるようなことでもないと思うけど……。

【コメント】

天瀬ルル：ううう……。一緒にお風呂にも入ったのに

：そういえばそんなことを言ってたな

：ヒメノン驚きすぎ w

真心ココネ：お、お風呂!?!? そうだった、忘れてました……

オンプ：『お、お、お風呂!?!?!? ああの……。さ、さすがにそれはそのその……』

『えつと、そうで……。だよ。うん、僕も恥ずかしいんだけどね……』

オンプ：『恥ずかしいとか恥ずかしくないとかじゃなくて……。えつと、あれあれ?? わ、私に変なの?』

『あ、あははっ……。ぼ、僕も変だと思いま……。思うよっ……』

【コメント】

：オフだと別におかしいことないんじゃないか?

：ヒメノンはお嬢様だからな

：そうか、ヒメノンならおかしくないか

『そ、それよりも次のゲームに行きましょう。今度は勝てますよ』
オンプ：『そ、そうなの……。あつ……。』

オンプが思い出したようにいつの間にか側に置かれていたはりせんで叩いてくる。

『痛つ……。』

オンプ：『ほらっ、敬語はなし……。なの』

『う、うん、ごめん……。あれっ、今度の対戦相手……。』

オンプ：『えっと、「ユイ羊」と「ポン姫」さんの』

『……。ど、どこかで聞いたことないかな?』

心当たりがありすぎる名前。

一人ならともかくそれが二人なのだから、おそらく間違いないはず……。

オンプ：『も、もしかして知り合いさんなの?』

『多分だけど、ユイとカグラさんじゃないかな?』

オンプ：『えっと、ユイちゃんとカグラちゃんさん!? 三期生の?』

『その名前には無理に「さん」を付けなくていいんじゃないかな? 僕の時にも思っただけど……。』

オンプ：『この方が話しやすいの。で、でも、ユイちゃんはゲーム上手いし、カグラちゃんさんも上手かったから大変なの』

『えっと、カグラさんはどうか……。?』

僕は苦笑を浮かべながらジッと対戦相手のことを見ていた。



『《＃カグユイ》協力プレイでシューティングゲームをするわよ《神宮寺カグラ／羊沢ユイ／シロルーム三期生》』

1. 5万人が視聴中 ライブ配信中

⊠644 ⊠1 ?共有 ≡?保存 …

カグラ：『みんな、こんばんは。今日も神宮寺カグラが来てあげたわよ』

ユイ：『うみゆ、それじゃあ、もう帰っても良いの』

カグラ：『帰らないわよ!? なんで速攻私が帰ることになってるのよ!?!』

ユイ：『うみゆ、それじゃあゆいが帰るの。乙うみゆーなの』

カグラ：『つて、なんでいつもいつも帰ろうとするのよ! ほらっ、頑張つてよ。せっかく初めてのコラボなんだからね』

ユイ：『うみゆー、全体コラボとか良くしててあんまり初めてって感じがしないの』

カグラ：『まあ、それはそうよね。私も同じ気持ちよ。それで今日はどんなゲームをするのかしら?』

ユイ：『うにゆ、言つてたとおり協力して相手を倒すシューティングなの。バンバン倒すの』

ユイは楽しそうに笑みを浮かべていた。

カグラ：『私にできるのかしら? 初めてやるのよ?』

ユイ：『うみゆー、ユイに任せておくの』

両手を挙げて自信たっぷりに答えるユイ。

その挙動に一抹の不安を感じずにはいられないカグラだった。

カグラ：『あれっ、相手つて?』

ユイ：『えっと、「ユキ犬姫」と「音姫」なの。どこかで聞いたことがあるの』

カグラ：『そういえば今日、ユキとオンプ先輩がコラボをしてたわね。ゲーム配信だったかしら？』

ユイ：『ふふふつ、ユキくんをコテンパンに倒してみせるの』

カグラ：『黒いわよ、ユイ。それよりもユキの敵になるのは料理対決以来ね。前は引き分けだったけど、今回は勝たせてもらおうわよ』

ユイ：『うみゆ、やる気十分なの。コテンパンにするの。うみゆ、それならユキくんに通話をするの。きつと楽しいの』

カグラ：『大丈夫かしら？ 向こうも配信中よね？』

ユイ：『ダメなら通話に出ないの』

カグラ：『それもそうね。試すだけなら良いかしら……』



ピコピコピコ……。

『あれっ、通話？ ユイからだ』

オンプ：『ユキくんのお家芸の通知鳴らしなの』

『お、お家芸ってわけじゃないで……よ。それよりも——』

オンプ：『出て大丈夫なのです……、なの。きつと、対戦のことなの』
『わかりまし……、わかったよ』

オンプがはりせんを持って構えていたので、慌てて訂正して通話ボタンを押す。

『どうしたの??』

ユイ：『うみゆ、声が聞きたかっただけなの』

『へっ!? それだけ!?』

ユイ：『うみゆ、それだけなの』

カグラ：『ち、違うでしょ!? ちょっとまだ切らな——』

カグラがまだ何か言いたそうだったが、ユイはそのまま通話を切っ

てしまった。

『えっと……、何だったんだろう?』

オンプ：『いつものことなの。ユキくんの配信を見てるとそんな感じなの』

『えっ!? ほ、本当に?』

オンプ：『そうなの。今までの配信を見返してみるとよくわかるの。私も全ては見られてないけど……』

オンプが申し訳なさそうな表情を見せる。

ただ、それは仕方ないことだ。

全員を追うなんて一日が四十八時間あっても無理なことだった。

僕自身も最近は同期の皆は配信を見てるけど、他の人は切り抜き動画を見ることの方が多かった。

そんなことを考えていると再び通知音が鳴る。

今度の相手は——カグラだった。

『えっと、どうしたの?』

カグラ：『も、もうユイに切らせないから聞いてくれるかしら?』

『——今からする対戦のことだよね?』

カグラ：『ええ、そうよ。改めて宣戦布告しようと思ってね』

『えっと、それはいいけど、カグラさんはいいの?』

カグラ：『どうかしたのかしら?』

『もうゲーム、始まってるよ?』

僕は話しながらも自分のキャラを動かしていた。

でも、カグラはその場で留まったまま。

いつ狙われてもおかしくなかった。

カグラ：『ああああ、い、いつの間に始まったの!? と、とにかく覚悟すると良いからね!』

それだけいうとカグラは通話を切る……ことなくそのままにしていた。

そのおかげで向こうの状況もリアルタイムに入ってくる。

ユイ : 『うにゅー、どんどん撃つの!』

カグラ : 『いたたつ、私を撃ってるわよ!』

ユイ : 『気のせいなのー! どんどん撃つのー!』

カグラ : 『痛い、痛いつて! だから私を撃ってるつて言ってるわよね!』

ユイ : 『味方の味方は敵なのー!!』

カグラ : 『味方よ!? 敵じゃないわよ!!』

【コメント】

: 実質三対一w

: カグラ様www

: これならまだ勝ち目があるかもwww

: いや、これは二対一対一じゃないか? w

: ユイちゃん一人勝ちがあるかもw

『えとえと……、大丈夫?』

カグラ : 『つ!? だ、大丈夫よ!』

ユイ : 『うみゆ、ゆいが三人に圧勝するの』

カグラ : 『だから味方よ!!』

オンプ : 『えつと、これ、撃っちゃってもいいの?』

オンプが困った様子で僕のことを見てくる。

『大丈夫だよ。二人とも僕たちを油断させようとしてるだけなので』

オンプ : 『そ、そうなの? えいつ!』

『いたたつ、それ、僕だよ!』

【コメント】

：フレンドリーファイアの応酬w

：ヒメノンw

：ヤバいな。チーム戦なのに個人戦だw

天瀬ルル：ぼくだったらユキ先輩と完璧なコンビネーションを見せることができたのに……



それから勝負は混戦を極め、気がついたときは僕たち三人は瀕死でユイ一人だけがピンピンしていた。

ユイ：『ういなーなのー』

カグラ：『ど、どうしてあんな米粒くらいしか見えないところから当てられるのよ……』

『ううう……、やっぱりユイは強かったよ……』

オンプ：『な、何もできなかったのです……』

がつくりと肩を落とすオンプ。

ユイ：『ふふふっ、ゆいに勝つのは百億年早い』

『それって一生勝てないってことだよね!?!』

オンプ：『負けちゃったのです……』

画面に表示されているのは『敗北』の文字。

【コメント】

：惜しかった

：ユイちゃんは強かった

：でも、ユキくんの腕上がつてきてるな

天瀬ルル：ユキ先輩、今度は僕ともやりましょう
：ヒメノン、敬語に戻ってるねw

オンプ：『あっ……。ゆ、ユキくん、た、叩いて欲しいの』

オンプははりせんを手渡してくる。

ただ、さすがにそれを女の子相手に使う勇気は僕にはなかった。
しかし、オンプは少し怯えた表情を見せながらはりせんを差し出し
て動かない。

『えっと、本当にいいの……？』

オンプ：『や、約束は約束なの……』

別にはりせんを叩く約束はしてないんだけど、確かに敬語を使わな
い約束はしたもんね。

そこまで言われてしまったらやるしかない。

僕は覚悟を決めるとオンプからはりせんを受け取る。

そして、涙目になりながらぎゅつと目を閉じるオンプに対して、軽
く……。本当に軽く当たる程度にはりせんを当てる。

オンプ：『手を抜いてるの……』

『こ、これ以上はできないよお……』

オンプ：『で、でも、罰が……』

『ぼ、僕の罰じゃないよね?! ならこれで大丈夫だよ……。そ、それよ
りもほらっ、っ、次のゲームに行こうよ。ゆ、ユイ達には流石に勝て
なかったけど、それでも僕たちはうまくなっているはずだよ!』

オンプ：『そ、そうなの。今度こそ初勝利目指して頑張るの!!』

◇◇◇

それからゲームをしばらく続けていた。

流石になかなか勝てなかったものの、日が変わる頃によく僕たちは初勝利を飾ることができた。

オンプ：『——う、そ……』

『う、嘘じゃないよ！ や、やっと勝てましたよ!?!』

思わず僕とオンプはハイタッチをしていた。

そして、オンプは感極まって思わず僕に抱きついてくる。

オンプ：『や、やったよ、ユキくん！ わ、私、こうやって勝つことがなかったから本当に嬉しいの』

『あああう……、そ、その……、お、オンプ先輩……!?!』

僕は必死に手足をバタつかせて抵抗したが、身体差によってまともに抵抗できなかった。

『お、オンプ先輩……、お、落ち着いて……。そ、その……、い、いろんなところが当たってます……』

オンプ：『はうっ!?!』

オンプはようやく我に帰ると顔を真っ赤にして僕を離してくれる。

オンプ：『あああうあう……、そ、その、あの……、ご、ごめんなさい……。私、その……、う、嬉しくて……』

『えとえと……、ぼ、僕の方こそその……、あの……、ありがとうございます！』

オンプ：『……ふふっ』

僕が訳もわからずにお礼を言うとオンプは、クスクスと笑い出していた。

それに釣られるように僕も笑い出す。

オンプ：『き、今日は本当にありがとう。その……、また一緒にやりませんか？ また別のゲームも——』
『も、もちろんだよ。僕もその……、こうやって一緒に成長していけて……、た、楽しかったよ……』

僕が微笑みかけるとオンプは顔を染める。

オンプ：『そ、そっか……。こういうところが他の子を落としていくんだね。天然のタラシさんなんだね……。』
『そ、そんなことないよ……。』

あらぬ誤解を押し付けられそうになりながらも、良い雰囲気のままオンプとのコラボを終えることができた。

第10話：ユキくん、リードする？ #氷雪

時間も遅くなってしまったので、このまま僕はオンプ先輩の家に泊まることになった。

もちろん部屋は別。

この辺り、オンプ先輩はさすがだった。

いや、ただ家が広すぎるだけか。

いくつも広く綺麗な客間が用意されている上に、それぞれがバストイレ付き……。

高級ホテルと言われても頷いてしまいそうだった。

「きよ、今日はここで泊まってください……」

「えと、その……。ぼ、僕は無理に泊まらなくても……」

思わず気が引けてしまう。

それもそのはずで、部屋は天蓋付きのベッドやこれ以上ないくらい大きなテレビ。窓の外からはプール付きの庭が見え、とても客間には見えない。

「いえ、時間も遅くなりましたので、ぜひとも泊まっていてください。そ、その……。わ、私がよわわだったせいで、こんな時間になってしまったのですから……」

西園寺が本当に申し訳なきそうにしおらしく言ってくる。

「そんなことないですよ。そ、それに僕も楽しかったですから」

そんな僕の返答に驚いたオンプ先輩だったが、すぐに笑みを浮かべていた。

「ふふふつ、みんながユキくんとコラボをしたがる理由が良くわかり

ます。ユキくん、優しいです……。ま、また明日、お送りしますから今日のところはゆつくり休んで下さいね」

「はい、ありがとうございます」

オンプが部屋を去って行ったあと、僕はお風呂に入った。

そして、いつの間にか用意されていた寝間着（しかも犬の着ぐるみ）を着て、そのままベッドへ飛び込む。

そして、スマホを眺めていると充電が切れそうになっていることに気づく。

「あつ……。充電しないと……。でも、充電器も持ってきてないし、帰ってからでいいかな……」

SNSの返事とかができないのが心残りだけど、明日に説明したら分かってもらえるよね……。

そばに置かれたテーブルにスマホを置くと次第に瞼が重くなっていく。

意外と疲れていたようで僕はそのまま眠りについてしまった。



こよりは先ほどのユキとオンプ先輩の配信を見た後、慌てて彼にチャットを送っていた。

ココネ：「ユキくん、さっき話してたお風呂のことってどういうことですか？まさか本当にルルちゃんと一緒に入ったりなんてしてませんよね？」

ただ、本当なら祐季にだけ送ったつもりだったが、動揺していたこともあり、三期生のグループチャットに送ってしまう。

ユイ　：「うみゆ、ゆいとも入るの！」

ココネ　：「えっ!?　は、入るのですか!？」

カグラ　：「流石にダメでしょ？」

ユイ　　：「ゆいは問題ないの。お風呂、お風呂(???)? (???)」

ココネ　：「わ、私が許しません！」

ユイ　　：「でも、ルルちゃんとならおかしくないの」

カグラ　：「まあ、ルルのあの入れ込み様なら別におかしくないわね」

ココネ　：「えっ?　お、おかしいと思うのは私だけですか??」

ユイ　　：「うみゆ、そうなの」

カグラ　：「それにしてもいつも一番に反応するユキが全く姿を見せないわね。何かあったのかしら?」

ユイ　　：「うみゆ、オフコラボだからお泊まりなの！」

ココネ　：「あつ、そうですね。今頃オンプ先輩とお泊まりしてるのですね」

ユキの返事がないことを気にしていたココネはホッと安堵の息を吐いていた。

それと同時に、またユキがオンプ先輩とお風呂に入るのでは、と不安を感じずにはいられなかった。



——早起きしてしまった。

時間はまだ朝の五時。

ようやく日が上り始めたかという時間である。

部屋には大きな窓が付いているとはいえ、しっかりとカーテンが閉められており、それを開けない限り日の光が部屋に入ってくることはない。

それならなぜこんな時間に目が覚めたのか?

ベッドが寝にくかったのかといえば、むしろその逆で体にフィットする柔らかいマットとふかふかで暖かい掛け布団は、十分に天日干しされていたようで日光の香りを感じたほどだった。

——たまにしか干すことのない僕の布団とは大違いだった。

何も気になることがなければいくらでも寝ることができただろう。でも、配信後の反応を見ずに寝たというのがなくて、どうしてもそのことが気になってしまった。

ただ、見ようにもスマホの充電が切れていては確認することができない。

その状況は昨夜とは変わらない……はずだった。

「——あれっ?」

気がつくといつの間にかスマホが充電されており、普通に電源がつかないようになっていた。

「あつ、この机が置くだけで充電される様になっているのか……」

置いただけで充電できるものがあることは聞いたことがある。

所詮その程度で、実際に使ったことはないけど——。

早速電源をつけるとものすごい数の通知が現れる。

「わわっ、ど、どうしてこんなに……」

連絡をくれた人たちの名前をみる。

ココネ、カグラ、ユイ……と言った三期生の名前がまず目に止まる。同期である彼女たちとは予定がなくても毎日連絡をとっている。

一日連絡が取れなかったのだから通知があってもおかしくない。それと最近だとよく来ているのはルルだった。当然ながらルルからも連絡が来ている。

「ココママ……、何かあったのかな？ やたらたくさん通知が来てるけど……。あれっ？ ツララ先輩からも来てる?!」

そういえばコラボをするって言ってたよね。

早速ツララ先輩からのチャットを開く。

ツララ：「——明日拾いに行っても良いかしら？」

相変わらず簡素な連絡。

——これが昨日に来てたってことは、今日の話だよな？ 一緒にコラボをしようって意味だと思うけど、本当に僕を拾いにくるって意味だったら大変かも。今は家に誰もいない訳だし……。

そう思った僕は慌ててツララ先輩に返信をする。

ユキ：「えっと、今僕はオンプ先輩の家にいまして、その——」

ツララ：「——そう、わかったわ」

短い文章で理解してくれるツララ先輩。

これで別の日にコラボを延ばしてくれるはず……。

ツララ：「——それじゃあ、あとからよろしく」

ユキ：「えと……、そ、それってどういう——」

詳しいことを聞こうと思ったタイミングにはツララ先輩がオフラ

インになっていた。

「あつ……。もういなくなったんだ……」

——ツララ先輩は相変わらずだな……。

思わず苦笑を浮かべてしまう。

さて、それじゃあ僕があとすることは……。

「ココママたちに連絡を返しておかないと……。ってゆ、ユイとは一緒に風呂には入らないからね!？」

ログを遡って見つけてしまったユイのコメント。

それに思わずツツコミを入れてしまった。

「おっと、それどころじゃないね。みんなにチャットを返していかないと……」

それから僕はオンプ先輩が朝食で呼びに来るまでの間、ずっとチャットを返し続けるのだった——。



「ユキくんは朝はご飯で良かったですか？ その……、パンが良いなら準備させますけど……」

「えとえと、パンで大丈夫……ですよ？ それよりもあの……、えつと、その——」

「(ぱくぱく……)」

不安そうな表情を見せるオンプ先輩の隣で僕は苦笑を浮かべながら隣を見ていた。

そんな僕たちの隣で黙々とご飯を食べている長い黒髪の小柄な少女。

「そ、その……、オンプ先輩の妹さん……ですか?」

「あ、あははっ……。ち、違いますよ。その子は三国みくににしいな権名ちゃん。えつと、この子もシロルー——」

「——ユキを拾いに来た」

簡潔に理由だけ言ってくる少女。

その雰囲気はまるで——。

「も、もしかしてツララ先輩ですか!? ど、どうしてツララ先輩がここにいるのですか!?!」

「——拾いに来た?」

「そ、それだけじゃ分からないですよ!?!」

「えつと、あははっ……。なんか急に来たんですよ、椎名ちゃん。私は朝ご飯と一緒に食べに来たとばかり思ったんですけど……」

「——ユキがオンプの家にいると言った。だから拾いに来た。それだけ……」

「ひ、拾わなくても……、そ、その、普通のコラボをするんですよ?」

「——ユキはオフ限定でしょ? いつもオフしてる……」

「ち、違いますよ!?!? 僕は普通のコラボでも……。えつと、べ、別にコラボなしでも良いんですよ!?!?」

「——今日オフコラボする。もう宣伝した」

ツララ先輩はカタッターの画面を見せてくる。

氷水ツララ @turara korimizu 3時間前

犬拾いに行く #氷雪

@1, 387 ? 1万 ♡ 1. 5万

「えっ!? こ、これって、もしかしてコラボの——?」

「——ユキがオンプの家拾いに来てっていったから拾いに来た。このままコラボ。……OK?」

「全然OKじゃないですよ!? ……ま、まあ、コラボはする予定でしたし、僕の心の準備以外はできてますけど……」

しかし、僕の言葉を気にした様子はなく、ツララ先輩はそのままオンプ先輩の方を向いていた。

「——オンプはどうする? 入る?」

「私は今日、自分の杵を取ってますので残念ですけど……。次こそはつよつよな姿をユキくんに見せないといけませんので、猛特訓杵です!」

オンプ先輩は両手をギュツと握りしめて気合を入れていた。

その姿が逆に微笑ましくて、思わず笑みを浮かべてしまう。

「——そう」

「そ、それじゃあ、僕も自分の杵を——」

こっさりその場から離れようとしたけど、すぐにツララ先輩に腕を掴まれてしまう。

そして、少し涙目になりながら上目遣いをしてくる。

「——ユキは拾って帰る。ユキは杵取ってないから。それとも私じゃ嫌? 私のこと、嫌い?」

その言葉に僕は一瞬言葉に詰まってしまう。

「うっ。そ、その、嫌でも嫌いでもないですよ? で、でも何で僕の杵を確認してるのですか!?!」

「えっと……、一応配信予定は流れてますからね……」

オンプ先輩が苦笑を浮かべていた。

すると、ツララ先輩はしてやったり、と言った感じにドヤ顔を見せながらピースをしていた。

「——メンバーの分はチェック済み」

「ぼ、僕も確かにチェックしてるけど……。最近直接見にいけなくて切り抜きになっちゃってるかも」

「——それじゃあ、ユキは拾っていくわね」

逃げ場のなくなってしまった僕は観念して、がっかり肩を落としていた。

「ううう……。わ、わかりました。で、でも、そ、その……。怪しいところには連れて行かないでくださいね？」

「——私が気持ちいいことをしてあげる」

「や、やっぱり僕帰る——!!」

艶やかな表情を浮かべてくるツララ先輩に僕はその場から逃げ出し、そして、すぐに捕まっていた。

その様子にオンプ先輩は笑みを浮かべる。

「ふふっ、これじゃあどっちが女の子かわからないですね」

「ぼ、僕は男ですからね!」

「——どっちでも構わないわ」

「ぼ、僕が構うんですよ!」

「あ、あははっ……。が、頑張ってくださいね」

苦笑をするオンプ先輩に見送られて、僕はツララ先輩の家へと向かっていった。

——僕が家に帰れるのはいつになるのだろうか？

◇◇◇

『《#氷雪》犬を拾ったわ《氷水ツララ／雪城ユキ／シロルーム》』

2. 3万人が待機中 20XX／07／19 20:00に公開予定

☒412 ☒0 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：ユキくん拾われたw

：こんわふー

：こんつららー

：今日は段ボールだなw

：ユキくんで会話になるのか？

配信画面の中央には既に僕の段ボールがポツンと置かれている。

それ以外には特に何も置かれていないので、逆に孤独感を味わってしまう。

——実際に僕がそこにいる訳じゃないのに……。

そして、段ボールはまるで無関係と言わんばかりに画面の端から僕たちの姿を表示させるツララ先輩。

蒼銀の少し長い髪。青いぶかぶか気味のワンピースを着た小柄な少女であるツララ先輩。

茶色の少し長い髪。白のワンピースとその上から黄色の犬耳付きフードパーカーを着た標準タイプのユキくん^{ほく}。

小柄な二人が並ぶと、かわいさのあまり思わず微笑んでしまっていた。

しかし、そんなかわいさとは裏腹にツララ先輩の一言はとても強烈なものだった。

ツララ：『——来たわよ』

腕を組み、それ以上何も言うことはないといった感じに目を閉じていた。

——まさかいつもこんな感じの配信なの？

そういえばツララ先輩はあまり口数が多くなく、よく喋るタイプではなかった。

だからこそ、僕が頑張る必要があるそうだった。

『ちよ、ちよつとツララ先輩!! じ、自己紹介から始めないと!!』

僕の言葉を聞いたツララ先輩が仕方なさそうに口を開く。

ツララ：『——氷水こおりみずツララ』

『そ、それだけですか?』

ツララ：『——何か問題でも?』

『えと……、な、何もありません……』

僕は思わず苦笑いを浮かべてしまう。

【コメント】

：つらたんの圧w

：隠れる段ボール取られてるから逃げられないw

：問題しかないw

：ユキくんがんばれw

『わ、わふわふっ。こ、今度は僕の番ですね。そ、そのその、僕は三期生の雪城ユキです。き、今日は、と、突然拾われちゃいました。えとえと、ぎ、雑談の配信になるのかな？ が、頑張っつていきますー！』

ツララ：『——頑張らなくても良いわよ』

僕の決意は一瞬でツララ先輩に否定されてしまう。

『えっ!? で、でも——』

ツララ：『——私が拾ってきたのだから、私に任せておくと良いわよ』

『っ、ツララ先輩……』

そっぽを向きながらなんとか先輩らしいところを見せようとしてくるツララ。

そういえばアーカイブで見たココネとのコラボの時もこんな感じだった気がする。

つまり、僕はツララ先輩に頼る形で配信を進めていけばいいわけだね。

ツララ：『——飼い犬の面倒はしっかり見る。お手』

『わふっ！』

言葉につられてツララ先輩の手に自分の手を乗せていた。

ツララ：『——お座り』

『わふわふっ』

僕はその場に座り込もうとすると、ツララ先輩が無理やり自分の膝に座らせてくる。

『つ、ツララ先輩!?!』

ツララ：『——飼い主の言うことは絶対。次はちん……』

『そ、それは言ったらダメですよ!?!』

なんとか危険なワードを言われる前に言葉を挟むことができた。

ツララ：『——別に変な言葉じゃないのに……。ちん……』

『わ、わふっ!?! だ、だからダメですよ!?! そ、それより最初は何をしますか??!』

ツララ：『——マシユマロを読んでいくわ』

【コメント】

：つらたんが先輩らしさを

：ユキくんも頑張ろうとしてる

：いつまで持つかなw

：ユキくんの犬の姿、かわいい

ツララ：『——「次の歌枠はいつですか?」』

『えっと、これはツララ先輩が答えるべきものじゃ——?』

ツララ：『——ユキが答えると良いわ』

『ち、違いますよね!?! そ、そもそも僕、歌枠なんてしたことないですからね!?!』

ツララ：『——ならするといいわ。明日で良いかしら?』

問答無用に僕の放送内容を変えようとしてくるツララ先輩。

速攻で僕は反論していた。

『よ、よくないですよ!?! そ、そもそも僕、人前で歌うのはその……に、苦手で——』

ツララ：『——人がいるって考えるからダメなのよ』

『そ、それならツララ先輩。う、歌を教えてください……』
ツララ：『——うっ』

僕が上目遣いで頼むとツララ先輩は息を詰まらせていた。

【コメント】

：ユキくんナイスw

天瀬ルル：ユキ先輩の歌、楽しみ

：当たり前のようにルルちゃんがいて草

《：？5, 000 つらたん歌ってー!》

：つらたんとユキくんのコラボ歌枠か

『ちよ、ちよっと待って!?! ぼ、僕は歌は下手だからその……あの……!?!』

ツララ：『——仕方ないわね。ユキがどのくらい歌えるかも知りた
いから、マシユマロ終わったら何曲か歌う?』

『えとえと、い、いいのですか? その……、無理に歌わせることにな
って——』

ツララ：『——仕方ないわよ。コメント欄を見るとわかるわ』

ツララ先輩に促されるまま、僕はコメント欄を確認する。

【コメント】

《：？500 歌楽しみ》

：わくわく

《天瀬ルル：？10, 000 ユキ先輩の歌代》

：どんな歌を歌うのかな?

《：？1, 000 投げろ。つらたんが歌うには金がある》

《：？500 投げ時か》

《：？2, 000》

《：？1, 000》

『わわっ、こ、こんなにたくさん……。み、みんな無理しないで——』
ツララ：『——どんどん投げると良いわ』
『そう、どんどんと……。つて、そんなこと言ったらダメですよ!? 本
当にたくさん来ちゃいますから……。み、みんな、無理をしたらダメ
だからね!』

僕が慌てて停止を促す。

すると、スパチャの勢いは更に加速していた。

【コメント】

《：?1,000 ユキくん心配してもらえんなら》

《天瀬ルル：?20,000 ユキ先輩に頼まれたら投げるしかないで
すよ》

《：?500 投げろー》

《：?10,000 飼育代》

《：?5,000 カラオケ代》

《：?3,000 教育費》

『わわっ、さ、更に加速した!?!』

ツララ：『——なるほどね。あそこは引いた方がお金になるのね。
勉強になるわ』

『つ、ツララ先輩も冷静に分析してないで助けてくださいよお!?!』

ツララ：『——大丈夫よ』

ツララ先輩の自信たっぷり声。

さすが僕とは配信歴が違うだけあって頼もしい。

ツララ：『——私はいくらもらっても困らないわ!』

『歌!! 歌行きますよ!! さっさと歌ってしまつてこの枠閉じましよ
う!!』

ツララ：『はっ!? なるほど、今から一日歌い続けたらお金の山が……。——ユキ、侮れないわね』

『そ、そんなこと考えてないですよ!? は、早く歌を——』

ツララ：『仕方ないわね。それじゃあ、いつもみたいにリクエストをスパチャで……。』

『ふ、普通のコメントでリクエストを書いてください。そ、その、変なことはしないでください……。』

ツララ：『スパチャは変なことじゃないわよ?』

『ぼ、僕の体を持たないですよ!? 十分に変なことです!』

ツララ：『仕方ないわね。それじゃあ、普通に投げてくれたら良いわ。適当に拾って歌っていくから』

第11話：歌うユキくん #氷雪／ふとした疑惑 #
ココエミ

——ううう、本当に僕が歌うの??

少し体を強張らせながら僕は画面をジッと見て固まっていた。
恐怖から小刻みに震えてしまう。

——音痴の僕が人前で歌う?? 今まで誰かと一緒にカラオケとか
に行くこともなかった僕なのに?

動揺のあまり目の前が真っ白になってしまう。
すると、突然ツララ先輩は僕を抱きしめてくる。

『っ、ツララ先輩!?! い、一体何を!?!』

まさかツララ先輩まで抱きしめてくるとは思わずに、僕は驚きの声
を上げてしまう。

しかし、ツララ先輩はいつもと変わらない淡々とした口調で言っ
てくる。

ツララ：『——大丈夫。安心して。楽しんでくれたら良いから……』
『あうあう……、そ、その……、あ、あの……』

今は歌うことの動揺より抱きしめられていることの緊張の方が大
きいのだけど……。

しかし、それに気づいていないのか、ツララ先輩はさらに顔を近づ
けてくる。

そして、すぐ耳元で艶やかな吐息と共に呟いてくる。

ツララ：『ただ歌うだけだよ』

『わふっ?!?!? あ、あの……、その……、ち、近いです。近いですよ……。そ、それより……、い、今のまま歌う……のですか?』

驚きのあまり、顔を俯け、赤く染まつてる顔を隠しながら答えると、ツララ先輩は首を傾げていた。

ツララ：『?? 歌うときはもちろん普通に歌う』

なにかおかしいことを言っているのか、と言わんばかりに飄々と言つてくる。

その態度を見て、僕は乾いた笑みを浮かべていた。

『……ですよね』

さすがにココネやユイみたいにはならないよね。

むしろこの態度が普通だろう。

僕はどこかホツとため息を吐く。

すると、ツララ先輩はすぐに離れてくれる。

ツララ：『——落ち着いた?』

『あ、はい。ありがとうございます。も、もう大丈夫です。が、頑張れます』

僕が大きく頷くとツララ先輩は小さく微笑んでいた。

ツララ：『——それじゃあ頑張つて。歌、適当に入れるから……』

『はいっ!! えっ?? ぼ、僕一人ですか!?』

ツララ：『——ユキがどのくらい歌えるのか見たい』

『そ、それはそうですね……。ううう……。が、頑張りますけど、そ

の……き、期待しないでください。ぼ、僕、歌は本当にダメで……』

ツララ：『——大丈夫。耳塞いでおくから』

『それ、全然大丈夫じゃないですよね!?!?』

ツララ：『——冗談。しつかり聞いておく。でも、ユキは誰も聞いていないと思って歌ってくれたら良いから』

ツララ先輩なりに、自然と僕が歌えるように考えてくれたのだらう。

それなら僕は頑張って歌うしかできない。

『は、はいっ。が、頑張ります!!』

【コメント】

：つらたん、お姉さんしてるね

天瀬ルル：ついにユキ先輩の歌が始まる……

：ルルちゃんは相変わらずw

：ユキくん、気合十分だねw

姫野オンプ：ツララちゃんの歌、好きなのです

美空アカネ：はーっははっ、私参上!!

：シロのメンバーが集まってきたw

：ひめのんがいるから安心だな

：暴走特急がいるせいで抑えが効かないけどなw

『うっ……、な、なんでこのタイミングでみんなくるの……。ぼ、僕の歌は人に聞かせられるものじゃ——』

ツララ：『——始まる』

『も、もう……!?!?』

ツララ先輩が流してきた曲は有名なアニメの主題歌だった。

これならたしかに僕でも歌詞が分かる。しつかり考えて曲を選ん

でくれたようだ。

でも、わかるだけで歌えるとは言っていない。いや、できるだけまともに聴こえるように頑張ろう。

僕は全身で音程をとりながら歌が始まるのを待っていた。

ツララ：『——頑張って』

『は、はい。え、えと……。くく♪（棒読み）』

精一杯歌詞通り、音程通りに歌おうと頑張る。

ただ、慣れていない、ということもあり必死に曲に追いつこうとするだけで精一杯だったが。

【コメント】

：棒読み助かる

：上下に揺れて音程をとるユキくん、かわいいw

：ユキくん……本当に苦手だったんだ……

天瀬ルル：ユキ先輩、とつてもかわいいです。お持ち帰りしたいです。いや、します!!

美空アカネ　：あははっ、棒読みじゃん！ 私と良い勝負だな

姫野オンパ　：とつても頑張りました、なの。可愛かったの

《：？1, 000　頑張れユキくん》

《：？500　歌代》

：かわいい

ようやく一曲歌い終わるとコメント欄では必死に僕を応援するコメントが流れていた。

明らかに音程がはずれていた。

それにどう見ても音痴にしか聞こえない歌。

でも、それでもみんな僕のことを貶めようとはせずに褒めてくれる。

それを見ていると嬉しさもあり、下手な歌を聞かせてしまった恥ず

かしさもあつて自分から段ボールに入ってしまう。
すつぽり頭から隠れてしまうユキくん。
そんな僕を見て、ツララ先輩はため息交じりに言っていた。

ツララ：『歌ってる姿は可愛かったんだけどね。慣れるところから始めましょうか』

『はい……』

ツララ：『そのうちシロルーム全体ライブとかもあるから』

嫌なことを聞いてしまったかもしれない。

基本的に歌うのは歌が得意なメンバーだろうけど、それでも僕自身も歌う必要が出てくるだろう。

段ボールから恐る恐る顔を出して、青ざめた顔をしながら答える。

『が、頑張つて練習します……』

ツララ：『教えられることは教えるから』

『あ、ありがとうございます』

ツララ先輩の優しさに感謝しながら僕は頭を下げていた。

ツララ：『——とにかくまずは歌を楽しむところから。一緒に歌いましょうか』

『は、はい。よ、よろしくお願いします』

ツララ先輩は僕の肩に手を回してくる。

そして、二人で一つのマイクを使い、一緒に歌を歌う。

たじたじとした態度の僕とは裏腹に、ツララ先輩の歌う姿は堂々と
してかっこよく、輝いていた。

僕もあんなふうに堂々と歌えるようになれるかな……。



それから僕は放送の続く限り、ツララ先輩に歌の特訓をしてもらうことになった。

一緒に歌ったり、ツララ先輩に見本を見せてもらったり、僕が一人でもう一度歌ったり――。

それですぐに歌が良くなる訳ではなかったが、前よりも楽しく歌うことができるようになっていた。

最後には歌いながら笑みすら溢れていた。

『こ、これからは僕も歌の枠を開いて練習をしようかな……』

ツララ：『――日頃から練習をしていると上手くなる』

『ツララ先輩も練習をしているのですか？』

ツララ：『――企業秘密よ』

『同じシロルームですよ！?』

ツララ：『――内緒よ』

『えーっ』

おそらく今の歌唱力を保つために練習をしているのだろう。

でも、それを言うのが恥ずかしいから言いたくないわけだ。

それに、置かれている配信用機材。

特に音響関連は機械に強いカグラにも引けを取らないものばかりだった。

――きつと裏ではものすごく練習をしているのだろう。

それを察した僕はそれ以上、無理に聞こうとはしなかった。



『《#ココエミ》憧れの先輩と雑談《魔界エミリ／真心ココネ／シロルーム》』

1. 1万人が視聴中 ライブ配信中

ユキくんたちのコラボが配信されている同時刻。
ココネたちもコラボ配信を行っていた。

エミリ：『みんなー、こんえみりー！ シロルーム四期生、
魔界エミリだよ。今日はなんと憧れの先輩とコラボをすることがで
きたよー。これを機に同期の子と仲良くなる方法を色々聞いてちや
うからねー』

ココネ：『悪魔っ子みんな、こんこー！ 三期生の真心まごころココネで
すよー。今日は可愛い後輩のために一肌脱ぎたいと思います』

エミリ：『えっ、服を脱いでくれるの？ どうしよう……。私、そう
いう趣味はないんだけど……。』

ココネ：『ち、違いますよ!! そんなことをするはずないですよね
!?!』

エミリ：『知ってるよ。だからわざとからかったんだよ』

ココネ：『先輩をからかったらダメですよ』

エミリ：『あははははっ。私はそんなことしないよ。やりそうな同期
の子はいるけどね』

ココネ：『イツキちゃんだね……。』

エミリ：『うん……。そうだね。どうしたら仲良くなれるかな……。』
ココネ：『みんな、十分仲がいいと思いますよ?』

エミリ：『そんなことないよ。フウちゃんは確かに仲良くなるろうと
してくれてるけど、イツキちゃんとルルちゃんは……。ね。どうしたら
ココママ先輩みたいにみんな仲良くなれるの?』

ココネ：『ママじゃないですよー。でも、みんな仲良く……。ですか?
うーん、そこまで私たちは意識したことがないんですよ。意識し
すぎるのが良くないんじゃないですか?』

エミリ：『でも、意識しないとルルちゃんはフラフラっとユキ先輩に
近づいて……。そうだ、ユキ先輩で思い出したんだけど、ココママ先
輩って確かユキ先輩とお泊まりしてたよね? 流石に一人暮らしの

部屋で一緒にお風呂は入らないよね?』

ココネ：『私の部屋だと一人で入るのが精一杯ですね。一人暮らし用の部屋ですから――。でも、小柄なら一緒に入ったりはできるんじゃないかな?』

エミリ：『そ、そうだよ。うん、普通に考えて一緒にお風呂に入るなんて無理だよ。いくら尊敬している先輩と一緒に、でも』

その一言で誰のことを言っていたのか、ココネにはわかってしま
う。

ユキくとルルちゃん。

流石に異性同士で一緒にお風呂に入るのは良くないと思っ
てしま
う。

ユキくんは小柄だし、ルルちゃんも小柄。

少し広めのお風呂なら入ることはできる。

そして、エミリも同じことを考えていた。

(ルルちゃんが男の娘だし、流石に女の子のユキ先輩と一緒にお風呂に入るのはまずいよね。どう考えてもおかしいよね? そもそも私たちと先に入るのが筋だよ?)

全く同じことではなく、少し黒い部分が見え隠れしていた。

そして、無意識まじりに、コツコツ……、と机を叩いていた。

【コメント】

：でたw

：台パン助かるw

：ルルちゃん大好きだもんねw

ココネ：『え、エミリちゃん……、そ、その……、机を叩いてますよ

……』

エミリ：『あつ……、え、えへへつ……。た、叩いてないですよ。タ
イピング音ですよ。あははっ……』

ココネ：『全然タイピング音には聞こえなかったけど……』

エミリ：『嫌だなあ。ココママ先輩の聞き間違いだよ。まだ耳が遠
くなるには早いよ』

ココネ：『わ、私、そんなに年取っていません!!』

エミリ：『そ、そうだよね……。えっと、ご、ごめんなさい……』

ココネの言葉から発せられた圧にタジタジになりながらエミリは
素直に謝っていた。

【コメント】

：真面目なココママだ

：エミリンもそこまで暴走してないね

：なんで真面目に議論してるんだろう？

：ユキさんとルルちゃんが一緒にお風呂に入っただけ……だよな？

……羨ましかったんだろうな

エミリ：『べ、別に羨ましいわけじゃないからね!』

ココネ：『羨ましい……。うん、そうなのかな?』

エミリ：『こ、ココママ先輩!』

ココネ：『エミリちゃんもそうですよね? 同期の子が自分たちよ
り先輩と仲良くしてるのが羨ましくもあって、悔しくもあるんですよ
ね? 本来なら自分たちが一番長い時間、苦楽を共にしてるはずなの
につて——』

エミリ：『そ、そういうわけじゃ……。ううん、違うね。多分そうな
んだろうね』

ココネ：『あははっ、自分の気持ちってよくわかるようでわからない
ですよね』

エミリに言いながらもココネは自分の考えを頭でまとめていた。

——私もユキくんが異性だから……とか、考えすぎてたかもしれないですね。ユキくんはユキくん、私たちは仲間なんですから。それにユキくん……って考えると一緒にお風呂に入ってもなにもおかしくないですからね。もしかして、ルルちゃんもそれがわかって一緒に……？

ココネ：『なるほど……。私もまだまだですね』

エミリ：『……?? どういうこと?』

ココネ：『ルルちゃんはすごいってことですよ』

エミリ：『もちろんよ! ルルは私の同期だからね!』

嬉しそうに、得意げに言ってくるエミリ。

ココネ：『私ももつと腹を割って話さないといけませんね。ユキくんと、同じお湯に浸かりながら……。今度温泉に行くのでせっかくですし、突撃しちゃいましょうか』

エミリ：『それはいいね。大浴場なら一緒に入ってもおかしくないもんね』

ココネ：『エミリちゃんもせっかくですし、四期生全員で旅行に行つてはどうですか? 仲を深めるきっかけになるかもしれないですよ』

エミリ：『それいいね。早速みんなに提案してくるよ!』

ココネ：『えっ!?! い、今ですか!?!』

エミリ：『もちろん。善は急げだよ! あっ、場繋ぎをよろしく!』

ココネ：『えっ!?! わ、私が……ですか!?!』

ココネが驚いている間に、エミリは姿を消してしまった。

ココネ：『えとえと、一人になっちゃいました。ど、どうしましょうか? 一人でできること……、う、歌でも歌いましょうか?』

【コメント】

・ココママの歌だー！

・わくわく

・そういえばユキくんも歌ってたよ

ココネ：『ツララ先輩とコラボしてましたもんね。私も後からゆっくり見たいと思ってますよ』

歌の準備をしながら、ココネは微笑んでいた。そこに少し悩んでいたココネの姿はなかった。

第12話：シロルーム遊び合戦ポンぽこ

軽く話したただけで決まった今まであまり絡んだことのない四人でのコラボ。

僕と猫ノ瀬先輩、貴虎先輩、あとはフウちゃん。

普段だと絶対に考えられないメンバーでのコラボはどう転ぶのか全く予想がつかなかった。

そんな相手だから配信内容を決めるチャットにも緊張しながら入っていた。

——うう……、本当は逃げたいんだけど……。

しかし、後輩のフウちゃんがいる中で流石に逃げるという選択肢を選ぶわけにもいかず、不安に思いながらチャットに参加する。

ただ、僕の心配はすぐさま杞憂に終わっていた。

いや、それは新たな心配事の幕開けでもあったのだが——。

タマキン：「うにゃー！ コラボは絶対に二十四時間耐久バトルがいいのにゃ!!」

幸運トラ：「おっ、いいな。一切寝ずに血で血を洗う対決をするんだな。これぞ合戦だ!」

ユキ犬姫：「い、色々とおかしいですよ!?!」

ポンぽこ：「そ、その……、それより、ふうの名前がおかしくなってるんですけど……!」

暴走する先輩二人とそれを宥める後輩二人。

普通、この逆なんじゃないのかと思いつながら、反論をしていく。

タマキン：「にゃにゃ、そこはほらっ、配信中以外は語尾付けないからにゃ。個性がなくなると思って代わりに付けておいたのにゃ! 褒めてほしいのにゃ!」

幸運トラ：「確かにこれならわかりやすくして良いな！俺がユキ犬姫を救ってやる！」

ユキ犬姫：「わわっ、僕の方もいつの間にか変わってる!? それに僕は救われる側なのですか!? おかしいですよね!? 普通、僕は救う側のはずですよ!?!」

タマキン：「んにゃ?? 何がおかしいのかにゃ?」

ユキ犬姫：「えーっ、お、おかしいですよ!?!」

ポンぽこ：「ユキ先輩はその……、可愛いですから、さらわれちゃう気持ちわかります」

ユキ犬姫：「ふ、フウちゃんまで……」

味方が誰もいなくなり、思わずその場で手をついて俯く。

幸運トラ：「魔王タマキンにさらわれたユキ犬姫を救うため、勇者タイガとペットの狸が魔王に挑む！耐久のタイトルはこれでいいんじゃないか!?!」

タマキン：「採用にや!!」

ユキ犬姫：「か、勝手に決めないくださいよ!? 配信内容と全く関係ないですよね!?!」

ポンぽこ：「え、えと……、タグは#シロルーム遊び合戦ポンぽこですよね!?!」

タマキン：「《#シロルーム遊び合戦ポンぽこ》タマキンにさらわれたユキ犬姫を救うため、勇者タイガとペットの狸が魔王に挑む! 《猫犬vs虎狸》で決定なのによ!」

ユキ犬姫：「えー……、い、嫌ですよ。それだと本当に僕、お姫様役になっちゃうですよ……」

幸運トラ：「えっ? ダメなのか? もうカタッターに予告したぞ?」

ポンぽこ：「ふえ!?!」

ユキ犬姫：「えっ!?!」

僕とフウは驚きの声を上げ、そして、慌てて貴虎先輩のカタツターを見に行った。

貴虎タイガ@シロルーム二期生 @taiga_kitora

3分前

明日のコラボ配信、タイトルが決まったぞ！

【#シロルーム遊び合戦ポンぽこ】タマキンにさらわれたユキ犬姫を救うため、勇者タイガとペットの狸が魔王に挑む！《猫虎vs犬狸》
魔王タマキンを倒すためにみんなの力を俺に分けてくれ!!

@16 ? 1, 571 ♡ 2, 475

既にかなり拡散された後だった。

ほとんど時間が経ってないのに……。

思わず僕はガツクリと手を地面についていた。

タマキン：「なははははつ、もう覚悟を決めるしかないのにや。悪役令嬢ユキ犬姫の誕生にや」

ユキ犬姫：「ぼ、僕、悪役でも令嬢でもないですよ……」

ポンぽこ：「ユキ先輩はまだ人なだけマシですよ……。ふうはペット扱い……ですから」

幸運トラ：「友達はボール！ 喰らえ、今必殺の狸ボール!!」

ポンぽこ：「えっと、ふうも魔王様側に付いて良いですか?」

幸運トラ：「くっ、最愛のペットにも裏切られて、逆境からのスターとか！ 萌えてきたー!!」

ユキ犬姫：「誤字ってますよ。それだと変な意味になっちゃいます。それに今日は色んな遊びをするんですよ？ トランプとか色々な遊びが入ったゲームで。三対一だと勝負にならないですよ!?!」

タマキン：「んにや。確かに勝負する種目次第だと、三対一でも厳しいのにや」

ユキ犬姫：「えええええ?!?! そんなに貴虎先輩って強いのですか?」
タマキン：「世の中、強い強くないの尺度で測れない、頭のおかしい

トラがいるのにや。実際に戦ってみたらわかるのにや」

僕的には猫ノ瀬先輩の方が謀略に秀でていたので強いと思ったのだけど、意外な力の差があるようだった。

幸運トラ：「今日こそは勝ーーっ!!」

ポンぽこ：「って、いつも負けてるんじゃないですか!？」

タマキン：「やはははっ、相手の出方がわかるならそれに合わせて戦うだけなのにや」

ユキ犬姫：「黒い……。黒すぎますよ、猫ノ瀬先輩」

タマキン：「にゃっはっはー、魔王タマキンは伊達ではないのにや!」

ポンぽこ：「ううう……。ど、どっちについても恐ろしいです……。

——あれっ?? えっと、貴虎先輩?」

幸運トラ：「どうかしたのか? 一騎打ちなら喜んで乗るぞ!」

ポンぽこ：「ち、違いますよ!?! そ、その……。これだとふうとユキ先輩が猫ノ瀬先輩と貴虎先輩に挑む形になってますよ!?!」

ユキ犬姫：「えっ?? あっ、本当だ……」

タマキン：「にやははっ、もう告知してしまったから仕方ないのにや。勇者と魔王が手を組んで姫とペットを討伐するのにな」

幸運トラ：「タマキとペアか。何も考えなくてもいいから楽だな!」

ポンぽこ：「こ、これって勝ち目があるのですか……?」

ユキ犬姫：「あ、あははっ……。そ、その、善戦したと言われるように頑張ろう……」

ポンぽこ：「……ですよね。精一杯頑張らせてもらいます」

タマキン：「にやははっ、かかってくるといいのにな。蹂躪してやるのにな!」

こうして、どう見ても負け戦にしか思えないメンバー分けで勝負をすることになってしまった。

ただ、今のままなら惨敗することが目に見えていた。

だからこそ僕は個人チャットでフウちゃんに連絡を入れていた。

ユキ犬姫：「こ、このあとって時間あるかな？」

ポンぽこ：「このあとは……はい、大丈夫です。空いてますね」

ユキ犬姫：「それなら一緒に練習しない？　せ、せめて善戦できるよ
うに……」

ポンぽこ：「それもそうですね。わかりました。枡の準備もしてお
きますね」

ユキ犬姫：「えとえと、配信枡まではとらなくても——」

ポンぽこ：「いえ、きつとみんなも見たいはずですからね」

四期生の中ではまともなフウちゃん。

でも、やはり根っからの配信者のようで見たいなら配信を
考える様だった。

ユキ犬姫：「そ、それもそうだね。うん、わかったよ。それじゃあ一
緒に配信をしようか」

ポンぽこ：「はいっ！　よろしくおねがいますー！」

こうして、突然に僕とフウちゃんのコラボ配信が決まっていた。
予告もないゲリラ配信なのでそこまで人は来ないだろうし、下手な
プレイ動画を配信してしまっても何とかなるだろう。

◇◇◇

『＃シロルーム遊び合戦ポンぽこ前夜祭』練習会ポコ《狸川フウ／雪
城ユキ／シロルーム》

1. 2万人が待機中　20XX／07／24　20：00に公開予
定

☒547　☒0　？共有　≡？保存　…

白のワンピースを着た狸少女のフウ。

ユキ犬姫バージョンのユキくん。

二人並んで仲良く大部分に映し出されたゲーム画面を見る形で表示される。

いつも通り段ボールに入れられていて、いざという時には隠れることができる。

何かあつたら全力で隠れよう。

一応ちゃんと動けるか確かめておくことにする。

フウ 『み、みなさん、こんぽこー！ ふうは狸川フウぽこー！』

今日もたくさん見に来てくれてありがとうー、ポコー!!』

ユキ 『こそこそ……』

フウ 『今日は明日するコラボ配信の特訓をしていくポコ！ あと、今日はユキ先輩に来てもらいました。わざと声を出して存在感をアピールしているユキ先輩、どうぞポコ』

ユキ 『べ、別にアピールはしてないよ!? ちゃんと隠られるか試してただけでその——』

フウ 『いきなり隠れないでくださいポコ！ ううう……、ユキ先輩にはこれがあるんだった。忘れてたポコ……』

フウが必死に僕を段ボールから引きずり出そうとしてくる。

もちろんそんなことで簡単に出て行くほど僕は甘くない。

散々みんなに鍛えられた僕は簡単には段ボール警備員の仕事を辞めることはない。

ユキ 『わふ……、久々にぬくぬく環境なの……』

フウ 『でーてーきーてーくーだーさーいー!!』

ユキ 『大丈夫。顔は出すよ』

段ボールから顔だけ出して話をする。

すると、フウちゃんは呆れ顔を見せてくる。

フウ : 『仕方ないポコね。とりあえずこれで進めていくポコ。それより、ユキ先輩。そろそろ挨拶をお願いするポコ』

ユキ : 『そ、そうだったね。みなさん、こんわふー。シロルーム三期生の雪城ユキです。明日、魔王にさらわれちゃうらしいので、そうならないように鍛えたいと思います。あのメンバーならさらわれるのは僕じゃなくてフウちゃんだと思っただけど……』

フウ : 『そ、そんなことないポコ。ユキ先輩はとっても可愛いから当然なの。それに今もユキ犬姫様ポコなの』

ユキ : 『そんなことないよね？ 子狸さんたちはどう思う？ かわいいフウちゃん、お持ち帰りしたいよね？』

実際に面としてあったことはないけど、今までの配信の様子から、とっても可愛らしい子を想像することができた。

だからこそ、リスナーのみんなに確認を試してみる。

【コメント】

: フウちゃんはかわいいよね

魔界エミリ : フウは私が連れて帰るわよ

: エミリン草

: ユキくんは姫様イメージがすっかり付いちやったもんね

: フウちゃんは姫様って言うより妹だよ

フウ : 『ほらっ、みんなもこう言ってるポコよ』

ユキ : 『うぐっ……、ま、まあ、決まったものは仕方ないもんね。僕も覚悟を決めて返り討ちにするよ。そして、先輩たちを姫扱いしてみせるよ！』

フウ : 『その意気ポコ！』

【コメント】

: 明日の相手って誰だっけ？

：猫と虎だろ？

：勝ち目ないじゃんw

：善戦できると良いねw

魔界エミリ　：フウなら勝てるわよ。私がペアを組もうか？

天瀬ルル　：ユキ先輩とはぼくがペアを組むよ

：ルルちゃんwww

：三つ巴の戦いにwww

フウ　：『明日はユキ先輩とのペアだからね。この役目は他の誰にも渡さないポコ』

ユキ　：『あつ、えつと……、その……、うん。ありがと……』

フウ　：『ち、違うポコよ!?　そ、その、ふうは別にルルちゃんみたいにユキ先輩のことが好きだから、とかそういう意味で言ったわけじゃないポコ!!』

フウが顔を真っ赤にして慌てて否定し始める。
すると、当然ながら反応してくる人たちは出てくる。

【コメント】

天瀬ルル　：ぼくの敵はココママだと思ったけど、フウちゃんだった!?

魔界エミリ　：四期生……。絆……。やっぱりユキ先輩は敵……。

：約二名ほど闇落ちしかかかってるんだけど……

：ユキくんは魔性の犬w

羊沢ユイ：うみゅー、ユキくんはユイのものなの。誰にも渡さないの！

：またややこしい羊が

美空アカネ：そうだぞ。ユキくんもフウちゃんも私のものだ！

：また増えた!?

ユキ　：『ちよつと、ここはフウちゃんの枠だからね!?　僕のところ

みたいなテンションで来ないで……』

フウ : 『あ、あははっ……、ルルちゃんとエミリちゃんにはあとできつく言っておきますね……、ポコ。』

フウちゃんは乾いた笑みを浮かべながら言ってくる。

ただ、その目だけは笑っていないくて、僕にはどこか恐怖すら感じられた。

ユキ : 『お、お手柔らかにね……』

フウ : 『ユキ先輩に、じゃないポコよ!』

ユキ : 『そ、それじゃあ取りあえずゲームをしようか? 今日の特訓だから順番に色んなゲームをしていこっか?』

フウ : 『えっと……、まずは大富豪からポコね』

ユキ : 『ルールはシロルームでいつもしている基本的なもので良いよね?』

フウ : 『明日もそれでするポコね。わかったポコ』

早速僕たちは大富豪を始めていた。

ルールは八切りあり、革命あり、ジョーカー上がりなし……等々で、人数は四人。

勝負は五回で、最終順位が勝敗となる。

みんな平民の最初は配られるカード運が大きく勝敗を作用すると言っても過言ではなかった。

そして、今回僕に配られたカードはいくつかのペアはあるものの飛び抜けて強いわけでもなく、平凡な手札だった。

その辺りは僕らしい。

でも、大富豪は運だけで勝敗が付くゲームでもない。カードを出すタイミング等、戦略性も問われるゲームだった。

ユキ : 『フウちゃんはカード、どうだった? 僕はイマイチだったよ』

フウ : 『ふうもそこまでよくないポコ。下手をすると最下位になるかもしれないポコ』

ユキ : 『最初は運が大きく絡むもんね』

フウ : 『そうポコね。運が大きく——。えっ? 運!?!』

ユキ : 『どうしたの、フウちゃん?』

驚きの表情を浮かべるフウちゃん。

何か問題でもあったのだろうか?

【コメント】

: 運 w w w

: 幸運トラに勝てるはずがない w

: いや、カードで負けてても戦略で勝てばいいだろう?

: 相手はタマキンとのペアだぞ?

羊沢ユイ: ユイが手を貸そうか?

: 勝ち目ないね w

天瀬ルル : ぼ、ぼくも力を貸すよ?

姉川イツキ : お姉さんはフウを抱きしめて癒やしてあげるわ

魔界エミリ : 四期生全員が手を貸すなら私も貸さないわけにはいかないわね

美空アカネ : はははっ、シロルームの裏ボスたるこのアカネ様が手を貸してやろう!

: 暴走特急 w w w

フウ : 『み、みんな……、ありがとう……ぽこ』

ユキ : 『えっと……、裏で結託して挑むのかな? いいのかな、それ……』

僕は苦笑を浮かべながら成り行きを見守っていた。

そして、大富豪の結果はCPU相手に僕が三位、フウちゃんが四位という最高の結果を叩きだし、僕は諦めにも似た表情でみんなの力を

借りることを決めるのだった。

第13話：シロルーム遊び合戦。ぽこ、ぱーとつー

強大な敵である『勇者タイガと魔王タマキ』を倒すべく、僕たちはオフで集まることになった。

実際に配信に上がるのは僕とフウちゃんの二人。でも、裏ではみんなの力を借りることになる。

若干卑怯に思えるかもしれないが、これも魔王と勇者（どちらも自称だけど）という強大な相手を倒すために必要なことなのだ、と自分に言い聞かせる。

勇者でもないただの捨てられた犬（を僕自身が自称。さらわれた姫よりはいいかな）とペットの狸（ペットじゃないポコー!! という声が聞こえてくるが、この際それは聞かないことにする）で相手にするには、たくさんの仲間を集めるより他なかった。

仲間はぐうたら羊と甘えん坊天使と台ドン悪魔、歩く十八禁。あとは暴走特急……。

「フウちゃんはこのメンバーをまとめられるのかな？　僕は自信がないな……」

さすがに配信中だけだとは思うけど、僕とフウちゃん以外は全員が暴走枠。

コウ先輩も呼んだ方が良いかな？

あとは……ココママとか？　カグラさんと呼ぶのもいいかな？

ただ、あんまり人が増えても大変だね……。

今でも七人。既に多すぎる。

しかも、今回集まるのはフウちゃんの家だった。

さすがにこれ以上勝手に増やすのはできない。

あと、人数が集まるので、さすがにココママからもらった服を着ていく。

犬耳フードパーカーと白ワンピース、あとは黒レギンス。完全なユキくんスタイル。

どこからどう見ても可愛い女の子にしか見えない。

……うん、何でだろう。自然と涙が出そうになるのは。

でも、大人数でいるときに下手に僕の性別をバラして問題を起こすべきではない。ただでさえ問題だらけのメンバーなのだから――。

少し緊張しながらフウちゃんの家へと出かける準備をする。

人が集まるなら、と一応お菓子やジュースも準備して――。

◇◇◇

待ち合わせ場所はフウちゃんの家。

時間は予定の一時間前。

――やってしまった……。

フウちゃんの家で待ち合わせなのに、そわそわして早く着いてしまった。

さすがにまだ準備してるところだよな？ 早すぎても迷惑だよな。

いくら何でもこの時間から呼び出すこともできない。

かといって周りは住宅街。

待ち時間まで、この辺りでうろうろとして回るのはどう見ても不審者だ。

警察とかを呼ばれても困る。

見た目的には不審者というより不良学生で、補導される方になるだろうけど、その事実を僕は認めようとはしなかった。

「うーん、どうしようかな……」

どこか喫茶店でも探して入ろうかな、と考えたときに突然声をかけられ、思わず飛び跳ねそうになってしまう。

「君、さっきからこの家を見て何か考え事してるみたいだけど、みくちゃんのともだ……。いとこの小学生??」

ジーンズと少しダボつとした白シャツ、というラフな格好をした、長い癖がかった金髪のお姉さん。

まだ昼前という時間にも関わらずその手には缶ビールが握られており、まるで品定めをされているかのような視線を送ってくる。

さすがに知らない人相手だと緊張してしまう。

しかも相手が日も高いうちから白昼堂々とお酒を飲む相手と考えると尚更だった。

思わずたどたどしい口調で話してしまう。

「ぼ、僕は小学生じゃない……です」

「じゃあ、中学生だ。ちよつと待ってるといい。今ミクちゃんを呼んでやる」

「ぼ、僕、そのミクちゃんって子が誰かわからな——」

全てを言い切る前に、お姉さんはフウちゃん宅の呼び鈴を鳴らしていた。

——もしかして、ミクちゃんっていうのがフウちゃんの本名？

「あ、あわわわっ……。そ、その……。ま、まだ早い——」

勝手に呼び出されてしまつて慌てふためいてしまう。

しかし、それを気にすることなくお姉さんは笑みをこぼしていた。そして、すぐに中から可愛らしい声が聞こえてくる。

「はい、どちらさまですかー?」

「お姉さんだ、お姉さん。開けてくれ!」

「姉姉詐欺かな? 私にはお姉さんはいないし、お断りしてるよー」
「じゃあ、勝手に入る」

問答無用で扉を開けるお姉さん。
鍵はかかつていなかったようだ。

「もう……。今日は先輩たちも来るから掃除をしてるって言ったよね、葵ちゃん……」

すぐに呆れ顔の少女が出迎えてくれる。

明るい茶髪を肩程までに伸ばした小柄な少女。とはいっても僕よりは背が高い。

ベージュのワンピースと黒のレギンスと履いた可愛らしい子。

そして、その子が隣にいた僕のことを見て、不思議そうに首を傾げる。

「えっと、そっちの子は葵ちゃんの知り合い?」

「お姉さんは知らないわよ。ミクちゃんの家の前で困ってたから、ミクちゃんの親戚なのかなって」

「うーん、会ったことはないかな? それにその犬フードはまるでー」。そういえば、アーカイブでユキ先輩そっくりな服装をしてるって……。ま、まさか!? も、もしかして、ほ、本物のユキ先輩ですか!?

少女は僕の容姿や衣服をじっくり眺めて、ハツとした表情を浮かべ、慌てて確認してくる。

「わわっ、こ、ここはその……、そ、外だから……。って、良いのか。僕の名前は祐季だし……」

一瞬慌てたものの、名前だけだと問題ないことにすぐ気づいた。

「ほ、本当に祐季先輩だったんだ……。えっと、私より年下……。ってことはないよね？」

「お姉さんは中学生くらいだと思ってるわよ？」

「えとえと……。その……」

僕は周りに人がいないか、不安に思いながら確認をする。

すると、ミクちゃんと言われた少女も僕が何を気にしているか、気づいたようだった。

「と、とりあえずここで立ち話もあれですから中に入ってください。そ、その……。ち、散らかっていますけど……」

「ううん、ごめんね。こんなに早く来ちゃって……」

「いえ、大丈夫ですよ。では、こちらにどうぞ」

少女に案内されて部屋へと移動する。



ミクちゃんの部屋は可愛らしい小物やぬいぐるみがたくさん置かれた少女らしい部屋だった。

どこか良い香りもする気がする。

部屋を見た瞬間にそんなことを思ったが、実際に香ってくるのは葵ちゃんと言われたお姉さんが持っているビールの匂いだった。

「あつ、葵ちゃん!? また昼間からビールを飲んで……」
「これはビールじゃないわよ。ただの黄金聖水よ。体が癒やされる魔法の薬よ」

少し頬を赤めながらとんでもないことを口にしてくる。
それを聞いたミクちゃんは顔全体を真っ赤にして、慌てて葵の口を押さえていた。

「葵ちゃん!! 今は私と二人じゃないから!! ほらっ、高校生……じゃない。ユキ先輩がいるからダメだよ!!」

「ぼ、僕は大学生だよ!?!」
「ふえっ!?!」

「あらっ、こんなにかわいい子が大学生のはずないわよ」

お姉さんに捕まってしまう。

そして、頭をなでなでと撫でてくる。

「わわっ、や、やめ……」

「シロルームはかわいい子が多いからお姉さん、眼福だわー」
「触ってる。触ってるから……」

「あ、葵ちゃん!? せ、先輩になんてことを!?!」

「ふにふにで柔らかい……。ユキ先輩が人気なのが良くわかるわね」
「は、離して……」

「葵ちゃん、ユキ先輩を離さないと怒るよ!?!」

ミクちゃんは頬を膨らませて葵を睨んでいた。

ただ、その姿は端から見ても可愛らしく、葵には逆効果だった。

「ミクちゃんも可愛いわ。お姉さんがなでなでして上げよう」
「したらダメだよー!!」

「あつ、やっと逃げられた……」

ようやく葵から離れることができた僕は一旦距離を開けて、警戒心を露わにする。

「もう、葵ちゃん！ 本気で怒るよ？」

「あー、わかったわよ。はいっ、これでいいかしら？」

葵は残念そうにミクちゃんを離す。

「ふう……、やっと離れてくれた……。そ、それじゃあ改めてそれぞれ自己紹介をしましょうか。まず私は狸川たぬがわフウこと立木たつき未来美みくみです。そ、その……、よろしくおねがいします」

未来美が恭しく頭を下げてくる。

「次はお姉さんね。お姉さんは宇多うたの野葵あおいよ。エロと百合をこよなく愛する姉川あねがわイツキとはお姉さんのことよ」

グビツと缶ビールをあおる葵。そのままあぐらをかいて座っていた。

ただ、ダボつとした服のせいで、見えてはいけないものが見えてしまいそうで、僕は落ち着かなかった。

「おやおやー？ お姉さんの下着ブラが見たいのかな？ 思う存分に見るといいよ」

「も、もう、葵ちゃん!! そんなことをしたらダメでしょ!!」

「問題ないわよ。だって女同士でしょ？」

「それはそうだけど、女同士でもダメなものはダメです!!」

未来美は必死に抵抗をしていたが、茜は飄々とした態度をとって

た。

——流石にこの状態で僕が男だって話ができないよね。

僕はその様子を苦笑いで浮かべて見守ることしかできなかった。

「つて、あれっ？ お姉さんがイツキちゃんだったんだ……」

ただの顔馴染みかなと思っていたけど、言われてみたら確かにイツキの性格そのものだった。

「お姉さんの溢れ出る魅力は隠しきれないわよね？」

「はいはい、溢れ出てるよ。それでユキ先輩はなんてお呼びしたら良いですか？」

「あつ、そ、そうだね。うん、僕は小幡祐季だよ。……だから、ユキ先輩のままで大丈夫かな？」

「あつ、そうなんですネ」

「年下の小さな子を先輩呼び……。はあ……。はあ……」

「はいはい、葵ちゃんはちよつとゴミ箱にでも入っててくれるかな？」

「ゴミ箱。プレイなんてなかなか高度なことをしてくるわね、ミクちゃん。良いわよ、望むところよ」

「えっ、望んじやうんだ……？」

以前アカネ先輩が全力で拒否していたのは覚えているけど……。

「全く、やるなら一人でしてね。それよりもユキ先輩……、私と同じ歳ですか？ 私は今大学一階生ですけど」

「それなら僕の一下だね」

「あつ、そ、そうなんですネ。それじゃあ、やっぱりユキ先輩で」

少し驚きの表情を浮かべていた未来美。

彼女も僕の年齢を疑っていたことがよくわかる。

「そっか……。仲が良いなって思ったけど、元々二人は顔馴染みだったんだね」

「そうなんですよ。私が配信するきっかけになったのが、葵ちゃんです」

「もうお姉さんが産んだも当然ね！」

「ええ、私がいるのは葵ちゃんのおかげ——」

途中で言い淀む未来美。

そして、ポカポカと葵を叩き出す。

「もう、葵ちゃん！ だから話の腰をおらないで！」

「はっはっはっ、それもお姉さんにとったららご褒美だ！」

「あ、あははっ……。二人は仲がいいんだね……」

思わず苦笑いをしてしまう。

すると、未来美は顔を赤く染めて、慌てて否定してくる。

「ち、違いますよ!! わ、私は普通ですからね!？」

「お姉さんも普通よ? 普通に可愛い女の子が好きだけよ?」

「葵ちゃんは全然普通じゃないですよ! ……いい、良いところもあるんだけどね」

「ミクちゃーん!!」

「わわっ、だ、だから抱きつかないで!!」

「あははっ……」

——本当にこの状態でコラボなんてできるのだろうか？

僕は不安を隠しきれず、苦笑を浮かべていた。



漫才のようなやりとりを終えた後、未来美が座布団を持ってきてくれる。

「ご、ごめんなさい。ずっと立たせたままです……。これに座ってください」

「気にしなくて良いよ。ありがとう」

僕は早速部屋の隅に座布団を敷こうとして、葵に止められてしまう。

「ユキ先輩は今日の主役よ。そんな隅に座らないで真ん中でドンとあぐらをかいてくれてもいいのよ?」

「ほ、僕はその……。隅の方が落ち着くから……」

特に今日は人がたくさん集まる。

流石にそんな中で目立つ場所を陣取るなんて僕にできるはずもなかった。

ただ、今回に限って言えば未来美も葵の味方をしていた。

「ユキ先輩はそんな端にいかないでここに座ってください!」

せっかく端に置いた座布団を部屋の真ん中へと移動させる未来美。

「そ、そんな……。それじゃあ、せめて段ボールを——」

「さすがにうちには段ボールはないですよ……」

「お姉さんも持ってないわね」

「ううう……。これじゃあ味方に囚われてるも同然だよ……」

「大丈夫ですよ、ユキ先輩! 今日さらわれたお姫様の設定になっていますから!」

「それ、何のフォローにもなっていないからね!？」

「はっはっはっ、お姉さんがお持ち帰りしてあげよう」

「き、今日は拾うの禁止だからね!？」

葵のポケを返すのに必死になってしまう。

普段からこうして鍛えられてるから四期生の濃いメンバーをまとめられるんだろうな。

「それじゃあ、私はもう少し準備をしていますからユキ先輩はくつろいでてくださいいね」

「あっ、僕も手伝うよ!」

どうせ部屋の真ん中に座っていても落ち着かないので、すぐさま立ち上がろうとする。

しかし、未来美は首を横に振る。

「いえ、お客さんにそんなことさせるわけにはいきませんよ! ゆっくりしてください」

「今日の配信は僕とフウちゃんの二人でするものでしょ? なら僕はお客さんじゃないよ。だから手伝うね」

「…断っても手伝ってきますね? わかりました。それじゃあ、手伝ってもらっても良いですか?」

「うん、ありがとう」

「あははっ、お礼を言うのは私の方ですよ。って、あと十分ほどしかない! い、急いで準備しましょう」

「とりあえず僕は座布団を敷いていくね。あとは飲み物とかおやつを買ってきたからそれも出しておくね」

「わ、私は配信の準備をしますね。葵ちゃんは——」

「お姉さんはゴロゴロしてるわ」

「えっ?」

「うん、葵ちゃんはゴロゴロしてて。でも、ちゃんとベッドで寝てよ

ね」

「おっけー」

「それで良いんだ……」

のそのそとベッドへ移動する葵を見て、僕は苦笑をする。
すると、未来美がため息混じりに言ってくる。

「葵ちゃんだと手伝いが逆に邪魔になってしまっくんですよ……」

「ああ……、そういうことなんだね……」

「そ、そんなことないわよ！ 見てなさい。お姉さんがしっかり準備をしてあげるわよー！」

「あつ、それなら葵ちゃんはそのみんなのお出迎えをよろしくね」

「お姉さんに任せなさい！」

嬉しそうに葵は玄関へと向かっていった。

——体良く部屋から追い出されただけじゃなのかな？

そんなことを思いながら僕たちは二人、配信オフの準備をしていくのだった。

第14話：シロルーム遊び合戦ポンぽこ、ぱーとすりー

「よし、こんなところかな?」

「はい、ありがとうございます。ユキ先輩のおかげでみんなが来る前に準備を終わらせることができました」

未来美の部屋には人数分の座布団やコップ。

テーブルの上にはおやつやジュース。

退屈しのぎのトランプ。

さすがにお酒の類は置いていない。

まあ、この部屋の主たる未来美が未成年なので当然だろう。

葵だけはどこからか、ビール缶をいくつか持ってきていたが……。

そして、部屋に置かれたパソコンモニターにはフウちゃん和僕のアバターが映っており、もう一つのモニターはゲーム画面が映し出されていた。

あとはみんなが来るのを待つだけだった。

先ほどと同じ場所に座ると、未来美がそのまま隣に座ってくる。

「今日は頑張りましたよね。罰ゲームを避けるためにも」

「うん。……えっ、罰ゲーム!?!」

さすがにそんな話はしてなかったはずだけど、未来美は当然のように言ってきた。

「はい。シロルームのコラボ対決ならありますよね?」

確かに僕自身は何も聞いていないけど、いつも通りなら何かしらの罰ゲームがあっっておかしくない。

「確かに……、何かあってもおかしくないね」

「なら、こちらから提案するのはどうでしょうか？ 例えば、一週間真面目に過ごしてもらおう……とか」

「うーん、真面目に暴走しそう……」

むしろ普段から真面目にしてる、と言い出してきそうなところが恐ろしいところでもあった。

「……ですよね。その辺りが問題ですよ」

「それはみんなに相談しても良いかもね。せつかくみんな来てくれるのだから——」

そんなことを話していると葵が恍惚とした表情で戻ってくる。

その手には……結坂の姿があった。

荷物のように抱えられた結坂は必死に手足をばたつかせていた。

「うみゅー……!! 離すの……!!」

「はあ……、お姉さんは幸せよ……」

「あ、葵ちゃん!? 知らない人にそんなことをしたらダメ!!」

「ゆ、結坂!? だ、大丈夫!?!」

「うみゅ……? ゆ、ユキくん……。そ、それじゃあ、誘拐されたわけじゃないんだ……」

結坂はほつとため息を吐いていた。

そして、未来美に怒られた葵は結坂を離して残念そうな表情を浮かべていた。

一方の結坂は僕の後ろに隠れて警戒心をあらわにしていた。

……いや、後ろから僕を抱きしめてくる。

「久々にユキくん成分、吸収なのー」

「わふっ!? ぼ、僕はそんな成分出てないよ!?!」

「なら、お姉さんはこつちを……」

「も、もう、葵ちゃん！ ただでさえややこしいのに余計に掻き乱さないでー！」

結坂が加わることで、更に混沌とする。

そんな状況を何とかしようとして未来美が目回しながら聞いてくる。

「そ、それよりもそちらの方はユキ先輩の知り合いだったのですね」

「あつ、そうだった。みんなの自己紹介が必要だね。この二人は四期生の狸川フウちゃんこと立木未来美ちゃんたつきみくみと姉川イツキさんうたのあおいこと宇多野葵さんだよ。それじゃあ、ユイも頼んで良いかな？」

一応アバター名の方がわかりやすいかな、とそちらで教えてあげる。

すると、ユイは眠たそうな表情を見せながら両手を挙げる。

「うみゅー！ ユイはユイだよー！ ユキくんの飼い主だよ」

「ち、違うよ!? 僕は飼われてないからね!? えっと、ユイは結坂彩芽ゆいさかあやめだよ。もう、ユイモードになるといつもそんな感じなんだから……」

ため息交じりに、なぜか僕が結坂の紹介をする。

「あつ、ゆ、ユイ先輩だったのですか!? ご、ごめんなさい、葵ちゃんが変な真似を——」

「お姉さん的には問題ないわよ」

「葵ちゃんの行動が既に問題だよ!?」

「うみゅー……、それより、ユイがベッドを使って良いかな？ 配信が終わったら起こしてほしいの……」

「だ、ダメだよ!? ここに寝に来たわけじゃないよね!?」

ベッドに潜り込もうとするユイを慌てて止める。

「うにゆ……？ もう朝なの？」

「ずっと朝だよ!？」

「お姉さんが添い寝をしてあげるわよ？」

「葵ちゃんは余計なことをしないでください!!」

「うみゆー……、狸はうるさいの……」

「私ですか!? 私がおかしいのですか!？」

「えっと……、おかしいのはユイの方だから安心して……」

「すう……、すう……」

「お姉さんも寝ようかしら。よいしょっと」

「だ、ダメー……!!」

同じくベッドに入ろうとする葵を体をはってガードする未来美。

「うみゆ、やっぱりうるさいの……」

「もう……、だからまだ寝る時間じゃないよ……」

「シエスタは良い羊の嗜みなの」

「……初めて聞くよ、その言葉」

「なら、しっかり脳裏に刻みつけておくと良いの」

「嫌だよ……、ユイにしか当てはまらないでしょ……。それよりユイはゲームって得意だったよね？」

「うみゆ。ユイに勝てる人間はいないの」

——あれっ？ 僕の替え玉として結坂に戦ってもらったら勝てるんじゃないの？

一瞬そんな考えが浮かんだけど、すぐに首を横に振って否定する。

「うん、心強いよ。相手が相手だから、僕たちだけじゃ手に余るし……」

「そ、そうですね。どうやっても勝てる気がなくて……。でも、何

もせずに罰ゲームを受けるのは嫌ですし……」
「あらっ、罰ゲームがあるの?」

未来美に抱きついたままの葵が聞いてくる。

「まあ、あるよね? なかったことがないし……」

「うみゅー、きつとユキくんをもみくちやにするつもりなの。そんなの絶対にユイが許さないの!!」

「えっ、僕限定!?! むしろ、それなら可愛い未来美ちゃんが……」

「わ、私よりもユキ先輩の方が可愛いですよ!?! だから安心して生け贄になって下さい」

「お姉さん的にはどっちも歓迎よ。あられない姿のミクちゃんとユキ先輩を見られるのなら」

「ちよっ!?! ど、どうして僕たちが罰ゲームするの前提なの!?!」

「しかも、勝手に罰ゲームを決めてるし……」

呆れ顔の未来美と息を少し荒くする葵。

きつと良からぬ想像でもしているのだろう。

今日会ったばかりなのに未来美がどれだけ苦労してきたのか良くわかってしまう。

だからこそ、僕は彼女の手を掴み、ジッと目を見ながら言う。

「僕にできることがあったら手伝うからいつでも相談に乗ってね」

「えっ!?! ……あっ、はい。あ、ありがとうございます」

キョトンと一瞬呆けていた未来美だが、顔を染めて俯きながら頷いていた。

その表情を見て、僕も照れてしまい顔を俯けていた。

「うみゅー!! ユキくんはユイのものなのー!!」

「ぼ、僕は誰のものでもないよ!?!」

「はははっ、お姉さんは三人ともでも大歓迎だ！」

「葵ちゃんの変なこと言わないで!? そ、それよりも四人いたらとりあえずゲームの練習ができますね。他のみんなが来るまでしてみますか?」

「お姉さんが勝って、三人とも罰ゲームにしてあげるわ」

「ゲームでユイに勝てるはずなの!」

「えっ、な、なんで罰ゲームなんですか!」

「ユイに勝てるわけないよね?」

それから、しばらく僕たちはゲームをしていた。

結果は当然ながらユイの圧勝だった。



「うみゅー、みんな罰ゲームなのー!」

両手を挙げてうれしそうな声を出すユイ。

負けるのは想定通りだけど、まさか運も絡む大富豪で一回も勝てないのは予想外だった。

「この結果なら仕方ないね……」

「でも、ユイ先輩一人を相手に勝てないならこのあとも大変ですよね?」

「そんなこともないよ。たしかに僕たちだけだと勝ち目はないけど、今回はユイの手助けもあるわけだし——」

「それじゃあユイは寝るの。おやすみな……」

再び布団に戻ろうとするユイの後ろからしがみついて、それを止める。

「だ、ダメだよ!? ユイだけが頼りなんだからね……」

「ユキくんから抱きしめてくれるの、初めてなの。仕方ないから協力するの」

ユイはうれしそうに布団に入ろうとするのをやめてくれる。

そのユイの言葉で僕は顔を真っ赤に染めて、慌てて離れようとする。

しかし、僕の手をがっちり掴んで離してくれない。

「あ、あの……、ユイ?？」

「うみゅー、ユキくんへの罰ゲームは決まりなの。今日一日、犬語で喋りながらユイを抱きしめるの。たまに愛を囁いてくれるとユイが喜ぶの」

「えっ!? い、犬語?! わ、わふっ?! こ、これでいいのかな?」

「うみゅー……、語尾が足りないの。ちゃんと語尾には『わん』って付けるの!」

「わ、わん?! わふっ?!」

「うみゅ、それでもいいの。今日一日はそれなの」

「そ、そんな……。わふう」

つまり今日の配信はずっとこれを言わないといけないの?

ううう……、凄く恥ずかしいんだけど……。

いや、よく考えるとあまり喋らなかつたらいいのか。うん、それでいこう。

問題が解決された僕は一応カタッターに罰ゲームを受けた報告をする。

これをしておかないと僕はただ、犬の真似をする変な人扱いされてしまうから……。

雪城ユキ@今日一日犬語 @yuki | yukishiro 今

わふう……。ユイたちとオフでゲームをして負けちゃったわふっ。

罰ゲームで今日一日、犬語で話さないといけなくなつたわふう……。明日には元に戻るから気にしないで欲しいわふ。

ふう……。これでよし。

やるべき仕事を終えた僕は額の汗を拭っていた。すると、速攻でシロルームメンバーからのリップが付きまくる。

天瀬ルル@シロルーム四期生 @rururumase 今
すぐ見に行きます！

真心ここね@シロルーム三期生 @kokonemagok

Oro 今

ユキくん、かわいいですよ。もふもふしてあげます

羊沢ユイ@シロルーム三期生 @YuiHitsuzisaw

a 今

ユキくんはユイが飼ってるの。

美空アカネ@天才美少女 @AkaneMisoro 今

はははっ、犬姫は私のものだ！

猫ノ瀬タマキ@シロルーム二期生 @tamakinekon

ose 今

これはいいにや。今日の罰ゲームでしばらく犬語で話してもらうことにするの

貴虎タイガ@シロルーム二期生 @taigakitora

今

犬猫の仲だから戦いは必然だったか

姫野オンプ@シロルーム二期生 @OnpuHimeno 今

犬さんと猫さんは仲良しなのですよー

氷水ツララ @turarakorimizu 今

また犬拾いに行く

神宮寺カグラ@シロルーム三期生 @kagurazingu

uzi 今

はあ……、また変なことに巻き込まれてるわね

ちよつと待つて!? み、みんな反応しすぎじゃないかな!?
いや、見なかったことにしよう……。

少し焦りながら僕はカタッターの画面を閉じていた。

「うみゆー……、ユキくんの罰ゲームは決まったとして、あとはポコちゃんといツキなの」

「ぽ、ポコ……ですか!?!」

「お姉さんは何でも歓迎よ。服でも脱いで抱きしめてあげますよ?」

「あ、あははっ……、そ、その、センシティブに引つかからないようにしてね。……わふ」

「うみゆ、イツキは一人我慢大会なの。たっぷり服を着て脱いだらダメなの」

ユイはビシツと指を突きつけながら言う。

——それなら確かにセンシティブに引つかかるようなことはないよね。

ユイのファインプレーに思わず心の中で賞讃の言葉を投げかけていた。

しかし、葵は息を荒くしていた。

「はあ……、はあ……。まさかこのお姉さんに我慢プレーを強要するなんてなかなかハードプレーをお望みなね。可愛い顔をしてドSだなんて——」

「はい、葵ちゃんはそのくらいにしておいてね。ただ、葵ちゃんが着れる服はその……私の家にはないですね。取ってきてくれる?」

「ええ、もちろんよ。ちよつと待つてね」

葵が急いで部屋を出て行く。

そこでようやく場に平穩が訪れていた。

「うみゆー、あとはポコちゃんなの」

「えつと、私はその……フウ……ですよ？」

「なら、今日一日ポコちゃんなの！」

「ふえつ?!?!」

「うみゆー、とつても可愛いの」

「えつと、それはカタッター名とかを今日だけ変える感じかな？」

「……わふ」

「うみゆ。それで自己紹介は『シロルーム四期生、狸動物園のポンぽこポコー!』でいくの」

「そ、それはさすがにその……」

「うーん、それなら最初に元の名前を言わせてあげてほしいよ。せつかく先輩とのコラボなんだから、ほらつ、見に来てくれた人に名前を覚えてもらうためにも——わふ」

「うみゆ、確かにそれはあるの。ユイも最初の頃、お気に入りを増やそうと頑張ってたの」

「僕の場合はその……、どうやってお気に入りを増やさないか考えてただけだね……。わふ」

「えつ、そ、そうなのですか？ でも、ユキ先輩のお気に入り数……、もう四十万近いですよ？」

「えつ!? ああ、ほ、本当だ……。これってまた記念配信の流れになる……よね？ わふ」

僕は頭を押さえて悩みたくなる。

「だ、大丈夫ですよ、ユキ先輩ならあつという間に五十万にも届きますよ」

未来美が両手をギュツと握りしめながら僕を励まそうとしてくれる。

もちろん、それは逆効果だったが。

「どうやったら減ってくれるかな……わふ」

「へ、減らしたらダメですよ!？」

「うみゅー、ユキくんの大好きさんはユイがもらっていくの」

「と、とにかく、挨拶の最初に名前を言ってから、罰ゲームで今日はポコです……でいいよね？ わふ」

「うにゅー、仕方ないの。それで手を打つの」

「ほっ……。あ、ありがとうございます。ユキ先輩」

未来美がうれしそうにお礼を言ってくる。

少しは先輩らしいことができたかな……。

僕は安堵の息を吐いて、自然と未来美の頭を撫でていた。

「うみゅー!! ゆいもゆいも!!」

「ゆ、ユイは関係ないよ!？」

口では呆れ顔になりながらも、結局ユイの頭も撫でていた。すると、その瞬間に部屋に入ってくる三人の影が見える。

「は、離して……。ぼくはユキ先輩に会うために——」

「ルルちゃんは私と一緒にフウちゃんをサポートするの!!」

「はいはい、ルルもエミリもお姉さんがもふもふしてあげるからね」

どうやらイツキが戻ってきたのだが、その腕の中にはなぜかルルとエミリがすっぽり収まっており、ご満悦の表情を浮かべていた。

第15話：シロルーム遊び合戦ポンぽこ、ぱーと
ふおー

「えっと、ルルとエミリさん？」

突然やってきた二人に僕は驚きの声を上げてしまう。

そして、自分の今の格好を見る。

片手でユイを抱きしめながら頭を撫でている。

未来美は恥ずかしそうに僕の顔を見て顔を赤めている。

その状況から何かただならぬことがあったことは容易に想像が付くというもので――。

「ゆ、ユキ先輩!!? な、何をしてるんですか!?!」

「えっ、あつ、こ、これは……」

慌ててユイの頭から手を退けようとするが、それを他ならぬユイが阻止してくる。

「うみゅー、ユキくんはユイのものなの」

「ち、違うよ!?! これはただの罰ゲームだから……わふ」

「むう……、ユキ先輩はぼくのものですよ!?!」

頬を膨らませて、羨ましそうに僕を見てくるルル。

それを聞いて、僕は慌てて反論する。

「それも違うからね!! ……わふっ。僕は誰のものでもないからね!!
……わふっ」

「そうだよ。ルルもフウも四期生のものだよ。ユキ先輩には渡しませ
んからね!」

今度はエミリが参戦してくるが、それは僕にとっては望ましいことだった。

「あつ、うん……。どうぞどうぞ……。わふっ」

迷うことなく差し出すとルルは慌てて反論していた。

「わわっ、ユキ先輩、勝手に渡さないでください!! それにイツキ!! いい加減に離して!!」

「嫌よ! お姉さんには百合が足りないわ!」

当然のように言ってくるイツキ。

もちろんすぐにうなづけるものではないようで、ルルは必死に抵抗をしていた。

「百合ならそこにフウがいるよ! ぼくはもう良いでしょ!? 早くしないとユキ先輩が取られちゃう!!」

「そうよそうよ、百合ならフウちゃんがいるわよ。私はルルちゃんを抑えるから!!」

「それもそうね。みんなお姉さんが捕まえて抱きしめたら幸せ百合空間になるわね。さあ、みくちゃん。お姉さんに飛び込んでくると良いわよ」

みんな暴走するので全く制御が効かなくなっている。

こんな状態を抑えることができるのだろうか?

僕は助けを求めべくユイの顔を見る。

「うみゅー、どうしたの? ゆいたちも同じことをするの? いいの」

「ち、違うよ!? そ、そんなことしないからね!? ……わ、わふっ」

えっと……。本当にこの場を収めるにはどうしたらいいの？

こんな時にコウ先輩がいてくれたら……。とつくづく思えてしまう。すると、そんなときに大声を上げる人物がいた。

「もう、ルルちゃんもエミリちゃんも葵ちゃんも、この前一緒に話したでしょ!! ポン組脱却を目指すって言ったでしょ! 大人しくして!!」

「えっと、ぼくは大人しくユキ先輩に……」

「先輩に迷惑をかけたらダメ! ユキ先輩に嫌われるよ!」

「はい……」

シユンとしおらしく落ち込むルル。

するとエミリが慌てて言いにくろおうとする。

「私は四期生をまとめようと……」

「自分から乱す方へ回ったらダメ!! 余計バラバラになっちゃうから!」

「う、うん、そ、そうだよ。わかった……」

未来美に怒られた二人はその場に座り、小さくなる。

すると、その様子を見ていた葵が頬に手を当てて恍惚の表情を浮かべていた。

「怒ってるみくちゃんも可愛いわね」

「……お酒のおつまみはキュウリの一本漬けを——」

「部屋の端で黙ってるわ」

怒った未来美があっという間に四期生の暴走を抑えてしまった。それを見た僕は思わず感心してしまう。

——なるほど……。あんな感じに鞭でいうことを聞かせる感じにするんだね。ユイの嫌がることは……寝ること？ 本人はぐうたらキヤラを演じてるけど、ユイが寝てる姿って一度も見たことないし、そもそも基本耐久ゲームをしてるからまともに寝てないはず。……よし！

覚悟を決めた僕はユイの耳元で呟く。

「そ、その……、ユイも無理やりベッドに入ろうとするなら……、僕も一緒に寝ちやうよ？」

「うみゆー！ 大歓迎なの!!」

両手を挙げて喜ぶユイ。

そのまま僕を押ししてベッドの方へ行こうとする。

……あれっ、なんだろう？ ユイの反応が思っていたのと違うかも……。

「えっと、その……、あの……。こ、ここは暴走したことの反省をする場面じゃないの？」

「うみゆ？ 違うの。ここはユキさんとユイが仲いいところを見せてける場面なの。カムカムなの」

「あうあう、や、やっぱりさっきのはなしで。わ、わふううう……」

為す術もなくユイによってベッドに寝かされてしまう僕。

ただ、ユイは一緒に入ってこようとはしなかった。

「ユキくんは開始まで休んでると良いの。どうせ今日もまたろくに寝てないの。寝ないとダメなのー！」

「そ、そ、そんなことないよ!? ちゃ、ちゃんと寝てるから……」

「うみゆ。それなら昨日はどのくらい寝たの？」

「えつと……、その……、さ、三時間くらいかな？」

「うみゆ、今日はユキくんの代わりにユイが出るの。ユキくんは寝ると良いのー！」

「だ、ダメだよ!? 今日僕のコラボだから」

「うみゆー、それなら寝ておくの!!」

「で、でも、ここは未来美ちゃんの部屋だから……」

「ユキ先輩、眠たいのですか？ 私の事は気にしなくて良いので今のうちに寝ておいてくださいね」

何とか逃れようとするが、未来美が最後の逃げ道を断ってくる。

いや、少し心配そうな表情をしているところから好意で言ってくれているのは良くわかるのだが……。

「もし寝ないのならこのままユイも一緒に寝るの。ずっと抱きついたままなの」

「わ、わかったよ。そ、それじゃあゆつくり休ませてもらって——」

「それじゃあ、ぼくも一緒に寝て——」

「ダメだよ、ルルちゃん！ ユキ先輩は疲れてるの。休ませてあげて……」

「ルル、寝るの？ 僕は起きるから寝てくれて良いよ」

「ほらっ、こうなっっちゃうんだよ。ユキ先輩だと。ルルちゃんは我慢してね」

「ううう……、ユキ先輩のために今回だけは我慢しますね……」

未来美に言われてルルが引いていく。

まさかこんなことが起こるなんて……。

「というか、これって僕、本当に寝るやつなの??」

「うみゆ、もちろんなの！ 罰ゲーム忘れてる罰なの！」

「あっ……。わ、わふっ」

「遅いの。だから配信が始まるまでゆっくり休むと良いの。このくら

「言わないとユキくんは寝てくれないの」

ユイが頬を膨らませながらジッと見てくる。

「えとえと、ぼ、僕はもうちゃんと休めてるから安心してくれていいよ……。わふっ」

「うみゅー……!!」

更にユイが顔を近づけてくる。

そして、すぐ目と鼻の先にユイの顔が現れたことでも思わず僕は頬を染めて視線を逸らしてしまう。

「えっと、休む。休むから……」

「うみゅー!! ちゃんとユイの目を見て話すの」

「そ、そんな……」

僕がユイの相手をするのに困っているタイミングで遠くから葵の声が聞こえてくる。

「はあ……、いいわね。眼福だわ……。あつ、カメラ、カメラ……」

「ユキ先輩……。ぼくという者がいながら……」

「もう、二人とも……。邪魔したらダメだからね……」

——ううう……。誰も助けてくれなさそう……。

結局、僕はユイにジッと見つめられながら、未来美のベッドで寝る……というおかしい状況を甘んじて受け入れるしかなかった。



しばらくするとユキの寝息が聞こえてくる。

「本当にお疲れだったんだ……」

眠っているユキを見て、優しい笑みを浮かべる未来美。

ユキの方が年上なのだが、どこかその視線は妹に向ける姉の姿そのものだった。

「うみゆ、そうなの。ユキくんは無茶をするから休憩を強要してちようどいいくらいなの」

「今回のコラボ、ご迷惑だったでしょうか？ その、私とペアなんて――」

「うみゆ。そんなことないの。ユキくんもきつととつても楽しみにしてたの。ただ、それと同時に先輩らしくしないと、つて色々と悩み込んじゃっただけなの」

「や、やっぱり私のせい……」

少し落ち込む未来美。

すると、そんな彼女の肩を葵がそつと抱いてくる。空いてる手でビールをあおりながら。

「心配かけたと思うのなら、それ以上に楽しい配信にしたらいいのよ。ミクちゃんならそれができるでしょ？」

「あつ……。そ、そうだね！ うん、またコラボしたいって思ってもらえるように全力で楽しんだらいいんだね」

「そうよ。それでお姉さんは返り討ちにされたミクちゃんを優しくハグして、なでなでしてあげるわ」

「むう……。少し葵ちゃんのことを感心したのに、やっぱり葵ちゃんは葵ちゃんだね。絶対に私たちが勝つから罰ゲームなんてあり得ないよー！」

「はっはっはっ、それは楽しみだ。勝ったらお姉さんを抱きしめる権利をあげよう」

「もう！ それ、どっちも同じことだからね！」

頬を膨らませながら葵を注意する。

ただ、それと同時に心の中では感謝をしていた。

葵は自分の好みもあるだろうけど、未来美のことを心配してわざとさつきみたいなことを言っているのがよくわかるから……。

すると、そんな時に突然呼び鈴がなる。

「あつ、だ、誰かきたのかな？ 私、見てくるね」

少し照れを隠しながら未来美は小走りで玄関へと向かっていった。

◇◇◇

「はい、どちら様ですかー？」

「私だ、私。開けてくれ」

「私私詐欺ですか？ 詐欺はお断りしてます」

口ではそう言いながらも、こういうことを言ってくる葵はすでに部屋に居ることを思い出して首を傾げる。

——ま、まさか本当に詐欺!？ そ、そうじゃないと名前も言わないのは変だよね？

恐る恐る玄関を開ける。

すると、そこには長い茶髪をツインテールにした小柄な少女がいた。

赤のミニスカートと白の半袖パーカーを着ているところを見ると年下にしか見えない。

ただ、ユキのこともあったので、未来美はなるべく丁寧な態度をとる。

「えつと、うちに何か用事でしようか？」

「ふふふつ、私の顔を見たものは生かしておかな」

「えええ……、そっちが呼び鈴を鳴らしたのに、ですか？」

「おお、狸よ。死んでしまうとは何事だ」

「し、死んでないですよ!? って、その呼び方……。も、もしかして、アカネ先輩ですか!？」

「くくくつ、我が名を知るものがあるとは。勇……。いや、狸ポコよ。この裏ボスたる美空アカネに挑むとはなかなか見どころのあるやつだな。さあ、かかってくるといい。……。あいたつ！」

突然アカネの頭が何者かによって叩かれる。

「もう、アカネは！ やっぱりボクと一緒に来てよかったね」

アカネの後ろから現れたのはコウだった。

その姿を見て未来美はほっとため息を吐いていた。

みんな暴走しそうなメンバー。

流石に自分一人では荷が重いのでは、と感じていたところだった。

「わ、私はまだ何も変なことをしてないぞ？ 本当だからな？」

「はあ……。今のやり取りが変なことじゃなくて何が変なことなのよ？」

ため息混じりのコウ。

「今のが至って普通の私だ。いたっ！」

「余計ひどいよ!! ふう……。フウちゃん、家の前で騒がしくしてごめんなさいね。流石にアカネだけだと心配でついてきちゃったの」

「いえ、私としては助かりました。その……。集まってるメンバーがちよつと……」

未来美がチラツと部屋の方を見る。
そこには四期生の姿が見えていた。

「ああ……、四期生だけでもまとめるの大変だもんね。わかったよ、ボクも協力するよ」

「よろしくお願いします」

「あつ、一応オフで会うのは初めてだから自己紹介をしておくわね。ボクは海星コウこと一ノ瀬海^{いちのせうみ}。こっちは美空アカネこと青羽空^{あおばそら}だよ」
「ふふふつ、天才美少女イラストレーター、アオゾラとは私のことだ！」

「はいはい、それは聞いてないからね」

「あ、あははつ……。えつと、私は——」

「狸だね」

「はい、狸こと……。つて違いますよ!?!」

「もう、アカネ! 邪魔したらダメでしょ!」

「うう……。わ、わかったよ……」

アカネが反省したのを見計らって、未来美は一度咳払いをする。

「コホンっ。わ、私は狸川フウこと立木未来美^{たつきみくみ}です。そ、その……。よろしくお願いします」

「うん、よろしくね。未来美ちゃん」

「はははつ、究極神たる私に仲良くしてもらえただけありがたいと思うといいよ」

「それじゃあ、未来美ちゃん。中へ入りましょうか」

「あつ、えつと……。はい」

コウは部屋へ入っていく。

アカネを置いて……。

「ちよ、ちよっと待て。わ、私も入るぞ！ 入るからな。待て。待ってよ……」

慌ててアカネも中へと入ってくる。



……うーん、少し賑やかになってきたかな。

軽く休んだ僕は周りの話し声で目が覚めていた。

時間にして三十分ほどしか眠っていないが、それでも眠気は随分と取れていた。

ただ、意識が覚醒すればするほど、今の状況が恥ずかしく思えてくる。

「今日初めて会った後輩の女の子。そんな子のベッドで眠るなんて……。恥ずかしさを通り越して、責任を取らないといけない。これは新たな百合カップルの誕生か？」

……。

まるで僕のセリフの如く言ってきたのは、いつの間にか部屋にやってきたアカネ先輩だった。

いや、その姿は初めて見るが、声から間違いようがなかった。

「えっと、アカネ先輩……。何をしているのですか？」

「んっ？ 『ドキドキ、憧れの（ユキ）先輩を落とすまで』 っていう恋愛ゲームだが？」

「ゲームじゃなくて、今作りましたよね、そのタイトル……」

「バレたか。つついユキくんが面白おかしい表情をしていたからな」

「はいはい。アカネ、そのくらいにしておきなさい。ユキくんはまだ」

本調子じゃないのだからね」

「仕方ないな。早く体調を回復させて、私に弄られるといい」

「いやですよ……。それよりもコウ先輩も来てくれたのですね」

僕はシロルーム暴走棒をたった一人で抑えられるその頼もしい先輩の姿を見て、ようやく安心することができた。

第16話：シロルーム遊び合戦ポンぽこ、らすとぽーと

「えっと、突然押し寄せてごめんなさい。流石にアカネを一人、野放しにするのは飼い主としてどうかと思ったの」

「いえ、僕としては助かりました。ちよつとその……濃いメンバーだけが集まっってしまったから……」

「まあ、そうね。これがシロルームと言ってしまったたらおしまいだけど、基本暴走する子ばかりだから早めに慣れておくと楽でいいよ」

「えっと、とても慣れる気がしないです……」

「そこは……フアイトだよ!!」

「わ、わかりました。が、頑張らせていただきます」

「うんうん、その意気だよ」

「うみゅー! ユキくんがもう起きてるの!! まだ、ゆっくり寝てないとダメなの!!」

「えっと、僕はもう目が覚めたから……」

「だーめーなーのー!! ユキくんが倒れたらみんな心配するの!」

「ははっ……、良い仲間を持ったね。これはゆっくり休むしかないね」

「そうみたいですわね……。でも、さすがにこれだけ集まるとその……気になって寝られないですよ」

「まあ、普通の部屋に合計八人だもんね。座ってるだけで精一杯かも」

「うみゅー。だからユキくんはベッドなの。ユイもベッドなの」

「ほくもベッド……」

「はいはい、ルルちゃんも私はたちと一緒に固まるからね」

「ううう……、ユキ先輩の寝顔がああ……」

「よし、なら私が!」

「アカネ? 知らないことをしたら捨てるよ?」

「えつと、ゴミ箱?」

「ううん、焼却炉」

満面の笑みを浮かべながら伝えるコウ先輩。

あまりにも普段通りの口調から本当にやりかねないと思えてしまう。

だからこそ、アカネは慌てて首を横に振る。

「な、何もしないから燃やさないで!」

「うんうん、何もしなかったら良いよ」

「ほっ……」

「良く燃えてるから、炎上の単語は怖いんだね」

「そ、そんなことないよ! 私は最凶魔王! 燃えることなんて造作もないの」

「それじゃあ、また燃えてみる?」

「は、はははっ、そ、その程度で私に勝ったと思うなよー」

体を震わせながらも何とか強がってみせるアカネはその指をコウに突きつけていた。

「……別に勝ち負けを競ってないよ。とにかくアカネは暴れないでね」

「——コウの膝に座らせてくれたら考える」

「はあ……、わかったよ。ボクの膝に座ってくれたら良いから……」

「やったー」

アカネがうれしそうにコウの膝の上に座る。

それを見ていた葵が未来美を自分の膝に座らせる。

すると、未来美は驚いて顔を真っ赤にしていた。

「えっ? えっ? あ、葵ちゃん!」

「はははっ、お姉さんの膝に座らせてあげよう」

「えとえと、べ、別に私は座りたいわけじゃなくて……」

「お姉さんが座らせてあげたいのよ」

「ううう……、へ、部屋が狭いから仕方ないんだよね？ ……わ、わかったよ。このままで我慢する」

「もつと正直に言うといい。実はミクちゃんはお姉さんの膝に座りたかった、と」

「ううう……、座るならお酒臭くない人が良かったよ……」

未来美たちの様子を見ていたエミリが自分の膝とルルの姿を見比べていた。

そして、覚悟を決めて声を出す。

「あの、ルル？ 良かったら私たちも……」

「ゆーきせんぱーい、ぼくを膝に座らせてくださいーい」

「あっ……」

ベッドの方へ駆け出していくルルを見て、エミリは声を漏らす。

そして――。

ぼ(っ)ぼ(っ)……。

机をたたき出すエミリ。

「そ、それ、パソコンデスクだから……、だ、ダメだよ……」

葵の上に座っていた未来美が慌てて立ち上がるとエミリを後ろから抱きしめる。

「エミリちゃん、パソコン壊れちゃう……」

「あっ……、うん。ごめんね……」

すぐにエミリが叩くのをやめてくれるので、未来美はホツとため息をついていた。

「あと、ルルちゃん！ さつきもユキ先輩を休ませてあげるつて言つたよね？」

「うううう……、わ、わかったよ。あう!？」

「ふふふつ、ルルちゃん。捕まえたー」

未来美が退いた後、いつの間にか葵はルルの側に寄っていて、捕まえてしまった。

足をバタつかせるルル。

しかし、この中でも特に小柄のルルに逃れる術はなかった。

「お姉さん、今日は凄く役得なの」

「ううう……、ユキ先輩が側にいるのに触れないなんて、厄日だよー」

◇◇◇

『《#シロルーム遊び合戦ポンぽこ》タマキンにさらわれたユキ犬姫を救うため、勇者タイガとペットの狸が魔王に挑む！ 《猫虎vs犬狸》《犬狸視点》』

2. 1万人が待機中 20XX/07/25 20:00に公開予定

☒874 ☒1 ?共有 ≡?保存 …

ついに放送開始間際になってしまった。

パソコンの前に僕と未来美が隣同士に座り、周りを囲むように他のみんながいた。

「ううう……、飲み過ぎたわ……」

一人既に脱落状態だったが、そこは気にせず配信の方へと意識を向ける。

待機画面は例のごとくアカネ先輩が描いた物。

コウモリが飛び交う邪悪な城をバックに、怪しげなマントに身を包んだ猫ノ瀬先輩と、勇者の服装を着て訳がわからなさそうに魔王の隣に立つ貴虎先輩、猫ノ瀬先輩の手を掴まれて、涙を流しながら助けを求めているユキぼ犬く姫とその三人を睨み付ける狸。フウちゃんではなく、紛うことなき狸。

「って、フウは本物の狸さんじゃないポコー!？」

と配信モードに入っていたフウが叫んでいたのが聞こえた。

ミュートだったので、ここにいるメンバーにしか聞こえないが、その反応を見たアカネ先輩は満足そうな表情を見せていた。

ただ、リスナーの人たちはその画像を見て喜んでいるようだった。

【コメント】

：こんぽこー

：こんわふー

：まさか本物の狸がw

：狸www

：ユキくんが似合いですぎてるw

：それを言うならタマキンの魔王がイメージ通りなのだがw

：勇者、そっちは敵側だwww

タマキ：『そろそろ準備はいいかにや?』

タイガ：『もちろんだ! いつでもかかってこい!』

タマキ：『だからにやーたちは味方にや。いい加減わかってほしいのにや』

タイガ：『敵も味方も吹き飛ばす!』

ユキ　：『えっと、吹き飛ばしたらダメだよ……わふっ』

タマキ：『にやにや!?　それが噂のユキくん犬モードかにや。とつてもいいのにや』

ユキ　：『ううう……、約束は約束だから仕方ないんだよ……、わふ』
フウ　：『ユキ先輩はいいポコ。ふうはその……、ポコを名乗らないといけないポコ』

タマキ：『二人とも気合十分なのにや。これはにやーたちも本気で行かないとまずいのにや』

タイガ：『任せろ！　全ツツパでいつてやる！』

タマキ：『ち、違うのにや。にやーが言った通りにするのにな』

タイガ：『それじゃ始めるぞ！』

タマキ：『ま、待つにや！　まだ話は終わって——』

珍しく猫ノ瀬先輩が慌てている声が聞こえた。

しかし、無常にも配信が開始されてしまう。

そのタイミングで僕たちの見ている画面には四人のアバターが映し出されていた。

タマキ：『にやははっ。よくぞきた、勇者ポコよ！　我こそはシロルームの裏番長にして、大魔王猫ノ瀬タマキなのにや！』

タイガ：『ちよつと待て！　勇者はこの貴虎タイガだぞ!』

タマキ：『わかつてるのにや。でも、勇者と魔王が手を組むのはおかしいのにや』

タイガ：『んっ？　何もおかしくないぞ?』

タマキ：『そうなのかにや?　それなら気にしないのにや。では、よくぞ来たのにや、狸ポコよ。世界の半分を支払えば仲間にしてやってもいいのにや』

フウ　：『ちよ、ちよつと待つぽこ！　それだとフウ……ポコは踏んだり蹴ったりポコー!』

タイガ：『なんだ?　踏まれたかったのか?』

フウ　：『ふ、踏まれたくないポコ!』

ユキ?』わふつ、それよりも話を進めないと……。配信時間がなくなってしまうよ。……わふ』

『ちよ、ちよつと待ってよ、ユイ。勝手にしゃべらないで!? ……わ、わふう』

ユイ：『うみゆ、仕方ないの。ユイはユキくんのブレインに戻るの』

タマキ：『にやははつ、なるほどにや。しつかりニヤーたちに勝つ準備はしてきた様にや。これで安心して挑めるのにや』

【コメント】

：なるほど、ユキくんにはゆいっちがついてるのか

：ゲーム勝負なら確かにゆいっちだな

：これはもしかすると勝ち目があるかもしれないな

タイガ：『おう、一人でも百人でもかかってこい!』

タマキ：『さすがに百人は多いのにや』

『そういつてくれると思ったから、僕たちは助っ人を呼んでるよ……わふつ。一応事前に確認もしたけど——』

タイガ：『知らん!』

『わ、わふう……』

タマキ：『にやははつ、にやーはしつかり聞いているのにや。もちろん問題ないのにや。こっちには最強の幸運トラが付いているのにや』

タイガ：『俺のことか。任せておけ! タマキもろとも全て倒してやる!』

タマキ：『にやにや!? だからにやーは味方なのにな!?』

『……うん、ということで一応僕たちのサポートをしてくれる人たちを紹介……するのはやめておくよ。……わふわふ』

今のメンバーを見て考えを改める。

確かにゲーム対決である以上、ユイがいるという点はプラスに働くだろう。

でも、残りのメンバーは？

右を見ても、左を見ても、ポンポンポン……。

唯一違うのはコウ先輩だけ。

ただ、コウ先輩にはみんなをまとめ上げて欲しいから……。

アカネ：『酷いよ、ユキくん！ このアカネちゃんを紹介しないなんて、全地球の損失だよ！ アカネさんがいないとゲームに勝てないと
言ってきたのはユキくんじゃないか！』

『そんなこと言っていないよ！ そ、その……、手を貸してくれるのはありがたいわふけど』

【コメント】

…あつ……

…察した……

…ポンVS最凶か

…ユキくんたちの罰ゲームは何だろうな？

『ま、まだ負けたわけじゃないよ！ そ、それにコウ先輩も来てくれるから大丈夫だからね。わふううう……』

フウ：『と、とにかく勝負をしてみたらわかるポコよ。やるのは大富豪でいいポコか？』

タイガ：『おう、金を稼いだら良いんだな？』

タマキ：『全然違うのにな。でも、いいのにな？ これはにやーたち
に有利なのにな』

フウ：『大丈夫ポコよ。そのためにみんな集まってもらったポコ
から。……うん、一人酔い潰れてるけど……』

フウは服がはだけ、へその辺りが見えている葵を見て苦笑を浮かべていた。

タマキ：『それなら問題ないのにや。それじゃあ、早速始めていくの
にや』

こうして雑談もそこそこに大富豪は始まった。

◇◇◇

配られた手配を見る。

『うっ………』

どうやったら勝てるのか、全く見えないほど酷い手札。
弱いカードのペアがある程度で、一番強いカードはQ。
階段にもならない程度にマークが別れ、8も一枚だけ。

タマキ：『あつ、ユキは酷い手札だったのにや』

『そ、そ、そんなことないよ!? つ、つよつよのカードばかりで困っ
ただけだよ。……わふっ』

タイガ：『なにっ!? ユキは強いのか!?!』

タマキ：『タイガは何も考えずに全力を出すだけでいいのにや。あ
とはにやーがなんとかするのにな』

タイガ：『当たり前だ! 勝負は常に全力。当然だ!』

フウ：『ふ、ふう……、ポコたちが返り討ちにするポコ。ぜ、絶対
に負けないポコ!』

『あつ、そ、そうだ。この勝負って負けた方に罰ゲームがあるの?』

タマキ：『もちろんにや。負けたチームは勝ったチームのいうこと
を聞いてもらうのにな。一人一つずつがちょうどいいのにな』

『や、やっぱりそうなるよね。うん、頑張る……わふっ!』

グツと気合いを入れるとすぐにユイに相談をする。

「えつと……、これって勝ち目あるかな？」

「……ないの。うーん、この手札だどう動くかな……?」

僕の方に体を寄せ付けながら一緒にモニターを見て悩んでくれるユイ。

後ろからはアカネ先輩とコウ先輩の視線を感じるが、そちらはなるべく気にしないようにする。

フウの方も四期生の面々が付いている。

ただ、ルルはチラチラと僕の方を見ているし、エミリはそんなルルを見てガンガンと机を叩いているし、葵は寝ている。

向こうの方が大変そうだな……。

「えつと、僕はユイがいたら平気なのでフウちゃんを手伝ってあげてください」

アカネ先輩とコウ先輩に対して、そう告げる。

「そうね……。確かにユイちゃんがいたらユキくんは大丈夫だね」

「激うまな裏ボスの私もいるぞ！」

「えつと、上手いアカネ先輩はフウちゃんを手伝ってもらえますか？」

「ああ、任せておけ！ 私の力で勝ってあげよう」

うれしそうに笑みを浮かべながらフウの側へ向かうアカネ先輩。

その後ろに付いていくコウ先輩。

「うみゆ、決まったの！ ここはユキくんの力を任せるの！」

「ええええええ?!?!」

悩んでいたユイが出した結論はまさかの放置だった。



もちろんユイに見放され、最弱の手札を持っている僕に勝ち目があるはずもなかった。

タイガ：『はっはっはっ、俺のターン！ ドロー！』

フウ：『な、何も引かないポコよ!』

タイガ：『喰らえ!! 今必殺の2だ!』

僕が3を一枚出した後、いきなり最強の2を出してくるタイガ。もちろんそれより強いカードはジョーカーしかないわけで――。

フウ：『ぱ、パス、ポコ』

タマキ：『にやははっ。にやーももちろんパスにや』

『ぼ、僕もパスだよ。……わふっ』

タイガ：『俺に勝てる奴はいない!』

フウ：『ま、まだカードが一枚切れただけポコ。勝負はここからポコ』

気合を入れるフウをよそにタイガは再び2のカードを出していた。

フウ：『ふえっ!』

『わ、わふっ!? ど、どうして??』

確かに強いカードだが、わざわざ他のカードがないタイミングで出すものでもない。

僕が不思議に思っていると、貴虎先輩はさも当然のように言うてる。

タイガ：『んっ? 強いカードを出したら勝てるんだろう?』

『……??』

なぜかルールが湾曲して伝えられていた。

『猫ノ瀬先輩、それってどういう……？』

タマキ：『——それ以上難しいことを理解してもらえなかったの
にや……』

猫ノ瀬先輩が遠い目をする。

それを聞いて僕も乾いた笑みを浮かべていた。

『わふっ、そ、そういうことなんだね……わふっ』

タマキ：『でも、逆を言えばそれだけのルールだけ知っておけば、タ
イガは勝てるよと踏んだのにや』

タイガ：『ふははっ、多少のハンデくらいで勝てると思うなよ』

えっと……、いいのかな？

せつかくの強いカードをこんな無駄にして……。

そんなことを思いながら流される2のカードを見ていた。

そこから、同じことが二回繰り返されたが……。

◆◆

まさかそのあと、強い順位カードを出されていくとは思わなかつ
た。

結局僕たちは一枚も出すことなくタイガが一番最初に上がり、大富
豪になっていた。

タイガ：『圧勝だ!!』

『——えっと、何この状況……わふっ』

フウ：『運が強いつてレベルじゃないポコ!?』

タマキ：『にやははっ。どうだ、参ったかにやー』

その後、なぜかジョーカーだけ隠し持っていた猫ノ瀬先輩が二位に。

フウちゃんが三位になり、僕は最下位の大貧民となっていた。

タマキ：『にやははつ、このまま最下位を独走するのかにや?』

『ま、まだだよ。そ、それに五回勝負で最後の順位で勝敗を分けるはずだよ?』

タマキ：『強いカードを渡してまで勝てると思うなにや』

【コメント】

：確かにこれはきついな

：ユキくん、勝てるのか?

：幸運トラはともかく、タマキンも魔王を名乗ってるだけあって上手いな

：ユイツちがいても勝てないのか?

コメントが流れてる中、僕は隣にいるユイに話しかける。

「やっぱり負けちゃったよ……。これからどうするの?」

「うみゅー。二枚カードを交換できるのは強みなの。それで今の戦いではつきりタイガの弱点もわかったの。あとはユキくん自身の運しだいなの」

「僕の……運?」

「勝てるタイミングが来たら起こして欲しいの」

ユイが僕の膝を枕に寝ようとする。

「ちよっ!? ゆ、ユイ!? 寝たらダメだよ! 死ぬよ! ……僕が」

「うみゅー……。そのときはそのときなのー。大人しく罰ゲームを受けると良いの」

「そ、そんな……」

「でも、勝てる手札が来たときはゆいを信じて欲しいの。何があつてもゆいがユキくんを勝たせるの」

それだけいうと、本当にユイは目を閉じてしまった。

◇◇◇

彼女が目を覚ますことなく三戦が終わり、一切順位の変動がなかった。

そして、最終戦。

タマキ：『にやにや、やっぱりにやーたちには勝てないにや』

タイガ：『はははっ、最強の勇者に勝てるはずないだろう！』

フウ　：『ううう……、どうするポコ。このままだと罰ゲームが……』

ユキ？：『問題ないよ』

『つて、またユイが喋ってる!』　ほらっ、喋るなら僕の隣に表示してもらうから……わふっ』

ユイ：『うみゅー、めんどうなのー』

フウちゃんが表示してくれたので、仕方なくそのまま喋るユイ。

『それより、本当に問題ないの？　だつて、この手札……』

ぱつと見たかぎりだと、最初配られたときよりも悪い。

三枚ペアが二つあるくらいだけど、そもそもこれを出すタイミングが最初しかなさそうだ。

ユイ　：『うみゅー、やっぱりこの手札が来たの。パターンを見た限り多分来ると思ったの。だからユキは安心して見てると良いの。ユ

イがいうことに間違いはないの』

自信たっぷりの表情を見せるユイ。

ただ、僕にはどうしてそこまで自信が持てるのかわからない。

ただ、猫ノ瀬先輩は何かを察したようだった。

タマキ：『にやにや、もしかして……』

ユイ：『ふふふつ、ことゲームにおいてユイに負けはないの』

タマキ：『ぐぬぬつ、相手の力を測り損ねたのにや』

ユイとタマキのやりとりの中、僕とフウちゃんはついていけずその場で呆けていた。

『えっと、どういうことかな？ ……わふう』

フウ：『え、えっと……ポコにもよくわからないポコ……』

タイガ：『はははっ、私に負けはない！』

ぼんやりしている三人。

すると、ユイとタマキが突然静かになっていた。

手元を見た限りだとスマホの文字を打っているので、チャットで何かやり合っているのだろう。

ユイ：『うみゆ、わかったの』

タマキ：『にやにやにや、絶対に負けないのにや』

ユイ：『うみゆー、ユキくんはユイの指示に従ってくれたら勝てるの』

『ユイ……』

いつにもなく頼もしいユイの姿に僕は感動すら覚えていた。

そして、ユイが言っていたことをゲームが始まってすぐに思い知らされる。

『あつ……、これって——』

四枚ペアのカードがあった。
弱いカードが強くなる革命を起こせる。

——まさかユイはこうなることまで予測してたの??

これは本当に勝てるかもしれない。

『ユイ、まず最初はもちろんこのカードだよね?』

革命のカードを出そうとするけど、ユイは首を横に振っていた。

ユイ　：『違うの』

『えっ?? でも、これしかないと思うけど……』

ユイ　：『ユイが勝つためには、まずこっちのカードなの』

ユイが指さしたのは三枚ペアの方だった。

これも革命した後の方が強いと思うけど、何かユイに作戦があるんだろうな。

『ほ、本当に良いのかな?』

ユイ　：『うみゆ、これで大丈夫なの。ユイを信じるの』

カードを出そうとした瞬間に僕の動きが固まる。

『そういうえばユイ。さつき、チャットをしてたけど相手つてもしかして猫ノ瀬先輩?』

タマキ：『うにゃ。そうなのにゃ。ユイつちには、ユキくとフウちゃんが負けたときの罰ゲームを教えただけにゃ。ユキくんは「次の

オフにユキ犬姫の服装をしてもらおう」のにや。フウちゃんには「四期生たち全員で裸のお付き合いをしてもらおう」のにや』

『えっ?!?!?』

フウ …『えっ……!?!?』

『ちよ、ちよつと待って……。僕、ユキ犬姫の服装なんてもってない——』

タマキ：『既に準備済みなのにや。この勝敗如何で担当さんからユキくんへ届けられるのにや』

フウ …『ふう……、ポコも裸の付き合いだなんてそんな……』

タマキ：『にや、旅行の手配も準備済みなのにや。安心して行くといいにや！ あつ、四期生とエロ特急は既に買収済みにな』

それを聞いたフウは慌てて四期生たちの方に視線を向けていた。

「えっと……、ぼく、ユキ先輩があの服を着るの、見たくて……」

「四期生全員で旅行なんて私が反対するはずないよ！」

「お姉さんは全裸の付き合い、賛成よー」

「はははっ、ユキ犬姫衣装を着た姿を写真でくると言われたら断る理由はない！」

いつの間にこんな買収をしていたのか……。

『ちよ、ちよつと待って。つまり、僕たちはたった二人でみんなを相手にしないといけないの!?!』

フウ …『か、勝てる気がしないポコ……』

タマキ：『はははっ、信じてた仲間に裏切られる気持ちはどうにや？ たまには魔王らしいことをしてみたのにや』

——ど、どうしよう……。これ、ユイを信じたら負けるやつ……。だよね？ でも、本当にユイが裏切るような真似をするなんて……。

——勝てる手札が来たときはゆいを信じて欲しいの。

先ほどのユイの言葉が僕の脳裏に浮かび上がる。

うん、そうだよね……。難しいことは考えなくていいんだよね。僕はただ、ユイを信じたら良いだけなんだから——。

僕は笑みを浮かべるとユイが言ったカードを場に出していた。

5が三枚。

さすがに三枚ペアはあまり持っていないと思うけど……。

タマキ：『にゃーはパスにゃ』

タマキがすぐにパスしてくる。

僕たちのカードが弱いので、強いカードは二人に固まっているのだろう。

さすがにこのタイミングで、別カードを出すべきじゃないと思ったのだろうな。

次にフウちゃんの番だった。

フウ　：『えっと、これはどうしたらいいポコ……』

四期生のみんなが敵側だとわかったフウちゃんは困惑していた。すると、その肩をポンツと叩く人物がいた。

コウ　：『大丈夫よ。ボクが力になるから。その……、ゲームはそこまで得意じゃないけどね』

コウ先輩が安心させるために笑顔を見せていた。

それを聞いたフウちゃんは思わず目に涙を溜めていた。

フウ …『こ、コウ先輩……。あ、ありがとうございます……。』

コウ …『でも、フウちゃんたち四期生もこんなことでバラバラになるような仲じゃないよね？ みんなが離れそうなら引き戻すのはフウちゃんの役目だよ』

フウ …『……っ!? そ、そうですね。四期生のことはふうに任せてください』

コウ …『うんうん、それじゃあ、アカネのことは私に任せておいてね』

満足そうな表情を浮かべるコウ。

もうフウは大丈夫だと、すぐにその視線をアカネへと向けていた。

アカネ…『や、やるのか、コウ！ いくらコウといえども溢れ出した私のパッションは止められないぞ！』

コウ …『……人に与えられたものでいいの？ 違うでしょ？ アカネはもつとすごいものを自分で生み出す側でしょ？』

アカネ…『……うぐっ。た、確かに、それはあるな』

コウ …『それに、ボクのアカネは誰かに使われるような人じゃないでしょ？』

アカネ…『あ、ああ、そうだな。わかった、私はタマキンに使われるような人間ではなかったな。私は私だ！ よし、それじゃ早速、勝手にユキくんのあられもない姿を描いてくるか』

あつさりアカネの説得に成功していたコウ先輩。それを見て、フウも気合を入れていた。

フウ …『エミリちゃんはふうの敵になるの？ 四期生の仲を分断させるの？』

エミリ…『わ、私も別にフウを困らせたいわけじゃなくてその……、

やっぱりみんな旅行に行きたくて……』

フウ　：『それなら勝って、罰ゲームで旅行券を奪っちゃおうか』

フウがイタズラした子供のように舌を出すと、エミリは大きく頷いていた。

エミリ　：『そっか……。そういう方法があったんだね。うん、わかったよ。それなら私はフウの味方をするわ。四期生の仲を分断させるわけにはいかないからね』

フウ　：『ありがとう、エミリちゃん』

フウがエミリを抱きしめると、彼女は嬉しそうに顔を赤く染めていた。

フウ　：『さて、次はルルちゃんだね。ルルちゃん、本当にそんなことをしていいの？』

ルル　：『どういうことかな？　ぼくはただユキ先輩の可愛い姿を見ただけで——』

フウ　：『ユキ先輩に嫌われてまですることかな？　違うよね？』

ルルちゃんにはユキ先輩の姿を見たいんじゃないやなくて、ユキ先輩自身に好かれないんだよね？』

ルル　：『ううう……。た、確かにそうかも』

フウ　：『なら嫌われるようなことをしたらダメ。ほらっ、ユキ先輩たちと一緒に魔王を倒そう？』

ルル　：『うん、そうだね。ありがとう、フウちゃん。ぼく、道を間違えるところだったよ！』

フウと熱い握手を交わすルル。

これで二人。あとは——。

イツキ　：『あとはお姉さんね。お姉さんはそうそう説得されたりは

『フウ：『そう……。なら、明日からイツキちゃんのご飯は全てピーマンのみじん切りにしておくね。それじゃあ、ゲームを再開しようか』』

イツキ：『ちよつと待って?! お姉さんの説得だけ雑すぎない?! ほらっ、お姉さんにももつとこう、熱い抱擁を——』

フウ：『ナスの田楽もセットにしておくね』

イツキ：『全力でフウ様の力になりますので、勘弁してください』

イツキは頭をつけて謝ってくる。

全員を無事に説得できたフウは安心して、出すカードの相談をする。

フウ：『一応出せるカードはあるけど、どうする?』

三枚あるのはフウの最強カードであるKだった。さすがにそれを出すのはもったいない気がする。でも、ルルがすぐに言ってくる。

ルル：『何かユキ先輩が企んでるね。これは出したほうが良くないかな?』

フウ：『ユキ先輩のことはルルちゃんが一番わかってるもんね。なら、このカードは出すね』

フウがKを三枚出す。

すると、貴虎先輩が不敵な声を出していた。

タイガ：『ふっふっふっ、この程度か。これでこの勇者を倒そうなどと片腹痛いわ!』

タマキ：『それにフウちゃん、語尾を忘れてるのにや。狸は狸らしくたぬたぬ言うといいにや』

フウ　：『ためたぬは言わないポコーラー!!』

フウの言葉が響き渡るその瞬間にタイガは1を二枚とジョーカーを出していた。

タイガ：『俺も学んだぞ！　ジョーカーはコピーカードだ！』
『えっと、違いますよ……わふっ』

自信たつぷりに言うタイガに対して、僕は苦笑を浮かべる。
もちろんカードは2も全てタイガが持っているので、他のみんなに出せるカードはない。

場が流れ、再びタイガの番がくる。

タイガ：『カードが切れたら弱いのを出す。四天王最弱を召喚だ！』

タイガが出したのは一枚のカード、7だった。
珍しく弱めのカード。

そして、次は僕の番が回ってくる。

ユイ　：『うみゆー、これで不安要素がなくなったの。万一にも革命を返される心配がないの』

『えっと、それじゃあ、さつきあえて三枚を出したのって……』

ユイ　：『うみゆ、ジョーカーを使わせるためなの。新しいルールを知った人は使いたくなるものなの。勝つために相手を観察するのも当然なの』

ユイはえっへんと胸を張っていた。

『そ、それじゃあ、ユイは別に猫ノ瀬先輩に寝返ったわけじゃないんだね……』

信じたとはいえ、どこか心の中で不安があった。だから、ユイが味方でいてくれたことにホッとしていた。

ユイ　『うみゆ、当然なの。相手がこういう手を使ってまで本気で挑んでくれるのに、手を抜くなんてゲーマーのゆいには考えられないの！　相手が本気を出してるなら、こっちも本気で迎え撃つのも、カード傾向を分析するのは流石のゆいでも疲れたの。あとは任せるの』

今度こそユイは僕の膝を枕に寝息を立て始める。

それは珍しいユイの寝顔だった。

すぐく力になってくれたことに感謝をしながら、僕はユイの頭を軽く撫でていた。

『ありがとう、ユイ。ここまで頑張ってくれて……』

ユイ　『……うみゆうみゆ、ユイへのご褒美はユキ犬姫の衣装を着てくれるだけでいいな』

『うん……。って、えっ!?!』

ユイ　『うみゆう、聞いたの。ユキくんはユイのためにユキ犬姫の衣装を着てくれるの!』

ユイは目を開けて、ちよろつと舌を出していた。

『ま、また、僕をはめて——』

ユイ　『それよりもほらっ、早くゲームでトドメを刺してくるといいの。今の手札的にユキくんと狸が負けるはずないの』

ユイに言われるがまま、僕はカードを出していき、そして、初めての大富豪を獲得していた。

第17話 三期生の温泉旅行（開始編）

まさか、本当にこの二人に勝てるなんて思わなかった。

勝敗がついた後も僕は信じられない気持ちのまま配信画面を眺めていた。

間違いなく僕の画面には『大富豪』という文字が浮かび上がっている。

そして、それは同時に貴虎先輩が都落ちで最下位になったことを意味していた。

タイガ：『ど、どうして俺が負けてるんだ！ まだ俺は戦えるぞ!』
タマキ：『もう戦えないのにや。タイガは最後の最後に油断したのにや』

タイガ：『くっ、きゆうり、猫を噛むとはこのことか!』

フウ：『えっと……、きゆうりではなくて窮鼠……だと思うポコよ?』

タイガ：『きゆうそ? なんだそれは』

フウ：『えっと、追い詰められたねず——』

タマキ：『それは狸のことにや。にやつにやつにやつ、勇者を落としたところで奴は最弱にや。喜ぶのはこの魔王を倒してから——』

フウ：『これでフウは上がりポコ。……えっと、何か言ってたポコ?』

タマキ：『ぐ、ぐぬぬっ。で、でも、勝った数はにゃーたちの方が多いのにや!』

『でも、このゲームは最終順位が勝敗になるよね? つまり、僕たちの勝ちだよ!』

フウ：『や……。やったポコ——!! 勝ったポコ——!』

感極まったフウちゃんが隣にいる僕に向かって抱きついてくる。

それをサツとかわそうとするが、もちろん僕の動きを読んだユイが体を掴んできたせいで、なすすべなくそのまま抱きつかれてしまう。

『わわっ、ユイ!?!』

ユイ　：『うみゆ、今日は譲ってあげるの。ユイ、お姉さんだから』
フウ　：『ありがとーポコー』

ユキ　：『ちよっ!?!　ぼ、僕は商品じゃないからね!?!』

タマキ　：『うにや、負けたのにや。仕方ないから何でも罰ゲームを言うといいのにや。さすがに全裸で外に出るのはなしにや!』

イツキ　：『——ガタツ』

フウ　：『ちよつと、イツキちゃん!!　反応しないでポコ!!』

タマキ　：『にやははっ、まあ、女同士全裸になったところで恥ずかしくもないのにや。裸の付き合いも大切にや』

フウ　：『そ、それポコ!　ふうからの罰ゲームは用意してた温泉旅行のチケツトをふうにください!』

タマキ　：『にやんだ、やっぱり裸同士のお付き合いがしたかったのにやね。担当さんに渡しておくのにや』

フウ　：『ち、違いますよ!?!　ただ、みんなで旅行に行きたいだけですからね!?!　みんなも楽しみにしてるだろうし、断るわけにはいかな

いポコ』

タマキ　：『にやははっ、にやーにはわかっているのにや。狸は温泉でみんなの裸を見たいえっちい子なのにな』

イツキ　：『よくわかったな!』

フウ　：『ぜ、全然違うポコ!!　そ、それじゃあ、ユキ先輩も罰ゲームをどうぞポコ』

ユキ　：『僕もユキ犬姫の衣装が欲しいな。もう準備してあるんだよね?』

タマキ　：『もちろんにや。それじゃあ、ユキにはその衣装を送っておくのにや』

『えっ!?!　ぼ、僕、何も言っていない——』

ユイ　：『うみゆー、これで収まるべきところに収まったの。ユキくんの新衣装、楽しみなの』

ユイがうれしそうな声を上げる。
もちろんさつきの声を出したのもユイだ。

僕の声真似をするのが日常茶飯事になってきているユイ。その精
度も日に日にながっており、一瞬僕が声を発したのかとすら思えてし
まうほど……。

『えっと、僕そんな衣装をもらってもその……、誰かに見せるわけじゃ
ないし……、その……』

ルル : 『ユイ先輩——』

ユイ : 『うみゆ、任せておくの！』

ルルとユイが何やら目でやりとりをしていた。

特に何か口に出しているわけではないが、なんでだろう……？ 凄
く嫌な気がした。

思わず身震いしてしまう。

とりあえず何も見なかったことにしよう。

【コメント】

: ユキ犬姫がリアルで誕生！

: どこに行ったらユキ犬姫は拾えますか？

: ユキ犬姫は段ボールの中にいることが少ないからな

: 姫様だもんな

: ユキくん、似合いそう

『って、ちょっと!? ぼ、僕はそんな服、似合わないからね。ほ、ほ
らっ、今も——』

ユイ : 『うみゆ、普通のユキくんの姿なの。とっても似合ってる
の』

『うんうん、そうそう。普通のユキくんの姿で——。あつ……』

ルル : 『ユキ先輩はとってもかわいいですよ、安心してください
！』

『全然安心できないよ!? むしろ身の危険を感じるよ!』

【コメント】

・ユキくんの姿が似合うならユキ犬姫も似合うよな

・容易に想像が付くw

《…?10,000 服代》

『えとえと、ふ、服代はその……、猫ノ瀬先輩の梓に投げてください。でも、ありがとうございます』

タイガ：『ユキの服か!? なら俺はとっておきの段ボールを用意してやろう! ユキがそのまま入れるような特別デツカくて運びやすい新品のやつだ! 大は小を食べるからな』

タマキ：『兼ねる、にや』

『ほ、本当ですか!? あ、ありがとうございます!』

僕が笑顔を見せながらお礼を言う。

【コメント】

・ユキくん、今日一番の笑顔だw

・なるほど、ユキくんの誕生日には段ボールを大量に送ればいいのか

・ちよつと待て。俺は全然違うものを送ってしまったぞ?

・俺もだ!?

・しまった……。もう少し早くに知っていれば――

・ふふふつ、俺はとっておきの段ボールを送ったぞ! 中に別のものを入れてしまったが

・新品じゃないと意味がないぞ!?

『あつ、誕生日プレゼント……。たくさん届いているって聞いてます。本当にありがとうございます。ただ、その……。僕の部屋が埋まってしまいそうだから、まだ運営さんに預かってもらってるんだ……。そ、

その……、量が……ね』

一度シロルームの本社で見たけど、倉庫一つ埋まるほどの段ボールが置かれていた。

あれが全て僕へのプレゼントじゃないと思うけど……。

——ち、違うよね!?

自分でフラグを立てていつている気がするけど、この際気にしないことにする。

タマキ『倉庫、まるまる埋まるなんてユキはみんなに愛されてるの
にや』

ユイ 『ユキくんはユイのものなの!』

ルル 『いえ、ユキ先輩はぼくのものです!!』

イツキ『あらっ、女の子同士の対立? お姉さんも挟まれるために
参加しようかしら?』

アカネ 『ユキくんは私が奪っていくぞ!』

コウ 『はいはい。アカネはちよつと黙っててね』

アカネ 『くっ、コウがいるせいで身動きが上手くとれない……』

また、みんなの暴走が始まりだしている……。このままだとまずそう
うだ。

僕はチラツとフウちゃんの顔を見る。

すると、フウちゃんは理解してくれたようで、一度頷いてくれる。

フウ 『わかったポコ。ふうに任せて欲しいポコ!』

四期生のこととなるとフウちゃんが頼りになるな。

『ポンにはポコだよな。うん、やっぱりフウちゃんしか勝たん』

笑みを浮かべて頷いていると、フウちゃんはとんでもない言葉を告

げてくる。

フウ …『ユキ先輩はふうの頼れる先輩ポコ。もちろん、ふうがもらっていくポコ。賞品ポコ』

『ふ、フウちゃん!?!』

フウ …『ということ、今度は二人きりでオフロラボしましょうね。ユキ先輩』

につこりと微笑んでくるフウちゃん。

屈託のない笑顔を見ると僕も断る……という選択肢を選ぶわけには行かずに――。

『えっと、その……、また熟考をして返事を――』

フウ …『日には温泉旅行の後。八月の頭で予定しておきますね』
『わわっ、ま、まだ僕、返事をしてないよ……』

フウ …『えへへっ、ユキ先輩のことはルルちゃんからしつかり聞いてますから。押してダメなら体当たりしろって』

『ううう……、ルルう……』

ルル …『ぼくはただ、ユキ先輩の良いところを広めたかっただけですよ？ 本音では、あまりコラボをしたくなって断りたいけど、頼られたら断り切れずに悩んでしまうユキ先輩とか、ぼくだけしか知らない姿は自慢したくて――』

フウ …『ほ、本当に予定があるとかなら延期しますので、そのときは遠慮なく言ってくださいね』

イツキ …『フウちゃん、興奮して語尾を忘れてるわよ』

フウ …『あっ……。ほ、ぼくは……』

『ははっ……。わかったよ。うん、知らない人とやるよりは全然大丈夫だから……。それに今度は邪魔されないように、二人でしよっか?』

フウ …『いいポコか!? あ、ありがとうございます、ユキ先輩!』

一度は離れてくれていたフウは感極まって、再び僕に飛びついてく

る。

もちろん僕が避けられないようにユイがしつかり逃げ道を塞いでいるので、為す術なく僕は抱きつかれていた。

ルル：『あつ、フウが裏切りを!? ゆ、ユキ先輩はぼくのものなんだからね!!』

ルルが僕たちの間を割って入るように飛びついてくる。それを皮切りにポンたちが一斉に動き出す。

ユイ：『ならユイも——』

隣にいるユイがさも当然のようにそのまま僕を抱きしめてくる。そして、他の面々も僕たちの方へ向かって飛びついてきて——。

エミリ：『フウちゃんまで!? 二人ともユキ先輩には渡さないからね!!』

イツキ：『お姉さんを混ぜてくれないなんて酷いわよ』

アカネ：『はははっ、この場は混ぜ返さないとアカネ様の名が廃るね?』

コウ：『はあ、全く……。ここまで暴走すると少し引くまで止められないね。むしろ、ここは流れに乗らないのも変だよね?』

こ、コウ先輩まで……。

みんなに飛びつかれた僕は重さに耐えかねて、そのまま目を回していた。

この放送は終了しました。

『《#シロルーム遊び合戦ポンぽこ》タマキンにさらわれたユキ犬姫を救うため、勇者タイガとペットの狸が魔王に挑む! 《猫虎vs犬狸》』

《犬狸視点》

12. 0万人が視聴 0分前に配信済み

☒2. 6万 ☒28 ?共有 ≡?保存 :

チャンネル名: H u u R o o m. 狸川フウ

チャンネル登録者数18. 3万人



無事にポンぽこ大戦が終わり、次の日には担当さんから連絡が来ていた。

マネ :『ユキくん、猫ノ瀬さんから贈り物が届いてますよ』

ユキ :『えっ!? もう届いたのですか!? いくら何でも早すぎる……』

マネ :『前もって送っていたみたいですね。まあ、あの二人に勝つなんて信じられないですから』

ユキ :『ははっ……、まあ、実質二対八でしたもんね。ここまで人数差があつたらさすがに勝たないと……』

マネ :『それでも……、ですよ。それにあそこまで人を集められたのはユキくんたちの人望のおかげです』

ユキ :『どちらかといえば僕、というよりフウちゃんでしたね』
マネ :『そんなことないですよ。ココネさんも行きたがつてまし

たよ。カグラさんも。他にもオンプさんがさり気なく酷い罰ゲームにならないように裏から手を回してくれたり、猫ノ瀬さんがその……、裏技チートを使わないようにツララさんが監視してくれたり。それにそれに、ユキヤさんが裏でリスナーを呼び込んでくれたり、いざ燃えたときにはユージさんを投入する準備もできてたんですよ?』

ユキ :『えっと、ゆ、ユージさんの扱い、酷くないですか?』

マネ :『いえ、これはユージさんからの提案だったのでですよ。その、猫ノ瀬さんは色々とありまして、本当にどこまで裏で手を引いてるかわかりませんでしたから、そこを抑えられたのはユキくんの人望

なんですよ』

ユキ : 『えつと……、そ、そこまでするんだ……』

マネ : 『ええ。勝つためにはどんなことでもする子、ですよ。特に勝ちたい、と思ったときには——』

ユキ : 『それじゃあ、昨日僕勝つたのってまずかつたんじゃないのですか?』

もしかして、猫ノ瀬先輩に嫌われた!?

急に不安が押し寄せてくる。

マネ : 『大丈夫ですよ。むしろ、ライバル認定して『次は勝つ!』と闘争心をメラメラに燃やしましたよ』

ユキ : 『それはそれで困るような……』

マネ : 『頑張ってくださいね。あと、ついに来週ですね。ココネさんにチケットを渡してますけど準備はできてますか?』

ユキ : 『準備? 来週って何かありましたか? ココママとコラボ?』

マネ : 『やっぱり忘れてましたか。三期生の旅行ですよ!』
ユキ : 『旅行? ……あっ!?!』

そういえば三期生全員で温泉旅行に行くことになっていた。しつかり、夏にタイミングを合わせて……。

マネ : 『そうだと思いますよ。一応明日、ココネさんに時間を取ってもらってますから準備に付き合ってもらってください。配信は二日間お休みですよね?』

ユキ : 『ま、まさか、このために休みを取っていたのですか!?! 積んでたゲームをしようとしたのに……』

マネ : 『積みゲームですか? 例えばどういったものですか?』

ユキ : 『えつと、竜のクエストとかですよ。一人でするRPGが多いです』

マネ 『あつ、そちらなら大丈夫ですよ。タイトルごとに聞いてくれたら配信に使えるかどうか調べますから』

ユキ 『ふえっ!? え、えつと、ど、どういことですか!?!』

マネ 『ゲーム枠で配信しましょうね』

ユキ 『ええええええ!?! ……いや、いいのかな? 僕の好きなことだから……』

マネ 『もちろんですよ、ユキくん。遠慮なく配信しちゃってください。それじゃあ積んでるタイトルは今度教えてくださいね。配信できるかはこちらで調べておきますので』

ユキ 『で、でも、ゲームってやり出したら止まらないから、一人だと結構長時間しちゃうかも……』

マネ 『そうですね。あんまり長いと大変ですからね』

ユキ 『ですよね。だから、この話はなかったことに——』

マネ 『前、ユイさんが一週間耐久ゲーム配信をしようとしたときはさすがに止めちゃいましたね』

ユキ 『えつと、僕の配信は米粒みたいな短さなのでやらせていただきます……』

そうだった……。シロルームはこういうところだった……。

断る基準が一週間なら、数日徹夜する程度だとむしろ歓迎されてしまっそうだ。

僕はガツクリと肩を落としていた。

マネ 『ユキくんが構わないならそれでいいのですけど……』

ユキ 『えつと、それじゃあ、僕はココママに明日の予定を聞いておけばいいのですね? 僕のために時間を作ってもらうのも悪いから、僕一人でも——』

マネ 『大喜びして配信を急遽休むことにしましたよ?』

ユキ 『な、なんでそこまで!?!』

マネ 『だって、最近ユキくん、他の人とのコラボばかりでココネさんと会うこと、減ってますよね? 寂しがっていましたよ?』

ユキ　：『コラボの予定を入れたのって担当さんですよ？』

マネ　：『それでも……ですね。ほらっ、ユキくんって用事がないと連絡しないですよ？』

ユキ　：『そ、そういうものじゃないのですか？』

マネ　：『——まあ、ユキくんにそういうことを求めても仕方ないですよ。なので、明日はたっぷりココネさんに付き合ってもらってあげてくださいね』

ユキ　：『あれっ？　明日は僕の旅行の準備——』

気がついたら目的が変わってるんだけど……？

第18話 三期生の温泉旅行（準備編）

知らず知らずのうちに僕の旅行準備計画が予定されていた。ただ、こよりさんと二人、と考えると気持ちが悪かった。

すでに何度も出かけているし、家にも行った。これ以上恐れることがあるだろうか？

そう思っていた時期が僕にもありました。

例のごとく待ち合わせ時間の一時間前に着くように家を出た。買い物に行くということで待ち合わせ場所は駅。

そこでいつものように僕は、こよりさんが来るのを待つ……はずだったが――。

「えっ!? ど、どうして先に来てるの!?!」

すでにこよりさんは駅で僕のことを待っていた。

「あつ、祐季くん。今日はゆっくり来たんだね」

「そ、そんなことないと思うけど……。ほらっ、待ち合わせの一時間前だよ?。」

スマホの時計を見せる。

それを受け取ったこよりさんは確かめるように、時計を見る。

「うーん、予定通りの十時だよ?。」

「えっ!? 待ち合わせ時間は十一時……だよね? あ、あれっ? ぼ、僕、間違えた!?!」

「うん、そうだよ。あつ、だから祐季くんには十一時って伝えただったね。いつもの祐季くんなら一時間前に来ると思ってたから――」

こよりさんはスマホを返してくれる。
そしてすぐに頬を膨らませてくる。

「……そういえば祐季くん、最近私の事を避けてなかった？」

「そ、そんなことないよ!? でも、ちよつと忙しくて中々連絡が取れなかったんだよ……」

「それはわかってるよ。わかってるけどその……」

「あつ、うん、ごめんね。心配させたみたいで——」

「ううう……、私も変なことを言つてごめんなさい。その、祐季くんはやっぱり祐季くんだね。今日はちよつと祐季くんらしい格好じゃないけど……」

外出するから、と今日は普通のパンツスタイルだった。

「えとえと、前にココママに選んでもらった服は旅行に持つていくから、もう鞆の中に仕舞つてあるんだよ」

「あつ……、そういうことなんだ。それは私の考えが及ばなかったね。」

うん、もつとたくさん可愛い服を選んであげるよ」

「で、できたら普段から着られるような服も選んでくれるとその……うれしいな」

「うん、任せて!!」

つい先ほどまで怒っていたかと思つたのだが、すぐに笑顔へと戻つていた。

そして、さも当然のように手を繋いでくる。

「それじゃあ、行きー！ 今日はいくさん買う物があるからね」

「えつと、でも旅行に行くための準備……だよな？ 服もあるし、足りないものは向こうで買えば良いし、……あとは何かいる物があるの？」

「いっぱいあるよ。祐季くんの服とか、祐季くんの浴衣とか、祐季くんの着物とか……」

「って、全部僕の服?!?!?」だ、大丈夫だよ、僕、この前こよりさんに買ってもらった服があるし、ほらっ、あまりたくさんあっても、みんなと出かけるときくらいしか着ないし……」

「これからもたくさんお出かけするから、たくさんあっても困らないと思うよ」

「お、同じ服で良いよ……」

「ほらっ、行くよ。今まで祐季くんに会えなかった分、今日はたっぷり堪能するって決めてたんだからね!」

「き、今日じゃなくても明日もあるよ?? それにあまり明日に疲れを残したくないから——」

「疲れたら私がおんぶしてあげますね」

「そ、それ、逆だよ!」

「冗談だよ。でも、明日もあるから今日は早めに集まったの。配信も休みにさせてもらったのは、みんなでたっぷり遊ぶためだよ」

「三期生全員で集まるの、久しぶりだもんね。それも旅行に行けるなんて……。でも、その間配信できないけど、大丈夫なのかな?」

「——大丈夫だよ。祐季くんの寝言だけを流した放送とか、私は楽しみにしてるから」

「しないよ!?! そんなこと——」

「私がするから大丈夫!」

「大丈夫じゃないよ!?!」

「あははっ、仕方ないよ。祐季くんがかわいいのがいけないんだよ」
「そ、そんなことないよ!?! それをいうならこよりさんだって——」

そこまで口にして、今自分が何を言おうとしていたのかに気づく。すぐに顔が真っ赤に染まり、こよりさんが見られなくなって、顔を背けてしまう。

「私がどうしたの?」

「し、知らないよ。それよりも早く行こう!!」

先を歩いて目的地であるショッピングモールを目指す。

ただ、最近こういう事に慣れすぎてうっかりしていたけど、僕は男でこよりさんは女性。

こうやって二人つきりで出かけるのって、どうみてもデート……だよね？

意識を失ってしまうと、どうしても恥ずかしくなってしまう。

この先、本当にどうなるのだろう――。

◇◇◇

一度あった事って二回あるって思わないとダメだよね。

僕は苦笑をしながら、目の前の光景を眺めていた。

こよりさんが真剣な表情を浮かべて、僕の服を選んでいる姿を――

ただ、ここって女性服売り場なんだよね……。それもかわいい系のものが揃った……。

おかしくない？ ねえ、おかしくないかな??

それにこよりさん、服だけじゃなくて、水着なんかも見てない??

あれっ、僕の目が悪くなっただけかな？

思わず顔を背けたくなってくる。

ただ、こういう光景を見ると、今日出かけているのはデートではなく、単に僕をおもちや……もとい着せ替え人形にして遊ぼうとしているだけだとわかった。

うん、そうだよね。

こよりさん、いつもは真面目なお姉さんに見えるけど、僕を前にす

るところだったもんね。

知ってたよ。うん、知ってた……。

「うーん、こっちのピンクのスカートも似合いそうだし、でもでも、祐季くんには可愛らしい柄がついているほうが……。迷うなあ……。全部買っちゃおうかな?」

「ぜ、全部はさすがに多すぎるよ!」

「でもでも、全部買ったとしてもルルちゃんが今まで、祐季くんにスパチャで投げた分には遠く及ばないんだよね」

「ルルは言っても聞かないからね……」

その分、僕もルルに何か返せたら……とは思っているけど、中々忙しくて一緒に配信ができてないのが現状だった。

もちろん忙しいのは僕だけじゃなくてルルも同様だが――。

「祐季くんも可愛いルルちゃんには、あまり強く言えないんだね……。ルルちゃん、可愛いもんね。すごく懐かれてるみたいだし……」

意味深に二回同じ事を言うこよりさん。

「まあ、ルルは確かに可愛いけど、僕に懐いているのは同性だから、他の人たちより僕に相談しやすいだけだと思うよ?」

シロルールのメンバーなら知ってることだと思つて、当然のように言う。

ただ、その瞬間にこよりさんの動きはゆっくりと固まっていた。そして、ロボットのような動きで僕の方を見てくる。

「えっ……、ど、同性ってアバターの……だよね?」

「――こよりさん、もしかして聞いたことない? 僕と同じだよ」

「祐季くんと同じって事は性別が段ボール……」

「そんなわけないでしょ!?!」

思わずつつこみを入れてしまう。

こよりさんにしては珍しくわかりやすいほどに動揺をしているようだった。

「あつ、そ、そうだよ。えつと、私はルルちゃんが元々配信してた夏瀬ななちゃんだつてことくらいしか聞いてなくて……。あ、あれっ、ということはルルちゃんつて男の娘?」

「ちよつと、言い方は気になるけど、そうだよ。つて、あれっ? 一緒にお風呂入った、とか言つてたよね? 異性の子と入るわけないし、それでわかるよね?」

「わからないよ!?! だつて祐季くんは取つても可愛らしい女の子にか見えないんですからね! もし襲われたら——」

「——こよりさんは心配しすぎだよ。でも、ありがとうね」

「い、いえ、私の方こそ勝手に暴走してごめんね。——あつ」

何か思い出したように、こよりさんが口に手を当てる。

そして、申し訳なさそうに言ってくる。

「えつと……、その……、明日行く温泉なんだけど、実は混浴のところなんだ……。担当さんをお願いして……」

「えつ!?!? ど、どうして……!?!?」

「だつて、ルルちゃんが良くて、私たちがダメって言われたから、それなら一緒に入つて驚かそうと思って……。ルルちゃんが男の娘だなんて思わなかったから——」

「ルルちゃんは関係ないよね!?! ほらつ、僕たちは異性だから……。それにこよりさんが良くて結坂や瑠璃香さんがダメって言はずだよ!?!」

「もちろん二人の承諾はもらつてるよ」

「な、なんで!?!?」

「えつと……、ほらっ」

こよりさんが僕の方にスマホを見せてくれる。
そこには結坂や瑠璃香さんとのやりとりが残されていた。

ココネ：『今度の温泉、混浴もあるところなんだって』

カグラ：『こ、混浴?!』

ユイ：『うみゅー。こんよくー。たのしみなのー』

カグラ：『ち、違うわよ、ユイ! し、知らない人と一緒になんて入れないわよ!?!』

瑠璃香さんの反応を見ていると安心してくる。

これが普通の反応だね。楽しみにしているのはおかしいよね。

ただ、カグラさんが心配していることはそういうことじゃなかった。

ココネ：『貸し切りにもできるらしいよ。担当さんをお願いして、当日は貸し切ってもらったよ』

ユイ：『うみゅー、さすがココママなの。ママなのは伊達じゃないの』

ココネ：『ママじゃないですよ!?! ううう……、最近四期生の子たちにもママ扱いされるんですよ。何とかそれを払拭しようとしてるんですよ……』

カグラ：『それは……無理ね。もう一期生や二期生からもママ扱いされてるわよ。でも、貸し切りなら問題ないわね』

ココネ：『えええ、先輩たちからもママって呼ばれてるって本当ですか!?!』

ユイ：『うみゅ、ユイもユキくんも全力で広めてるの』

ココネ：『ちよつと、何してるのですか!?! ダメですよ、そんなことをしたら!!』

カグラ：『……今更じゃないかしら? もう手遅れでしょ?』

ココネ：『て、手遅れじゃないです！』

ユイ：『ココママはもうユキくんママなの』

ココネ：『それは……そうですね』

話題が脱線するのはいつものことだけど……。

「こよりさん、そこは否定してよ!？」

「えっ？ 間違ってないよね」

「間違ってるよ!？」

「まあ、それはおいておいて、見ての通り誰も反対してないよね？」

確かにココママの言うとおり、誰も反対をしていない。

「み、みんな、おかしいよ!？ ぼ、僕は男なのに……」

「ユキくんは性別、段ボールだよ?」

「だ、段ボールが本体じゃないよ!？ ほらっ、今日は段ボールを着てないでしょ?」

「そうだった……。祐季くんの服を見ないと！ 可愛いのを選んであげるからねー」

「えっと、僕は自分で自分のを見れるからこよりさんは自分のを——」

あたふたとしていると側にいた店員さんに目をつけられてしまう。

「なにかお探しでしょうか?」

「わわっ、え、えと、えと……」

店員さんに急に話しかけられるのって苦手なんだよね……。

僕が言葉に詰まらせていると代わりにこよりさんが答えてくれる。

「はいっ！ 祐季くんの服を探してきました!」

「ち、違うよ……」

恥ずかしさのあまり、こよりさんの後ろに隠れて、顔を覗かせながら言う。

すると、店員さんは笑みを浮かべながら言う。

「お姉さんと服を買いに来たのかな？ 私が良い服を見繕ってあげますね」

「えっと、いらな——」

「はいっ、お願いしますー！」

僕が断ろうとしても、こよりさんがあっさり引き受けてしまう。

そして、そのあと僕は予測通り、二人の着せ替え人形となり、昼を過ぎる頃にはたくさんの手荷物を持つこととなった。



「うう……、やっぱり服を着せられるんだね……」

シヨツピングモールにあるフードコート。

買った服の一つ、なぜかうさ耳が付いた純白のパーカーを着ていた僕は、シクシクと涙を流していた。

「大丈夫です。とっても可愛いですよ」

両手を合わせて、はにかんでいるこよりさん。

「可愛い服って事はわかるよ。……着ているのが僕じゃなかったらね」

「違うよ！ 祐季くんが着ているから良いんだよ！」

「こよりさんが当然のように言いきってくる。」

「それに、このパーカー……、ももこしてて少し熱いね。秋用とかじゃないのかな？」

「可愛いを作るためなら、そのくらい我慢できるよね？ みんなを魅せるのが配信者だもんね」

「ううう……、僕、顔出し配信してないよ……。だから服で魅せる必要はないよ……」

「私のやる気が出ます！」

「き、今日は配信しないから……。やる気にならなくてもいいんだよ……」

「明日、配信するよ。今から気合い入れておかないとね！」

そんなことを言いながら僕に抱きついてくるこよりさん。

いつもの部屋なら良いけど、ここはフードコート。

僕たちのやりとりを見ている人たちもいる。

「こ、こよりさん。抑えて……、ほらっ、ここは外だから……」

「——部屋の中ならいいんだね？ うん、言質はとったからね」

「えっ……、ち、ちが——」

笑顔を見せてくるこよりさんを見ると僕も仕方ないかと思えてきて、思わずため息を吐いていた。

第19話 三期生の温泉旅行（寝るまで配信編）

『#ココユカ温泉旅行』寝たら終了。寝るまで耐久配信《雪城ユキ／真心ココネ／神宮寺カグラ／羊沢ユイ／シロルーム》』

4. 2万人が待機中 20XX／07／28 00:00に公開予定

☒120 ☒0 ?共有 ≡?保存 ∴

温泉旅行当日。

一応頼まれていたので、当日の夜に配信を予定していた。

みんなに話したいこともたくさんあったし、こうやって三期生全員が集まったのオフコラボも久しぶりだったので――。

待機画面には、アカネ先輩がノリノリで描いていた、バスタオル姿で温泉に入る僕たち四人の姿。

奥の方で呆れた表情を浮かべながら、僕たちを眺めるカグラさん。

僕の腕を掴み、満足そうな表情を浮かべるココママ。

僕のバスタオルを引っ張ろうと、ニヤリ微笑んでいるユイ。

そして、真ん中で顔を真っ赤にして慌てふためいている僕。ゆきくん

うん、未来予知でもできるのかな？

と、思えるほど、全く同じ事が温泉でも繰り広げられたので、思わずこれを待機画面に選んでしまった。

【コメント】

：寝るまで耐久って、もうユキくんの寝る時間じゃないのか？

：開始即終了が見えているw

天瀬ルル :ううう……、なんで温泉旅行が別なの……。

姫野オンブ :楽しそうで何よりなのですよー

：今頃、ユキくんたちは温泉か……

：俺も入りたいな

：→通報しました

まだ開始一時間前にも拘わらず、コメントが大いに盛り上がっていた。

そして、コメントで予想されていたとおり、僕は既にあくびをかみ殺して、なんと寝ないように堪えていた。

「ユキくん、大丈夫？ まだ配信開始まで時間があるし、少しだけ寝ておく？」

こよりさんが優しい言葉を投げかけてくれる。

しかし、僕は首を振る。

「大丈夫……。今寝ると配信時間に起きられなさそうだから……」

「ユキくんがそういうなら仕方ないね……。でも、昨日も寝てないのだから無理をしないでね……」

「うみゆ?! またユキくんは寝てないの!? 開始したら即終了しておくから、早く寝るの!」

既に配信モードに入っている結坂がポンポン、っと布団を叩いてくる。

「ね、寝ないよ!」

「寝るの!!」

「はあ……。二人とも、そのくらいにしておきなさい。ユキも起きてても良いけど、それで体調を崩したら許さないわよ。ユイは逆に寝なさい! あなたが寝てる場所は見たことないわよ」

瑠璃香が呆れながら言ってくる。

「た、確かに、ユイが寝てる場所は見たことがないかも……」

「う、うみゆ!? ゆ、ユイはちゃんと寝てるの! ユキくんと同じ布団

で寝てるの!」

「ダメですよ!? ユキくんは私と一緒に寝るんですからね!」

「ち、違うよ!? 僕は一人で寝るからね!」

「もう、みんな一緒に寝たら良いんでしょ!」

呆れながら言ってくる瑠璃香さん。

でも、それも間違ってるよ……。瑠璃香さんもだんだんと三期生の毒に蝕まれてない?

「うみゆ、それなの!!」

「決まりですわね!」

「えつと……。僕の意見は……。?」

当然のように無視される僕の言葉に思わず口を挟んでしまう。

すると、こよりさんが当たり前のように言ってくる。

「ユキくんを一人にして、もし誰かに襲われでもしたら大変ですからね」

「……何で僕が襲われる方なの?」

「うみゆ、確かにユキくんは襲われそうなの。ゆいが段ボールで犯人を吹き飛ばすの!」

「ぼ、僕の段ボールは渡さないからね!」

「——その前に段ボールは武器にならないことを突っ込みなさいよ……」

瑠璃香が呆れ顔を浮かべてくる。

「そ、それもそうだね。段ボールは防具だもんね」

「それも違うわよ……」

そんなやりとりをした後、結局僕たちはみんな固まって眠ること

になった。

◇◇◇

配信開始の時間となる。

画面には、いつものアニメーションを流していた。

そして、僕の瞼は重くなり、うつらうつらしていた。

ココネ：『ユキくん、大丈夫？』

ユキ：『だ、大丈夫……。ね、寝てないよ……。？』

【コメント】

：ユキくん、起きてた!?

：でも、すぐ寝そうw

：頑張れw

天瀬ルル：ユキ先輩、僕と一緒に寝ましょう

：ルルちゃんが本能ダダ漏れだw

ユキ：『うにゅ……。ね、寝てないからね……。』

ユイ：『うみゅー、うにゅーはユイの言葉なの!!』

カグラ：『とりあえず、ユキは寝てなさい。フラフラしてるわよ』

ユキ：『だ、大丈夫……。僕、まだ寝てないからね……。』

ココネ：『はいはい、ユキくんはこっちですよ。私のお膝で寝て下さいね』

ユキ：『うん、ココママ……。』

ココネに膝枕をされながら、僕の瞼はゆっくり閉じていった。

ユイ：『うみゅー！』ということで、今日の配信はここまでなの。お

疲れ様なの!』

ココネ：『こらっ、ユイちゃん。ユキくんが寝てるからもう少し静か

にね』

カグラ：『まだ開始一分も経ってないわよ……』

ユキ：『うみゆ……、僕はまだ寝てないよお……』

カグラ：『確かに一旦枠を閉じて、別枠をした方が良いわね』

ココネ：『そうですね。では、一旦お疲れ様です』

【コメント】

：やっぱりユキくんだったw

：開始早々w

天瀬ルル：ユキ先輩の寝言、かわいい

：次枠が始まるまで待機してるよ

：ユキくんは拾っていきませ

《：？1,000 寝息期待》

この放送は終了しました。

『《#ココユカ温泉旅行》寝たら終了。寝るまで耐久配信《雪城ユキ／真心ココネ／神宮寺カグラ／羊沢ユイ／シロルーム》』

5. 1万人が視聴 0分前に公開済み

☒1. 5万 ☒16 ?共有 ≡?保存 …

チャンネル名：Yuki Room. 雪城ユキ

チャンネル登録者数40. 1万人

◇◇◇

『《#ココユカ温泉旅行》静かに雑談《真心ココネ／雪城ユキ／神宮寺カグラ／羊沢ユイ／シロルーム》』

5. 1万人が視聴中 ライブ配信中

☒367 ☒2 ?共有 ≡?保存 …

【コメント】

：始まった

：やっぱりユキくんはおねむかw

：耐久RTAだったなw

：おいつ、お前ら、静かにしろ。ユキくんの寝息が聞こえないだろ！

天瀬ルル　：ぼくには聞こえる

ユキくんが寝てしまったので、今度はココネのアカウントから配信を始める。

すると、さつきまでいた人たちがそのまま移動してくるので、いきなり視聴者数が増加していた。

ココネ：『みなさん、こんばんはー。真心ココネですよー。今日はユキくんが寝ているので静かに進めていきたいと思います』

ココネが小声で話していく。

すると、それに呼応してカグラが小声で自己紹介をする。

カグラ：『神宮寺カグラよ。さすがに旅行の夜は疲れるわね』

ユイ　：『うみゆ？　そうなの？　ユイはまだまだ元気なの！　これから耐久配信も余裕なの！』

カグラ：『絶対しないわよ!?!』

ココネ：『こらっ、二人とも！　うるさくしたらダメでしょ!』

ユイ　：『うみゆ、ココママが一番うるさいの』

ユキ　：『うにゆ……、んっ……？　もう朝……?』

ココネ：『まだ夜だから寝ておいてくださいね』

起きそうになったユキを再び寝かしつけるココネ。

【コメント】

：相変わらずの三期生w

：ユキくんの寝言助かる

：ココママがまともだw
：ユキくんが寝ちやつたからな

ココネ：『とりあえず、温泉旅行に来てるので、昼の話でもしましよ
うか?』

ユイ：『うみゆ、温泉に入ったの!』
ココネ：『さ、さすがにそれだけじゃわからないですよ。順番に話し
ていきますね。えっと、まずは駅で待ち合わせをした話からですね』

◇◇◇

温泉旅行当日。

僕はリュックとトランクを必死に運んで、待ち合わせ場所に来てい
た。

「ううう……、重い……」

こうやって誰かと旅行に行くということがなかったので、必要にな
りそうな荷物を片っ端から準備していた。

その結果が今の大量の荷物だった。

「あつ、祐季くん、おはよ……って、その荷物、どうしたの!」

僕の姿を見た瞬間にこよりさんは驚きの声を上げる。

「おはよう、こよりさん。えっと、旅行の荷物だよ??」

「夜逃げでもしたのかと思ったよ!?! 重くないの?」

「あ、あははっ……」

「重いんですね。ちよつとこっちに来て! まだ私の家の方が近いか
ら、いらぬ荷物は置いておこう?」

「だ、大丈夫だよ!?! このくらい——」

「いいからー！」

こよりさんに引つ張られて、一旦彼女の家へと向かう。
そして、着いた瞬間に鞆がひっくり返される。

「えっ!? ちょ、ちよつと、こよりさん?！」

「うーん、これもいらぬ。あれもいらぬ……！」

ぽいつ、ぽいつ、つと避けられていく荷物たち。

「祐季くん、さすがに温泉旅行へ行くのに温泉の元はいらぬよ？」

いくらなんでも……！」

「で、でも、いざ行ったときに、温泉が工事中で入れない……とかなつたら、みんな困るかなつて。ちよつとでも、温泉の気分が味わえるかなつて——！」

「考えすぎだよ。それに温泉街へ旅行に行くのだから、どこか入れるよ。うーん、ちよつと私が整理するから、祐季くんはこの服に着替えておいて！」

こよりさんに、ユキ犬姫の衣装を渡される。

薄黄色のフリルやリボンがたくさんあしらわれた純白のドレス風ワンピース。

あまりにも高い完成度。

サイズもぴつたり。

どう考えても僕用に作られたものだった。

「うん、わかったよ……。つて、えっ!? ど、どうして、こんなものがここにあるの!?!」

「担当さんから預かってきたよ! 『写真よろね!』つてコメントを添えてね」

「き、着ないよ!? い、今の格好でも頑張ってるんだからね!?!」

今の僕の格好は通常のユキくんスタイルだった。
ワンピースと犬耳パーカー。それにレギンス。

こよりさんに買ってもらったもので、知り合いに会うときや、近くの場所へ行くときなら問題はないのだけど、やっぱり旅行ともなると勇気がいる。

そのおかげで、昨日もろくに寝ることができなかった。

ただ、旅行の前日なら普通だよな？

「えっ？ 着てくれないの？」

こよりさんが凄く悲しそうな表情をする。

「うっ……。あつ、えとえと……。その……」

さすがにそんな表情をされると僕も言葉に詰まってしまう。

「祐季くん……。私の事が嫌いになった……。？」

「そ、そんなことないよ!？」

「なら、着てくれる……。？」

「うう……。うう……。わ、わかったよ。ちよつとだけだからね？」

「やったー! はいっ、これとこれ、あとはこれもいるかな?！」

服だけじゃなくて、ヘッドドレスから靴下、挙げ句の果てに靴すらも渡される。

そして、こよりさんは満面の笑みを浮かべていた。

それを見て、僕は謀られたことに気づく。

「だ、騙されたの、僕!？」

そう言いながらも言ってしまった以上、着ないわけにはいかないの

で、僕は渋々ユキ犬姫の格好をすることになった。

◆◆◆

「ううう……、は、恥ずかしいよ……」

着替え終わった僕は顔を真っ赤にしながら、ギョツと服を握りしめて恥ずかしさを堪えていた。

すると、こよりさんは恍惚の表情を浮かべて、何度も写真を撮ってくる。

「祐季くん、とつてもかわいいよ。額に入れて飾りたいよ。はあ……はあ……」

「ちよっ!? 危ない人になってるよ!」

「危なくないよ? ほらっ、ちよっど写真を撮ってるだけだよ?」

「撮らなくていい……。撮らなくていいから……」

「また一つ、祐季くんアルバムの写真が追加されたよ」

「いつの間になんなアルバムが!」

「あっ、これは秘密でした。忘れて下さい」

「忘れられないよ! ううう……、恥ずかしいよ……。なんだか、スーするし……」

今まで着てきた服は下にレギンスを履いて、まだ男としての威厳を保っていた。

しかし、今回は素足を出している。

長めの靴下を履いているとはいえ、それがレギンスの代わりにはなり得ない。

つまり、いつもの数倍、数十倍、いやもっとかもしれない。

そのくらい恥ずかしいのだった。

「この下にズボン、履いて良い?」

一応こよりさんに確認をすると、笑顔ですぐに返事してくれる。

「ダメ！ だよ」

「——だよね……。うん、知ってたよ……」

「だって、こんなに可愛いんだから。祐季くんはかわいい。かわいいは正義だよー！」

この話題を続けると、更に何か着させられるかもしれない。少し離れた方が良いかもしれない。

「そ、そうだ。こよりさん、僕の荷物はどうなったの？」

「あつ、準備できてるよ。ほらっ」

僕が話題を変えようとしたことに気づいていないのか、こよりさんは普通にトランクを渡してくる。

たくさんあった荷物は、どういう魔法を使ったのか、トランク一つだけに収まっていた。

「す、すごい……」

「えへへっ。これが私の収納術だよ。必要最低限のものだけ持っていけば十分だからね」

「ほ、本当にありがたいよ……。こよりさん、ありがとう」

「うん、それなら次は水着に——」

「そ、そろそろ待ち合わせの時間じゃないかな!? ほらっ、こよりさん、もう行く準備をしないとー！」

「あつ、もうそんな時間か……。残念だね」

こよりは少し寂しそうな表情を浮かべていた。

「で、でも、旅行中はずっと一緒でしょ!? 違うのは夜、寝るときの部

屋くらいかな？ だから寂しくないよ？」

「えっと、少し違うけど、それもそうだね。うん、それじゃあ、行こっか？」

「うん、そうだね。それじゃあ、僕はそろそろ元の服に——」

「それじゃあ、行こっか？」

「僕の服——」

「行こっか？」

「うん、わかったよ……」

押し切られるまま、僕はユキ犬姫の姿で家の外に出ることになって
いた。

第20話 三期生の温泉旅行（寝るまで配信編ぱーと
つー）

ユイ : 『うみゅー!! ユキくんの写真、欲しいのー!!』

ココネ : 『そうですね。あとから三期生のチャットに貼っておきま
すね』

カグラ : 『それでユキがあんな格好をしていたのね。さすがに見た
ときは驚いたわよ』

ユイ : 『いつものユキくんだったの』

ココネ : 『可愛かったから普通ですよ?』

カグラ : 『まあ、可愛かったことは否定できないわね』

【コメント】

: リアルユキ犬姫だと!?

: お、俺も見たい

《天瀬ルル : ?10, 000 こ、これでぼくにも写真を下さい》

: →ルルちゃんwww

: ココママ策士w

ユイ : 『次はユイたちが登場するの。ココママたちが遅れてやつ
てきたところなの』

カグラ : 『そうね。それじゃあ、待ち合わせ場所から電車で移動する
ところまでを話しましょうか?』

◇◇◇

「うみゅーー!! 遅いのーー!!」

待ち合わせ場所にたどり着いた僕たちは、揃って結坂に怒られてい
た。

「ご、ごめん……。少し遅れちゃって……」

時間は待ち合わせの二分後。

それだけ聞くとたいしたことないように思えるかもしれない。

でも、いつも一時間前には着いているはずの僕がいなかったのだ。

きつと凄く心配していたに違いない。

だからこそ、僕は素直に謝っていた。

「全然待ってないから構わないわよ。彩芽あやめもついさつき来たところよ」

「あつ、バラしたらダメなのー!」

「それよりも今日は……。まあ、祐季の服については何も言わないでおくわね。いつものことだから——」

「どつても可愛い。これって例の賞品なの?」

「そうみたい。私が預かってたので、せっかくだから着てもらっちゃった」

こよりさんはいたずらがバレた子供ののように、可愛らしく舌を出していた。

「ううう……。それよりもこの服、着替えたい……」

「ダメだよ?」

「ダメなの!」

「諦めなさい」

三人に即答されてしまう。

——あれっ? これって僕がおかしいのかな?

思わず首を傾げてしまう。

しかし、それを気にする暇もなく、僕たちは移動することになった。

「そういえば、今回温泉行くのって、僕たち三期生だけなんだね」

「最初は四期生も同じ日にしようとしたらしいよ？　でも、みんな集まるとゆつくり仲を深めることもできないから、って担当さんが配慮してくれたみたいだね」

「うみゆー、枕投げは多いほうが楽しいのー！」

「メインは温泉よ？」

「桶を投げて戦うのー！」

「あ、危ないわよ！　私も投げ返すわよ？」

「もう、二人とも。温泉は遊ぶ場所じゃないよー！」

こよりさんに注意される結坂と瑠璃香さん。

「うみゆー……、ごめんなの。ユキくんのタオルを捲る程度に抑えておくの」

「そうね。私も彩芽に乗せられすぎたわ。ごめんなさい。今度、祐季のアルバムを見せてあげるから許して欲しいわ」

「仕方ないね。二人がそんなに反省してるなら……」

こよりさんが結坂や瑠璃香さんと熱い握手を交わしていた。

しかし、僕には不穏な台詞にしか聞こえなかった。

「ちよつと待つて！　なんか色々とおかしいことが聞こえたけど気のせいかな？」

「うみゆ、気のせいなのー！」

「ちよつ!?!　まだどれのことかも言ってないよ!?!　それに気のせいじゃないからね!?!」

「とりあえず祐季くん、そろそろ電車に乗るからあんまり騒いだらダメだよ。はいっ、迷子にならないように手を繋ぎましょう」

「うん……。って、僕、子供じゃないからね!?!　迷子にならない……と

は言えないけど」

「迷子になるなら手を繋いでおこうね」

「こよりさんに手を掴まれてしまう。」

「うみゆ!? ユイも掴むの!!」

「こよりと反対の手を結坂が掴んでくる。」

「ちよ、ちよつと!? なんで二人とも握ってくるの!? る、瑠璃香さん

……た、助け……」

「あつ、電車が来たわよ。ほらっ、急いで!!」

僕のことを視界に入れようとせずに、さっさと電車の方へ行ってしまう。

「そうだね。私たちも行こっか」

「うみゆー! 温泉でゆっくりするの」

「ぼ、僕は一人で歩ける! 歩けるからあ……」

僕たちも三人で手を繋いだまま、電車へと向かって行った。



【コメント】

：珍しくココママがママしてる

：ユキくんをお持ち帰りしたい

天瀬ルル　：ぼくとユキ先輩が離ればなれになったのは担当さんのせい……

：ルルちゃん、怖いよ!?

：ユキ犬姫を探せばユキくんに会えるのか

ココネ：『そういえば、まだカグラさんのユキくんアルバムを見てないですね』

カグラ：『わかってるわよ。さすがに持ってきてないから今度うちに来てくれるかしら？』

ココネ：『わかりました。それじゃあ、私のユキくん写真集宝も持っていきますから、それを眺める雑談オフでもしますか？』

ユイ：『うみゆう、ゆいもゆいも!! ゆいも行くのー!!』

カグラ：『わかったわよ。でも、くれぐれもユキには内緒よ?』

ココネ：『そうですね。ユキくんにはバレたらダメですね。邪魔してきますから』

ユイ：『うみゆう、わかったの。黙ってるの』

【コメント】

天瀬ルル：ぼ、ぼくも行きたいです!

：楽しみなコラボ配信だ

：みんなでユキくんアルバムを持ち寄って感想を言い合うのかw

：他に行きたい人もいそうw

ココネ：『では、次は電車の中での出来事ですね』

ユイ：『トランプー!!』

カグラ：『はいはい、みんなでゲームしてた話ね』

ユキ：『すう……』

◇◇◇

電車に乗ると早速、戦争が勃発していた。

その理由は誰がどの席に座るか……という、単純な物だった。

「うみゆうー! ゆいが隣に座るの!」

「私が隣に座って、責任を持って祐季くんを見るよ」

「はあ……、全く二人は——」

いつものやりとりだけど、ここは電車の中。

人の目が気になって、僕一人だけそわそわとしていた。

そこでため息交じりの声を出していた瑠璃香さんを見てハツとなる。

こよりさんと結坂が争っているなら、一番喧嘩にならない場所は――

少し考えた結果、僕は瑠璃香さんの隣に座っていた。

「あつ……」

「うみゆ!？」

「えっ?」

三人とも驚きの声を上げるが、僕は平然と言つてのける。

「ここに座るのが一番喧嘩にならないよね?」

「そ、そうだね……」

「うみゆー……、負けたの……」

「祐季もやるようになったわね」

そして、結局窓際に僕とこよりさん。

通路側に瑠璃香さんと結坂が座ることになった。

それからしばらくは電車の揺れを感じながら、のんびり雑談をしていたのだが、唐突に結坂がトランプを持ち出してくる。

「勝負なのー!!」

電車の中でもやたら元気な結坂。

――うん、旅行中ってテンションが上がるよね。

理由はわかりつつも、僕は昨日寝ていないこともあり、心地よい電車の揺れによってウトウトとしていた。

「うみゆ？ 祐季くん、眠たいの？」

「うーん、大丈夫……」

「私が膝を貸そうか？」

こよりが自分の膝を叩いてくる。

ただ、向かい合って座っている現状でその膝を使うことはできない。

いや、そもそもが使うつもりもなかったけど……。

「だ、大丈夫だよ!? そ、それよりもトランプだね。……う、うん、やろっか」

顔を染めて、大慌てで言う。

すると、こよりさんはどこか残念そうだった。

「うみゆー、それなら祐季くんの膝枕を賭けて勝負なの！」

「負けないよー！」

こよりさんと結坂がバチバチと火花を飛ばし合っている。

その様子を呆れた顔で見ているのは、瑠璃香さんだった。

「全く……、こんな電車の中で人目につくことをしたらダメでしょ？」

「る、瑠璃香さん……」

暴走を始めたときに味方になってくれるのは瑠璃香さんだけだよ。ね。

やっぱりカグラさんしか勝たないよね。

目を輝かせて、瑠璃香を見ているとカグラさんは更に言葉を続け

る。

「迷惑を掛けないように、膝枕は今日の夜にするべきでしょ。全く、他の人に迷惑を掛けたらダメよ！」

うん、僕の味方はここにはいなかったらしい……。

「そ、それよりもどうして当たり前のように僕が景品になってるの!? た、たまには僕じゃなくて、結坂やこよりさんが景品をやつてよ」「それじゃあ景品にならないよ」「うみゆー、みんなが欲しいものだから必然的に祐季くんになるの」「まあ、他の人だと景品にならないわよね。景品役に私がないことは気になるけど」

どうしても、僕が景品、という部分は揺るがないようだった。それなら追加のルールを加えるべきだよな？

「わかったよ。それなら僕が勝った場合は——」「うみゆ、好きな人に膝枕をしてもらうと良いの」「全員でも良いよ」

ちよつと待つて!? それだとどっちにしても景品ってことじゃないの!?

「ううう……、ま、負けないからね！ 僕が勝つて、誰にも膝枕をされないってルートを勝ち取ってみせるよ」

「うみゆ、そんなことを言つて、全員に膝枕されることを望んでるの、祐季くんは」

「ち、違うよ!?!」

「そんなこと私が許さないよ!?! 勝つのは私だからね!」

結局いつもどおり、景品を賭けた大富豪が始まっていた。
そして、本気になったこよりさんは結坂に勝るとも劣らない結果を
残していた。

ただ、やはりゲームでは結坂の上をいく者はいなくて、結局負けて
しまった。

◇◇◇

「うみゆー、勝ったの！」

「ま、負けた……」

座席の上に立ち、ガッツポーズをする結坂。

一方、床に手を付きがっくりと肩を落とすこよりさん。

「あ、あの……、そ、そこまで悔しがらなくても……」

「だって、祐季くんの膝枕だよ!？」

「ほ、僕がされるほうだね？ えつと……、別に恥ずかしいだけで嫌
なわけじゃないからその……、いつでもしてくれていいんだよ……
？」

「ほ、本当ですか!？」

「あつ……、えつと、人前じゃなかったらね……。ほ、ほらっ、二人の
時とか……」

「二人つきりの時は祐季くんを自由にして良いんだね！」

「うみゆー。ちゃんと聞いたの。祐季くんと一緒にホラーゲームする
の」

「えっ!? ち、ちがつ……。そういう意味の自由じゃない……」

「そうね。私も料理がうまくなった……と思うから、そろそろ祐季に
食べてもらおうかしらっ」

「そ、それはその……。た、食べられるもの……だよね?」

「どういう意味よ!？」

「それなら、今度祐季くんとオフコラボをするね。約束だよ?」

「うみゆー、ユイもするのー!」

「私もするわよ」

「えとえと、多いよ……。そ、その、予定を見てからね……」

「大丈夫だよ。祐季くんの予定は把握してるからね」

「ちよつ!? なんて僕が覚えてないのに、こよりさんが覚えてるの!?!」

「隙があつたらコラボを入れようと確認してるからね。自分の予定をみるついでに一緒に見るだけだからね」

「た、確かに予定には載ってるけど……。も、もしかして結坂と瑠璃香さんも覚えてるの!?!」

「うみゆ? ユイは知らないの」

「私もさすがに自分の分だけね。その日の配信予定くらいは見てるけど」

「ユイはその日の分も見てないの」

なぜか結坂が一番偉そうにしている。

その様子に苦笑を浮かべながら、僕はこよりさんの方を見る。

「えっと、確かに僕も三人の予定は見てるね……。うん。最近忙しくてライブで行けてないけど……」

なぜか最後に僕がこよりさんのフォローをすることになってしま
う。



ココネ：『結局、ユイが圧勝しちゃったよね』

ユイ：『うみゆ、ユイにゲームで勝とうなんて五万光年早いの!』

カグラ：『えっと、光年は距離だし、そもそも結構な接戦だったで
しょ?』

ユイ：『うみゆ……。正義は最後には勝つの』

ココネ：『だ、誰が悪ですか!?!』

ユイ : 『ココママなの』
カグラ : 『はいはい、また話が脱線してるわよ。どんどん次へいきま
しょう。次は温泉街を歩いた話かしら?』

【コメント】

: ユイちゃんは強いなあw
: あれっ、でも今、膝枕してるのはココママ……
: カグヤ様……、どんどん自然になってるな……
: 三期生のまとめ役は実はカグラ様?

カグラ : 『カグヤじゃないわよ! いつも言ってるけど。あと、さり
気なく『力』の漢字を使ってるけど、わかってるからね』

ユイ : 『うみゆ、あの頃の純粋なハグラ様を返して欲しいの』
ココネ : 『えっ? カグラさん、純粋じゃないの?』

カグラ : 『誰がハグラ様よ!? あと、今でも十分純粋だからね?』
ユイ : 『うみゆ……、この流れはするべきかなって思ったの』
ココネ : 『みんなに愛されてるんですね』

カグラ : 『わ、私はもっと普通に相手をしてきていいのよ?』

【コメント】

: 普通に相手してるだけだよな?

: カグラっち、こうやって相手にして貰えるのがうれしそうだから
な

: ココママが段々自然に戻ってきたなw
: ユキくんが寝ちやつてるからなw

カグラ : 『また脱線してるわね。と、とりあえず次よ次。ユキが迷子
になって大変だったのよね』

ココネ : 『ユキくん、誘拐されたのかと思って大変でしたよね……』

ユイ : 『うみゆ!! ユキくんはまだまだ子供なの! 次からはユ
イがしっかり手を繋いでおくの!』

第21話 三期生の温泉旅行（寝るまで配信編ぱーと
すりー）

温泉街に辿り着いた僕たちは、まず最初に荷物を置くために旅館へ
向かっていた。

それはいいのだが――

「いい加減、この服着替えてもいいかな？」

「だめ！ 絶対にだめ！ だってとつてもかわいいんだもん！」

「ちよつと待って!? それって理由になってないよね？」

「ものすごくちゃんとした理由だよ」

「うみゆ、もちろんなの。祐季くんはとつてもかわいいから祐季くん
なの」

「諦めなさい。祐季が口でこの二人に勝てるはずないでしょ？」

「ううう……、だつてこの姿はものすごくスースーするんだよ？ ぼ、

僕男なのに……」

「うみゆ、祐季くんは性別祐季くんなの」

「シロルームの中ではそうなっているわね」

「間違いないよ。あと、犬好きのみんなも同じこと思っているかな？」

「……僕に味方はいないの……?」

「うみゆ、みんな味方なの！」

「そうだよ、みんな祐季くんの味方だよ！」

「ほ、本当かなあ……」

疑心暗鬼でみんなの顔を見る。

しかし、こよりさんも結坂も、いつもと同じ笑顔を見せてくるので、
本心からの言葉とわかる。

「うん、わかったよ……。納得はできないけど、みんな僕の味方って信
じるよ」

「わかってくれたんだね。ところで祐季くん、あの服、祐季くんに似合
いそうだと思いますか？」

こよりさんが指を差した先には、浴衣ドレスが飾られていた。

「やっぱり、僕の味方じゃないよね……？」

僕のその呟きは誰にも聞かれることなく、こよりたちの楽しげな声
によつてかき消されていた。

◇◇◇

「それでやっぱりこうなるんだよね……」

当然のように僕は浴衣ドレスを着させられていた。

僕だけではなく、みんな色違いのものを着ていたけど……。

分かっていたこととはいえ、目から涙が出てきてしまうのは、男の
子だからだろうか？

「うみゆ、祐季くんは男の娘なの！」

「僕の考えを勝手に読まないで……。あと、『こ』の漢字だけ僕とは違
うのを想像してるよね!？」

「気のせいなの」

「祐季くん、とっても似合ってますよ！ それに私たちが着てるのに、
祐季くんだけ着てないと逆に目立ちちゃうよ？ もしかして、目立ち
たかったの？」

「そ、そんなことないよ!?! め、目立たなくていいからね!?! 僕は部屋
の隅でうずくまってるのがお似合いだからね!?!」

慌てて全力で否定をする。

しかし、それは逆効果だったようだ。

「部屋の隅に置かれた段ボールにうずくまるユキくん……。これはもうお持ち帰りしても誰も怒らないよね？」

「うみゆー！ ユキくん、持ち帰り放題なのー！」

「そ、そんなにたくさんいないからね!? 僕は一人だけだよ?！」

「それにしても、なんで男の祐季が一番似合ってるのよ！ なんだか悔しいわね」

「仕方ないよ。だって、祐季くんだもん」

瑠璃香さんとこよりさんが遠い目をしながら話している。

「そ、そんなことないよ!? こよりさんも赤い浴衣がとっても似合ってるし、瑠璃香さんの黒の浴衣も大人の女性っぽくて、似合ってるよ？ 僕なんかとは比べものにならないよ」

「うみゆー！ ゆいはゆいは?！」

「うん、結坂の黄色い浴衣も元氣そうに見えていいと思うよ。でも、いつまでその喋り方でいるの？ その……。周りの人にバレないかな?！」

結坂のしゃべり方はどう見てもユイそのものなので、いつかはバレてしまうのでは……。と不安になってくる。

すると、結坂はため息交じりに言ってくる。

「うみゆ、それをいうなら祐季くんは自分の姿を見ると良いの！ どこからどうみてもユキくんなの！ 浴衣を着てるからまだわからないけど、普段の服なんてユキくん過ぎて、逆に怪しまれてないの！」

「そ、そこまでユキくんじゃないよね?！」

「それなら鏡を見えますか?！」

「PCもあるからユキくんの配信と見比べてみるといいわ」

こよりさんが手鏡を渡してくれる。
そして、瑠璃香さんがパソコンで僕の配信画面を流してくる。

「わわっ!? こ、こんなところで流さないでよ!」

慌てて、パソコンの画面を隠していた。

「やっぱりユキくんはユキくんなの」

「ええ、とつてもかわいいよね」

「まあ、仕方ないわよね。祐季は祐季だからね」

「ま、全く……どうしてこんなものを持つてるの!」

「えっ、パソコンのこと? だって、このあと配信をするって言ったわよね?」

「あっ……」

旅行のことに頭がいっぱいですっかりそのことが抜け落ちていたかもしれない。

「ど、どうしよう……。僕がユキくんだってバレてしまったら女装してる変態さんだって思われちゃうよ……」

その場で蹲って頭を抱えてしまう。

すると、そんな僕の方をこよりさんが叩いて励ましてくる。

「大丈夫だよ、祐季くん」

「こ、こよりさん……」

「祐季くんは男の子には見えないよ。とつてもかわいい女の子にしか見えないから」

「ぼ、僕は男だからね!」

「うみゅー、祐季くんはいい加減に認めると良いの」

「み、認めないからね!? ぜ、絶対に認めないからね!」

「はあ……、こんなところで騒いでないでそろそろ先に行きましよう？　せつかく観光地にまで来たのに、入り口にもたどり着かず騒いで終わるつもりなの？」

「あつ……、ご、ごめん。うん、そうだよ。せつかく来たんだもんね。よし、今日は格好のことは忘れて思いっきり楽しもう！」

「おー!!」

こうして、僕たちは色々な場所を見て回っていた。

ただ、つついテンションが上がってしまったのか、気がついたら僕は一人になっていた。

◇◇◇

「あ、あれっ？　こ、ここはどこだろう？」

さつきまでは観光客向けの土産物屋や食べ物やなどがたくさん並んでいたところにいたのだが、いつの間にか路地を歩いていた。

住宅街まで来ちゃったのかな？

普通に一戸建ての住宅が建ち並んでいる。

元の場所へ戻るにはどう行ったら良いのだろうか？

「ねえ、こよりさん達は元の場所の戻り方ってわかる？」

僕の後ろを歩いていたこよりたちの方に振り向く。

しかし、そこには誰もいなかった。

「あ、あれっ？　こよりさん？　結坂？　瑠璃香さん？　ど、どこに居るの？」

慌てて周りを見回す。

しかし、人らしい人は見当たらない。

「も、もしかして、みんな迷子になったの？ わわっ、た、大変だ。ゆ、誘拐とかされてないよね？ と、とりあえず探さない!!」

元来た道を駆けていく。

しかし、それは元の道ではなく、全然違った道だった――。



【コメント】

：ユキくんらしいw

：浴衣ドレス……、見てみたい

《天瀬ルル ……20,000 浴衣ドレス代》

：そういうルルちゃん浴衣ドレス姿も見てみたいな

美空アカネ ……呼んだ？

：お帰りください

：ちよつと待て。アカネパイセンが来たって事はユキくんのイラストが更新され生可能性が

美空アカネ ……あとから写真をよろしくね！

ココネ：『ユキくんらしいですけど、そのあとは大変でしたよ。ユキくん、とつてもかわいいですから、誰かに誘拐されたのかと思います
て……』

ユイ ……『うみゅー、ゆいが拾っていくの!』

カグラ：『はいはい、段ボールを送っておくからそれで我慢しなさい』

ユイ ……『うみゅー、ユキくん段ボールなのー!』

ユイの体の半分が段ボールで埋まってしまおう。

その代わりにユキくんの場所には布団が置かれていた。

ココネ：『そんなことを言っつて、ユイもあのときは真剣に焦つていましたよね？』

ユイ：『うみゅー、ゆいはいつでもみんなのことを心配しているの』

カグラ：『まあ、ユキの場合は特に心配よね。本当に誘拐されてもおかしくないわけだし……』

ココネ：『結局、そのあとすぐに見つかったから良かったものの、大変でしたよね』

ユイ：『ユキくんも必死に探していたみたいなの』

カグラ：『これからユキはしっかり捕まえておかないといけないわね』

ココネ：『私が手を掴んでおきますね』

ユイ：『うみゅー！ それはユイの仕事なの！』

カグラ：『はいはい、両手があるでしょ。二人とも掴んでもらえば良いわよ』

ココネ：『それです！』

ユイ：『それなの！』

ほぼ同時に声を上げるココネとユイ。

ココネ：『とりあえず、みんなも気になってそうなので、続きを話していきますね』



しばらく周囲を探していたけど、どうしてもみんなを見つけないことができなかった。

それどころか、ますます今どこに居るのかわからなかった。

———そ、そうだ！ スマホがある！

これでこよりさん達に連絡をすれば……。
藁にもすがる思いでスマホからこよりに掛ける。
すると、ワンコールもおかずに電話に出て貰える。

ココネ：『ゆ、ユキくんですか!?!』

ユキ：『う、うん、そうだけど……。い、今どこに居るのかな?』
ココネ：『し、心配しましたよ……。でも、無事でよかった。私たち
はまださつきのお団子を食べたお店の近くにいますよ? ユキくん
はどこですか?』

ユキ：『僕は住宅街にいるよ? 目印は……。こ、公園があるよ?
小さいところだけど……。』

ココネ：『こ、公園ですか!?!』

驚きの声を上げるこよりさん。

そして、小声でユイたちに相談をしていた。

こより：『祐季くん、いま公園近くにいるらしいですけど、近くに公
園ってあるかな?』

結坂：『うみゅー、知らないのー』

瑠璃香：『そうね……。この辺の公園だといくつかに限られるわね。
他に特徴はないかしら?』

ココネ：『ユキくん、他の目印はありませんか?』

ユキ：『め、目印……。? えとえと……。』

大慌てで回りを見渡していた。
しかし、本当に住宅街で回りに変わったものは何もなかった。

ユキ：『ご、ごめん……。何もないみたい……。』

ココネ：『何もありませんね?』

こより：「それでわかるかな？」

瑠璃香：「大丈夫ね。意外と目印になりそうなものがあるところがあるから、それを除外して行って……、うん、多分この公園！」

結坂：「うにゅー、もう大丈夫なのー！」

ココネ：「場所を特定しましたから、もう少し待っててもらってもいいかな？ 絶対にそこから動いたらダメだよ？」

ユキ：「わ、わかったよ……」

あつさり場所をわかってくれる。

やっぱりみんな頼りになるなあ。

僕はここから動かなかつたら……。

「あ、あの……、だ、大丈夫——」

突然知らない人に声をかけられて、僕は飛び跳ねそうなくらい驚いて、そのまま違う場所へ向かって、走っていった。

そして、僕に声をかけたにも関わらず、逃げられてしまった男の人は、なんとも言えない表情のまま、その場で固まっていた。

それを繰り返すこと、数回。

ようやく僕はこよりさんたちに出会うことができた。

その姿を見た瞬間に思わず僕は目から涙が出てしまい、そのままこよりさんに飛びついていった。

「わつと……」

危うく倒れそうになりながらも、しっかりと僕を抱きとめてくれるこよりさん。

「もう、一人でどこかに行かないで……」
「ご、ごめん……。心配かけちゃったね」
「祐季くん、誘拐されたのかと思っただよ……」
「安心して。そんな時は必死に逃げるから……」
「安心できないよ。祐季くんがいなくなるなんて、もう考えられないから……」

それからしばらくこよりさんは僕に抱きついたままだった。
流石にこの体制は恥ずかしいのだけど、心配をかけたのは僕なのだから、としばらくはされるがままになっていた。

「全く、往來のど真ん中で何をしてるのよ」

「うみゅー、ゆいも混ざるのー!」

「やめておきなさい。今は——」

結坂は瑠璃香に掴まれていて、抱きつきに行くことはできなかつた。

そして、しばらくしてここが道のど真ん中ということに気づいた僕は顔を真っ赤にして、照れてしまうのだった。



ココネ：『すぐく焦っちゃったんですけど、ユキくん、無事に見つかって良かったです』

ユイ：『お持ち帰り失敗なの』

カグラ：『持ち帰ったらダメでしょ!』

ユイ：『うみゅー、でも、一家に一人、ユキくんは必要だと思うの』
ココネ：『本当にそうですよね。仕方ないので、私がもらって行きませうけど』

ユイ：『うみゅー! ユキくんはゆいがもらうの!』

カグラ：『一家に一人……、確かに必要かもしれないわね』

ついに最後の砦たるカグラが陥落しそうになっていた。しかし、すぐに首を横に振っていた。

カグラ：『違う違う！ そうじゃないでしょ!?!』

ココネ：『あつ、担当さんから連絡が来ましたよ』

意味深なココネの発言。

少し不安になりながら、カグラたちもスマホからその連絡を見る。

マネ　：『ユキくんのぬいぐるみを作る許可、もらってきましたよ。他にもユキくんのオリジナルシングルや特典グッズも。あつ、この情報はまだ発表もしていいですよ。確定したことですから』

カグラ：『あつ……』

ユイ　：『うみゆ!?!』

ココネ：『やりましたね！ 私たちの願いが通じたのかも』

カグラ：『はあ……、これって本人が寝てる間に発表していいやつなのかしら?』

ユイ　：『許可をもらってるからいいの』

ココネ：『むしろこのタイミングで連絡が来たってことはユキくんが寝てるうちに発表して、既成事実を作って欲しいってことでしょうね』

ココネの膝ですやすや眠っているユキを慈しみの視線で眺め、その頭を撫でていた。

【コメント】

：えっ、なにになに？

：重大発表!?!

：わくわく

天瀬ルル　：ぼ、ぼくのところには来てないよ!?

美空アカネ　：私のところにも来てない。ちよつと担当の指を詰め
てくる

海星コウ　：同期じゃないからでしょ!?!　全く……

ココネ：『えつと、その発表ですけど、なんとユキくんのオリジナル
グッズ等の発売が決まりました。その中にユキくんぬいぐるみもあ
りますよ!』

ユイ　：『ちよつと買い占めてくるの』

カグラ：『全く、そんなことをしたらダメに決まってるでしょ!』

ユイ　：『そんなことを言つて、カグラもマネさんに一個頼んでた
の』

カグラ：『あつ……、い、言わないでよ!?!』

ココネ：『一つでいいなんて、カグラさんは控えめですね』

カグラ：『流石に100個単位で頼むココママには負けるわよ』

ココネ：『ユキくんぬいぐるみ専用ルームも必要になりますね』

ユイ　：『部屋が余ってるゆいに死角はないの!』

カグラ：『二人とも買いすぎよ。販売するのはぬいぐるみだけじゃ
ないでしょ!?!』

ココネ：『あつ、そうでした。ユキくんに内緒で、ユキくんのオリジ
ナルシングル曲を作ることが決まりました!　ユキくんに内緒で!』

ユイ　：『これでいつでもユキくんの声が聞けるの』

カグラ：『別に電話すればいつでも聞けるでしょ?』

ユイ　：『いつでもは聞けないの』

ココネ：『確かにユキくんが電話をとってくれるなんてレア中のレ
アですからね』

【コメント】

：ユキくんグッズだ!!

：お金貯めておかないと!

《天瀬ルル …?10, 000 こ、これでぼくにもグッズを》
《…?10, 000 グッズ代》

…楽しみ

…朝起きたらユキくん、驚くんじやないかな?

…もう発表してしまつてるわけだもんな

…ここから断れないかw

第22話 三期生の温泉旅行（寝るまで配信編ぱーとふぉー）

ココネ：『長々とお待たせしてしまいましたね。温泉旅行なのに、中々温泉に入る話までできませんでしたから、待っていた人もいたのではないですか?』

ユイ：『うみゅー、凄く待たされたのー!』

カグラ：『誰のせいだと思ってるのよ!』

ユイ：『カグラっちのせい?』

カグラ：『誰がカグラよ!? って、合ってるわね』

ユイ：『うみゅ、違う名前が良かったの? カグっち』

カグラ：『カグラで良いわよ!』

ココネ：『まあ、こうやって話が脱線するのはいつものことですもんね』

ユイ：『うみゅー、そろそろココママは膝枕役が変わるの!』

ココネ：『はいはい。また明日になったら変わってあげますよ』

ユイ：『うみゅー!! それだとユキくんが起きてしまうの!!』

ユキ：『ううう……』

ユキが起きそうになった瞬間に三人は言葉を発しなくなった。その間も無情にコメントだけが流れていく。

【コメント】

：ユキくん、まだまだおねむかな?

：段々声が大きくなっていったからな

：まだココママが膝枕をしていたのか!?

天瀬ルル：ううう……、ぼくもしたいのに……

ココネ：『……このままだと、ユキくんが起きてしまいそうなので、最後についさっきの話をして、終了したいと思います』

ユイ：『うみゆ、みんな温泉に入ったの』

カグラ：『さつき決まったことは、また配信終了後にまとめておくわ。どうせ、二人ともやらないだろうし』

ユイ：『うみゆ、助かるの。だからカグラっちは大好きなのー』

カグラ：『はいはい。暑苦しいから抱きつかないでよね』

ココネ：『ではスタートです』



迷子になりながらも、ようやく僕たちは宿へとたどり着いた。

どこか古さを残しながらも、落ち着く佇まいをした木造二階建て。入るとすぐに頭を下げた女将さんに出迎えられてしまう。

「ようこそ、雪の宿へ。お名前を頂戴してもよろしいでしょうか？」

「あつ、はい。えっと、僕は雪城……じゃない。小幡^{こはたゆき}祐季といます」

思わず、本名じゃなくて、ユキくんの名前を言ってしまうところだった。

配信の度に自己紹介をしているので、最近だと自分の名前より言う回数が多いから、ついうつかり言いそうになる。

みんなもユキくん、としか呼ばないのでなおさらだった。

ちよつと前だと、結坂が小幡くんと呼んでくれていたのだが、いつのまにかユキくんになってるし……。

結坂自身もユイのしゃべり口調でいることを考えると、案外引つ張られるものかも知れない。

注意しないと……。

「小幡様ですね。少々お待ち下さい。えっと、シロルームご一行様、でよろしかったでしょうか？」

ちよつと待つて!? マネさん、僕たちの正体、隠す気があるの!?

思わず驚いてしまうが、こよりさんは平然とした態度で答えていた。

「はい、まちがいありません」

「では、お部屋に案内させていただきます。付いてきて下さい」

女将さんに案内された先はそれなりに広い和室だった。

奥に縁側もあり、そこから整えられた中庭を一望することもできる。

そして、部屋はたった一つだけ。

「では、何かあったらお呼び下さい」

女将さんが恭しく頭を下げた後、部屋を出て行ってしまった。

「も、問題しかないんだけど……。ど、どうしよう……。僕、どこで寝たら良いの?」

「どこって、ここで一緒に寝るよね?」

こよりさんがさも当然のように言ってくる。

「でもでも、おかしいよね? やっぱり僕、女将さんに頼んで別の部屋を——」

「もう、そんなことしないでいいよ、ユキくん。それよりもゲームしよう?」

結坂がカバンの中から大量のゲーム機を取りだしていた。

それより僕は今の話し方に違和感を覚えてしまう。

「あれっ、もうユイのしゃべり方をしなくて良いの?」

「さすがに部屋の中ではしないよ。あれ、意識的に作ってるから結構疲れるんだよ、元に戻すのは——」

「——それならさつきも無理にユイの話し方をしなくてよかったのに……」

「どうしても、緊張するとあのしゃべり方になってしまっただよ。最近ずつとあれだからかな?」

確かに結坂が言わんとすることはよくわかる。

僕がさつき、自分の名前を間違えそうになったことと同じだった。

「でも、今は普通の話し方で良いんだよね? それなら僕の言いたいこともわかるよね?」「うん、祐季くんと一緒に寝ることだよね? 私は何も問題ないかな?」

「な、なんで!?!」

「前も一緒に寝てるよね? それも二人つきりで。それと比べると人も多いから問題ないかなって」

「——うっ、言われてみると確かに」

「よかったね、祐季くん。ハーレムだよ」

「ぼ、僕は縁側の方で寝るね。そ、そこは譲らないからね?」

「大丈夫。どうせいつものように祐季くんは先に寝てしまっただよ?」

「きよ、今日はしっぴかり起きてるよ! 見てて、絶対に日が変わるまで起きてるからね!」

「それなら今日の配信タイトルは『＃コユカ温泉旅行』寝たら終了。寝るまで耐久配信《雪城ユキ／真心ココネ／神宮寺カグラ／羊沢ユイ／シロルーム》でいいかな? ユキくんの枠でするし、責任重大だね」

「僕の枠で良いの? 本当に良いの?」

「うん、ユキくん睡眠RTA、楽しみにしてるね」

「ぜ、絶対にそんなことにならないからね!?!」

「それは楽しみだよ」

ニコツと笑みをこぼす結坂。

僕は絶対に思い通りにはさせない、と固い決意を抱いていた。

「それじゃあ、そろそろ祐季くんがどこで眠るか決めない？」

改めてこよりさんが仕切ってくる。

さすが、この中で一番最年長。とは言ってもたった一歳差だけど。

「そうだよ。え。やっぱりこの中で唯一の男である僕が寝る場所は大事だよ。ね？」

さすががわかってきている。

何か問題が起きたら大変だもんね。

「はいはい！ 私の布団が良いと思うよ！」

まずは結坂が手を挙げて言ってくる。

「ちよつと待って！ なんでそうなるの!？」

「そうだよ！ ここはやっぱり私の布団で寝るべきだと思うよ」

「こ、こよりさん!？」

どうやらこよりさんも僕を自分の布団へ連れ込もうとしていたようだった。

お互いに一步も引かずに言い争っている仲、僕は瑠璃香さんに助けを求めて視線を送る。

「はあ……、全く、布団は四人分用意されるのよ。一緒に布団で寝る必要なんてないでしょ？」

「そう、それ。それだよ！ 僕が言いたかったのは……」

「それなら私が祐季くんの隣に……」

「同級生である私が隣で寝るのは相応しいよね？」

また、二人でにらみ合う。

「えっと、僕が端で寝るから隣、瑠璃香さんをお願いしても良いかな？」

「祐季くん!？」

こよりさん達が言い争っている中、隣でこよりさんに頼む。
すると、二人は驚きの声を上げていた。

「ど、どうして……?？」

「祐季くん……。もしかして、私の事、嫌いになった？ や、やっぱりホラーゲームは嫌だったかな？」

悲しそうに持ってきたゲームソフトを眺める結坂。

「うん、それは嫌だけどそういう理由じゃないよ?」

「それじゃあ、どうして?」

「なんか身の危険を感じてね……」

普通は逆なんだろうけど、今回ばかりは仕方ない。

一番僕の身を守れそうなのが瑠璃香さんだというだけだった。

「わかったわ。そういう並びにしましょうか。でも、それも祐季が寝落ちたらできないからね?」

「うっ……。も、もちろんわかってるよ……」

「それなら早速温泉に行きませんか? ここの大浴場、美容健康に効くって有名なんですよ」

こよりさんが手を当てて、にっこりと微笑む。
ようやく一人の時間がきてくれるようだった。

「それもそうだね。いつまでもこの姿のままにはいかないもんね」
普通のパジャマを取り出し、温泉へ行く準備をする。

「あつ、祐季くん。せっかくだから浴衣にしない？」

そういえば女将さんが出て行く前に人数分置いていった気がする。

「そうだね。その方が雰囲気が出るかも……」

「よーし、それじゃあ、しゅっぱーつ!!」

結坂が僕の手を掴んで、勝手にどこかへ連れて行く。

「あつ、祐季くんと行くのは私です!!」

「ぼ、僕は一人で行けるから……」

「ちよつと待って。ここの大浴場って……。はあ……、まあ、今更気にするメンバーじゃないわね」

ため息交じりに瑠璃香さんが一番後ろで付いてきていた。



脱衣場へとやってくる。

ここは暖簾によつて、男女が分けられている。

当然ながら僕は男の方へ、他のみんなは女の方へと行くのだが――
|。

「祐季くん、そっちは男の方だよ。祐季くんはこっち」

「こよりさん……、僕の性別を勘違いしてない？」

「祐季くんの性別？」

こよりさんは首を傾げていた。

なんでそこで迷うの!?

思わず口に出したくなるのをグツと堪える。

「祐季くんの性別は祐季くんだよ！」

結坂が迷うことなく言い切ってくる。

「それだね！ だからこっちだよ！」

なぜか僕を女性の脱衣場へと連れ込もうとするこよりさん。

「そつちも違うよね？ というか僕は普通に男だからね!？」

「まあ、ふざけるのも程ほどにしておきなさい。私たちだけなら良いけど、ここには他のお客さんもいるのだからね」

確かに周りにいる人たちが僕らの方を見ていた。

目立ちすぎたかも知れない。

「それにほらっ、見てみなさい。祐季くん用の脱衣室も準備してあるわよ」

瑠璃香さんが指さした先にはなぜか、第三の暖簾が掛けられていた。

そして、そこには『ダンボール』と書かれていた。

「し、資材置き場のことじゃないかな？」

「祐季くん専用の脱衣室があるんだね。それなら仕方ないかな」

「これはもう、お風呂上がりに拾って帰るしかないの」

うん、結坂に捕まらないように気をつけないとね。
きつとホラーゲーム24時間耐久とかさせてくるだろうし。

「えっと、本当にここは僕のところなの？ ほらっ、僕は普通に男の脱衣室へ……」

「そんな、他の男の人に迷惑をかけること、したらだめだよ！」
「迷惑なんてかけないよ!? 普通の行動だからね!？」

ため息交じりに……、そこが資材置き場であることを期待しながら僕は、『ダンボール』の暖簾をくぐっていく。

中は至って普通の脱衣場だった。

そして、部屋の片隅にはユキくん段ボールが置かれている。
それを見た瞬間に、ここは僕のための部屋であることを理解してしまった。

「全く……、マネさんだね。こんなことをするのは」

こよりさん達と一緒に着替えるような羽目にならなかったのも、その点だけは感謝していた。

今まで来ていた浴衣ドレスを脱ぐと、それを畳んでから、浴場へと向かう。



「うわっ、やっぱり本格的だね。こんなに広いんだ……」

一人で使うのはもったいないくらい、目の前に広々とした温泉が広がっていた。回りの風景も楽しめて、風情ある空間がそこには広がっていた。

そして、客は僕の他に誰もいなかった。

まあ、ダンボールの浴場へ入る人はいないよね？

苦笑を浮かべながら温泉へ入ると思いつきり手足を伸ばしていた。

「ふわあああ……、やっぱり気持ちいいなあ……。温泉へ連れてきてくれたマネさんには感謝だな。色々トラブルはあったけど……」

ぼんやりと景色を眺めながら温泉を楽しんでいたら、別の声が聞こえてくる。

「見て見て。凄く広い温泉だよー！」

「本当だね。やっぱり温泉で有名なところだけありますね」

近くからこよりさんと結坂の声が聞こえてくる。

その瞬間に僕は体をタオルで隠し、温泉を囲っている岩陰に身を隠していた。

「もう、ここは混浴って言ったでしょ？　せめて体を隠しなさい」

「大丈夫だよ。今の時間は貸し切りにしてもらってますから」

「うんうん、それなら安心だよね」

「全然安心じゃないわよ!!　それだと祐季には見られるってことになるわよー！」

「祐季くんなら問題ないよね？」

「今更じゃないかな？」

「お風呂は違うでしょ!？」

「大丈夫、これでルルちゃんに追いつけるから」

瑠璃香が頭を抱えていた。

ただ、この場合だと瑠璃香の方が正しいと僕は思えてくる。

これは僕がおかしいのかな？

女性の過半が僕がいても問題ないと言っているので、それが普通の

ように思えてくる。

と、とにかく、僕の姿は見られないように――。

「あつ、祐季くん、先に入っていたんだね」

結坂が僕の方へと駆け寄ってくる。

当然ながら僕とは違って、タオルで体を隠していないので、色々見え隠れしているところが見えている。

いや、湯気さんが頑張ってくれているので、僕からは見えていないけど、それは少し距離があるからだった。

「えとえと、そ、その……、ま、前を隠して……」

「えーっ、今更いらないよね？ 面倒だもん」

「いるよ!? いるから、お願い」

「それじゃあ、私をお願いを一つ、聞いてくれる?」

「聞く! 聞くから早くお願い!」

「わかったよ。そこまで言われたら仕方ないね」

結坂がようやく自分の体にタオルを巻いてくれる。

そして、いくらでも場所がある広い温泉なのに、わざわざ僕の隣にくる。

「うみゆう……、なかなか気持ちいいね……」

「う、うん、本当だね」

どうしても、隣にかわいらしい女の子がいると思うと僕は緊張してしまつて、顔が引きつっていた。

「あつ、彩芽^{あやめ}ちゃんだけずるいよ! 私も祐季くんの隣で入る!」

場所はいくらでもあるのに、わざわざ僕の隣に浸かってくるこより

さん。

「こ、こよりさんもタオルを巻いて!? こ、混浴だと普通だよね!？」

「それなら私も一つ、お願いを聞いてくれますか？」

「聞く! 聞くから!!」

「はあ……、全く、何をやっているのよ……」

ため息を吐く瑠璃香さん。

それをよそに、僕はただ頷くしかできなかつた。

第23話 三期生の温泉旅行（完）

「そ、それで、二人は一体、僕に何をさせるつもりなの……？」

両脇を固められた僕は、引きつった表情のまま二人に聞いていた。

「温泉旅行から帰ったら私とコラボ配信をしよう」

こよりさんにはっこり微笑んで、言ってくる。

「あつ……。ご、ごめんね。そうだよ。最近、コラボしてなかったもんね。うん、約束だよ」

なんだか申し訳なくなつて、思わず謝ってしまう。

「えへへっ、久しぶりに祐季さんとコラボだ……。楽しみにしてるからね」

うれしそうに、はにかんでみせるこよりさん。

「そ、それじゃあ、いつものようにこよりの梓で——」

「もちろん、オフコラボだね」

「えっ!? ……う、うん、わかつたよ」

「あれっ? いつももの祐季くんならもつと嫌がると思つたのに……」

「今回は僕が全然コラボできてなかったのが悪いからね。ぼ、僕にできることならするよ……」

「うん、楽しみにしてるね」

わざわざお願いで言うようなことでもないけど……。

こよりさんなら、いつでもコラボをするのに……。

と、言っていたら結局ほとんどしていなかったので、こういう形を取ったのだろう。

もしかして、結坂も？

僕は結坂の方を振り向く。

すると、結坂はニコツと微笑んでいた。

「私もオフコラボで良いよ？」

あつ、やっぱりそうなんだ……。

最近、同期のコラボがなかったもんね。

もつと時間を作るしかないかな。……僕、大丈夫かな？

予定が埋まりすぎている気がする。

一応あとからマネさんに連絡を入れておこう。

「ふふつ、色々と動いておかないと。あとから担当さんに例の件を確認しないといけませんね」

不敵な笑みを浮かべるこよりさん。

なんだろう、温泉に浸かって体は温まっているはずなのに、ものすごく悪寒を感じてしまう。

何か良からぬことを企んでいるような……。

それでいて、この件は触れたらダメな気がしてしまう。

きつと聞いてしまったら、もう後には引けないような、そんな約束をさせられる気がする。

触らぬ神に祟りなしだよね……。

「例の件ってなに？ 私、聞いてないよ？」

僕がわざわざ聞かなかったのに、結坂がそのことを触れてしまう。

すると、こよりさんは口元に人差し指を持って行って、一度僕に視線を向けてから微笑む。

「内緒、ですよ。またうまく言ったら教えてあげますね」

◇

その後、逃げるように大浴場から出ると、浴衣を着たこよりさんたちと合流する。

「祐季くん、その浴衣、とっても似合ってるね」

「そ、そうかな……。ぼ、僕だけじゃなくて、こよりさんも凄く似合ってますよ」

お風呂上がりのやや湿った髪。

やや紅潮した頬。

浴衣から見え隠れするうなじ。

普段見慣れないその姿を見て、緊張してしまった僕は思わず顔を背けてしまう。

ただ、それが間違いだった。

その隙を突いて、結坂が僕に向かって飛びついてくる。

「ゆっきーくん!! 私はどうかな?」

「わわっ、ゆ、結坂?! そ、その、あの……」

薄い浴衣生地から直に当たる胸に思わず顔を紅潮させて、あたふたと手をバタつかせる。

そんな僕の様子を見て、結坂は目を細めてニヤリと微笑む。

「あれれっ? 祐季くん、どうしたのかな? 顔が真っ赤だよ? 熱でもあるのかな?」

「あ、あわわわっ……」

ますます体をくつつけて、顔を近づける結坂。

恥ずかしさやら緊張から、僕は目を回し、何とかその場を逃れようとする。

すると、そんな僕に助け船を出す天使のような人がいた。

「彩芽ちゃんばかりずるい！ 私も祐季くんとくつつく!!」

助け船ではなく、死刑宣告だった。

天使だと思ったこよりさんは、悪魔のような笑みを浮かべながらジワジワと近づいてくる。

小柄な結坂でも困惑してしまったのだ。

こよりさんに同じように抱きつかれたら……。

顔に恐怖の色を浮かべる僕。

すると、今度こそ僕に助け船を出してくれる。

「全く、そんなに祐季を取り合うなら、あれで勝負したら良いじゃない」

ため息交じりの瑠璃香さんが指差した先にあったのは、卓球台だった。



ユイ：『うみゅー。こうして、血で血を洗う一大抗争が起こることになったの』

ココネ：『起こりません』

ユイ：『うにゅー、囚われのユキくんを助け出すのは一体誰なのか。悪 of 魔王妖精、ココママを倒す勇者ユイは一体誰なのか……』

カグラ：『……自分の名前、言ってるじゃない』

ココネ：『わ、私は魔王なんかじゃないですよ!?!』
ユイ：『勝利のダンボールを手にするユイは一体誰なのか。次回に続くのー。それじゃあ、乙ユイなのー』

ユイが眠そうな顔をしながら、手を振って、ユキくん段ボールの中へと入っていく。

ココネ：『おつここ……つて、まだ終わらないですよ!? それにユキくんもユキくんのダンボールは私のものです』

カグラ：『さり気なくユキも含めたわね……』

ユイ：『うみゅー。やっぱり悪の大魔王なの。卓球で倒すしかないの』

ココネ：『わかりました。勝負に乘ります!』

カグラ：『はいはい。まだその話をしてないでしょ。勝負をするならユキを起こさないように部屋の隅でしてなさい』

カグラに窘められて、ユイとココネは枠の端へ移動する。

【コメント】

：相変わらずのカオス空間 w

：いつもの景品ユキくん w

天瀬ルル：ぼ、ぼくも参加します!!

：やっぱりユイつちが勝つのか？



なんでこんなことになっているのだろう？

卓球台を挟んで向かい合うこよりさんと結坂。

ばちばちと視線を飛ばし合っており、その顔は真剣そのものだった。

「ふふふっ、そろそろ彩芽ちゃんとは決着をつけないとって思ってたんだよね」

「それは私の台詞なの。こよりに祐季くんは渡さないんだからね。祐季くんの初めて（の友達）は私なんだから」

「そ、そんなこと、許さないから。祐季くんは私が貰います！」

二人の背後に禍々しいオーラのようなものを感じてしまう。そんな様子を見て、心配になって瑠璃香さんに話しかける。

「もしかして、僕、身の危険？」

「もしかしなくても危険よ」

「ううう……、僕、どうしたらいいんだろう……」

「別に簡単なことでしょ？ 卓球の景品が祐季なんだから……」

瑠璃香さんがさも当然のように言ってくる。

「そっか……。勝負が付く前に逃げたら良いんだね！」

「違うわよ!? 祐季が参戦して二人に勝てば良いのよ」

「……さすがに運動は苦手だから」

思わず眉をひそめてしまう。

でも、よく考えると僕は男。

力では負けないわけだし、卓球だともしかすると勝てるかも……。

そんなことを思いながら、こよりさんたちの勝負へと視線を向ける。

その瞬間に目にも留まらない速度の球が、顔の横を通り過ぎていった。

「なかなかやるね」

「勝負なら負けないからね！」

メラメラと火花を飛ばし合う二人。

勝負はほぼ互角に進んでいるようだった。

ただ、僕の動きは固まってしまい、まるでロボットのような動きのまま、顔だけを瑠璃香さんの方へ向けていた。

「あの二人に勝てるだけでも？」

「……私が悪かったわ」

瑠璃香さんも遠い目をしていた。

ただ、すぐに僕の方へ振り向いてくる。

「と、とりあえず、あの二人は邪魔したらダメだから私たちも卓球をする？」

「そ、そうだね」

結局僕たちが取れる手段は、現実逃避だけだった。



「勝った」

卓球の勝負は結局結坂の勝利で終わったようだった。

一方の僕たちは一進一退の、中々良い勝負をしていた。

もちろん何度もうりの応酬が続く……というわけではなく、ミスがミスを呼び、更にその上でミスを重ねる、といった感じだったが。

「初めてやったけど、なかなか難しいね」

スカッ。

サーブを空振りながら、瑠璃香さんに話しかける。

「祐季はもう少し運動をしたほうがいいわね。体を鍛えたらもう少し男らしくなるんじゃないかしら?」

次は瑠璃香さんが明後日の方向へサーブを打っていた。

ラリーすら始まらない……。

でも、これはこれで新鮮味があつてなかなか楽しいかも知れない。そんなことを思っていたら、突然後ろからこよりさんに抱きつかれる。

「祐季くんを鍛えさせるなんてダメだよ！ 祐季くんは今のままが一番可愛いですよ!」

「祐季くんマッチョ化計画か……。ちようどいいゲームがあるからやりにくる? ちようどRTAが人気だから祐季くんも挑戦すると良いよ」

瑠璃香さんの後ろに移動していた結坂がにっこり微笑みながら言ってくる。

「ゲームなら僕にもできそうだから良いかも……」

「うんうん、ダイエットにもちようどいいって聞くと、瑠璃っちもどう?」

「瑠璃っちって、また新しい呼び名を作って……。でも、そうね。肘の下とかちよつとプニプニしてきたから気になつたのよね」

「わ、私もお腹……。ううん、健康のために一緒にしようかな?」

「ココママはプニママになったのかな?」

「ま、まだプニってないですよ!? プニってない……。ですから」

不安げに自分のお腹を触るこよりさん。

その……、目のやり場に困るから僕の後ろでそういったことをするのはやめて欲しいんだけどな……。

「——全然気にする必要はないと思うけど?」

「祐季くんは痩せてるから気にしなくて良いよね」

「ぼ、僕はもっと筋肉質な……」

「わかったよ! それじゃあ、今度みんなでフィットネスアドベンチャーのRTAに挑戦しようか。目指せ世界記録!」

にっこりと嬉しそうな笑みを浮かべる結坂。

それを見ているとどうしても不安を隠しきれない。

なんだろう……、踏み込んではいけないところへ踏み込んだような、そんな気持ちを抱いてしまった。

「えっと、その……、RTAって確か、スピードを競うんだよね?

フィットネスでどうやってするの?」

「それは当日のお楽しみだよ。マネさんに配信できるかの確認をしておくね。日は……、来月ならまだ予定の埋まっていない日があったよね?」

「うん、それはある……けど」

「なら決まり! 3期生、フィットバトル。負けたユキくんは勝った人の良いなりになるの。それは別の配信枠を用意して貰おうつと」

「ちよ、ちよつと待って!?! どうして僕が負ける前提なの!?! 結坂が負ける可能性だってあるよね?」

「私がゲームで負けるとでも? 今日からみっちり体を作っていくよー。夢の世界で」

「あつ……、現実に鍛えるんじゃないんだね?」

その態度はいつもの結坂でどこかホツとしてしまう。

「でも、そのコラボはさつきお風呂で言っていたコラボとは……」

「もちろん別だよ!？」

「当然別だね」

「うん、……だよね」

即答されてしまったので、僕は思わず苦笑いを浮かべてしまう。

予定……、大丈夫かな？

この旅行が終わったらまたとんでもなく忙しくなりそうなんだけど……。



ココネ：『以上が今日の出来事ですね。そのあと、配信の準備をして、今……って感じですよ』

ユイ：『うみゅー、勝負に勝ったのでユキくんはユイが貰うの』

ココネ：『ダメですよ。ユキくんが起きちやいますからね』

ユイ：『うみゅー……、ココママがずるいの……。ユキくんのダンボールだけでも先に貰っておくの』

ユイが自分の体にユキくん段ボールを重ねると、そのまま中へ隠れてしまう。

カグラ：『ほらっ、それよりも今後のコラボの発表もするのよね？』

フィットネスのやつ。さつき日も決まってたわよね?』

ココネ：『そ、そうでしたね。来月、フィットネスアドベンチャーのタイムを競うコラボをします』

ユイ：『うみゅー、負けたココママは罰ゲームなの』

ココネ：『ま、まだ負けてません!』

ユイ：『でもプニプニボデーじゃ、勝てないの』

ユイがニヤニヤと笑みを浮かべ、実際にココネのお腹を触っていた。

それから必死に逃れようとココネが動こうとする。

しかし、膝で寝ているユキを起こさないためにもジッと耐えるしかできなかった。

ココネ：『ユイちゃん!? ユキくんが起きちゃいますよ!』

ユイ：『うみゆー、起きたら今度はユイが膝枕するの』

ココネ：『そうじゃなくて、起こすことがダメ——』

ユキ：『うーん……、もう朝……?』

ユキが眠そうに目を擦りながら体を起こす。

ユイ：『うみゆ、もう朝なの』

ココネ：『全然違いますよ!? まだまだ夜ですからね!』

ユキ：『なんだ、まだ夜なんだ……。お休み……』

一瞬起きたユキだったが、またすぐに眠りに就いてしまう。

ユイ：『あつ!? またユキくんがココママの膝に!? それになん

でユイよりココママを信じてるの!』

ココネ：『ふふっ、これがユキくんの信頼の差、ですよ。悔しかったら、ユイちゃんももつとユキくんに信頼されると良いですよ』

ユイ：『うみゆ……、つ、次の対戦では目にもものを見せてやるの……』

カグラ：『全く違う方向に進んでるわよ。それよりそろそろ今日の配信を終わりにするわよ。これ以上はユキも起きてしまいそうだし……』

ココネ：『そ、それもそうですね。では、今日はありがとうございました。乙ココー』

ユイ：『うみゆー』

カグラ：『乙カグラー』
ユキ：『むにやむにや……』

【コメント】

：おつかれさまー

：おっー

：乙ここー

：乙ココー

：乙ユキー

この放送は終了しました。